平成３年度
文部省科学研究費
重点領域研究（１）
災害時の避難・予警報システムの向上に関する研究
課題番号（０３２０１１１９）

平成３年雲仙岳噴火における災害情報の伝達と住民の対応

廣井脩・吉井博明・山本康正
木村拓郎・中村功・松田美佐

はしがき

１９９０年１１月１７日に噴火活動をはじめた雲仙普賢岳は、９１年６月３日、地獄跡火口に形成された溶岩ドームから発した火砕流によって、死者・行方不明者４３名という大被害を生み、その後も６月８日と９月１５日に起こった火砕流、６月３０日に起こった土石流によって家屋や田畑に損害を与え、９２年に入ってもなお危険は続いている。

この雲仙普賢岳噴火は、災害が長期化したこともあってさまざまな社会問題が噴出した。

そのうち、もっとも深刻なのは、６月７日以来、現在まで続いている「警戒区域」の設定であろう。この措置によって警戒区域内の１万人を越える住民が長期避難を余儀なくされ、その後１年近くにわたって、生活もままならぬまま不安におびえる日常を送っているし、警戒区域の設定が地域経済に及ぼした影響も甚大であった。

また、このように長期化した避難にともなって、避難生活と避難対策はどうあるべきかということもクローズアップされた。島原市民と深江町民の多くは、慣れない集団生活に伴う心身障害・ストレスの増大などに苦しめられたのである。

そして現在、噴火活動や火砕流によって水無川上流に大量に積もった火山灰が、新たな土石流災害を引き起こすことも懸念されている。その被害を防ぐためには大規模な砂防ダムが必要だが、計画の一環として策定されている導流堤が、市街地の居住地域を通過せざるを得ないため、地元住民との話し合いが続けられている最中である。これは、火砕流によって壊滅的被害を受けた島原市北上木場町の住民の集団移転問題とならんで、地域社会の状態を一変させる大問題であろう。

けれども、本報告書ではこれらの問題にはくわしく立ち入らない。警戒区域の設定、長期避難、および地域復興の問題はまた別の機会に報告することとして、本報告書では、主に雲仙普賢岳噴火において顕在化したもうひとつの重要問題、つまり「災害情報」の問題に焦点をしぼっていくつもりである。

６月３日の大災害の後、この大災害がどうして起こってしまったのか、その理由について各方面からいろいろな議論があった。

もちろん、そこには偶然的要素も多々あっただろう。

けれども、大きな理由のひとつとして、災害情報の問題がけっしてはずせないと思われる。たとえば、報道関係者や住民に「火砕流」ということばがどれだけ理解されていたかという問題もあったし、災害直前に流れた緊急情報が現場にまでうまく伝わらなかったというできごともあった。また大災害直後には、各種の流言蜚語が広がったし、雲仙測候所の火山活動情報を引き金に一種の情報パニックも発生した。これらは、すべて災害情報にかかわる問題といえよう。

そこで、本報告書では災害情報の諸側面に焦点をあて、まずI部では、雲仙普賢岳噴火において顕在化した災害情報の問題をとりあげ、またこうした問題がなぜ発生したのか、その背景を分析するとともに、将来の災害においてこうした問題の再発を防止するための方策について考えていきたい。

次に、II部では、わたしどもが１９９１年８月、島原市・深江町において行なったアンケート調査の結果を紹介し、地元の人々が火砕流についてどのような認識をもっていたの

か、また6月3日当日の避難はどのように行なわれたのか、警戒区域の設定をどう受け止めたか、避難所生活でどんな苦労があったのかなどの実態に触れていきたい。

これらの調査研究は、文部省科学研究費・重点領域研究（1）『災害時の避難・予警報システムの向上に関する研究』（研究代表者：廣井脩）の、「火山噴火班」のケース・スタディとして実施したものである。

調査の実施にあたっては、実に多くの方々のお世話になった。

わたしどもは大災害のほぼ2週間後にはじめて現地入りしたが、それ以来、島原市、深江町、九州大学地震火山観測所に何度もお邪魔し、超多忙のなかを貴重な時間を割いていただいたし、こちらの微妙な質問にも率直に答えてもらった。また、現地では多くの報道機関の方々にもお会いして、貴重な情報や体験談を聞かせていただいた。さらに、8月には被災された住民の方々に2度にわたって集まってもらい、被災当時のお話や避難所生活の実態、将来の生活の見通しなどについていろいろ聞かせていただいた。

災害で甥を亡くされた方の涙ぐんだようすや、仮設住宅をたずねたとき、5～6人の方々に話をお聞きしようという予定だったのに、20人近くの方がいらっしゃって、われわれは質問に答えるからぜひ自分たちの話も聞いてほしい、と口々におっしゃった真摯なようすが、まだはっきりと目に浮かんでくる。

また、島原市・深江町の多くのみなさまには、大変な時期に面倒なアンケートにお答えいただいた。

東京では、国土庁、自治省消防庁、気象庁、火山噴火予知連絡会のみなさま方からお話をお聞きしたり、資料を提供してもらった。さらに、本報告の構成上の必要から、6月3日前後の新聞記事およびテレビ放送をたくさん引用させていただいた。

最後になったが、これらのみなさま方にあつくお礼を申し上げます。

（廣井脩　記）

なお、本報告の執筆分担は、次のようになっている。

I部

1～4	廣井脩	5	中村功

II部

1（1－1）	吉井博明	4～5	吉井博明
1（1－2）	廣井脩	6	廣井脩
2	吉井博明	7～9	吉井博明
3	松田美佐		

目次

I部　災害情報はどう伝達されたか

ページ

1．それは普賢岳の噴火からはじまった

1．普賢岳が噴火した！　1
2．避難計画が作成された　5
3．危険情報は公開すべきか　8

2．火砕流発生す！

1．土石流の発生と溶岩ドームの出現　10
2．火砕流はどのように公表されたか　11
3．マスコミはどう報道したか　15
4．緊迫感が増してきた　16
5．行政・住民はどう対応したか　22
6．マスコミはどう対応したか　25

3．大惨事が起こった！

1．大火砕流の発生　29
2．被害はなぜ起こったか－背景的要因　34
3．被害はなぜ起こったか－マスコミの取材と報道　39
4．被害はなぜ起こったか－火砕流の知識がなかった　48
5．被害はなぜ起こったか－火砕流への危機感がなかった　53
6．被害はなぜ起こったか－心理的もたれ合い？　57
7．被害はなぜ起こったか－情報伝達システムの齟齬　59
8．情報システムが整備された　64

4．警戒区域が設定された

1．警戒区域の設定　67
2．ハザードマップがつくられていた　70
3．警戒区域を考える　75
4．流言蜚語が広がった　78
5．「山頂膨張」情報はどのように流れたか　82
6．情報パニックはいつ起こるか　86

5．（補論）雲仙岳噴火と電気通信

1．噴火と通信被害　88
2．輻輳対策の実施　89
3．輻輳の状況とその型　91
4．住民の電話行動　92
5．輻輳への処方箋　98
6．電話に関するその他の問題　99

II部．雲仙岳噴火と住民の対応
（アンケート調査より）

はじめに（調査の概要）　１０１

１．土石流か火砕流か

　１．土石流か火砕流か　１０３
　２．臨時火山情報と火山活動情報　１０７

２．避難はどう行われたか

　１．当時の居場所と火砕流発生の情報入手　１０８
　２．直後の被害予想と対応行動　１０８
　３．避難とその決め手　１１０

３．流言蜚語と情報混乱

　１．流言蜚語の種類　１１２
　２．流言の情報源と信用度・不安度　１１５
　３．６月１２日の情報混乱　１１７

４．警戒区域設定と避難生活

　１．最初の警戒区域（６月６～２０日）についての意見　１２１
　２．避難先とその変更状況　１２１
　３．避難生活の影響　１２３

５．１９９１年８月現在での危険度認識と警戒区域継続への考え方

　１．火山活動の危険性の認識　１３０
　２．大火砕流の前兆認識　１３０
　３．警戒区域再延長への意見　１３１
　４．部分解除の要望内容　１３２

６．マスコミへの評価と情報ニーズ

　１．マスコミへの評価　１３４
　２．情報ニーズとマスコミへの期待　１３６

７．行政等の対応評価と要望

　１．行政等の対応評価　１３９
　２．行政に対する要望　１４１

８．転居希望　１４２

９．まとめ－災害情報の伝達・受容に関する今後の問題　１４３

I 部

災害情報はどう伝達されたか

１．それは普賢岳の噴火からはじまった

１．普賢岳が噴火した！

まず最初に、雲仙普賢岳噴火の事実経過を記しておく。

雲仙岳の主峰・普賢岳がはじめて噴火したのは１９９０年１１月１７日だった。そして、９１年２月１２日には２度目の噴火が発生し、その後も、３月２９日、４月９日、４月３０日と小噴火をくり返した（表１）。

最初の噴火は、１１月１７日未明、普賢岳の山頂付近２ヶ所から噴煙があがったものであるが、この噴火前には、火山性微動や群発地震が頻発していたため、九州大学島原地震火山観測所の太田一也所長などは、噴火が近いことをある程度予想していた。

また、たまたま「熊本日々新聞」はこの日の朝刊で、噴火が近いことを報じる記事を掲載している。この記事には、「『雲仙』噴火活動か　”島原大変”以来２００年ぶり　観測体制強化進む　１年続く群発地震」というタイトルで、

「長崎県島原半島の雲仙火山は約２００年の沈黙を保ってきたが、最近になって噴火活動につながるとも考えられる観測データが得られ、関係者は警戒を強めている。すでに福岡管区気象台火山機動観測班が現地入りして基礎調査を行っているほか、今月末までには全国の国立大学の観測機関が共同で観測に入るなど体制の強化が進んでいる」（「熊本日々新聞」１９９０年１１月１７日朝刊）

と書かれているが、太田所長から取材したこの記事は、掲載当日に噴火が発生したため、期せずして大特ダネとなった。

けれども、この噴火は、地元の市町村や住民にとって、まさに寝耳に水のできごとだったようである。あたかも、寛政４（１７９２）年の「島原大変」（眉山の大崩壊によって１５０００人の死者を出した災害）から２００年が近づいており、地元では、記念行事まで考えていた矢先だった。

噴火のあと、多くの人々の脳裏をよぎったのは、この島原大変のことであった。

よく知られているように、島原大変は、わが国史上最大の犠牲者を生んだ噴火災害である。明治・大正期の地震学者・大森房吉が編集した『日本噴火志』は、この島原大変について、次のように書いている。

「寛政年間の肥前の国島原温泉岳【筆者注：雲仙岳のこと】の破裂は４ヶ月以上にわたれる現象にして、寛政３年の冬既にしばしば地震あり。小浜村の山岳は所々崩壊して、家屋を埋没し２人の圧死者を生じ、島原の前山【筆者注：眉山のこと】の峰もまた崩れたりしが、寛政４年１月１８日（西暦１７９２年２月１０日）の夜半に至って、同岳中最高峰の一つなる普賢山（海抜１４７８メートル）にて鳴動を始め、普賢祠の近傍に噴口を生じ、蒸気土石を拋出し、泥をおびただしく吹き出せり。其の後噴出は次第に勢を減じたれども、鳴動は止まず時々地震を感じたり。

２月４日に至り、普賢山に続きて、東に当り一里ほど隔たれる穴迫と称する谷間に

表１．雲仙岳の火山活動経過（建設省河川局砂防部砂防課・長崎県土木部砂防室『雲仙岳噴火による土石流・火砕流』１９９１年６月より抜粋）

■雲仙岳火山活動経過(6月9日まで)

年　月　日	火　山　活　動
1984. 8. 6	活発な群発地震始まる
1990. 7. 4	微動(1967年の観測以来初めての微動)
11.17	九十九島火口、地獄跡火口で噴火
1991. 1.30	地獄跡火口底南東部に噴気を確認、高さ10m、噴湯あり
2.12	屏風岩火口から噴火
3.16-20	噴煙活発
29	大きな連続微動 地獄跡、九十九島、屏風岩火口同時に噴火
4. 9	地獄跡、屏風岩火口噴火、噴石高さ100m
19	普賢岳南斜面で土石流跡を確認
30	地獄跡火口噴火
5. 9	九十九島火口活発化
13	普賢岳山頂付近の地震急増(以降続く)
15	土石流発生
19	土石流発生
20	土石流発生 溶岩ドーム確認
21	溶岩ドーム4個に割れる 土石流発生(2回)
22	溶岩ドーム崩れる
23	溶岩ドームの破片1個落下確認
24	地獄跡火口噴火 地獄跡火口東より溶岩流落下確認 溶岩の崩れた先端は地獄跡火口から約1km流下
25	17:10臨時火山情報34号で24日08:08の崩落を火砕流と呼ぶ
26	11時台 火砕流頻発 13:30火山活動情報第1号発表 16:00火山予知連絡会会長コメント発表(火砕流・土石流に警戒)。 19時頃土石流発生
27	溶岩ドーム高さ25mに成長(23日に比べ高さ、幅が倍)
28	噴出物が灰色になる 溶岩東方へ押出し
29	火砕流頻発 0時頃から赤熱岩塊、東斜面を度々落下 16:06これまでよりやや規模の大きい火砕流発生 山火事発生
30	01時台 火砕流頻発
6. 3	これまでより規模の大きい継続時間の長い火砕流発生 死傷者・行方不明 数十名の被害 火砕流一部赤松谷へ流れる
4	火砕流頻発 溶岩塊東半分崩落
5	火砕流続く 溶岩塊、東斜面幅70～80m、高さ100m崩壊地形の下端は標高1050m付近 「平成3年(1991年)雲仙岳噴火」と命名。
6-7	東斜面の溶岩のせりだし続く
8	17:23頃規模の大きな火砕流(北上木場付近まで)発生 17～19時、火砕流多発 19:51連続的な火砕流発生(連続時間約25分) 20:20島原市内に直径5mmの火山弾。火砕流の先端国道57号線を超える 山火事発生、火山雷・爆発音あり 21:20断続的に火砕流発生 22:30日田、佐賀でそれぞれ降灰確認
9	00:30福岡で降灰確認 02:10大分で降灰確認

(気象庁発表資料より抜粋、土石流に関して一部加筆)

震動を起こし、6日午前10時頃、強き鳴動と共に噴煙したれども、普賢山の如くには強からざりき。然るに、数日を越え9日頃に至って、火気を発し震動も強く、毎夜火光を見、焼岩転落の響雷の如く日々焼け下だり、最初噴出せる普賢山は次第に鎮まり、蒸気を吹出せる跡沼の如くになり、5、6尺涌上るのみなりしが、29日に至り、この東北に当り10町を隔てたる蜂之窪と称する所にて、しきりに震動し、午後3時頃噴煙したり。

翌閏2月3日に至って、再び同所より2町ほど西に当れる場所にても噴煙したり。

3月朔日午後3時頃より地震次第に強くなり、山鳴も頻繁にして震動毎に岩石砂利等おびただしく山腹より崩落せり。地震は同夜半より翌2日午前6時頃までに特に烈しく、島原城内外家屋の建具等外れるものあり、破損所怪我人もあり、地面に幅一寸ほどの亀裂を生じたるが、3日に及びて強震も間遠くなれり。9日は天気晴朗なりしが前山の南面中木場村樟林長さ120間、幅5、60間俄然壊落して渓を没したり。

爾後地震やや軽く、人心慣れて避難者の帰来するものあるに至りしに、4月朔日午後6時頃烈しき地震2回あり。前山(海抜876メートル)の南面、山頂より麓迄一時に崩壊して土石を押出し、安徳村北名及び島原の港湾悉く埋没せられ、市街は大手以南土砂の堆積すること数尺より丈余に及ぶ。海より高波を打ち上げ、場所に依りては高さ2、30尺に及び、城市の家屋忽ちにして押し流され、海辺の小島3個は消滅す。また泥砂海中に押出されて所々に数十の小島となり、新たに港を形成せるものを港町とす。高波の打上げたるは、凡そ海岸一帯の長さ19里15町にして、瀕海17村を通じ田野を荒せること380余町、変死者9745人、傷者707人、牛馬の弊死496頭に及べり。

有明海を隔てて島原に対する肥後国の海岸も同時に高波の害を蒙り、死亡者の数は飽田郡に1100余人、宇土玉名の両郡に合して4000人あり。又天草諸島にても被害少なからず、溺死者343人に及べり。

2月9日に焼岩を噴出したる穴迫の火勢(溶岩流なり)は其の後熾にして1日3、4時間づつ焼け降り、遂には田畝の地に及び、4月には城外30町許に近寄りたれども、城は遂に免るるを得たりき。5月に至り、地震始めて止む」(大森房吉『日本噴火史』206－207ページ)【筆者注:読みやすさを考え、改行・句読点をつけ、一部現代かな使いに改めた】

200年前の雲仙岳噴火は、まず寛政3年10月(旧暦)の地震活動からスタートした。この地震で、小浜村では死者2名の被害を生じたが、翌4年1月に今度は噴火が発生し、2月になると穴迫というところから噴火が起こって、溶岩がゆっくりと流出をはじめた。噴火は、次に蜂の窪というところからも発生するが、やがてしだいに沈静化していく。しかし3月に入ると、またふたたび地震が頻発し、けが人まで出る状況になった。

そして4月1日午後8時頃、2度にわたる激しい地震のあと、島原の背後の眉山(前山)が大崩壊を起こし、城下の家々を土砂のなかに埋もれさせたのである。大量に流出した土砂は、さらに有明海に流れ込み、最大波高10メートルともいわれる巨大な津波

を発生させた。この津波により、対岸の肥後や天草もまた甚大な被害を受け、死者は合わせて１５０００人にものぼったのである。これが、日本噴火史上最大の被害を記録した、有名な「島原大変肥後迷惑」である。

２．避難計画が作成された

１９９０年１１月に普賢岳が最初に噴火したとき、多くの人の記憶によみがえったのは、この眉山崩壊の悲劇だった。もし２００年前のこのシナリオが再現すれば、やがては眉山崩壊という最悪の事態になるかもしれない。人々が懸念したのは、まさにこのことだった。

そこで島原市では、最初の噴火直後、最悪の事態にそなえて「避難計画」の検討をはじめた。最初の計画では、島原市中心部をふくむ眉山の東側を避難地域とし、その対象人口は２６０００人。島原市全体の人口が約４５０００人だから、半分以上が避難するという大規模な計画である。避難先は、隣接する国見町や有明町・深江町などの公共施設で、バス会社のバス１０００台を使って避難者をピストン輸送する、というものであった。

この避難計画は、「熊本日々新聞」の１１月２６日の朝刊で大きくスクープされている。その内容は、

「（避難）計画は、１２月４日の島原市防災会議に提出される予定・・（中略）．．計画によると、避難の対象となるのは同市の中心部を含む眉山の東側で、域内人口は約２万６千人。避難先は隣接する同県南高来郡内の国見町や有明町、深江町などを想定。これらの町に対し、学校施設などを提供してくれるよう折衝中だ。また、近隣に親類などがある人は、それぞれ自主避難してもらう方針。長崎県営バスや島原鉄道のバス千台を借り上げ、市民をピストン輸送する。雲仙岳測候所や九州大学地震火山観測所から地震や地下水位の変動など、大噴火の前兆が報告され次第、計画を発動。パニックによる道路混雑を避けるため、指定の順序に従い地区ごとに避難をはじめ、眉山のふもとにある市役所も北部の安全な地区に移動する」（「熊本日々新聞」１１月２６日朝刊）

というものであった（図１）。

しかし、この大避難計画は市民に公表されることなく、結局、日の目を見ることはなかった。

わたしが、ある放送局の解説委員Ｙ氏から電話を受けたのは、１９９１年１月中旬頃だったと思う。Ｙ氏はこの大避難計画をくわしく知っており、島原市は計画の公表による社会的影響を懸念しているようだ、と説明してくれた。けれども、市民にとっても観光客にとっても、地域の危険性と、いざというときの対応策を知らされていたほうがベターであって、やはり避難計画は公表すべきですねというのが、そのとき２人で話し合った結論だった。

この件については後に、鐘ケ江管一島原市長がある雑誌のなかで、計画の公表を控えたのは「一部のマスコミが島原市民の不安をあおるような報道をしたからです」と語り、「１１月２６日、私は年に１回の合同陳情のため、１市１７町の方々と一緒に上京しました。夕方６時から『ふるさとトップとの懇談会』が霞が関の霞山会館で開かれたのですが、その席上、ある東京在住の社長さんから『市長も大変ですね』と、当日のスポーツ新聞の切り抜きを見せられました。新聞記事は、『“２００年ぶりに噴火”　雲仙のふもと島原市　史上最大の避難計画』と大見出しが付き、島原市は市民の約６割に当たる２万６千人の島原大量避難計画づくりを急いでいるという内容でした。私は、危険な兆候を見られない時点で、このような記事が噂として広まったら、無用な混乱を招く恐れがあると考え、避難計画の発表はしばらく状況を見てからにしたのです」と、その経過を紹介している（鐘ケ江管一「島原大変オロオロ日記」『文藝春秋』１９９１年9月号２８２ページ）。

推測するに、市が避難計画の公表を控えた背景には、無用の混乱を避けようとする市長の配慮のほか、①計画の内容が一部の新聞に報道されたあと観光客が減り、公表によってますます客が減るのを心配したため、②計画では近隣の町の公共施設を借用することになっているが、これらの町には受け入れ体制が整っていないため、などの理由もあったと思われる。要するに、この計画は社会的なインパクトが大きすぎるというわけである。

こうした曲折を経て、結局、２度目の噴火の後の９１年２月末、島原市は最初の避難計画を大幅に縮小して公表した。それによれば、避難地域を眉山の頂上から半径3キロ以内とし、対象人口は１４０００人。これらの人々を市内の１９ヶ所の避難所に収容するというものである。

まだはっきり記憶しているが、この計画が公表されたのは2月２６日。なぜはっきり覚えているかというと、ちょうどこの日の午前、わたしは何人かの研究者と一緒に島原市をたずね、午後に発表する予定だというこの計画をくわしく説明してもらったからである。そのとき、とくにわたしの関心をひいたのは、避難の勧告・指示や具体的な避難の方法だった。計画によれば、避難の勧告・指示は「眉山崩壊のおそれが生じた場合は、市長はただちに避難警報、避難勧告または指示をする」というもの。また避難警報、勧告・指示の周知方法は「市の広報車・消防団各分団車両及び公共放送施設・テレビ・ラジオ・航空機により市民への周知を図る。また、町内会組織を通じて住民への周知徹底に努める」という内容である（図2）。

その説明を聞いてわたしが思ったのは、眉山崩壊の兆候を発見してから、実際に崩壊がはじまるまでどのくらい時間的余裕があるかわからないが、きわめて切迫したケースもあり得るので、できれば多くの住民に迅速に情報を伝えられるメディア（たとえば同報無線・有線放送・ＮＴＴのオフトーク通信など）をもっていたほうが望ましい、ということだった。そこで、過去の三宅島噴火（１９８３年１０月発生）や伊豆大島噴火（１９８６年１１月発生）の例をあげながら、こうした噴火では避難情報の伝達に同報無線が重要な役割を果たしたので、島原市の避難計画のなかにも、こうしたメディアを組

図1．「２６０００人避難計画」を報じた記事（「熊本日々新聞」１９９０年１１月２６日朝刊より）

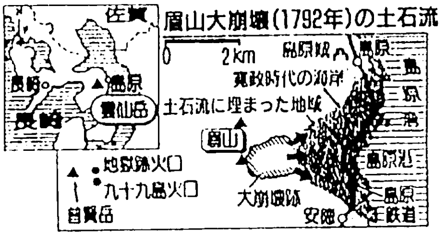
日 新 聞 平成２年(1990年)１１月２６日 月曜日

２万6000人避難 空前の計画着々

雲仙大噴火、地震に備え

島原市民の6割

バス1000台、巡視船も協力



約二百年ぶりに噴火した長崎県・雲仙岳のふもとの島原市は、万一の大噴火や大地震に備え、市民の約六割に当たる二万六千人を市外に避難させる大規模な特別避難計画づくりを急いでいる。火山噴火に伴う住民の避難は、昭和六十一年、伊豆大島の例があるが、この時、島外に避難したのは約一万三千人。計画が実施されれば、日本の火山災害史上空前の大避難となる。

同計画は、十二月四日の同市防災会議に提出される予定。

一七九二年（寛政四年）の噴火では、雲仙岳に連なる同市西側の眉山（まゆやま＝八一九㍍）が崩壊し集落をのみ込んだほか、有明海に大津波が起き、対岸の熊本、天草地方を含め計約一万五千人の死者を出した。

今回の避難計画はこのときの被災地域を参考に策定している。計画によると避難の対象となるのは同市中心部を含む眉山の東側で、域内人口は約二万六千人。避難先は隣接する同県南高来郡内の国見町や有明町、深江町などを想定。これらの町に対し、学校施設などを提供してくれるよう折衝中だ。また、近隣に親類などがある人は、それぞれ自主避難してもらう方針。長崎県営バスや島原鉄道のバス千台を借り上げ、市民をピストン輸送する。

雲仙岳測候所や九州大学島原地震火山観測所から地震や地下水位の変動など、大噴火の前兆が報告され次第、計画を発動。パニックによる道路混雑を避ける

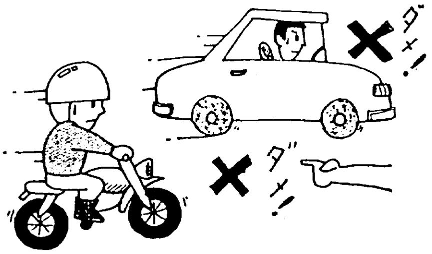
避難訓練をする島原五小の児童たち。後方は噴煙を上げる雲仙・普賢岳＝24日午前、長崎県島原市大下町

図２．島原市が２月２６日に作成し、全戸に配布した「避難計画」の一部

現在のところ、大きな変化はないと思われますが、万一の場合、次の要領で避難していただきますようお知らせいたします。

避難警報・勧告・指示

眉山が崩壊のおそれがある場合は、市役所広報車、消防自動車、公共放送施設などや町内会を通じて『避難の準備をして下さい。』『避難をして下さい。』と呼びかけます。



避難の方法

- 安全と思われる親戚、知人、友人宅がある場合は、出来るだけ自主避難をお奨めします。
- 避難場所に避難する時は、市役所、消防団、島原警察署、消防署の各職員が誘導いたしますので、隣近所誘い合せ集団で歩いて避難して下さい。

※自家用自動車は使用しないようにして下さい。

み込んだらいかがですかと話した。このときの市長の回答は、それも必要だけれど、かなりの費用を要するのでいずれ長崎県と相談して検討します、とのことであった。

話はそんなことで終わったが、このときは、神ならぬ身の悲しさで、まさか現在のようなことになろうとは、その場にいた者のだれ一人予想していなかったのである。

3．危険情報は公表すべきか

このような話は、記すまでもないエピソードかもしれない。けれども、いままで、災害の危険をかかえている市町村が社会的インパクトをおそれてその危険を公表したがらなかったこと、まして具体的な危険地域や住民の避難計画の公表を避けようとしてきたことはかなり一般的な現象であり、島原市の場合も当初はその例外でなかったと言いたかったのである。

最近、多くの防災関係者が、住民への防災啓発活動の一環として、自治体は「災害危険度地図（ハザードマップ）」の作成と公表を積極的に行うべきだ、と指摘している。つまり、自分の居住地域のうちどこが危険でどこが安全か、どこにどういう危険物があるかという「危険度地図」を作成し、かつこれを公表することが望ましいというわけである。

これについては、やや古いが１つの調査結果がある。

それは、自分の居住地域の危険を住民がどの程度知っているかについて、１９８５年８月に内閣総理大臣官房広報室が行なった『河川と土砂害に関する世論調査』であり、それによると、自分の住んでいる地域の土石流・がけ崩れ・地すべりなどの危険箇所を知っているかという問いに対して、「知らない」と答えた人は８７％にのぼり、「知っている」人はわずか１３％だった。また、とくに政令指定都市のような大都市だけをみると、結果はもっと悪くて「知っている」人は５％にすぎなかったという。しかし一方、土砂害や水害の被害予想地図を公表することを望む住民の割合は、８０％以上にのぼっていたのである。

この調査から、土砂災害危険地域は住民にほとんど周知されていないこと、また災害危険地域の公表を住民が望んでいることが明らかになる。

しかしいままで、このような危険度地図の公表、とくに具体的な危険箇所の公表について、都道府県や市町村は一部を除いて必ずしも積極的でなかったようである。その理由は、

①公表によって土地価格の低下などの社会的影響があること

②危険地域を公表していながら防災対策を行なわないと行政の怠慢を責められることなどであり、こうした行政的配慮が危険地域の積極的公表を妨げてきた１つの理由であった。さきにあげた島原市の避難計画の背後にも、おそらくこうした配慮がはたらいていたものと推測される。

けれども、こうした慎重な配慮ははたして必要なのだろうか。むしろ、わたしはこう

いう配慮は不要の懸念ではないかと考えている。

というのは、まず①の理由から触れると、防災機関の任務は災害の防止にあり、危険箇所を危険だと指摘することはきわめて正当だとしかいいようがない。かりにそのため地価が下落したとしても、そこはもともとそれだけの価値しかない場所であって、こうした配慮は基本的に不必要なのである。次に②であるが、これはもう論外であろう。逆に、危険地域を公表せず実際に災害が起こった場合に受ける批判にくらべれば、どちらを選択すべきかはきわめて明白であろう。

ここでもう一歩論を進めて、①の問題、つまり危険地域の公表によって本当に考慮すべき社会的影響があるのかどうか、を少し考えてみたい。これは実証的な調査が必要な問題であって、もし公表によってほとんど何の社会的影響もないならば、それは単なる杞憂にすぎないことになる。実はわたしは、災害危険地域の公表による社会的影響はほとんどないか、あるいはあってもごく一過性のものであろうと思っているのだ。

その一例として静岡県をとりあげると、１９７６年以来東海地震が近いとしきりに喧伝され、しかも７９年には東海地震による死者が１万人を越えるという被害想定が発表されたにもかかわらず、静岡県の社会指標は、社会動態も、事業所数も、新規設備投資額も、銀行取引額も７６年から現在までほとんど変化がなく、また観光客数は７６年には若干減少しているものの、これもすぐに回復している。

もっと地域的な危険度を公表した場合も、事情はほぼ同じである。たとえば静岡県焼津市では、東海地震時の津波危険区域を○丁目○番地という細かいところまで線引きしているが、その結果、危険地域の地価が下がったという話は聞かないし、また北海道十勝岳の麓にある上富良野町でも、噴火時の泥流危険地域をかなり細かいレベルまで公表しているが、ここでもその影響はほとんどないといっていいのである。

このような点から、わたしは、災害に関する情報は具体的な危険箇所の公表を含めて、その一切を公表するのがもっとも望ましいと考えている。

2．火砕流発生す！

1．土石流の発生と溶岩ドームの出現

さきにも触れたように、１１月１７日の噴火当初は、多くの人の関心が眉山の崩壊に向けられていた。噴火直後から、島原市内では眉山が崩壊するといううわさがひそかに広がったというが、それは、市民がこのことをいかに心配していたかを如実に示すものといえよう。

しかし、１９９１年５月に入ると、事態は別の方向に進むことになった。

土石流の発生である。つまり、あいつぐ噴火によって水無川上流に堆積した火山灰が、大雨のため土石流となって流域を襲いはじめたのである。

もっとも、噴火直後から、梅雨期の土石流の発生はある程度予想されており、３月１１日、長崎県は学識経験者からなる「雲仙岳緊急火山対策検討委員会」（委員長：竹下敬司九州大学教授）を設置し、既設砂防ダムの除石（水無川・赤松谷川各５０００立方メートル）を行なったほか、土石流発生監視装置（ワイヤーセンサー）を水無川と赤松谷川にそれぞれ1基設置する、などの対策をとっていた。

この予想が現実になった。

まず5月１５日、水無川上流で最初の土石流が発生した。そのため、島原市と深江町は周辺住民１１７世帯、４６１人に避難勧告を出したが、この土石流は未明からの雨によるもので、雲仙岳測候所では、降りはじめから午前9時までに１０１ミリの雨量を観測している。水無川には直径１～２メートルの大石がドスン、ドスンと地響きをたてて流れ、川沿いのコンクリート製電柱は真ん中からポッキリ折れるという被害まで発生した。この土石流の印象を、ある住民は「まるで家の下にバイブレーターがあるようだった。はじめての経験でたいへん恐ろしかった」と話している。

次いで、５月１９日１３時４１分、２度目の土石流が発生した。このときにも、島原市と深江町は避難勧告を発令し、午後９時までに４１６世帯、１３２６人が避難した。この土石流によって、筒野人道橋と筒野２号橋が流失。また5月２０日7時２０分、３度目の土石流が発生したが、これは規模が小さく被害もなかったため、１４時４６分には避難勧告を解除した。さらに5月２１日にも、２時５２分と４時４５分の２回にわたって土石流が発生。これで、１５日から数えて5回目の土石流となった。この日は、２時５９分に避難勧告が出され、５時５５分に解除された。

このように、５月１５日以後、水無川流域では何度も土石流が発生した。けれども、不幸中の幸いに、こうした土石流災害では住民の避難がスムーズに行われ、人的被害はゼロだったのである。

ところが、住民や行政機関が土石流対策に追われていた最中の５月２０日、雲仙普賢岳に新たな異変が起こった。今度は、溶岩ドームが出現したのである。

これは、粘着性の強い溶岩が地獄跡火口中央部にお椀をかぶせたような形に積もった

もので、直径４０～５０メートル、高さ３０～４０メートルにものぼった。また、この溶岩ドーム出現という事態に対して、雲仙岳測候所は２０日１８時３０分、「普賢岳地獄跡火口から溶岩の塊のような物が現われた模様です」という臨時火山情報第２４号を発表し、次いで２０時１０分、「普賢岳の地獄跡火口から溶岩の塊のような物が現われた模様です。本日１５時過ぎのＲＫＢ毎日放送及び毎日新聞西部本社の上空からの取材によると、地獄跡火口内に直径４０～５０メートルの溶岩の塊がせり上がっているのが確認され、色は黄色と灰色部分がありました。この溶岩の塊は、１８日の雲仙岳測候所員による楼上観測ではなかったものです。現在も、火山性地震や火山性微動が多発しています。このように火山活動が活発な状態ですので、十分警戒してください」という臨時火山情報第２５号を、相次いで発表した。

この溶岩ドームはさらに成長を続け、５月２１日午後には大小５つに割れ、２２日にはそれがバラバラに砕けていく。そして、２４日には最初の火砕流が発生するのである。

最初の火砕流は、２４日午前８時１０分頃に発生したものとみられる。けれども当初、この火砕流は、噴火にともなう「溶岩の崩落」と発表された。

つまり、直後の８時２５分に発表された臨時火山情報第３２号は、「本日８時１０分、地獄跡火口が噴火しました。地獄跡火口東壁が崩壊した模様で、溶岩流出等の恐れもありますので、十分警戒してください」となっており、また９時２５分発表の臨時火山情報第３３号は、「本日８時１５分、島原市消防団員からの報告によると、８時８分頃、地獄跡火口から溶岩が落ちてきたのを確認したということです。測候所の確認によると、８時１５分地獄跡火口東壁の北部より、溶岩の塊と思われるものが落ちているのを確認しました。落ちた溶岩の塊から煙が上がっています。溶岩流出、山火事等の恐れもありますので十分警戒してください」となっているのである。

２．火砕流はどのように公表されたか

そして、およそ１日半後の２５日１７時１０分、この「溶岩の崩落」が実は「火砕流」だったことがはじめて公にされる。つまり、臨時火山情報第３４号のなかで、火砕流ということばが最初に登場したのである。それは、次のような文面であった。

「（臨時火山情報第３４号）　雲仙岳の地震、微動は引き続き多い状態が続いており、２４日に火山性地震１３７回（いずれも無感）、火山性微動１９回、２５日０時から８時までに火山性地震６４回（うち震度１が１回）、火山性微動２３回でした。本日夕方までも同様な状態が続いています。本日１１時３７分と１２時２４分に昨日８時７分と同様な振動波形を観測しました。このように火山活動は活発な状態が続いており、また降雨等による土石流の発生の恐れもありますので今後の活動に厳重に警戒してください。なお、九州大学、地質調査所等の調査によれば２４日８時８分頃の崩落現象は小規模な火砕流であったとのことです」（図３）

図3．「火砕流」ということばがはじめて登場した臨時火山情報第34号

平成　3年　5月25日
地震火山業務課

雲仙岳　火山の活動状況について

雲仙岳測候所　から入電・連絡がありましたので、参考までにお知らせします。

[redacted]・臨時火山情報
第34号

平成　3年　5月25日17時10分　雲仙岳測候所　発表

火山名　雲仙岳

雲仙岳の地震、微動は引き続き多い状態が続いており、24日に火山性地震137回（いずれも無感）、火山性微動19回、25日00時から08時までに火山性地震64回（内震度1が1回）、火山性微動23回でした。本日夕方までも同様な状態が続いています。

本日11時37分と12時24分に昨日08時07分と同様な震動波形を観測しました。

このように火山活動は活発な状態が続いており、また降雨等による土石流の発生の恐れもありますので今後の活動に厳重に警戒して下さい。

なお、九州大学、地質調査所等の調査によれば24日08時08分頃の崩落現象は小規模な火砕流であったとのことです。

この情報を見て気づくのは、後の大災害の原因となった火砕流について、①最後に「なお書き」のかたちでさりげなく触れていること、そして②火砕流の前に「小規模な」という形容詞がついていることである。後に触れるように、雲仙岳測候所および気象庁はこの時点で、火砕流の危険を過小評価していた（あるいは、あえて過小評価しようとした）ようである。

もちろん、いままでの火山情報のなかにも「なお書き」のかたちで重要な情報が載っていたこともあるし、また「小規模な」という形容詞も火山学的にみれば正確な表現かもしれない。しかし一方、27日付けの「長崎新聞」によれば、このとき気象庁は、「オーバーに解釈しないでほしい。桜島などでも小規模なものは発生しており、今後もこ

の程度の小規模なものはあり得るだろう」とか「火砕流の事実が現地で漏れて大騒ぎになっても困るので臨時火山情報で発表したが、あまり深刻に受け止められると困る」というコメントを出し、通産省・工業技術院地質調査所も「この程度の火砕流なら住民の被害はないだろう。山体の崩壊でもないかぎり火砕流の規模が大きくなることも考えられない」という見解を述べ、火砕流によって被害が発生する可能性は小さいだろう、というニュアンスの解説を行ったという。こうしたことを考えあわせると、火砕流の危険を過小評価したという事実は、やはりあったと考えざるを得ない。

わたしが後に気象庁の職員から直接聞いた話では、この頃は、まだ火砕流が拡大していくという予測がたたなかったこともあるが、こうした見解が出た背景には、火砕流の危険を強調すれば、報道機関がこれを大々的に扱い、その結果、社会的な混乱が起こるのではないかという心配があったようである。つまり、「オーバーに解釈しないでほしい」というのは、火砕流の予測であるとともに、報道機関への要請という面もあったということだ。

これはとりもなおさず、火砕流が、特大級の被害を引き起こすきわめて危険なものだからである。火山に素人のわたしでも、火砕流と聞けばぎょっとするくらいだから、おそらく火山噴火予知連絡会も気象庁も、火砕流の危険を強調したときの社会的影響の大きさを憂慮したにちがいない。この心配こそ、前述のように、火砕流発生の情報が1日半も遅れた大きな理由であろう。

実は、観測にあたっていた研究者たちは、24日の「溶岩の崩落」は火砕流ではないかという確信を早いうちからもっていたといわれる。取材していた放送局の映像がそのための有益な情報を提供したという事実は、まさに情報化時代を象徴しているのだが、ともあれ、ある研究者が気象庁の担当官の宿舎にビデオを持ち込んで説明しようとしたなどという話もあり、もっと早い時点で火砕流の発表があっても、けっしておかしい状況でなかった。

では、なぜ発表が遅れたのか。その間の事情については、次のようにいわれている。

「なぜ、火砕流発生の発表が遅れたのか。確認に時間がかかったこともあるが、住民の不安に対する配慮が大きな理由だった。25日正午ごろから九大観測所で、火山噴火予知連絡会、九大観測所、気象庁の専門家たちが『火砕流発生』について数時間にわたって議論した。

この席上、『このさい一般の人たちにも火砕流を知っておいてもらった方がよい』とする公表積極論、『火砕流の恐ろしさを知ると、人心の不安を招く。高温岩屑流という呼称の方がよいのではないか』といった火砕流公表への消極論があったという。結局、臨時火山情報第34号で『火砕流発生』を『九州大学、地質調査所等の調査によれば』のクレジットつきで公表したのだが、気象庁が正式に『火砕流発生』を確認したのは、さらに遅れて、26日午後0時45分の臨時火山情報第35号であった」（柳川喜郎「雲仙岳噴火報道の問題点」『新聞研究』1991年8月号45－46ページ）

つまり、この会合では、溶岩の崩落が火砕流だと発表すべきかどうか、また発表する

としたらどのようなかたちで行なうべきかについて多くの議論があったということであり、その理由は火砕流発表によって引き起こされる社会不安を懸念したからだ、ということなのである。

結局、火砕流発生の事実は、雲仙岳測候所から上のような形で発表されることになったが、後に率直にこのことを述懐した学者もいる。たとえば、次の発言はその一つである。

「あれが火砕流であるかどうかという認識に関しては、かなり早い段階で火砕流といって科学的にはいいという合意がみられたんですけれども、それをどうやって言うかということでかなり長い時間悩みました。あまりにびっくりしてパニック状態が出現することを、ぼくらは恐れたんですね。そのために、火砕流とはいうけれども、その後に、ただし小規模な火砕流であるからそれほど恐くないんだというふうにつけて発表しようじゃないかという意見にまとまって、わたしもそういうふうな発言をしました。しかし、それがぼくらが思っていたのとは違ったように作用したようでして、小規模だ、したがってこの火砕流は恐くないんだというふうにとった。ジャーナリストの方でもそうとった人が多くて、で、市民の方もそういうふうに考えたらしいですね」（群馬大学・H助教授の発言『前線にて』テレビ長崎・１９９１年１１月１６日放送より）

また、下鶴大輔・火山噴火予知連会長もある雑誌の座談会のなかで、火砕流の前に「小規模な」という形容詞をつけた事情を、次のように語っている。

「僕達があの時いちばん心配したのは、火災流って皆さん聞き慣れない言葉ですから、すぐ百科事典を引くと思ったんです。そうすると１９０２年、モンプレーの２万８千人死者を出した火山災害のことが載っている。そうすると大パニックになるんじゃないかというので、気象庁が火砕流でも小規模だ小規模だと発表したんです。そのへんで少し思惑ちがいがあったんですね」（「雲仙・普賢岳に何を学ぶか」『雲仙・普賢岳　全記録』毎日グラフ別冊１１４ページより）

この２つの発言にはともに「パニック」という言葉がでてくるが、要するに、火山学者たちはパニックという言葉に象徴されるような社会不安を、なんとか極小にしようと苦慮したのである。火山噴火予知がもっと正確にできるなら、危険を率直に伝えるほうがいいに決まっているが、予知がままならない現状では、社会的リアクションを配慮しながら情報を出さねばならないところに、その苦悩をうかがうことができる。

ある火山学者からわたしが直接聞いた話でも、火山に異常があると学者は悪いほうに悪いほうにと考えてしまうのだが、いままでその懸念を強調したことはほとんどなかったという。もちろん、社会不安を引き起こすことを避けるからであり、それは、昭和５２年の有珠山噴火でも６１年の伊豆大島噴火でも同じことだった。そして、過去の火山活動では心配していたことが起こらなかったから、この方法が結果として良かったわけだが、今回は不幸にしてそれが裏目に出てしまったのである。

この事実は、防災対策にとって非常に重要な問題を投げかけるものである。

つまり、火山噴火予知の専門家が、内心ではひょっとしたら大災害が起こるかもしれ

ないと心配しながら、社会的混乱をおそれてその心配を公表しないとしたら、それはきわめて深刻な事態といえよう。

これは火山噴火予知ばかりでなく、地震予知にも共通する大きな問題であり、簡単に打開策などでてくるはずもないが、一つには、火山噴火予知にたずさわる研究者たちが率直に自分の懸念を表明し、しかも不幸にしてそれが的中しなかった場合にも、その結果について寛容であるような社会的土壌をつくることが必要であろう。そしてそのためには、住民が、火山噴火予知はきわめて困難だという現状について知識と理解をもつことも前提になるだろう。また、懸念を率直に表明しても社会混乱を極小にするような情報の提示方法がはたしてあるのか、あるとしたらそれはどんな方法なのかを検討することも必要だろう。あるいはもっと根本的に、災害の危険を強調したとき本当に社会的混乱が発生するのか、もし発生するならばどの程度の混乱が起こるのかについて検討を行うことも必要かもしれない。

いずれにしても、火砕流発生の発表にともなうこのエピソードは、火山学者や防災担当者ばかりでなく社会心理学者や報道関係者にも、非常に重い課題をつきつけたのであった。

3．マスコミはどう報道したか

このように、火砕流が発生した当初、専門家たちはその危険をあえて強調しなかった。そのためもあって、マスコミの報道にも、はじめはほとんど緊迫感はみられない。当時のテレビ放送や新聞記事をあらためて見直した印象では、その多くは、防災の観点から火砕流の危険を強調するものではなく、むしろ学者や百科事典の説明をたんたんと紹介するといった印象で、科学的な解説記事を読んでいるような感じがする。とくに、火砕流の熱風のおそろしさや、プレー火山の大災害について触れているものは少ない。

たとえば、２５日午後７時の「ＮＨＫニュース」は次のようになっている。これは、火砕流発生の第１報である。

「（Ｓアナウンサー）ところで、雲仙岳の火口の東側の斜面で昨日から発生しています噴煙のような煙が激しくあがる現象は、山頂の溶岩がこなごなに砕けながら高温のガスとともに山肌を流れくだります、火砕流といわれる現象が起きているためだとわかりました。

噴煙のような煙が激しくあがる現象は、昨日午前８時過ぎに起きたのをはじめ、昨夜７時過ぎと今日昼前にも見られました。これらの一連の現象について、今日、火山噴火予知連絡会の下鶴大輔会長や気象庁、大学の関係者がテレビカメラがとらえた当時のようすや採取した溶岩などをもとに検討を加えました。その結果、この噴煙のようなものは、山頂から崩れ落ちた溶岩が細かく砕けながら斜面を流れくだる、火砕流と呼ばれる現象が起きていたことがわかりました。

火砕流には何種類かありますが、今度のものは、火口に現われた溶岩がまだ高い熱

をもったまま崩れ落ちて発生しているものとみられ、このような高温の溶岩はなかに火山性のガスを含んでいるため、斜面に落ちるとガスとともにはじけて一部がこなごなに砕けます。そして、この砕けた灰がガスとともに勢いよく吹きあがり、あたかも斜面から噴火しているように見えるというものです。

火砕流は規模が大きいと山をかけおりる距離が飛躍的に長くなりきわめて危険なものになりますが、雲仙岳でこれまでに発生したものは規模が小さく、大きな災害を引き起こす恐れはいまのところそれほど強くないと専門家は指摘しています。これについて、雲仙岳測候所は今日夕方臨時火山情報を出し、昨日の朝の活動が小規模な火砕流だったことを確認するとともに、今後も活発な活動に警戒するよう呼びかけています」（「ＮＨＫニュース」５月２５日放送より）

防災を強調するというより、むしろ火砕流という現象の科学的説明に終始しているのは、新聞も同じである。

ここで２つの例をあげると、２６日の「長崎新聞」は、見出しには大きく「小規模火砕流を確認」と出しながらも、記事では「火砕流は、噴火の際高温の溶岩の大小の破片がガスや水蒸気を放出しながら高温で斜面を駆け下りる現象。雲仙岳や有珠山など粘性の高い溶岩を噴出する火山で多く発生する」と、むずかしい説明をつけている。また、同日の「毎日新聞」も、

「雲仙の溶岩崩落は小規模な『火砕流』　長崎県雲仙の普賢岳地獄跡火口の東側で２４日発生した『小噴火・溶岩塊崩落』は、小規模な『火砕流』だったことが２５日、九大島原地震火山観測所と通産省地質調査所の調査で確認された。火砕流は、熱を持った溶岩が火山灰や岩石と一緒に高速でガスを発生しながら流れ落ちる現象で、通常、噴火に伴い発生する。通産省地質調査所によると、２４日午前８時８分の崩落を『火砕流』と確認したのは①落下の道すじにあたるたい積物の粒の大きさにかなりのバラつきがあった、②たい積物が高温で乾いていた、③落下の際に生じた煙が火砕流に特徴的なものだった－などから」（「毎日新聞」５月２６日朝刊）

という記事を載せている。どのくらいの読者にこの中身が理解できるだろうか、と疑問に思うほどのむずかしさである。

このように、少なくとも表明されたコメントをみるかぎり、火砕流発生の初期は、火山学者にも報道機関にもさほどの緊迫感はなかったようである。けれども、事態はたちまち急展開した。火砕流発生が公的に認知された日の翌２６日、人的被害が発生したからである。

４．緊迫感が増してきた

この日は、午前中から火砕流が頻発し、１１時３０分頃には民家まで５００メートルのところまで迫った。そして、水無川上流の砂防ダムで土砂の除去作業をしていた作業員が１人、全治１カ月のヤケドをしたのである。またその後、１３時５分、火砕流が水

無川上流の人家近くまで接近したため、島原市は北上木場町、南上木場町など５町の２５２世帯、１０９４人に避難勧告を発令した。この避難勧告は６月１日にいったん縮小されたが、３日の大災害を経て、７日には「警戒区域」に変更され、以後、一部地域は解除されたものの、その多くは現在まで継続している。

さらに、２６日１３時３０分には、雲仙岳測候所から「本日、１１時１３分頃から頻繁に火砕流が発生し、九州大学島原地震観測所からの情報によると、火砕流のその先端は人家の近くまで達している模様です。引き続き火砕流の発生の恐れがありますので厳重に警戒してください」という火山活動情報第１号が出された。これは、今回の一連の過程ではじめて出されたものである（図４）。

図４．今回の噴火ではじめて出された火山活動情報

平成 3 年 5 月 26 日
地震火山業務課火山室

雲仙岳 火山の活動状況について

雲仙岳測候所から入電・連絡がありましたので、参考までにお知らせします。

火山活動情報・ 第 1 号

~~昭和~~ 平成 3 年 5 月 26 日 13 時 30 分 雲仙岳測候所. 発表

火山名 雲仙岳

本日、１１時１３分頃から頻繁に火砕流が発生し、九州大学島原地震火山観測所からの情報によると、火砕流のその先端は人家の近くまで達している模様です。

引き続き火砕流の発生の恐れがありますので厳重に警戒して下さい。

最初の噴火以来、この日まで人的被害が出たことは一度もなかった。このけが人の状況について、翌２７日の「毎日新聞」は次のように報じている。

「水無川上流　黒煙に巻き込まれやけど　『生きた気がしなかった』

『まったく生きた心地がしなかった』－２６日午前１１時半ごろ、長崎県南高来郡深江町柴原、H建設作業員U．Ｊさん（３６）が、島原市北上木場町の水無川の上流で火砕流による黒煙に巻き込まれ、やけどをした。全治１カ月の重傷で、Uさんは収容先のD外科病院でも興奮さめやらぬ様子だった。

Uさんの話では、作業をしていた治山ダムは普賢岳・地獄跡火口から東側約２．７キロ。この日は午前8時頃から１２、３人で作業を開始。１１時過ぎ、1回目の火砕流が起きたので、１人が上流の様子を見に行った。心配して仲間１人と一緒に登っていて黒煙に巻き込まれた。

病院でUさんは『１回目の火砕流の時、大丈夫だったので、まさか自分たちの所まで来るとは思わなかった。熱くはなかったが、真っ黒い煙に巻かれた時は呼吸も出来なかった。慌てて山の中に逃げたが、気がついたら、そでをまくっていた両腕をやけどしていた』と、恐怖の一瞬を語った．．．．」（「毎日新聞」５月２７日朝刊）

次いで、５月２９日、今度は火砕流によって山火事が発生した。

この日も火砕流が多発したが、なかでも１９時３２分には、それまでになかった最大規模の火砕流が発生し、民家まで３００メートルの地点に迫った。また、この日の火砕流はかなり高温だったらしく、山火事も発生したが、火災はおよそ１時間後に自然鎮火した。そのため、この日の１９時４０分、雲仙岳測候所は２回目の火山活動情報を発表し、火砕流と土石流への警戒をあらためて呼びかけている。

この山火事の状況については、翌３０日の「西日本新聞」が次のように報じている。

「雲仙・普賢岳（長崎県島原半島、１３５９メートル）は２９日午後、これまでで最大規模の火砕流が相次いで発生した。特に午後７時すぎの火砕流では、溶岩の高熱が発火源とみられる山火事が起き、水無川上流の山林の一部を焼いた。昨年１１月の噴火以来、一帯で火災が発生したのは初めて。懸念された火災発生で住民の不安はさらに深まっている。

火砕流は、東側斜面の谷間を埋めている溶岩塊の帯を乗り越え、ふもとの民家まで４００～５００メートルの地点まで延びているのが観測された。気象庁雲仙岳測候所によると、火砕流は、午後1時４２分から同3時３１分の間に４回観測。さらに、夜に入っても断続的に発生、特に午後7時６分に起きた火砕流はこれまでで最大級の規模だった。

この火砕流に伴って水無川上流の民家からさらに約３００メートル上流付近で火災が発生。火は一時、幅約５０メートル、長さ約１００メートルにまで広がり、オレンジ色の炎がふもとを焦がした。火災現場が火砕流の先端付近にあたっていて危険なため、消火活動が出来なかったが、午後１０時半ごろ、鎮火状態になった．．．．」（「西日本新聞」５月３０日朝刊）

このように、２４日に発生した火砕流は、日が経つにつれてしだいに勢いを増してく

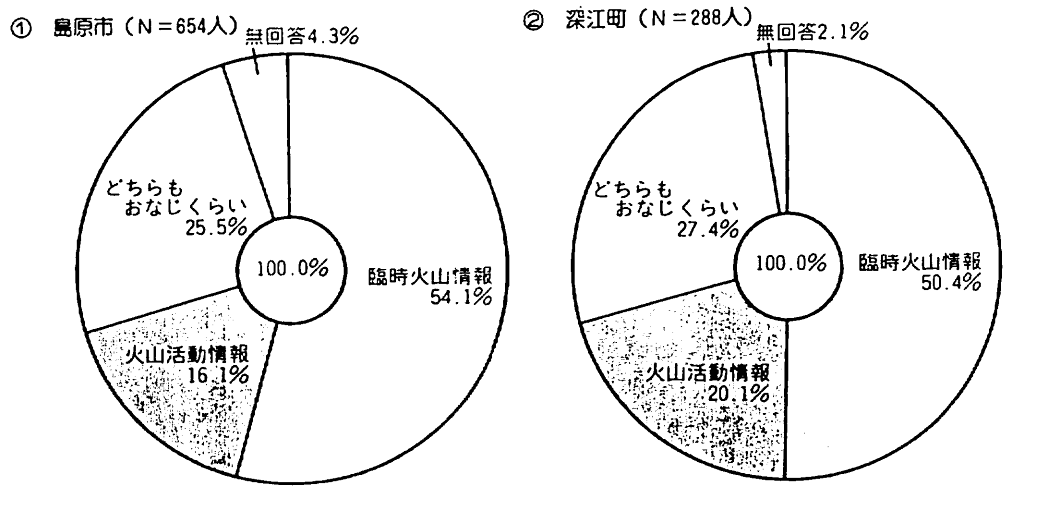
る。そして、火山学者や気象当局の緊張感も急速に高まっていくのである。

とくに、２６日に人的被害が発生した時点を境に、その傾向がいちじるしくなった。

たとえば、２６日には火山活動情報第１号が、２９日には第２号がそれぞれ発令されている。火山活動情報とは、火山活動によって直接人体に被害が生じ、または生じるおそれがある場合に出されるもので、火山現象に異常が起こった場合に出される臨時火山情報が「注意報」にあたるとしたら、これは「警報」にあたる緊急情報である。気象庁関係者の話では、とりわけ火山活動情報第１号を発令するときは、非常な決断が必要とのことであり、つまり、この時点で火山活動情報が出たこと自体、気象官署の緊張が強まったことを示しているといえよう。

なお、やや余談になるが、多くの住民は火山活動情報の意味を知らなかった。むしろ、「臨時ニュース」という言葉などの印象から、臨時火山情報のほうが緊急性の高い情報だと思っている人が多かった。Ⅱ部でも触れることになるが、わたしたちが島原市と深江町で行なったアンケート調査でも、このことは明らかである。つまり、臨時火山情報と火山活動情報のどちらが噴火の警告として緊急性が高いかをたずねたところ、「臨時火山情報」と答えた人が島原市５４％、深江町５０％と、両地域とも５割を超えており、一方、「火山活動情報」という正解は、島原市１６％、深江町２０％と非常に少なかったのである（図５）。こうした事実をみると今後、防災の観点から、用語の再検討を含めて住民がもっと誤解しないような工夫を早急に考える必要があるといえよう。

図５．臨時火山情報と火山活動情報はどちらが緊急性が高いか



話をもとに戻すが、当時の放送や新聞をあらためて調べても、人的被害が出た２６日の時点から、火山学者たちの警告が真剣になっていることがわかる。

そうした例をいくつかあげると、２６日午後７時の「ＮＨＫニュース」では、まず、「長崎県の雲仙普賢岳は今日昼前から火砕流がくりかえし発生しまして、一人がそれに巻き込まれてけがをし、ふもとの住民には避難勧告が出されました。また、火山噴火予知連絡会は今日の午後緊急の幹事会を開きまして、今後とも火砕流や土石流が発生すると思われるので、厳重に警戒する必要があるという下鶴会長のコメントを発表しました」と事実経過を報告した後、九州大学地震火山観測所の太田一也所長の次のような発言を放送している。

「（太田所長）谷の底がきれいに火山灰とか何とかで滑りやすくなっています。そうしますと、火砕流があんまり大きくなくても、割と下まで下って来る可能性があります。土石流でしたら、雨の降りぐあいで逃げられますが、火砕流はいつ発生するかわからないんですね。いま緊迫してますから、規模は小さいんですが、これからもまだ起こる可能性は強いわけで、とにかくもう逃げるより仕方がない。あ、いま発生しました。すごいのが発生しました」（「ＮＨＫニュース」５月２６日放送より）

また、２７日の「長崎新聞」にも、危険を警告する下鶴会長と太田所長のコメントが大きく掲載されている。

「『全面避難が必要』下鶴予知連会長ら警告　水無川と千本木地区

火山噴火予知連絡会の下鶴会長と九大島原地震火山観測所の太田一也所長は２６日、島原市内の同観測所で記者会見。普賢岳の噴火活動について『２４日から続発している火砕流は厳重な警戒が必要。噴火に伴う大量の降灰で、非常に大規模な土石流発生の危険性も高まった』と強く警告。住民の避難対策については『これまでのように勧告があったら避難するという姿勢では十分ではない』として、周辺住民全面避難の必要性を示唆した。県と島原市は避難、防災計画の見直しを早急に迫られることになった。

発生の避難では遅い

記者会見の冒頭、２４日から現地調査をしていた下鶴会長が『雲仙岳の火山活動に関する火山噴火予知連会長コメント』を発表。『火山活動は依然として活発で、今後とも火砕流、土石流が発生すると思われるので厳重に警戒する必要がある』と指摘した。同会長は『前の火砕流の通り道を次の火砕流が通ると、より速く、より遠くへ、滑るように流れる。２６日午前１１時過ぎの火砕流は火口から２．５キロ下方の民家近くまで到達した』と火砕流の危険性を述べ、『一連の噴火に伴って大量の火山灰たい積が続いている。溶岩だけでなく火山灰も加わったことで大規模土石流の発生の恐れが非常に強まった』と警告した。太田所長も『予測をはるかに超えた大量の火山灰が降っている。風向きによって降灰の方角も違い、これまでのように東側の水無川流域だけでなく、北側の千本木地区でも土石流発生の恐れが出てきた』『もはや、何かあったら逃げる、という避難対策では安全性は確保できない』と指摘、住民の全面避難が緊急に求められていることを強く示唆した」（「長崎新聞」５月２７日）（図６）

図６．下鶴会長・太田所長の警告を報じる新聞記事（「長崎新聞」５月２７日朝刊より）

「全面避難が必要」

下鶴予知連会長ら警告

水無川流域と千本木地区

連続する火砕流発生などで水無川流域住民の全面避難の必要性を示唆する下鶴予知連会長（左）と太田九大島原地震火山観測所長 ＝九大島原地震火山観測所＝

【島原】火山噴火予知連絡会の下鶴大輔会長と九大島原地震火山観測所の太田一也所長は二十六日、島原市内の同観測所で記者会見。普賢岳の噴火活動について「二十四日から続発している火砕流は厳重な警戒が必要。噴火に伴う大量の降灰で、非常に大規模な土石流発生の危険性も高まった」と強く警告。住民の避難対策については「これまでのように勧告があったら避難するという態勢では十分ではない」として、周辺住民全面避難の必要性を示唆した。県と島原市は避難、防災計画の見直しを早急に迫られることになった。

【3面に写真特集、18、19面に関連記事】

発生→避難では遅い

記者会見の冒頭、二十四日から現地調査をしてきた下鶴会長が「普賢岳の火山活動に関する火山噴火予知連会長コメント」を発表。「火山活動は依然として活発で、今後とも火砕流、土石流が発生すると思われるので厳重に警戒する必要がある」と指摘した。

同会長は「前の火砕流の通り道を、次の火砕流が通ると、より速く、より遠くへ、滑るように流れる。二十六日午前十一時すぎの火砕流は火口から二・五キロ下方の民家近くまで到達したと

火砕流の危険
連の噴火に伴
山灰たい積が
溶岩だけでな
わったことで
発生の恐れが
た」と警告し

太田所長も
かに超えた大
降っている。
て降灰の方角
までのように
流域だけでな
本木地区でも
恐れが出てき
何かあったら
う避難対策で
保できない」、
の全面避難が
れていること
た。

火山活動情報

【島原】雲仙岳測候所は二十六日午後一時半、普賢岳の火山活動に関しこれまでの臨時火山情報と併せ、「火山活動情報」を発表した。

気象庁が出
中では最高ラ

十八日か
社会党の土
六日午後、
で帰国した。

長崎新聞
発行所
長崎新聞
長崎市茂里町３－１

長崎の家紋シ

No.92 丸に蕪付き茄
ナスは、昔は食用とい
薬用として用いられて
しい。紋の由来は定
ない。

火山学者のこうした警告は以後ずっと続き、たとえば太田所長の警告をざっと目につくだけならべても、５月２９日の山火事を起こした火砕流について「かなり高温だったようだ」（「長崎新聞」５月３０日朝刊）と以前にくらべ危険性が高くなってきていることを指摘しているし、３０日にもコメントを出し、「小規模の火砕流でも人命を含む大被害の恐れがある。危険は迫っている」と述べている。また、６月１日に「長崎新聞」のインタビューに対して、「火砕流の危険性に対する認識が甘いようだ」「長い目で警戒する必要がある」（「長崎新聞」６月２日朝刊）などと答えている。

さらに５月３１日には、火山噴火予知連絡会が統一見解を出し、そのなかでも火砕流と土石流の危険性を強調した。次は、それを報じる「東京新聞」の記事である。

「今後も厳戒必要　雲仙　マグマ活動依然続く　予知連が統一見解

長崎県雲仙岳の噴火の見通しについて、火山噴火予知連絡会（下鶴大輔会長）は３１日午後、東京・大手町の気象庁で開いた定例会合で観測データを検討した結果、『地震・地殻変動などの観測によれば、マグマの活動は依然として続いていると考えられる。今後も噴火活動が続き、溶岩の噴出、火砕流、土石流の発生が続くと思われるので厳重な警戒が必要』との統一見解を発表した。また、噴火の状況が予断を許さないので、今後は加茂幸介委員（京大防災研教授）が会長代行として現地で観測陣の総指揮にあたり、防災に必要なコメントなどを出すことになった．．．．．会合後の記者会見では、この火砕流の今後の見通しに質問が集中したが、下鶴会長、荒牧重雄委員（北大理学部教授）は『これ以上大きな規模のものが起きないとの保証はない』と語った。その理由として、今回の火砕流のメカニズムが、山頂に新たな火口が出来て地下からマグマが噴出したものか、突出してきた溶岩ドームが崩壊しているのか、まだ明確になっていないことや、溶岩の噴出量や噴出率も明確ではなく見通しを判断する必要な情報が十分でないことを挙げた。天候が悪いことや、火口に近づくのが危険なことも、観測を困難にしているという」（「東京新聞」６月１日朝刊）

５．行政・住民はどう対応したか

以上、長々と放送原稿や新聞記事を引用してきたように、火砕流発生当初はその危険性を押え気味に言っていた火山学者は、５月２６日のけが人の発生や２９日の山火事を直接のきっかけとして、今度はしばしば危険を警告するようになった。問題は、こうした警告が行政機関や住民にどう受け取られたかであるが、残念ながら、ほとんどの人がこれを深刻なものとは考えなかったようにみえる。

たとえば、島原市当局の場合はどうだったか。

前述のように、島原市では、それまでで最大規模の火砕流が起こってけが人が発生した５月２６日１３時５分、北上木場町・南上木場町・白谷町・天神元町・札の元町の５町（２５２世帯・１０９４人）に避難勧告を発令した。この避難勧告は当初、２９日までの３日間を想定していたようだが、２９日は火砕流が活発化し、山火事が発生する事

態になったため、そのまま継続されることになった。けれども、その3日後の6月1日午前7時、北上木場町と南上木場町を除く3町の避難勧告を解除したのである。

火山噴火予知連や九大島原地震火山観測所が厳重な警戒を呼びかけているさなかに、なぜ市は避難勧告地域を縮小したのであろうか。

結果からみれば、6月3日の大災害の被災者はすべて北上木場地区に集中しており、ここは危険地区として避難勧告を解除しなかったのだから、行政措置にはミスがなかったといっていい。しかし、隣接する他の3町が避難勧告を解除された後、北上木場町と南上木場町に立ち入る住民が増えたかもしれない、という声を現地で聞いたことも事実である。

新聞によれば、このとき、一部地域の避難勧告を解除した理由として市長があげたのは、「①解除した3町は傾斜が緩やかで比較的危険が少ない、②梅雨期を控え、土石流での今後の避難も予想され、避難生活が長期にわたるのは好ましくない、③土石流は現在、小康状態である」（「読売新聞」および「毎日新聞」6月1日の記事より）などであった。ここにあげられているように、こうした判断は、危険かどうかという評価に加えて、種々の社会的条件を勘案して行われる。おそらく、島原市の場合にも、5月15日から断続的に避難生活が続いている住民の苦悩を考え、できるなら家庭に戻してやりたいという心情が強く働いたのだと思われる。

とくに、地元の農家にとってこの時期は決定的に重要であった。たとえば、わたしが現地でインタビューした住民は次のように答えている。

「Q：市が避難勧告指示の地域を最初5町だったのを2町にしたというようなことで、（住民の方が）油断というんじゃありませんけれども、大したことないんじゃないかなというふうな気持ちになったということはどうでしょう。あまり関係ないですか。

A：ただ、メンタルな部分がどうしてもあるんですね。とにかく1週間とかずうっと避難でしょう。農家だし、つくっている野菜だとか葉タバコだとか、あるいは家畜だとか、行政に対してもういいんじゃないかというようなプレッシャーをかけると思うんですね。ですから、下のほうが解除になったのは1日ぐらいだったですかね。あれも、みなさんその前に入られておったし。野菜でも何でも、ずうっと成長しているわけですよね。そうしますと、そこで何らかの手をかけてやらないと育たないわけですから、そういういらだちはあったと思いますね。

Q：市の課長さんに、『市民から早く解除してほしいというような要望はありましたか』と聞いたら『あったようですね』というふうな言い方をしていましたけれども。市に直接は来なかったというような話はしていましたけれども、おそらくおっしゃるとおりで、ぼくも北海道の有珠山の調査をやったとき、昼間は自分の家へ帰って家財道具を取りに行くとか、あるいはちょっとした仕事をするとかして、夜は避難所に寝泊りすると、そんなようなパターンなんですが、この北上木場や南上木場地区の人もそういう人がけっこう多かったと考えていいんでしょうか。

Ａ：そうですね。ですから、住民も、避難というのに徹底してはなかったと思うんですね。うちもそうですけれども。わたしは消防団でずうっと出ていますから、大きな荷物は運べないで。軽の乗用車に積めるだけ。毎日１回ずつ取りに行ったり、考えてみればぞっとするような。その程度のことはみなさんなさっていたと思います。あと、葉タバコがちょうど収穫の時期というか、取り入れの時期なんですね。そうすると、芽をとめたりなんかする作業があるんです。そういうのも、時期を外せばもうどうしようもないわけですね。いろいろ災害に対する保険みたいなものが適用になるかならんかの瀬戸際ですから、みなさんやっぱり収入のことを考えますからね。もし、これで山がおさまって収穫がきちんとできなければ、これはどうもならんわけです。だから、やるだけのことはやっておかないと、もしおさまったときに収穫はできないだろうとか」

このインタビューにあるように、住民の生活面を考えると長期避難はなかなか困難なことである。もちろん、事態が切迫して危険が明白に感じられるような状況では、避難生活を継続させるにちがいないが、危険性は強いが大丈夫かもしれないという状況では、生活か安全かという問題はきわめて深刻である。

なお、わたしが聞き取り調査をした市の職員は、この避難勧告地域の縮小はある学者の意見を聞いて行ったものだと答えてくれた。つまり、（北上木場地区と白谷町の境にある）筒野バス停から下は危険性は少ない、という意見を参考にしたのだという。かれはその学者の名前を言わなかったが、おそらくこの人だろうと見当をつけてそのことを質問してみると、けっしてそんなことは言っていない、自分は筒野バス停から下も危険だが、それより上はとりわけ危ないと言ったのだ、とのことであった。

次に、地元住民は学者の警告をどう受け取っていたかをみると、放送や新聞で警告が何度もくりかえされているのもかかわらず、ほとんどの住民がそのことを知らなかったようである。

後で述べるように、地元の消防団などは、火砕流によって水無川上流に堆積物が積もり、それが大規模な土石流を生み出すのではないかと心配していたが、住民の大半は自分たちの目の前で発生している火砕流とはいったいどんな現象なのかを知らなかった。わたしが話を聞いた人たちの多くは、この珍しい現象が大被害をもたらすなどとは思ってもみず、それを見物の対象とさえ考えていた人も少なくなかったようである。

たとえば、大災害当日の６月３日、「朝日新聞」朝刊には次のような火砕流見物の記事が掲載されている。

「『火砕流見たい』　見物客どっと

大規模な火砕流などが続く雲仙・普賢岳のふもと、島原市の水無川周辺では、噴煙などをひと目見ようと、県内外から見物客が押しかけている。２日は日曜とあって、雲で山頂は見えなかったものの、付近は交通が渋滞するほどだった。

見物客が多いのは水無川中流にかかる国道５７号の水無川橋の付近。この日は特に多く約３０人が詰めかけ双眼鏡をのぞいたり、ビデオカメラを構えるなど、普賢岳や水無川をながめていた。熊本県や鹿児島県からやって来た人もいた」（「朝日新聞」

6月3日朝刊）

なお、この記事には「火砕流の噴煙を見上げる人たち」と題する写真がついており、見物客が１０人ほど映っているが、その現場は、後に警戒区域に設定され、9月１５日に大被害が起こった深江町大野木場地区である。この時期には、多くの人が何の危険も感じないで出入りしていたのである。

もちろん、珍しいもの見たさの見物客ばかりでなく、地域住民も同じことである。農家は、多少の危険があっても生活のために立ち入らねばならない事情があったが、そればかりではなかった。わたしが住民から聞いた次の話でも、そのことは明らかである。

「Q：やっぱり、火砕流っていったって、いったい何だって感じでしょう？

C：そうですねえ。

A：全然、知識がなかった。そういうお話も聞いてませんし。

Q：6月3日まで避難勧告が出てたわけですけど、やっぱり避難勧告だと昼間は家に帰っちゃう人がずいぶんいたわけですか。その頃は5つの町に出ましたよね、5月２６日のときは。それでも、仕事があるからとかいって家に戻る人もけっこういましたか？

A：はい、はい。地元の人は入れたですね。

Q：地元とマスコミと。で、太田先生からうかがった話によると、太田先生は２９日に山火事が起こって、これは大変だと思ったというんですね。火砕流が高熱化してきてると。ものすごい熱をもってきてるから、筒野のバス停より上は絶対入るなと。これを何度も市の災害対策本部に言ったんだけどなあ、といってましたけど。そういう話は、住民の方までは行ってないんですか。

B：知りませんでしたね。

A：全然知らん。はっきりいって、わたしも6月3日のときは帰りましたもん。

Q：なるほどね。

D：それに、火砕流の怖さを知らんですよ。ああ、今度のは大きか、今度のは小さかという程度で、見にいきよったもんね。本当は、Uさんが火傷した時点でですよ、あの時点でもし1人が犠牲になってれば、ちがったかもしれませんがね。いや、わたしは写真を撮りに行ったりもしましたけど、ああ、こんな小さいの何だと言うとったですけどね。小さかけん、もうちっと大きいのが来んかんねって、逆に思えて」

この証言は、一連の話の中から関連ある部分を抜き出したものだが、ここで率直に語られているように、多くの人々は火砕流の危険に対して無防備だったことがわかるだろう。

6．マスコミはどう対応したか

事情は取材にあたるマスコミも同じだった。前述のように、火砕流によって人的被害

が出た５月２６日以降、火山学者の危機感は急速に増していき、しばしば報道関係者にも危険を警告していたが、これを深刻なものと受けとった人は少なかったようである。「火砕流が多発するようになったが、（火砕流発生の当初、火山噴火予知連や気象庁が大した被害はないだろうと予測したという）先入観があり、紙面の上ではその恐ろしさを書きながら、実際には自分たちはそれほどのものと自覚していなかった」（「毎日新聞」７月３日朝刊）という新聞社デスクの心境が、もっとも典型的なものと思われる。

むしろ、２６日のけが人の発生は、報道関係者にとって、「火砕流は恐いものと聞いていたけれど、けがですむのか、たいしたことないではないか」と、火砕流を軽視する気持ちをもたせることになったといえるかもしれない。取材記者たちの座談会を載せたある雑誌には、そのへんのことが次のように書かれている。

「Ｑ：火砕流（の危険性）について（の意識）はどうでした。

Ｅ：お恥ずかしい話ですが、ほとんどといっていいほどありませんでした。

Ｑ：『ほとんど』ということは、少しはあったわけですね。たとえばどんなことが言われてましたか。

Ｅ：作業員が火傷を負ったときに、長袖のシャツを着ていた人はあまり火傷をしなかったということがあって、取材に出るときは、科学繊維を使ってない長袖のシャツを着ていけとか．．．

Ｂ：地面にうつ伏せになって、鼻と耳を押さえて３０秒から１分間息を止めて待てと。で、おさまってから逃げろと。そんな話でしたよ（笑い）。

Ｑ：なんだか煙をやり過ごすみたいな話ですね。

Ｃ：ですから、あんなに高温のものだという知識はなかったんです。

Ａ：下に逃げずに横に逃げろという話もありました。

Ｑ：それはどうしてですか。

Ａ：火砕流は下に向かってものすごいスピードで落ちてきますから、逃げるときは横に動いたほうがいいといわれていました。

Ｃ：いずれにしても、あまりに無知でしたよ。火砕流については」（「雲仙普賢岳の警告」『放送レポート』１９９１年９・１０月号４ページより）

つまり、火砕流も、うまくやりすごせば何とかなると考えていたわけで、一般人より新聞や放送に接する機会が多く、学者から危険を直接警告される立場にある報道関係者さえこうだったということは、いささか驚きである。

そのため、２６日以降も、火砕流の通った跡や溶岩ドームの近くまで立ち入る報道関係者も少なくなかった。たとえば、次は、２７日の某テレビ局のワイドニュースの一こまである。

「（Ｙ記者）水無川の下流におります。今日の島原地方なんですが、朝のうち雨が降っていましたが、それもあがりましてときどき晴れ間も広がりました。雨による土石流の心配はまったくなくなりましたが、噴火にともなうとみられる火砕流が今日は相次いで発生しました．．．（中略）．．．それでは、火砕流に悩まされています、この水無川の上流のようすはどうなっているか、Ｓ記者の報告です。

（Ｓ記者）え一、２時１１分です。噴煙が出ているようです。空に噴煙が見えます。道の両側全部焼けていますね。まったくここは草と木はあるんですけれども、緑は見えません。ちょうど上の山と対比するとよくわかると思うんですけども、もうひとつ向こう側の山はわれわれがよく見るちゃんとした緑色ですが、手前は本当にもう熱風で、みんなまるで枯れた森のようになっています。これが、要するに火砕流を検知するセンサーなんですけども、１回目の先週の日曜日のときですか、すでに１回切れてしまってここがこんなに曲がっています。え一、下のところまで来ました。あちち．．．今日は朝からの爆発にともなう煙がきています。それから下なんですけども見えますか。全部火山灰です。で、ものすごく熱いんです。こうやって、手を入れておけないんです。ええ、ほんとにこれ熱いんです。火砕流はこの上からずーっと、いま灰がたまっている川を通りまして、下流のほう、そうです、ここから２キロくらい下がったところに、いまわれわれが取材で中継を出しているポイントがあることになるんです」

このように、Ｓ記者は、大胆にも火砕流が襲ったばかりの現場に入って、中継しているわけである。ところが一方では、この同じワイドニュースで、その直後に、火砕流の危険性がイラスト付きで次のように説明されている。

「火砕流とは、火山の噴火で発生した高温のガスと火山灰や溶岩の破片などの粉状の混合物が、山の斜面を早い速度でなだれ落ちる現象のことです。この火砕流は、今回の雲仙岳のように、溶岩ドームをつくる火山に発生しやすいといわれています。雲仙岳の場合は、溶岩ドームが割れ、斜面を転がり落ちていく途中の溶岩のかたまりが割れて、ガスを放出。そのガスが、まわりの火山灰などを巻き込みながらなだれ落ちているものと考えられています。流れの早さは時速１００キロ、温度は摂氏１０００度近くに達することもあり、直撃を受けると人や家屋を吹き飛ばし、大災害を発生させることもあります。江戸時代の天明３年（１７８３年）には浅間山が噴火し、そのときの火砕流と土石流で１１５１人の死者を出しています」

この火砕流の説明は、熱風のすさまじさを強調している点で、大災害前の解説としてはすぐれたものだと思うが、それはさておき、一方では火砕流の危険を強調しながら、他方では記者がその危険地域から堂々とレポートしているこの矛盾は、いったいどういうことであろうか。後述するように、これは、火砕流の危険を一般的・抽象的にはわかっていながら、その危険を実感せず、まさか自分たちが火砕流に被害を受けるはずはない、と考えてしまう心理の現われと考えられるのである。

なお、やや偶然的であるが、この時期、火山学者が報道機関に対して行なった警告が誤解されて、結局、危険地域からの退去に結びつかなかったという出来事があった。

それは５月３１日のことだったが、７月３日の「毎日新聞」によれば、その経緯は次のようなものだった。

「３１日、（九州大学地震火山観測所の）太田所長は火口視察のためヘリコプターに乗った際、火砕流の先端から約２００メートル下に報道陣や住民がいるのを目撃し、市災対本部、島原署、長崎県島原振興局の３者に『マスコミなどが入っている。だれ

も入らせてはいけない』と伝えた。

これを受けて、市災対副本部長のＹ収入役は正午過ぎ、災対詰めの各社の記者に次のように要請した。『正午前に太田先生から連絡があった。傾斜計が普段と違うので、筒野バス停から上には絶対に入らないようにしてほしい』

記者からこの報告を受けたデスクは『傾斜計の数値が普段と違う』という内容に注目、太田所長に直接確かめるよう指示した。記者の電話取材に対する太田所長の返事は『おかしな数値が出た訳ではない。マスコミが山に入ると、住民も（安全だと思って）入るから、入ってほしくない』というものだった。

『山に何か異変が？』と心配していたデスクは『何だ、そんなことか』と一時の緊張が解けたような気がしたという」（「毎日新聞」７月３日朝刊）

わたしが現地で聞いた話でも、太田所長は災害前にしばしば取材記者に危険を強調していた。この日も、危険地帯に人がいるのを目撃し、さらに観測データに変化も見られたことから、筒野バス停より上に入ってはいけないと警告した。けれどもこの話が、収入役を経て、データに異常があるから入ってはいけないと、より切迫した形で伝えられたため、「異常」とはどういうことかと記者たちに質問され、あらためて「変化」と言い直したということである。また、ある放送局によれば、データに異常があるというこの情報は、住民が避難している避難所にも放送で流され、これを聞いた記者から島原市内にある前線本部に連絡が来たともいう。

こうした情報の齟齬があったため、その後、報道機関に対する警告がしにくくなったとしたら、これは不幸な出来事といわねばならない。

3．大惨事が起こった！

1．大火砕流の発生

そしてついに、6月3日午後4時頃、普賢岳東斜面の地獄跡火口からいままでで最大規模の火砕流が発生し、43人もの死者・行方不明者を生じてしまった。

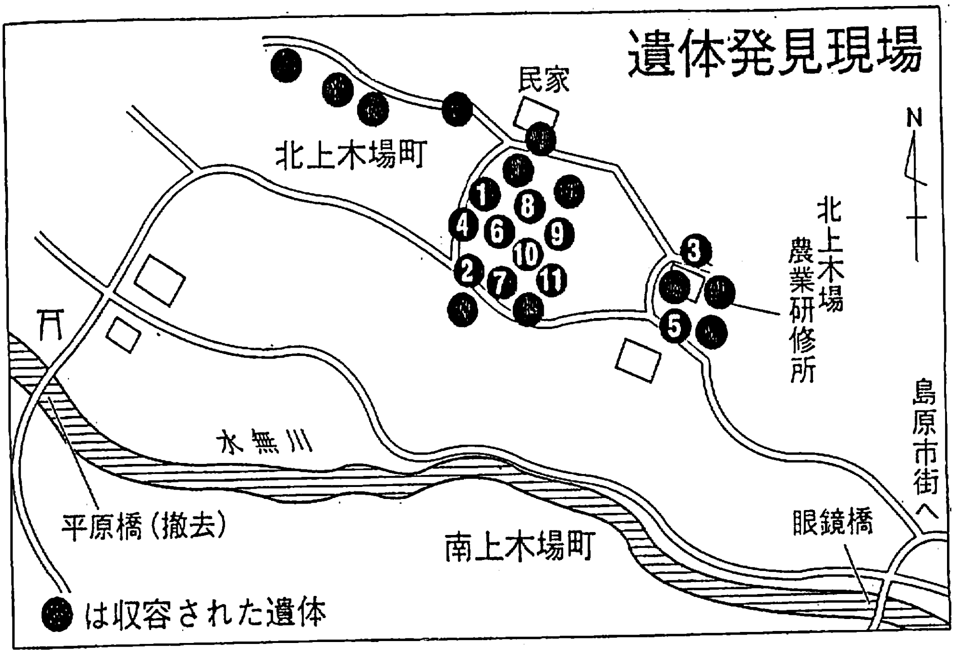
振動波形データなどからみると、大勢の犠牲者を出した火砕流は、4時9分から14分までの6分間ほど続いたと考えられるが、このときの火砕流は天をつくほどの黒煙とともに、ものすごい勢いでかけ下って、約5キロ離れた島原市白谷町まで達し、北上木場町の民家30軒を焼いたほか、一瞬にして警察・消防関係者や住民、報道陣などの命を奪ったのである。

死者・行方不明者の内訳は、報道関係者16人、取材のため臨時にチャーターされたタクシー運転手4人、警察官2人、消防団員12人、外国人3人となっており、残りは住民であった（表2）（図7）。住民のなかには、農作業中に被災したケース、たまたま一時帰宅して被害にあったケース、選挙ポスターの撤去中に遭難したケースなどがあったが、今回の災害のもっとも大きな特徴は、警戒にあたっていた警察・消防関係者と、火砕流を取材中の報道関係者の被害が大きかったことといえよう。これらの犠牲者はすべて、島原市が避難勧告地域として指定していた北上木場地区より山側にいた人々だった。

表2．大火砕流による死者・行方不明者の内訳

報道関係者	新聞社 放送局 フリー	5人 10人 1人
消防団員		12人
警察官		2人
住民		6人
タクシー運転手		4人
外国人		3人

図７．火砕流による遺体の発見場所（「西日本新聞」６月６日朝刊より引用）



当時、多くの報道関係者は、火口から４キロ、水無川から２００メートル離れた高さ４０メートルほどの高台に陣取っていた。ここからは普賢岳が真正面に見え、また小高い位置にあるため、火砕流と土石流から比較的安全なように思えた。そこで、火砕流発生以後、自然発生的に各社が集まるようになり、報道関係者はここを「正面」とか「定点」とか呼んでいた。３日午後４時頃の火砕流は、まさにこの「正面」を直撃したのである。

また消防関係者は、ここから２００メートルほど下った農業研修所にいた。すべて地元の消防団だったが、後述のように、火砕流発生後かれらはいったん白谷町に退去していたが、災害前日の２日、ふたたび北上木場に引き返し、不幸にして被災してしまった。

一方、警察関係者は大火砕流発生直後、現場にいる人々に避難の呼びかけをするため北上木場に入り、パトカーのなかで火砕流に襲われてしまった。さらに、被災した外国人のうち２人は、火山に造詣の深いフランス人写真家、もう一人はかれらに同行したアメリカ人火山学者だった。

翌日の新聞から被害現場の状況を再現すると、このときの火砕流がいかにすさまじい

ものだったかがよくわかる。

「しゃく熱の灰　山腹一気　雲仙岳最大の火砕流　人と家ひとのみ　５００度、電線溶ける

雨雲を突いてわき起こった巨大なきのこ雲が一気に山のふもとまで広がり、住民と人家を襲った。３日、これまでで最大級の火砕流を引き起こした長崎県・雲仙岳。黒い煙に覆われた島原市内をパトカーや消防車がけたたましくサイレンを鳴らして、負傷者を次々と運ぶ。１日に一部避難解除が出たのもつかの間、再び付近住民は避難所へ。大きなキバをむいた『火』の恐怖におののくばかりだった。

午後３時すぎから頻発し始めた火砕流。島原市内の上空に黒い雲が広がる中、４時ちょうど、普賢岳のふもとの水無川流域に『ドドーン、ドドーン』という大きな音が鳴り響き、真っ黒な煙が一気に山腹を駆け下りた。続いて、頂上から３キロほどの北上木場付近で、『バリバリ』という音とともに大きな火柱が上がった。

火砕流は高熱のガスや噴煙を巻き上げながら時速１００キロを越す猛スピードで、民家をのみ込み、逃げまどう人に襲いかかる。温度は５００度から６００度に達する熱そのものだ。被害にあっている人々は、家の様子を見にきた住民や防災活動にあたる消防団員らだ。

普賢岳、地獄跡から熱風とともに噴き出した火山灰が北上木場、南上木場両地区の段々畑を真っ白に覆う。まるでセメントをまいたようだ。あちこちの民家から火の手が上がった。道路にはあちこちに人が倒れている。消防団員Ｓ．Ｈさん（２６）も一瞬のうちに道路にたたきつけられた。Ｓさんはこの日が当番日。火砕流の発生に備え、北上木場農業研修所前で双眼鏡を手に山を監視していた。『ドーン』という音がした瞬間には道路に倒れ、体の上に高温の灰が容赦なく振りかかった。別に消防団員が駆け付けたが、すでに意識もうろうの状態。『水を』とただ一言言うのがやっとだった。

火砕流は普賢岳の頂上から約４キロの地点にかかる眼鏡橋付近まで迫った。現場付近で取材中のテレビカメラマンら十数人がけがをして救急車で運ばれた．．（後略）」

（「東京新聞」６月４日朝刊）

「襲いかかった炎の津波　宙に舞い火を噴く車　放心負傷者にホースの水

火砕流の発生当時、島原市北上木場、南上木場両町では、避難所から一時帰宅した一部住民が、農作業や家の片付けをしていた。消防団員は水無川流域で山や川の動きを監視、報道関係の記者やカメラマンも小高い丘で取材を続けていた。午後４時。谷間の杉林をのみ込みながら襲いかかってくる黒煙に、『逃げろ』『危ない』との声が飛び交う。しかし、その声も一瞬にしてかき消された。

炎が斜面をメラメラと燃やしながら迫ってくる。周りでは、住宅が次々に炎に包まれた。路上に止めてあったトラックや乗用車が宙に舞い上がって地面にたたきつけられ、四方に飛び散って火を噴く。硫黄のにおいが一帯に充満し、路上に倒れた人もいる。だが、現場に向かおうとしたパトカーや救急車も、容易に近づけない。

北上木場町から約８００メートル東の国道５７号線にもその瞬間、大量の火山灰が降り注いだ。市西部にそびえる眉山が黒い煙で完全に覆われた。国道から北上木場町

図8. 6月3日の大惨事を報じる記事（「読売新聞」6月4日朝刊より）

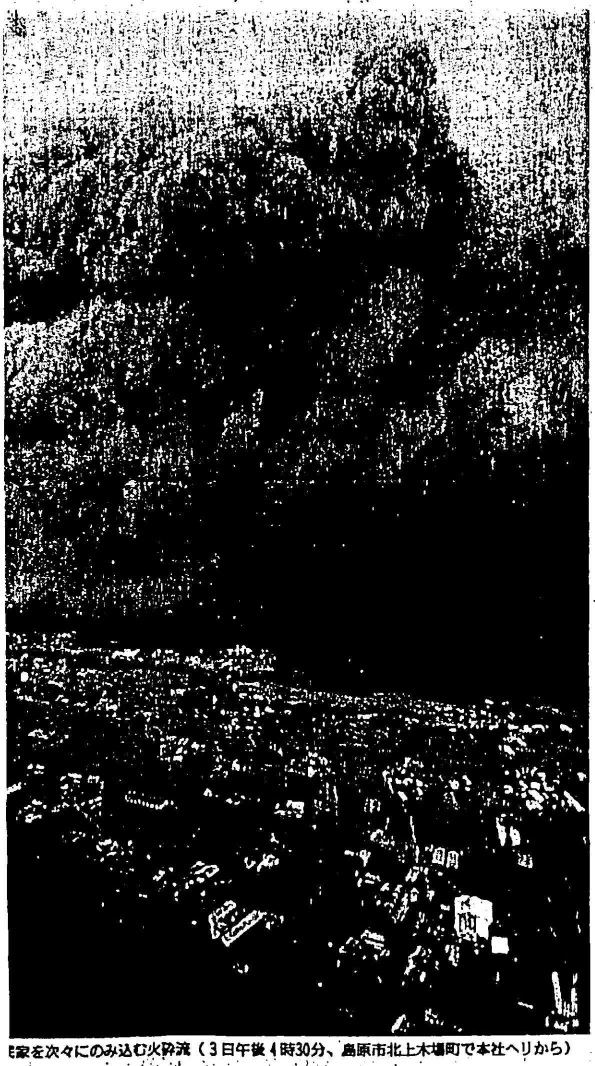
読　売　新　聞　社会　（第三種郵便物認可）

襲いかかった炎の津波

雲仙大火砕流

報道の最前線を直撃

史上最多の不明者　「用心せよ」無線絶え



民家を次々にのみ込む火砕流（3日午後4時30分、島原市北上木場町で本社ヘリから）

山上から襲いかかる噴煙と熱風、炎を上げて燃える家々。多くの報道陣も炎熱地獄の中にのみ込まれた——。三日午後、長崎県島原市、深江町をのみ込んだ雲仙・普賢岳の火砕流は、ふもとの集落を一瞬にして破壊した。四日午前一時現在、行方不明の報道関係者は十四人、同行したとみられるタクシー運転手四人とも連絡がとれない。市街地に救急車やパトカーが走り回り、病院で全身にやけどを負った負傷者の泣き叫ぶ声が響く。夜に入っても、捜索、救出活動は遅々として進まず、自然の猛威の前に、なすすべもなかった。

大規模火砕流の発生で、現地で取材活動に当たっている報道関係者らが多く行方不明になっている。過去、大規模災害などでも、これほど多数の報道陣が行方不明になったことはなく、安否が気遣われている。

このうち、読売新聞大阪本社写真部の田井中次一カメラマン(五三)はこの日午前六時半、島原市中心部の取材前線本部から北上木場町の取材ポイントに向かった。同地点は、水無川から約四十㍍高いタバコ畑で、地獄跡火口から東側斜面にかけての火砕流の流路を真正面にとらえることができる場所。これまでの火砕流の先端からはかなり離れており、しかも火砕流は川沿いに下っていたため安全な所として、常時、マスコミ各社のカメラマン二十人前後が待機している。

同カメラマンは、午後一時四十五分と同三時七分の二回、取材前線本部と携帯無線を持っている同僚記者、カメラマンに「小規模の火砕流が発生」と無線連絡。さらに午後四時ごろ、「今度の（火砕流）は大規模です。用心して」と交信したあと音信を絶った。

上空を飛行中だった本社ヘリが、約三十分後、現場付近を上空から捜索したが発見できないまま。田井中カメラマンがチャーターし、現場付近で待機中だった小嶺タクシーの立光重蔵運転手(三九)とも無線連絡がとれていない。

に上がる県道との交差点は救助に向かおうとする消防、警察の車と、逃げる住民の車で大混乱。交通整理する８人の警察官は『国道を走るな。まっすぐ海の方へ逃げろ』と怒声を上げる。

交差点近くのガソリンスタンドで、服が焼け真っ黒になった男性が座り込んだ。従業員が頭からホースで水をかける。従業員が『大丈夫か』と問いかけると、男性は『ウン、ウン』とうなずくのがやっと。約５分後、ガソリンスタンドに到着した救急車に自力で乗り込んだ。座り込んでいたところには、燃えつきたズボンのベルト部分が落ちていた。

午後４時半。県道を走ってきた軽トラックの荷台に、全身が真っ白になった２人が横たわっている。顔にやけどを負い、硬直した手が黒い空を指していた．．．」

（「読売新聞」６月４日朝刊）（図８）

ここには、火砕流が流れ落ちた瞬間の状況がリアルに描写されているほか、たまたま目撃した被災者のようすも書かれている。

また、書類をとりに農業研修所近くの自宅に戻っていて火砕流に襲われ、火傷を負ったＨ．Ｙさんは次のように語っている。

「ドカンというような音がしたもんだから、玄関の戸を少し開けたら（火砕流が）なかにブワーと入り込んで来て、逃げきらんかったですよ。それから、玄関の壁に打ち当てられたときに、今度は２階のガラス窓を突き破って上からドスンと入ってきて、天井を撃ち破って中に入ってしまったですよ。で、逃げ場所を失ってしまってさまよったときに、毛布があったですよ。その毛布を一時かぶったですよ、家のなかで。で、しばらくしたら玄関を出て、今度は明るいほうに走ったですよ。暗いほうは砂があるってことがわかってましたから。明るいほうに走って行ったら、そこも火山灰がいっぱい積もってたですよ、どのくらい積もってたかわからんけど。それで、足はドボドボ突っ込んで走らにゃいかんでしょ。足が焼けてもしかたない、急いで逃げることだと．．．」（「ＮＨＫニュースセンター特集」６月４日より）

このようなすさまじい火砕流によって、大量の犠牲者が生まれてしまったわけである。けれども、火砕流が続発する危険があって現場に足を踏み込めなかったため、災害当初は、こうした被害の実態がなかなかつかめなかった。今回の災害報道のむずかしさを象徴しているような気もするが、当時のテレビ放送をあらためて見直すと、被害情報の把握が遅れているようすがはっきり示されている。

たとえば、災害からほぼ３時間を経過した時点での、ＮＨＫ「７時のニュース」は被害の状況について、

「今日午後４時９分頃、雲仙岳で大規模な火砕流が発生し、黒い煙を巻きあげながら火口の東側の斜面を水無川沿いに駆け下りました。この火砕流は、火口から５キロ下の水無川中流の島原市白谷町まで達し、水無川の近くにいた人たちが次々と火砕流に巻き込まれました。島原市の災害対策本部のまとめによりますと、これまでに確認されただけでも合わせて１７人が火傷やけがを負い、近くの島原温泉病院など島原半島内の病院に運ばれて、手当を受けています」

と伝えている。

ここでとくに注意すべきなのは、報道関係者の被害について一言も報道されていないことであろう。ＮＨＫではカメラマンとライトマンの２人が被災しており（当時は重態。後に死亡）、またおそらく相当な数の報道関係者が災害現場にいたことを知っていたはずであるが、このことにはまったく触れていない。なお、番組の最後にけが人の名前を読みあげており、そのなかにはＹカメラマンの名前があるが、このときはまだ年齢・職業は空欄となっている（なお、ＴＢＳはこの日、午後６時からの「ニュースの森」のなかで、ＮＨＫのカメラマンが負傷したことを伝えている。おそらく、これが報道関係者の被災を報じた第１報であろう）。

また、午後８時４５分からスタートしたＮＨＫ「ニュース・センター特集」では、番組冒頭で「雲仙岳でついに恐れていた事態が起きてしまいました。今日午後４時過ぎに発生いたしました大規模な火砕流はふもとの集落にまで達しまして、これまでにわかっているだけで２０人の方々がけがをしました。また、現場にいたとみられています警察官など１８人といまだに連絡がとれていません」と放送した。負傷者の数は１７人から２０人に増え、かつ１８人の行方不明者が出ていることが新たに追加されているが、ここでも、マスコミ関係者の大量被害については触れられていない。そして、番組途中の９時２０分頃、病院に収容された負傷者の氏名を読みあげたとき、数人のカメラマンの名が放送され、また９時３０分頃、女性アナウンサーが

「島原警察署が今夜８時半に発表した、連絡がとれなくなっている方は２１人いらっしゃいます。このうち報道関係者は日本テレビが２人、長崎の民間放送のＫＴＮが３人、読売新聞が１人、テレビ朝日が３人、日経新聞が１人、毎日新聞が３人．．．」

という情報を読みあげ、ここではじめて報道関係者が大量に被災したかもしれないことが明らかになるのである。

２．被害はなぜ起こったかー背景的要因

ところで、今回の災害では、どうしてこんなに大量の犠牲者が出てしまったのだろうか。もちろん、火砕流の規模がだれも予想しなかった規模に達したことが最大の要因であることはまちがいないし、また不幸な偶然が重なったという事情もあるだろう。

たとえば、もしこの大火砕流が夕方でなく、真夜中に発生したらどうだったか。当時は多くの人々が北上木場地区に立ち入っていたが、夜には島原市内に戻っていたので、おそらく被害はずっと少なかっただろうと思われる。また、これが夏の初めでなく、冬に起こっていたらどうだったか。北上木場地域にはタバコ農家が多く、５月から６月にかけては、タバコ農家にとって決定的に重要な時期だったという。だからあえて危険地域に入ったのであり、これがもし冬だったら、あるいは違った結果になったかもしれない。さらに、災害のあった３日以前の数日間は、火砕流がやや小康状態を保っており、行政や住民のあいだに安心感とか気の緩みのような心理があったようである。前述のよ

うに、災害２日前の６月１日、島原市は避難勧告地域をいままでの５町から２町に縮小したが、いろいろな理由があったにせよ、その背景に、ひょっとしたら火砕流はこのまま沈静化するのではないかという期待がなかったとはいえないだろう。

けれども、今回の災害を単に不幸な偶然とみなすだけでは問題が残る。

なぜなら、前述のように、犠牲者はすべて危険地域として避難勧告が出されていた場所で被災したのであり、逆にいえば、避難勧告措置が厳密に守られていたならば防げたはずの被害だったからである。

大災害当日の夜、緊急記者会見した下鶴大輔会長は、冒頭、５月３１日にいまより規模の大きな火砕流が出ないという保証はない、と申し上げたはずだと述べ、「かなり上流のほうに人が入るということは危険だ、危険だと思っておりました。ただ、われわれ予知連絡会としては何も規制できないわけですね．．．ですから、十分警戒する必要があるということばのなかで、それを汲み取ってほしかった」と沈痛な表情で語っているが、犠牲者にはまことにお気の毒だけれども、いろいろな理由から警告を無視して危険地域に立ち入ったことが、被害をここまで大きくした理由といえよう。

では、これらの人たちはどうして危険地域にあえて立ち入ってしまったのだろうか。

もちろん、それにはさまざまな理由があった。たとえばタバコ農家の人たちには、前述のような生活上の切迫した理由があった。わたしが現地で聞いた話では、そのへんの事情が次のように語られている。

「Ａ：あの周辺はタバコ耕作農家の方がたくさんいらっしゃいますね。タバコというのは、あの周辺では唯一の換金作物ですね。で、やはりちょうどタバコの芯をとめる時期なんです。それをしなければ、タバコの収穫が悪くなる。そうすれば、おのずから入ってくる金も少なくなるということで、その心配でお入りになった方もけっこういらしたんじゃないでしょうか。数えてはおりませんけども。

Ｑ：なるほどね。

Ｄ：まあやっぱりタバコですね、唯一の収入源ですから。あれが１日遅れていたら、ちょっと大変だったと。といいますのは、上木場が避難区域になってたもんですから、作業が出来なかったんで、遅れてるわけですね。それで、下の地域の人がみんなお手伝いにということになってたんです。ですから、あくる日はどこにいますとか、上木場のステッカーがないと登れないとかいうような話があったんですよね。ですから、もし１日ズレてれば、あすこには安中のタバコ耕作組合の人がみんな上木場にいたですね。そうすると、それこそものすごい人数の人が災害に遭ったんじゃないかなと。

Ｑ：タバコ耕作者の方々は、北上木場と南上木場だけじゃなくて、ほかにずいぶん大勢いるんですか、安中地区とか？

Ｄ：そうですね。その家族の方々がみんな手伝いに登られる予定になってたんです、次の日は。

Ｂ：ウチの甥もタバコをやってるんですが、１５日に土石流が出まして、自分の家に全然帰ってこないわけですよ。だからもう遅れちゃうわけですね。やはり消防

団の方々や亡くなった方々は、本当にタバコだけつくってましたからね。
C：亡くなった消防団の方は、みんなタバコ耕作者ですよ。だから、5月15日からほとんど家にも帰らずにいたわけです。で、タバコは芽を止めとったら、何割か知らんけどちょっとは良くなる。だから、早く止めようと。そうせんと、タバコが金にならんということですね。とくに、亡くなったのは農家の方ばっかりですから、全部タバコを作ってる人ですから、亡くなった人は。だから、15日からずっといて何も出来ない状態だったから、じゃあみんなで手分けしようということになったんです。
Q：それは4日だったわけですか？
C：4日にやる予定だったんです。
B：わたしも素人ですからわかりませんけども、養分が、花が咲いたらそっちのほうへ行っちゃって、葉っぱのほうに行かないから、収穫は少なくなっちゃうんですね。で、消防団員でなくて、タバコ作ってる方はもっと早く芽を止めたんですけど。
Q：芽を取っちゃうんですか？
D：途中から切るんですよ。で、養分を他のほうにやるわけです。タバコだけが1年分の収入源ですからね、生活がかかってますから」

この話のなかには、もし大火砕流が1日遅れて起こったらもっと大きな災害になったかもしれないこと、災害が死亡した消防団員はすべてタバコ耕作者だったこと、などが語られている。しかし、かれら消防団員にはまた、消防団員として危険地帯にあえて立ち入らねばならない別の理由があった。

そのうちもっとも大きな理由は、土石流であった。

前述のように、普賢岳に火砕流が発生しはじめたのは5月24日のことであり、それから10日後に大火砕流災害が起こるわけだが、この間、火砕流だけでなく土石流の危険も常にいわれていた。たとえば、次にあげるのは、6月2日の「西日本新聞」の記事である。

「<u>土石流の危険増大　雨期到来　一段と緊迫　普賢岳・水無川　長期的な監視体制に</u>

『いよいよ雨期がきたか』ー九州北部が梅雨入りした1日、雲仙・普賢岳（長崎県島原半島）の火山活動に神経をとがらせている島原市の災害対策本部には、雨による土石流の可能性が高くなるため一段と緊迫した空気が流れた。避難住民たちも、避難勧告を解除された一部がこの日、6日ぶりに帰宅したものの、雨と噴火次第では再び避難生活を強いられる。住民たちの平穏な日々は遠い。

火砕流の続発で、水無川上流の谷間にたい積している100万立方メートルもの溶岩塊。怖いのは、この溶岩塊が雨で周囲の石とともに流れ下る土石流だ。

現在、水無川流域は地元消防団員100人が監視している。災害対策本部は今後、眼鏡橋、白谷橋など水無川流域の4－5ヶ所を監視ポイントに設定。団員が疲労しないように、5班に分けてローテーションを組み、長期的な監視体制を取る。今月上旬には上流に監視カメラを設置する予定だ。

しかし、これまで土石流をいち早くキャッチしていたワイヤ製センサー（感知器）は、２基とも切れたまま。万一火砕流が発生した場合、作業員が巻き込まれる恐れがあるため、再設置ができない状態だ。地元住民の間には『人間の目には限界がある。やはり信頼できる機械を早く設置してほしい』との声が強い」（「西日本新聞」６月２日朝刊）

ここに書かれているように、まさに大災害の直前まで、火砕流と土石流はいつもセットであげられていた。むしろ、当時の記事をみるかぎり、火砕流はそれ自体で大災害を及ぼすというより、火砕流によってたまる堆積物が土石流の引き金になることがもっと心配であるような印象を受けるのである。そして当時、消防団や住民の多くは、火砕流も危険だが、土石流のほうがもっと危険だと考えていたといっても決して過言ではあるまい。

前にもちょっと触れたように、地元の北上木場消防団（１３分団）は、火砕流が激しくなった２９日、いったん水無川下流の白谷公民館まで下がっていた。けれども６月２日、ふたたび北上木場の農業研修所に戻ってしまう。

その大きな理由は、先の新聞記事にもあるように、ワイヤ・センサーが切れてしまって、土石流の発生を消防団自身で監視するためであった。当時の事情について、ある住民は「消防団の方もそれから一般の人もほとんどが、火砕流が人家まで３００ｍぐらいに届きながら、やはり土石流の心配をしてました。まあ数字でいえば、土石流の心配が７～８ぐらいで、火砕流の心配は２か３ぐらいじゃなかったでしょうか」と語っている。

けれども、消防団があえて危険な北上木場地区に入って行った背景には、ほかにも理由があった。以下は、ある消防団員との会話である。

「Ｑ：これが消防団の方が被害に遭った研修所ですね。ですけれども、それを一度下に下げたと。

Ａ：上のほうに１３分団の詰所があるわけです。その時点から、白谷町の公民館まで下げたんです。これはおそらく５月の終わりごろです。いちおう下げた時点で、マスコミ関係とかそういうものが入っていましたんで、で、いろんな問題も出てきましたんで、われわれ団員の総意で、少し地元というか。１３分団というのは結局上木場町の分団です。ですから、地元だから、地元の研修所でやろうと。分団の詰所よりも、研修所のほうが川からすればだいぶ高いわけです。結局、まだ火砕流なんていうことは頭になかったから、高ければ土石流も何とかなるだろうと。それはもうみんなが地元に置いたほうがいいということで、本部からも異論はあったんですけれども、せっかくここまで下がってきたのに何でまた上に上がるんだというふうな異論はあったんですが、みんながこっちのほうが監視がしやすいということで上に上がったわけです。

Ｑ：これは川の監視と、それから、さっきお話しになったマスコミの方がいろいろと問題的なことをやるんで、両方の監視という意味ですよね。

Ａ：それと、住民も家財道具を運び出したりするんで、監視をしておったわけです」

つまり、この話のなかには、土石流警戒という理由のほかに、自分の地域は自分たち

で守るという気持ちがあったこと、マスコミ関係者とのあいだにトラブルがあって、それが北上木場にふたたび登っていくきっかけになったことが示されている。

ここで、マスコミ関係者とのトラブルというのは、東京の某テレビ局が、避難者の留守宅から電源を無断借用したという出来事である。6月3日の災害当日、「長崎新聞」に掲載された記事によれば、それは次のような出来事だった。

「避難宅の電源を盗用　島原署　Bテレビに厳重注意

雲仙・普賢岳の噴火活動で住民の避難が続いている島原市北上木場町で、無人となった民家の電源をBテレビ（東京都千代田区）の取材スタッフが無断で使っていたことが分かり、島原署は2日、同社の現地取材責任者を呼び、窃盗、住居侵入の疑いもある、と厳重注意した。

同署の調べによると、同町の会社員Aさん（37）が1日午後1時ごろ、荷物を取りに自宅に戻ったところ、玄関横にある差し込みから無断でコードが引かれ、電気機材の電源に使われていた。機材からはケーブルが延び、水無川の無人カメラにつながっていた。Aさんは機材に張ってあった名刺からBテレビに『勝手に敷地内に入って電気を使うとはあまりにも非常識』と抗議。同社は同日夕、撤去した。

同署によると、避難住民からは電源の無断使用のほか『カギのかかっていなかった家に入り込んで電話を使った』『縁側に上がって寝転んでいた』など県外マスコミに対する苦情が相次いでいる。

北上木場町自治会長のK．Tさんは『Aさんは避難するときブレーカーを切ったと話しており、室内に入って電気を入れて無断使用したとしか思えない。長期の避難でくたくたになっている住民の心を逆なでする行為で絶対に許せない』と怒っている。

Bテレビ現地取材班のN．Y社会部デスクは『無人カメラは先月25日ぐらいから設置した。断わりのメモも残していたが、Aさんを探し出せなかった。全く申し訳ない』と話している」（「長崎新聞」6月3日朝刊）

わたしが当事者から直接聞いた話ではないが、後に伝聞したところでは、このテレビ局は、5月29日、普賢岳を24時間監視するため無人カメラを設置しようとしたが、道路が狭くて電源車が入らなかった。しかし、Aさん宅からなら電源が使えると考え、Aさんに電源使用の許可を得ようと、消防団員などに避難先を聞いて回った。だが、長崎市内の親類の家に避難しているらしいとの情報を得たものの、その住所はわからなかった。翌日もAさんの避難先を探したがわからなかったので、断わり書きを壁に貼ってから、コンセントに電源を接続して使用したという。ところが6月1日、たまたまAさんが荷物をとりに帰宅したので、カメラマンが事情を説明して了解を求めたが、聞き入れられなかったという。

こういう事情を考えると、「盗用」というほどの悪意があったとは思われないし、ひょっとしたら電気を無断で使われた住民とのあいだに、意思疎通に欠けるような出来事があったのかもしれない。それはともかく、この場合、Aさんの避難先を徹底的に探して了解を取った後に電源を使用するか、どうしても見つからなければ別のポイントを探すか、あるいは無人カメラの設置そのものをあきらめるべきだったろう。

この出来事がなかったら消防団員が北上木場に入らなかったかどうか（しかし、住民のなかにはマスコミのせいで消防団が犠牲になったという声も少なからずあった）はわからないが、このことが単にＢテレビだけでなく、マスコミ全体に対する住民の怒りと不信を買い、その感情がかなりの長期間にわたって続いたため、報道関係者への風当りは非常に強かったのであった。

３．被害はなぜ起こったかーマスコミの取材と報道

次は、報道関係者の被害について触れねばならない。ただし、わたしどもは、別に普賢岳噴火における災害報道のレポートを発表する予定なので、ここでは要点だけを議論するにとどめたい。

今回の災害では、カメラマンを中心とした、報道関係者の犠牲が非常に多かったのが一つの特徴である。犠牲者は、新聞社が５人（毎日新聞３人、読売新聞・日経新聞各１人）、テレビ局が１０人（テレビ長崎３人、日本テレビ・九州朝日放送・ＮＨＫ各２人）、フリーカメラマンが１人の計１６人、それから、報道機関に臨時にチャーターされたタクシー運転手４人も死亡した。死者は合計２０人になる。

報道関係者が犠牲になった災害は過去にもいくつかあって、まだ記憶に新しいものとしては、１９７１年１１月、国立防災科学技術センターが行なったガケ崩れ実験に巻き込まれ、マスコミ関係者４人が死亡した事件や、１９８０年８月、静岡駅前地下街のガス爆発の巻き添えになって、マスコミ関係者１１人が負傷した事件などがあるが、今回の災害は、それらをはるかに上回る被害となった。

では、なぜこんなに多数の報道関係者が被災してしまったのだろうか。

いわば身内の大被害ということもあって、その理由については、災害直後からさまざまな議論が新聞紙上に現われた（しかし、一部の番組をのぞいてテレビではあまりこの問題が論じられなかったような気がする。これはどうしてだろうか）。もちろん、前にも述べたように、なぜ大量の被災者が出たかということは、なぜ多くの報道関係者が、避難勧告地域に指定されていた北上木場地区に立ち入ったかということと深く関係しているのだが、こうした議論のなかでは各種各様の理由があげられている。どうもうまく整理できないが、それを思い切って単純化すると、

（１）被害を不可抗力とみなすもの

（２）被害の理由をマスコミ以外の他の組織に帰するもの

（３）被害の理由をマスコミ内部の問題に求めるもの

の３つに大別できるだろう（表３）。

このうち（１）は、

①火砕流の予知は現状では困難であり、まさか取材現場まで大火砕流が襲ってくるとはだれも予想できなかった

というのが、その典型である。

また、（２）の理由はいくつかあって、

①気象庁や火山噴火予知連絡会が火砕流発生当初その危険を過小評価したため、報道関係者はその認識を災害当日まで持ち続けてしまった

②災害前の６月１日、島原市が避難勧告地域を一部解除したため、報道関係者にも住民にも気の緩みのような感情が広がった

③島原警察署の立ち入り規制が徹底されず、なかばフリーパスのようなかたちで危険地域に入れてしまった

などである。

そして、（３）の理由としては、

①当時梅雨期に入ったこともあり、火砕流よりも土石流の危険のほうに報道関係者の関心が向いていた

②報道関係者のあいだに火砕流の危険に対する認識が乏しかった（５月２６日にけが人が発生したが、これはむしろ火砕流を甘くみる方向に作用してしまった）

③現場には外国人火山研究者が入っていたので、自分たちも大丈夫だと思った

④火砕流の迫真的なシーンをより近づいて撮影しようという職業意識が災いした

⑤マスコミ同士の加熱した報道競争が背後にあった

⑥危険地域で取材するための危機管理体制・安全対策が不十分だった

などがあげられている。

さきにも述べたことであるが、もちろん、（１）にあるように、火砕流が予想を超える規模に達したことが被害の最大の理由であろう。これは、報道関係者ばかりでなく、他の被災者全部にいえることである。しかし、けっしてそれだけではなかったことも強調されねばならない。

また、（２）であがっている理由については、前の章でくわしくみてきた。たしかに、ここであげられているような原因もなかったとはいえないだろう。

しかし他方、（２）の①、つまり“①気象庁や火山噴火予知連絡会が当初その危険を過小評価したため、報道関係者はその認識を災害当日まで持ち続けてしまった”ということについては、火山学者は５月２６日以降は危険をしきりに強調したのだし、②、つまり“災害前の６月１日、島原市が避難勧告地域を一部解除したため、報道関係者にも住民にも気の緩みが広がった”という理由については、災害当日にも問題の北上木場地区は依然として避難勧告地域だったのだし、③、つまり“島原警察署の立ち入り規制が徹底されず、フリーに危険地域に入れてしまった”ということについては、報道機関は自分の責任であえて危険地域に立ち入っているのであって、たとえ規制が緩かったとしてもそれが自らの行為を正当化する理由にはならない、などという反論も成り立つのである。

そこで、重要なのは、（３）ということになる。当然ながら、ある出来事が起こった理由として、これこそ唯一のものだ、と断定できるようなことは少ない。むしろ、いくつかの理由が複雑に絡み合ってある出来事が発生した、と考えたほうが合理的な場合が圧倒的に多いだろう。それは、この場合も例外ではないと思われる。そこで以下、（３）

の理由について順次触れ、ところどころに私見をはさむというかたちで進んでいくが、このうち（３）の②と③、つまり火砕流への認識の欠如と外国人火山研究者の存在については、次の節で述べることにする。これは、災害心理が絡んでいて、独立に議論する価値があると考えるからである。

表３．大災害後、報道関係者の大量被災の理由としてあげられたもの

被害を不可抗力とみなすもの	火砕流の予知は現状では困難であり、まさか取材現場まで大火砕流が襲ってくるとはだれも予想できなかった
被害の理由を他の組織に帰するもの	①気象庁や火山噴火予知連絡会が火砕流発生当初その危険を過小評価したため、報道関係者はその認識を災害当日まで持ち続けてしまった ②災害前の６月１日、島原市が避難勧告地域を一部解除したため、報道関係者にも住民にも気の緩みが広がった ③島原警察署の立ち入り規制が徹底されず、なかばフリーパスのようなかたちで危険地域に入れてしまった
被害の理由をマスコミ内部に求めるもの	①当時梅雨期に入ったこともあり、火砕流よりも土石流の危険のほうに報道関係者の関心が向いていた ②報道関係者のあいだに火砕流の危険に対する認識が乏しかった ③現場には外国人火山研究者が入っていたので、自分たちも大丈夫だと思った ④火砕流の迫真的なシーンをより近づいて撮影しようという職業意識が災いした ⑤マスコミ同士の加熱した報道競争があった ⑥危険地域で取材するための危機管理体制・安全対策が不十分だった

ここではまず、（３）の①、つまり“当時の報道関係者の関心が火砕流より土石流に向けられていた”ということからはじめたい。

前節の消防団のところでも述べたが、報道関係者の場合にも、このことが大量被害の大きな伏線になったことは明らかである。とくに６月１日に梅雨入りして以来、土石流への警戒はきびしくなった。当時キー局から出張していたある民放の記者は、そのへんの事情を次のようにわたしに語っている。

「Ａ：基本的には、大雨注意報が２日に出ているんですよ。それで、３日の夜の会議のメモを持っているんだけれども、メモを見ると、うちのあれは土石流対策になっているんですよ。

Ｑ：その取材方針が。

Ａ：で、６月２日は『プレハブ小屋』と書いてある。くだらない話だけれども、この日に、プレハブ小屋を建てようかって考えたんですよ。

Ｑ：どこに？

Ａ：あの最前線基地に。おれは６月２日に上がっていって、各社の状況を見たの。それで、ＮＨＫと朝日はいなかった。残る社は全部いたの。で、Ａ社が、あそこの現場に臨電を置つけて、スタジオカメラのでかいのを持ってきて、長いタマでやっていたわけ。うちは出足がよかったから、夜の高感度カメラとかああいうのはいつも早く撮れていたわけ。向こうはもうシャカリキになってきたわけですよ。で、警察情報で、Ａ社があそこへプレハブ小屋を建てるって。蚊も出てくるし梅雨入りするから、かわいそうかなと思って、どこかへ用地を借りてプレハブ小屋を建てないと、いまの状況で行くと、もしかすると間に合わないかもしれないって、おれはＲさんに相談したんです。

Ｑ：でも、その２日にプレハブ小屋を建てるということは、太田先生は筒野バス停より上へは上がるなといってたから。その上でしょう？

Ａ：もちろんそうですよ、あの定点観測の場所。定点観測の場所に、Ａ社がプレハブ小屋を建てるという話が島原署の情報で入ってきた。要するにそのぐらい、みんなあそこの定点観測は重要だし、あそこまで来ないと思っていたんだよ。だけど、実はその前に、もう民家まで２００メートルでしょう。もう来ているんだから。で、２日でしょう。２日も大雨情報でしょう。明け方にかけて大雨が降るわけですよ。ところにより６０～８０ミリ降るといったから。３０～４０で起きているから土石流の可能性がある。その前の土石流は５月２６日だから、最悪の事態も考えると。で、各社みんな、こういう体制をとったでしょう。それで、３日。３日は、土石流対策のための体制をそのまま維持するという方針でしょう」

ここには、報道関係者の多くが被災してしまった「定点」が報道関係者にとって非常に重要な取材ポイントだったこと、当時は火砕流よりも土石流への警戒が主体だったこと、が率直に語られている。「定点」は、眼鏡橋付近から県道を登り、農業研修所を経た坂道のもっとも高いところで、水無川からほぼ４０メートルの高台にあったという。したがって、土石流を取材する報道陣にとって、まったく安全と考えられる場所であっ

た。

次に、（３）の④、つまり“危険を冒してでも決定的瞬間を撮影したいという職業意識が災いした”という見方に触れるが、このような意見は、大災害直後の新聞の社説にいくつも出されている。たとえば、

「（今度の火砕流災害で被害に遭った）報道関係者のほとんどはカメラマンやその協力者であった。少しでも対象に近づき迫力ある写真を撮りたいという職業意識は、同僚として痛いほど分かる。記者やカメラマンが敢（あ）えて危険地域に入ることは、ままあることである。しかし、今回の噴火報道で、なんとか被災を免れることはできなかったか。再発防止のため哀悼の意をこめて詳細に点検したいと思う」（「毎日新聞」６月４日朝刊）

「今回の災害では、本社写真部員を含めて報道関係者からも、多数の犠牲者が出た。避難勧告地域内の高台に拠点を設け、最前線で取材活動中だった。取材対象が刻々変化する場合、可能な限り現場に近づき、最新の動きを読者に伝えることは、報道の使命の一つであり、職業意識でもある。安全への細心の配慮をした上で、どこまで危険を冒すか、ギリギリの選択だったと言える。もとより、生命や安全を何よりも優先すべきことは承知している。だが、結果として差し迫る危険を予測できなかった。防災関係者の指示のもとで、自戒を込めて信頼される報道を心がけたい」（「読売新聞」６月４日朝刊）

などがその典型である。

たしかに、報道カメラマンは、危険を冒してでも重要な取材対象に接近し、迫真的な映像を撮ろうという意識を強くもっているようである。わたしも、１９８０年の静岡駅前地下街ガス爆発事故を取材したカメラマンから、ファインダーをのぞくともう周囲の状況がわからなくなり、自然に前へ前へと進んでしまうという話を聞いたことがある。こうした職業意識はそれ自体必要なものであるし、危険があるからといって取材対象に接近しないとしたら、それはもうジャーナリズムではない、とさえいえるだろう。けれども、問題は危険がどのくらいあるのか、またその対象は、危険を冒してまで取材する価値があるものなのかどうかであろう。あるいは、他社に遅れをとりたくないという競争意識に支えられて、あえて右へならえで危険地帯に足を踏み入れたとしたら、それも問題にちがいない。

さきの２つの社説では、被災した報道関係者の行為をプラスにもマイナスにも評価していないが、この点で今回の大量被災に対する評価は、①「ジャーナリズムである以上、危険を冒して取材しなければならない場面は少なくなく、自分の責任で危険を冒し結果として被害が出てもとがめられるべきではない」という意見と、②「対象に接近したからといって必ずしもすぐれた映像にはならず、取材価値をみきわめたうえで危険地域に立ち入るかどうか判断すべきだ」という意見に分かれる。実際、災害直後の識者のコメントとして、こうした対立した見解が明らかにされている（「東京新聞」６月４日朝刊：東京女子大学Ｈ教授と創価大学Ａ教授の見解）。

もちろん、ジャーナリストは生命の危険を冒してでも取材しなければならない場合が

あるだろう。けれども、火砕流の迫力ある映像がそのケースにあたるかどうかは疑問である（もっとも、後に触れるように、多くの報道関係者は火砕流が生命にかかわるほど危険なものとは予想していなかったようであり、とすれば、いままでの議論は多少ポイントがずれているということになるかもしれない）。さらに、必ずしも多くの読者がこうした迫力ある映像を待ち望んでいたかどうかも、議論する必要があろう。これは災害報道のニュース・バリューの問題と深くかかわっている問題であるが、くわしくは別の報告書で議論してみたい。

次は、（３）の⑤、つまり“報道関係者の大量被災の背景には、マスコミ同士の報道競争があったのではないか”ということに触れていきたい。こういう論点は、新聞社説にはあまり見当らない。わずかに、「長崎新聞」が６月４日の社説で、

「報道関係者がこれほど多数を占めたのは前例がないのではないか。仕事熱心さには感服するが、ここでは取材の在り方を問いたい。危険を承知の現場取材の背景に報道各社の行き過ぎた競争がなかったか。多くがカメラマンだったことを見てもそう感じる。その意味で彼らは犠牲者だ」

と書いているのが目立つ程度である。

けれども、取材にあたった関係者に直に話を聞いてみると、熾烈な報道競争がそこに展開されていたような印象を強く受けるのである。つまり、ある社が火砕流や土石流の迫真的な映像を撮ると、気を良くしてますます壮絶な映像を撮ろうと努力する。抜かれた社は、今度こそ挽回しようと躍起になって前へ前へと突き進む、という構図である。

『新聞研究』（１９９１年８月号）の「検証・普賢岳取材」のなかで、ＮＨＫの高島肇久報道局長は、多数の報道陣が被害現場を取材地点に選んだ理由について、第１に、ほとんどの人が火砕流より土石流を危険と考えていたという事実をあげた後、次のように述べている。

「問題点の第２は他社との競争であった。ＮＨＫの現地取材陣は当初、避難勧告地域内の取材をどこまで行うかで試行錯誤に近い状態をつづけたが、５月下旬からは報道局長通達などを受けて勧告地域内の取材を中止させることを決め、撮影ポジションを大きく後退させた。

しかし、５月３０日、３１日に民放各社が真っ赤な溶岩流をアップで撮影して以来、安全第１の撮影ポジションからのＮＨＫ映像の迫力のなさをスタッフ自身が強く感じるようになった。このころ、東京の報道局は、おもて向きは『安全第１。迫力ある映像などなくてもかまわない』と現地に伝えていたが、そのかたわらで、それぞれのニュース番組の担当者が前線の同僚に民放映像とＮＨＫ映像の違いを語って、有形無形の圧力をかけるなど、東京からのメッセージはチグハグなものになるきらいがあった。

そうした状況の中でスタッフの間には避難勧告地域にどんどん入って取材を行う民放取材陣への対抗意識や、東京に文句を言わせたくないという気持ちが生まれて、避難勧告一部解除を待ちかねたかのように、再び取材ポジションを山に近付けるという決定を生んで行った」（高島肇久「守れなかった取材者に安全」『新聞研究』１９９１年８月号３１ページ）

もちろん、これはＮＨＫばかりでなく民放各社も同じだったようで、前にも引用した地元記者の匿名座談会にも、次のようなくだりがある。

「Ａ：．．．５月２９日でしたか、夜に火砕流が起きて山火事が発生したんです。

Ｂ：ありましたね。Ｎテレビがその現場まで行って、足元で木が燃えている映像を撮ってました。

Ａ：ウチは引き揚げてますからもちろん撮ってなかったんですが、キイ局はそれが不満で、『他は撮ってるのに、どうしてウチにはその絵がないんだ』と。それで、また定点に戻ったんですよ、５月３０日から。

Ｂ：ウチなんかも立ち上がりの段階で遅れをとってましたから、そういうプレッシャーはかなりありました。それに火砕流に対しては無知でしたから、土石流の危険も考えて高いところにいればまず安心だという認識でした。各社が山張りをしていた地点が『いちばん危ない』といわれていたなんて、全く知りませんでしたね。

Ａ：ウチが定点を放棄して旅館に引き揚げた２６日なんか、各社すごく並んでましたよ、あの地点に。

Ｑ：遅れをとった他社としては、どうしても火砕流の絵が欲しかったんでしょうね。それで、つい山火事の現場まで登って行くことになるわけですが、『報道特集』のＲキャスターも、火砕流の先端まで登ってましたよね、あれはいつですか。

Ｅ：６月１日だと思います。

Ｑ：あれは問題にならなかったんですか、現場では。

Ｃ：当然、問題になりました。島原の記者クラブからは『危険なところに入らない』という申し合わせに違反しているという抗議を受けましたし、職場でも『バカなことをやって』とさんざんでした。次の週の『報道特集』（６月９日）で、Ｒさんは『無知とはいえ．．．』と弁解してましたが、当然ですよ。

Ｄ：その一方で、『あんな年輩の人でも登っているのに』といって現場のスタッフに迫る人たちもいたんです。

Ｑ：そうやって現場には『前へ前へ』というプレッシャーがかけられていたんでしょうね」（「雲仙普賢岳の警告」『放送レポート』１９９１年９・１０月号５－６ページ）

このように、民放の場合にはキー局からローカル局に対し、もっと迫真的な映像をという要請がかなり強く寄せられたようである。わたしも、あるローカル局の記者から、火砕流のモクモクはもうたくさんだ、自分たちはこれからも地元と付き合って行かねばならないのだから、避難生活など地元の人がかかえている問題を取材したいと考えていたのに、キー局から火砕流の映像を撮るように強く要請され、それに従わざるを得なかったという話を直に聞いている。

このキー局とローカル局との視点の違い（というか、深刻さの感覚の違い）は、おそらく全国の視聴者を対象にしているか、地元の被災者を対象にしているかの違いにもとづくものであろう。そして、全国の視聴者を対象とする場合、災害報道はともすれば一

種のショーとなる危険をはらんでいる。それが、一方では、危険を無視して火砕流の上に乗るような行為を招くことになったし、他方では、被災者の心情をほとんど斟酌しない取材や報道につながったのであろう。とくに、テレビのワイドショーにはその傾向が強かった。

そのせいもあって、わたしがはじめて被災地をたずねた6月20日頃、現地では、マスコミ関係者の評判がきわめて悪かった。昭和61年の伊豆大島噴火でも、平成元年の伊東沖海底噴火のときも、マスコミの取材が強引で、報道がセンセーショナルすぎると、多くの人のひんしゅくを買ったものだったが、今回も、前述のように、東京のある放送局が無人になっていた避難者の自宅から電源を無断借用するという事態が起こったり、カギのかかっていない家に入り込んで無断で電話を使ったとか、避難所に泥靴でズカズカ入ってきたとか、避難しようと懸命になっている住民にしつこく取材するとか、取材のモラルを逸脱したとしか判断できないような行為が少なくなかったらしく、多くの住民が憤慨していた。

また、大災害前の報道にもおかしなのがあったようで、聞くところによれば、エサをまいてノラ犬を集め、これを撮影して「飼い主を失った避難地域の犬たち」と報道したとか、住民に頼んで車に荷物を積んでもらい、「あわてて引っ越しをする住民」と放送したとかいう話もある。もちろん、これは一部の人たちの行為であって、多くのマスコミ関係者はこんな非常識なことはしない。けれども、住民はメディアも会社も区別せず、批判をマスコミ全体に向けるのである。

さて、最後は（3）の⑥、つまり“危険地域で取材するための危機管理が十分だったかどうか”という問題である。

いままで述べてきたように、カメラマンの職業意識やマスコミ同士の競争によって、かれらが危険地域にあえて立ち入ったことは否定できない事実であろう。しかし、たとえそうした事情があっても、記者やカメラマンの安全管理が十分だったなら大被害は軽減されたのではないか、とわたし自身は考えている。前にも述べたことだが、およそジャーナリズムであるかぎり、ある程度の危険を冒しても取材対象にアプローチしなければならないのは当然である。けれども、その前提には、はたしてどんな危険があるのか、またいざというときどう撤退するのか、がはっきりしていなければならない。つまり、危険の特質と緊急時の撤退方法を熟知するという前提がなければ、危険地域の取材は無謀な試みにもなりかねないのである。

今回の噴火の場合、はたして記者やカメラマンの安全管理は十分だっただろうか。

社説などに現われた報道各社の見解では、災害が進行しつつあるというむずかしい状況のなかで、できるかぎり安全に配慮したという意見が強いし、わたしもおそらくそうだったと思う。また、だれが死傷したかということも多分に偶然的要素に左右されていたので、被災者を出した社と出さなかった社で安全管理に差があったとも思わない。しかし、こういう条件を斟酌してもなお、はたしてマスコミ各社の安全管理が十分だったかどうか、疑問が残るのである。

たとえば、現地入りする記者やカメラマンにあらかじめ火砕流の危険を教えるなど、

事前の説明はどのくらい徹底していたのか。また、ヘルメットや無線機などの装備はどの程度十分だったのか。

この点については、民放労連の調査がある。

これは、民放労連が7月上旬、普賢岳報道のために全国各地から現地入りした民放のスタッフを対象に行なったアンケート調査であり、２７２人から回答を得ているが、それによれば、「現地到着後、取材を開始する前にどんな説明を受けたか」という問いに対して、「土石流の説明を受けた」という人が１３．６％、「火砕流の説明を受けた」という人が１４．３％と、いずれも2割以下であり、逆に「何の説明もなくいきなり取材に出かけた」という人が２３．９％と、ほぼ4人に１人の割合にのぼっていた。

つまり、取材にともなう危険について十分に知らされていたとはとてもいえない状態であり、とくに注目すべきなのは、記者・デイレクター・アナウンサー・レポータといった人たちにくらべ、カメラクルーはこうした事前説明を受けることが少なく、大災害があった6月3日以前には、半数近く（４１．４％）のカメラクルーが「何の説明もなくいきなり取材に出かけた」と答えている。これは、被害者のなかにカメラマンやライトマンが少なくなかった事実と符合するものである。

また、現地入りしたスタッフにどんな装備が支給されたかをみても、けっして十分とはいえない。調査を担当した「民放労連・雲仙災害特別委員会」は、この点について、報告書のなかで次のように述べている。

「安全対策の不十分さは、スタッフの装備についてもいえる。『身の安全を守るため現地で何を支給されたか』を、屋外で仕事をすることの多いカメラクルー、記者、デイレクター、アナウンサー、レポーターについてみると、防火・耐火のための装備の支給は一切なく、直接身を守るものとしてはせいぜいマスクとヘルメットがあるだけだった。しかし、それらも6月3日以前は全体の4割前後に支給されただけで、6月4日以降も全員にいきわたることはなかった。

また、連絡手段として当初、多用されたのは移動電話とトランシーバーであったが、移動電話は場所によっては使いものにならないことも多く、トランシーバーの周波数もまちまちで、連絡体制の確立に手間どったことはスタッフの多くが指摘している」（「映像第一・安全二の次の大転換を」『「雲仙・普賢岳噴火災害報道」事故調査報告書』民放労連テレビ長崎労働組合より）

このように、現地入りした多くの記者やカメラマンは、会社の安全管理はけっして十分ではなかった、と答えている。もちろん、明らかに危険が大きいと判断されれば、事前説明や装備の支給が不十分であるはずはない。場合によっては取材を中止することもあり得ただろう。だから、この事実は、だれもがあんな大きな火砕流が発生するとは予想もしなかったことを意味しており、それについては次の節でくわしく触れるつもりである。

しかし、ただ一つ、朝日新聞社だけは万一を考えて、大災害前に取材ポイントを変更している（災害前、ＮＨＫも一時は取材ポイントを変更した。しかし残念ながら、前述の高島氏の引用にもあるように、ふたたび危険地域にある農業研修所に引き返してしま

った）。その経緯については、朝日新聞西部本社の堀鉄蔵・社会部長と桐明桂一郎・通信部長の次の文章にくわしく書かれている。

「５月１５日と１９日に土石流が島原市上北木場地区の水無川で発生、同２４日からは火砕流の発生も相次いだ。このため写真部は、各社と同様、地獄跡火口と水無川上流を見渡せる北上木場の撮影ポイントで定点取材をはじめた。ところが２６日の火砕流では水無川上流の砂防ダムの工事現場で作業員がやけどを負い、その際、少し下で取材にあたっていた本社記者らも、避難の途中に一人が数分間連絡が取れなくなったこともあり、『もう少し大きかったら巻き込まれていたかも知れない』と思うほど危険性を感じた。

また、２０日の溶岩ドーム誕生以来、本社ヘリからの空撮取材を継続してきた写真部員は、砂防ダムから下は扇状地のような地形になっていることから、『大規模な火砕流が起きた場合は砂防ダムを一気に乗り越え、北上木場の撮影ポイントを襲う可能性が強い』と判断した。

２８日、写真部の前線デスクと社会部の前線キャップらが取材位置と安全確保について検討した。その結果、その晩からは筒野バス停から上には原則として入らないこととし、記者、カメラマンとも観察地点を変更した。この背景には、科学部の意見とともに、着任以来２年近くにわたって九州大島原地震火山観測所を熱心に取材してきた島原通信局長の蓄積と判断が大きなウエートを占めた」（堀鉄蔵・桐明桂一郎「試行錯誤の連続の中で」『新聞研究』１９９１年８月号１２ページ）

このように、朝日新聞社は２８日の晩から、定点での取材を放棄した。ヘリコプターからの観察や島原通信局長の判断などがその根拠になったようだが、また２６日の火砕流で記者が偶然それに巻き込まれそうになり、危険を直接に感じたということも、かなり大きな要素だったのではないかと思われる。

４．被害はなぜ起こったか－火砕流の知識がなかった

以上、火砕流によってなぜあのような多数の人々が被災してしまったのか、その背景的な要因について長々と述べてきた。被災者のすべては、避難勧告地域になっていた北上木場地区で亡くなっているのだから、なぜ多数の被災者が出てしまったのかという問いは、なぜ多くの人が北上木場地区に立ち入ったのかという問いと深く関係している。そして、いままで述べてきたように、地域住民にも、消防団にも、報道関係者にもそれぞれ独自の理由があった。

けれども、大被害を生み出した背後には、もう一つの大きな理由があったように思われる。

それは、「火砕流に対する危機意識」の欠如という問題である。つまり、火砕流がこんなにこわいものだとは思ってもみなかったということであり、そのため、生命の危険を感じることなく危険地帯に足を踏み入れたのではなかったろうか。

当時、ごく一部の人を除いて、火砕流がこれほど危険なものと思っていた人はなかった。おそらく、火砕流によってひょっとしたら死ぬかもしれないと切実に感じていれば、生活のためであろうと、地域を守るためであろうと、取材のためであろうと、いかなる理由があっても危険地域に入る人はずっと少なかっただろう。危険を切実に感じていなかったからこそ、多くの人が北上木場地区に立ち入ったのである。むろん、大火砕流が起こったときたまたまその場に居合わせなかった人も、居合わせて生命を長らえた人も、不幸にして犠牲になった人も、その心理に大差はなかったと思われる。その意味で、犠牲者は不運としかいいようがない。

つまり、わたしは、大火砕流災害をもたらした大きな理由として、「火砕流への危機感の欠如」という心理的な要素があった、といいたいのである。いや、これこそまさに最大の理由だったのではないかとさえ考えている。そこで、以下、この問題をややくわしく触れていきたい。

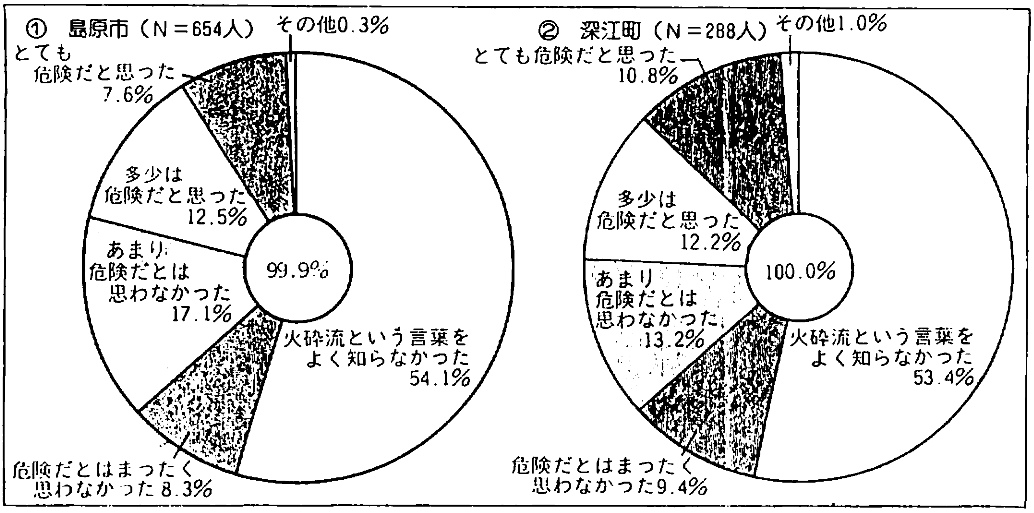
もちろん、一口に火砕流への危機感がなかったといっても、そのレベルは一様でない。火砕流という現象についてまったく知識がなかったという人もあれば、いちおうの知識はあっても、まさかその火砕流が自分を襲ってくるとは予想しなかった、という人もあったと思われる。そして、ごく一般的にいえば、地域住民のなかには、火砕流を目のあたりにしながらも、それがどういう特徴をもっているか、どこが危険なのかをよく知らなかったという人が少なくなかった。

たとえば、わたしが島原市をたずねて住民に聞き取り調査をした過程でも、大災害が起こるまで火砕流のこわさをまったく知らなかった、と話してくれた人は非常に多かった。だから、危険地域に平気で立ち入って写真をとったり、記念に石をとってきた人がたくさんいたとも聞いた。また前にも触れたように、大災害前日の２日は日曜だったため、県の内外から多くの人たちが火砕流見物に押しかけたともいう。

火砕流に対する住民の知識がいかに少なかったかは、アンケート調査をみても明らかである。たとえば、わたしたちが８月上旬、島原市と深江町の住民１３００人に対して行なったアンケート調査によれば、６月３日の災害以前、「火砕流ということばをよく知らなかった」という人が島原市、深江町とも５４％もあったのである。また、今回の災害について自由に記述してもらったなかにも、「火砕流で被害者が出たが、火砕流自体あまり知られていなく、こんな大被害を受けるとは予測されていなかったと思う」、「ドームが出来たときに火砕流についてくわしく、ガスや高温等の恐ろしさを報道してもらいたかった」、「火砕流によって熱風が起きることを知らなかった。火砕流の恐ろしさを身にしみて感じます」などという回答があった（図９）。

前述のように、最初の火砕流は５月２４日に発生しており、その直後ならともかく、大災害はそれから１０日後に起こっているわけで、そのあいだ、かなり押え気味だったとしても、テレビや新聞は火砕流についてさまざまな報道を行なっていた。とくにけが人が出た２６日以降、マスコミの火砕流報道は急激に増加している。にもかかわらず、火砕流という言葉を知らなかった人がこれほど多かったのは、いささか驚きである。

図9．島原市民・深江町民の火砕流についての知識



これは、いったいどうしてだろうか。

いくつもの理由があると思うが、１つは「火砕流」ということばが耳慣れず、かつ難解だということがあるだろう。一般に、火山学の術語は難解なものが少なくないが、なかでもこの火砕流はその典型ではないかと思う。

手元にある『自然災害科学事典』では、火砕流の説明は次のようになっている。

「火砕流（ｐｙｒｏｃｌａｓｔｉｃ　ｆｌｏｗ）　広義には、種々の火山砕屑物が一団となり、おもに重力により、高速で斜面を流下する現象。火山砕屑流ともいう。狭義には高温の本質火砕物質とガスの混合物の高速の流れをいう。火砕流という用語は現在狭義に使われることが多い。狭義の火砕流は火山灰流（または灰流）・軽石流・岩滓流（またはスコリヤ流）・熱雲などを含み、非常に小規模なものから１００立方キロメートル以上のものまである。その堆積物は大部分本質岩塊（軽石や岩滓など）と細粒物質（火山灰）からなる。含まれる本質岩塊の発泡度が高い火砕流には大規模なものが多く、それらは陥没カルデラをともなうことが多い．．．．」（『自然災害科学事典』築地書館１９８８年５９ページより）

たしかに、アカデミックな意味では正確な表現かもしれないが、これを読んですんなり理解できる人はきわめて少ないと思われる。前にも述べたように、火砕流発生当初のマスコミの説明の多くは、これほどでなくとも、市民にとっては五十歩百歩だったよう

だ。住民が求めていたのは、火砕流の科学的説明ではなく、火砕流とはいったい何かの具体的イメージであり、また火砕流のどこが危険で、どういうことに注意したらいいかという防災の観点からの説明だったからである。

もちろん、当時も火砕流のおそろしさについて詳細に説明した記事がなかったわけではない。とくに、特集記事などにはそうしたものがみられるが、残念ながら比較的目立たない紙面にあったりして、あまり注目を集めるものではなかった。また当時、土石流や溶岩流の危険もしばしば指摘され、多くの住民がそれらと火砕流を十分に区別できなかったということもあったろう。しかしそれにしても、火山噴火といえば、すぐ噴煙と溶岩を考えてしまう多くの住民にとっては、当時マスコミに現われた火砕流の説明はやはりむずかしすぎたのではなかろうか。

この点について、もう少し付言すると、１９７７年８月の北海道有珠山噴火のときにも、火山学者たちは火砕流の危険を心配していた。そのときも、今回のように、ほとんどの火山学者は、社会的混乱を恐れてそのことを公表しようとしなかったのだが、当時は、「火砕流」より「熱雲」ということばがもっぱら一般的だったようである。当時、ＮＨＫ取材班が出した『有珠山大噴火』という本には、次のようなくだりがある。

「熱雲は火砕流ともよばれ、火山岩塊を混じえた数百度という高温のガス体が火口から山麓に向かって急速に流れ下る現象である。流下のスピードは秒速３０メートルから４０メートルにも達する。ひとたびこの現象が起これば、山麓は焼きつくされ、住民は逃げだすこともできない。火山災害の中では最も恐れられている現象である．．．（中略）．．．それでは今回の有珠山の活動で、熱雲の発生するおそれはないのか、マスコミをはじめ関係者の心配はそこに集中した。

ところがこの熱雲に限っては、火山噴火予知連絡会の学者の口が一様に重かった。現地の観測班は、忙しい中でも取材にはできるだけ応じ、少しでもわかったことは住民に伝えようとしていたが、この熱雲だけは例外で、いくら問いただされても解説を避けていた。

ある専門家は数カ月もしてから『熱雲については実は学者として最大の警戒をしていた。しかしそのことを話すとマスコミがセンセショナルに取り上げる恐れがあった。とにかく混乱だけは避けたかった』と話している．．．．．」（ＮＨＫ取材班『有珠山大噴火』日本放送出版協会１９７８年２１６ページより）

さきの『自然災害科学事典』には「熱雲」の項目もある。それによれば、熱雲は火砕流の小規模なものとあり、したがって、普賢岳で起こった現象は、火砕流と呼んでも熱雲と呼んでも大差なかったと思われる。多少の差があるとすれば、固体部分とガス体部分の総体を火砕流と呼ぶのに対し、熱雲のほうは高温のガス体に注目した定義であろう。あるいは、熱雲は、発生のメカニズムよりも現象そのものに注目した定義といえるかもしれない。

１９７７年の有珠山噴火と１９９１年の普賢岳噴火のあいだに、どうして「熱雲」が「火砕流」に変わっていったのか、そのへんの事情はよくわからない。おそらくアカデミックな意味で「火砕流」のほうが「熱雲」より適切な定義だと考えられたからであろ

う。だが、アカデミックな意味で適切だということと、防災の意味で適切だということとはけっして同じではない。

どうしてこんなことをいうかといえば、わたしには1つの記憶があるからである。

この有珠山噴火は、わたしがはじめて災害の調査に着手した思い出深い災害なのだが、このとき地元の老人が、有珠山には熱雲の歴史がある、熱雲というのは山からものすごく高温のガスが噴き出して、猛烈なスピードで山の斜面を駆け下りるのだ、それに巻き込まれると、動物や人間はおろか草木までも全滅してしまうのだ、と話してくれたのをまだはっきりと覚えている。このイメージは、まさに普賢岳の火砕流そのものである。

だが、今回の災害において、こんなに生々しいイメージをもっていた人がどれくらいいただろうか。つまり、火砕流という用語は、アカデミックな意味では適切なのかもしれないが、住民に災害の生々しいイメージをもってもらうという、防災の意味では難解すぎる、それよりむしろ熱雲と呼んだほうが良かったのではないか、と思われるのである。

もう1つ、火砕流ということばが理解されなかった（誤解を招いたといったほうが適当であるが）要因として、その「流」という表現をあげる人もいた。

「流」ということばは、一般の人にとっては、液体が地を這って流れるというイメージと結びついている。土石流・溶岩流・泥流などはまさにそういう現象であり、火砕流も同じように思われてしまった。したがって、高いところにいれば安全だという誤解を生んでしまった、というのである。もし、多くの人がこういうイメージをもっていたとしたら、その意味でも熱雲（これなら「雲」だから、高いところでも安全とは思わない）という用語のほうが適切だったといえよう。6月3日の大災害から半年ほど経った後、ある高名な火山学者と話をする機会があったが、やはり熱雲のほうが良かったかなあとその学者がつぶやいたのを、わたしは鮮明に記憶している。

これをもっと一般化すれば、住民にアカデミックな術語をそのまま提供しても、それを十分理解してくれるとはかぎらないということ、また、現象の意味と災害のこわさを伝えるためには、住民になまなましいイメージをもってもらえるような用語や表現に変換しなければならない、ということである。多少科学的な正確さを犠牲にしても、防災という観点からはそれが望ましいのである。そしてもう少しいえば、そういう変換（翻訳）作業は、啓蒙的な志向をもった学者や、マスコミの解説委員・論説委員が担うべきではなかろうか。

とくに、この点でわたしは、マスコミの一種の「造語能力」に大いに期待している。いままでも、マスコミの世界でつくられた用語が一般化し、アカデミックな世界で市民権を得たことがしばしばある。典型的なのは「直下型地震」や「集中豪雨」、「湿舌」などで、これは、これらのことばが出来事の特徴を直截簡明に表わし、なまなましいイメージを喚起するからであり、正確で包括的な定義にこだわっていたら、おそらく浮かんでこなかった用語だと思われる。人々になじみの薄い火山現象にも、こうしたマスコミの造語センスが生かされたら、と思うのはわたしだけであろうか。

5．被害はなぜ起こったか－火砕流への危機感がなかった

以上、火砕流の知識の欠如について触れ、それが、大災害をもたらした大きな要素だったことを述べてきた。

しかし、それに加え、火砕流という現象について一般的な知識はあったが、その危険性を実感していなかった人も多かったのである。つまり、火砕流とは何か、火砕流のどこがこわいかについて知ってはいたが、まさかその火砕流に自分が巻き込まれるとは予想もしなかった人々もたくさんいたと思われる。

とくに、今回の災害では、マスコミ関係者や消防団員など、一般住民にくらべたら防災の知識が深いはずの人たちが大量に犠牲になったが、5月24日に最初に火砕流が発生してから6月3日の大災害までの10日間、テレビや新聞で火砕流の解説がしばしば行われており、かれらがそうした報道にまったく接していなかったとは、およそ考えられない。つまりかれらは、火砕流のメカニズムや過去の火砕流災害について（もちろん専門家の知識にはくらべるべくもないが）一般的知識はもっていた。けれども、たしかに火砕流はこわいが、こと普賢岳に関するかぎりそんな大きな火砕流が起こるはずはないとか、まさか自分が火砕流によって被害を受けるはずはないとか、漠然と考えていたのではないだろうか。

要するに、かれらの多くは、火砕流の危険についての知識はあったが、その危険を自分の問題として実感できなかったのではないか、と思うのである。

わたしが現地で聞き取り調査をした過程でも、そうとしか考えられないような話をいくつか聞いた。

大災害が発生した6月3日は、午後3時頃からかなりの規模の火砕流が続けて発生し、その勢いがしだいに強くなってきたため、危険を感じて避難し、間一髪で助かった人たちも少なくなかった。

たとえば、タクシー運転手のKさんもその一人。Kさんは当日、某新聞社のカメラマンといっしょに、多くの消防団員が犠牲になった農業研修所のすぐ下の路上にいた。そして3時過ぎに火砕流が激しくなると、これはいままでとは違うぞと直感し、車を方向転換させてエンジンをかけ、いつでも逃げられる体制をとって、山ばかりみていたという。

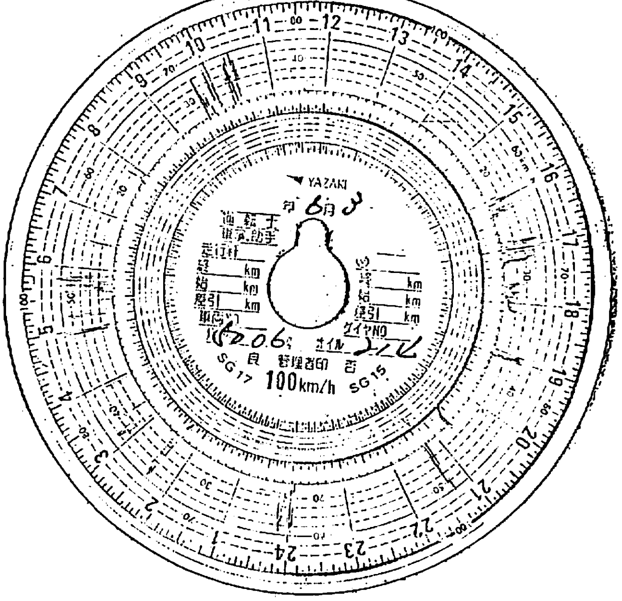
そのうち4時頃、ドドーと大きいのがやってきたので、近くで取材していたカメラマンに「危ないぞー」と声をかけ、カメラマンがあわてて車に戻るやいなや、そのまま一目散に山を降りた。しかし途中で煙に追いつかれ、ライトをつけたがたちまち真っ暗になり、フロントガラスに火山灰が降って、ワイパーもまったくきかない状態となった。そこでウインドーを開け、眼鏡を外して顔を外に出し、ローギアでのろのろ運転しながらやっと脱出できたという。Kさんが逃げだそうとしたとき、下のほうからパトカーが登ってきて「危なかぞー、逃げんかー」と広報していたというが、残念ながらこのパトカーの警察官は火砕流によって死亡してしまった。

Kさんは、火砕流発生から大災害が起こるまでの10日間、ほとんどマスコミ関係者

について山に登っていたという。そこで、大災害直前の異常現象に気づいたわけである（図１０）。

けれども、犠牲者の多くは残念ながらそうではなかったようである。火砕流はおそろしい現象かもしれないが、まさか普賢岳の火砕流がここまでくるとはおそらく予想しなかったのであろう。わたしも現地で、たまたまある人から、災害２日前の６月１日に「定点」の報道関係者のようすを撮影したビデオをみせてもらったが、そこには危険と向き合って必死に取材しているという雰囲気はみられなかったし、それぱかりか、前述のように、ここを長期の取材拠点にしようという社もあったようで、電話会社に頼んで臨時電話をひいたり、ここにプレハブを用意しようと考えていたところもあったという。

図１０．６月３日当日のＫさんのタクシーのタコメーター（薄くてはっきりしないが、午後４時直後に車をスタートさせている）



また、いざというときに備えて、緊急の脱出方法を考えていた人も少なく、さきのＫさんの話では、多くの報道関係者が被災した「定点」近くの狭い道路に駐車してあった車はバラバラで混雑しており、いざというとき急に逃げようとしても避難できなかったのではないか、ということである。

そして、このまさかという心理は、災害発生の直前まで続いたように思われる。これも現地で聞いた話だが、たとえば地元の某放送局のカメラマンは当時、「定点」よりも上の地点で取材していたが、頻発する火砕流に不安を感じて、４時直前に撤退をはじめた。そしてその途中で１０人ほどの報道陣を見たが、かれらがあわてていたようすはなかったというのである。

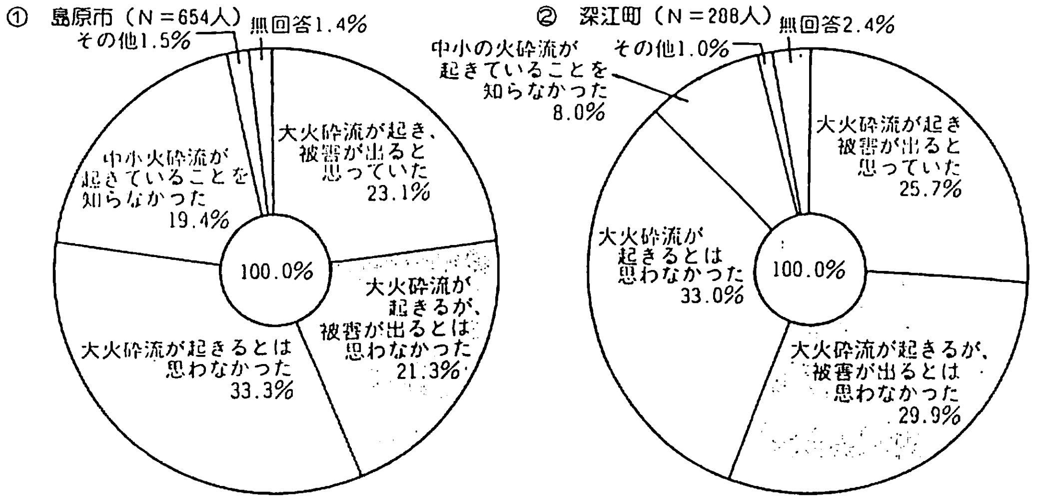
まさか、火砕流がこんなに大きな被害をもたらすと予想しなかったのは、もちろん地域住民も同じであった。

さきに、災害後わたしたちが行なったアンケート調査の結果を紹介し、多くの住民が火砕流という現象に対する知識をもっていなかったことに触れたが、その一方で、「火

砕流という言葉は知っていたが危険だとはまったく思わなかった」人が１０％弱、「言葉は知っていたがあまり危険だとは思わなかった」人が２０％弱もあった。つまり、3割の人が火砕流についての一般的知識はあったが、危険を実感していなかったということである。

また、こうした火砕流の過小評価は災害直前まで続いたようで、前述のように、大火砕流が起こる1時間ほど前から中規模の火砕流が発生していたにもかかわらず、「大きな火砕流が起きるかもしれないと思ったが、被害が出るとは思わなかった」人が島原市２１％、深江町３０％、「大きな火砕流が起きるとは思わなかった」人が、両地域とも３３％となっており、住民のほぼ6割が、この段階でも災害を予想していなかったのである（図１１）。

図１１．大火砕流発生直前の危機意識



このように、マスコミ関係者も住民も、火砕流の危険はいちおう知っていても、それが大災害をもたらすかもしれないという危機感をもっていなかった。知識として危険を知っていることと、その危険を自分の問題として実感することのあいだにズレがあったというべきだろうか。多くの人は、火砕流はこわいものだと知っていても、まさかその火砕流に自分が巻き込まれるとは予想もしなかったにちがいない。

知識としては知っていても、まさか自分が被害にあうはずはないと考え、その危険を

無視してしまう心理を、社会心理学では「正常化の偏見（ｎｏｒｍａｌｃｙ　ｂｉａｓ）」という。こうした心理は、災害時にかなり普遍的なものであり、過去の大災害、たとえば昭和５７年７月の長崎水害でも、５８年５月の日本海中部地震でも、被害を拡大する大きな要素となったものである。

最近では、１９９１年９月２７日から２８日にかけて日本列島を縦断し、６０名を越える死者を出した台風１９号のケースがある。この台風は、各地で過去の最大瞬間風速の記録を塗りかえるほど強い「風台風」だったが、被害を大きくした１つの要因として、自分や自分の地域が大きな被害を受けるかもしれないという危機感の不足をあげることができる。

実は、台風１９号は近来にない大型台風だったため、気象庁では、台風が日本列島に上陸する前から警戒を強め、台風のコースや速度が昭和２９年に大被害を生んだ「洞爺丸台風」と似ていると指摘して、あらかじめ厳重な警戒を呼びかけていた。そして、このことは、台風が上陸する前日の９月２６日の夕刊や、２７日の朝刊のなかで新聞各紙が報道していたので、多くの人々は、この「大型で非常に強い台風」が日本各地を襲うかもしれず、そうなれば被害が大きくなるかもしれない、と知っていたはずである。けれども、危機感をもったのはほんの少数で、ほとんどの人は、まさか自分の地域や自分の家が被害を受けることはないだろうとこれを軽視し、その結果、大きな被害を受けてしまった。

テレビ・ラジオから台風情報を聞いていながら、まさか自分の地域を台風が直撃するとは思わなかったというのは、多くの人々に共通する心理であった。これは、わたしが各地で行なった聞き取り調査でもしばしば耳にしたことである。たとえば次の例。

「Ｑ：当日は昼間から、九州のほうでは相当被害があると放送されてましたが、テレビ・ラジオはご覧になってましたか？
Ａ：ええ。でも、台風でいままでそんなに被害にあったことがないので、軽く見てたんですね」

これは、台風が直撃するかもしれないという情報を聞いていたにもかかわらず、小学生と中学生の子供２人を学習塾に出した、広島市の母親の話である。

「Ｑ：そうすると、事前に大きい台風が来るということは知ってたんですね。
Ａ：ええ、だからテレビとかラジオとかずっと付けっ放しで。
Ｑ：で、テレビでは４時頃には福岡がひどいことになったというニュースなんかが出たと思いますけど。
Ａ：ええ。わーすごいねって感じで。でも、広島はそんなにならないだろうって感じだったんですよね。だから家の中にいればいいわって。まあ出る用事もそのときはなかったもんですから」

これも広島市。当時高校生の子供と２人で自宅にいた主婦の話である。

「Ｑ：２７日は、２時か３時頃に島根県地方には暴風警報と波浪警報が出てるんですが、そういう事実は当時ご存じなかったですか？
Ａ：ええ、だから有線なんかで多少は放送してたと思いますけども、ただ来るんだ

なって感じで。どれくらいの大きさで、どれくらいの被害が出るかということは、もう全然覚悟もしておりませんしね。

Q：実は４時頃に九州に上陸しまして、かなり大変な被害がすでに出てるんですよね。で、６時から７時頃にかけて広島に今度は行きまして、こちらに来るのがだいたい９時頃ですよね。そのあたりのテレビを当日はご覧になりましたか？

A：ええ、ちょうどお通夜の最中でしてね、テレビは見てなかったんですけども、時々抜け出してテレビをつけては、飛行機が飛ぶかなとかＪＲが動くかなとか。明日葬式は出せるかなくらいにしか心配はしてなかったんです」

これは、たまたまご主人の母親が亡くなって、災害当日が通夜だった島根県の主婦Ａさんの話である。

これらの話は、要するに、台風１９号が各地に大被害をもたらしていること、しかもその台風が自分の住む地域に接近しつつあることを知ってはいても、ほとんど危機感をもたなかった人が多かったということを示すものである。こうした心理は、災害にはつきものといっていいほど普遍的なものであり、雲仙普賢岳の火砕流災害の場合にも、こうした「正常化の偏見」が被害を拡大した大きな要素となったことは、けっして否定できないであろう。

6．被害はなぜ起こったか－心理的もたれ合い？

ところで、火砕流による大災害発生の心理的要因としてもう１つ、マスコミ関係者の多くが危険地帯に入ったのは、当時、現場に３人の火山学者が入っていたため、学者が入るくらいなら安全だろうという安心感があったからだ、ということも指摘されている。そして、多くの消防団員が現場に入ったのは、最新の情報にくわしいはずのマスコミ関係者が入っているから大丈夫だろうと考えたのだ、ともいわれた。

こういう話は、わたしも現地で何人かから聞いたし、またかなり後になって、このような観点から被害を分析したテレビ番組もつくられたのである。つまり、ことばはあまり適当でないかもしれないが、現場には一種の「心理的なもたれ合い」があり、みんなで入ればこわくないといった雰囲気があったというのである。たしかに、われわれには、見せ物の化物屋敷に一人では入れないが大勢なら大丈夫という心理があり、それがここでも働いて、危険地帯に立ち入る恐怖や不安が多人数で入ることによって分散してしまった、といえるかもしれない。

亡くなった外国人は、フランス人のモーリス・クラフト、カテイア（キャッチヤー）・クラフト夫妻、そしてアメリカ人のハリー・グリッケン氏の３人だったが、ここで問題なのは、現場の報道関係者がかれらを火山学者とみなし、その学者たちが研究資料の採集のために立ち入っているのだからそんなに危険ではないだろう、と考えたことである。たしかに、かれらのうち、ハリー・グリッケン氏は１９８０年にアメリカで起こったセント・ヘレンズ噴火を研究し、また１９８８年の磐梯山噴火に大きな興味をもって

いたといわれるまぎれもない火山学者である。

けれども、クラフト夫妻も同列に考えてよかったのだろうか。災害の翌日、行方不明となった夫妻を報じたあるテレビ放送では、その経歴が次のように紹介されている。

「モーリス・クラフトさんと妻のカテイアさんは、世界でも有数の火山学者です。モーリスさんはフィルムを、そしてカテイアさんはスチールカメラをもって、世界中の火山の貴重な映像を記録・研究していました。世界のどこかで火山の噴火があると必ずモーリスさんが駆けつけるとさえいわれており、火口付近の危険な地域にも進んで入り、必ず生きて帰ってくる不死身の男といわれていました。今回も、夫妻は東京都立大学の火山研究家のアメリカ人と３人で５月末から島原市内に滞在し、昨日の朝、山に調査にいくといって出かけたきり、３人とも消息を断っています」

また、かれらの遺体が荼毘にふされたときの新聞記事は、次のようになっている。

「“おしどり科学者”異国の地でだびに　仏のクラフトさん夫妻

雲仙・普賢岳火砕流惨事に遭遇、異国の地で命を落としたフランス人火山学者、モーリス・クラフトさん（４５）と、カテイア・クラフトさん（４４）夫妻の遺体は８日、島原市内で火山学者らに見守られ、だびにふされた。夫妻は５月２９日に島原市入り。今月３日の大火砕流に巻き込まれ、６日に死亡が確認された。夫妻は、一番危険な状態の火山活動をフィルムに収める“おしどり科学者”として世界的に有名だった。

２人の遺体は島原市上の原３丁目の市火葬場でだびにふされた。火山噴火予知連の加茂幸介会長代行や九大島原地震火山観測所の太田一也所長ら“火山研究仲間“が見守り、島原カトリック教会の紙崎忠男神父が祈りをささげた。加茂会長代行は『火山をよく知る彼らがなぜあんなところに行ったのか．．．残念だ』と最後の別れ。遺骨は家族が来日するまで市が保管する」（「長崎新聞」６月９日朝刊）

これらの報道では、クラフト夫妻の肩書は火山学者となっているが、かれらが実際に行っているのは、火山現象の科学的解明のために資料収集するというより（もちろん、それもあるだろうが）、むしろ、多少の危険を冒しても火山現象の迫真的なシーンを記録におさめようとすることである。今回もかれらは、いくつかの報道機関にヘリコプターを出して溶岩ドームの上に着陸したいという希望を伝えていたという（山下柚美「雲仙に憑かれた仏火山学者」『文藝春秋』１９９１年１２月号３４６ページ）。さすがにこれは、あまりに危険だということで実現しなかったが、つまり、かれらは火山資料の収集に精を出す火山学者ではなく、「火山の造詣が深い冒険的な写真家」といったほうが適切だったのではないだろうか。

何人かの火山学者にわたしがこうたずねたら、だれもそれを否定しなかったが、だとしたら、学者が入っているくらいだからそんなに危険はあるまい、と考えていた現場の報道関係者は大きな誤解をしていたことになる。むしろ、クラフト夫妻は現場で決定的瞬間を待っていたのであり、そこはかえって危険地帯だったのだ、ということもできるからである。

7．被害はなぜ起こったか－情報伝達システムの齟齬

最後に、6月3日の火砕流が多数の死者・行方不明者を出してしまった要因の1つとして、緊急情報の伝達に齟齬があったということに触れておきたい。

実は、この大火砕流の直前、災害の発生を示唆する情報が流されていたのである。

これは、雲仙岳測候所の係官の個人的判断によって出された情報で、農業研修所にいた消防団まで伝えられたが、結局、避難には結びつけることができなかった。この事実はわたし自身が現地で調査した経緯もあり、また後にＮＨＫテレビでもくわしく放送されたので、それをここでまとめておこう。

前にも述べたように、大火砕流が続いたのは、午後4時8分から１４分までのことと考えられる。その直前の午後3時半頃から、地震計に振幅の大きな変動が何度も出現したため危機感をつのらせた測候所のＹ氏が、長崎県島原振興局総務企画課に対し、２度にわたって電話したのである（直通電話）。

混乱の中だから時間はあまり正確にわからないが、１回目は3時５０分頃で、「山の状態が危険になったので注意してほしい」という内容。２回目は4時ちょっと過ぎで、「避難してほしい」という内容だったという。こうした情報を伝えた根拠について、後のテレビ・インタビューに答えたＹ氏は、

「火砕流が連続して発生しているから．．．たとえば5月２９、３０日くらいまでは人家のところ近く、いちばん上のほうなんですね、北上木場の。あそこの２～３００メートルばかり近くまで来ておりましたので、やはり長時間火砕流が続くと、その人家まで達するだろういう判断はもっていました」（「ＮＨＫニュース２１」７月３０日放送より）

と語っている。

そして、この通報を受けた島原振興局では、島原警察署現地本部に２度電話（一般加入電話）をして、１回目は「山が緊迫している」、２回目は「避難させてくれ」と通知した。このときの状況を島原振興局の関係者は、

「測候所のほうからホットラインを通じまして、ちょっとようすが変だから注意をしてくれんかという連絡を受けまして、それを各関係機関にお流しをしたと。（また）少し間隔をおいて、もう避難をさせてほしいというような形で連絡がありましたもんですから、すぐわたしどもは各関係機関に手分けをして電話でもって連絡をしたということです」（前記「ＮＨＫニュース２１」より）

と話している。

次に、警察ではこれを受けて、4時5分過ぎ、現地にいた１３人の警察官に、無線によってまず「避難しろ」と伝えた後、「だれかいれば避難させろ」と連絡。ほとんどの警察官はこの指示によって避難したが、ＩさんとＨさんは、危険地域に残っていると思われる人たちに避難を呼びかけるため国道５７号沿いから北上木場地区へ入り、戻る途中、農業研修所付近で死亡した。その時刻は、4時１０分から１３分頃と思われる。

このように、測候所からの情報は警察にはほぼもとのままのかたちで伝わった。けれ

ども、残念ながら、消防団への情報は途中で変質してしまったのである。

つまり、測候所から通知を受けた島原振興局では、市の災害対策本部に午後４時頃、「山のようすがちがうようだ（ふだんの状況とはちがう）」と連絡した。これは、おそらく測候所からの１回目の電話を伝えたものと思われる。しかし、２回目の電話（こちらのほうが肝心なのだが）については、振興局は伝えたはずだと言い、市の災害対策本部では聞いていない、あるいはだれが受けたかわからないと言う。証言が食いちがうのである。

さきのテレビ・インタビューによれば、その経緯は次ようになっている。

「Ａ：おそらく４時近くだったと思いますけども、振興局のほうから電話がありまして、いままでの普賢の状況とちがうというようなことが情報に入りまして．．．．

Ｑ：情報というのは、避難させなさいみたいな、そういう話じゃあなかったんですか。

Ａ：いえいえ、ただちに避難というようなことじゃあなかったです。

Ｑ：測候所のほうは２本連絡をしたといっているんですけども、１本はどうなってしまったのか、その可能性はどのようにお考えになられますか。

Ａ：さあ、そこはですねえ、わたしもわかりません。」（前記「ＮＨＫニュース２１」より）

つまり、振興局から市の災害対策本部に連絡される過程で、「避難させてほしい」という肝心な情報が脱落してしまったのである。

けれども、不安になった災害対策本部は、北上木場にいた消防団にこの情報を伝えたいと考え、現場との連絡にあたっていた消防団本部の主任に「山のようすがおかしい。下がってほしい」と伝えるよう依頼した。最後に、これを受けた主任は、電話で研修所に「山のようすがおかしい。注意するように」と連絡している。これが４時過ぎのことで、研修所の電話に出たのは後に死亡した消防団員のＩさんらしいという。

ここでも、「下がってほしい」が「注意してほしい」へという情報の変化、あるいは証言の食い違いがあるが、放送では、その経緯が、

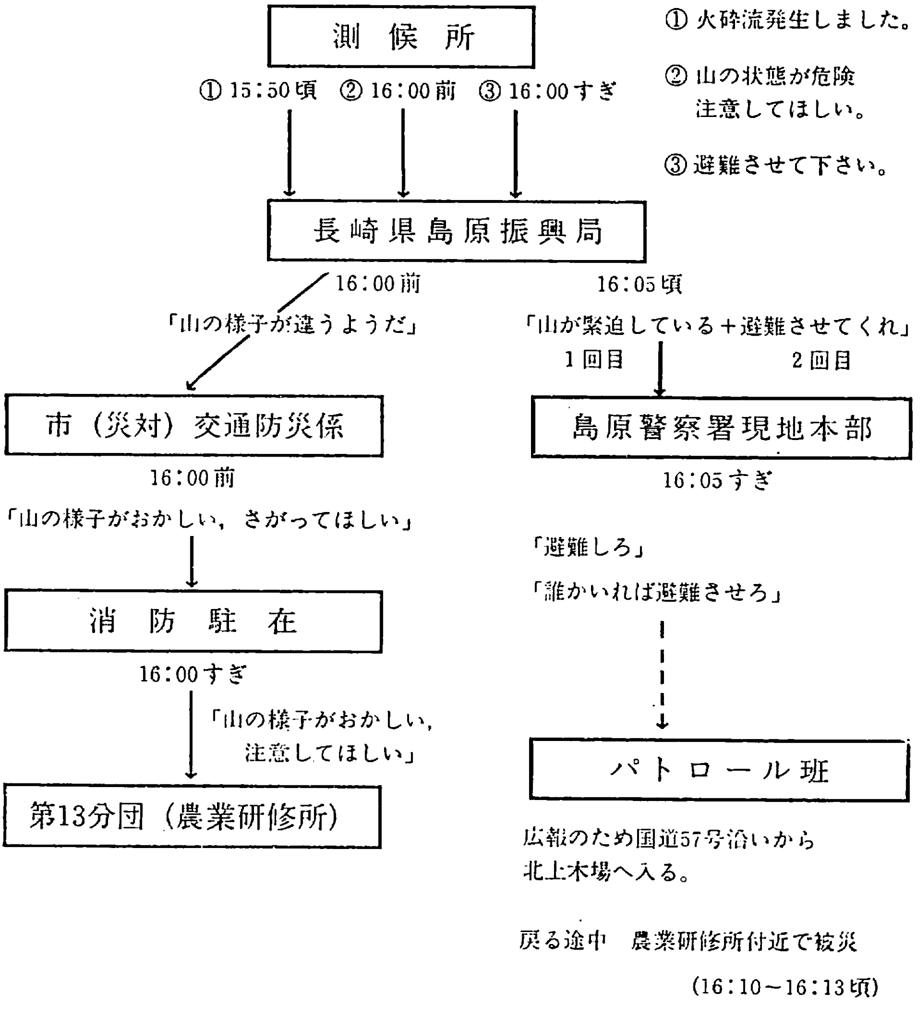
「市役所：もしものことがあったらということで、消防団が北上木場の農業研修所におるので、いちおう連絡をしたい、させたいということで、消防主任のほうにただちに連絡をして、下におりるようにということを連絡させたわけです。

主任：火砕流が頻繁に発生しているから注意するように、そのむね伝えるようにということだったもんで、消防団にもそのむね注意するように伝えました」（前記「ＮＨＫニュース２１」より）

と紹介されている。

要するに、測候所の係官が危機感を覚えて緊急に流した「避難するように」という情報が、測候所→振興局→市災対本部→消防本部→被災現場というルートをたどるうちだんだん変化していき、「注意するように」というかたちになってしまったのである（図１２）。

図１２．６月３日に測候所から流れた緊急情報の伝達経路（「ＮＨＫニュース２１」より）



では、この情報を受けた現場の消防団員はどう対応したのだろうか。

農業研修所にいた多くの団員が死亡してしまったいま、実態はなかなかわからないが、おそらく次の２つのどちらかという可能性が強い。

１つの可能性は、「注意するように」という情報が現場の消防団に対してほとんどイ

ンパクトを与えなかった、というものである。当時は火砕流より土石流への警戒が強かったし、火砕流があってもたいした災害にはならないだろうという雰囲気が支配的だったから、警戒を呼びかけるこの情報が効果を発揮しなかったのかもしれない。

たとえば、ＮＨＫの放送ではこうした可能性を示唆し、大火砕流発生の数分前に農業研修所に立ち寄り、間一髪で助かった消防団員の話を紹介している。

この人は、白谷地区消防団員のＢさん。Ｂさんの証言では、当時１０人ほどの団員が研修所のなかにいたというが、電話を受けたはずのかれらにはほとんど緊張した雰囲気はなく、ふだんとまったく変わらなかったというのである。Ｂさんは、インタビューに答えて、

「Ａ：何かその緊張した雰囲気はまったくなかったですね。みんな穏やかな感じで平凡としたしゃべり方でした。

Ｑ：じゃあ、ふだんとまったく一緒？

Ａ：ふだんとまったく一緒。

Ｑ：そこには、たとえば何か連絡があったような感じではなかったですか？

Ａ：そういうことは全然感じない。山の状態がおかしいとか、注意をしろとか指示があっとればみんな下のほうに下ると思うんです」（前記「ＮＨＫニュース２１」より）

なお、この放送では、北上木場にいた消防団員が「注意するように」という呼びかけを重視しなかった理由の一つとして、このセンテンスには目的語がなく、いったい何に注意すればいいのかはっきりしていないことがあった、と指摘している。つまり、当時は火砕流より土石流のほうに関心の焦点が置かれていたので、ひょっとしたらこれを聞いた人々は、火砕流に注意しなければならないことをはっきり認識したかどうかわからない、というのである。もしそういうことがあったとすれば、警戒を呼びかける表現の適切性という問題も、ここに含まれていることになる。

もう１つの可能性は、「注意するように」という情報に接して現地の消防団員が対応しようとしたが、火砕流の来襲が早すぎて間に合わなかったのではないかというもので、この推測は市の職員からわたしが直に耳にしている。

それによれば、当時の消防団の監視の対象はむしろ土石流にあったので、大火砕流の起こった午後4時前後には、多くの団員は平原橋や眼鏡橋に行って水無川を監視していたのではないか。ところが、多くの人が研修所のなかで犠牲になっている。これは、おそらく市から「注意してほしい」という電話連絡を受けた団員が、トランシーバで外にいた人々に知らせ、かれらが急いで戻ってきたところを火砕流が襲ったからではないか、というのである。次は、その推測を教えてくれた市職員の話である。

「Ａ：団の人たちは、トランシーバーを4機ぐらい持ってたんですね。だから平原橋とか眼鏡橋に行ってる団員であれば、この連絡が入ったらトランシーバーで引かしたんじゃないかなって思ってる。そりゃあ、向こうのしたことですからわからないんですけど。

Ｑ：当日は、多少雨が降ってたんでしょう？

Ａ：その日は午前中、２回か３回まとまった激しい雨が降ったんですよね。だから、土石流の監視にあたってくれっていうようなことで、団員を出したんです。だから、その日もたしか出てると思うんですけどね。

Ｑ：で、亡くなった方はたいてい研修所で亡くなってるんですか？

Ａ：研修所に一緒におった者で逃げてきた者の話によりますと、研修所にいたらすごい音がしたと。これはすごい土石流が来よるんじゃないかというふうなことで、外に出てて表で監視してたということです。

Ｑ：で、電話を受けた人から外にいた人には、どういう連絡方法とったんですか？

Ａ：トランシーバーでしょうね。結局、平原橋とか眼鏡橋とかは、ちょっと離れて距離がありますので。

Ｑ：平原橋から研修所までの距離ってどのくらいですか、急いで駆けて行くとしたら？

Ａ：どれくらいでしょうねえ、何で行ったかにもよりますでしょうし。まあ、消防自動車で行っておれば、２、３分でも急いで帰れば帰れるでしょうね。けど、何で行ったかわかりません」

ここでは、市からの連絡によって消防団が対応をしようとしたが、不幸にしてそれが間に合わなかった、という可能性が示唆されている。いまとなっては、上の２つのうちどちらが実態に近かったのかはわからない。しかし、いずれにしても、測候所からの連絡が研修所にいったときには、火砕流はまだ研修所を襲っていなかった。ぎりぎりだったかもしれないが、連絡は時間的には間に合ったことになる。

もちろん、これが間に合ったからといって多くの人が避難したかどうかはわからない。けれども、ここでの大きな問題は、伝えられた情報が最終的に変質してしまったこと、つまり「避難してくれ」という情報が途中で脱落したり、「下がってくれ」が「注意してくれ」になったりしたことである。しかも、注意すべきなのは、情報の変化が、危険を過小評価する方向に向かっていることであり、これは、しばしば述べてきたように、おそらく伝達にかかわった人々が、まさか火砕流によって大被害が起こるとは思ってもみなかったためと思われる。

ここであらためて考えさせられるのは、情報が人から人へ、あるいは組織から組織へと伝わるときは非常に変質しやすいということである。これは、個人の責任の問題ではない。あの混乱のなかで、しかも電話で伝えあうなら、情報は必然的に変質するだろうし、あるいは情報が途中で消滅するような事態も避けられないと思う。そうではなくて、問題は情報システムそのものにあると考えねばならない。つまり、人々の生命にかかわるような緊急情報を伝えるとき、人から人へ、あるいは組織から組織へといくつかの伝達の鎖を経るようなシステム、しかも災害時に輻輳しやすい電話を使うシステムがはたして適当だったかどうか、ということなのである。

今回のケースを調査して、わたしが連想したのは、昭和５８年に発生した日本海中部地震であった。

５月２６日正午に起こったこの地震では、東北地方の日本海側に大津波が発生し、秋田県を中心に１００人もの死者が出てしまった。このときは、１２時１４分に仙台管区

気象台から「オオツナミ」の津波警報が発令されたが、管区気象台→秋田地方気象台→秋田県庁→県内市町村と伝えられる過程で伝達ミスが起こり、末端まで津波警報が伝えられないという出来事があった。

しかも、津波警報には、別に管区気象台→東北管区警察局→秋田県警察本部→県内警察署→市町村とか、管区気象台→ＮＴＴ仙台市外局→県内ＮＴＴ電話局→市町村などのルートがあり、こちらのほうは首尾よく末端まで伝わったが、伝達時間が相当にかかり、結局、津波のほうが先にきてしまったところが少なくなかったのである。そして、住民の生命にかかわる津波警報が、こういうＡ→Ｂ→Ｃ→Ｄという伝達システムに依存しているのが適当かどうか、という議論が起こった。今回のケースと、きわめてよく似ていることに驚かされる。

つまり、緊急情報の伝達の齟齬をなくすためには、情報システムそのものを改善する必要があるということであり、このような事態を避けるため、たとえば、

①伝達のチェーンをできるだけ少なくするよう、現場の人々に直接情報を伝えられる同報無線などを導入する

②組織から組織への伝達にあたっては、情報の変質が生じやすいという認識をもって、必ず文書にしたり、情報を復唱して確認する

といった工夫がぜひ必要になる。それは、今回の災害において手痛い犠牲を払って、われわれが痛感した教訓であった。

8．情報システムが整備された

現在、島原市では、大災害当時にはなかったさまざまな情報システムが導入されている。

たとえば、電話の専用回線が導入された。

災害当時は、雲仙岳測候所と島原振興局のあいだにはＮＴＴの専用回線がひかれていたが、それ以外は一般回線であり、いちいち電話で連絡しなければならなかった。さきの緊急情報の伝達についても、測候所、振興局、市災害対策本部のあいだが専用回線で結ばれていたら、測候所から市の災対本部にいくまで情報の欠落はなかったかもしれない。そこで、災害後、測候所・九大島原地震火山観測所・島原振興局・島原警察署・市災対本部のあいだに専用回線がひかれ、いまではどこも他の機関に同時に情報が送れることになっている。

また、同報無線もその１つであろう。

報告書の冒頭でも述べたように、普賢岳噴火以前には、災害時の広報はもっぱら広報車を使うことになっていた。当初出された眉山崩壊時の避難計画をみても、住民への広報は主に広報車を使う予定だったし、６月３日の大災害まで、その状態が続いていた。だから、クレオパトラの鼻のような話だが、もし６月３日にあの上北木場地区に同報無線があったならどうだったか、とわたしはときどき考える。火砕流への注意が同報無線

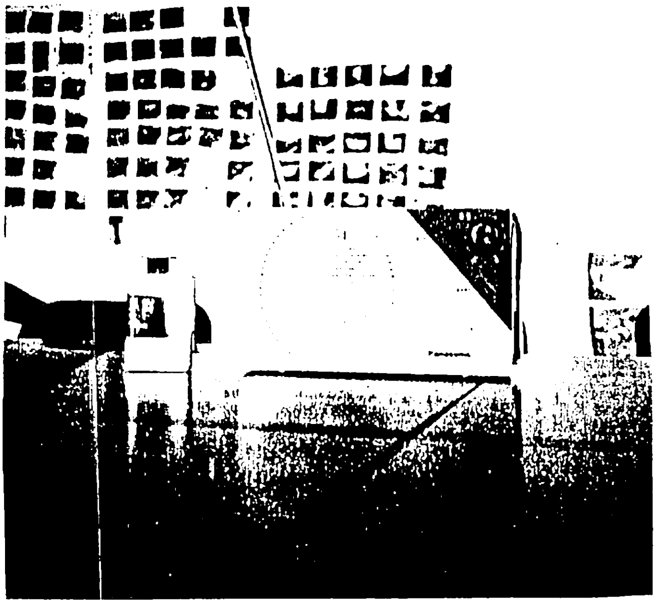
で放送され、その情報が危険地域にいた人々に届いたとしても、どれくらいの人間がそれによって避難したかはわからないが、死亡した２人の警察官は危険地域にいた人たちに避難広報をするために山に登って遭難したのだから、少なくともかれらは犠牲にならなかったのではないか、と思われるのである。

島原市では災害後、急きょ同報無線を導入することを決定した。同報無線は、屋外拡声器を市内各所に６７本設置し、別に戸別受信機を市や県の施設・病院や銀行・避難場所などに総計５３６台設置するといったなかなか大がかりなものであり、後には、北千本木町・南千本木町など、警戒区域以外の危険地域（警戒区域は設置工事ができないため）の住宅にも戸別受信機３５４台を設置することにし、さらに現在では、市内のすべての世帯に設置されている。

この無線は、８月１０日から一部地域に運用を開始し、３０日からは全面運用となった。聞くところによれば、当初は屋外拡声器を中心としたシステムを考えていたところ、運用早々にたまたま市長が車のなかで放送を聞いたが、あまりよく聞こえなかったため、これではいざというとき困るということで、急きょ戸別受信機も大量に導入することにしたのだという。

また、注目すべきなのは、この戸別受信機が、もっぱら屋内に置いてそれを聞くだけでなく、受信機に肩かけがついていて持ち運び可能になっており、やむを得ず危険地域に立ち入るときにはそれをもって入り、緊急情報をいち早く知ることができるということである。寡聞にしてわたしは、こういう方式をはじめて見たが、やはり窮すれば通ずということであろうか、こんなところにも島原市のせっぱ詰まった状況がうかがえるのである（図１３）。

図１３．島原市の戸別受信機



なお、市が同報無線を通じて流す情報は、測候所が出す火山活動情報（臨時火山情報は出される回数が多いため放送していない）や、市が行う立ち入り規制のお知らせなどが主体になっている。たとえば、次は、９月９日午後７時の放送で、翌日から南千本木および北千本木を警戒区域に指定する旨を伝えるものである。

「（９月９日１９時）こちらは防災島原市役所です。島原市災害対策本部からお知らせします。明日、９月１０日午後６時をもって、南千本木町、北千本木町は警戒区域

とし、立ち入りを制限します。同じく、明日9月10日午後6時をもって、上折橋町上組の居住者・滞在者その他の者に対し、避難のための立ち退きを勧告しますので、お知らせします。こちらは、防災島原市役所です」

ＮＨＫ放送文化研究所が１９９２年５月に島原市と深江町で行なった調査によれば、「普賢岳の活動に変化を感じたとき、さらにくわしい情報を得るためにあなたがまずとる行動はどれですか」という質問に対して、「テレビをつける」という人がもっとも多くを占めている（４６％）が、それに次いで「防災無線（同報無線のこと）に注意する」があげられている（４２％）。この結果は、島原だけではなく、島原と深江を合わせた数値であり（深江には以前から同報無線があった）、いちがいにはいえないが、市民の多くが同報無線の放送に注意していることがわかる。

最後に、これは島原市の話ではないが、防災無線システムについて興味深い出来事があったので、若干附記しておきたい。

それは、有明海をはさんだ熊本県・佐賀県の沿岸市町村が、現在、島原市と深江町の防災無線（移動系）の通信連絡を傍受している、ということである。移動系無線は回線が2チャネルあって、ひとつは市町村独自の周波数、もう一つは全国共通波が割り当てられている。いつもは、市町村独自のチャネルを使って通信をするのだが、今回の災害は、もし眉山崩壊といった事態が起これば対岸の市町村にまで被害がおよぶことも予想されるため、電波行政上の特例措置によって、島原・深江が共通波を使用し、それを対岸市町村が傍受できるようにしたものである。この措置は、大災害直後の6月4日から実施されており、全国でもはじめての試みだという。次は、このことを報じる新聞記事である。

「有明海沿岸市町村に防災無線の設置許可　九州電気通信監理局

雲仙岳の活動緊迫化を受け、九州電気通信監理局は４日までに、熊本県や佐賀県などの有明海沿岸の市町村に、長崎県島原市と同県南高来郡深江町の発令する防災行政無線を傍受できる受信機設置を特例で認める方針を固めた。無線の利用は電波法で厳しく規制されており、こうしたケースは全国初」（「西日本新聞」６月５日朝刊）

４．警戒区域が設定された

１．警戒区域の設定

６月３日の惨事は、各方面に大きなショックを与えた。大量の犠牲者を出した報道機関の衝撃もさることながら、災害対策基本法６０条にもとづいて事前に避難勧告を出していた地域で大被害を生んでしまったため、行政当局のショックは尋常ではなかった。そこで災害直後から、新たにきびしい対応を余儀なくされることになる。

その目的は当然ながら、ふたたび犠牲者を出さない対策を強力に推進することであり、まず海部首相は翌４日朝の閣議で、「今回の災害規模は予想を超える大きなものだ。まず住民の避難ということだ。これ以上人命を失わないよう、あらゆる努力をしてもらいたい」（「朝日新聞」６月５日朝刊）と語り、人命優先の対策の口火をきった。

そして同日、政府は、「雲仙岳噴火非常災害対策本部」（本部長：西田国土庁長官）を設置し、その第１回会合を開くとともに、西田長官自らを代表とする調査団を５日に現地に派遣することを決定した。次いで、帰京した西田長官は６日、衆議院災害対策特別委員会において、「多数の死者が出た原因の一つは、避難態勢の徹底を欠いていたことにあった」と述べ、また委員の質問に対しても、「避難を第一に２度と人命にかかわる災害が発生しないよう最大の努力をする」（「長崎新聞」６月７日朝刊）と答えている。

このように、国では人命優先の対策、とくに避難対策の徹底ということが最重要課題となった。これは長崎県も同様で、注目すべきなのは、すでに災害翌日の４日時点で、後に実施されることになる「警戒区域の設定」をすでに市に要請していることである。

もちろん、これは立ち入り規制に強制力をもたせて人的被害を防ぐための措置であるが、新聞記事によれば、市は当初、「警戒区域の設定」には消極的で、いままでの避難勧告措置を続行するつもりだったようである。次の記事は、そのあたりの事情について触れるものである。

「<u>当面は『勧告続行』　県警　市に『命令』を要請</u>

島原市の災害対策本部は４日朝、行方不明者の捜索などに関する情報収集にあたった。二次災害の恐れもあって、住民の間からは避難誘導態勢に不安も出ている。だが、同本部は当分、現在の『避難勧告』を続行する方針だ。

同本部の秘書広報部長を務めるＨ市長公室長は『溶岩監視カメラの情報に気をつけており、二次災害は防げるのではないか。災害監視や避難誘導態勢について、市はやるべきことはやった。当分の間は、同じ態勢でやる』と話した．．．．（中略）

長崎県警は４日、島原市に対し、普賢岳の火山活動に伴う災害が予想される場合は、災害対策基本法６３条に基づく強制力のある避難命令を発令するよう要請した。Ｋ島原署長が市役所に出向き、Ｙ市収入役に口頭で伝えた。Ｋ署長は『勧告では、住民や報道陣などに協力をお願いするだけ。２度と犠牲者が出ないよう、強制力のある命令

を出してほしい』と述べた。Y収入役は『前向きに検討したい』と答えた」（「朝日新聞」6月5日朝刊）

この記事のなかにある「災害対策基本法63条に基づく強制力のある避難命令」というのが、すなわち「警戒区域の設定」である。同法の規定には、

「（市町村長の警戒区域設定権等）

第63条　災害が発生し、又はまさに発生しようとしている場合において、人の生命又は身体に対する危険を防止するため特に必要があると認めるときは、市町村長は、警戒区域を設定し、災害応急対策に従事する者以外の者に対して当該区域への立入りを制限し、若しくは禁止し、又は当該区域からの退去を命ずることができる」

とある。一方、6月3日以前に適用されていた避難勧告措置は、同法60条の

「（市町村長の避難の指示等）

第60条　災害が発生し、又は発生するおそれがある場合において、人の生命又は身体を災害から保護し、その他災害の拡大を防止するため特に必要があると認めるときは、市町村長は、必要と認める地域の居住者、滞在者その他の者に対し、避難のための立退きを勧告し、及び急を要すると認めるときは、これらの者に対し、避難のための立退きを指示することができる」

という規定にもとづくものである。

この2つをくらべると、警戒区域設定には、「災害が発生し、又はまさに発生しようとしている場合において」とあり、避難勧告には、「災害が発生し、又は発生するおそれがある場合において」とあるので、前者のほうが危険性が高いときに出されるように思われるが、もっとも大きなちがいは、違反者に対する罰則規定の有無にある。

つまり、避難勧告の場合には、これに従わないものに対し罰則は科されない。その理由は、避難勧告は居住者や滞在者の安全を配慮し、居住者の利益になるための措置であって、従わないものは自らその利益を放棄するのだから、あえてそれ以上の罰則は科さないという論理である。

一方、警戒区域の場合は、はっきりした罰則規定がある。それは116条の規定で、「第63条第1項の規定（前記のもの）による市町村長の禁止若しくは制限又は退去命令に従わなかった者は、1万円以下の罰金又は拘留に処する」というものである。要するに、第63条の規定は第60条の規定より強制力があるため、避難の措置がより徹底し、人的被害が発生するおそれがそれだけ少ない、というわけである。人命の安全を考えれば、この措置は「伝家の宝刀」ともいうべきパワーをもっているといえよう。

しかし一方、避難措置に強制力をもたせれば、警戒区域に設定された地域は全面的に立ち入りが不可能になるのだから、社会活動や経済活動はまったくストップしてしまう。問題は、もし島原市に警戒区域を設定するなら、区域内に住む多数の人々が退去せざるを得ないことになり、その結果、住民の安全は確保されるかもしれないが、社会・経済活動のすべてが停止し膨大な損失が生じるということである。

過去の火山災害でも、第63条が適用されたことがあった。たとえば、昭和61年の

伊豆大島噴火や63年の十勝岳噴火でも、火口周辺に警戒区域が設定され、人々の立ち入りが禁止されたという。しかしこれらの規制は、警戒区域内の居住者ではなく、むしろ観光客を対象としたものであり、それがもたらす経済的影響はネグリジブルだった。

けれども、今回はまったく事情がちがう。6月3日以前の避難勧告も家屋・工場・田畑が散在する地域に適用されていたが（だからこそ、多くの人が出入りしていたのである）、火砕流が拡大するおそれが強かった当時はもっと多くの居住地域が危険になっており、また災害が長期化する可能性も大きかったので、警戒区域を設定することによって、多数の住民の生活と地域経済への影響ははかりしれないものになる、と予想されたのである。

もちろん、国も県も市も人命優先の対策をとるという至上命題に異論のあるはずはないが、島原市は一方で、警戒区域の設定が市民にもたらすさまざまな影響を心配した。だから、市長は最初これに消極的だったようで、5日付の「長崎新聞」には、「市街地を警戒区域に設定した前例はない。住民が全く立ち入れなくなるとゴーストタウンとなる」という市長のコメントが掲載されている。

けれども、事態は切迫しており、今後3日の事態を上回る被害もたぶんに予想された。そこで、たとえ住民生活や地域経済に大きな影響を与えるにしても、人命の保護という立場から早急に警戒区域の設定を、という長崎県と警察の説得が続けられた。そして、ついに6月7日、島原市は警戒区域を設定することになった。

先にも引用した市長の手記には、その決定にいたるプロセスが次のように書かれている。

「．．．警戒区域を指定して法で縛った場合、生活上の問題や経済的な問題など、県や国がどこまで補償してくれるのかという疑問がありました。

高田知事から、水無川流域の避難勧告地域を警戒区域とし、全世帯を強制的に一時避難させるようにと要請されたのは、大惨事の翌々日でした。国から知事に対して指導があったともお聞きしています。避難勧告地域は13町1090世帯、4222人でした。

私は、島原観光ホテルの特別室で高田知事から2日間にわたって説得を受け、法による規制は相当の経済的、生活上の問題もあるということで、国、県とも十分強力な援助をするとの約束をいただき、それなら人命の安全には代えられない、と警戒区域の設定に踏み切る決断をしました。そして6月7日午後6時から、27日正午までの20日間、警戒区域の立ち入りを制限することにしたのです。私としては、辛い決断でした」（鐘ヶ江管一「島原大変オロオロ日記」『文藝春秋』1991年9月号285ページ）

つまり、市長は、住民の生活上の問題や経済的な問題を憂慮してなかなか踏み切れなかったが、国や県が十分な援助をすると約束したから警戒区域の設定を断行したのだ、というのである。

こうして、6月7日12時から、島原市は、わが国で初めて、多くの住民が住む市街地に警戒区域を設定することになった。その対象地域は、北上木場町、南上木場町、天

神元町、札の元町、白谷町の５町のうち、国道５７号線から山手側の１５６世帯・６９０人、期間は６月２７日までの２０日間である。７日の「長崎新聞」朝刊は、このことを「５町立ち入り禁止に　警戒区域を設定」と一面トップで報じ、「全国的に例もなく、市民生活への影響も甚大で、非常に苦しい決定となったが、高田知事の要請もあり、実施することにした」、「日常生活や産業活動に少しでも支障が及ばないように国、県の協力で対策を講じたい」という市長の談話を掲載している（図１４）。

2．ハザードマップが作られていた

以上が、警戒区域設定までのおおよその経過である。

ところで、こうした警戒区域を設定するさいには、当然ながら、どこからどこまでを危険区域にするかという「線引き」が大問題になる。警戒区域のなかに入れば立ち入りは厳重に規制されるが、ちょっとでもその外になれば、もちろん避難勧告地域にはなるだろうから、立ち入りはけっして自由ではないにしても不可能ではないので、線引きの問題はなおさら重要である。今回の災害では、その線引きの根拠になったのは「ハザード・マップ（災害予想区域図）」であった。

このハザードマップは、島原市の依頼で（財）砂防・地すべり技術センターが作成したものである。

前述のように、雲仙岳噴火によって予想される災害のうち、土石流と火山泥流については、すでに長崎県が「雲仙岳緊急火山対策検討委員会」を設置して、そのハザードマップ作りや土石流監視装置の設置などの対策を行っていた。また、５月２４日に火砕流が発生した後、砂防工事の必要から、砂防・地すべり技術センターでは内部的に火砕流のハザードマップも検討していた。このセンターには、火砕流で有名なメラピ山にくわしいＳ氏がいて、かれを中心に私的な図を検討していたのである。

一方、島原市では火砕流が発生した後、ある民間の地質会社に火砕流のハザードマップ作りを打診したりしたが、結局、砂防・地すべりセンターに依頼することになって、６月１日夜、「至急ハザードマップを作って６月３日いっぱいに持ってきてくれ」と電話で直接依頼した。これを受けて同センターは、２日の日曜日、前から検討していたものを下敷に、多くの社員を動員してこれを作成したのである。

火砕流のハザードマップとは、要するに、どのくらいの量の溶岩ドームが崩れると火砕流がどこまでいくか、という予想図である。

その作成方法は、今回の火砕流がメラピ型であるという前提のもとに、「火砕流の流下距離は崩壊する溶岩ドームの容積の０．５乗に比例する」という数式と、地形データや風向きなどを考慮して作成したものであった。また、火砕流の本体は河川沿いに流下するが、熱風のほうは外湾部で高くまではいあがる、などの想定もしている。そして、過去の火砕流の調査から、いままでの最大量の２倍の溶岩が落ちたときの流下距離と流下範囲を示したものを「ケースＡ」、６倍の溶岩が落ちたときのものを「ケースＢ」と

図１４．「警戒区域」の設定を報じる新聞記事（「長崎新聞」６月７日朝刊）

長崎新聞　1991年（平成3年）6月7日　金曜日

5町立ち入り禁止に

島原市長が発表

警戒区域を設定

水無川上流域　新たな火砕流の恐れ

【島原】鐘ケ江島原市長は六日夜、記者会見をし、多くの犠牲者と負傷者を出した三日の大規模火砕流発生を踏まえ、「当面、七日正午から二十七日正午までの二十日間、水無川上流域の南、北上木場、天神元町、札の元町、白谷町の五町のうち国道57号から西側（山手側）を、災害対策基本法六三条一項に基づく警戒区域とし、立ち入りを制限、禁止する」と発表した。

【24、25、26、27面に関連記事】

警戒区域の設定を発表、厳しい表情の鐘ケ江市長 ＝島原市役所＝

同市長は理由として「警戒区域の設定は住民の保護が目的。三日以降、普賢岳東側斜面に溶岩塊がせり出すなど新たな人命の危険が予測される」と説明、さらに「全国的に例もなく、市民生活への影響も甚大で、非常に苦しい決定となったが、高田知事の要請もあり、実施することにした」と述べた。五カ町のうち対象となるのは百五十六世帯、六百九十人。

警戒区域の設定に伴い、居住者が生活上必要最小限の場合に限り、市長が特別に認めた以外は、立ち入りが実質上不可能という厳しい措置となる。このため、市長は「日常生活や営業活動に少しでも支障が及ばないように国、県の協力で対策を講じたい」として市役所と県島原振興局内に生活相談窓口を設ける考えを示した。

一方、市災害対策本部は現在実施している十三カ町の避難勧告対象地区について、新たに安中地区の船泊町、梅園町、南崩山町の一部、秩父が浦町の一部の四町（約四百七十世帯、千六百人）を追加することを、七日にも決定する。

同地区の避難計画は、土石流を想定したもので今回、火砕流の多発に伴い、財団法人砂防地滑り技術センター（東京）に依頼し、シミュレーションを通じた火砕流発生予想の地域マップを作成、十分な警戒が必要である－との報告を受けて、地域拡大を検討していた。追加されると対象地区は十七町、千五百六十世帯、五千八百二十二人となる。

災害対策基本法六三条一項　災害が発生しまたは発生しようとしている場合、人の生命または身体に対する危険を防止するため、特に必要があると認める時は警戒区域を設定し、災害応急対策に従事する者以外の者に対し当該区域への立ち入りを制限、もしくは禁止し、または当該区域からの退去を命じることができる。違反者には一万円以下の科料などの罰則もある。

付近でテレビ長崎クルーも火砕流を狙っていた ＝6日午前9時20分、島原市北上木場町＝

新たに8人身

火砕流惨事　溶岩

【島原】雲仙・普賢岳の火砕流惨事から四日目を迎えた六日、陸上自衛隊と県警は被災現場の島原市水無川流域で空と陸から行方不明者の捜索を続行、男性の一遺体を収容した。捜索は取材陣を乗せた自衛隊ヘリが被災現場近くで不時着するアクシデントがあり、同日午前中で打ち切った。捜索再開は早くても七日午後からになる見込み。

県警による身元確認作業は終日行われ、同日午後十時までに島原市北上木場町甲、農業、谷口金市さん(六二)やフランス人火山研究者のモーリス・クラフトさん(四九)夫妻ら計八人の身元が新たに判明した。自衛隊がこれまで収容した二十七遺体のうち、身元判明者は二

た市 家族 て避 きる

して 同 は 料 見 でも

センターで水無川流域

捜索

8・00 自衛隊、装甲などで水無川流域での捜索・収容活動を再開

9・00すぎ 自衛隊が遺体を収容

10・42 水無川上流に道陣ら約十人を乗せた自衛隊の大型ヘリコプター

11・04 不時着したヘリコプターに乗っていた報道陣ら十二人を自衛隊が

11・30 収容した遺体のうちテレビ朝日記者…之さんら三人の身元

して２つ作成したのである。当時の溶岩流出量は、１日に８～１２万立方メートルだったので、最悪の場合には海まで到達するということになった（図１５）。

ところが、約束通りに３日午後６時、完成したハザードマップを持ってＳ氏が長崎に向かう途中、羽田空港のロビーのテレビで大火砕流の発生を知ったという。まさに劇的な話である。かれはそのまま飛行機に乗り、３日のうちに島原についたが、災害直後の混乱のため、説明は翌４日に持ち越された。

けれども、３日の火砕流のコースと範囲は、ハザードマップの予測するところ（ケースＡ）とほとんど一致しており、多くの人にハザードマップの信頼性と有効性を印象づけるに十分だった。そして４日の説明のとき、かれはこのハザードマップにもとづき、今後火砕流の量が大きくなれば、国道ばかりか海まで達するおそれがある（ケースＢ）と強調したのである。

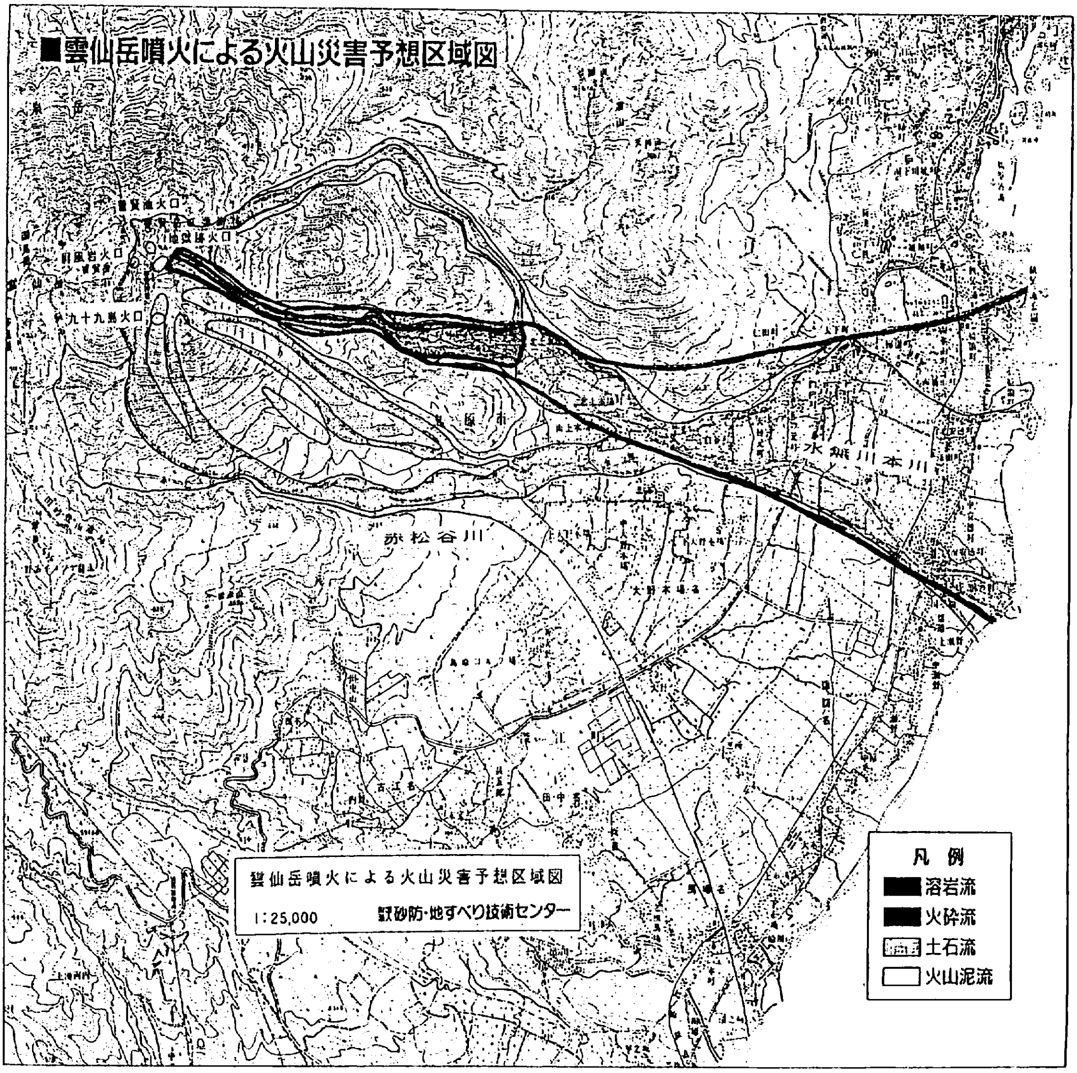
こういう経過があって、島原市は６日夜、このハザードマップを公表するとともに、予想される危険区域を７日正午から「警戒区域」にする、と発表した。ハザードマップが３日の災害に間に合わなかったのはまことに残念だが、これがなければその後に警戒区域の設定がスムーズに行われたかどうかわからない。

なお、このハザードマップは、ＮＨＫがスクープしてこれを大きく放送した。それは、４日夜の「ＮＨＫニュースセンター特集」のなかだったが、つまり、行政が公表する２日も前に、住民には周知の事実になっていたわけである。放送では、現地からＫ記者が、ハザードマップを示しながら、次のような報告を行っている。

「（Ｋ記者）火山の場合には溶岩の性質とか山の地形などから最大起こりうる災害の予測というのをあらかじめしておいて、それに対する対策を立てるというのが防災上もっともすすんだやり方といわれてまして、これを災害予測図というんですけども、実は、雲仙岳でも災害予測図をつくっていたんです。実はこれがそうなんです。これが民間の研究機関である砂防地すべり技術センターが、島原市の依頼を受けてつくっていた災害の予測図なんですね。これは、火砕流が頻繁に起こるようになって急きょつくっている最中でして、その最中に昨日そういう災害が起きてしまったんですが、噴火が起こった場合にある条件のもとでどういう噴火が起こるとどういうふうになるかというのをコンピュータで予測したものなんです。（中略）

この災害予測図を火砕流についてみてみます。そうすると次のようになります。６月２日までの火砕流は水無川の上流の北上木場地区と南上木場地区から３００メートルのところまで離れていました。『想定Ａ』というのが、コンピュータが計算したものなんですけれども、火砕流の噴出量がそれまでの２倍になった場合というふうにして計算したものです。火砕流の先端は上木場地区をのみこんで、その下の白谷町まで一部が達しています。これは、昨日の夕方多くの犠牲者を出した火砕流で現実に起きたこととぴったり一致しているんですね。割合、谷筋のみを限定して流れてきた火砕流は、ここまでくると先端がかなり広がってくるんです。多くの犠牲者は水無川よりもずいぶん高いところにいて、ある意味では川よりも一見安全そうなところにいて被害にあっていることを考えますと、火砕流は実は川よりもかなり広い幅で流れてくる

図１５．６月３日に作成されたハザードマップ（火山災害予想区域図）（砂防・地すべり技術センター作成）



ということをあらかじめ知っていればちがった結果になったのではないかと思われます。（中略）

それから『想定Ｂ』というのは、６月２日までの噴出量の６、７倍の噴出量が実際にあった場合ということです。そういうことが起こるかどうかはまったくわからないんですけれども、６、７倍の量の溶岩が出ると、火砕流は一気に扇型に広がって海まで達する計算になります。いまは移動してしまいましたけれども、当初住民が避難していた第五小学校とか第三中学校の２つの避難場所はこの範囲内に入っています。また、避難勧告が出ていない地区もこのちょうど一番北側の部分に入っていまして、常に安全側にたって災害の被害を想定するという立場に立つならば、防災対策を立てるうえで非常に重要な情報になる災害予測図なんですね」（「ＮＨＫニュースセンター特集」６月４日放送より）

住民の避難を促進するうえで、この放送は大きな役割を果たした。

当初、島原市はハザードマップを危険地域の判断のための行政資料として使う意向だったようで、（実際、住民への公表は６日に開かれた市議会の全員協議会の席上がはじめてだったという）、ハザードマップがどうしてマスコミに知られたのか多少詮索するようなこともあったが、住民のほうはこの放送（だけではないが）をみて、ますます危機感をつのらせ、多くの人が自主避難したという。わたしが現地で聞いた話では、ある人の住む団地は２１１軒のうち警戒区域設定以前に１０軒をのぞいてすべて避難してしまったとのことだし、またそれは、住民が警戒区域の設定をやむを得ない措置として認める要因にもなったと思われる。

もちろん、これだけ大量の人を避難させるためには避難所の整備も必要なので、７日正午に警戒区域が設定されたとたんに全員が避難するわけにはいかず、結局、最後の人たちが避難したのは８日の夕方になった。

そして、その数時間後の午後７時５１分頃、３日を上回る規模の大火砕流が起こったのである。火砕流の先端は国道５７号線を越え、海岸まで２キロの地点に達するほどだったが、地域内の住民は全員避難していたため、不幸中の幸い、人的被害はまったくなかった。住民のなかには火砕流発生の数時間前に避難が終えた人も少なくなかったから、まさに間一髪といってもいい。翌日の「日本経済新聞」は、その状況を

「猛スピードで山肌を駆け下りた熱雲が、無人と化した町をあっけなくのみ込み、海岸線まで迫った。斜面は山火事の炎に包まれ、市街地にも小石のような火山れきが降り注ぐ。８日夜、雲仙・普賢岳で再び発生した大火砕流は、多くの犠牲者を出した今月３日の規模をさらに上回り、ふもとの町を恐怖の底に陥れた」（「日本経済新聞」６月９日朝刊）

と書いているが、にもかかわらず人的被害がなかったのは、警戒区域の設定によって住民がいなかったからにほかならない。

そして、その背景にはハザードマップの存在があったわけで、ハザードマップがこんなに劇的に被害の減少に役立ったケースはかつて一度もなかった。ここ数年、防災関係者がつとに強調してきたハザードマップの有効性を改めて痛感させる出来事だったとい

えよう。

この警戒区域について、最近のマスコミでは、これを住民生活を侵害し地域経済を破壊させるものだ、とする論調がときおり出るようになった。これほど長期間の強制避難を強いられた住民の心情を思いやれば、こうした見方をするのもやむを得ないし、住民生活と地域経済については適当な対策を講じなければならないのは当然である。しかし一方では、この警戒区域の設定によってどれほど多くの人命が救われたかわからない、という面があることを忘れてはならない。

たとえば、いま触れた6月8日の大火砕流は、警戒区域設定後に発生したから人的被害がゼロだったと思われる。

また、6月30日には有明海まで達する大土石流が発生した。そのときわたしはたまたま現地にいたが、夕方から夜にかけて、バケツをひっくり返したような猛烈な降雨となった。そして翌朝、自衛隊のヘリコプターが上空を飛んではじめて、大土石流が海まで達していることがわかったのである。もちろん、土石流の通った地域はほぼ全滅だったが、これも警戒区域のなかで発生したため人的被害はけが人1人だけだった。

それから、今度は9月15日、火砕流によって深江町大野木場地区で火災が起こり、小学校や民家が燃えたが、これも警戒区域のなかだったため、死者もけが人も出なかったのである。

これらのケースで、いずれも犠牲者が出なかったもっとも大きな理由は、強制力のともなった警戒区域が設定されていたからであって、もしこのとき強制力のない避難勧告措置だけしかなかったら、6月3日の災害がふたたび起こらなかったとだれが断言できるだろうか。防災を研究するわたしのような立場からみると、今後2度とこうした悲劇をくり返さないために、警戒区域のもつこうした防災効果が、もっと強調されるべきではないかと思うのである。

3．警戒区域を考える

ところで、島原市と深江町では、いまでもこの「警戒区域の指定」がずっと続いている。最近では、だんだん避難勧告区域に緩和するなどの規制緩和が行われているが、それでもまだ、数千人の住民が不自由な避難生活を送っている。

1978年の有珠山噴火時の避難生活は1ヶ月だったし、1986年の伊豆大島噴火のときも、1ヶ月で避難生活にピリオドを打っている。それに対し、雲仙では避難生活がもう1年を越えているのである。

そのため、警戒区域を設定するとき市長が心配したとおり、住民の生活被害は深刻であり、とくに警戒区域に田畑のある農家や仕事場をもつ自営業者は、生活の手段を奪われ、収入ゼロの日々がはたしていつまで続くのか、その不安はつきることがない。そこで現地では、被害の補償や生活の援助を求める切実な声があがっている。とくに、被害を「特別立法」（これをだれが最初に言い出したのかずいぶん調べたがわからなかった。

世間一般が思っているのとちがって、当初は海部首相はこのことばを使っていないようである）によって救済してほしいという声が、住民のあいだに広く起こった。

わたしも、火砕流や土石流による住宅・家財の被害を国が補償してほしいという要望をいろいろな人から聞いているが、その理由としては、

①自然災害による被害は個人の過失ではないから

②災害の原因となった普賢岳は国有地だから

などというのがあげられていた。

けれども、政府などの見解では、これはなかなか困難なようである。

まず①については、いままで自然災害による私有財産の損害は個人の責任で解決するのが原則であり、もしこの原則を変えれば、たとえば南関東地震や東海地震によって生じるであろう膨大な損害も補償することになり、これでは国家財政は破綻してしまう。

また②は、国家公務員の過失や国の造営物に瑕疵があったとき適用される国家賠償の問題だが、これも、国家賠償法は、たとえば道路やダムなどの工作物に瑕疵があったとき適用されるのであって、今回のように土地自体の瑕疵は対象にならないのだという。

ところが、現地ではもう１つ、火砕流・土石流による被害は補償できないにしても、せめて「警戒区域の設定という行政措置によって生じた生活被害・経済被害だけは補償してほしい」という声も強い。

たとえば、今年１月下旬に「島原生き残りと復興対策協議会」と「在京者による島原半島災害・復興対策本部」が連名で政府機関に提出した請願書のなかでも、「警戒区域の設定に伴って生じた住民の損失を補償する措置を講じられたくお願い申し上げます。また、警戒区域などの設定権者の見直しについてもご検討をお願い申し上げます」という項目がトップになっているのである。

しかし現在のところ、こうした補償も実現はむずかしいようだ。

その理由は、「（警戒区域の設定権）は、市町村長に住民の保護、具体的には、住民の生命又は身体の保護を確保するために与えられているものであり、他の人々や公共のためではなく、住民等自身のためになる権利制限である。また、人命は財産や事業に優先すべきものである。したがって、警戒区域の設定等によって生じた損失に対して補償といった考え方をとることは困難である」（吉開正治郎「雲仙岳噴火災害対策」『ジュリスト』１９９１年１０月１日号）というものであるが、たしかに、こういう議論は筋が通っているし、それなりに説得力をもつものでもあろう。しかし、にもかかわらず、わたし自身はもう少し別の考え方はできないかと思うのである。

法の規定では、警戒区域を設定するのは市町村長ということになっており、さきに触れたように、いままでにも伊豆大島噴火や十勝岳噴火のとき、一部地域で警戒区域が設定されている。

けれども、今回の普賢岳噴火で特徴的なのは、１万人を越える住民の居住地区が警戒区域に指定されたことであり、それがもたらす影響はきわめて大きい。そのため、島原市長は当初、警戒区域を設定すべきかどうか心は千々に乱れたのであった。結局、国と長崎県の説得によって踏み切ったわけだが、その後の経過をみると、前述のように、も

しこのとき警戒区域を設定していなかったら、あるいは6月3日を上回る大被害が出ていたかもしれないのである。しかしその反面、地域住民に対してたいへんな損失を与えてしまった。

もちろん、国もこうした事態を黙ってみていたわけではない。

たとえば、政府は「雲仙岳噴火災害対策」として21分野94項目の各種対策を行っているが、そのなかには、「警戒区域等内に住居を有するものに対する生活安定再建資金の貸付」という項目があって、これは1世帯当り100万円を限度として資金を貸し付ける（償還期限10年：利子は県設置の基金から補給するため、無利子）というもの。もう1つは、「長期避難者に対する食事供与事業の実施」という項目で、これは長期避難を余儀なくされている人に食事供与または1人1日当り1000円の金銭を支給する（ほかに、県の基金から1世帯月3万円の生活雑費も支給する）というものである。これは、かつての災害ではみられなかった画期的な対策である。

こうした対策がたてられたため、当初はきわめて多くの住民が国の対応を批判していたのに、しだいにその評価が変わってきたようである。さきにも紹介した1992年5月のNHK調査でも、今回の災害に対し国が「十分対応している」と評価する人が8％、「まあ対応している」という人が29％となっており、これはNHKが91年10月に行なった調査結果とくらべれば、かなりあがってきている。

しかし一方、国・県・市をまたぐ複雑な防災行政の仕組みがわかりにくいということもあって、対策のなかにはまったく利用されていないものも少なくないし、また住民の不満はまだまだ小さくない。客観的にみてもこうした対策で十分かどうかは、議論の余地があるところといえよう。

なかでも、わたしがもっとも心配するのは、住民自身の生命の安全のためのやむを得ない措置だという理由で、もし今回の警戒区域の設定に対して十分な救済が行われないならば、おそらく今後、あきらかに危険の兆候があっても、市町村長は、市民生活や経済的損失の深刻化をおそれて警戒区域の設定を躊躇するだろう、ということである。そのために、みすみす犠牲者が出てしまったら、それこそとりかえしのつかないことになる。

何度も述べてきたように、警戒区域の設定は人的被害の防止という点で絶大な防災効果をもつ。もちろん、これを乱用してはならないが、いわば最後の切り札として、設定権者に経済的影響への心配をさせず、防災的な観点からのみ発令できるような仕組みをつくっておく必要があるだろう。そのためには、前記の「島原生き残りと復興対策協議会」と「在京者による島原半島災害・復興対策本部」の請願にあるように、市町村長に与えられている警戒区域の設定権を国や県に移すとか、あるいは市町村長が経済的影響への配慮をしなくてもすむような補償措置を行う、などの対応が要求されるのではないだろうか。

いずれにしても、雲仙普賢岳を契機に新しくクローズアップされたこの問題は、われわれ防災にかかわる人間が真剣に議論するに値するテーマだといえよう。

４．流言蜚語が広がった

さて、６月３日の大災害の後、島原市内にはさまざまな流言蜚語が流れた。

とくに、「眉山が崩壊する」、「また大火砕流が起こる」、「警戒区域に泥棒が入っている」という３つの流言は、かなり広範囲に広がったようで、わたしたちが８月初旬に島原市と深江町で行なったアンケート調査によれば、「眉山崩壊」のうわさに接した人は島原市６８％、深江町５０％、「大火砕流再来」のうわさは島原市５６％、深江町５３％、「空き巣出没」のうわさにいたっては、島原市８４％、深江町８０％という圧倒的多数にのぼっていたのである。

また、いままでの災害流言の多くと同様に、これらの流言蜚語は、日頃からのコミュニケーション・ネットワークを通じて広がっていた。つまり、アンケート調査において、うわさを聞いたその情報源をたずねたところ、「近所の人」がもっとも多く（島原市４８％、深江町４９％）、以下、「親戚・知人」（島原市２９％、深江町２０％）、「職場の人や同業者」（島原市２７％、深江町２０％）と続いていた。

さらに、こうした流言を聞いたときの信用度と不安度も、過去のケースとほとんど同じだった。つまり、多くの人はこうしたうわさに「半信半疑」であるが（島原市５８％、深江町４９％）、一方、不安度はけっして低くなく、「とても不安になった」人は島原市が２４％、深江町が２１％、「不安になった」人は島原市２８％、深江町２３％で、ほぼ半数が不安だったと答えている（以上、表４、表５）。

要するに、多くの人は、こうしたうわさを聞いて全面的には信用しないものの、万一のことを考えると不安を拭いきれなかったのである。

表４．どんなうわさを聞いたか

	島　原	深　江
眉山が崩れる	67.7%	49.7%
また大火砕流が起こる	56.3	53.1
避難住民の留守宅に空き巣が入っている	83.8	79.5
警戒区域は５、６年も立入禁止が続く	13.3	8.3
島原市(深江町)の災害対策本部が市・町外に逃げ出した	3.4	4.5
この災害は天草四郎のたたりだ	2.6	3.8
近いうちに津波がくる	9.9	13.9
その他	2.3	2.1
上のような話は一つも聞かなかった	4.0	5.2
DK. NA	2.1	3.1
計	654 人	288 人

表5．流言蜚語の情報源、信用度・不安度

	島　原	深　江
家族	11.2%	8.0%
近所の人	47.7	49.0
職場の人や同業者	26.8	19.8
親戚や知人	28.6	20.1
報道関係者から直接聞いた	2.8	3.1
テレビや新聞で知った	14.2	16.3
役所・警察・消防から聞いた	3.1	2.8
その他	4.0	1.7
DK．NA	11.0	17.4
計	654 人	288 人

	島　原	深　江
本当の話だと思った	28.4%	29.9%
半信半疑だった	57.6	48.6
まったく信じなかった	4.6	5.2
DK．NA	9.3	16.3
計	654 人	288 人

	島　原	深　江
とても不安になった	24.2%	21.2%
不安になった	28.1	22.6
少し不安になった	30.3	30.6
不安を感じなかった	6.9	7.6
DK．NA	10.6	18.1
計	654 人	288 人

次に、こうした流言の中身についてもう少しくわしく触れると、多くの人をとりわけ不安にさせたのは「眉山が崩壊する」という流言だった。というのは、島原市は２００年前に眉山の崩壊によって１００００人を越える死者を出したが、このときも、それに先だって普賢岳の噴火が起こっているため、多くの人々が噴火と眉山崩壊を結びつけて考えるからである。

この流言には、「眉山に亀裂が入った」とか「眉山が噴火する」などのバリエーションもあり、どうやら昨年１１月の噴火直後からあったらしい。しかし、全市的に拡大したのは6月３日の大火砕流の後であった。

とくに6月７日、ある放送局が突然大挙してホテルを替えたとき、あれは眉山に亀裂を見つけて逃げ出したのだ、という話がパッと広がった。

この日は、前述のように、島原市長が、火砕流の危険地域を「警戒区域」に設定した当日だが、偶然その日、警戒区域にほど近いホテルに滞在していた民放ネットワークの取材陣８０人が、別のところに移動することになっていた。ところが、ちょうどその朝、元従業員だった女性が1階ロビーを通りかかったとき、その民放のスタッフが「眉山が．．．」と話しているのをふと耳にした。この元従業員は、取材陣の全員が引き上げることをすでにホテル関係者から聞いており、どうしてかなあと漠然とした不安をもってい

たので、スタッフの話を耳にするとすぐ帰宅して、夫に「眉山に亀裂が入ったらしい。テレビ局の人がホテルを出ていった」と伝えた。次に夫が他の人にこの情報を話し、それが次から次へと伝わって、島原警察署の対策本部に「眉山に亀裂が入ったという情報がある」となって報告されたのである。

断片的な情報が憶測され、やがて断定に変わっていくという流言蜚語の典型をみるような思いだが、眉山崩壊の話はこうして一人歩きしていった。

つまりその後、警察では、ホテルをおとずれてこの話をたしかめると同時に、この情報を島原市や自衛隊の災害対策本部に連絡し、また、万一にそなえて島原－深江間の道路を通行規制した。市の災害対策本部でも、これを九州大学島原地震火山観測所の太田所長に伝え、太田所長が眉山の調査におもむくことになった。そして当然、この話は市民のあいだにも広がり、ホテル周辺では、話を聞きつけて逃げ出した市民もいたということである。

眉山崩壊の流言は、その後も断続的に発生している。なかには、「警察官が眉山に亀裂を見つけて逃げだした」とか、「太田所長が娘さんに眉山が崩壊すると話した」などと、いかにももっともらしく脚色したものもあった。

この流言はきわめて根強いため、島原市では6月11日、「普賢岳噴火の活発化に伴い、眉山について何かと噂されておりますが、専門家の先生方の観測によりますと、『安全』ということです。デマや噂に惑わされることなく安心してお過ごしください」というパンフレットを配り、これを鎮静化しようとしたほどだったのである（図15）。

過去の災害流言対策は、主に同報無線やテレビ・ラジオを使ってこれを否定するものが多かったように思われる（たとえば、1978年の伊豆大島近海地震後に起きた「余震情報パニック」のとき）。この方法は、速報性をもった電波を使うため、情報がすばやく住民に伝わるが、一方、聞き間違いや誤解を招くこともある。とくに、住民が不安や恐怖に陥っているときはその傾向が強い。ところが、今回島原市が行なった流言対策はパンフレットが主体だった。印刷メディアを使ったこの方法は、住民がこれにくりかえし接触できるし、保存もきくので、かなり有効だったようである。

次に、「避難して無人になった家に泥棒が入っている」という流言も、避難所を中心に広がっていた。とくに、島原市では広範囲に広がっており、わたしたちのアンケート調査では、もっとも多くの人が聞いたのはこの流言だったし、またこの話を聞いて心配した人も「眉山崩壊」に次いで多くなっていた。そしてこれにも、「熊本から窃盗団が入り込み、貴重品やテレビ・冷蔵庫などを盗んでいる」とか、「引っ越しセンターのトラックを装ってしきりに盗んでいる」とか、「そういえば自分が避難するとき怪しい男がうろついていたがあれが泥棒ではないか」とか、いろいろなパターンがあった。

警戒区域にはだれも入れないため、この流言に住民はかなり動揺し、心配のあまり、警戒区域になっている自分の家にそっと確かめにいく人もいたようだが、マスコミが警察にこのうわさの真偽を確認したところ、いまのところ被害届は一つも出ていないという公式的回答が返ってきたという。

そのほか、わたしが現地で聞いたなかには、長崎市の占師が「8月5日にまた大火砕

図15．うわさを否定する島原市のパンフレット

災害情報

羅災者の皆さん方に対しましては、
心からお見舞い申し上げます。

避難者の皆さん大変ご苦労様です。

現在の避難対象地域以外は安全です。ご安心下さい。

普賢岳噴火の活発化に伴い、眉山について何かと噂されておりますが、専門家の先生方の観測によりますと、『安全』ということです。デマや噂に惑わされることなく安心してお過ごし下さい。

また、安中地区の大部分を警戒区域として設定しておりますが、これは水無川流域の方々を中心として火砕流や土石流災害から生命、身体の安全を図るため、立入禁止としたものです。

生命の安全上からも皆さん方のご理解とご協力をお願いします。

平成３年６月１１日

島原市災害対策本部長
島原市長　鐘ヶ江　管一

流が起こる」と予言したとか、「大きい火砕流は満月か新月のときに起こるから、今度の満月や新月は気をつけたほうがいい」という話も聞いた。それ以外にも、新聞記事には、いろいろな流言が紹介されている。次の記事もその一つ。

「うわさが独り歩きする時

『島原城に近い白土湖そばのわき水がお湯になった』『島原市の災害対策本部が市外に逃げ出したらしい』－

いろんなうわさが雲仙・普賢岳の火山活動におびえる長崎県島原市を飛び交っている。そのたびに記者が確認に走る。今のところ、うわさはいずれも根も葉もないものばかりだが、背景には、大惨事を引き起こし今も活発な活動を続ける普賢岳の動きに敏感になっている住民の心理が働いているようだ。

『わき水がお湯に』のうわさが出たのは今月初め。白土湖は約２００年前の『島原大変』のとき、噴出したわき水でできただけに、『その温度変化は火山活動の異変の表れかもしれない』と同僚記者が取材に行った。しかし、毎日わき水を利用している付近の住民は『そんなことはない』と一笑に付した。うわさのもとをたどった。『避難対象地区に近い病院の奥さんから聞いた』→『商店の奥さんから』→『納入業者が話していた』→『薬局をしている姉から』→『客から聞きました』。５人さかのぼったところで途絶えた。

『対策本部の市外移転』は飲食店で聞いたが、これは記者が数分前まで取材した場所だから、確認の必要もなかった。『避難住民の留守宅で空き巣が頻発』。これも島原署があっさり否定した．．．．」（「西日本新聞」６月１８日朝刊）

大災害のさなか、あるいはその直後に流言蜚語が発生し、かつ広範囲に広がるのは決して珍しいことではない。１９２３年の関東大震災直後に広がった流言はあまりにも有名だが、最近でも、たとえば１９８６年の伊豆大島噴火のときには、噴火直後に避難した住民のあいだに「（溶岩流の進行方向にある）元町の大島高校は溶岩の下敷になった」とか「ガソリンタンクが爆発しそうだ」とか「元町にある測候所が火事になった」とかいうさまざまな流言が生まれ、住民のあいだを急速に広がっていった。

流言蜚語は、人々の心理を色濃く反映する。このように、大災害のとき各種の流言が広がるのは、多くの住民が過度の不安と恐怖をもっているからにほかならないのである。

５．「山頂膨張」情報はどのように流れたか

６月３日の大災害後には、流言の伝播のほか、もう１つ、気象官署の流した情報が人々から誤解されて混乱が起こったという出来事もあった。

それは、大災害から９日後の６月１２日のことである。その経過を簡単に追うと、次のようになる。

６月１２日未明、普賢岳の活動が急に活発になり、千本木地区や折橋地区など、島原市北部に数センチから十数センチの噴石が降った。このため、各地で民家の屋根がわら

や自動車のフロントガラスが割れたり、畑のサトイモやマメの葉に穴ができたりした。また、割れて飛び散った窓ガラスによって中学生がけがをする、という人的被害もあった。そこで、１２日早朝、島原市教育委員会では、急きょ市内１３の小中学校の臨時休校を決めるとともに、５台の広報車を出して、外出時はヘルメットやずきんなどをかぶるよう、市民に注意を呼びかけた。

けれども、事態はこれだけにとどまらなかった。

つまり午前6時から、九州大学島原地震火山観測所が火口の周辺に設置していた４基の傾斜計が、山頂の異常な膨張を記録しはじめ、その数値が、たちまち過去最大のレベルに達したのである。

そのため、観測陣のあいだに緊張が高まり、正午頃になると、観測所に配置されていた自衛隊員から、計器が異常な値を示しているという連絡を受けて、自衛隊本部が全員にヘルメットを着用せよと指令を出したり、署員から連絡を受けた島原警察署も、周辺の警察署に半島に車を立ち入らせないよう要請したりした。

またこの頃、雲仙岳測候所にも島原地震火山観測所から情報が入り、これを受けて、測候所では午後１時５分、「九州大学島原地震火山観測所のデータによると、傾斜計に大きな変化が観測されています。今後の火山活動に厳重な警戒が必要です」という火山活動情報第１０号を発表した（図１６）。そして７分には、追いかけるように「傾斜計により山体が膨らんでいるのが確認されている。いままでに経験していない違った噴火も考えられる。半島全域で厳重警戒を」という急報を出した。

これらの情報は、すぐ島原市災害対策本部に伝えられたが、すでに地震火山観測所から「火山活動の活発化で噴石の恐れがある」という情報を受けていた市では、ただちに市民に対し外出をさしひかえるよう広報するとともに、職員にも、庁内放送によって外出時のヘルメット着用を呼びかけている。

しかし、この山頂の異常膨張は、午後１時半前後には止まってしまった。測候所では、その後もしばらく警戒を解かなかったが、午後４時５９分、島原地震火山観測所にいた加茂幸介・火山噴火予知連絡会会長代行が「傾斜計の変動が大きいときは緊張したが、その後小康状態になり、いまはさし迫って危険な状況ではない」というコメントを発表して、ようやく一件落着となったのである。

この突然の事態に直面して、島原地震火山観測所や雲仙岳測候所の緊張は大きかった。また当然ながら、この緊張は報道関係者にも伝わっていった。その結果、観測所に詰めていた記者をはじめ、多くの報道陣がすわ大爆発かと浮き足立って、いっせいに島原市から脱出してしまった。

聞くところによれば、当時市内にいた大勢の報道陣のうち、残ったのはある放送局と地元の新聞社の２～３社だけだったというし、当日放送のビデオをあらためてみなおすと、たとえば、３日の火砕流の犠牲者の葬儀を取材中のアナウンサーが、「１時５分に島原市全域に避難するようにという勧告が出たという情報です（これはもちろん誤報）。カメラさん、もういいですよ、戻りましょう、戻りましょう」とふるえ声でレポートし、市外に脱出していくようすなどが映っている。

図１６．６月１２日に出された火山活動情報第１０号

火山活動情報

第１０号

平成３年６月１２日１３時０５分
雲仙岳測候所発表

火山名：雲仙岳

本日の地震回数はここ数日と比べて増加の傾向にあります。
九州大学島原地震火山観測所のデータによると，傾斜計に大きな変化が観測されています。

今後の火山活動に厳重な警戒が必要です。

もちろん当日の午後、テレビ・ラジオはこの山頂膨張の事実と島原半島全域警戒の呼びかけを、切迫した調子でくり返し放送した。また、緊急脱出した報道陣をじかにみた人も少なくなかったため、今度は住民のあいだに緊張が飛び火し、なかには避難する人々も現われてきた。

当時の状況を伝えた新聞記事によれば、未明の噴火で噴石被害を受けた千本木地区では、３５世帯１３０人が自主避難しており、また市内には、荷物をまとめて避難する住民のトラックや乗用車で渋滞の列ができたというし、さらに市内の工務店で扱っているヘルメットが飛ぶように売れ、夕方には品切れの貼り紙を出す店もあったという（「朝日新聞」６月１３日朝刊）。

わたしたちのアンケート調査の結果をみると、当日、火山活動情報などの緊急情報をほとんどの住民が耳にしており、その情報源としては「テレビ・ラジオ」が圧倒的に多かった（島原市７３％、深江町６７％）。この出来事が起こったのは平日の午後で、視聴率がそれほど高くないことを考えると、テレビ・ラジオがいかに緊張して放送したかがわかる。

また、この緊急情報を聞いてどんな対応行動をしたかをたずねたところ、「何もしなかった」人は島原市４％、深江町２％ときわめて少なく、多くの住民が何らかの対応を

していた。このことは、当日の住民の緊張を示すものと考えられるが、ただし対応行動の具体的内容をみると、「テレビ・ラジオの情報に注意した」（島原市８２％、深江町７８％）、「市・町からの情報に注意した」（島原市３６％、深江町５４％）といった情報行動がもっとも多く、次いで、「家族に注意するようにいった」（島原市５２％、深江町４３％）、「できるだけ外出しないようにした」（島原市２６％、深江町１５％）など、いざというときにそなえた警戒行動が多くなっていた。

要するに、アンケート調査でみるかぎり、テレビや新聞で報じられた住民の混乱はさほど大きくなかった、とも考えられるのである。

むしろ、この緊急情報に接してあわてふためいたのは、報道関係者だった。

つい１０日ほど前、同僚たちが犠牲になっており、２度と被災者を出したくないという気持ちもあったし、なにより火山の底知れぬエネルギーを自ら痛感していたこともあって、前線本部などの指示を受けて関係者がいっせいに脱出したのである。

もちろん、人間である以上、恐ろしいものは恐ろしいし、恐怖にかられて脱出しようとした心理はよく理解できる。けれども、報道という職業上住民より早く収集した情報をもとに、これを住民に十分知らせず、関係者だけ脱出してしまったとしたならば、そこには問題があろうし、また、こうした大量脱出が住民の目にどう映ったかも別であろう。多くの住民は、マスコミはいつもは傍若無人に取材するのに、いざというときはわれわれを見捨てて逃げて行ってしまう、マスコミは信用できない、という不信感にとらわれたのだった。わたしが現地で聞いた話のなかにも、６月３日前の取材ぶりとならんで、このときのマスコミの対応を批判する人は少なくなかったし、ＮＨＫ放送文化研究所が１９９１年１０月に実施したアンケート調査でも、「マスコミは無責任だ」という人が２４％もあったという。

では、どうしてこのような混乱が起こったのだろうか。

その背後には、急激な山頂膨張に直面して観測陣がにわかに緊張し、その緊張がそのまま報道陣や住民に伝わっていった、という事情があった。本当に爆発の危険があったから、各所で避難行動が起こったのである。しかしもう１つ、人々の避難を加速する要素があったことも事実であろう。つまりそれは、このとき雲仙岳測候所が発表した火山活動情報などの内容があいまいだったのではないか、ということである。

傾斜計の突然の異常は爆発の前兆と思われるが、しかしそれがどのような形で起こりどのような規模になるのかはっきりわからなかったため、公的に発表された情報は、「今後の火山活動に厳重な警戒が必要です」とか「いままでに経験していない違った噴火も考えられる。半島全域で厳重警戒を」とかいう、あいまいな表現にならざるを得なかったことはよく理解できる。

しかし、一方では、「傾斜計の膨張は昼（１３時３０分）ぐらいから止まっている。これは噴火を待っているということだろう。昨日と同じような噴火が起きるかもしれない。地殻変動の量からいえば昨日の噴火を上回る可能性がある」（１４時４７分）、「１３時３０分から傾斜計の動きは止まっている。地震計のほうで低周波地震が発生している。低周波地震が起きるときはよくないことがある」（１４時５０分）、「噴火した

場合、どの方向にも噴石を飛ばす可能性はある。また軽石だから風に乗って遠くまで噴石が飛ぶだろう。低周波地震が発生した場合、過去の例から爆発的噴火がある」（１５時５分）などという情報が矢つぎばやに出されており、この情報を受け取った報道陣や住民は、いったいどんなことが起こるのか、大きな不安にかられたのである。むしろこの情報は、予想もしなかった火砕流によって大量の犠牲者を出し、しかも当日未明に、これも予想しなかった噴石を経験した人々に対し、今度はとてつもない大災害が起こるのではないか、という恐怖感をあおったと考えられる。

とくに、「半島全域で厳重警戒を」という表現は、「よくないことがある」というコメントと組み合わされて、半島全部が爆発によって大被害を受けるという意味に受け取られかねないし、実際、そのように受け取って避難した人もいたようである。

事態がおさまった後、測候所の関係者は、この表現は、「爆発によって噴石が降れば風向きの関係でどこに降るかわからないから、半島全域に警戒が必要だ」という意味だと語ったが、もしそうであれば、半島全部が被害を受けるのではなく、一部に被害があるがその場所は特定できない、ということをはっきり表現すべきであった。

火山噴火予知はまだまだむずかしく、傾斜計や地震計のデータからどれだけものがいえるかという問題はあるが、いずれにしても、火山活動情報のように危険を警告する情報を出す場合には、いったいどんな危険がどのくらい切迫しているのかを、なるべく具体的に伝えることが必要である。大災害を経験して強い不安や恐怖にとらわれている人々に対しては、とくにそのことがあてはまるといえよう。

6．情報パニックはいつ起こるか

ところで、さきに述べた「流言さわぎ」とここで触れた「山頂膨張さわぎ」は、いずれも情報が社会的混乱を生み出したという意味で、小規模な「情報パニック」ともいうべき出来事であった。

いままでにも、このようなケースはしばしばあった。つまり、行政が流した警報や避難勧告・指示によって混乱が生じたこともあったし、もっと一般的な注意や警戒を呼びかける情報が混乱を生んだこともあった。また、被災住民のあいだに流言蜚語が広がって、混乱が起こったことも少なくなかった。

大災害時にこうした現象が頻発する最大の理由は、災害によるショックが大きく、ふたたび大災害が起こるかもしれないという恐怖が人々を支配しているためであろう。「情報パニック」は、こういう心理的土壌のなかで発生するのである。

雲仙岳噴火では、大火砕流と爆発による噴石という予想外の事態にショックを受け、今後は何が起こるかわからない、という不安をもつ住民が非常に多かった。そういう感情が充満しているところに、あいまいで誤解を招きかねない情報が流れたため、混乱が起こってしまった。

人々が強い不安にとらわれている状況であいまいな情報が流れると、不安や恐怖の心

理がそれに投影され、情報は深刻な内容に変化していく。心理学では、あいまいな図形を解釈させて患者の心理を読みとる「ロールシャハ検査」というものがあるが、あいまいな情報もまた、人々の心理によってさまざまに解釈されてしまうのである。

数多くの流言蜚語が広がったのも、まったく同じ理由からきている。災害のただなかで流言を生み出したり、これを伝えたりする人々の心の底にあるのも、恐怖と不安の感情である。災害の被害を誇張したり、大災害の再来を予言したりする流言は、それこそしょっちゅう出現するが、こうした流言蜚語は、すべて人々の恐怖や不安の投影と考えることができよう。しかも、恐怖や不安から生まれた流言は、今度はこれを強化する役割を果たす。恐怖によって形成された流言が、ふたたびその恐怖を増幅するわけである。

ただし、こういう情報パニックは楯の一面であることもまた、最後に強調しておかねばならない。

わたしが地震、津波、噴火、風水害など自然災害の調査をはじめてから、もう１０年以上になるが、調査を通じて痛感するのは、災害に対する人間の心理にはまったく異なる２つの面があるということなのである。

その１つは、災害を軽視して無防備になること、もう１つは、災害を過度におそれて混乱することで、パーソナリテイとして危険を軽くみる楽観的な人と、危険を過大評価する悲観的な人がいるのはもちろんだが、多くの場合、１人の人間にこの２つの心理が同居している。つまり、災害の直前までは、まさか災害が起こるはずはないとこれを軽視する心理が働き、逆に、災害発生後は、また災害が起こるのではないかとこれを過度におそれる心理が働くのである。

災害の局面によって、危険を過小評価する心理と過大評価する心理が交互に現われてくるわけで、これが災害心理のむずかしいところだといえよう。

雲仙普賢岳噴火でもこうした心理がはっきりと現われている。つまり、前にもくわしく述べたように、６月３日の大災害発生以前は、まさか災害など起こるはずはあるまいという楽観的な雰囲気が支配的だった。しかし、「正常化の偏見」と呼ばれるこの心理が、大災害以後は１８０度転換する。今度は災害を極度におそれ、おびえるようになるのである。

要するに、雲仙普賢岳噴火でも、災害を軽くみる心理と、逆に災害を過度におそれる心理という、災害時の人間心理の２つの側面がはっきり現われたわけである。

防災対策を考えるにあたっては、地震や噴火など自然災害のメカニズムを知り、被害を最小にするための方法を考えるのはもちろんのこと、災害に出会ったときの人間心理について知識をもつことも重要である。わたしは研究者の一人として、防災対策の任にたずさわる方々には、情報伝達計画や避難計画をつくるとき、ぜひこうした災害心理を念頭においていただきたいと考えている。

とくに情報伝達についていえば、災害発生以前は、危険をくどいほど繰り返し強調することが必要であるし、災害発生以後（あるいは予想もできなかったような事態の後）は、なるべく具体的で誤解を招かないような表現を工夫し、情報の混乱を避けることが重要なのである。

5．（補論）雲仙普賢岳噴火と電気通信

1．噴火と通信被害

1－1．設備面の被害と対応

今回の噴火災害による通信被害は大きくいって、設備そのものがダメージを受けた「ハード型の被害」と、設備そのものは正常でありながら一度に大量の通話が発生したため回線がつながらなくなる「ソフト型の被害」の２つに分けられる。ここでは、まず「ハード型の被害」とそれへの対応を見てみよう。

今回の噴火にともなう施設面の直接被害はそれほど決定的な影響を及ぼさなかった。被害の第１は、火砕流と土石流によって焼かれたり流されたりした家屋内の電話および回線である。しかし、これら破壊された電話は立入り禁止区域の中にあり、そもそも人がいないのだから、復旧面では緊急を要する問題でなかった。被害の第２は、幹線ケーブルの破壊であり、ＮＴＴは当面、こちらのほうに緊急の対応をすることになった。

1－1－1．半島南部地域への伝送路の確保

島原半島の伝送ルートをみると、島原局が半島内に散らばる１４の交換機を統括している。つまり、半島からの通話は全て一度は島原に集まり、そこから半島外へと接続される。そこで問題は、水無川を横断するケーブルで島原局とつながっている、半島南部の１０端局（雲仙、深江、有家、小浜など）の伝送であった。半島南部地域の伝送路はループ状になり、さらに島原局とは２つの伝送路でつながっているため、通常ではどこか１ケ所が切断しても孤立することがないように作られている。しかし島原局と半島南部との伝送路は２ルートとも水無川を横断しているため、水無川を渡るケーブルが土石流や火砕流で切断されると、半島南部の地域が孤立してしまうことになる。

水無川を渡るルートは、河口近くの国道２５１号線沿いのルートと、より上流を渡る国道５７号線沿いのルートがある。これらは、６月３日と６月８日の火砕流被害は免れたものの、６月３０日の大土石流で５７号線ルートが切断されてしまった。まだ２５１号線ルートが残っていたので実際の通話には決定的な障害はなかったが、これもいつ切れるかわからない状態だった。そのため、ＮＴＴでは早い時期から次のような対策を取った。

①移動無線車等による救済

主なものは、１１ＧＨＺ帯可搬無線方式（ＴＹ－１１２Ｐ）と呼ばれる救済方法で、移動無線車を使い、無線で伝送路を確保するものである。島原から、熊本の宇土半島にある三角（みすみ）を経由して深江に至るルートが確保されたのは、５月３１日の段階である。このルートで、回線の約５０％に当る７０１回線が救済される。なお、その後（７月上旬から）、深江が危険になった場合を考え、三角からさらに上島の赤崎を中継

して有家に至るルートに変更された。移動無線車は、熊本や島根のほか、はるばる東京や北海道からも応援に駆けつけている。

なお、島原－三角－深江ルートは、このＴＹ－１１２Ｐ方式のほかＴＺ－４０３やＴＹ－１１Ｐなどの無線装置によるルート確保も行われた。

②衛星車載局による救済

大分からやって来た衛星車載局は、５月３１日の段階ですでに深江に設置され、深江（衛星車載局）－通信衛星－広島衛星地球局－福岡－帯山－長崎－島原のルートで、１３１回線が救済可能となった。なお、衛星車載局も、移動無線車と同様の理由で、７月３日に有家に移動している。また、この衛星車載局は、後述する島原市役所と自治省消防庁との臨時専用回線のバックアップ機能も果たしている。この場合、島原－三角－赤崎－有家－衛星－広島地球局－霞が関－自治省という複雑なルートをとることになる。

③諫早－小浜間の光ケーブルルートの建設

島原－深江ルートの被害が長期化した場合に備えて、諫早から小浜までのルートを光ファイバーケーブルを利用して新設した。回線そのものは７月中に完成したが、接続完了は８月に入ってからとなった。

以上のように、基幹ケーブルの切断というハード面の障害に対しては、今回は大規模な対策が先手先手に実施された。そのため、通信能力の点ではほぼいつもと同じ程度の能力を確保できたといえるだろう。ところが、大火砕流のあった６月３日以降、約１週間ほど電話が大変つながりにくい状態に陥ってしまった。原因は、通常の通信能力を大きく越える通話が発生したことによる電話の異常輻輳であった。つまり、「ソフト型の被害」が発生したのである。

２．輻輳対策の実施

電話の異常輻輳とは、電話の通話量が異常に増えて設備とのバランスが崩れ、電話がかかりにくくなったり、あるいは全くかからなくなったりする現象をいう。そもそも、回線は呼損率が１０％（１００回線中１０回線が話中の状態）、交換機については共通制御機器の使用率が８０％が限界値であり、それを越えた状態が３０分以上続くと、「Ａ級異常輻輳」と呼ばれる。今回は、６月３日から８日までのあいだ、夜間を中心に激しい輻輳が発生した。

今回の噴火に伴う輻輳がどのようにして起こったかの分析は後まわしにして、ここではＮＴＴがどのような設備面の対策を取ったかをまとめておこう。

①回線の増設

島原局は、長崎局と佐賀局の２局の下に帰属しており、そこから全国に接続される。島原からの市外回線は、９０年１１月の噴火前は合わせて５００回線であった。この回線部分がネックとなって輻輳が発生したわけだが、ＮＴＴでは、すでに5月２４日までの段階であわせて１１２回線を増設していた。６月５日までには、さらに２９回線を増

設し、合計６４１回線にまでなった。なお、これ以上の増設は島原の交換機の能力からして困難と判断されている。しかし実際には、この程度の増設では全国から押し寄せる通話の大波に対して焼け石に水だったようである。

②携帯電話の増波

火山活動が活発になるにつれ、全国から数多くの報道陣が島原にやってきた。それにともない、携帯電話・自動車電話の使用が急増した。そこで、いままで5波しかなかった島原の波を、５月３０日までに１５波に増やしている。

③臨時電話専用交換機Ｃ－２３の設置

ＮＴＴでは現在、交換機のデジタル化を進めているが、そこで余ったＣ－２３アナログ交換機を福岡から搬入し、重要電話専用の交換機として設置した。これは、長崎と佐賀の市外電話局に直接接続している。しかも、この交換機の市外回線が８４回線あるのに対し、接続する端末電話はいまのところ４０ほどであるから、輻輳は全く起きない。この交換機には、島原市の災害対策本部、各避難所、保健所、消防署、島原市医師会、島原温泉病院、島原警察署、九州大学火山観測所などの防災機関、及び各マスコミなどに設置された合計４０の臨時電話が接続されている。このルートは、６月１１日に開通し、たとえば島原市災害対策本部には翌１２日に設置されている。

重要電話を確保するという点に関しては、この方法は大変有効だと思う。ただ、肝心の６月３日段階にまだできていなかったことは残念なことであった。

④直通電話

今回、直通電話に２種類があった。

１つはいわゆる「ガラ電」と呼ばれるもので、受話機をあげ、電話機の側面についているハンドルをガラガラと回すと相手につながるというもの。島原では市災害対策本部、警察、長崎県振興局、測候所が加入し、１ケ所からかけると他の３ケ所に全部つながるという仕組みになっている。このシステムは災害対策本部には６月中旬になって導入されている。ただし、この「ガラ電」導入も６月３日、８日の大火砕流には間に合わなかった。なお、「ガラ電」は九州大学火山観測所と測候所の間には５月の段階で引かれている。こうした「ガラ電」導入時期のズレは、ＮＴＴへの設置申込が遅かったためで、大災害前までは、市も、情報システムの重要性をそれほど重要視していなかったふしがうかがわれる。

直通電話のもう１つは、市と中央官庁を結ぶホットラインである。自治省消防庁と島原市災害対策本部の専用線が引かれたのは６月４日か５日頃で、国土庁とは６月７日であった。これは、地上系１回線と、第１バックアップ用の地上系１回線、および第２バックアップ用の衛星回線（ＣＳ－３ａ利用）から成っている。

直通電話の設置は輻輳対策の１つでもあるが、それ以上に関係機関のあいだの連絡をよりスムーズにすることが期待されている。

3．輻輳の状況とその型

3－1．輻輳の形態

相沢晧氏（１９７８）（相沢晧「電話網の異常輻輳について－その実例と今後の課題－」『電気通信業務』１９７８年１２月号１６－２８ページより）によれば、輻輳は次のように分類される。まず原因で分類すると、災害時に発生する「災害型」と、電話リクエストやテレフォンサービスによって生ずる「企画型」に分類される。

次に、輻輳が伝達のどの段階で起きるかで分類すると、「発信輻輳」、「着信輻輳」、「中継輻輳」の３つに分けられる。このうち「発信輻輳」は、ある電話局内でいっせいに発信が行われたときに現れるもの。たとえば、地震発生時に職場にいる人々が、いっせいに自宅に電話をかけたときなどに発生する。「着信輻輳」は、特定の地域、局、または加入者に向けて電話が殺到するもので、もっともよく見られる型といえよう。これはさらに、「特定地域輻輳」と「特定加入者輻輳」に分けられる。一方、「中継輻輳」は、発信あるいは着信輻輳かひどくなり、さらに上位の市外交換機にまで輻輳が広がるものと、全国の不特定多数から不特定多数の加入者に向けていっせいに電話がかけられたときに生ずるものがある。毎年１月１日の午前０時にかけられる、いわゆる「おめでとう通話」による輻輳などが後者の例である。

電話設備は、一般に交換機と回線から成り立つが、交換機がつまったものを「交換機輻輳」(または局内輻輳)、回線が詰まったものを「回線輻輳」（または区間輻輳）という。一般に、災害時に特定地域へのお見舞い電話が殺到した場合は「回線輻輳」になり、職場の人々がいっせいに家に安否を尋ねる場合などには「交換機輻輳」になる。

さて、今回のケースはどれに当てはまるのだろうか。

ＮＴＴ災害対策室によれば、まず島原－長崎、島原－佐賀間の回線が一杯になり、島原局の交換機がほとんど塞がった状態になった。一方、全国から島原局番への呼は、急速に増大していったという。これらは、ＡＴＯＭＩＣＳという通話管理システムにより検知されている。ここから、今回の輻輳は、災害時によくみられる着信・回線輻輳であると推定できる。

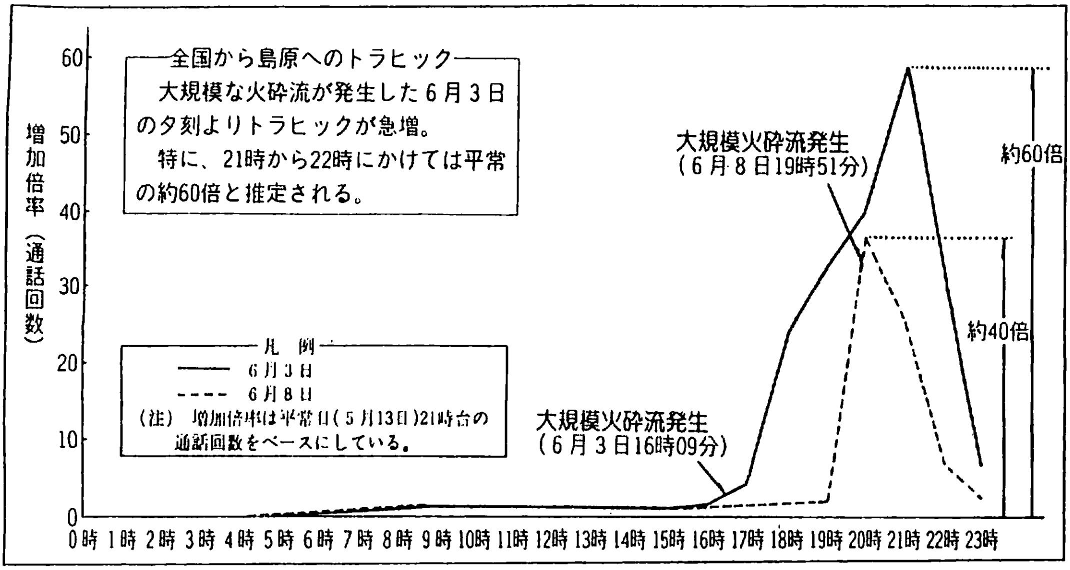
3－2．全国から島原への通話

具体的に、全国から島原への通話の殺到状況をみると、次のようになる（図１）。

これは、平常時（５月１２日）の２１時台の通話回数をベースに、各時間毎の島原への通話回数が何倍になっているかを示している。実線が６月３日で、点線が６月８日のデータであるが、各時間のところの数値は、当該時台１時間の通話回数を表わしている。これによると、３日の１８時台に急激に通話が増えはじめ、２１時台には何と通常の約６０倍の通話が島原に殺到した。８日の２０時台にも、通常の約４０倍の呼が発生している。この数字には、かけたけれどもつながらなかったいわゆる「不完了呼」も含まれ

ているため、何度もかけ直した人も多いと思われる。それにしても、通常の何十倍という通話は、到底さばき切れるものではない。こうした危機的状況にさいして、東京や大阪など各市外局の段階で、島原向けの通話を規制する着信規制が行われた。その比率は、最高９５％以上のカットであった。

図１．全国から島原への通話の増加率（６月３日、６月８日）（ＮＴＴ資料より）



（ＮＴＴ資料）

４．住民の電話行動

住民の電話行動の面から、今回の電話輻輳を考えると、その原因は大きくいって次の３つが考えられる。すなわち、

①遠距離通話（市外通話）の増大

②電話１回当りの通話時間の増大

③その他の輻輳促進要因

の３つである。そこで、これら輻輳の原因を追求するために、１９９１年８月に行ったわれわれが行なった住民調査を中心に、災害時の住民の電話行動を分析することにしよう。

４－１．活発な電話行動

われわれは、大火砕流が発生して多くの死者が出た６月３日の電話行動をアンケートで調査した。その結果、その日に自ら「電話をかけた（発信した）」人は全体の７４％におよび、また「電話を受けた」人も全体の６６％に達した。このように、災害時の電話利用が実に活発であることがわかる。しかし、電話をかけた（発信した）人のほとんど（７８％）が電話がかかりにくかったと訴えており、輻輳がかなり激しかったことを物語っている。このように、市内での激しい電話利用は、それだけで限られた交換機の能力を越える可能性があり、輻輳に一層の拍車をかけると同時に、それだけで輻輳発生の原因ともなりうる。

４－２．なぜ遠距離通話が増大したか

先にみたように、今回の輻輳は、主に全国からの電話が島原に殺到したことにより、島原の市外回線がつまってしまった回線輻輳であった。では、なぜ市外からの通話が増えたのだろうか。

それには、災害時に住民が実際にだれと通話したかを考える必要がある。

今回の調査では通話の相手は、兄弟姉妹（５７％）・子供（３２％）・その他の親戚（３０％）・親（２６％）など、親族関係との通話がほとんどであることがわかる。通常時の電話行動を眺めてきた者にとっては、これほど親族関係との通話が突出していることは実に異常に思える。その異常さは、たとえば、わたしたちが同じ１９９１年に東京２３区内の住民を対象に行った調査と比較すれば、一目瞭然である。この調査は、回答者が一番最近した通話について調べたもので、直接数字を比較することはできないが、平常時の通話のだいたいの傾向を知ることはできる。それによれば、通常時にもっとも多い通話相手は友人・知人であり、圧倒的に他を引き離している。それに続いているのが、仕事関係の人である（表１）。

このように、通常時にくらべて親族との通話が多くなることが今回の通話の特徴であり、それはまた災害時の通話の特徴でもある。

一見奇異に聞こえるかもしれないが、基本的には電話は距離を超越しないメディアである。もちろん、電話は世界のどんな遠い国々にもかけられる、距離を超越するメディアである。しかし実際の使い方、つまりソフト面を見ると、電話はほとんど近距離・中距離の範囲でしか使われていない。たとえば、ＮＴＴが通信管理システム（ＡＴＯＭＩＣＳ）によって１年間の全通話をモニターしたところによれば、１９８８年度の全国通話数６７７億通話のうち、区域内（市内）通話が全体の６９％、隣接区域内が１２％と、これだけで８割以上に達するのである。これに対し、３２０キロメートル以遠の遠距離通話は、わずか３％しかないのである。

こうした一般的傾向の中にあって、親族との通話だけは異なった性質をもっている。たとえば、１９９１年にわたしたちが東京２３区内の住民に対して行った調査によれば、

表1．通話の相手

①災害時の電話（雲仙調査１９９１年）
（複数回答）

友人・知人	２８．５％
親	２６．２
兄弟姉妹	５７．１
子供	３２．１
祖父母	４．１
孫	０．３
夫や妻	１１．５
その他の親戚	３０．４
近所の人	４．８
仕事関係の人	１３．７
市役所・町役場	２．０
テレビ局・新聞社	０．５
その他	０．８

②平常時の電話（東京調査１９９１年）
（単数回答）

友人・知人	４１．６％
母	９．０
父	１．４
兄弟姉妹	１２．３
子供	４．８
孫	０．３
その他の親族	３．３
仕事関係の人	２１．５
企業・団体	２．４
その他	１．５

友人・知人や仕事関係の人といった親族以外の相手とくらべて、親族との通話は市内通話が少なく、代わって首都圏以遠の遠距離の通話が多くなっていた。一般的には友人・知人や仕事関係などの近距離の電話が多いものの、親族とのいわば「血のつながり」は、電話の近距離バイアスを突き抜ける力をもっているのである。

このように考えてくると、６月３日に遠距離通話が増大したメカニズムが明らかになってくる。大火砕流のニュースを聞いてすぐ受話機を取ったのは、かつて島原から離れていった人たちである。かれらがまず考えたのは、日ごろからたまには電話をかける親戚に電話をして、その状況を確かめることであった。もちろん、かれらには島原にかつての友人や知人がいただろう。しかし、そういう相手には日頃電話をかけることもなく、ひょっとしたら電話番号もすぐには見つからなかったかもしれない。親族との通話だけが距離を突き抜ける力をもっているため、その他の通話は淘汰されてしまったのである。

４－３．なぜ一回当りの通話時間が長かったのか

「輻輳があった３日や８日は、とにかく（１通話あたりの）保留時間が長かったです。そうですね、ふだんの５倍ぐらいの長さだったでしょうか」これは、ＮＴＴ島原営業所

のある技術担当者がわれわれに語ったことばである。

少ない回線に電話が殺到する。しかも、それぞれの通話が長くなかなか終わらない。接続を待つ電話は、次から次へと膨れあがっていく。電話パニックは、こうして拡大していった。通話時間の長さは輻輳をいっそう激化させた原因となったが、では、なぜ3日の通話は通常より1回当りの通話時間が長かったのだろうか。

6月3日に島原にかかってきた通話は、九州（福岡ＳＺＡ）内からの発信が割合として少なく、より遠距離から大量にかかって来たのだった。電話料金は遠距離になるほど高くなるから、遠距離になればなるほど話を早く切り上げようとする心理が働く。だとするならば、より遠距離からかかってくる通話の多かった３日や８日は、通常より通話時間が短くなってもよさそうなものである。

ところが面白いことに、実際には、通常時においても通話距離と通話時間は比例するという「原則」が存在している。つまりこれは、通話相手が遠くなればなるほど１回当りの通話時間が長くなるということである。

たとえば、ＮＴＴ資料によれば、１９８８年度になされたあらゆる通話の平均通話時間は１６３秒であった。そのうち市内通話だけを見ると、平均１４５秒であり最も短く、逆に３２０キロ以上の遠距離通話の平均通話時間は、２３８秒にまで長くなっている。したがって、より遠くからかかってくるということは、通話時間が長くなる要因にはなっても、決して短い通話時間にはつながらないのである。

では、なぜ遠くからかかってくる電話は長電話になるのだろうか。そして、今回のような災害時になぜ通話時間が伸びるのだろうか。

それには、その通話でどんな内容が話されたかを調べる必要がある。

通話内容の性格を表わすのによく使われる方法は、「コンサマトリー（自己充足的）な通話」と、「インスツルメンタル（手段的）な通話」に分けることである。この用語は、もともと社会心理学で対人コミュニケーションについて語るときに用いられる用語であるが、簡単にいえば、感情の表出などコミュニケーションすること自体が目的のコミュニケーションが「自己充足的コミュニケーション」である。怒りや不安などは、ただ口に出してしゃべるだけでずいぶん気持ちが楽になることがよくある。別に相手が何かしてくれなくても、話すだけで目的を達する会話である。電話に即していえば、単なるおしゃべりの電話などがコンサマトリーな通話の典型である。

一方、手段的コミュニケーションは、文字通り何かをするためのコミュニケーションで、相手に対して何らかの効果を及ぼそうとするものである。電話でいえば、合う約束をするとか出前の注文をするなどというのが手段的通話の典型である。これまでわかってきたところによれば、一般にコンサマトリー（自己充足的）な通話は手段的通話より通話時間が長いという。

そこで、６月３日にどんな内容が話されたかをみてみよう。

ここでまず意外だったのは、避難地域にいた人を対象にした調査にもかかわらず、避難の相談をした人が電話をした人のわずか２割程度しかいなかったことである。避難の相談とは、まさに自分がこれからどうするかを決定する大事な通話であり、もっと多く

の人がしてもよいはずであろう。また、上の通話区別でいえば、もっとも手段的と考えられる通話である（表２）。

表２．６月３日の通話内容（複数回答）（％）

自分や家族の安否を知らせた	７２．９％
自分の家や自動車の被害状況を知らせた	１３．９
火砕流の状況について話した	５７．７
見舞い	９．２
自分や家族の避難先を知らせた	４６．２
先方の避難先を知らせてきた	６．９
避難の相談をした	２３．２
相手の家や自動車の被害状況をたずねた	４．３
相手の安否をたずねた	２０．１
１１０番や１１９番への緊急通報	０．３
その他	１．１

今回行った調査表は、災害面で重要なものを選択肢としてあげたため、各選択肢は必ずしも明確に手段的か自己充足的かに分類することはできないが、全体としてみると自己充足的通話が大半を占めていたのではないか、と解釈することができる。通話内容でもっとも多い「安否を知らせる」にしても、「火砕流の状況について話し合う」にしても、ただ話し合うだけで何かをしようとしているわけではない。むしろ、話し合うことで自らの不安をいくらかでも軽減することが主な目的だったのではないだろうか。それは、外から島原に電話してきた人にも、市内で危険にさらされている人にも両方に当てはまるだろう。

テレビは荒れ狂う山のようすや被害の状況を何度もくり返し放送し、決して人々が安心するような情報を流そうとしない。島原はいったいどうなっているのだろうか、という気持ちは全国的に広がっていった。そうしたはやる気持ちが人々を電話に走らせたとすれば、その本当の目的は状況を確認したいという精神的満足にあったのではあるまいか。だとするなら、通話も当然自己充足的なものになるはずである。

たとえば、島原市北千本木地区のあるペンションの手伝いをする女性、わたしに次のように語ってくれた。「６月１０日くらいからでしょうか、お客さんとか遠い親戚から心配半分、おもしろ半分の電話がたくさんかかってきました。全部で１００本ぐらいでしょうか。もう、毎日おなじことを言ってました。でも、わたしはしばらく実家に帰してもらっていたんですが、テレビだけ見ていると実際よりひどく思えて心配になってき

ましたよ。避難所にいる人は心配でしょうね」

この例で重要なのは、第１に、通話内容が心配半分、おもしろ半分だったということ。つまり、１００本もかかってきた電話は話すこと自体が目的で、他にどうしようということのない自己充足的なものであったこと。第２に、テレビだけを見ているとかえって不安が広がったこと、の２点である。

このように、今回の災害時の通話の多くは、コンサマトリー（自己充足的）な性格の強いものであったといえよう。そうしたコンサマトリーな通話は、１通話当りの時間が手段的通話よりも長いために、全体として平均通話時間が通常よりぐっと伸びてしまうのである。

４－４．その他の輻輳促進要因

以上のような輻輳の基本的なメカニズムのほか、今回の輻輳を生み出したいくつかの促進要因が考えられる。

その第１に、マスコミ機関による通話の保留継続がある。

１９９０年１１月にはじまった噴火は、９１年５月にはその活動が活発になってきた。それにともない、テレ・ビ新聞などの各種報道機関が島原に集結し、盛んな取材活動を展開していた。そうなれば当然、取材現地と東京本部とのあいだに、大量の情報連絡が必要になってくる。ＮＴＴは、報道陣用に約２００台ほどの臨時電話をひいている。

ところが、３日や８日には激しい輻輳が発生し、本部との連絡か取れなくなってしまった。当時現地にいたある報道関係者によると、それを避けるために現地の各報道機関は、いったんつながった電話を通話の終わった後も切らず、１日中つなぎっぱなしにしていたという。

島原への市外回線は、わずか６１２回線（６月３日段階）しかない。２００台のマスコミ用電話が全部つなぎっぱなしではないにしても、仮にそのうち６０台ほどが市外とつなぎっぱなしだったとする。すると回線の１０％がふさがり続け（すなわち呼損率が１０％となり）、マスコミ以外の通話がまったくなかったとしても、それだけで立派なＡ級輻輳になってしまう。たとえ、そこまではいかないにしても、市外通話をつなぎっぱなしにするという行為は有限な回線を独占することになり、身勝手な行為といわれてもしかたがあるまい。本来、防災機関でもある報道機関が自ら電話パニックを助長し、結果として防災活動を妨害することになるのである。

しかしもちろん、ただ報道機関に電話のつなぎっぱなしは止めましょう、というだけではこの事態は解決しない。取材の遂行にどうしても東京との連絡が必要だとするならば、一般回線を経由しない直通回線を確保するなどの対策が必要になってくる。今回、島原市役所と東京の自治省の間に衛星を用いた直通回線が設置されたが、輻輳対策としてもマスコミ用にそのようなシステムを検討する価値があるかもしれない。

そのほか、輻輳を促進する要因として、多機能電話の普及にともなうかけ直しの増加、あるいはすでに避難した家庭への電話が不完了呼を増大させたこと、などが考えられる。

5．輻輳への処方箋

5－1．リレー方式の有用性

このように、他の多くの災害のケースと同様、雲仙普賢岳噴火でも電話の輻輳はいちじるしかった。ところで、いまのところ、こうした輻輳にたいするハード面の対策には決定的なものがない、というのが現状である。通常の何十倍もの通話量に対処するために常日頃から設備を拡充しておくことは費用的に合理的ではないし、臨時に設備を拡大するにも限界がある。要するに、５００しかない回線をたとえ２倍・３倍にできたとしても、通常の６０倍もの通話量にはとうてい対処することはできないし、時間的にも設備の増強を大量の呼の発生に間に合わせるのは至難の技である。

そこで、通話量そのものを抑制するというソフト面の対策が非常に効果的なのだが、そのなかで注目されるのが、ロマプリータ地震時にクローズアップされたリレー方式による情報伝達である。

これは、災害が起こるとまず、被災者の側から被災地以外の親戚などに連絡を取り被害の状況や無事を知らせる。次に、これを受けた人が安否をきづかう他の親戚や友人に連絡をするという方法だ。こうすれば、被災地への通話の集中が防止でき、輻輳の程度を大幅に軽減できる。実際、この方式がうまく使われたことが、１９８９年のロマプリータ地震において輻輳の程度が軽かった一つの原因となった、といわれている。

ところが、その有効性についてはまだはっきり検討されてきたわけではない。というのも、輻輳の主な原因がもし遠隔地に住む日頃あまり付き合いのない友人や知人であったとしたら、そうした相手はリレー方式の網の目にはかかりにくいからである。

しかし、今回輻輳のメカニズムを分析した結果、主な原因は島原から転出していった親族からの電話であることがわかった。

さらに今回、わたしは、６月３日の電話でふだんあまり電話のやりとりのない相手と１回でも通話した人の割合を調査した。その結果、６６１人の回答のうち７６％は、そうした相手は１人もいなかったと答え、いたと答えたのは２４％にとどまった。この結果からも、通話の相手はふだんからいくらかでも電話のつながりを維持してきた人たちであることがわかる。

これらの考察の結果、リレー方式はうまくいけばかなり有効性の高い方法であるといえよう。この方法は、すでに札幌など日本の一部の地域でも電話帳に書き込まれ、協力が呼びかけられているが、今後も災害時には輻輳が発生することが予想されるため、このリレー方式の情報伝達を積極的に広めていく必要があると考えられる。

6．電話に関するその他の問題

6－1．テレビと輻輳

災害時の輻輳の原因は、もちろん災害の発生であるが、そのきっかけはほとんどがテレビの報道である。テレビで災害のようすを知った被災地外の人々、とくに親族がいっせいに受話機をとることによって輻輳が発生するのである。

そこで逆に、そのテレビで災害のようすとともに、被災地への電話は極力控えるよう呼びかけたなら、かなりの効果が得られるはずである。ＮＴＴによれば、今回もＮＨＫが、「現在電話が込み合っており、急ぎの用のない人はあとでかけるように」とニュースのなかで呼びかけ、それがかなりの効果をもったということである。放送からのこうした呼びかけがほとんど効果がなかったケースもあって、その効果は絶対的なものとはいえないかもしれないが、いずれにせよ、輻輳の発生および防止の観点からのテレビの研究は今後の検討課題として重要であろう。

6－2．避難所の電話

電話の問題としては、もう１つ、避難所における電話の問題がある。今回の調査で、避難所におけるさまざまな不満についてたずねたところ、総じて電話に関する不満は少なかった。たとえば、市の用意した避難所では８％、旅館・ホテルでは１３％の人しか不満を感じていない。

その不満とは、おそらく避難所にかかってきた電話をどう処理するかといった運用上の問題だと思われる。かなり頻繁に外から電話がかかってくるようで、それを呼び出す手間や、呼び出されるさいの他人の迷惑（たとえばマイクなどで呼び出せばうるさく感じる）などであろう。しかし一方で、客船に避難していた人の不満は４３％とかなり高くなっていた。

その原因は、船舶電話にある。客船には普通の電話ではなく船舶電話が積まれており、避難者は自費でそれを使う。しかし、船舶電話は地上電話にくらべかなり割高になっている。体育館では無料の特設公衆電話が使えるのにと、その不満はさらに高まってしまう。そこで、かなり日にちが経ってから岸壁に公衆電話を設置したが、それもいちいち下船しなければ使えなかったので、不満は解消しなかったと思われる。

6－3．携帯電話の不安

もう１つは携帯電話の問題である。これは何も、災害時の電話特有のことではないが、人の生死にかかわる災害時にはしばしば発生する問題である。

話をうかがったのは地元のテレビ局のＯ記者からだった。かれは６月３日の火砕流時、直前まで取材をしていて命からがら助かったという経験をもっているが、火砕流の下端

のところで、火砕流をかぶって大火傷した犠牲者を目撃した。そこですぐに、持っていた携帯電話で１１９番に電話したという。だが、電話はつながったものの、救助に来てはくれなかったという。

かれが後で調べたところ、島原地区から携帯電話で１１９番通報すると、島原地区の消防本部ではなく、長崎市消防本部にかかってしまうことがわかった。そして、近くの公衆電話から改めて１１９番をかけるように指示されたという。長崎市から島原までは車で２時間の距離である。これは救急車がかけつけられる距離ではない。

いったいなぜこういうことが起こるのかといえば、そもそも消防は警察と違って市町村単位で本部が構成されている。したがって、１１９番のオペレーションセンターも市町村単位で存在している。一方、携帯電話のネットワークセンターは県に一つしか存在ない。したがって、どんなに県庁所在地から離れていたとしても携帯電話は県庁所在地で中継されることになり、１１９番通報も県庁所在地の市の消防本部につながってしまうのである。これに対し、１１０番は県警本部が存在し通報を受けるので、そのような問題は発生しない。この問題は、災害時以外にも交通事故（この場合は自動車電話）のときなども、しばしば発生するということである。

II 部

雲仙岳噴火と住民の対応
（アンケート調査より）

はじめに（調査の概要）

平成３年６月３日、雲仙普賢岳で発生した火砕流は、島原市北上木場地区を直撃し、死者４３名という大惨事になった。また、６月７日の「警戒区域」の設定によって、１００００人を越える島原市・深江町の住民が不便な避難生活を余儀なくされ、避難者の数はその後しだいに減りつつあるものの、依然として数千人の避難生活が長期間続いている。

Ｉ部でくわしく触れたように、この災害では、災害警報と避難にかかわるさまざまな問題が顕在化した。

そこでわれわれは、普賢岳に溶岩ドームが出現した５月２０日から、６月３日の大災害を経て、長期にわたる避難生活にいたるまでの一連の過程における地域住民の心理と行動、とりわけ各種の災害情報に対する対応と避難生活の諸問題をくわしく調査することは、災害研究という学問的意味でも、防災対策の改善という社会的意味でも非常に有意義だと考え、避難住民を対象とするアンケート調査を実施することにした。

主な調査項目は、災害以前の火砕流に対する知識、６月３日の災害時の心理と行動、避難した時期と避難先、避難生活における不便や不満、マスコミに対する評価、情報行動と情報ニーズ、臨時火山情報と火山活動情報の区別、警戒区域への評価、今後行政に望むこと、などである。

この調査は、文部省科学研究費・重点領域研究『災害時の避難・予警報システムの向上に関する研究』の「火山噴火班」のケース・スタディとして実施したものであり、実際の調査は、東京大学新聞研究所、文教大学情報学部、駒沢大学文学部のメンバーが担当した。

調査の概要は、次のとおりである。

調査対象地域	長崎県島原市・深江町
調査対象者	上記市町に居住する２０～６９歳の成人男女で、警戒区域の居住者。調査時点で、避難所・仮設住宅および親戚・知人宅に住んでいる住民３００人（島原市８００人：深江町５００人）。
標本抽出法	系統抽出法
調査方法	避難所・仮設住宅の住民は留置法（６００人）、 親戚・知人宅の住人は郵送法（７００人）。
調査期間	平成３年８月５日から１０日までの６日間。ただし、郵送分は８月３１日で締め切った。
回収数と回収率	回収数　９４２票（島原市：６５４、深江町：２８８） 回収率　７２．５％

なお、調査結果の紹介に入る前に、ここで調査回答者の属性について簡単に触れておきたい。

○回答者の属性

年齢・性別・職業	○女性がやや多く、２０才台がやや少ない。 ○職業では、農林業が４人に１人と多いのが目立つ。
居住地域・居住年数・住居形態	○居住年数は、２０年以上が６割を超え、５年未満は８％と少ない。また、８割以上が、持ち家に住んでいる。
家族構成	○同居家族の構成としては、２世代同居（核家族）が４割と最も多く、次に、親子孫の３世代家族が３４％と多い。 ○家族の中に、小学生がいるのは３割、７０才以上の人がいる家庭も３割。また、３才以下の子供、心身障害者を抱えている家庭はそれぞれ１６％、７％となっている。
近所付き合い	○ふだんの近所付き合いは、かなり密で、「留守を頼んだり、親しく話をする」人が５割と多い。「ときどき立ち話をする程度」が３割となっている。
今回の災害による被害	○災害によってより何らかの被害を受けた家庭が６５％と多く、その中でも、作物の収穫ができなかった家が３４％と最も多い。また、田畑が土石流や火砕流で覆われた家も２０％に達している。家が全半壊したのは６％、死傷者を出した家もわずかながらあった。

1．土石流か、火砕流か

1．土石流か火砕流か

さて、次にアンケート調査の結果を順次紹介していく。まず、6月3日の大災害発生前、住民が火砕流に対してどのくらいその危険を認識していたかをみよう。

5月末からは土石流の危険に加えて、火砕流による危険が高まってきた。その結果、土石流災害と火砕流災害の両方をにらんだ対応が要請されていた。

5月20日に顔を出した溶岩ドームは、次第に成長し、同24日には最初の火砕流を発生させたが、これには火山学者も驚いたようである。火山学者は、火砕流の恐さをよく知っていたため火砕流という言葉を使うことに非常に慎重であった。パニックの発生を恐れたからである。　そして翌25日になって、臨時火山情報の中で初めて火砕流という言葉を使った。26日には土石流除去作業をしていた作業員のひとりが火砕流により火傷をするという事故もあり、テレビでも紹介された。

また、同26日午後1時半には、警報に当たる火山活動情報第1号が発表され、厳重な警戒が呼びかけられた。5月30日には、最大規模の火砕流が発生し、火山活動情報第2号が発表され、緊張感は急速に高まっていった。

火山学者たちは、いろいろなコメントを繰り返しながらも、全体としては次第に警戒感を強めていったのである。地元の有力紙で、島原市と深江町の世帯の約半数が講読していると言われる長崎新聞は、この災害に積極的に取り組み、多くの優れた報道を行ったが、その中から火山学者等による主なコメントをピックアップすると、次のようになる

○5月25日（「長崎新聞」）「火山活動は、いよいよ新しい段階に入った」（下鶴火山噴火予知連絡会会長）

○5月27日（「長崎新聞」）「火砕流は厳重な警戒が必要。大量の降灰で非常に大規模な土石流の発生の危険性も高まった。これまでのように勧告があったら避難するという体制では充分ではない」（下鶴会長）→新聞の見出しは、『全面避難が必要』であった。

○5月27日（「長崎新聞」）「オーバーに解釈しないで欲しい。桜島などでも小規模なものは発生しており、今後もこの程度の小規模なものはあり得るだろう」（気象庁火山対策監）、「この程度の火砕流なら住民の被害はないだろう」（通産省地質調査所）

○5月30日（「長崎新聞」）「最大級の火砕流発生。先端部民家に迫る」

○5月31日（「長崎新聞」）「火砕流、民家まであと200m、太田教授警告『小規模でも危険』小規模な火砕流でも大被害の恐れがあり、避難態勢の強化が必要」（太田九大観測所長）

○6月1日（「長崎新聞」）「これ以上大きな火砕流が発生しないという証拠はない」

（下鶴会長）

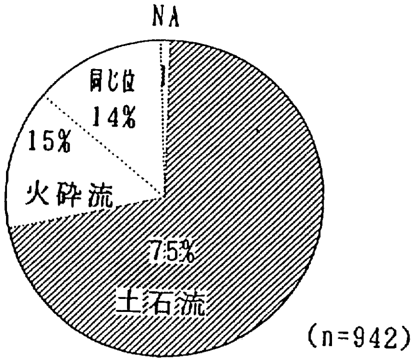
○６月２日（「長崎新聞」）「火砕流に対する認識が甘いようだ。危険度のランク付けをした避難態勢をつくるべきだ」（太田九大観測所長）

火山学者のコメントには、火砕流が危険だという意識と、地元でのパニック発生をできるだけ避けたいとする意識が混在しており、ある意味では、矛盾したコメントがみられるが、基本的なトーンは次第に危険が迫っている、というものであった。

このように状況が変化してきている中で、住民はどのような認識を持っていたのであろうか。まず、火砕流と土石流のどちらをより危険と考えていたのであろうか。

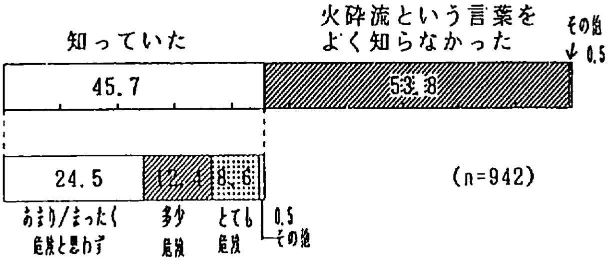
図１に示したように、７割の人が、土石流の方が危険だと思っていた。火砕流の方が危険が大きいと思っていた人は１５％に過ぎない。この傾向は、火砕流により大きな被害を出した上木場地区の人や農林業従事者の場合、かえって強く、８割近くが土石流の方が危険と考えていた。火山学者のマスコミを通じた警戒呼びかけにもかかわらず、火砕流の危険が最も大きい地区の人に理解されていなかったのである。この点は、今後の教訓として学ぶべきであろう。

図１．土石流と火砕流のどちらが危険か



住民が土石流の方がより危険と思っていた最大の理由は、災害の可視性にあったのではないか、と考えられる。土石流の危険性は、これまでの体験や５月１５日以降の土石流の発生によってよく理解できた（人間の背丈以上もある石が下流まで流れ、コンクリートの橋も流された）のに対して、火砕流はピンとこなかったようである。この時点で、火砕流という言葉をよく知らなかった人が５４％もいたのに対して、火砕流を見て、非常に危険だと思っていた人は、わずか９％に過ぎなかったことは、このことを裏づけている（図２）。

図２．火砕流の認知と危険度



大きな被害を出した上木場地区の住民に限ってみても、火砕流という

言葉をよく知らなかった人が５８％もおり、火砕流がとても危険だと思っていた人は、わずか５％しかいなかった。また、火砕流が多少は危険だと思っていた人でも、過半数の人が、土石流の方がより危険とみなしており、火砕流に対する警戒心は、充分とは言えなかった。

また、ヒアリング調査の中ではっきりしたことは、土石流と火砕流の動きをほとんど同じと考えていた人が多い、という事実である。火砕流も溶岩のように重いものであり、土石流と同様に谷沿いに流れる、と考えていたのである。この結果、土石流と同じ警戒態勢（同じ場所での監視）で大丈夫と考えたようである。

専門家でない人が、よくわからないことを考えるとき、ごく一般的に行われるのが、類推ということであるが、火砕流についてもこの類推が間違った対応を生み出したと考えられる。防災機関も、このような類推をし、対応を決めていたようであり、専門家の認識とのギャップは大きかった。

火砕流という言葉が、マスコミに繰り返し登場し、実際に目で見ていても、その危険性を正しく認識されなかった点に、今回の災害から学ぶべき大きな教訓がある。このことは、火砕流といった理解困難な科学用語を地域住民や地元防災機関に正しく理解してもらい、防災対策に役立ててもらうためには、用語や情報伝達方法など、多くの点に配慮する必要があることを示唆している。

一方、危険と思わなかった理由は、図３のように、毎日、火砕流を見ていながら、漠然と「自分の住んでいるところまでくるとは思わなかった」り、「６月３日まではあまり大きな被害が起きなかった」ためである。火砕流に対する慣れと災害に対する想像力の欠如が、このような根拠なき楽観的態度を形成したものと考えられる。また、火砕流を単なる土煙と勘違いしていた人も４人に１人いた。

図３．火砕流が危険と思わなかった理由

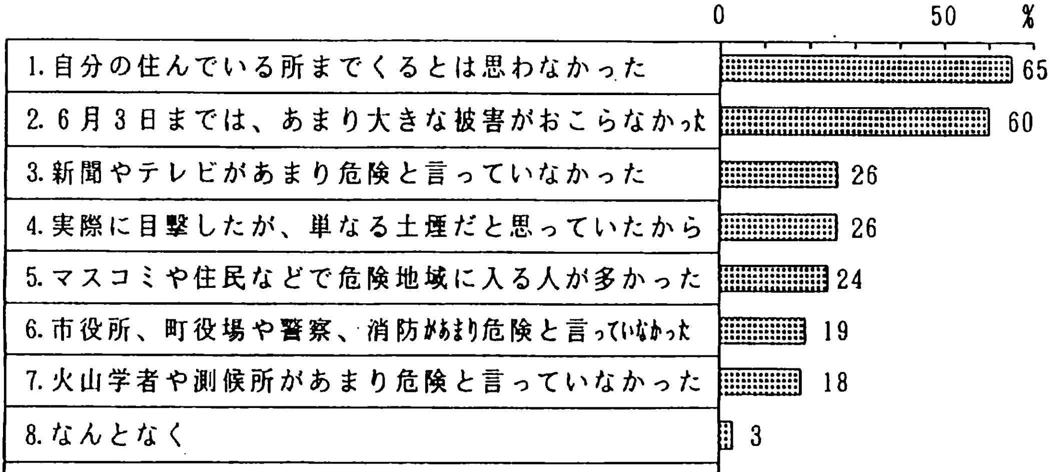
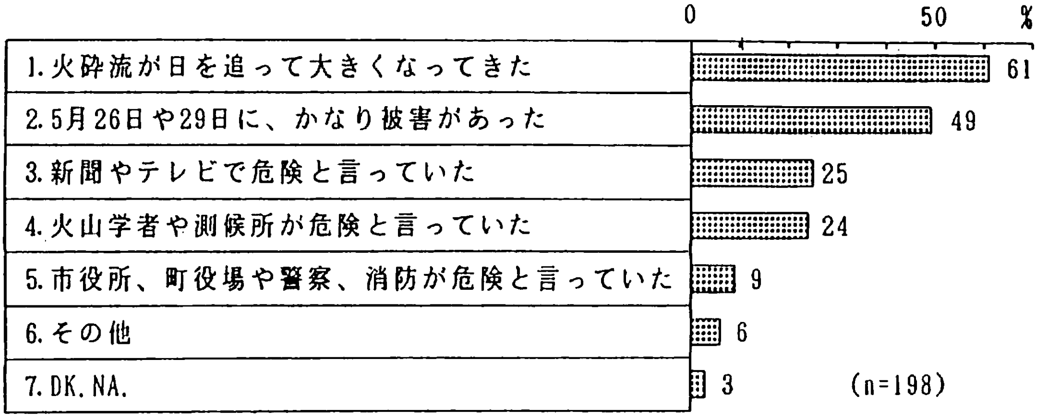


図4．火砕流が危険と思った理由



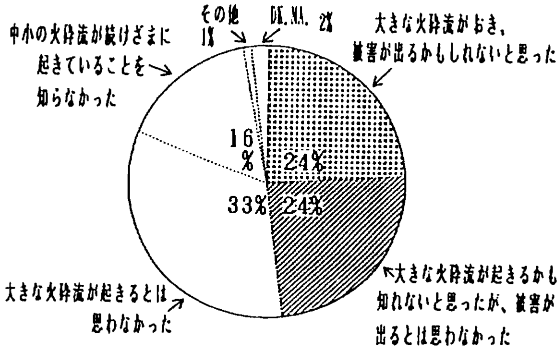
ヒアリング調査の中では、５月２６日に水無川上流部で作業員が火砕流によって負傷したことを知って、「溶岩が落ちてくるのが、わかったろうに、逃げられなかったとは、何とノロマな人なんだろう」と感じた人もいた。このように、火砕流に対する危険意識は非常に希薄だった人が多いのである。

逆に、危険と思っていた人は、全体の２割と少なかった。その理由として、火砕流が日を追って大きくなってきたこと（民家や豚舎まであと○○メートルという新聞記事があった）や、５月２６日に起きた水無川上流部での火砕流による負傷者発生、２９日の被害（山火事）発生をあげている（図４）。

特に、農林業従事者や上木場、大野木場に居住する人の場合は、これらをあげる人が多く、毎日の生活の中で、火砕流の動きを見ながら、次第に危機意識を持つようになった人も、わずかながらいることを示している。また、マスコミの報道を注意深く見ていた人の中には、かなりの危険を感じていた人もいたようである。

このようにして、６月３日の大火砕流発生に一歩一歩近づくわけであるが、この大火砕流の発生直前に中小の火砕流が頻発した。これは、一種の前兆現象のようなものであった。実際、島原測候所や九大の観測所にいた人の中に

図５．中小火砕流頻発の受けとめ方



は、この時、非常に危険を感じ、注意を喚起するために市役所や同僚に連絡した人もいたからである。それでは、この時、住民はどの程度、危機感を持ったのであろうか。図5に示したように、「大きな火砕流が起き、被害が出るかも知れない」と思った人は4人に1人に過ぎない。農林業従事者や上木場に住んでいた人の場合は、危険を肌で感じた人もやや多かったが、大半の人は、被害の発生までイメージできなかった。この点も専門家と一般の人の認識に大きなギャップがあったと言わざるを得ない。

2．臨時火山情報と火山活動情報

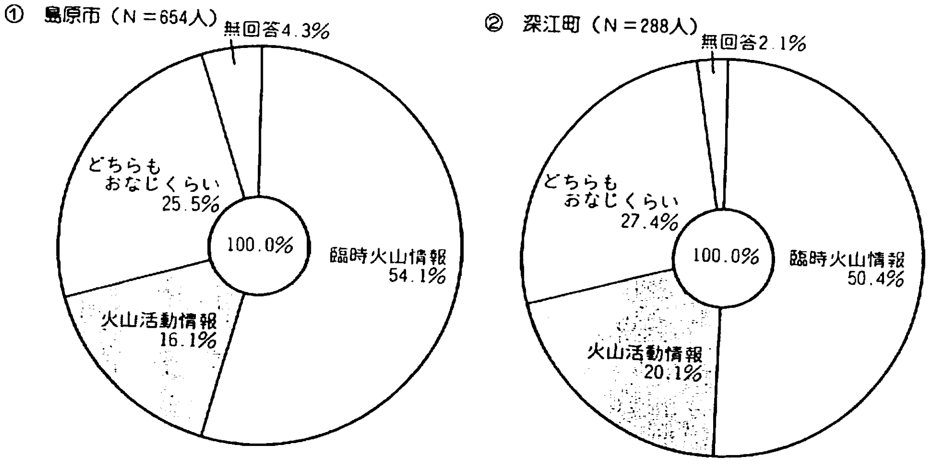
なお、火砕流によってけが人が出た５月２６日、雲仙測候所は、火山活動情報第１号を発表している。この火山活動情報は、火山活動により人的被害が出た場合、あるいは人的被害が予想される場合に発表されるもので、いわば「警報」にあたる。気象庁の担当者によれば、とくに火山活動情報第１号が出るのは相当に緊急度が高い場合だとのことであるが、多くの住民はその重要性を感じとることができなかった。

火山情報にはもう１つ、臨時火山情報があり、これは火山活動に異常が認められるときに出されるもので、いわば「注意報」にあたるが、むしろ多くの住民は、臨時ニュースという言葉などの印象から、こちらのほうが緊急性が高いと思っていた。

アンケート調査でも、このことは明らかである。つまり、臨時火山情報と火山活動情報のどちらが噴火の警告として緊急性が高いかをたずねたところ、臨時火山情報と答えた人が島原市５４％、深江町５０％と、両地域とも５割を超えており、一方、火山活動情報という正解は、島原市１６％、深江町２０％と非常に少なかったのである（図６）。

その意味で、緊急性の印象を高めるため、活動火山情報という用語を「緊急火山情報」とか「火山警報」に改めることなども今後の検討課題にする必要があるといえよう。

図６．臨時火山情報と火山活動情報はどちらが緊急性が高いか



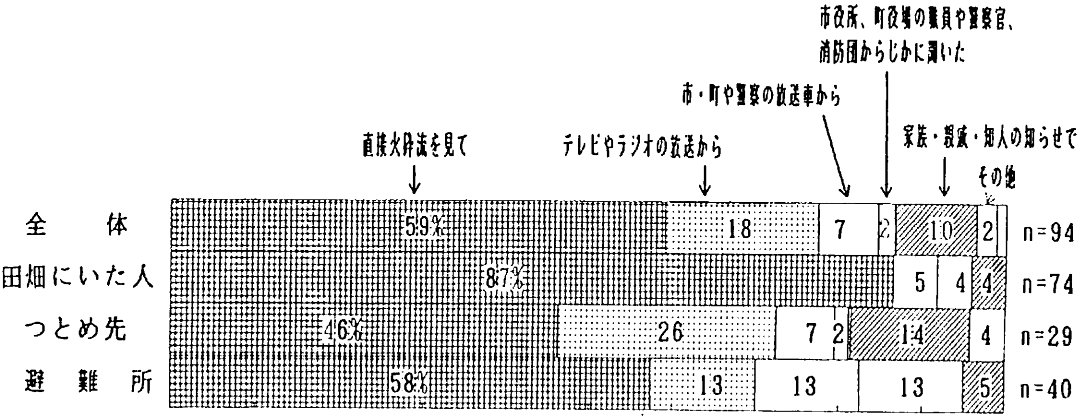
２．避難はどう行われたか

１．当時の居場所と大火砕流発生の情報入手

大火砕流が発生したのは、月曜日の午後４時過ぎであった。このため、この時に、自宅にいた人は３７％と少なく、人々は、勤め先（３１％）、田畑（８％）、車（９％）などに分散していた。勤め人の７割は勤め先に、農林業従事者の３割はまだ、田畑にいた。高齢者や女性は、自宅にいた人が多い。また、上木場地区に対しては、６月３日以前から避難勧告が出されたままになっており、上木場の住民の３５％は、避難所にいた。

大火砕流発生を最初に知ったのは、図７のように、「直接見て」が６割と最も多く、テレビ・ラジオが２割となっている。市町の広報車や家族からの知らせは、６－７％と少ない。もちろん、その時いた場所によっても異なり、田畑にいた人は、９割近くが直接火砕流を見て知ったが、勤め先にいた人は、直接見て知った人が半数に達しない。

図７．大火砕流発生時の第１情報源



２．直後の被害予想と対応行動

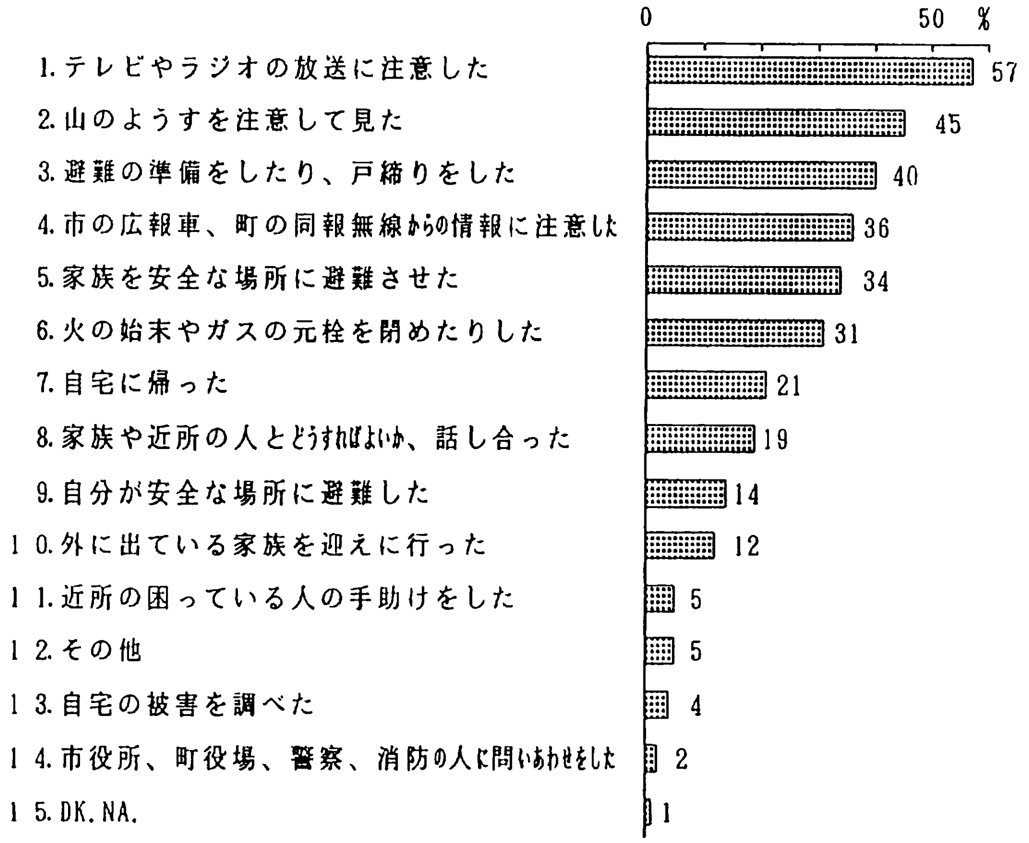
大火砕流の発生を知った直後、７割以上の人が、「これは大変だ、大きな被害が出ているに違いない」と思った。特に、上木場の人、直前の中小火砕流が頻発した時に大きな被害が出ると思った人、田畑に出ていた人は、大被害を予測した人が９割と多い。しかし、この段階でも、「多少の被害が出ているかも知れない」（１５％）、「すごい煙

だが、被害はたいした事はないだろう」（１０％）と思っていた人が、併せて４分の１もいるのは、如何に火砕流の危険性に無頓着であったか、をよく示している。

大火砕流発生直後に、最も多くの人が行ったことは、図８に示したように、テレビ・ラジオの放送に注意し（５７％）、山の様子を注意して見（４５％）、市の広報車、町の同報無線の情報に注意する（３６％）ことであった。このように、自分が置かれた状況の確認（状況の再定義）をしながら、避難の準備や戸締りをし（４０％）、火の始末やガスの元栓を閉める（３１％）と同時に、家族を安全な場所に避難させ（３４％）、自分も安全な場所に避難した（１４％）のである。

田畑に出ていた人、家族の中に弱者（乳幼児、小中学生など）がいる人、直後に大きな被害が出ているに違いないと思った人は、家族を避難させた人がやや多くなっている。

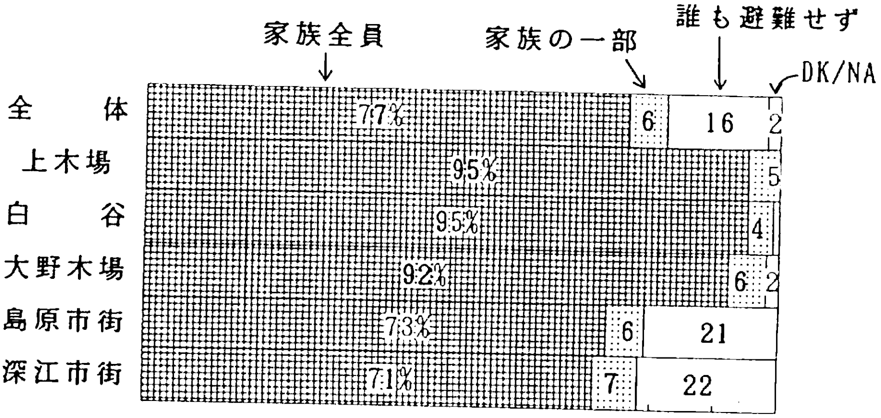
図８．大火砕流発生直後の対応行動



３．避難とその決め手

その直後、島原市と深江町の一部に避難勧告が出されたが、その日のうちに、７７％が家族全員で避難し、家族の一部だけが避難したのは６％、誰も避難しなかったところは、１６％であった（図９）。　当然、山に近い地区の住民の避難は多く、特に、上木場、白谷、などでは、９５％が家族全員で避難し、残りの５％も家族の一部が避難している。これに対して、島原市と深江町の市街地では、家族全員の避難は７割に留まっており、２割強の世帯では一人も避難していない。

図９．６月３日当日の避難状況

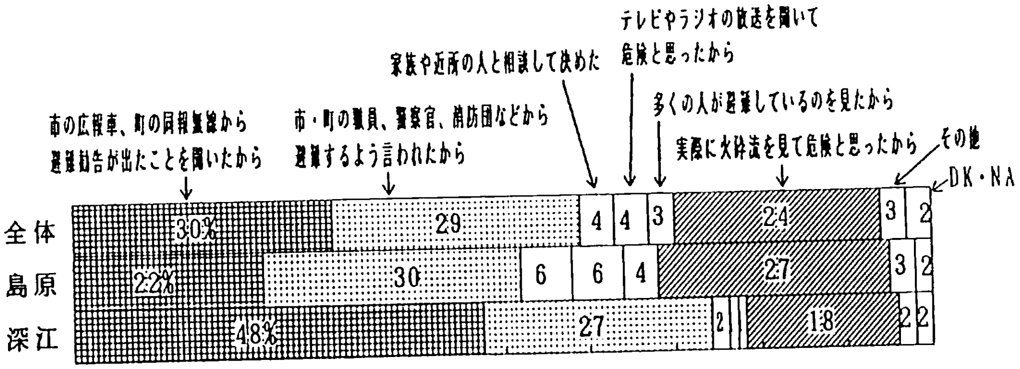


避難の一番の決め手は、市町からの避難勧告（広報車、同報無線で聞いて＝３０％、消防団、職員、警察官から言われて＝２９％）であった。実際に火砕流を見て危険と思い、避難したのは、避難した人の２４％と少なかった（例外は、火砕流の先端に近かった白谷周辺(注)であり、５割が、火砕流を見て避難している）。このことは、目に見える危険があったとしても、自分の意思だけで避難行動を起こすことが如何に難しいか、換言すれば、行政機関の呼掛けが如何に重要か、を示唆している。

一般的に、緊急時になると、思考停止状態（頭の中が真っ白になるという状態）に陥り、どうすべきか、判断がつきかねる人、避難の決断がつかない人が非常に多いのであるが、この時もそうだったと考えられる。島原市と深江町の避難勧告の発令と伝達が、人々の避難行動を促す上で、大きな役割を果たしたものと考えられる（図１０）。

また、深江町では、同報無線が整備されていたため、避難勧告が迅速に伝わり、これを聞いて避難した人が４８％もいたが、この事実は、同報無線の効果が非常に大きかったことを物語っている。

図１０．６月３日の避難の決め手



3．流言蜚語と情報混乱

1．流言蜚語の種類

「災害時にうわさはつきもの」の例にもれず、今回の噴火にともなって島原市、深江町ではさまざまな流言が乱れ飛んだ。

その流言の入手先として、「流言」という言葉から連想されるパーソナルな関係の人物ではなく、マスコミをあげた人が約１５％にものぼったことが、今回の大きな特徴の１つであろう。そのこともあってか、流言を何も聞いたことがないという人は、４％ときわめて少なかった（表１、表２）。

表１．流言蜚語の広がり（聞いた人の割合、複数回答）

	島原市	深江町
眉山が崩れる	６７．７％	４９．７％
また大火砕流が起こる	５６．３	５３．１
避難民の留守宅に空き巣が入っている	８３．８	７９．５
警戒区域は５、６年も立ち入り禁止が続く	１３．３	８．３
島原市（深江町）の災害対策本部が市・町外に逃げ出した	３．４	４．５
この災害は天草四郎のたたりだ	２．６	３．８
近いうちに津波がくる	９．９	１３．９
その他	２．３	２．１
そのような話は一つも聞かなかった	４．０	５．２
わからない、回答なし	２．１	３．１
計	６５４人	２８８人

表2．とくに気になった流言（単答）

	島原市	深江町
眉山が崩れる	３１．７％	１１．４％
また大火砕流が起こる	１７．９	２５．０
避難民の留守宅に空き巣が入っている	２８．２	３０．３
警戒区域は５、６年も立ち入り禁止が続く	５．２	５．７
島原市（深江町）の災害対策本部が市・町外に逃げ出した	０．５	０．８
この災害は天草四郎のたたりだ	０	０．８
近いうちに津波がくる	０．８	１．５
その他	１．３	１．５
わからない、回答なし	１４．４	２３．１
計	６５４人	２８８人

こうした流言のうち、まず、最初に流布したのが眉山に関するものである。１９８年前の普賢岳の噴火では、山が鎮静化したのち眉山直下の地震が起こり、眉山の南東部が崩壊、崩れた土砂の起こした津波は、有明海を隔てた対岸の肥後にまで到達した。これは、１５０００人の死者を出す大災害となり、「島原大変、肥後迷惑」として地元の人々に語り継がれてきた。

このため、再噴火以前から島原地方では、「普賢が噴火したら、眉山がまた崩れるだろう」との言い伝えがあり、今回も１１月の再噴火の時点ですでにこの種の流言はささやかれはじめていた。島原市では、６８％がこの流言を聞いたことがあり、直接には関係ない深江町でも、約半数の人が耳にしているように、その普及度はきわめて高い。

もう少しくわしくこれを検討すると、この流言には次の３つのタイプがある。

①状況から判断したもの・・・これは、「眉山にひびが入っている」、「眉山が膨張している」といったもの。そのほかには、「眉山の裏側（島原市内からは見えない）が崩れた」、「（前回の噴火でできた）白土湖のわき水が湯になった」などというのもあった。

②専門家や公的機関が言明したというもの・・・これは、火山の専門家や警察、消防団の発言を頼りにしたもので、たとえば「（九州大学島原地震火山観測所の）太田一也所長が娘さんに『眉山にはひびがはいっとる』と言った」というものや、「警察官から『眉山にひびが入った。私らも逃げる』と聞いた」、「危険となったため、

市災害対策本部が移転した」などというのがあった（調査では４％とごく少数）。

③報道関係者の行動から憶測したもの・・・今回一番大きな影響を与えたのは報道関係者の行動である。報道関係者は正確な情報をもっていると思われており、市民はその行動に注目していた。とくに、６月７日の避難騒ぎは深刻であった。この日午前１０時半、島原署は「眉山に亀裂が入り危険なので、報道関係者が宿泊中のホテルから移動している」との情報を入手した。署は自衛隊に事実確認を要請、太田所長がヘリコプターで上空から視察し、昼すぎに「亀裂」が事実無根であることが発表された。実のところ、報道関係者は別の理由からホテルを移ることにしたもので、ホテルの喫茶店でスタッフたちの会話を小耳にはさんだ人の誤解が流言を生み、軽いパニック状態を作り出したのである。

なお、島原市対策本部は、６月１１日を初回に以降数回、市長名で「普賢岳噴火の活発化に伴い、眉山について何かと噂されておりますが、専門家の先生方の観測によりますと、‘安全’ということです。デマや噂にまどわされることなく安心してお過ごし下さい」というビラを、市内全戸に配布した。また、避難所にも同種のビラを貼り、流言対策をとっている。

次に、「避難住民の留守宅に空き巣が入っている」との流言についてであるが、これを耳にしたことがある人がもっとも多く（全体で８３％）、かつ、とくに気になったものとして選ばれている（同２９％）。盗まれたものとして具体的にあがっていたものには、家財道具や電化製品など以外にエアコンがあった。島原地方は元来エアコンを必要としない気候ではあるが、今回の噴火にともなう火山灰のため、急きょエアコンの需要が高まり、品切れ状態にあったことが流言を生み出す原因となったとも思われる。

６月２６日には、警戒地域区域の代表者が島原署にこの流言の真偽を確かめるとともに、パトカーによる町内視察を要求するなど、流言に対する対処行動も起こった。

この背景には、禁止されているとはいえ、人の立ち入りは容易であるとの人々の認識があったと思われる。警察には被害届けは出ていないが、実際に自分が被害を受けたという人の声もあり、そこから流言が生まれたのであろう。警察の否定にもかかわらず広まった流言ではあるが、８月２７日以降順次許可された警戒区域内への一時入域により、ほとんど被害のないことを確認できるようになったため、この流言はだんだん少なくなっている。

もう１つ、災害の予測型の流言を取りあげることができよう。

調査で取りあげた「大火砕流が起こる」は、５５％の人が聞いたと答えており、かなり広まっていたものと考えられる。そのほかにも、「土石流で水無川流域が埋まってしまう」、「大地震が起こる」、「大噴火が起こる」などがあり、悲観的な将来予測と結びついて、その災害により「町はもう終わりだ」、「島原半島は駄目になる」などというものも聞かれた。変り種としては、津波の襲来予測もあった。

将来に関する流言としては、上に述べたもののほかに、噴火や避難生活がどのくらい続くのかという見通しや、火山灰の影響に関するもの、「近いうちに警戒区域が一部解除されるであろう」という希望的観測のものなどが見られた。

いずれも避難生活が長期化して帰宅を望んでいるものの、噴火がおさまらないうちは安心できない、という人々の心理から発せられたものであろう。

そのほかには、「この災害は天草四郎のたたりだ」、「（噴火の原因は）普賢岳の神様の３つのうち、１つを誰かが持ち帰ったとかいうことだ」、「眉山は女だからしつこい災害をもたらす」などという俗信に沿った流言もあったが、いずれも一部でささやかれたものにすぎなかった。

2．流言の情報源と信用度・不安度

次に、とくに気になった流言の入手先についてであるが、先に述べたようにマスコミから直接聞いたという人が多いほかは、日頃からのコミュニケーション・チャンネルを通じて広がっている。

近所付き合いが緊密なこと（「留守を頼んだり、親しく話をする」は５０％）もあってか、近所の人からの入手が４８％と最も多く、次に親戚・知人、職場・同業者と続いている（表３）。

九州地方には「・・・げな」という形式で、伝聞形式の話や笑いを目的にしたまじめでない話、自らの憶測を伝える‘ゲナゲナ話’と呼ばれるものがあり、今回の流言もまさにこの形式で語り継がれていったものと思われる。

普及度の高かった３つの流言の入手先について見ると、「留守宅に空き巣が入っている」は、やはり近所の人から聞いたという人が多く６４％、「また大火砕流が起こる」については、マスコミからの入手が４１％であり、流言というよりニュースとして語られていたと思われる。

表３．とくに気になった流言の入手先

	島原市	深江町
家族	１１．２％	８．０％
近所の人	４７．７	４９．０
職場の人や同業者	２６．８	１９．８
親戚や知人	２８．６	２０．１
報道関係者から直接聞いた	２．８	３．１
テレビや新聞で知った	１４．２	１６．３
役所・警察・消防から聞いた	３．１	２．８
その他	４．０	１．７
わからない、回答なし	１１．０	１７．４

また、こうした流言に対しては多くの人が半信半疑であり（５５％）、信じた人も２９％と多い。まったく信じないという人はごく少数である（表４）。不安度についても、とても不安になったという人が２３％もおり、不安を感じなかった人は７％とわずかである（表５）。すなわち、流言を聞いた人は全面的に信用するわけではないが、かといって否定するに充分な証拠を入手することも不可能なため、あいまいな状況に置かれる。このため、不安を感じることになるのである。

ちなみに、聞いてとても不安になったという人が多かった流言は「警戒区域は５、６年も立ち入り禁止が続く」（４１％）、「また大火砕流が起こる」（３５％）などであり、先行きに不安を持っていることがうかがえる。行政側はこれらの流言に対して個別に対処していたが、長期化する自然災害の中での住民の心理的負担を少しでも軽くするためにも、正確な情報を伝えるのはもちろん、うわさ話を気軽に問い合わせできるような窓口を設けるなどの対策が必要であろう。

表４．とくに気になった流言の信用度

	島原市	深江町
本当の話だと思った	２８．４％	２９．９％
半信半疑だった	５７．６	４８．６
まったく信じなかった	４．６	５．２
わからない、無回答	９．３	１６．３
計	６５４人	２８８人

表５．とくに気になった流言がもたらした不安

	島原市	深江町
とても不安になった	２４．２％	２１．２％
不安になった	２８．１	２２．６
少し不安になった	３０．３	３０．６
不安を感じなかった	６．９	７．６
わからない、無回答	１０．６	１８．１
計	６５４人	２８８人

3．6月12日の情報混乱

大規模な火災流が起こり、犠牲者も出た6月上旬から中旬にかけて、いくつかの情報混乱騒ぎが起こった。

このうち最も深刻な事態となったのは、6月12日の午後であり、各地で避難騒ぎが起こった。その経過と住民の受けとめ方を検討してみよう。

この日未明、普賢岳の活動が急に活発化し、島原市北東部の千本木・折橋地区に直径7～10センチの噴石を降らせた。このため、民家の屋根がわらや乗用車のフロントガラスが割れるという被害となったほか、割れて飛び散ったガラスにより怪我人が出たりもした。

そこで、早朝には島原市災害対策本部は広報車を出して、噴石への注意を呼びかける一方で、市教育委員会も、市内小中学校の翌日までの臨時休校を決めた。

ところが、ほぼ同じころ、九州大学島原地震火山観測所が普賢岳の火口近くに設置していた4基の傾斜計が、山頂付近の異常な膨張を記録しはじめていた。その後、地震の回数も急増したこともあって、観測陣のあいだで緊張が高まる一方で、連絡を受けた自衛隊は隊員全員にヘルメット着用を指示するなど警戒体制に入り、島原警察署も周囲の警察署に半島への車の立ち入りを見合わせるよう要請した。

パニックのきっかけとなったのは、午後1時5分に雲仙測候所から発表された火山活動情報である。警報にあたるこの発表は、「傾斜計に大きな変化が見られ、厳重な警戒が必要である」という内容であったが、そのわずか2分後「傾斜計により山体が膨らんでいるのが確認されている。今までに経験していない違った噴火も考えられる。半島全域で厳重な警戒を要す」との急報を出した。

これを受けた市対策本部は、すでに地震火山観測所から「火山活動の活発化で噴石の恐れがある」という情報を得ていたこともあって、ただちに（午後1時40分頃から）、千本木地区を中心に広報車10台を出して、市民に外出を控えるように呼びかけた。ところが、皮肉なことに午後3時の火山噴火予知連の発表で明かになるのではあるが、このころにはすでに山頂の膨張は止まっていたのである。

この情報は、測候所や災害対策本部に詰めている報道関係者にも、もちろん緊張をもたらした。テレビやラジオは、山頂膨張と島原半島全域警戒の呼びかけを繰り返し放送したが、その一方で、報道陣は噴火が切迫しているとの認識から‘島原市内、さらには島原半島は危険だ’としてぞくぞく緊急脱出を始めた。このようすが、今度は住民に飛び火し、荷物をまとめて避難する住民のトラックや乗用車で渋滞の列ができたという。

では、人々はこの情報をどのように入手し、受け止めただろうのか（表6）。

まず、当日この情報を聞かなかったという人は3％ときわめて少ない。また、その入手先はテレビやラジオがもっとも多く71％である。

火砕流による犠牲者が出てまもない頃であり、火山活動に対する住民の関心が高かったとはいえ、視聴率の低い平日の午後という時間帯であることを考えると、いかに緊迫した放送がなされていたかが理解できよう。

表6．6月12日午後の「噴火に対する警戒を要する」という情報の入手先（複数回答）

	島原市	深江町
市、町や消防、警察の広報車から	28．1％	19．4％
町の同報無線から	3．7	24．3
市、町の職員や消防団員、警察官	12．8	12．5
家族から	10．6	7．3
近所の人から	10．7	11．5
親戚や知人から	15．0	11．5
テレビやラジオの放送から	72．9	67．0
その他	4．1	2．8
そんな情報は聞かなかった	2．4	2．8
わからない、無回答	1．8	3．5
計	654人	288人

次に多く選ばれたのが、島原市では広報車、深江町では同報無線という公的機関からの連絡であった。深江町では、今回の災害前に整備した同報無線が大いに役立つこととなったのである。残りはパーソナルな情報源であり、親戚知人、公的機関の人間、近所の人、家族の順でいずれも10％前後となっている。

この質問は複数回答としたため、「テレビで知って、近所の人と話した」であるとか、逆に「家族から連絡を受けて、心配だからテレビを見ていた」などということが考えられる。このため、さらにこの緊急情報を聞いたあと、どのような対処行動をとったのかについて質問してみた（表7）。

まず、当然のことながら、多くの人が選択肢にあげられたような行動を複数とっている（平均2．4個）。

個々の行動例をみると、テレビ・ラジオの情報に注意した（81％）、市・町からの情報に注意した（41％）など、公的な機関からの情報に注意する対処法が目立って多い。外出を控えることや外出の際にはヘルメットを着用することなどは（それぞれ20％強、10％強）、これは広報車や同報無線で呼びかけられた注意であり、噴石の降る方角を知るために風向きに注意するという25％と合わせると、60％弱の人が噴石に対する具体的な警戒行動をとっている。もちろん、いざという時に備え、家族に注意したり（49％）、家族や知人と相談したり（11％）、というのも少なくない。

表7．危険だという情報の入手後、行なったこと（複数回答）

	島原市	深江町
テレビ、ラジオの情報に注意した	８２．３％	７７．８％
市、町からの情報に注意した	３５．６	５３．５
できるだけ外出しないようにした	２６．３	１４．９
外出するときは、ヘルメットを着用した	１３．６	４．９
常に、風向きの情報に気をつけた	２０．０	３５．４
家族に注意するようにいった	５１．１	４２．７
どうするか家族や知人と相談した	１２．１	８．７
その他	２．９	１．０
何もしなかった	４．１	２．４
わからない、無回答	２．３	４．２
計	６５４人	２８８人

今回の調査対象者の多くは、６月１２日の時点ですでに避難生活に入っていたため、実際にこの日避難した、という人は見受けられない。

では、避難所なら情報混乱は起こらないかといえば、そうではない。たとえば、６月８日夜のことを取りあげてみよう。この日午後8時前、これまでで最大規模の火砕流が発生し、火砕流は水無川沿いに海まで１．５キロにまで迫った。住宅など７３棟を焼失する被害を出したが、折りしも悪天候であり、火山灰混じりの強い雨が降り、山頂付近では稲妻が走っているのが観測された。

このため、避難所となっていた島原市立体育館では火山れきの落下とともに、「逃げろ」「船が来ている。早く海へ逃げろ」「（火砕流が）こっちへ来る」「眉山が２つに割れたぞ」などという叫び声で騒然となった。逃げようとする人たちに消防団員が「危なくなれば、本部から無線連絡があるはずだ。落ち着け」と何度も繰り返し、パニック状態は次第に収まったという（「朝日新聞」６月１１日朝刊より）。

６月８日と１２日の情報混乱に共通している要素は何であろうか。

それは危険が目前に迫っていると感じられるにもかかわらず、その状況をはっきり説明してくれる情報が不足していた点にあるのではないだろうか。６月８日の場合、いったん消防団員の説得を聞いて落ち着いた人々も、テレビで詳細な噴火の情報が流れるまでの３０分間は不安だったという。１２日の場合、報道陣の緊急脱出が混乱を生み出す直接のきっかけとなったのではあるが、それは住民が自分で状況を認識し、判断するために必要な情報が欠けていたからではないだろうか。

すなわち、発表された火山活動情報などの内容があいまいであったために、住民が自らの判断で行動することが難しくなり、情報をもっていると思われる人（＝報道陣）の動きにしたがったのであろう。実際、「今後の火山活動に厳重な警戒が必要です」であるとか、「いままでに経験していない違った噴火も考えられる」という表現はあいまいであり、この情報を受け取った住民はもちろん報道陣も、いったいどんなことが起こるのか見当もつかなかったのではないだろうか。

数日前、予想もしなかった火砕流によって大量の犠牲者を出したばかりであり、未明には同じく予想もしなかった噴石を経験したところへ、この情報である。今度はとてつもない大災害がおこるのではないかと、人々の恐怖心をあおったと考えられるのである。もちろん、傾斜計の変動や地震の増加だけでは、爆発の前兆とは考えられるが、具体的にどのような爆発となるか予想するのは難しい。

しかし、「半島全域で警戒を」という表現では、半島全域が爆発で被害を受けると取られかねず、実際「半島が吹っ飛んでしまう」という流言も流布したという。測候所関係者は「風向きとの関係で半島全域に爆発に伴う噴石が降る可能性があり、被害の場所が特定できない」という意味であったというが、それなら少なくとも「半島全域で噴石の警戒を」とすべきであろう。

さまざまな要因が重なり情報混乱が起こるのではあるが、それを最小限に食い止め、住民の不安をかきたてないためにも、充分な情報をできるだけ具体的に伝えることが行政や専門家、報道機関にもっとも望まれることである。

4．警戒区域設定と避難生活

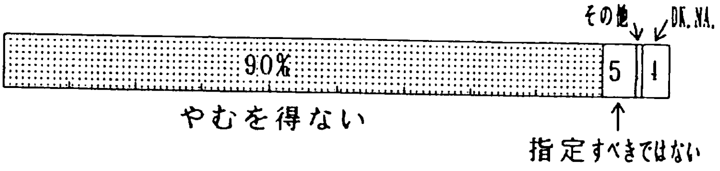
1．最初の警戒区域設定（6月6～20日）についての意見

【以後使用する地区名は次のような区域をさす。上木場＝北上木場町と南上木場町、白谷周辺＝白谷町、天神元町、札の元町、島原市街＝それ以外の島原市の警戒区域等、大野木場＝（上、中、下、新）大野木場町、深江市街＝その他の深江町の警戒区域等】

島原市と深江町では、6月6日から6月20日にかけて、約12000人が住む地域を順次、警戒区域に指定し、立ち入りを禁止したが、この措置については、90％もの人が「住民の安全を考えれば、やむを得ない」と支持している（図11）。「住民の生活への影響を考えると、指定すべきではなかった」という意見の人はわずか5％と少ない。

男女差、年齢差、地域差はほとんどなく、全ての階層で9割以上という高支持率を得ている。ただ、8月上旬の調査時点で、避難生活はもう限界であり、警戒区域の全面解除をすべき、と主張している人の場合は、指定すべきでないという意見の人が26％とやや多いのが目立った。

図11．最初の警戒区域の指定について



2．避難先とその変更状況

調査対象者が避難生活に入ったのは、6月3日前後がほとんどであり、調査時点（8月8日－12日）までにほぼ2ヶ月を経過していた。このあいだ人々は、どこに避難したのであろうか、また、避難先をどのように変えていったのであろうか。

まず最初に避難したところは、親戚の家（46％）と公民館・体育館（42％）に2分される。知人の家、借家・アパート、その他は12％と少ない。6月3日以前にすでに避難していた人が多かった上木場の人は、公民館・体育館が3分の2と多い。また、

島原の市街地の人は、安全な地区にいる親戚等が多く、５４％が親戚宅等に避難し、公民館・体育館への避難は３割と少ない。逆に、深江町は、町の大半が要避難地区になったことから、公民館・体育館への避難が５割と多い。第１の避難先での滞在日数は、６日以内という短期避難（３７％）と、４週間以上の長期避難（３３％）が多く、平均では２０日前後となっている。

このうち、避難先を変えた人は８１％で、親戚宅から公民館・体育館への変更と公民館・体育館から別の公民館・体育館への変更が多い。また、親戚宅から、借家・アパートへの変更もかなり見られる。結局、２番目の避難先としては、公民館・体育館が３５％、借家・アパートに移った人が１７％、親戚の家に移った人が１７％などとなっている。２番目の避難先での滞在日数は、４週間以上が４割と多く、６日以内と短い人は１６％と少なく、長期滞在が多くなっている。

さらに避難先を変え、３番目の避難先に移った人は、全体の半数（一度避難先を変えた人の約６割）で、行政による長期避難対応が軌道に乗り始めたこともあり、公民館・体育館から旅館等への移動が最も多い。この結果、滞在先としても、役所が借り上げた旅館や船が最も多く（３０％）、公民館・体育館（２５％）、仮設住宅（１９％）、借家・アパート（１３％）、親戚・知人の家（１０％）などとなっている。

さらに４番目の避難先に移った人は、全体の２４％で、旅館等から仮設住宅に移った人が多い。あとは、役所が借り上げた旅館などと体育館・公民館を往復する人である。

５番目の避難先に移動した人は、全体の９％と少ないが、仮設住宅に移った人と、役所が借りあげた旅館等に移動する人がほとんどである（以上、図１２、図１３）。

図１２．避難先の変更状況

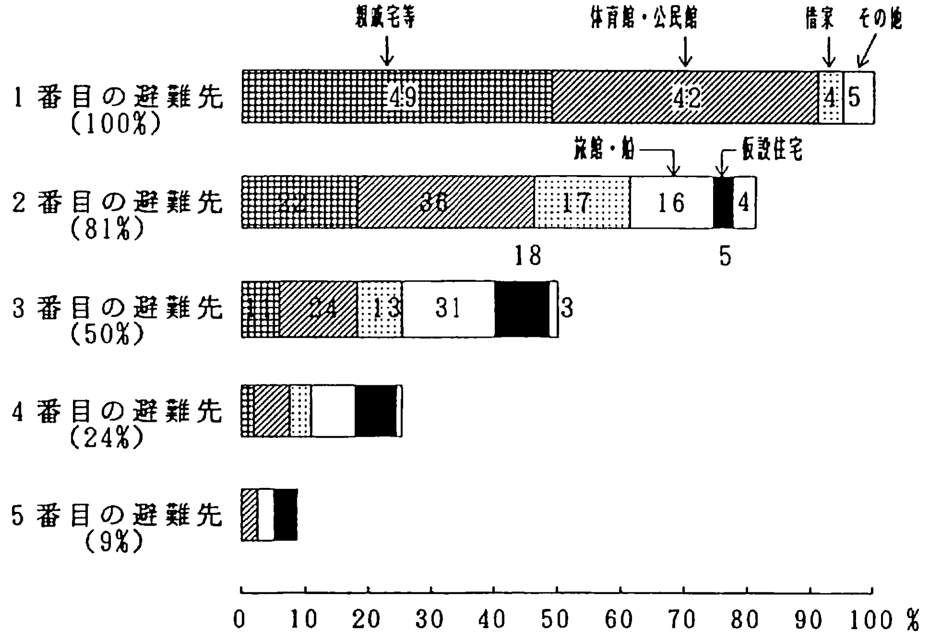
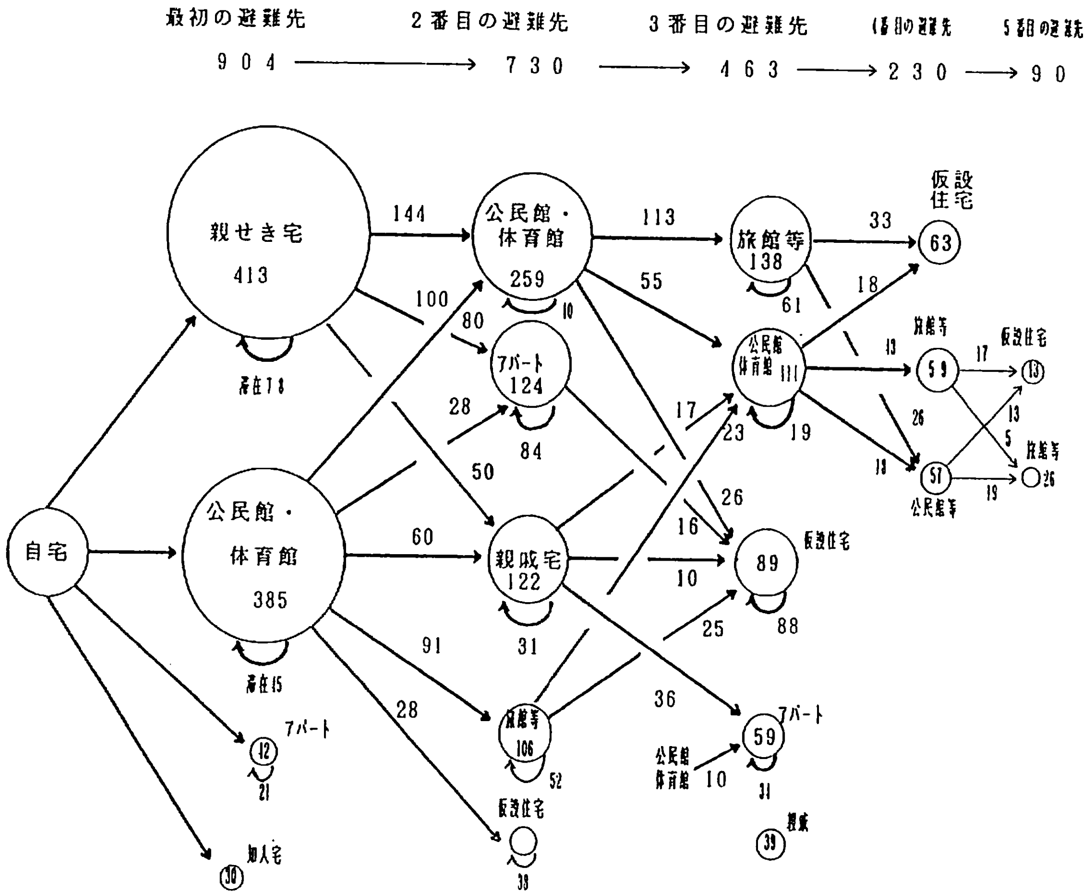


図１３．避難先の移転状況

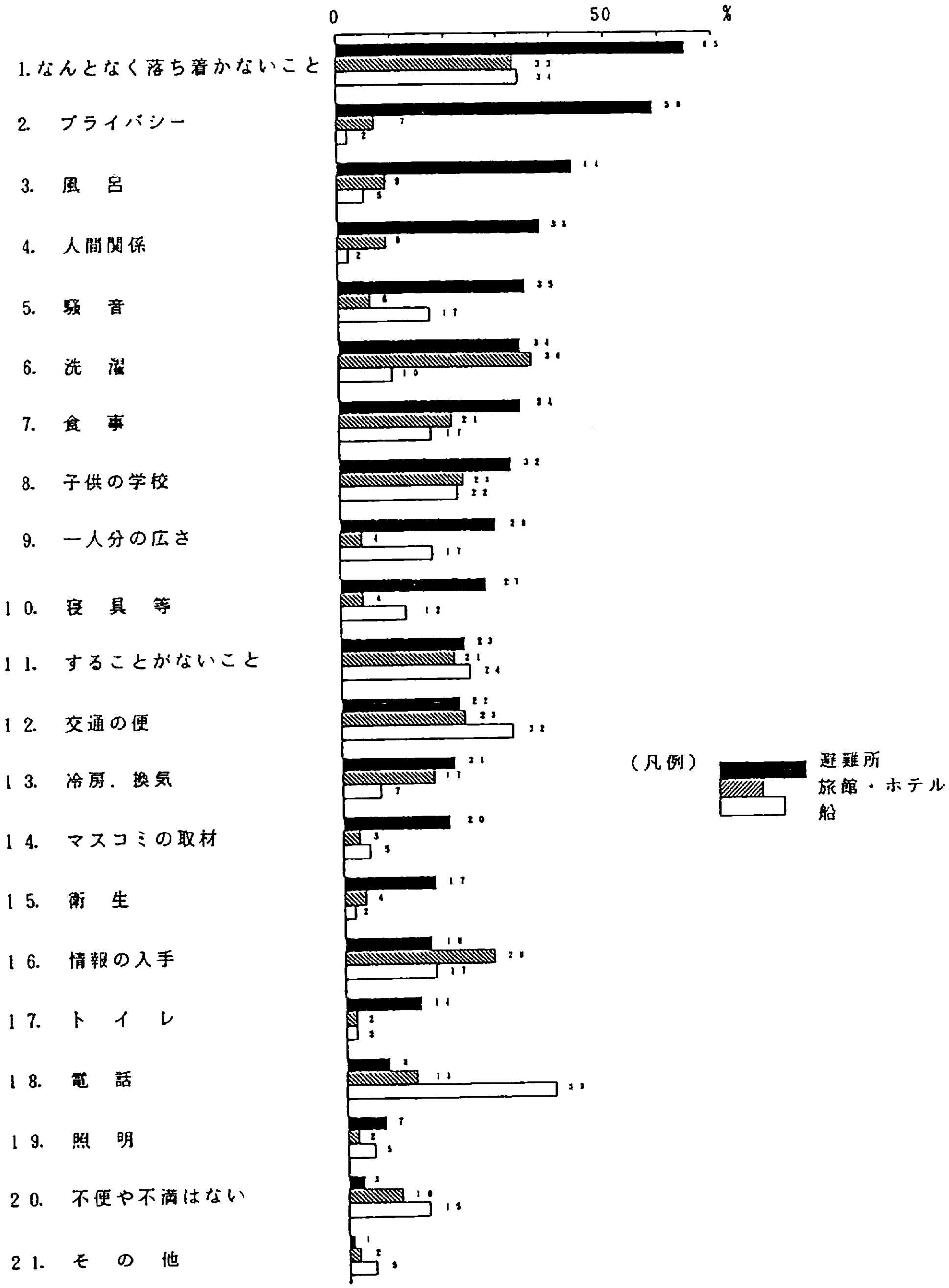


３．避難生活の影響

３－１．避難先での不便・不満

避難先での不便や不満についてみると、避難先によって大きな違いがあることがわかる。公民館や体育館など、市や町の用意した避難場所（経験者６７％）では、「不便・不満なし」はわずか３％で、「なんとなく落ち着かない（６５％）」、「プライバシー（５９％）」、「風呂（４４％）」、「人間関係（３８％）」、「騒音（３５％）」、「洗濯（３４％）」、「食事（３４％）」など平均で５．５項目と、多くの問題が指摘

図１４．避難生活上の不便・不満



されている。

これに対して、県や市町が借り上げた旅館・ホテルでの不便・不満になると、はるかに少なく、実利用者（３８％）の評価では、「不満なし」が１０％、平均不満項目数が２．６項目と、体育館・公民館の不満の半分以下に減っている。しかし、「洗濯（３６％）」と「情報の入手（２８％）」の２項目は、体育館・公民館より不満が高く、改善の余地がある。

一方、借り上げた船に避難した経験を持つ人は４％と少ないが、不便・不満項目として、平均で２．７項目が指摘され、その中で「電話が不便」というのが１番多かった。連絡手段が船の場合、少ないということであろう。

このように、長期避難になると、現在の地域防災計画にあるような避難所では、非常に不満が蓄積することになり、旅館・ホテル、船など別の方法が必要となる。災害対策基本法がつくられたのが約３０年前であり、その後の社会変化、とくに豊かな社会になったことを考えると、長期避難計画の別途策定とその救援の仕組みの整備・充実が必要と考えられる。

公民館・体育館での避難生活に絞って、もう少しくわしくみると次のようになる。

まず第１に、島原市と深江町の違い（避難所の特徴によって違う）がある。深江町の置かれた地理的制約（道路交通規制）や避難所の不足から、深江町では、交通の便や食事・風呂・洗濯などの不満が多い。これに対して、島原市では、マスコミの取材攻勢が激しく、それに対する不満が多く指摘されている。また、男女差は、全体に大きくないが、女性は、人間関係や「なんとなく落ち着かない」といった点を多くあげ、男性は、食事やマスコミの取材を多くあげる傾向がある。

年齢別では、６０代以上と２０代の不満がやや少なく、３０－４０代の不満が高いのが目立つ。とくに、風呂、人間関係、プライバシー、子供の学校についてその傾向がみられる。小中学生がいる家庭では、学校の問題、洗濯、プライバシーが不満の高い項目であった。また、マスコミの取材という点では、被災中心地である上木場、白谷地区の人の不満が、とくに高かった（図１４）。

3－2．避難生活の心身への影響

避難生活が心身に及ぼす影響については、先に島原保健所が行った調査があるが、本調査の結果もほぼ同様のものである。

最も多くの人が訴えたのは、「不眠」（５２％）であり、「イライラ」（４１％）、「肩こり」（３９％）、「体のだるさ」（３９％）、「便秘」（２８％）、「頭痛」（２７％）が続いている（図１５）。

この心身への影響に関しては、年齢による違いがあり、全般には、高齢者の方が訴える症状が多い。とくに、不眠、肩こり、便秘、持病の悪化は高齢者に多い。しかし、体のだるさとイライラは、逆に若い人に多くみられた（図１６）。

便秘と頭痛は、男性より女性に多くみられた。また、今回の災害で何等かの被害を受

けた人は、全般に体の不調（特に、不眠、体のだるさ、肩こり）を訴える率が高くなっており、精神的ストレスが、このような症状の発現に影響を与えていることを示唆している。

図１５．避難生活による体調悪化

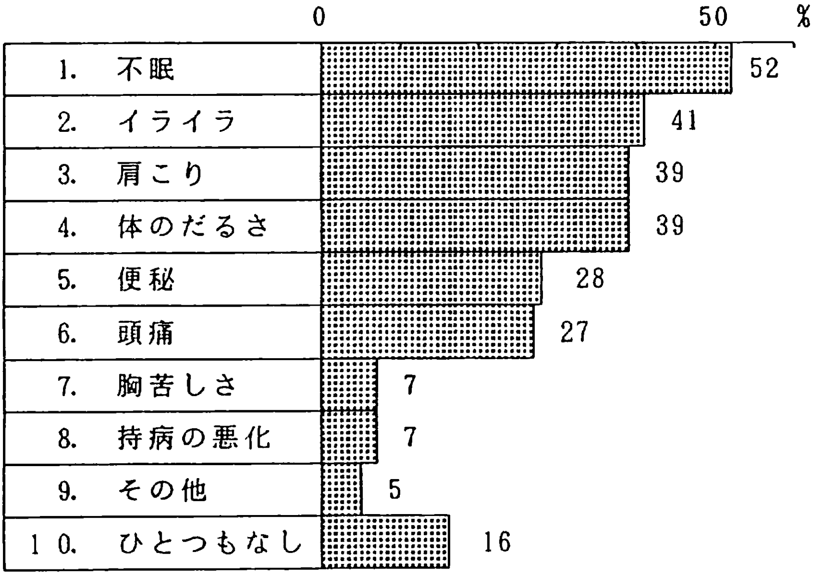
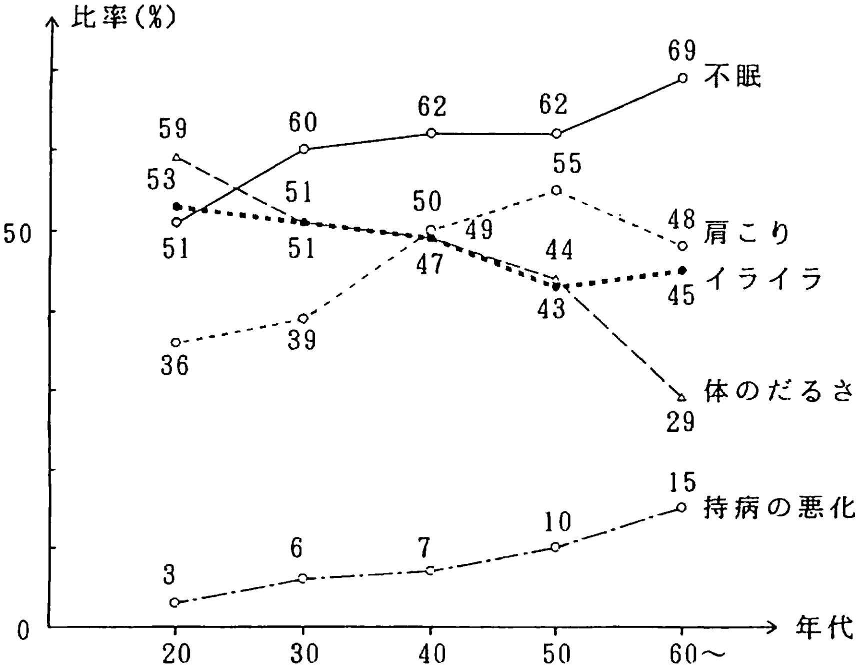


図１６．避難生活による体調悪化の年齢差



３－３．仕事、世帯収入への影響

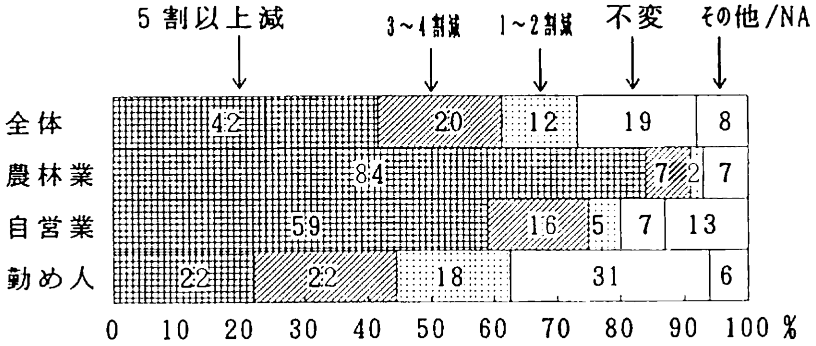
災害前に仕事を持っていた人に、現在も仕事を続けているかどうかをたずねたところ、「災害前と同じように働いている」人は３６％に過ぎず、「失業中」（１８％）、「休職中」（２０％）、「休職中ではないがほとんどできない」人（１５％）で、半数以上がほとんど仕事をしていない状態であった。とくに、農林業従事者の場合は、災害前と同じように働いている人は７％に過ぎない。自営業者の場合も、同様に影響が大きく、災害前と同じように働いている人は４人に１人である。これに対して、勤め人の場合は、３分の２が災害前と同じように働いている。仕事への影響が、人により大きく異なることを示している。

この結果、警戒区域の立ち入り規制や避難生活による世帯収入への影響も非常に大きく、平均でも、４割減となっている。図１７に示したように、「非常に減った（５割以上）」世帯が４２％、「減った（３～４割）」世帯、２０％、「少し減った（１～２割）」は１２％となっている。また、収入が変わらない世帯は１９％、かえって増えた世帯は１．５％に過ぎない。

当然、職業による違いが大きく、非常に減った世帯が多いのは、農林業従事者（８４％）と漁業従事者（６９％）で、平均でも６割以上の収入減となっている。また、自営業従事者では５割以上の収入減と大きなダメージを受けている。これに対して、経営管理職、事務職、専門技術職などの給与所得者は、収入に変化のない世帯が多く、平均でも２割程度の収入減で済んでいる。

就業状況との関連をみると、休職中、失業中の人は、６割程度の収入減に苦しんでいるが、災害前と同じように働いている人の場合は、２割減に留まっている。また、被害状況や地域による違いも大きく、上木場の人、家畜の被害や自宅が全半焼した世帯では、平均６割の収入減となっている。

図１７．世帯収入の減少



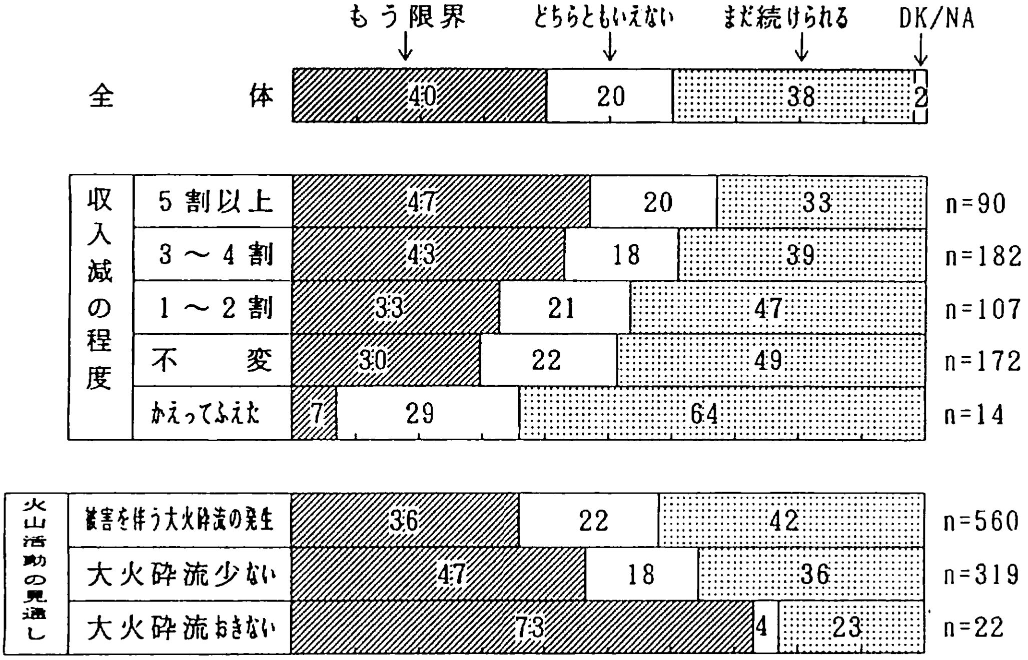
3－4．避難生活の限界

このような過酷ともいえる状況下での避難生活は、まだ続けられるのであろうか。

ほぼ２ヶ月に及ぶ避難生活によって、心身の疲労、経済的影響が限界まで来ており、避難生活の継続は無理とも言われていたが、当の避難住民はどう考えているのか。

調査結果（図１８）によると、調査時点で避難生活が「もう限界だと思って」いる人は４０％、これに対して、「状況によっては、まだ続けられると思って」いる人も３８％と、ほぼ同数となっている。避難生活の困難さと火砕流の危険性に挟まれた苦悩とジレンマを表した結果といえよう。

図１８．避難生活の限界感



この限界感に最も影響するのは、経済的ダメージの程度である。図１８に示したように、収入減の程度によって限界感は大きく異なり、５割以上減の人は、限界という人が４７％であるのに対して、不変の人は３０％と低い。また、サンプル数は少ないが、かえって増えた人の場合は、７％と極端に少ない。

また、大火砕流の発生見通しも大きな要因である。被害を伴う大火砕流がいつ起きても不思議はないと考える人では、限界と答える率が３６％であるのに対して、大火砕流の心配は少ないと考える人では、４７％、大火砕流の発生はないと言い切る人の場合は、７３％と限界感が高まる。一方、大火砕流の前兆がわかるか否かは、限界感に影響がない。

地域的な違いを見ると、上木場では、限界が２８％と低いのに対して、大野木場では４９％と高く、実際に被害を受けたかどうかによって、危険意識が異なり、その結果、限界感に影響するとみられる。

また、避難生活により頭痛、イライラ、不眠、肩こりを訴える人は、限界感が5割前後と高くなっている。

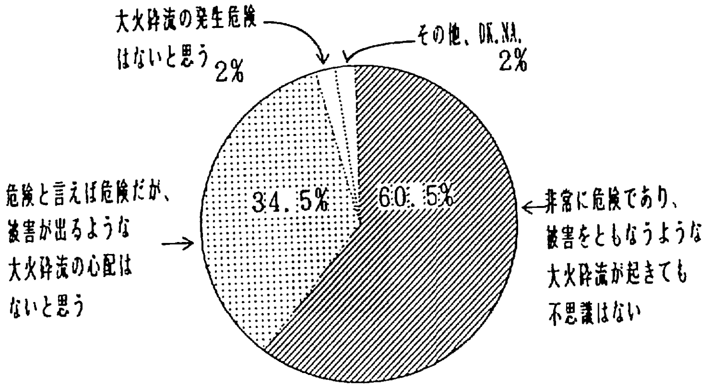
5．１９９１年８月現在での危険度認識と警戒区域継続への考え方

１．火山活動の危険性の認識

調査時点（１９９１年８月上旬）での普賢岳の活動（危険度）についての認識は、図１９に示したように、「非常に危険であり、被害を伴うような大火砕流がいつ起きても不思議はない」というものが６割と過半数を占め、「危険といえば危険だが、被害を伴うような大火砕流の心配は少ないと思う」は３５％、「大火砕流の危険はないと思う」は２％と少ない。危険性はかなり高いという認識でほぼ一致しているといえよう。

男性より女性、非被災地区（島原と深江の市街地）より被災地区の方が危険度を高くみている。また、避難生活がもう限界と感じている人ほど危険度をやや低くみる傾向がある。

図１９．現在の普賢岳の活動について感じていること

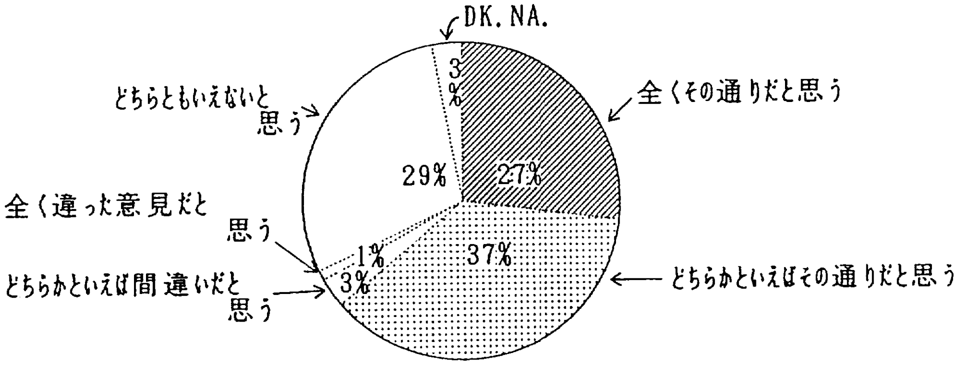


２．大火砕流の前兆認識

一方、大火砕流の前兆について、「大火砕流の発生直前には、中小の火砕流が頻繁に起きるなど、前兆がある」という意見に賛成の人が、過半数おり、それを間違いと思っている人はわずか４％に過ぎない（図２０）。ほとんど毎日、火砕流を見ている住民からすると、なんとなく、大火砕流が起きる前に兆候（中小火砕流の頻発）があると感じ

ているようである。これには、もちろん、住民の希望的観測も含まれていよう。とくに、農林業従事者や６０代以上の人は、「全くその通り」と確信する人が多くなっている。

図２０．大火砕流の前兆があると思うか



３．　警戒区域再延長への意見

調査時点での警戒区域再延長について、意見を求めたところ、「部分的に解除すべき」という意見が最も多く（５６％）、次に、「このまま継続もやむを得ない」とする意見が多く（４０％）「全面解除」は３％と非常に少ない。これは、多くの住民が火砕流への危険認識をもっているからであろう。

再延長についての考え方に最も大きく影響するのは、火山活動についての見通しである。警戒区域の継続をやむを得ないと考える人の比率でみると、被害を伴うような大火砕流がいつ起きても不思議はない、と考えている人の場合は、５５％であるのに対して、被害を伴うような大火砕流の心配は少ないと考える人では、わずか１６％に過ぎないのである（図２１）。このことは、警戒区域の再延長に対する住民の意見が、火山学的には不確実な火山活動についての見通しをどう認識するかにかかっていることを示している。換言すれば、火山予知的情報に対する住民の信頼性に大きく依存する、ということである。

もうひとつの要因は、避難生活の限界感である。限界と考える人は、部分解除を主張する人が６６％に対して、継続は２９％と少ない。これに対して、避難の継続が可能と考えている人の場合は、継続５０％、部分解除４８％となっている。

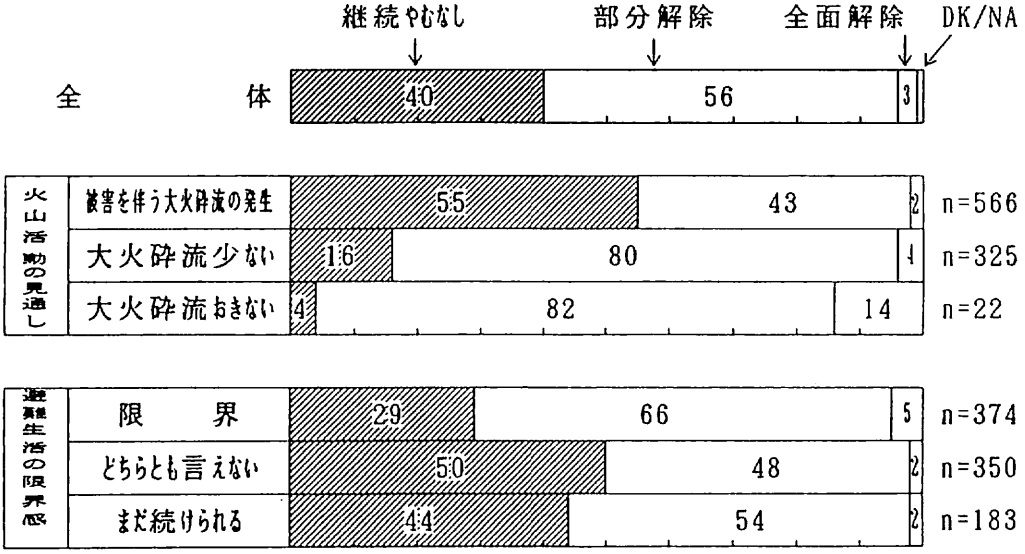
また、避難生活で持病が悪化した人の場合は、部分解除が７３％と非常に高い。もち

ろん、世帯収入減の程度も影響し、減少が大きい世帯ほど、解除を主張している。面白いことに、借家住まいの人は継続派が５５％と多いのに対して、持家の人は継続３８％、部分解除５９％となっている。

家族に死傷者を出したり、家屋の全半焼という被害を受けた人や上木場に居住している人は、危険度を高くみていることもあり、継続という意見の人が多い。

また、男女差も、火山活動の見通しの違いを反映して、多少あり、女性の方が継続という意見が１１％ほど多くなっている。特に、専業主婦の場合は、継続が５６％と多い。

図２１．警戒区域再延長に対する考え方

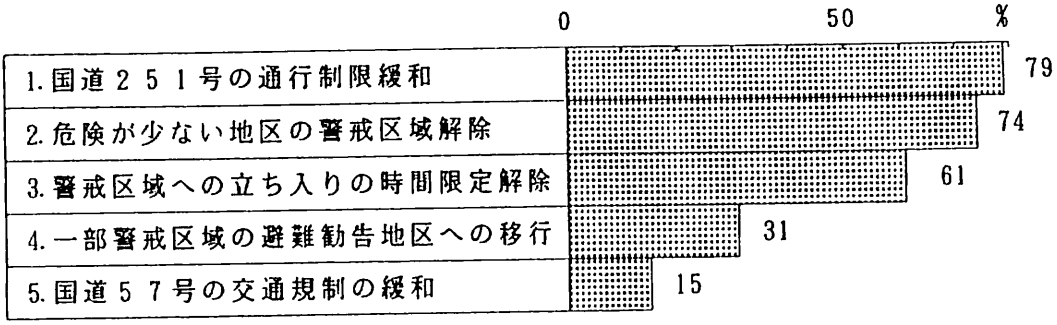


４．部分解除の要望内容

部分解除を主張する人に、その内容をたずねたところ、国道２５１号の通行制限の解除（７月２８日からは緊急車両と生活必需物資の運搬に限って通行再開。８月１１日からはさらに規制緩和）が最も多くて７９％、次に、危険が少ない地区の警戒区域解除（７４％）と警戒区域への立ち入りの時間を限定した解除（６１％）を主張する意見が多く、一部警戒区域の避難勧告地区への移行（３１％）や国道５７号線の交通規制の緩和

（１５％）の主張は少ない。これは、避難住民の間に、ある程度の危険度のクラス分けがなされていることを示唆している（図２２）。

図２２．警戒区域の一部解除の内容



6．マスコミへの評価と情報ニーズ

1．マスコミへの評価

Ｉ部でも述べたように、今回の噴火の初期の段階では、マスコミ関係者の評判がきわめて悪かった。

１９８６年の伊豆大島噴火でも、１９８９年の伊東沖海底噴火のときも、マスコミの取材が強引で、報道がセンセーショナルすぎると、多くの人のひんしゅくを買ったものだったが、今回の噴火でも、取材のモラルを逸脱したり、現地の状況を誇大に報道したりしたことが少なくなかったようである。現に、わたしが最初に島原市に行った６月中旬には、マスコミに対して多くの住民が憤慨しているのを、じかに見聞したのである。

ただし、こういう取材・報道姿勢は、６月３日の大惨事をきっかけとして、すっかり変わった。たとえば、いつもなら興味本位で、おもしろおかしく放送するテレビのワイドショーがそうで、３日以降は大いに自粛したようである。番組はすべて報道経由とし、タイトルやバック・ミュージックもおどろおどろしいものを避け、現地の系列局からクレームが入ると、番組のなかでお詫びをいれるか、あるいは以後それを使わない配慮をしたという。

こうしたマスコミ自身の自粛と、もうすでに２００億円を突破した義捐金の募集に果たしたマスコミの役割、政府の施策の不十分さをつく報道姿勢などがしだいに評価され、現地の評価は現在かなり変わってきた。むしろ、わたしが８月初旬に何度目かの訪問をしたときには、今後も災害が長期化すると思われる島原や深江の実情をぜひ全国に知らせてほしいという、マスコミへの期待の声を聞いたほどである。

そこで、アンケート調査から、８月初旬時点での住民のマスコミへの評価と期待をみてみると、まず、今回の災害においてマスコミの取材がどうだったかについては、「感じが悪かった」という回答（「非常に感じが悪かった」＋「やや感じが悪かった」）が島原市１９％、深江町１５％であり、一方、「好感がもてた」という人（「非常に好感がもてた」＋「やや好感がもてた」）が島原市３４％、深江町３８％で、マスコミ取材を高く評価している人のほうが多かった（図２３）。

また、報道面に対する評価をみると、今回の災害についてのマスコミ報道が、「実際の状況をほぼ正確に報道している」と評価している人が島原市５９％、深江町６１％と圧倒的多数にのぼっていた。一方、「実際の状況よりそうとう大げさに報道されている」という人が両地域とも５％、「少し大げさに報道されている」という人が島原市２７％、深江町２４％と、いわゆる誇大報道を批判する声が３割ほどあった（表８）。

これらの数字をみると、マスコミに対する住民の評価はそんなに低いとはいえない。これには、マスコミの自粛とその後の報道姿勢などによる部分が大きいと思われる。

ただし、アンケート調査の別の質問で、今回の噴火におけるいろいろな機関や組織の活動を評価してもらったところ、地元消防団やボランテイア、あるいは火山学者・測候

図２３．今回の災害におけるマスコミ取材への評価

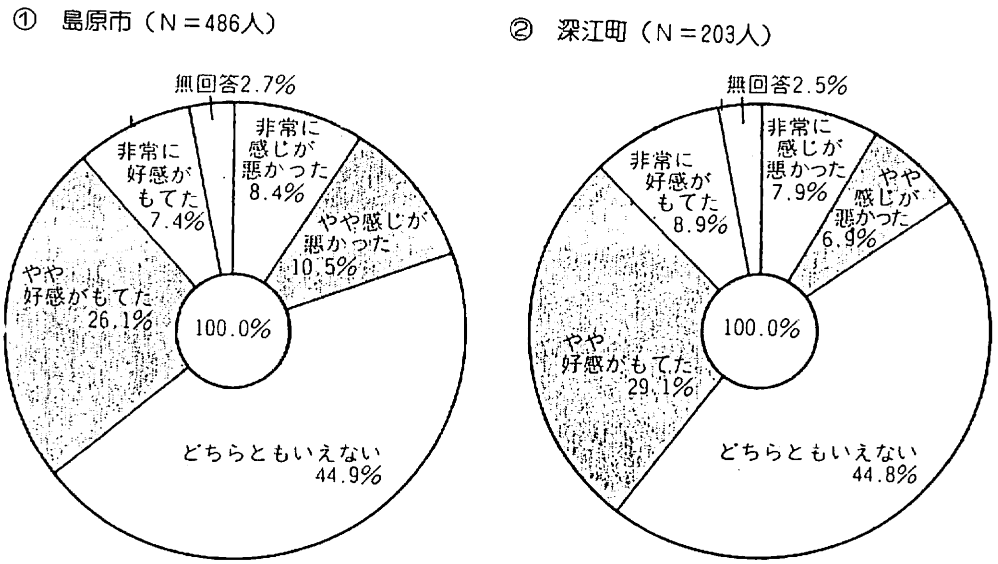
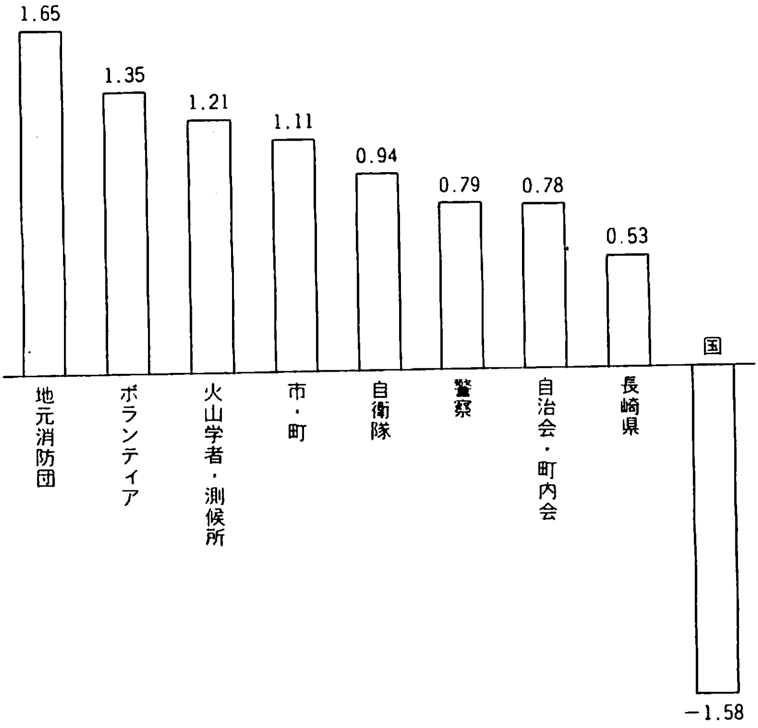


表９．今回の災害におけるマスコミ報道への評価

	島　原	深　江
実際の状況よりそうとう大げさに報道されている	4.9%	5.6%
実際の状況より少し大げさに報道されている	26.5	24.3
実際の状況をほぼ正確に報道している	58.6	61.1
その他	3.7	3.8
DK．NA	6.4	5.2
計	654 人	288 人

所などは非常に高く評価されていたが、マスコミは、国に次いで最後から２番目にランクされていた。過剰取材や誇大報道への批判はそんなに高くなかったとはいうものの、いろいろな機関や組織の活動に比較すると、相対的評価は低いといわねばならない（図２４）。

図２４．今回の災害における機関や組織への評価（得点が高いほど評価が高い）



２．情報ニーズとマスコミへの期待

次に、住民の情報ニーズとマスコミへの期待に触れると、まず情報ニーズについては、災害の予測はテレビ（とくにＮＨＫテレビ）、行政の対応は新聞（とくに地方紙）という役割分担が認められる。

すなわち、「火山活動の見通し」を知るために住民が接触する情報源は、ＮＨＫテレビがもっとも多く（島原市８６％、深江町８０％）、次が新聞（地方紙）で島原市６９％、深江町６７％だった。「土石流の危険」も同じ順位であり、第１位がＮＨＫテレビ（島原市７６％、深江町７３％）、第二位が新聞（地方紙）（島原市６２％、深江町６０％）となっている。

一方、「警戒区域の設定や解除」の情報ニーズを満たすのは、ＮＨＫテレビ（島原市６０％、深江町５１％）と、新聞（地方紙）（島原市５９％、深江町５４％）とが拮抗しており、「仮設住宅や融資等の情報」は順位が逆転して、第一位が新聞（地方紙）（島原市５３％、深江町４６％）で、以下、役所などからのお知らせ（島原市４５％、深江町４６％）、ＮＨＫテレビ（島原市３３％、深江町２２％）となっていた（表１０）。

また、今後マスコミにもっと報道してほしい情報は何かとたずねたところ、災害の見通しや被害の状況、および災害補償や復旧対策が比較的多くなっており、第１位が「火山活動の見通し」（島原市７３％、深江町７１％）で、以下、「補償についての国・県などの考え方」（島原市６７％、深江町６５５）、「災害復旧についての国・県などの考え方」（島原市６４％、深江町６２％）、「被害地域（警戒区域）の現状」（島原市６４％、深江町５１％）などとなっていた（表１１）。

表１０．情報ニーズを満たす情報源

① 火山活動の見通し

	島原	深江	全体
ＮＨＫテレビ	85.5%	79.9%	83.8%
民放テレビ	52.9	51.0	52.3
ラジオ	21.9	11.8	18.8
新聞（地方紙）	68.7	66.7	68.0
新聞（全国紙）	29.5	20.8	26.9
役所などからのお知らせ	24.9	27.4	25.7
町内会	9.5	8.0	9.0
家族や近所の人の話	17.7	13.9	16.6
その他	1.7	1.7	1.7
DK. NA	7.3	11.8	8.7
計	654 人	288 人	942 人

② 土石流の危険性

	島原	深江	全体
ＮＨＫテレビ	76.0%	73.3%	75.2%
民放テレビ	50.9	51.0	51.0
ラジオ	21.3	10.4	17.9
新聞（地方紙）	62.1	59.7	61.4
新聞（全国紙）	26.6	18.1	24.0
役所などからのお知らせ	27.4	31.3	28.6
町内会	9.6	6.9	8.8
家族や近所の人の話	16.8	14.6	16.1
その他	2.1	1.4	1.9
DK. NA	10.2	13.9	11.4
計	654 人	288 人	942 人

③ 警戒区域の設定や解除

	島原	深江	全体
ＮＨＫテレビ	60.9%	51.0%	57.9
民放テレビ	41.3	34.7	39.3
ラジオ	18.7	7.6	15.3
新聞（地方紙）	59.2	53.5	57.4
新聞（全国紙）	21.1	13.2	18.7
役所などからのお知らせ	41.6	49.7	44.1
町内会	14.5	13.9	14.3
家族や近所の人の話	15.6	12.5	14.6
その他	1.5	1.7	1.6
DK. NA	12.1	16.7	13.5
計	654 人	288 人	942 人

④ 仮設住宅や融資等の情報

	島原	深江	全体
ＮＨＫテレビ	33.0%	21.5%	29.5%
民放テレビ	23.5	17.0	21.5
ラジオ	10.6	4.9	8.8
新聞（地方紙）	53.8	46.2	51.5
新聞（全国紙）	18.2	10.1	15.7
役所などからのお知らせ	44.5	45.8	44.9
町内会	20.6	17.7	19.7
家族や近所の人の話	23.5	19.4	22.3
その他	2.6	1.4	2.2
DK. NA	15.7	21.2	17.4
計	654 人	288 人	942 人

表１１．マスコミにもっと報道してほしい内容

	島原	深江
火山活動の見通し	７４．２	７１．５
土石流の危険性	５０．３	４２．０
眉山の危険性	３８．８	２１．９
被害地域（警戒区域）の現状	６４．２	５１．０
避難者の様子	１４．８	２０．８
被害者の経済的被害	２９．４	４０．３
まち全体の経済的被害	２２．６	２７．８
警戒区域の設定や解除	３７．３	４０．３
仮設住宅や融資など	２３．２	２８．１
補償についての国・県などの考え方	６７．１	６５．３
災害復旧についての国・県などの考え方	６４．４	６１．８
義捐金や義捐物資の到来状況	２１．７	２６．０
復旧や再建に向けての市民の動き	２９．２	２５．０
その他	１．２	１．０
計	６５４	２８８

７．行政等の対応評価と要望

１．行政等の対応評価

今回の災害には、行政等の多くの組織・団体が対応し、高い評価を得たところもあったが、住民はどう評価しているのであろうか。それぞれの組織・団体の活動について、「非常によくやった」から「期待はずれ」までの５段階で評価してもらったところ、図２５のような結果が得られた。

最も高い評価を得たのは、「地元消防団で」あった。住民の生命・財産を守るために、体を張ってがんばった消防団に対して、高い評価が与えられたのは当然であろう。とくに、多くの被害を出した上木場や白谷の住民の消防団に対する評価は高く、年代的には２０～３０代の評価が高い。

次に高い評価を得たのは、やや意外な感じもするが、「ボランティア」であった。やっていることを知らない人も１割弱いるが、「非常によくやった」という評価をする人が４２％もいる。島原、とくに上木場の住民の評価が高い。

ボランテイアとほぼ同程度の高い評価を受けたのが、「火山学者・測候所」である。マスコミを通じて適切な警告を出し、精一杯の努力をしていることが評価されたものと考えられる。現在の火山活動を危険と感じている人ほど評価が高くなっている。

一方、「島原市（役所）」と「深江町（役場）」もかなり高い評価を受けているが、「もう一歩」または「期待はずれ」と評価している人も１１％おり、平均点では、第４位にランクされている。上木場、大野木場、深江市街地の住民や自宅が全半焼した人の評価はやや低くなっている。また、避難生活によるイライラや胸苦しさを感じている人、避難生活はもう限界と訴えている人、全面解除を主張している人は、市・町の評価が低くなっている。

続いて、「自衛隊」が高く評価されているが、１５％の人は「普通」という評価であった。女性、とくに主婦と６０代以上の評価が高い。家族に死傷者が出た人や家畜の被害を被った人の評価は逆に厳しくなっている。

次いで、「警察」が６番目に高い評価を得ているが、避難生活をまだ続けられる人、警戒区域の継続やむなしとする人や６０代以上の評価が高くなっている。また「自治会・町内会」の評価は、警察とほとんど同じであるが、居住年数が高い高齢者や持家、農林漁業者の評価が高い。

「長崎県」に対する評価は、「（非常に＋まあ）よくやった」の４７％に対して、「もう一歩」と「期待はずれ」があわせて１７％あり、第８位であった。避難生活がもう限界と感じている人や自宅が全半焼した人、上木場の住民の評価はかなり低くなっている。

「マスコミ」は「普通」という評価が最も多く、第９位の評価であった。地域による違いが大きく、「もう一歩」と「期待はずれ」の比率の合計でみると、以下のようにな

っている。

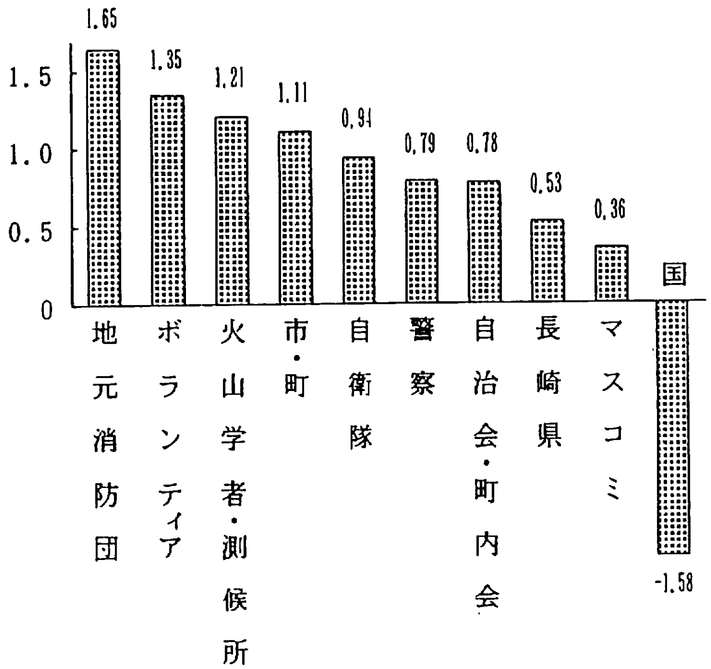
○上木場＝３６％、○白谷等＝２１％　、○島原市街地＝１３％、

○大野木場＝５％、○深江市街地＝２１％

この結果をみると、マスコミとの接触（取材攻勢）が多いところほど評価が低いようである。

これに対して、「国（政府）」への評価は非常に厳しく、「期待はずれ」が５７％、「もう一歩」が９％と多いのに対して、「よくやった」という評価はわずか３％に過ぎない。国は、期待をもたせた割に何もしてくれないと住民は考えているのである。

図２５．各組織・団体への評価



（注）「非常によくやった」２、「まあよくやった」１、「ふつう」０、「もう一歩」－１、「期待はずれ」－２を与え、「やっていることをあまり知らない」と「ＮＡ」の人を除外して平均点をとった。

２．行政に対する要望

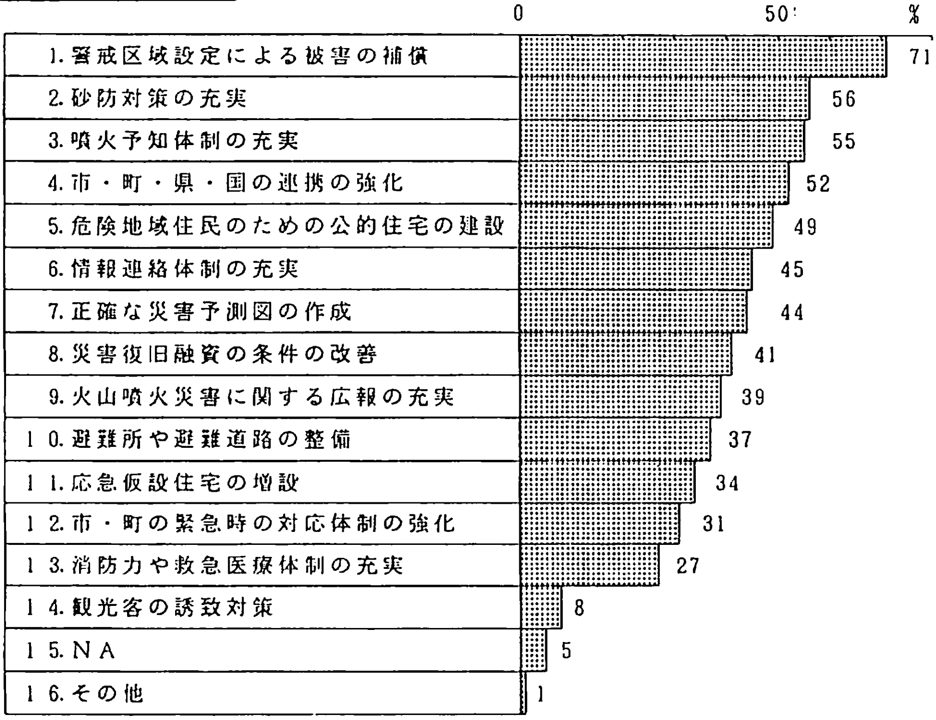
行政に対する要望としては、「警戒区域設定による被害補償」が最も多く（７１％）、次に、「砂防対策の充実」（５６％）、「噴火予知体制の充実」（５５％）、「市・町・県・国の連携強化」（５２％）の３つがあげられている。また、「危険地域住民のための公的住宅の建設」（４９％）、「情報連絡体制の充実」（４５％）、「正確な災害予測図の作成」（４４％）、「災害復旧融資条件の改善」（４１％）の４つは、４割以上の人が要望している。それに次ぐ順位は、「火山噴火災害に関する広報の充実」（３９％）、「避難所や避難道路の整備」（３７％）、「応急仮設住宅の増設」（３４％）、「市・町の緊急事態対応体制の強化」（３１％）、「消防力や救急医療体制の充実」（２７％）となっている。

男女差は、全体に少ないが、男性の方がやや多く、とくに、砂防対策や災害復旧融資の条件緩和は男性が多い。年齢による違いは、高齢者が噴火予知や消防の充実、砂防対策を多くあげているのに対して、若い層は避難所等の整備を多くあげている。

職業による違いで目立つのは、自営業、農林業者が融資条件の緩和を多く求めているのに対して、勤め人は噴火予知体制の充実を求めている。また、持ち家の人は、被害補償を求める傾向が強いのに対して、借家の人は、公的住宅の整備、応急仮設住宅、広報、情報連絡体制の充実を強く求める傾向がある。

被害に関しては、全体に、被害補償と融資条件の緩和を求めているが、土石流による被害を受けた人は、特に砂防対策を求めている（図２６）。

図２６．行政への要望



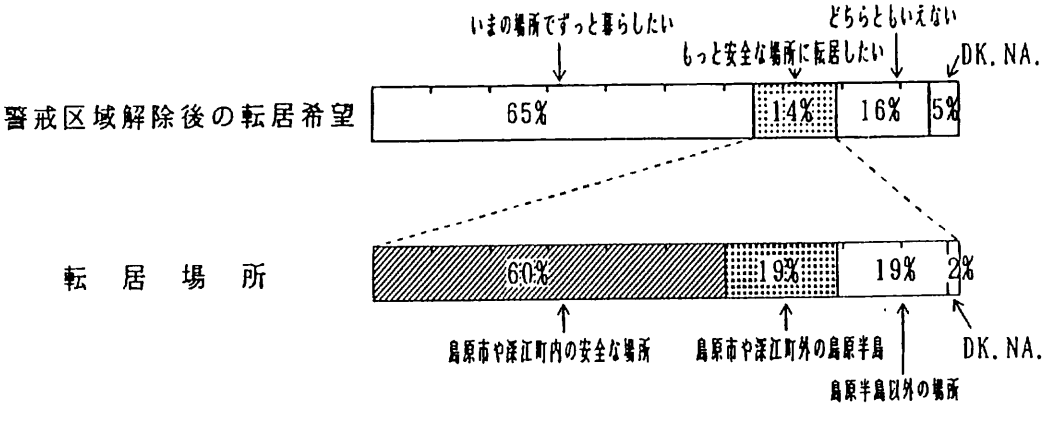
８．転居希望

最後に、警戒区域が解除され、自分の家に戻れることになった場合、同じ場所に住むつもりかどうかをたずねたところ、「今の場所でずっと暮らしたい」という人は、意外と少なく、６５％にとどまっている。逆に「もっと安全な場所に転居したい人」は１４％、「どちらとも言えない」人も１６％とかなり高い。とくに、島原では転居希望、躊躇ともに高くなっている。また、この傾向は若い人で、居住年数が少ない人ほど高く、自由業や勤め人に強い。これに対して、農林業従事者は、危険の認識は強いものの、土地に縛られていることから、今の場所にこだわっている。

転居希望に強く影響するのは、持家か借家か、である。図２７のように、借家に住んでいる人は、４４％がもっと安全な場所に移転したいと考えているのである。また、自宅が全半焼、または全半壊した人は、当然ではあるが、移転希望が高い。

転居希望者の移転先としては、「市・町内の安全な地区」が６割と最も多く、「島原半島外」をあげた人は２割（全体の３％）と少ない。持家の人や居住年数が長い人は、市町内の移転希望が圧倒的に高いが、借家や居住年数の短い人は、より安全な遠くを希望する率が高い。

図２７．警戒区域解除後の転居希望と転居場所



９．まとめ－災害情報の伝達・受容に関する今後の課題

１．正確な危険認識形成のためのコミュニケーション上の課題

専門家の危険認識と住民の危険認識とは大きなギャップがあるのが普通である。

一般的に、災害による被害が出る前は、住民は楽観的（希望的）見通しを持つ傾向があり、専門家の警告に耳を貸さないことが少なくない。今回も６月３日の被害発生前に、火砕流が頻発し、規模が大きくなってきたにもかかわらず、住民や地元市町は、専門家が発した警告を、本当に真剣には受け止めていなかった。

マスコミの報道も、５月２６日の負傷者発生以降は、火砕流の危険性をしきりに強調する方向に変わっていた。それを注意深くみれば、危険性を正しく理解できたはずであるが、実際には、火砕流の危険を実感できず、適切な対応をとることが出来なかった。そればかりか、火砕流という言葉すら知らなかった住民が半数以上もいたのである。

このような事実を踏まえると、地域住民や地元市町に災害の恐さを正しく理解してもらうには、たとえば、次にあげるようなさまざま工夫と努力が必要と考えられる。

①火砕流という用語の問題

かつては熱風、熱雲という言葉が使われたが、現在は火山学の用語として、火砕流という言葉が使われている。火砕流という言葉には、熱いガスが猛烈な勢いで押し寄せてくるというイメージが薄く、最も恐い災害の形態を想像させる力が弱いという欠点がある。科学的厳密さより、一般の人が災害のイメージを直感的に、正確に、しかも印象的に描けるような用語を選択する必要がある。

②伝達方法の問題

普段全く馴染みのない災害の危険性を実感し、対策の必要性を自覚するのは容易なことではない。いわゆる正常化への偏見という概念に集約されるように、平和時には、危険性が過小評価、ないし無視される傾向がある。また、類推によって危険性についての誤った理解が広まる恐れもある。このため、災害の危険性や恐さを具体的に示し、人々の想像力をかき立てることが必要である。したがって、ビデオや、専門家の迫力をもった直接的な解説（説明会など）が不可欠であろう。火山災害の直接被害者（被災危険地域住民）は、地震等に較べると、少なく、地域住民と専門家との直接対話も可能なケースも多いことを考えれば、パニックの発生を気にし過ぎることはない、といえよう。

③専門家と防災機関とのコミュニケーションの改善

警報時の防災機関と専門家の間のコミュニケーションはきわめて重要であり、また、難しい面（ニュアンスの伝達など）がある。今回のケースでは、かなりうまくいった面もあるが、危険地域への住民やマスコミ関係者の立ち入りを許可するかどうか、あるいは６月３日の大火砕流発生直前の”警報的”情報を活用し被害軽減につなげることに失敗する、など肝心の点で、齟齬をきたした点があり、今後の検討が必要であろう。

滅多にこない大災害に際して、市町村等の防災機関が適切に対応できるには、多くの専門家の協力とそれらを束ねる調整機関が必要であるが、現行のシステムは必ずしもそうなってはいない。市町村長は災害が起きる前には、住民の日常生活と災害対応とのバランスを考え、なかなか思い切った災害対応をとれないことも事実である。その意味で、防災面から、思い切った対応を提案できる組織も必要と考えられる。

2．公的情報の名称と住民の受け止め方－臨時火山情報と火山活動情報

測候所が出す「臨時火山情報」と「火山活動情報」は、これだけ頻繁に出され、説明されているにもかかわらず、緊急性の程度について逆に認識している住民が多い。前にも示したように、注意報に対応する「臨時火山情報」の方が緊急性が高いと誤解している人が5割以上おり、警報に対応する「火山活動情報」の方が緊急性が高い、と正しく理解している人は2割にも満たない。この誤解率は、女性より男性、若い人、つとめ人・専門技術職といった人の方がやや多くなっており、他の災害知識に関する調査結果と逆の傾向を示している。また、今回の災害で、自宅の全半焼等の大被害を受けた人の方が誤解率7割と高いことを考えると、この名称は不適切といわざるを得ない。

名称変更も含め、一般住民にわかるような修正を検討すべき時期にしているのではないだろうか。

名称以外にも、火山関連情報の発表方法には次のような問題がある。

①解除の不明確さ

火山活動情報にしろ、臨時火山情報にしろ、その情報が解除されたのかどうか、今、有効な情報はどれなのかがはっきりしない。この結果、現在の危険レベルがあいまいになり、混乱の原因にもなる。解除規定を明確にすべきでないか。

②危険度、危険内容の明確化

名称問題とも関連するが、火山活動による災害危険の内容（土石流、火砕流、噴石など）と危険度をできるだけランクづけし、わかりやすく震度のような数字、あるいはそれに対応するもので示すことが重要であろう。

③時間的見通し

非常にむずかしいことではあるが、出来れば、その状態がいつまで続くのか、危険度が上がる可能性があるのか、下がるのか、をコメントすることが望ましい。さらに、防災部門との協力によって、場所の特定が必要になってくる。

④危険地域の特定

火山災害は、特定の山を除くと、出現周期が１００年以上と長いうえ、災害の形態は多様である。このため、麓で毎日山を見ている人であっても、いや毎日見ているからこそ、危険を予想し、災害の恐さを直感することが困難である。まさか、自分の住んでいるところまでは来ないと考えてしまうのである。そこで、危険度、危険内容に加えて、ハザード・マップによる予想被災範囲の公表が望まれる。火山災害は、他の災害に較べると、地域がかなり限定される。このため、地震などに較べると、空振りの社会的影響

も少なく、思い切った情報を出すことが可能と考えられる。このような点を考慮し、より積極的な情報の提供が望まれる。

3．災害への長期的対策の必要性

火山災害に際しては、長期的な避難生活を余儀なくされることが少なくない。

今回の災害はその典型であり、長期避難に伴うさまざまな困難が浮き彫りにされている。とくに、集団での避難所生活は、プライバシーや騒音などの問題が深刻であり、災害によるショックや経済的困難に加えて、避難生活によるストレスが加わり、不眠、イライラ、肩こり、頭痛といった心身障害等の災害症候群が発生しやすい。今回も、8割以上の避難者が何らかの症状を訴えていた。

市・町や県では、旅館・ホテルや船を避難所にするなどの避難対策を行ない、一定の効果をおさめたが、このような対策を打つために、多くの手間と時間がかかった。避難対策を規定している災害救助法や災害対策基本法が定められた時代背景と今日の状況の違いを見ると、避難対応の抜本的見直しが必要と考えられる。特に、火山噴火災害の場合は、長期避難を余儀なくされることが多く、この点の見直しが望まれる。

4．安全確保と日常生活維持のジレンマを緩和する対策の必要性

住民は、現在、災害の危険を充分理解しているが、一方で、経済的問題や生活上の困難をかかえ、安全をとるか、日常生活の回復をとるか、のジレンマに悩んでいる。いつ終息するかわからないなかで、このような状態を続けることは、心理的にも大きな問題であろう。

このようなジレンマを緩和する方向としては、

①安全確保のための方策（情報伝達手段の整備等）をとりつつ、警戒区域の部分的解除を行い、日常生活の回復を図る。

②長期にわたり、警戒区域解除の見通しがないことを前提とし、半永久的移転のための低額賃貸住宅の整備と、代替農地の斡旋等を行う。

の2つが考えられる。地域による違いもあり、この両方の対策の併用が望まれる。とくに、多くの住民が望んでいる警戒区域の部分的解除にあたっては、情報伝達手段の整備や避難計画の充実など防災対策が前提にならねばならない。

1991年雲仙岳噴火
調査資料

1992年3月

東京大学新聞研究所

Ⅰ部

住民聞き取り調査（抜粋）

1．避難住民座談会（１９９１年８月１７日）

Ｑ：みなさん、お忙しいところお集まりいただきまして、まことにありがとうございます。前回おじゃましたときには、アンケート調査で厚かましいお願いをいたしましたが、無事順調にあの進んでおります。どうもありがとうございました。
一同：いえいえ、どうも。
Ｑ：で、本日は、５月１５日の土石流の発生のあたりから、６月３日の大火砕流、これは本当に不幸なことになってしまったわけですけども、それから６月７日以降の警戒区域、それから避難所の暮らし。まあ現在にいたるまでのみなさまがたのいろいろなご苦労話をお聞きしようと思いまして。1時間か2時間かちょっとわかりませんけども、しばらくおつきあいをお願いしたいというふうに思います。よろしくお願いいたします。では、５月１５日の土石流発生のあたりから、個人的な体験のお話をまずさせていただきたいと思いますけど。では、Ａさんからどうぞ。Ｍさんは、お住まいはどちらですか?
Ａ：南上木場。あの例のめがね橋沿いの、上の酒屋なんですよ。
Ｑ：まず土石流の話をしたいんですが、５月１５日に最初に避難命令がでましたですね。
Ａ：わたしは避難命令前から逃げたんです。
Ｑ：はあはあ。
Ａ：で、裏が水無川ですので。夜中の何時頃でしたか、ゴットンゴットン音がしましてね、家が何かこうバイブレーターに乗っかっているような、ドンドンドンドンするわけですね。で、裏の川を電気つけて見にいったわけです。まあ、最初わたしが行きましたときには、水量もそう多くありませんでした。それから５分か１０分くらいしまして、ますます振動がひどくなるもんですから、見に行ったんですよ。そしたら水無川の堤防の天端から二段くらいまで水が来てて。その水っていうのが、コンクリートミキサー車でポンプに入れたような、ドロドロしたやつ。それに大きな石が乗っかってくるわけですね。で、ちょうどわたしの家には子供が３人来とりました。
Ｑ：それは、５月１５日のことですね。
Ａ：１５日です。その前に、わたしはめがね橋まで見に行ったんですよ。そしたら、水が橋の上まで来よるわけですね。それで、こらあもうどうにもならんわいということで、子供を連れて孫を抱いて、近くの高い家に避難したんです。で、そこでは一晩中眠れませんでした。そこへ行って一時してから、市の避難勧告のジープがまわって来たんです。それは、何分後、何時間後かは知りませんけども、行きましてからたぶん一時間後ぐらいだったでしょう。
Ｑ：で、１５日に最初の土石流が発生して避難なさったわけですけども、それ以後も何度か土石流の避難があったんですか?
Ａ：ございましたね。
Ｑ：１９日でしたかね。
Ａ：１９日。１９日は昼でしたかね。で、そのときももう、天端近くまで水がバンバン上がってきて。
Ｑ：なるほどね。
Ａ：で、１５日は公民館に行かないで隣のうちに行ったんですが、田舎では、よくこう額がかけてあるんです。で、そういったあたりが一晩中ガタガタ揺れましてね。もうとてもじゃないけど、眠れないっていうのがあったですね。
Ｑ：こんなことは、滅多にないわけでしょ、いままで。
Ａ：初めてです。
Ｑ：初めてですよね。やっぱり、火山灰のせいですね。
Ａ：そうですね、２０ミリの雨でしたからね。それで、土石流もいつもまっすぐ流れてくるんじゃなくて、波打ってくるんですよね。バーッと来て、バーッと。それで石がかかってくる。
Ｑ：やっぱり、バイブレーターみたいということは、ドカンドカンと石の振動ですか。
Ａ：振動だと思います。
Ｑ：石が大きいですからね。
Ａ：で、新聞にも話しましたけれども、そのバイブレーター乗っとるような感じって、わたしが申し上げましたことがそのまま記事に書いてあって。
Ｂ：余談ですがね。うちの５階で、ちょうどその日の朝方、雷みたいな変な音がドンドン、ドンドンしてたよと。わたしたちは全然気付きませんでしたけども、うちの西側に泊ま

ってた人が、「今朝、何かあったんですか、ドンドン音がしてましたよ」って。ここからですと４キロくらいですか。それで、河床を守るために、水無川の上流に落下するところがあるんですよ、そこをドンドンって落ちてくるんですね。
Q：水無川の上流には砂防ダムがありますよね。あれは、全然役に立たないわけですか。
A：どうなんでしょう。あれも完全に埋まってしまってますもんね。
Q：それで、２０日に溶岩ドームが出てきて、２４日に最初の火砕流ですよね。で、２６日に火傷の怪我人が出たんですよね。それから、２９日は山火事が起こるわけですけど、そのあたりのお話を今度はお聞きしたいと思うんですが。
E：２４日の最初の火砕流なんですけども、8時ちょっと過ぎに起きたと思うんですけども、わたしは毎日仕事が8時半からですから8時ちょっと過ぎに家出ましたら、山のずっと下のほうから煙がものすごく上がってましてね。あれ、あんなところから今度は噴火したかなと思ってですね、実は公民館からハイヤー飛ばしまして上木場まで行ったんですね。で、パトカーと一緒になってかなり急いで登ってたんですけども。で、ある程度見通しのいいところまで登りましてね。だけど、煙が出てるんですけど、どんな状態で出てるかよくわからないんですね。谷から出てるのは出てるんですけども、よくわからずに、いちおうそのときは引き返してきたんですね。で、その後、消防団のＹさんって、亡くなった方なんですけど。
A：わたしの甥です。兄貴の子ですから。
E：そのＹさんが、やっぱりこの赤松谷のほうからまわって行って、現場を見て来てるんですね。で、そのときの話は、大きな木が根こそぎ、傷も何もないのに倒れてると、何だろうかって話を聞いたんですよね。で、わたしもそのときは、火砕流っていうこと自体がまったく初めてのことですからね。まったくわからなかったんですけども、それが２６日に新聞で火砕流っていうのが出まして。その記事の内容を見てみますと、ものすごい破壊力があるんだっていうことで、ああ、あのときの話はこれだったんかって思ったんですよね。ですから、それまではまったく火砕流って言葉すら知らない、そういう状況だったんですね。
Q：そうすると、２４日は、もう木が傷もないのに倒れていたんですね。じゃあ、もう熱風が出てたってことですね。
E：そうですね。
Q：やっぱり、火砕流っていったって、いったい何だって感じでしょう？
C：そうですねえ。
A：全然、知識がなかった。そういうお話も聞いてませんし。
B：市のＹさんも言ってましたね。現場に行ってみたら、前日までは全然なかったのに、妙な灰があると。それと、いまＣ君が言ったように、こんな大きな木が全然傷もないのに倒れてると。とにかく、おかしかと。木の根っこから、全部同じ方向に倒れとると。それは、もう本人が変な顔してわたしに言いました。
Q：じゃあ、もうそのときは火砕流の徴候があるんですね。それで、２６日には土木作業員の人が火傷をするわけですね。
D：あのう、センサーってあるでしょう。わたしはＮ無線の警備隊員に入れさせてもろうて。ですから、川をずうっと歩いて登ったんですよ。ずっと登って４０分くらいかかって、砂防堤から歩いて。それで、火砕流で火傷したっていわれたものですから、新聞の記者とカメラマンにとにかく来んですかと、わたしが連れて行きますけんって言うて、で、連れて登ったですよ。そうしたら、もう臭いが。何ともいわれん臭いですもんね。
Q：臭いは硫黄の臭いですか？
D：何とも言われん臭いっていうか、硫黄みたいっていうか、何か木の腐るような。
Q：腐るような？
D：はい。それで川底まで降りて行って、写真を撮ってもろうたんですよ。それで灰に上がったら熱くてしょうがない。それで、石ころ２つ拾って。分と降りてられなかったですね、気持ちが悪くて。あっ、これはたしかに大変なことが起きるっていうて、カメラマンの運転がでけん、お前代われっていうて、わたしが代わってですよ、それで降りたんですけど。それでＮＨＫに１つ石をやって、専門家が１つ持ってったって思うんですけど。
Q：相当なガスなんだね。
D：臭いですよ。５分間しか降りられんかったです。ああ、こりゃ大変と思ったんです。それで、あそこのカメラの報道陣に、わたし言ったですよ、あんたたち死ぬよ、ここにおったらって。何回も言ったですよ。

Q：それは、土石流監視のセンサーが切れた後ですね。
D：切れた後です。何日っちゅうのは調べればわかるかもしれない。まあ、変な臭いっていうかですね、あの臭いはちょっと。それで木が、これ何百度の中だから、煮えてるっていうか、普通の百度につけたぐらいの感じじゃなかった。
Q：木の皮。
D：はあ、木の皮とか煮えてるっていうか。
Q：煮えてる。ほかには、どんな臭いが。
D：木の、何ていうか、こう腐ったっていうか堆肥と硫黄の臭いと交じったような。いや、ガスの臭いですよ、あれは。で、これはもうわたし間違っているかもしれないけど、岩石の中にガスが溜ってるっていわれるのは、あれは嘘って思うんです。絶対、嘘って思うですね。なぜかっていえば、何百度のなかでなぜガスが残りますか、素人考えですけど。
Q：なるほど。で、堆肥の臭い？
D：堆肥と硫黄と。まあ、ふつうは入られんとですけど、でも工事をしよった関係で、スーッと入られたもんですから。
Q：それから、いまマスコミの話が出ましたけど、どうですか、今回のマスコミの人たちのことは。
D：いや、わたしはですよ、あれは死んで当り前だったんじゃあないかと思うですよ。あれくらい無茶すればね。消防団は気の毒だったですけど。
Q：まあ、Nテレビが変なことしちゃって、ずいぶんいろんなところでたたかれまして、本当にいろいろ反省しているようですけども。それ以外にもマスコミが変てこなことしたのはずんぶんあるでしょう。
B：やっぱり、あの電気とか電話とか使ったことですね。
Q：ああ、人のところへ入り込んでね。
D：そのために、消防団は自分の家を守るために入ったんですよ。それが報道されちょらんです。
Q：さっきの話ですが、マスコミの人も一緒に現場に行ったと、木が倒れてるところへ。で、そのことは新聞に書いてます？
D：いや、書いちゃなかです。
Q：書いてないですよね。で、話は前に戻りますけど、Aさんのところは、５月２６日に怪我人が出て、避難勧告が出ますね。それからずっと避難しているんですか、２６日以降。
A：ええ。１５日に最初避難しましてね、それで、わたしはさっき申しましたように、家庭に子供がおりましたから、雨が降ると、わたしのところは眼鏡橋を渡らんとこっちへ来れんもんですから。アパートを借りたわけです。で、夜はもうそこに渡っとこうと。もし雨が降ったら、子供もおるしどうにもならんからということで、もう夜はそっちへいこうと。で、２、３回ほど学校にも行きましたけど、とてもじゃない。学校には連れて行かれませんしね。まあ、いつまでもつかわかりませんし。
B：上の人は１回五小に来て、また帰ったんですね。
A：帰りましたね。
B：そして、また五小に来て、そして今度は五小から。
A：で、そういったことをしているときに、もうこれはどうもならんということで。
B：五小に来たのは、２回ですかね。
A：２回来ましたですね。
Q：それは土石流ですよね。
A：土石流、土石流。
Q：で、２６日には火砕流。その後はずっと避難ですか？
A：ずっと避難です。
Q：これは避難勧告ですよね。
A：まあ、勧告がなくてもおれませんよ。
Q：いや、そうでしょう。
A：はい。わたしらは避難勧告が出る前に、家内が町に、まあわたしのところは山ですから、市内を町というんですが、町に行ったんですよ。そしたら、避難勧告が出たわけですね。で、帰ってくると、一緒に行かないといかんもんで、待っとったんですよ、外で。道路のところに。うちの前はちょうど道路ですから。そしたら、消防の方はおいでになる、警察の方はおいでになる。とにかく、「早よ出ろ、早よ出ろ」ということで。家内

をおいては行けませんし。もうおれんもんですから、とにかく「早よ行け、早よ行け」っていうし。また、早く行かないといかんわけです。
Q：で、６月３日まで避難勧告が出てたわけですけど、やっぱり避難勧告だと昼間は家に帰っちゃう人がずいぶんいたわけですか。その頃は５つの町に出ましたよね、５月２６日のときは。それでも、仕事があるからとかいって家に戻る人もけっこういましたか?
A：はい、はい。
Q：大島のときはわたしもずいぶん調査したんですけど、あのときはかなり東京警視庁が厳しくて誰も入れないと。だけど、どうも島原の場合は割合簡単に入れちゃう。
A：地元の人は入れたですね。
Q：地元とマスコミと。で、太田先生からうかがった話によると、太田先生は２９日に山火事が起こって、これは大変だと思ったというんですね。火砕流が高熱化してきてると。ものすごい熱をもってきてるから、筒野のバス停より上は絶対入るなと。これを何度も市の災害対策本部に言ったんだけどなあ、といってましたけど。そういう話は、住民の方までは行ってないんですか。
B：知りませんでしたね。
A：全然知らん。はっきりいって、わたしも６月３日のときは帰りましたもん。
Q：それは４時の後ですか?
A：いや。昼、帰ったんです。
C：ですから、部外者っていいますか、その町内の人以外、ただ単なる興味だけで見に来る人についてはかなり厳しく制限したけども、住民の人についてはそこまでは厳しくなかったんですね。
Q：なるほどね。
C：ですから、車の前にステッカーを貼ってれば、南上木場とか北上木場とかは災害用のステッカーを貼ってれば、フリーに通したんですね。
A：筒野はですね、警察官の方が２人いらして、「どこ行きますか」って。「自分のうちに帰ります、こういう用件で入ります」、「ああ、そうですか、じゃあ注意して下さい」。で、帰りに出ますということで。
D：わたしは仕事で入りました。
A：仕事関係の方と報道関係の方は、もうフリーですね。
B：そこの住民の人の車にはステッカーを貼りましたから、で、避難勧告ですから、自由にステッカーを貼った車は出入りが出来るからね。
Q：強制力がないから。
B：ただ消防団と警察が立っとって、いちいちステッカーを貼ってるかどうかを見る。それで、何の用件で行くか、まあ早うとにかく降りてきなさいよ、という程度だったですね。
D：それに、火砕流の怖さを知らんですよ。ああ、今度のは大きか、今度のは小さかという程度で、見にいきよったもんね。本当は、Uさんが火傷した時点でですよ、あの時点でもし１人が犠牲になってれば、ちがったかもしれませんがね。
Q：あれは、マスコミの人たちは「ああ、火砕流っていうのは巻き込まれても火傷で済むんだ」というふうに、かえって甘く見ちゃうんですよね。そういう原因になったという話を聞きましたね。
D：いや、わたしは写真を撮りに行ったりもしましたけど、ああ、こんな小さいの何だと言うとったですけどね。小さかけん、もうちっと大きいのが来んかんねって逆に思えて。
Q：ちょっと聞きにくいんですけど、市長さんは、６月１日に避難勧告地域を２つに狭めますよね。３つ解除しちゃいますよね。あれはなぜなんですか?
A：なぜでしょう。
Q：公式的には、砂防ダムのところまでは傾斜が急だから火砕流が来るかもわからんけど、それから下は傾斜が緩やかだから来ないだろうと。だから、やっぱりこんなことになるとは思ってなかったっていうことが、１番の大きな理由になるんでしょうけども。どうしてっていうのは、さっきの太田先生ですけど、太田先生は危ないぞ、危ないぞと言ってたと。まあ、たしかに市が間違ってたわけじゃあない。筒野バス停より上は解除しないんですから。それはそれでいいんですけど。ただ、太田先生は、こう言うんですね、筒野のバス停よりも上が危ないと言ったのは、下が安全だという意味じゃないんだと。下だって危ないけど、上はもっとも危ないと。こういうふうに言ったんだけれども、市はどうも誤解したのかなあという感じがしますね。筒野バス停より上が危険だというのなら、下は安全なのかってね。どうもそんな気がします。ところで、選挙の影響はあっ

たんですかね？
A：うーん、どうでしょうね。
D：まあ、それは全然なかったとは言えないでしょうね。
C：全然ないとは言えないでしょうね。
B：やっぱり、投票日がもう目前に迫ってたということは、すこしあったかもしれませんね。
Q：まあ、おそらく原因は１つじゃなくて、いろんな要因があったと思うんですけど。で、１日以降に北上木場と南上木場の方々は、前よりも多く人間が入りましたか？つまり、他の３つの町はもう解除されたのに、おれたちのところは解除されないと。だけど、おれたちだって自分の家が心配だっていうことで、６月１日以前よりもたくさん人間が入ったってことがありますか？
A：どうなんでしょうね。たしかに、ちょうど時期的には、あの周辺はたばこ耕作農家の方がたくさんいらっしゃいますね。たばこというのは、あの周辺では唯一の換金作物ですね。で、やはりちょうどたばこの芯をとめる時期なんです。それをしなければ、たばこの収穫が悪くなる。そうすれば、おのずから入ってくる金も少なくなるということで、その心配でお入りになった方もけっこういらしたんじゃないでしょうか。数えてはおりませんけども。
Q：なるほどね。
C：それと、これは一般の話ですけども、２日が選挙だったですね。
Q：そうです、そうです。
C：そうすると、選挙の前に避難してるから、選挙投票用紙を持ってないわけですよね。そうすると、その日にもしそのまま選挙を開くならば、投票用紙を持たんから投票が非常に悪くなると。まあ、はっきりいうと、行かれん人が多いんだと。ということで、投票用紙を取って前の日に選挙をしたと。だから翌日も、投票用紙を取りに帰ってるから、まあ慣れといってはいけないのかもしれませんけど、翌日もＡさんがいったように、農業関係者とか何とかが、ついでにまた行こうかと。それと、選挙の当選の翌日ですから、地元の市会議員は４人が全部警戒地区ですからね、４人が当選したし、まあお祝いに行こうかというようなことで、登られた方がやっぱりあったんじゃないかなあと思うんですよね。
Q：なるほどね。
C：投票日の翌日ですからね。事実、われわれは地元の議員さんが４人入ったので、やっぱり町内会の関係でお祝いに行こうと。明日の昼行こうかと言いよった日ですよね。だから、市会議員の当選した４人が４人ともお昼にみんな集まって、当選祝いをするっちゅうて準備をしてですね、もうそのまま飛んで逃げてるんですよ。
Q：なるほど。
C：午後２時の火砕流ですね。まあはっきりいいますと、こうして飲みよる最中にですね、２時に火砕流が来たから、それで逃げてるんです。
Q：はあ、はあ。当選のお祝いはどこでやったんですか？
C：いやあ、自分たちの家で。
Q：ああ、お宅で。
C：それが通例になってるんですね。ただ、わたしたちはもう公民館におりましたから、まあ時間的に行かれなかったんですが、行った人の話を聞けば、飲みよる最中にワーッ来たぞっちゅうて逃げてる。例の２時ぐらいのやつです。
Q：あの大きいのが４時ごろでしょう、その前の？
C：２時のやつですね。２時のやつが眼鏡橋のまだ上の方まで来たでしょう？それを見てビックリして、みんな帰っちゃった。だから極端にいえば、その当選した人たちはもう食い物をそのままにして飛び出した人もおるわけですよね。だから、１つは選挙というのもからんどったんじゃないかなっていう気はしますね。
D：わたしが感じたのはですね、選挙もあったかもしれないけど、まあやっぱりたばこですね、唯一の収入源ですから。あれが１日遅れていたら、ちょっと大変だったと。といいますのは、上木場が避難区域になってたもんですから、作業が出来なかったんで、遅れてるわけですね。それで、下の地域の人がみんなお手伝いにということになってたんです。ですから、あくる日はどこにいますとか、上木場のステッカーがないと登れないとかいうような話があったんですよね。ですから、もし１日ズレてれば、あすこには安中のたばこ耕作組合の人がみんな上木場にいたですね。そうすると、それこそものすごい人数の人が災害に遭ったんじゃないかなと。

Q：たばこ耕作者の方々は、北上木場と南上木場だけじゃなくて、ほかにずいぶん大勢いるんですか、安中地区とか？
D：そうですね。その家族の方々がみんな手伝いに登られる予定になってたんです、次の日は。
Q：そうすると、やっぱりそういう住民の方々の気持ちを考えるわけですね。
B：ウチの甥もたばこをやってるんですが、１５日に土石流が出まして、自分の家に全然帰ってこないわけですよ。だからもう遅れちゃうわけですね。やはり消防団の方々や亡くなった方々は、本当にたばこだけつくってましたからね。
C：亡くなった消防団の方は、みんなたばこ耕作者ですよ。だから、５月１５日からほとんど家にも帰らずにいたわけです。で、たばこは芽を止めとったら、何割か知らんけどちょっとは良くなる。だから、早く止めようと。そうせんと、たばこが金にならんということですね。とくに、亡くなったのは農家の方ばっかりですから、全部たばこを作ってる人ですから、亡くなった人は。だから、１５日からずっといて何も出来ない状態だったから、じゃあみんなで手分けしようということになったんです。
Q：それは４日だったわけですか？
C：４日にやる予定だったんです。
B：わたしも素人ですからわかりませんけども、養分が、花が咲いたらそっちのほうへ行っちゃって、葉っぱのほうに行かないから、収穫は少なくなっちゃうんですね。で、消防団員でなくて、たばこ作ってる方はもっと早く芽を止めたんですけど。
Q：芽を取っちゃうんですか？
D：途中から切るんですよ。で、養分を他のほうにやるわけです。たばこだけが１年分の収入源ですからね、生活がかかってますから。
Q：それで、消防団の方ですけども、６月３日の災害に遭う前に１度白谷公民館に行ったわけですね。それがまた、不幸なことに農業研修所に行っちゃうわけですね。それはやっぱり土石流警戒なんですか、土石流のほうが心配だったと。
B：はい。いまですからいろいろ言えますけど、消防団の方もそれから一般の人もほとんどが、火砕流が人家まで３００ｍぐらいに届きながら、やはり土石流の心配してました。まあ数字でいえば、土石流の心配が７～８ぐらいで、火砕流の心配は２か３ぐらいじゃなかったでしょうか。
Q：そうでしょうなあ。消防団長さんが沈痛な顔して言ったけども、「行くな、行くな」と言ったんだと。でも、やっぱり自分のところは自分で守るという消防団の方の熱意に負けて、ＯＫしちゃったというようなことですね。それは、いつのことなんですか。
B：２日です。２日の朝にのぼって行きました。
C：２９日に白谷に行ったんだっけな。
Q：で、いよいよ６月３日の当日のお話をお聞きしたいんですけど、その４時ごろにどこでどうしてたかということですが。いまのお話だと、２時ごろからもう厳しくなってきてたわけですか？
D：連発してたんですね。
Q：連発？
E：ああ、頻発して起こってたんです。で、今日はかなり大きいのがあがってるなというふうに思ってたんですね。
Q：もう最初から。
E：で、わたしのばあいは公民館の窓から見えるもんですから、ああまた来たな、また来たなって、もうずっと続けて。
Q：それは、午前中ごろからですか？
E：いえ、午後になってからだと思いますね。それで、４時の前に一つ大きいの来たんですね。もう空が真っ暗になるような。
C：あれが２時ごろ。
Q：２時。さっきの市会議員の方が逃げちゃったという。
E：それで、公民館から見てて。災害が起きたときの火砕流は、もう公民館から見てて、家が煙で巻き込まれて行くっていうんですか。それで、これはと思って、私もＢさんにすぐ電話したんです。そのとき、Ｂさんはちょっと船に行ってらっしゃって。でも、もうすぐ駆けつけてきてくれて。
B：それが２時半ぐらいやったかな。
C：まあ、正式な時間は１時５０何分だったそうですけど、われわれは２時といってますね。

Ｅ：で、わたしはそのとき、消防団の副団長のＴさんに用事があったもんですから、ポケットベルで呼び出して。明くる日の４日の日に、実は安中地区の防災関係の会議をする予定で打ち合せをしてたんですよ。そのためにＴ副団長さんに連絡しまして、公民館に来てもらって打ち合せしてまして。それが１時半ころかな。それで、いちおう解散してＴさんは戻ったんです。で、途中でＴさんから電話があったんですよ。４日にたばこの芽をみんなでとろうと思ってるけども、通過するのに何かいい方法ないだろうかというような相談を受けましてね。で、まあステッカーをコピーをしてもらえばと。公印はだけど出ませんよというたら、いや公印まではわからんだろうから、とにかく明日応援を頼みたいのでコピーをして下さいと。じゃあ、こっちに原本がないんで、原本をもってきてもらえませんかということを。それが、もう３時ぐらいだったと思うんですねえ。
Ｑ：３時ごろ。３時ごろっていうと、でもかなり厳しい状況ですねえ。
Ｅ：そのときにそういう電話をいただいて。
Ｑ：その電話はは、農業研修所からきたわけですか？
Ｅ：じゃなかったのかなと思いますけどね。
Ｑ：そうすると、研修所からは山はよく見えないんですか？
Ｂ：いや、見えるですよ。
Ａ：目の前ですよ。
Ｂ：ただ、その日は火砕流もあったけど、少し雨も。
Ｃ：雨が降ってたんです。土石流の警戒はしてたんですね、そのとき。。ですから、山の上がはっきり見えてるわけじゃなかったですね、それに雨が降ってましたから。
Ｂ：５合目ぐらいまでしか見えなかった。雨がショボショボ降ったりやんだりしてたですから。
Ｄ：３日は、わたしはが良かったですよ。わたしは、警報機の工期が４日までだったんですよ。で、３日は雨が降ったもんですからどうするかということで、今日は雨が降るから電柱の上に登れないということで、今日はやめようかというて話してですね、ある建設会社の専務さんから電話がありまして、どうも砂防堤を自分のところだけでまかりならんけん、片方だけやってくれんかということで、とにかく一緒に山に登ってくれんかと言われたんですけど、雲仙ロープウエイの課長さんとの付き合いで、とにかく今日は一緒に熊本につき合ってくれんかと言われて、それで、わたしは熊本に行ったわけですよ。結局、その日に仕事をやってれば、もうわたしは巻き込まれていたですね。結局、わたしは助かって、火砕流が起きたってことも知らなかったわけですよ。
Ｑ：ああ、そうですか。
Ｄ：そして、熊本でえらい今日は薄暗かねっていうたところが、そこの従業員が大変なことが島原で起きたよっていわれたもんですから、すぐ電話を入れたとですよ、事務所に。そしたら、全然連絡取れないもんですから、これは何か起きたなということで、ラジオを聞いっとたら、もう行方不明者が出たっていうことで。
Ｑ：連絡がとれないってのは、電話が話中だからですか？
Ｄ：いや、鳴るけど出ない。
Ｑ：ああ、鳴るけど出ない。で、Ａさんはどうなさってました？
Ａ：当日わたしは避難先のアパートにいました。もう向こうは入れませんので。
Ｑ：昼間はこっちにいらしたんですか？
Ａ：昼間も自分のアパートで。
Ｑ：何かさっきのお話だと、３日の日は現地にお入りになったと。
Ａ：ああ、午前中に登ったんですよ。というのは、わたしのところは前に自動販売機があって。たばこと飲料のやつと。で、若い坊やが、おじさんあすこの冷たいのが全部赤になっちょっぱなしだって。売り切れですな。それからたばこもそこなら常時やってますし、農作業の方も飲むものがないんですね。で、詰めに行きまして。そしたら、たばこも赤になってますんで、詰めましてね。で、コインとかも詰めて。それで今度は、うちの家内が、お父さん、これ入れますと金が入ってくるんですけどもお金はどうしようかって。明日でよかかってなことで、昼は帰ったんです。
Ｑ：その頃は、まだ火砕流は活発化してないんですね。
Ａ：山は火砕流の煙が出てましたけど、近くまではありませんでしたね。もう慣れっこになってね、その当時は。まさか来るとは思わんもんですから。まあ、認識が甘かったというんですかね、いま考えれば。で、テレビあたりでも先生方がおっしゃってましたけども、２００年前のは時速何キロかゆっくりして来るんで、見物に行ったりなんかせんようにって話も聞いとりましたんで、まさかと思ってました。

Q：２００年前は火砕流があったとはいわれてなかったから、火砕流が起こったときは先生方にも衝撃があったんじゃないでしょうかね。
B：もうこんなことを言いましたらおしかりを受けますけど、わたしらは公民館にずっと行ってたんですが、すっかり窓から火砕流が見えるんで、眼鏡から何から全部用意して見えたんですよ。だから、火砕流ちゅうのは、ああいうふうに起こって、下まで下ると。ただ山の上でバーッと煙上がって、ああ今のは大きかった、黒かった、茶色かったっちゅう程度の認識でしたからね、その頃は。
E：３日までを見れば、１回１回の火砕流はしだいに大きくなっているんですけど。
Q：少しずつね。
E：でも、その伸び方が２００～３００メーターかそれくらいずつで、ずっと伸びてくるわけですよね。それだから、おそらく次もそのくらいで止まるだろうという予測だったんですよね。ですから、一気に人家まで来るってところまではだれも考えてなかったんですね。それが、報道によりますと噴火をともなう火砕流だったっていうのもありますけども、一気にボーンッと伸びたわけですね。そこに甘さがあったんですね。
A：報道も、民家まであと何百メーターって言ってましたもんね。
Q：そうです。
A：それから、ここは西風っていうのはあんまりないもんで。下のほうが西風っていうのはないんですよ、あの時期は。ただ、その日は西風が吹いてたっていうのは事実です、地上でも。だから、ものすごく気になったんです。
Q：風もふだんより強かったんですか?
A：いや、風はあんまり強くなかった。ただ、わたしは非常に風を気にしとったんです。だから、火砕流の煙がボーッと来たら、こっちまで来るぞと。まさか火砕流本体が下まで来るとは思いませんけど、ドーッと来てバーンとやるやつが、いつもは南西の風で眉山の後ろに来てたのが、今日は西風だと。だから、こりゃあ危ないぞと。あれがこっちに来るぞと。
Q：いや、誰もあんなふうになるとは思ってなかったですよね。
A：結局、認識が甘かったんですよ。本当に知らんもんですから。
D：やっぱり一般がそうじゃなかったですか?
B：みんながそうだった。
C：見物に行ったっていうような話を聞いていますからね。
B：この写真が、一番最初の溶岩ドームの出現ですよね。
Q：これが２０日ですね。
B：２０日です。これが出てきて、島原市民はビックリしたんですよ、これは何だろうかいと。それまでは、溶岩っていうのは赤く流れるとしか考えてないから。
Q：伊豆大島みたいなね。
B：そうそう。これ聞いて下さい。これはE君が、その前に気づいてたんですよ。
E：やま勘です。わたしが山を見てたら、噴煙がもちろん上がってますけど、噴煙がスーッとかけてったときにですね、稜線に何か見えるんですよ。で、“会長、山が何か形が変わった”って言ったんですよ。そしたら、“山が変わるもんか”って。そしたら、あくる日の新聞にドームが載っとたんですよね。
B：テレビでも言ってたな。そのときは、まだみんなにはわからんですよ。
E：わたしが見てたら、チョンチョンって、稜線から本当にちょっと。いままでは稜線がまっすぐになってたところに、１つだけちょっと何か出てたんですね。で、あれ、山が変わったのかなって。
B：わたしたちがそれを見たのは、もう少し上がった状態ですよ。
E：翌朝見たらずっと上がってきた。で、ずっともう全然みんな変わっていったんですよ、形が。
B：翌朝見たときは、ずーっと上がってきたのでびっくりしたんです。
E：それから、もうびっくりするように成長して行ったんですよね。
B：あっという間でしたよ。しまいにはまん丸くなっちゃってね。
A：その翌日かな、わたしも双眼鏡で見たんですが、そしたらチョコンとこうあって、昼見たときはものすごく大きくなってる、あれよあれよっていう間に。
D：はじめは誰も信用してんけんですね。１１月１７日に煙が出たときも、わたしはA新聞の仕事でアンテナ工事をしとったわけです。それをお前たちが火を燃やして、山火事を起こしたんじゃろうっていわれたですよ。火ば使ってるですから、火の煙かって。誰も消防署に行ったら、山火事と言うてですもんね。で、ちょうどA新聞の仕事をしよっ

たけん、Ａ新聞社の西部本社のＩさんに電話して、とにかく嘘やったらすいませんけど、ヘリコプターを飛ばしてくれんですかって言うて頼んで。結局、わたしら何人かと一緒に登ったわけです、途中まで。そしたら噴火と言われて、わたしは逆にホッとしたわけです。嘘を言わんじゃったということで。とにかく、はじめは本当に誰も信じなんじゃったです。

Ｑ：そこでお聞きしたいんですけど、ＮＨＫが取材に来たんです、先月の中旬だったかな。災害が起こった３日の日に、測候所から、山が危険だと、それから避難させて欲しいっていう情報を流して、その情報が農業研修所の消防団の方々のところまで行ったと。だけど、どうして逃げなかったのかっていう質問が電話で来たんですよ。市役所のＹさんにうかがうと、Ｙさんは流したんです。電話をたしかにして、受けたのはおそらく亡くなったＩさんだろうと、声からして。

Ａ：テレビで見たんですけど、おっしゃったのを。振興局からは２回出るんですね。だけど、市役所じゃあ１回しか聞かなかったと。で、今度は本部がＹ君に言うたのは、危険度ていうんですか、だいぶんダウンしとったような感じがしますね。

Ｑ：そうです。Ｙさんも注意するようにって流したんです。

Ａ：で、最初は測候所のほうでは、避難するようにと。

Ｑ：そうです、そうです。ＮＨＫの人の話だと、市長さんが、これは大事なことだから包み隠さず正直なことを話しなさいと言って、みなさんが、わたしが受けたのはこうこうだってやったらしいですよ。ですから、割合真実に近いと思います。

Ａ：わたしは、甥を亡くした者の一人として、２回と１回はどちらが本当だろうかとやっぱり気がかりになります。

Ｑ：ええ。それが、島原の市役所も市の災害対策本部も１回しか受けてないっていってないで、誰が受けたかわからんと言ってるんですよね。で、ああいう混乱のさなかだから、誰が受けたかわからん。だから、２回受けたのかもわかりません。

Ａ：でも、テレビで見たかぎりでは、２回と１回とはっきり食い違っとるんです。

Ｑ：そう。それはクエスチョンマークなんです。誰かが受けたのかもわかんないし、そうじゃないのかもわかんない。

Ｂ：それと、いま言いましたように、本部からＹ君に言うのが、だいぶん危険度っていうか、差し迫った感じがだいぶん落ちてるような感じで。

Ｑ：そうなんです。

Ｂ：それで、その人が連絡すると、またどうなっていくのか。

Ｑ：まあ、やっぱり基本的には、まさかという気持ちがみんなにあるんですよね。

Ｃ：市の執行部のなかでも、ときたま災害対策本部というのがあるわけでして、そういうことが起きたときに各課の職員がそこに集まって、交代で出て行くようなかっこうになってるわけですよ。ですから、災害についてまったく知らないような人が集まって１つの本部ができてるようなかっこうに、いまのシステムがなってるんですよね。ですから、今後の課題としては、やっぱり日頃からそういうことについていろんな訓練を受け、知識を得た人がいざというときに集まって、１つの仕事をするっていうかっこうにしないとねえ。

Ｑ：人から人へ情報を伝えると、情報がどうしても曲がっちゃうんですよね。

Ｃ：そうですね。ゲームにもあるように、まったくそうなんですね。

Ａ：ただ結果論ですけれども、やはり最初発信したような、危ないよっちゅうようなことで、もう危険だ逃げろってことになれば、おそらく逃げとったんじゃなかろうかわたしは思います。

Ｑ：最後は、注意するようになっちゃったんですね。

Ａ：注意と危ないぞ逃げろとはだいぶ違います。まあ、その後改正されたということですけど。

Ｑ：わたしはもう痛感するんですけど、マスコミの人は１４人、このあいだＮＨＫの人がとうとう亡くなりましたから、１５人も亡くなったんですけど。かれらは火砕流のメカニズムとかは、知識として知ってたと思います。火砕流っていうのは怖いもんだなと知識として思っていながら、さっきの話じゃないけど、まさかここまで来ない、自分はそんなことに巻き込まれるはずはないとか思っちゃうんですよね。だから、客観的に知識はあっても、それが防災に役立つかっていうと、そうじゃない。このへんが難しいんですよね。ところで、これはもうご存じかもわかりませんけど、砂防・地滑りセンターっていう建設省の外郭の財団がありまして、そこでハザードマップってのを作ったんですよ。これは、火砕流がゴロゴロゴロッって落ちて来たときにどのくらいの距離までいく

かというものなんですけど、これがものすごく簡単な公式で、溶岩ドームから落ちてくる溶岩が２倍になると、１．１４倍になる。で、量が３倍になると、１．７３倍ぐらいの距離になるというような公式でハザードマップ作ったんです。実は、それが６月７日からの警戒区域の下敷きになってるわけですよ。あの警戒区域っていうのは、まさにハザードマップを下敷きにして出来てるんですけど、こういうハザードマップが作られてるなんてことは、住民の方は知ってたんですか?

Ｂ：やっぱり出たね、新聞にも。

Ｑ：出ました。

Ａ：ただ、ここの住民にはおそらく配布はしていないと思います。

Ｑ：このあいだ市会議員の方に聞いたら、７日に全員協議会があったときに説明はされたと言ってました。

Ｅ：ですから、新聞紙上では発表されてますけども、市のほうから例えばいろんな文書なり何なりは出してないと思います。

Ｑ：あれは、６月１日に島原市で砂防地滑りセンターに電話をかけて、３日いっぱいに持ってきてくれと、そういうふうに言ったんですよ。で、ぼくは砂防地滑りセンターの実際にハザードマップを作った人と親しくて、かれから直接話を聞いたんですけど、３日に３部作って、１つは建設省に渡して、１つは県、それから島原市。で、島原に持って行こうと思って羽田空港のテレビを見てたら、大災害が起こったと。それで、その日にかれは来てるんですよね。だけど、もう大騒ぎで、とてもとても説明するどころじゃないんで、４日の午前中に説明してるんです。ですから、間に合わなかった。ギリギリで間に合わなかった、残念ながら。残念なんですけど、ただ７日に警戒区域が出来て、８日にまた大火砕流でしょう? ですから、もしあれで警戒区域が出来てなかったら、ひょっとしたらもっと大きな被害がまた出たかもわからない。

Ｃ：７日の警戒区域は、そのハザードマップを元にしたんですよね。ですから、あれもギリギリで間に合ったっていう。

Ｑ：ギリギリで間に合ったんです、８日に関してはね。３日はギリギリで間に合わなかったんですけど。それで、その警戒区域ですけど、あれが出来て警戒区域をやると市長さんがおっしゃったときに、みなさんはもう止むを得ないって感じですか、どうでしょう。

Ｄ：警戒区域はしなくてもいいんじゃなかったですか。あんな６３条の１項っていう法律が、そんだけ決められる法律って誰も知らんと思うんですよ。そして、わたしは６３条の１項があっても許可証を取れば入られるって思っとったですね。

Ｑ：まあ、市長の特別な許可があれば入れるんですけどね。でも、警戒区域の設定っていうのはかなり決意が必要ですよね。伊東なんて避難勧告も出さないもんね。

Ｂ：警戒区域の７日のやつですけど、その前に新聞で、大きなのが来たらこのへんまで来るというような。

Ｑ：そうです。それがハザードマップです。

Ｂ：だから、みんなそれを見てたんですよ。それを見て、もう市長の命令が出る前に半数以上が逃げましたね。正直言って逃げました。

Ｑ：なるほど。

Ｃ：うちの団地は，その８日の晩にこんな石の雨が降りましたから、非常にこれは適切だったんですけども。まあ、それはもちろん予想してますよね。７日の日に出たときには、うちの２１１軒の団地がですよ、１０軒ぐらいしか残ってなかったんです。

Ｑ：おそらくご覧になったのは長崎新聞だと思いますね。

Ｃ：で、それが出る１日か2日前に、もうみんなおらなくなっちゃった。

Ｑ：なるほどね。

Ｄ：もう６月３日の火砕流で，こりゃあ大変だと。精神的にあたり前じゃなかったですよ。

Ｂ：６月３日の大きいので何人死んだと。で、今度また大きいのが来たら、ここまで来るという新聞を見たら、おれやせんですよ。

Ｄ：いまは精神的に落ち着いちょるけど、あの時点では。

Ｃ：あれを見たときは、町内の人はもうじっとしてられませんよ.

Ｂ：だから、７日の避難命令はもう待ち遠しいぐらいですよ。もうそんなの待っちゃおられるかと。

Ｑ：それじゃあ、市長さんが警戒区域を設定しても、まあ当然だと。

Ｄ：その頃はですね。

Ｃ：その時点ではですね。

Ｂ：そりゃあもう当然というか、遅すぎると。新聞ではこう出とるじゃないか、何してる

んだというような気持ちだったですね、当時は。
Q：ただ、4日の午前中に砂防地すべりセンターの人が説明して、本当に大きくなれば海まで来るよと言ったんですね。それでも、市長さんは6日に公布してるんですよね。2日間遅れてるわけ。これどうしてかよくわかんないんですけど、県の話を聞いて見たんですけど、県知事と相当やってるんですよ、市長さんが。ところが、市長さんはやっぱり警戒区域を作ったって、溶岩ドームがある以上いつまで続くかわからんっていう気持ちもあるし、経済的ないろんな影響もあるから、かなり躊躇してるように感じられるんですよ。で、たとえば1日か2日前に8日の火砕流が起こったら、もっともっと大変なことになっちゃうんだけども。まあ不幸中の幸いにして、警戒区域を設定した直後に火砕流が起こったから、被害がなかったわけですけど。
C：わたしも、いまはじめてわかりました。というのは、家の地区は警戒区域が6日に出る予定が7日になって、7日のがまた延期になったんです。聞いたら、避難所が準備中というて、8日に出たんです。それで、8日に体育館に走ったとたんに、その晩。
Q：来たんですよね、8時ごろでしたね。
C：それと、もう1つ。あの大きな石が降り出したのは、11日の12時ですよ。12時なんぼ。あれが昼だったら、大変なことだったですよ。夜だから誰もおらんからですね。体育館の屋根が破れたよりも、あのバリバリいうた音で、体育館の人が品物をかかえて逃げようとしとるんだから、わたしは体育館だから大丈夫だからっちゅうて押さえたんですけど、もうあの石の落ちたときは、みんな持ってきた荷物を抱えて走ろうとするわけですよ。そのくらいだから。
Q：11日も大変だったですねえ。
C：まあ、その警戒区域が1日かそこら遅れとったら、また大変なことになってたでしょうね。
Q：でも当時は、まさかこんなに警戒区域が続くとは夢にもねえ。
C：すぐ帰れるだろうと思ってたんですね。
D：63条の1項っていう、その法律に腹が立つですよ。いまは中身はわかってるけども、その時点ではわからんもんですから。帰られるもんって思いよったですよ。その63条の1項っていう法律は、ある程度人命尊重で。
Q：警戒区域の設定っていうのは、大島ではいまもやってるんです。だけど、それは人間が誰も住んでないところ、火口の近くを警戒区域にしている。だから、社会的影響がないんです。それから、十勝でもやってる。でも、人家なんてないから大丈夫。それから、宇都宮で大谷石が落ちたあのときにも警戒区域をやってるんですよ。だけど、こんなに1万人を越えるような地域の警戒区域の設定っていうのは、日本ではじめてです。
C：それこそ前例がないでしょう。
Q：前例はないですよ。
B：さきほどのお話にもでましたけど、Aさんの家のほうでは出たり入ったりしとりますよ。でも、これはもちろん土石流の関係で。で、そういう観念が町内の人にあるわけですよね。だから、警戒区域が出ても、まあ1週間ぐらい行っておさまったらまた帰るんだというような観念で行っとるわけです。
D：それで、荷物も簡単に出せるって思っとったですよ。だから、あまり持ち出しとらんわけですよ。
C：警戒地域っていうものが2ヶ月経ちましたけど、2ヶ月経っても入れないもんだから、警察が監視して。こんなふうに入れないもんだということは、全然考えてなかったですね。
D：本当は、警戒区域っていうのはこういうふうな法律だってことを、発表してもらいたかったです。そしたら、わたしも荷物をもうちょっと出しとるですよ。意味を知らんでやられたんですよ。3時間前だったです。
Q：警戒区域ってのは災害対策基本法ですけど、あの法律は昭和36年に出来たやつなんです。で、なぜできたかっていうと、伊勢湾台風がきっかけなんです、水害なんですよ。水害っていうのは、避難勧告を出しても、おっしゃるように1日か2日で帰れんですよ、水が引けば。
C：一過性ですからね。
Q：そうです。で、ぼくは国土庁の課長さんに、災害対策基本法っていうのは水害を想定して出来てるんだから、こんな長期的に広域な被害を受けるような状況っていうのは想定してなかったんじゃないですかって聞いたら、いやそんなことはないって言ったんだけども。実際、市長さんは可哀想ですよね。これは、知事が出すとか、知事と市長と相

談して出すとかしたらいいのに。
A：逆に、国が出すべきですよね。
Q：ええ。だから、東海地震は国になってるじゃないですか。
A：やっぱり、国が出さなければ。市町村長が出して責任を負うなんて重すぎますよね。
D：とにかく、この法律は間違ごうちょる。
C：それで、逆にいえば、それだけ強制的な力を持っとるんならば、二ヶ月生活がだめになったらその補償をするのが当り前じゃないかという話ですよ。
Q：当然の議論だと思います。ただ、公式論では、災害で個人の資産がダメになったときの補償はしないというわけでしょう？　だけど、今回はちょっとちがいますね、強権を発動してるんだから。
A：そうですよね、あれは。でも、発動した責任っていうのは、まあそう言っちゃうと市長さんがかわいそうなんだけど、行政も持たなきゃいけないんじゃないですか。
Q：だって、入れないんだから。
D：で、ラインがあってですよ。警戒区域のラインがあるでしょう。そのラインのなかで火事が起きたとするでしょう。そしたら、消防団員は消してはいけないと言われたですもんね。バカみたいですよ。
Q：それは、形式論としてはそうなんでしょうね。
D：それだって、道義的問題とすれば消すのが本当ですもんね。もうホースをやれば、消えるとですけん。
C：ああ、そこが警戒区域ならホースを流してはいけないと。
D：バカみたいですよ。
Q：たとえば、もし戒区域を設定しなかったら、残った人はけっこういたでしょうかね。
C：まあ、最初は逃げますよ。だけど、すぐ帰りますよ。
D：わたしたちは、ずーっと帰せとは言わんですよ。１時間か、２時間。書類でも何でも取られるあいだ帰してくれんだろうかという申し出をしよるわけですよ。それでもダメと言われるから。
B：いや、いまは実際、わたしたちの町内は、もう責任持たんから帰る者は帰んなさいと言うたら、ほとんど帰りますよ。危ないときなら別ですけど、火砕流、土石流の心配ないいまのような状態なら、もう責任持たんぞ、帰るんなら帰っていいぞって言うたらみんな帰る。
D：いまのままなら、経済的な自殺が出るかもわからんですよ。
Q：特別立法はどうなってます?
B：ああ、あれはあかん。
Q：ダメみたい?
D：基金も作らんていうぐらいですから、ましてや特別立法は。
Q：ぼくが聞いてるのは、災害が進行中だからと。被害が確定してからは、いろんな対策がとれると。災害が終わってないから、確定出来ないでしょう。で、警戒地域には入れないことになってるから。
E：だけど、終わるのがわかれば我慢していられるけど、終わるのがわかってないわけだから、進行中っていわれても困りますよね。
Q：毎日毎日の生活だってあるもんね。
D：いや、ですから、何らかの補償があれば、だれでも何年も待つと思うですよ。バカじゃないですけん、国民も。いまは、ゴールのないマラソン競争みたいに不安です。
Q：すると、復興基金も十分なのは難しいですか。
D：はあ。クルド難民には１００億ポンとやるし、湾岸戦争には０億ドルも。で、追加が５億ドルでしょう。中国の水害だって１５０万ドルも出す。いい加減にしなよ、本当に。
Q：いま警戒区域を解除しても、やっぱり恐ろしいですか。溶岩ドームとか。
D：もう大丈夫だと思いますが。
B：いや、やっぱり恐ろしいですね。
Q：すると、溶岩ドームどうにかならないかぎり、警戒区域は解除できないと。
D：溶岩ドームの崩壊はそんなに恐くないと思うんですよ。ただ、噴火したときに落ちて来る、それが恐い。噴火じゃないかぎりは大丈夫と。
Q：いままで、３つあるっていうんですよ。直下型地震があったときに溶岩ドームが落ちて来る。それから、爆発性の噴火があったときに落ちて来る。それからもう一つ、気象庁の人は原因不明の原因っていってたけど、たとえばマグマが急にぐっと上がって、はずみでぱっと落ちる。だけど、このうちでも爆発性の噴火が一番恐ろしいって。あれは

摩擦なんだそうです、スピードと距離は。で、ガスがいっぱい含まれると、摩擦係数が低いから遠くまで行くと。それは噴火ですよ。まあ、そういうことですけど、ただ溶岩ドームをどうするかね。あれ、九州大学の先生は凝固剤で固めちゃえって言ってんですね。

C：はあー、それはちょっと甘いですね。

Q：まあ、要するに冷えればいいんだから、何か冷やす方法がないかなあとね。工学的な方法で何かないかなあ、日本はこんなに科学技術が発達してんだからねえ。ところで、最後にマスコミについてはいかがですか。

A：とにかく、５月５日の土石流のときはひどかったですね。その５月１５日の話っていうのは、マスコミがわたしたち消防団の作業の邪魔になったんです。で、わたしらは市の執行部にも言ったし、警察にも言ったけど、とにかく我がもの顔でうろつく。あの人たちが狭い道路にカメラを置くわけですね。何十台という車と、それからカメラを運んでくる。あのくやしさ。マスコミというだけでのけのけというけど、われわれはとにかく生きるために一生懸命なんだと。あのマスコミを何とか出来んかと、わたしは真剣に思いました。もう一生懸命に土木作業をしているのに、本当にもうくやしかったですよ。

Q：それと、今度は６月８日があれでしょう、バーッと逃げてしまうでしょう。

C：情けないよ。マスコミってこんなもんかと思ったですよ、はっきり言って。

B：わたしは五小体育館に避難してたんですが、まあ四六時中各社がおいでになって、寝とれば寝とるでカメラを回す、ご飯食えばまた回す。ちょっと何かこっちが人形みたいになって、本当に困りました。で、わたしは思いましたよ。これは管理者は市長だけれども、もし一社くらいならまだいいんです。各社を入れて、もう取材合戦ですから。眠たいけれども眠れませんし、休まりませんし、もう嫌ですねえ。

A：わたしのところはコミッションをやってまして、ジュース１本でもお客さんですから。で、お聞きになるわけですね。あのときはもう、各社ともそれこそ想像以上だったと思います。で、同じことをずっと最初から説明しとったんですよ。だから、終わりにはもうイライラしてきましてねえ。ていうのは、全然土地勘がないんですよね。だから、こちらが地図を出して説明して、こうなってるからこうなんですよと。だけど、また同じことを聞くんですね。で、それまではまだ我慢しとったわけですが、今度は避難勧告が出て、逃げろ逃げろという命令があると思うと、わたしをつかまえて、テレビを向けておっしゃるわけですよ。それで、わたしは逃げられなくなるから「もう、やめてください」って言っても、つかまえて離さない。

D：全部いっしょですよ、もう一週間交替ですもん。一週間来て、また次のがやって来たら、また初めから言ってくれってなるんですもん。

B：ある市会議員さんが言いましたよ。「あなた、ここにようおいでになりますが、ここの地図ぐらい頭に入れてきてください。同じことをもう何十人も言ってます」向こうは代わるれば一人ですからね。

A：わたしがひとつカチンときましたのは、「眼鏡橋を何故落とさんか」って言うんですよ。でも、落としたらわたしどもは「陸の孤島」になるんですよと。そしたら、「じゃあ、歩いて行けばいいじゃないか」とおっしゃるんです。「どこに歩いて行くんですか」「陸歩きで行けばいいじゃないですか」「あなた土地をよく見てきているんですか」って、本当に腹が立って。こっちがイライラしてるときに、何で落とさんか、川をスムーズに流さんのかと。落としたら南上木場は陸の孤島になる。まあ、１００円のジュースを買ってもお客様ですから、ご注文に答えていたわけですけれども、同じことを何回も聞かれるとね。

Q：本当ですよねえ。同じことを３回も聞かれれば、もう腹が立ちますよねえ。

A：もう５人も１０人もですよ。まあ、報道の方もたいへんだとは思いますけども。カメラで写されたあの場所、カメラがあるのが一番いいところ、そこの場所に２４時間守ってこうしてるんですね。で、「あの、お宅はご飯ないですか、まだですか」ちゅうことで、「じゃあお昼何も売ってないから、昼を食べんですか」って言って。「じゃあ、いいですから」って、パンを買ってきましたけれどもね。そこの場所を動いたら、また社からとがめられるから、２４時間張っとかないかんと。まあ、わたしが逃げるときにも来て、「とにかく朝飯をゆずってください」って。「そんなこと言われてもわたしゃ逃げますから、ここらの全部持ってってくれ」って言ったんですよ。「お金いらんですよ」って言ったら、「だが、金を払わんわけにいかん」って言うから、「もういいですよ、もうわたしゃ逃げますから」っちゅうことでですね、もう応対しておれんですもんねえ。

Q：いや、どうもながいあいだありがとうございました。

２．島原市・タクシー運転手；Ｋさん（１９９１年６月２２日）

Ｑ：Ｋさんは、６月３日にどのような体験をなさったんですか。
Ａ：わたしは、はじめから終わりまで、ずっと山ばかり登っとったんです。
Ｑ：あのう、マスコミさんの？
Ａ：ええ、そうです。そのうち、３日の日は。
Ｑ：どこの社ですか。
Ａ：日経新聞。で、朝から登ったんですね。で、また昼間１時半頃、フィルムを持って登ったんですね。
Ｑ：日経の記者さんは、何人ぐらい？
Ａ：そのときは２人。
Ｑ：カメラマンと記者ですか？
Ａ：いや、カメラマンばっかり。Ｋさんと、もう１人は名前忘れた。
Ｑ：その人は亡くなったんですね。それで、どのへんでカメラをセットして？
Ａ：あの、１番上のみんながおったところですね。次が、あの農業研修所かな。
Ｑ：消防団の方が亡くなったところですか。
Ａ：そうですね。その次が備山焼。その下が、分かれ道になってる。もう一人のカメラマンといっしょに、その備山焼のところにおったわけですね、わたしは。登り口のちょっと上ですね。カーブのとこ。そこだったら、土石流も火山灰も見える。日経さんだけ、そこにおったわけですよ。それが４時頃ですかね、大きい黒い煙がボーンと。あらら、大きいよーっと。
Ｑ：いや、大きいですよね。
Ａ：ええ、真っ黒だったですもんね。で、それから、おまわりさんがお前ら何してるんだー、下らんかーって。その前に、わたし考えたんですよ、備山焼へ登ろうかなあって。心細いなって思って。だけど、下るんなら一目散に下れって、それで方向転換して下山したのがよかったわけですね。
Ｑ：よかったですねえ。火砕流が４時頃起こったときに、Ｋさんがいた備山焼きのカーブのところまで、煙が、もくもくもくもく来るわけですね。
Ａ：ドドーときたですね。
Ｑ：そうすると、バックして逃げるわけですね。
Ａ：いや、その前に車は方向転換しとったわけですね。もしも何かあっても、方向転換されんわけですよ、急には。ぶつかる恐れもありますし。それで、ちゃんと出られるように車を下に向けとったんです。
Ｑ：ああ、それは何かあったときのために。
Ａ：はい、そうです。用心のために。
Ｑ：それで、もくもく来たときは、車の中にいらしたんですか。それとも外に？
Ａ：それは、もうはじめから山ばかり見てた。どんなことがあるかわからないから、逃げださにゃいかんかなって考えてたから。逃げる体勢っていうか。
Ｑ：やっぱり、３時頃からかなり厳しかったですか。
Ａ：ええ、もう。
Ｑ：それで、これはもうやばいという気持ちはあったわけですか。
Ａ：はい。絶対車から出なかったわけですよ。それで、おまわりさんがどなって行った。その人は、亡くなったんですよね。あれ、登ってたよと思って。
Ｑ：逃げろって言って、ずっと上まで？
Ａ：ああ、登って行ったんですね。
Ｑ：報道陣にいうために、登って行ったんですね。
Ａ：そうです。みんなに、何しよっとかー下らんかーって。わたしは、あらーと思って、それで日経さんは下のほうにおったんで、逃げるぞー登ってこいって言って、それで下っていったわけですよ。
Ｑ：火砕流っていうのは、音もしないんだそうですね。
Ａ：ええ。
Ｑ：ただ、もくもく、もくもくと来るんですね。
Ａ：それから下るときは、ガーっという音ですね。
Ｑ：ああ、その後に。
Ａ：はあ、何か背中を押されるような感じですね。もう打ち壊されたかな、飛ばされたか

なっていう感じですね。
Q：それで、夢中でエンジンかけて逃げるわけですね。
A：エンジンはかかってますから。
Q：それもまた、用心がいい。じゃあ、３時ごろ相当厳しいんで、これは何かあるなって不安があった。
A：ええ、不安を感じたっていいますかね。
Q：で、そういうのに、その日経のカメラマンさんは、これやってたんですか。
A：もう、セットして黙って見とるね。
Q：Ｋさんがいるところから、それが見えるわけですか。
A：そうです。カメラをセットしたところが見える。
Q：そこには、かなり報道陣がいたでしょう。
A：いえ。下にですね、Ｙ商店っていうのがあって、あそこにはけっこう報道陣がいました。そこ危なかぞーって、みんなに言われてたんですが。僕たちが、そこ危なかぞ、上にあがってこんばーって。
Q：あのう、外国人もいました？
A：はい。
Q：２人？
A：いや、３人。
Q：いっしょにいました？
A：ええ、毎日来てた。たまには１回か２回来なかったかな。それと、あの末吉県会議員。あの人は、よう来てカメラに撮りなすったですねえ。
Q：その人は、ちょうど災害が起きたときは？
A：来なかった。
Q：それは良かったですね。それで、避難勧告区域なのにみんなどうして平気で入ったんだろうなんていう話を聞きますけど、メガネ橋のあたりでもチェックなんて全然ないんですか？
A：なかったです。ただ、筒野のバス停に機動隊が集まっとったですけど、黙ってましたね。
Q：住民のかたもずいぶんいましたか、北上木場、南上木場？
A：ただ、着替え、洗濯した下着ですね、それを持って帰るという。
Q：Ｋさんの仲間でも亡くなった方は、いらっしゃるんですか？
A：Ｋですね。
Q：ああ、Ｋさん。Ｋさんも、やっぱり日経でしたか？
A：日経です。日経のＫさんといっしょ。
Q：Ｋさんの相手は？
A：はい、名前忘れて。
Q：そうすると、その日経の人は、あなたといっしょに逃げたわけですか？
A：そうです。こう鼻ひげがはえた、まだ２０代のカメラマン。
Q：で、その鼻ひげのはえた人は、やっぱりちょっと危ないと思ったんですかね。
A：いえいえ、１つもそういうことは。
Q：ない。たまたまですか？
A：ええ。わたしが呼んだからあわてて登ってきた。
Q：じゃあ、あなたは火砕流が来たのを見たわけですね？
A：そうです。
Q：でも、間一髪だったんですね。で、Ｋさんは、ちがうところにいたわけですね？
A：ええ、いま地図を書いてみると、ちょっとだいたいで申し訳ないんですが、ここがみなさんが死んだところですね。ここが研修所。で、ここが筒野、おまわりさんがおったところですね。で、ここに道路がこうあるわけですね、ここにショベルカーが２台とまってるんですよ。で、ここにセットしとるわけです、カメラを。
Q：で、ここにＫさんがいらした。
A：ええ。ここは道路ですから、こっちへつけたわけなんです。交通の邪魔になるから。で、こっちのほうにペタンとくっつけといたんです。
Q：そうすると、モクモクきましたね、こっちから。そして、あぶないぞーって言ったわけですね。
A：はい。で、この人はここの土手を登って来るわけです。
Q：登って、それで、車に乗るわけですよね。

Ａ：はい。
Ｑ：で、いっしょに乗って？
Ａ：はい。で、これを下って。
Ｑ：車をバタンと閉めて、ズーッと逃げるわけですね。
Ａ：はい。で、これが５７号線。
Ｑ：これは、どのくらいの距離ですか？
Ａ：１キロほどもないと思いますけどねえ。
Ｑ：で、亡くなったＫさんも他の報道陣といっしょにいたんですか？
Ａ：そうです。一番みなさんがなくなられたところですね。
Ｑ：モクモクとして、やっぱり逃げる間もないんですか？
Ａ：いえ、これは皆さんもう、いっぱいいっぱい車を止めとるからねえ。
Ｑ：逃げられない？
Ａ：逃げれない。
Ｑ：ああ、狭い。
Ａ：はい、狭いわけですよ。
Ｑ：何メートルくらいあるんですか、その道路は？
Ａ：農道ですから、４メートルかね。１メートル半ですからね、車は。
Ｑ：じゃあ、やっとすれ違えるくらい。
Ａ：そうです、車が２台すれちがうくらい。それから、皆さんこうぴたっとつけて。Ｋさんも、場所はわからないですけど、そのころみんな好き好きに陣取って、早い者勝ちに並んでましたから。
Ｑ：Ｋさんだけですか、ここに車をおいたのは。
Ａ：そうです、ほかは誰もいません。
Ｑ：そうすると、他の人は、危ないぞって思わなかったんですかね。
Ａ：やっぱり皆さん、だめだちゅうか、あぶないちゅうか、もう危ないというときには、どーと来たんじゃないですか？
Ｑ：じゃあ、あなたが見たときは？
Ａ：わーっと来て。
Ｑ：わーっと来た？それで、ばーっと逃げて。どのくらいの時間なんですか？
Ａ：そうねえ、５７号線まで来るのに５、６分か。いや、１０分はかかったと思いますよ。
Ｑ：で、煙りには追いつかれないで、逃げた。
Ａ：はあ、逃げたわけです。ただし、ワイパーは効きません。
Ｑ：効かない？
Ａ：あのう、わたしは眼鏡をポーンと座席に捨てまして、顔を出して走ったんですけど、前が全然見えないですけん。顔を出しても前が見えん。
Ｑ：見えない？火山灰ですか？
Ａ：そうです。そうしないと、まともに家にぶつかったり、人ににぶつかりますよ。
Ｑ：それでは、スピードもそんなに出ないですよね。
Ａ：出ないですよ。もうローで走らないと。おまけにすべりやすいし。
Ｑ：そうすると、このへんの人で、無傷で助かったのはＫさんとこのひげの人だけなんですか？
Ａ：そうでしょうと思いますけどね。そんな上は誰もいない。やっと天神元あたりでわあと皆さんに出あって。
Ｑ：それで、この研修所に消防団員が１４、５人かなもっといたのか、たくさんいたらしいんですけど、誰も出てきませんでした？
Ａ：それは、わたしはもう逃げるのが精一杯だったから。
Ｑ：後向きだから、わからないわけか。
Ａ：後ろはもう真っ暗ですからね。誰がいるかさっぱりわからないわけですよ。もう闇のなかを走るようなもんですよ。
Ｑ：そうすると、こっちからもくもくと来て、この人が駆けて登って、車に乗って窓から顔を出して逃げるわけですね。このへんでは、まだ火砕流はスピードなかったですかね。
Ａ：あったと思います。
Ｑ：あったけど、よほど先に逃げたから。
Ａ：追いつかれなかった。かなりのスピードでしたよ。で、ライトつけましたからね。
Ｑ：ライトつけてねえ。
Ａ：ライトもきかんと思いますよ、本当に。

Q：このへんでは、車に全然あいませんでしたか。
A：全然、人も。
Q：人もいない。
A：人がいたら、わたし、はねとったと思いますよね。はねたり、ぶつかったり。
Q：そして、57号のところに来て、やっとほっとするわけですか。
A：はあ、そうです。足が震えてですね。
Q：それは貴重な経験ですねえ。で、後ろは振り返ったんですか、逃げるとき。
A：いいえ。
Q：振り返らずに逃げてきた。
A：カメラマンは一生懸命振り向いて、カメラのシャッターきってましたけど、わたしはもう。
Q：カメラマンは降りて？
A：いいえ、窓からだして。
Q：やっぱり職業だなあ。
A：わあー、職業がらたいしたもんだなあって思った。
Q：あれですか、たとえば危ないぞーって呼びますよね。このひげの人に言って、大勢がいたこっちにも言ったんですか。
A：いいえ。そんなの全然届かんです。
Q：遠いから。
A：会社の悪口言うようですけど、無線が一方通行だから、交互しかはいらないわけですよ。お互いに話はできないんです。
Q：できない。そうすると、こっちの車からこっちの車には通じないんですか。
A：つながらない。
Q：会社に通じるだけで、車どおしは通じないというわけですね。
A：その前に、Tっていう運転手が山の手のほうから下らんば危なかぞーっていうて。それは、4時頃の黒い煙のその前の煙ですね。
Q：それは無線でですか。
A：それは無線で本社に言うけれども、何かTがいいよるなぁっていうぐらいで。
Q：そうすると、もし通信しようと思ったら、Kさんが本社に言って本社からみんなに一斉にやんなきゃいけない。
A：そうです。そういう余裕はないです。それで、ここからでもですねえ、奥の一番先端に行けば声が割れてはいらんとですよ。
Q：大勢がいたここまでは、かなり距離があるんですか。
A：いえ、そうないです。
Q：でつかい声で呼べば、聞こえるくらいですか。
A：いいえ。
Q：聞こえない。
A：1キロくらいですね。
Q：ああ、じゃあ無理ですね。じゃあ、こっちが高いから見えるんですね。
A：カーブだから見えない、全然。
Q：それで、火砕流はこっちからこうくるわけですか。
A：ええ、こう島原の方向に流れちゃったでしょ。
Q：ああ、それで、こういうふうに逃げれば大丈夫なんですね。
A：はいはい、そうです。
Q：追っかけて来るってことがないわけですね。
A：あの、こういうふうになるんですよね。こう小高い山に当たって、飛び越えてこっち来たわけです。それで「わあ、越えたよー」って言って。
Q：そうか。そうすると、こういう人たちがどういう行動をしたかってことは見えないわけですね。
A：見えない、全然。
Q：じゃあ、ひょっとしたら一生懸命逃げようとしたかもわかんないけど、それはわからない。
A：タチコウは、本社の無線に、どうにもなりませんって言ったらしいですね。
Q：ああ、そうか。逃げられないっていう。
A：だから、みなさんが一列横隊に山に向けてね、実はここはこうぐるっと回って、ここに出てこれるわけですよ。

Q：ああ、こういうふうに回ると。
A：回って、ここの眉山焼きの手前に出てこれるんですよ。まあ、そう簡単に逃げられる道じゃあないですけどねえ。
Q：そうすると、危険を考えてエンジンかけて、Kさんみたいにすぐ逃げられるような態勢はどうもとっていなかったんですね。
A：ああ、みなさんね。
Q：それで、繰り返しますけど、あなたが来いーって言ったのは、どういうのを見てからですか。
A：雲。
Q：きのこ雲？それまで、何度も何度もここへは来てたわけですよね。
A：そうです、わたしは。
Q：そうすると、いままでの火砕流とは全然違っていましたか。
A：違った。
Q：これはでかいと思った。
A：ええ、真っ黒い雲が出よるぞーって。
Q：これは危ない、命が助からないかもわかんないって直感的に思った？
A：うーん直感ですね、あのときは。だから、もう本当に何を言うかいっていたら巻き込まれたとですよね。
Q：で、この人はKさんに言われて、そうかって逃げたわけですよね。
A：そうです。
Q：走ってきた？
A：走ってきた。だって登ってこなきゃなんないですから。
Q：血相かえてですか？
A：ええ、一生懸命走って来よったとですよ。で、ドア開けて待っとったです。
Q：どのくらいの距離だったんですか、彼が走ってくるのは。
A：うーん、２０～３０ｍかなあ。この家には、ショベルカーが２台止めてあったんです。水無川の泥を出すんでね。土石流ですかね。
Q：で、ここにも消防団が何人もいて。
A：はい。ただ、消防の車は持ってこんですから。
Q：消防団の車はなかった？
A：なかったね。もう、とにかく警戒ですか。
Q：この研修所は見えるところだったわけですか。
A：いや、全然見えないです。
Q：やっぱりカーブで？
A：はい。全然もう。
Q：ところで、その火砕流っていうのは、いわれるまで全然何だかわかんないわけでしょ。
A：ああ。
Q：マスコミでも、ずいぶん報道してたけど。
A：どんなものかですねえ。はじめて皆さん経験したんでしょうけど。
Q：けれど、３時からのやつはどうだったんですか。それは、それほど恐くなかった？
A：はい。４時のやつは真っ黒ですごいなーってね。そりゃあびっくりするほどに、わぁ暗くなったよーちゅうて。
Q：ここにいるあたりも暗くなっちゃうんですか。
A：そうです。
Q：それ、熱くないんですか。
A：熱くない、全然。
Q：この日は、雨ですよね？小雨ですか？
A：雨じゃなかつたですよ
Q：曇りですか。
A：うん。
Q：曇りの日ですか、そうすると山は見えない？
A：山は見えています。
Q：山は見えていた。はあはあ、ここまで来れば見えるわけですか？じゃあ、溶岩ドームは見えましたか。
A：いいえ。
Q：そうすると、溶岩ドームそのものは見えなっかったんですか。

Ａ：うん、みえなかったです。
Ｑ：じゃあ、上から煙がモコモコってのは見えるわけですか。
Ａ：はあ、薄茶色の煙ですかね。で、黒ですね、４時頃のは。
Ｑ：で、いつもＫさんは、車をこう逃げられるようにしていたんですか。この日だけですか。
Ａ：そうです。
Ｑ：この日だけ？
Ａ：この日だけ。
Ｑ：はあ、やっぱり「やばいな」と思ったんですね？
Ａ：そうですね。で、ずっともう誰が通ろうと何しようと山ばっかこう見とったですよ。
Ｑ：他の人は、どうしてそうならなかったんですかねえ。
Ａ：やっぱり、この恐さっちゅうのがなかったんでしょうね。
Ｑ：うーん。みんなと一緒にいればね。
Ａ：ええ、安心感があったんじゃないですか。わたしのいたところはわたし一人だから。
Ｑ：で、その北上木場や南上木場に入るときに、市からは「入るな」と言われているわけですね。太田先生もうるさく「入るな」と言っているわけですけど、「別に平気だ」と思って入っていたんですか？それとも「仕事だからしょうがねえや」と思っていたんですか。
Ａ：そうです。仕事だからね。
Ｑ：恐いけど？
Ａ：はい。これはもう、「行け」って言うからね。
Ｑ：「行け」って言えば、いかなけゃいけないと。このここに亡くなったＫさんもそうですか。
Ａ：そうです。
Ｑ：「やだな」なんて言いながら入るんですか。
Ａ：いや、それは知りません。やだもあれも商売ですから。
Ｑ：ノーチェックだったっていうね。いろいろ人の話を聞きますと。で、その警官が「危ないぞ」って言ったのは何時頃ですか。
Ａ：うーん。
Ｑ：そうしますと、時間関係で言うと、警察官がパトカーから「危ないぞ」って言うのと、Ｋさんがひげのおっさんに「危ないぞ」って言うのと、どっちが早いですか。
Ａ：そりゃあ、警官が早く来たから。来たから、ああもうやっぱり逃げないとと思って。
Ｑ：なるほど。そうすると、警官は上がって行くわけですね。「危ないぞ」ってＫさんに言いながら。
Ａ：そうです。
Ｑ：で、警察のパトカーはこっちに向かって行ったんですか。
Ａ：ああ、登っていったんです。
Ｑ：ただ、「危ないぞ」っていったんですか、それとも「火砕流がでっかいのが来るぞ」とか？
Ａ：ああ、「火砕流があるけん、逃げろ」って。
Ｑ：マイクでですか。
Ａ：ええ。
Ｑ：あの広報車のマイクでね。パトカーについてるんですか。
Ａ：そうです。ついてました。
Ｑ：そうすると、おまわりさんが「危ないぞ」って言うのは、当然研修所にも通るはずですよねえ。
Ａ：通りましたでしょうねえ。
Ｑ：でも、逃げたのはもうおそらくＫさん達だけでしようね。
Ａ：そうでしようね。前もおらん後ろもおらんで、ぶつかりもせんで行ったっていうことですね。
Ｑ：走ってるうちに火山灰がこう降ってくるんですか。
Ａ：そうです。
Ｑ：それで、ワイパーもきかなくなった？
Ａ：きかない。
Ｑ：火山灰は重いんですか。
Ａ：ええ、それがグァーちゅうてワイパーにかかるんですよ。

Q：ワイパーの一番強いのをやっても？
A：やっても。
Q：その火山灰っていうのは黒ですか。
A：真っ黒。
Q：で、最後の質問ですが、Kさんが逃げたあと、マスコミががいなくなったっていうのは、かなりおそくなってからでてきたんですよね。
A：そうですね。
Q：それはラジオかなんかで聞いたんですか。
A：いや、市役所の前でです。
Q：行方不明って聞いたとき、「この人達だな」って思いました？
A：そうですね。そりあ、わが社のKがおらんって、それが先だけど。それから本社が慌てて調べたら、Kがおらんって。一番高台におったなあってことになって、それからですかねえ。
Q：あのう、太田先生の筒野橋から上は危ないぞっていうのは聞いてましたか。
A：いえ、全然。
Q：ああ、そうですか。いや、どうも長い間ありがとうございました。

3．島原市・消防団員Ｔさん（１９９１年6月２１日）

Ｑ：６月３日以前のお話を少しお聞きしたいと思うんですが。消防団活動をなさっていらしたわけですね。今回、消防団の方が消防団活動をなさるのは、いつごろからなんですか。

Ａ：５月１５日。

Ｑ：土石流のころからですね。お住まいはどちらなんでしょうか。

Ａ：北上木場です。

Ｑ：１５日の時点では土石流警戒ということをなさったと思うんですが、この北上木場町の消防団の方は何人ぐらいいらっしゃるんですか。

Ａ：北、南で２０名です。

Ｑ：どういうふうな活動をなさっていますか、土石流警戒のほうですね。

Ａ：監視ですね。

Ｑ：ワイヤセンサーがありますよね。

Ａ：ワイヤセンサーも１回きりなものですから、切れたらもう人しかないですから。

Ｑ：監視といいますと。

Ａ：まず、水の量とか。

Ｑ：水無川ですね。これは１日に何回か定期的にやっていらっしゃったわけですか。

Ａ：雨が降ったときだけです。交代でずうっとトランシーバーを持って出ていました。

Ｑ：最初の避難命令がこの地区に出るのは、市でいただいた資料ですと。

Ａ：１５日の午前2時ぐらいです。それから、１９日も２１日も。

Ｑ：このころは監視をなさっていて、避難命令が市から出るわけですけれども、そうすると、住民の方に避難誘導もやるわけですか。

Ａ：いや、もうその時点では避難地区を設定していましたんで、動けない年寄りとかなんとかは別ですけれども、独自で避難所に入るという。

Ｑ：住民の方それぞれね。

Ａ：動けない方々とかいうのを誘導するぐらいです。

Ｑ：そのときの避難率はかなり低かったんじゃないかという話なんですが、全員避難ですか。

Ａ：１００％です。

Ｑ：つまり、避難対象地域の人たちは１００％。けがをなさった方もいないということですよね。問題は２６日以降の火砕流が発生した後なんですが、２４日に火砕流が発生しますが、２６日の火砕流でワイヤセンサーが切れてしまいましたね。それで、もうあそこに入れないということで、土石流対策としては監視しかなくなるということですよね。ワイヤセンサーがないということで、消防団の方をふやしたりなんかするわけですか。

Ａ：本来、ワイヤセンサーのあたりまでは監視はしてなかったんです。ワイヤセンサーはずうっと上のほうにありましたから。ですから、その下流のほうで、とくに雨のひどいときだけ監視すると。火砕流なんていうことの危険性というか、脅威はあまり感じておりませんでしたから。そのへんまで行っても、身の危険というのはあまり感じませんでした。

Ｑ：そうでしょうね、最初のころは火砕流ということについてあまり恐怖を感じないわけでしょう？

Ａ：そうですね。２４日の日は午前１１時ぐらいだったと思いますけれども、一番最初溶岩ドームが壊れて落ちたときも、たまたま自分のうちの裏で見ていましたけれども、上の谷のところで全部とまっていたんです。ですから、おそらく火砕流が運ぶ溶岩が上の谷を埋め尽くして、それによって大規模な土石流が発生するというようなことで、火砕流そのものについてはあまり深刻には。むしろ土石流の方ですね。

Ｑ：それで、太田先生の話をお伺いしたんですが、太田先生のお話ですと、どうも火砕流がかなり高温になってきたと。これはもしかしたら被害が出るのではなかろうかというふうに考えて、筒野橋より北は危ないぞというふうに警察と町役場には警告をしたという話なんですが、消防団の方にはそういう情報は伝わっていましたか。

Ａ：ええ。どこまでというんじゃなくて、筒野橋の下のほうまで詰所を下げたんです。

Ｑ：研修所ですか。

Ａ：研修所より下に。いったんは。

Ｑ：それは先月の末ごろですか。

Ａ：５月の末ぐらいですね。
Ｑ：それで市は、これは火砕流対策でつくった避難勧告地域だと思うのですが、５町を避難勧告地域にしましたね、北上、南上、それから白谷なんていう地域を。
Ａ：もちろん、何のための避難かというのが明確じゃないです。
Ｑ：土石流か火砕流か、両方という感じですか。
Ａ：両方といっても、火砕流についてもどれほどの規模なんていうこともありませんし。じゃあ、何のためにそこまで下がるのかとか、何のために避難しないといけないのかというような、ただパニックを抑えるために何にもいわないんだというふうなことじゃなくて、理由をきちんとすれば案外納得するんじゃないかなあと。
Ｑ：これが消防団の方が被害に遭った研修所ですね。これがマスコミの人たちが亡くなった場所なんですが。これが眼鏡橋、これが簡野橋ですが、最初は研修所でかなり高いところで監視していたわけですよね。ですけれども、それを一度下に下げたと。
Ａ：この上のほうに１３分団の詰所があるわけです。その時点から、白谷町の公民館まで下げたんです。これはおそらく５月の終わりごろです。いちおう下げた時点で、マスコミ関係とかそういうものが入っていましたんで、で、いろんな問題も出てきましたんで、われわれ団員の総意で、少し地元というか。これは簡野橋じゃなしに、簡野のバス停なんです。これから上が上木場町なんです。13分団というのは結局上木場町の分団です。ですから、地元だから、地元の研修所でやろうと。ここの詰所よりも、研修所のほうが川からすればだいぶ高いわけです。結局、まだ火砕流なんていうことは頭になかったから、高ければ土石流も何とかなるだろうと。それはもうみんなが地元に置いたほうがいいということで、本部からも異論はあったんですけれども、せっかくここまで下がってきたのに何でまた上に上がるんだというふうな異論はあったんですが、みんながこっちのほうが監視がしやすいということで上に上がったわけです。
Ｑ：これは川の監視と、それから、さっきお話しになったマスコミの方がいろいろと問題的なことをやるんで、両方の監視という意味ですよね。
Ａ：それと、住民も家財道具を運び出したりするんで、監視をしておったわけです。
Ｑ：市は１日に避難勧告地域を北上木場と南上木場にするわけですけれども、そのころの段階では住民の方も随分入っていましたか、仕事とか。
Ａ：入っていましたね。
Ｑ：ここには警察のパトカーがいて、ここから上は避難勧告地域だよというようなことは言ったという説もあるし、ノーチェックだったという話もあるんですが、そのへんはどうでしょう。
Ａ：いちおう同じ町内のものは、車に町内のステッカーを張っていましたんで、そのへんはノーチェックだったと思います。
Ｑ：なるほど、ステッカーでね。
Ａ：マスコミはマスコミの腕章だとか、あるいは車に旗を立てるだとか、そういったところで、これもノーチェックといえばノーチェックだった。結局、フリーのカメラマンとかそういったものが止められたかもしれないですね。それも一定じゃないわけですよ。結局、警察にしろ幹線道路しかおりませんでしょう。地元の人間は、入ろうと思えばいまでも入れるわけですよ。
Ｑ：農道とか、狭い路地ですね。
Ａ：山道とかありますからね。いまでも入っている連中がいるみたいですけれども。だから、完全にシャットアウトするんだったら、シャットアウトするでですね。たとえば、火山学者だったら登っていいんだと。九大の助手かなんかいらっしゃったですね。ああいう方が登って写真を撮ってくる、あるいは溶岩を拾ってくる。でも、マスコミがそれを黙って、採集したやつを見て満足するかというと、そうもいかんわけでしょう。
Ｑ：そうすると、確認しますけれども、６月３日の大被害が起こる前は、むしろ土石流の方を警戒していたほうが強いということですね。
Ａ：全員がですね。
Ｑ：Ｔさんは、その３日の日は朝からずうっとどういうふうな。
Ａ：土曜と日曜はあそこの研修所に泊まっていまして。だいたい１５日から、家に寝たのが４日ぐらいだったでしょうか。この研修所に泊まったり、その下の町内の白谷公民館に泊まったりというのがほとんどでしたね。３日の朝は、８時ぐらいまではみんなと朝飯を食って、仕事に行くやつは行って、当番で残るやつは残るというふうな形でしたね。
Ｑ：当日、Ｔさんは当番ではなかったわけですか。
Ａ：はい。土・日がいちおう泊まりでしたから。

Ｑ：だいたい研修所には１４－１５人はお泊まりになっているわけですか。
Ａ：２日の夜は２０人全部おりました。
Ｑ：当番でない人がお帰りになったということですね。
Ａ：仕事に出かけたというか。
Ｑ：それで、この研修所には無線の受信機がありますよね。
Ａ：ございます。
Ｑ：移動型のね。それで、市からちょっとお聞きしたんですが、この日の３時ごろ火砕流の活動がかなり活発になってきたと。それで、これは危ないということで、４時の大火砕流が起こる直前に、この研修所に無線でその旨を伝えたという話をしているんですよね。
Ａ：わたしはそれは聞いてない。
Ｑ：ですけど、そういうふうな情報連絡というのは常に市とやっているわけですか。
Ａ：それはあります。
Ｑ：ここは１階ですか、２階ですか。
Ａ：平屋だったです。
Ｑ：そうすると、車なんかはみなさんお乗りになっているわけですよね。
Ａ：ええ。
Ｑ：道路に置いてあるわけですか。
Ａ：いえ、道路にとめるのはマスコミ関係ばっかしでしたね。裏に広い駐車場がありますので。
Ｑ：そうすると、情報が来て、さあ大変だ逃げ出せというふうな形で逃げることは、やればできるというような状況なんですか。
Ａ：そうですね。消防車も結局前向きに止めていますから、全部避難できる体制はできていると思います。
Ｑ：タクシーの運転手さんに話を聞きましたら、マスコミの車は道路に並んでいて、びっちり張りついていますから、高台から車に駆けてワーッと逃げ出すようなのは、道路の幅と車の混雑などからいって難しかったんじゃなかろうかと。
Ａ：ここは一番マスコミの方が亡くなったのが多かったところですけれども、ここは道路幅が４メートルもないぐらい。片側にはカメラの１０００ミリぐらいのやつを道路に三脚を据えて置いてあったり、ちょっと厳しいようなところです。
Ｑ：この５７号線寄りには、そんなにマスコミの車もないわけですか。むしろ、こちらの取材スポットのほうにあると。
Ａ：ええ。だから、いつもマスコミ関係よりもわれわれのほうが下におったはずです。警察はずうっと巡回をしていましたんで。
Ｑ：タクシーの運転手さんの話だと、パトカーが「危ないぞー」って知らせに来たと。この人はかなり用心深い人で、エンジンをかけていつでも脱出できるような態勢にいたんだそうです。３時ごろから変てこになっているから。
Ａ：タクシーはだいたいエンジンを止めてないですからね。
Ｑ：それはやっぱりそういう意味で。
Ａ：いや、やっぱりクーラーとかなんとかの関係もあるし。
Ｑ：暑いですものね。
Ａ：その日は、たぶん朝から雨が降っていたんですね。３時以降は止んでいたかもしれないですが。
Ｑ：パトカーの広報車が回ってくることは、Ｔさんが研修所にいらっしゃるようなときもあったわけですか。
Ａ：それはありました。
Ｑ：そういう広報車の声は、研修所にいれば聞こえるわけですか。
Ａ：すぐ道路の隣ですからね。広報車よりも無線のほうが早いし、ぼくらとしては頼っていましたから。で、無線も全部オープンにしてあるんで、いろんな交信が聞こえてきます。呼び出しも簡単にできるように全部開いてあるわけです。
Ｑ：事故があったときも、かなりの時間まで交信はやっていましたからね。この熱雲が通り過ぎた後ですか。
Ａ：はい。だれかの聞いたような声がずうっと聞こえるんです。
Ｑ：それは、もうだめだとか、そういうような声が聞こえてくるんですか。それとも「危ないぞ」というような声ですか。
Ａ：どんな話だったか。

Q：Tさんはそれをどこでお聞きになったんですか。
A：泥が降ってきてから、わたしは九十九ホテルの近くに会社があるものですから、そこにいたんですけれども、それから自分の車で県営の車庫あたりまで上って。
Q：どのへんですか。
A：57号線。いま、通行止めしているでしょう。勤務先があのあたりになるわけです。
Q：Tさんは、ここへいらっしゃる前のお住まいはどちらだったんですか。
A：北上木場です。
Q：そうすると、この災害が起こった当日は避難所にいらしたんですか。
B(父)：避難所というか、子供が五小に通学しよったけん、それで子供を連れに。その2時間前までは家におったわけです。
Q：それはどのへんなんですか。
B(父)：平原橋の北100メートルですかね。そこにいたんですが、孫が学校に行っておったので、連れに下った。
Q：その話はまた後で聞かせていただきたいと思いますが。九十九ホテルにいらして、4時の大火砕流はそこまで灰が降ってくるわけですか。
A：その前、まだ3時半ぐらいだったですかねえ。そのくらいから、ぽつぽつ灰まじりの雨というか灰というか、そういうのが降ってきて、ちょっとこれはおかしいなあと思って、上りかかったんですけれども。
Q：いままで、そういうことは一度もなかったですか。
A：いや、けっこうありましたよ、灰まじりの雨というのは。
Q：そうすると、量もそんなに前のとはちがわない。たとえば、26日も1人作業員がけけがをしていますが、そういうときも降っているわけですか。
A：そのときは、その近くだけですよね。
Q：そうすると、九十九ホテルのあたりまで降ったのは3日が初めてだったですか。
A：どうだったかなあ。最初の作業員がけがしたときには、風向きがたぶん深江のほうに行っているから。それから後は、火砕流が落ちてきたときは南風が吹いて、杉谷地区のほうに流れたわけですよ。直接島原市内とか、この安中地区にああいう灰が落ちるというのはあまりなかったですね。
Q：それで、何となくおかしいなあと思って上ろうとしたんですね。
A：もう仕事も手につかにいましたんで、何かあればいつも。もう、空が異様だったですもんね、真っ暗になってですね。
Q：3日が初めてですか、あんな暗くなったのは。
A：あのへんはですね。杉谷地区とかは、前の火砕流では風向きで頻繁に灰が飛びよったわけですが。
Q：そうすると、何となく異常だと思って、上ろうとしてやめたんですか。
A：いや、上ろうとしたけれども、結局もう泥で前が見えんわけです。ウインドーウォッシャー液も切れてしまって。それで、そこに車をとめて、わたしは消防団の制服を着ていましたんで、網を張った機動隊の車をとめて、あれに乗って上に上ったんです。で、この下のほうに13分団2部という別の分団なんですけれども、そこの車庫がありまして、もうその時点ではけが人がずいぶん運ばれてきていたんです。
Q：そうすると、4時半ごろでしょうかねえ。
A：4時半にはなってなかったと思いますけれども。そこで、今度は本部の車に乗って、わたしが案内して深江町から上って南上木場のほうに入ったんです。
Q：もうここは火山灰で入れない。
A：入れないのもあるし、車がけっこう降りてきていたのと、やっぱり危険があるというふうなことですね。
Q：明らかに危険という感じがするわけですね。それで、けが人を乗せた車というのは、普通の乗用車が乗せてくるんですか。
A：乗用車もあるし、消防車もあるし。だから、救急車で上まで行ったということはないです。全部下で中継していますから。
Q：そういう車は、災害があって上っていってけが人を連れておりてくるんですか。このへんにいて、けが人を拾っておりてくるわけですか。
A：この上り口のところ、57号のところで油を入れよったやつは、うちの団員が1人上って、ここから6人拾ってきたんです。あと、建設会社の従業員が2人拾ってきている。あと、ここの車庫におったのが、ここから消防車を走らせて5〜6人。計17〜18人ぐらいは運び出しています。ただ、ほとんどが亡くなっていますけれどもね。5〜6人

ぐらい生きとるのかなあ。
Q：そういう現場はわたしもテレビで見ましたけれども、表面はそうでもない感じですけれどのどがやられているんですか、気管が。
A：はい。
Q：じゃあ、呼吸ができなくなっちゃう。
A：呼吸はしていても、バーッと黒い灰を吹くんですよね。
Q：じゃあ、気管に入っちゃっているんですね。
A：と思いますけどね。それと、もう衣服を着てない。溶けてしまっているんです。だから真っ白ですよね。半分は灰でああいうふうに白くなっているのか。結局、泥雨は降るんですけれども、すぐ乾いてしまうんです。体温かどうかしらんけれども。われわれもそのときは夢中でバーッと行きますけれども、上がっていったら、顔でも何でも真っ白ですものね。
Q：ＴＢＳの写真で、そういう白い顔の人が逃げていくようなのがありましたけれども、Ｔさんが上っていくときにはもう走って逃げていく人はいらっしゃいませんでした?
A：ぼくはこのへんまででしたんで、結局、車に乗っている連中とか。こんなにして、そのまま動かないで乗っているんですよね。
Q：亡くなっているんですか。
A：死んじゃいないんです。温泉病院まで運ばれて、その後はやっぱり亡くなられましたけれども。
Q：それで、１３分団の方は何人ぐらい亡くなってしまったんですか。
A：いま７名死亡で、１人入院しています。
Q：結局、土石流警戒をして。市のほうでは、火砕流についての注意事項とか、そういうのはどうだったんでしょうかね。あんまりなかったですか。土石流は実際に起こって避難勧告も出ていますから、そっちを警戒するのはある意味で当然だと思うんですけれども。
A：火砕流がそんな下まで来るなんていうことは、まず思ってなかったですね。何日でしたか、けっこう下まで来て、民家から２００～３００メートルのところまで来たことがあったんですね。そのときに少し山火事があって、わたしたちも一番上の家に類焼するんじゃないかというのでホースを引っ張ったりしたことがあったんですが、それから以降３日までのあいだに、１回もその最長点を超えたことがなかったわけですよね。ですから、ああ、火砕流というのはこの辺で終わりなんだなあという。われわれは、あの上の谷のところにたまっている土砂が雨が降ると落ちてくるんじゃないかということだけしか。
Q：そうしますと、市が避難勧告指示の地域を最初５町だったのを２町にしたというようなことで、油断というんじゃありませんけれども、大したことないんじゃないかなというふうな気持ちになったということはどうでしょう。あまり関係ないですか。
A：ただ、メンタルな部分がどうしてもあるんですね。とにかく１週間とかずうっと避難でしょう。農家だし、つくっている野菜だとか葉たばこだとか、あるいは家畜だとか、行政に対してもういいんじゃないかというようなプレッシャーをかけると思うんですね。ですから、下のほうが解除になったのは１日ぐらいだったですかね。あれも、みなさんその前に入られておったし。野菜でも何でも、ずうっと成長しているわけですよね。そうしますと、そこで何らかの手をかけてやらないと育たないわけですから、そういういらだちはあったと思いますね。
Q：市民課長さんに、「市民から早く解除してほしいというような要望はありましたか」と聞いたら「あったようですね」というふうな言い方をしていましたけれども。市に直接は来なかったというような話はしていましたけれども、おそらくおっしゃるとおりで、ぼくも北海道の有珠山の調査をやったとき、昼間は自分の家へ帰って家財道具を取りに行くとか、あるいはちょっとした仕事をするとかして、夜は避難所に寝泊りすると、そんなようなパターンなんですが、この北上木場や南上木場地区の人もそういう人がけっこう多かったと考えていいんでしょうか。
A：そうですね。ですから、住民も、避難というのに徹底してはなかったと思うんですね。うちもそうですけれども。わたしは消防団でずうっと出ていますから、大きな荷物は運べないで。軽の乗用車に積めるだけ。毎日１回ずつ取りに行ったり、考えてみればぞっとするような。その程度のことはみなさんなさっていたと思います。あと、葉たばこがちょうど収穫の時期というか、取り入れの時期なんですね。そうすると、芽をとめたりなんかする作業があるんです。そういうのも、時期を外せばもうどうしようもないわけ

ですね。いろいろ災害に対する保険みたいなものが適用になるかならんかの瀬戸際ですから、みなさんやっぱり収入のことを考えますからね。もし、これで山がおさまって収穫がきちんとできなければ、これはどうもならんわけです。だから、やるだけのことはやっておかないと、もしおさまったときに収穫はできないだろうとか。

Q：これはある人に聞いたんですけれども、１日に避難勧告地域の解除をしたのに、選挙の投票日が２日ですが、それが絡んでいて解除したんではなかろうかというような話なんですが。そんなことはないという人もずいぶん多いんですけれども、そのあたりはどうでしょう。

A：難しいところですね。あるような気もするし。ただ、安中地区からは４名の議員が出ていますけれども、全部いいところであがっているんです。公表したらいかんかもしれんですけれども、地元の議員をどうしてもあげようというようなことはやっていましたんで。だから、避難しておったからしてなかったから票がどうこうなるというふうなことはないだろうと。

Q：だいたいだれに投票するか決めていると。

A：けっこう保守的なところですからね。家庭の中でもだれに何票、だれに何票ぐらいの感覚でやっていましたから。選挙があるから解除したとかいうことでなしに、やっぱり生活権ですよね。それと、たしかに南北上木場地区については、実際小規模な火砕流でもちょっと危ないかなあというふうなものがあったんで、あのへんは解除になってないわけですけれども。それほどの規模で来るなんていうことをだれも予測しなかったというふうなことじゃないですか。それから、消防団が上に上がったというのは、もう一つは、この水無川の土砂を重機を入れて撤去作業をしよったわけですね、下流のほうは。それで、上流でわれわれが土石流の監視をしないと、下の作業がはかどらんわけですよ。そういうのも、同じ地区ですから下の分団から要請があって、川の見張りだけやってくれんかと。で、上下の分団がトランシーバーを持って、連絡を取り合うというふうなシステムでやっていたんです。

Q：土石流に関しては、県で土石流のハザードマップをすでにつくっていたんですよね。それは、消防団のほうには行き渡っていたわけですか。

A：いえ、ございません。

Q：ハザードマップがあるということもご存じなかったですか。

A：何かのシミュレーションをやったということは聞いていましたけれども、それがどのへんまでの範囲であるのかですね。住民の動揺ということで、ある程度話はしているみたいですが。

Q：一つは、水無川は県の管理河川で県がやった仕事ですから、市は県にもちろん情報をもらっているんですけれども、これを一方的に公表するというのはしにくかったのかもわからないんですけれどもね。

A：市とか県だとかいうので、もう一つあるんですけれども、やっぱり統制がとれてないですね。連絡にしろ何にしろ。たとえば、平原橋ですけど、河川が県のやつだったのかな、道路が市だったんですかね。この橋が通れない状態で決壊しておったわけですよ。この橋を壊さないと、またここに土砂がたまって大ごとになると。この橋を壊すのでも相当ああだこうだといってもめたわけですよ。だから、市に災害対策本部を設置していますよね。地元だからそれは当然だと思うんですけれども、どうもおうかがいを立てながらやるなんていうことが、タイムリーじゃないですね。あれも、地元は地元で一生懸命やっていらっしゃるんでいいと思うんですけどね。すべての決定権を市に与えるんだったらそれでいいと思うんですよ。災害対策本部を設置した段階で、国までの権限はどうなのか知りませんけれども、このへんに関しては、すべての権限をそういう本部にゆだねるべきですよね。

Q：一元化しないと、決定がおくれちゃうと大変ですよねえ。で、そのときはサイレンはどこにあったんですか。

A：ここに１つサイレンをつけまして、ここに設置かけのサイレンが１つありました。これは１回も鳴らなかったですね。

Q：サイレンを鳴らすと研修所に聞こえるんですか。

A：当然聞こえます。

Q：マスコミも聞こえますか。

A：それは当然聞こえます。

Q：このサイレンも事前に鳴ったというふうに聞いているんですが、直前でしょうから脱出には間に合わなかったのかもわかりませんけれども。

Ａ：４時１３分といっていましたね。
Ｑ：じゃあ、直前じゃないな。その後ですね。
Ａ：これは手動で鳴らしたんじゃないですか。だいたい、これは何のためにつけたかというと、センサーが切れたときにこのサイレンが鳴るような目的でつくるというふうになっておったんです。だから、最初の土木作業員のけが以降はもう、われわれは夜中でも耳で土石流を確認しよったんです。
Ｑ：２６日に土木作業員がけがした段階でも、まだ火砕流より土石流というふうにみなさんは思っていたわけですね。
Ａ：そうですね。
Ｑ：それで今度は、３日の後に警戒区域をつくりますね。これについてはもう住民のみなさんも、危険なら当然だということですか。
Ａ：３日の日以降は、死人まで出たわけですから、それはみなさんしょうがないというか、当然恐怖がありますから。
Ｑ：７日から２７日まで、いちおう警戒区域の設定期限ですよね。
Ａ：そうですね。
Ｑ：それで、７日に警戒区域を設定するとすぐにみなさんはどんどん避難したと。
Ａ：そうですね。ただ、どうしても下のほうは、一晩ぐらい出ていればいいだろうというふうな感覚で避難しておられるものですから、着のみ着のままが多いわけですね。だから、たまに目をかすめて取りに行くとか、そういったことはあったみたいです。
Ｑ：８日もまた大火砕流がありましたけれども、警戒区域を設定したおかげで人的被害はゼロだったわけですが。今度２７日にその期限が来るわけですけれども。
Ａ：噴火活動がおさまらんかぎり、期限は延長するはずです。
Ｑ：延長しても、先月の末というか今月の初めのころのように、早く解除してくれというような要望はまず出ないと、この状況では。
Ａ：それはわかりませんね。この下のほうについては、２５１号が通っていますよね。これは動脈ですから、やっぱりこれを通せという署名とかなんとかしているんじゃないですか。いまは、火砕流の一番先端がこのへんまで来ていますよね。ここまであと１キロかそこらぐらいだと思うんですけれども、どうでしょうねえ。
Ｑ：じゃあ、少なくともこの大動脈ぐらいは開いてくれと。
Ａ：上のほうの方は、おそらくみなさんそんなことは考えておられないと思うんですけれども。溶岩がいまでも成長している段階では、もうそれはしょうがないことでしょうから。それがもし止まったとなれば、天気のいい日にたとえば１時間なら１時間というふうな期限を決めて、ダーッと行くというのならあるかもしれないですけれども。
Ｑ：２７日以降すぐそうなるかどうかわかりませんが、将来は昼間だけここを通すとか、あるいはさっきおっしゃったように時間を区切って一時帰宅を許すとか、そんな形で段階的に行くんじゃないかとは思うんですけれども。それもいつになるか、いまの状況ではちょっとわからないですよね。
Ａ：溶岩ドームが成長しているかぎりは無理でしょうね。
Ｑ：一般の方も、無理だろうという一種あきらめというか、そういう気持ちは。
Ａ：われわれはとくにありますけれども、下の住民あたりはまたそうでもないかもしれないですね、生活権があるから。ぼくらはもう帰っても家がないからあきらめていますけれども、まだ残っていらっしゃる方々はやっぱり家のことが心配でしょうから。
Ｑ：Ｔさんご一家は一時避難所にいらしたんですか。それともご親戚かどこかに。
Ａ：一時、避難所におりました。
Ｑ：いつごろまでいらしたんですか。
Ａ：２２～２３日ごろですね。
Ｑ：そうすると、あの１１日の爆発的噴火のあった夜も避難所にいらした？　石の降った日です。
Ａ：いや、６月は島原市内の親戚の家におりました。
Ｑ：あの前後に非常にうわさが広がったという話を聞くんですが。眉山が崩れるとか、マスコミが逃げちゃったからこれは大変だとか。
Ａ：あったみたいですね。島原市内の商店街でも避難なさる方がいらっしゃって。あれは民放で１回だけだったですけれども、たしかに放送しました。そのとき、わたしは休みだったんですよ。テレビでいいました。どこの局だったかはちょっと覚えてないですけれども、長崎以外ですね。長崎は入らないんですから。これは逃げていったって、わたしも家内も聞いたんですよ。ただし、明くる日の新聞で打ち消していました、あれはデ

マだと。
Q：ある新聞から東京のわたしのところに電話が来て、「いま流言飛語が広がっていますけれども」なんていう話を教えてくれたんです。それは、報道陣が理由も告げずに、ある旅館からさっといなくなっちゃったと。それで、これは逃げたんじゃないかというふうに広がったという話なんですね。
A：一時は諫早あたりまで避難したそうですからね。
Q：最後に、この北上木場や南上木場は、噴火がおさまった後でしょうけれども、将来計画というのはいったいどうなっているんですか。住民の方同士でこうしてほしいというようなことを要望するとか、そういう動きはまだないんですか。
A：集団移転とか、いろいろそういう話は出ていますけれども、個々の事情が違いますからね。いまはわれわれの仲間でも、生き残った連中はもう県外に就職していますし。結局、集団移転についても、たとえば島原市内にまだ職がある人間と、いまから職を探さにゃいかん人間と、あるいは年寄りばっかりの家庭、いろいろありますので。集団移転先が決まったとしても、本当に年寄りばっかりの集落になってしまうのではないかなあという気はしますけれども。
Q：市長さんは集団移転について前向きに検討するという感じですけれども、候補地は市内にはなかなか難しいんですか。
A：あるとすれば、九州地区の大学の研修所かなんかある、あのへんですね。
Q：それはどのへんですか。
A：このへんですね。国立大学研修センターとかなんかある。
Q：国立大学の研修センターは国有地ですね。ここを国が買い上げて、こちらを提供するというような形になるんでしょうかね。
A：買い上げる話はまだいっていませんけれども。
Q：ここはダムをつくるという話を聞きましたが。
A：堰堤をつくるにしろ、どのくらいの規模をつくるのか。この山はかなり高いですから、眉山の堰堤とはちょっとけたが違うと思うんですね。まあ、つくらないとこの下の土地は死んでしまうと思うんですね。
Q：それはどういう意味ですか。
A：当然何年かは土石流が流れるでしょうから。それも、相当大規模にやりませんとねえ。だから、土地あたりも、どのへんの土地までかかるのかですね。こっちに流れてきだしたら、ものすごい膨大な土地がかかってきますよね。
Q：最後にもう一度確認なんですけれども、太田先生は「筒野橋の上は危険だよと何度も強調して、ですから、筒野橋の下の人は助かったのになあ」というふうな言い方をしていましたが、危険だよということが消防団の方にはそれほど周知されてなかったわけですか。
A：山火事が発生したのは29日ですか。その時点で消火活動をして帰ってきたときに下まで下がれという命令があったから、たぶんその時点ではそういうふうなことをおっしゃったんだろうけれども。じゃあ、何で危ないんだというふうなことですね。火砕流で危ないんだったら、われわれも上に上がってないと思うんですね。
Q：火砕流と土石流と危険が2つあるわけで、どっちも危険なんですが、そのへんが明確でなかったと。
A：土石流であれば、研修センターのところは高いですから、下のほうがかえって危ないわけですよね、低いところにありましたから。だから、そっちのほうが危ない。研修センターのほうが大丈夫だろうという感じですね。
Q：火砕流で高いところはやられるというような認識はありませんでしたでしょう?
A：いや、火砕流もわれわれが見ていましたら、やっぱり谷を伝ってずうっと来よったわけですね、真っすぐに来て。今回のは真っすぐ走ってないで、こう来ています。従来は谷底を伝わって走っていきよったわけですけれども。
Q：ある人は、土石流というのは流れだから高いところにいればいいわけですよね。火砕流も同じで“流”だから、高いところにいれば安全だろうと、そういうふうに誤解した人もいるんじゃないかというんですけれども。
A：それがほとんどじゃないんですか。
Q：つまり、熱雲で高圧のガスが山を越えてワッと高いところまでやってくるというような意識は、おそらく多くの人は持ってなかったんじゃなかろうかと。
A：たしかに火砕流でマグマの塊を運びますよね。それは、どうしても谷底に蓄積しますね。ただ、われわれは両方の山の焼けぐあいを見ていましたんで、あのそばというのは

熱いんだろうなということは感覚的にですね。
Ｑ：やっぱり高いところでもかなり温度が高い。
Ａ：両方の谷の山がかなり燃えていました。ただ、規模というか範囲ですね、あれだけの先までいっきょにとは思わなかった。それと、民家まで２００メートルというふうなニュースが出ましたよね。そうすると、次は１軒ぐらいのところまで来るのかなとか、１日に１００メートルぐらい進むのかなとか、そのくらいしか思っていませんでしたので。いっきょに2キロも３キロも先まで行くとはね。
Ｑ：いや、どうもありがとうございました。それと、お父さんに数分お話を聞きたいんですが、先ほど、２時間ぐらい前に学校にお孫さんを迎えにいらしたと。３日は月曜日ですね。そうしますと、お孫さんを連れてお宅に戻ってくるんですか。
Ａ(父)：いや、避難先に。
Ｑ：それまではお宅にいらしたんですか。
Ａ(父)：それまでは、上木場の自分の家に上ってひとつ荷物を出そうかということで、エンジンはかけっぱなしにして、ちょっと整理をしておったわけです。そうしたところが、３時までには子供を迎えに行かんならんということで、２時過ぎに家を出て、そして消防団の方のいらっしゃる農業研修所に寄って、「危ないところに行くなよ」といって下ったわけですよ。たしか、２時半ぐらいだったでしょうね。
Ｑ：それで、子供さんを迎えに行って、そのまま避難所に戻ったわけですか。
Ａ(父)：避難所というか、避難先にいたわけです。
Ｑ：３日の前も、昼間はときどきお宅に戻って。
Ａ(父)：はい。とにかく、悪かったでしょうけれども、車にステッカーを張っておけば、「気をつけてくださいよ」といって通してくれよるから。
Ｑ：ご近所の方も、昼間帰っていろいろ始末したり、戸締りを確認したりということはありましたか。
Ａ(父)：ありました。
Ｑ：あのう、研修所はよほどひどかったんでしょうねえ。
Ａ：火砕流が、２００メートルぐらいの幅で来ておるわけですね。あそこはかかるかかからないかぐらいのところへ来ておるんですね。直撃されたところは、燃えるというよりももう吹っ飛んでいるんですね。
Ｑ：突風みたいだといっていましたね、爆風。
Ａ：研修センターは飛んでいるんですものね。後で燃えているんですよ。
Ｑ：研修センターは木造平屋建てですか。
Ａ：ええ。
Ｑ：いや、どうもながいあいだありがとうございました。

4．島原市・市会議員Ｋさん（１９９１年６月３０日）

Ａ：ここはですね、もう島原の背後にそびえる眉山の崩壊が心配だったんです。
Ｑ：そうだったですね。
Ａ：普賢のこういうことは、いっさい夢にも思わなかった、あの頃は。
Ｑ：それでですね、いくつかお聞きしたいんですが。まず、これはいろんな機関の人にもお聞きしているんですが、火砕流の恐さに対する認識が市も住民の方もマスコミもみんななかったのが、被害が大きくなった理由じゃなかろうかっていう気がするんですけれど。いかがですか。火砕流っていうものに対して議員さんのあいだなんかでも，何かそんな話しましたですか？
Ａ：６月３日に死者が出ましたですね。あのとき。火砕流の恐ろしさは議員みんな感じたです。
Ｑ：その前までは、あまり。
Ａ：ただもう、こう火砕流が発生して、わたしたちがわあーっとしてたのは、選挙の告示の日だったんですよ。５月２６日。
Ｑ：怪我された人、火傷された人がでた日。
Ａ：ええ。あの頃は火砕流の恐ろしさは、ほとんどの人がまあ火傷するくらいかなっていうくらいで。だから、２６日の告示の日までは火砕流の恐ろしさっていうのはほとんど。２６日も、わーっと空が真っ暗くなってね。それで、一時したら今度は選挙車とかに火砕流の灰が落ちて、車なんかが真っ黒になったようになって、あれでびっくりして、火砕流っていうのはああいうふうに灰が降ってきて大変なことになるんだなあと。
Ｑ：ひとつちょっとわからないのは、６月１日に避難勧告地域を狭めていますよね。結果的には、火砕流で被害を受けたのは避難勧告地域ですから、あの措置は間違いだったとはいえないんですけども。
Ａ：そうです、そうです。１週間ようすをみて、まあそうたいしたことがないと、そういう判断があったんじゃないですかね。そのことは、議会でいうならあんまり議論されてないんですね。
Ｑ：なるほど。
Ａ：いったん共産党の議員がですね、そのことを協議会でちょっと言いかけたんですがね。そうしたら、市長が猛然と逆に反論してですね、そこまで言われるならもう自分はできないという旨の、その通りの言葉じゃないですけど非常に自分としてはやっていけんというふうな反論をしたんですよ。で、他の議員もですね、いまさら済んだことばどうすっとかというふうな、こうわーっとでたんですよ。で、みんなその後追求してないんですけれど、約１週間たってみて、まあやっぱりその後はあんまりひどくならないと思ってですね、いったん勧告地域を狭めたっていうことじゃろうと思うんですよ。
Ｑ：新聞には、住民の感情を配慮して、やっぱり住民だって自分の家に帰りたいですからね、やったんじゃないだろうかと。市長さんは旅館の旦那さんだから、観光業に対する影響を考えてやったんじゃないかとか、いろんな憶測が飛んでいますが。
Ａ：わたしもそう思いますね。
Ｑ：避難勧告を解除した翌日が選挙の日ですよね。やっぱり、投票日というのが念頭にあって、投票日にそんなにたくさん避難勧告地域をつくっておくのはいろんな意味で不都合であろう、というふうに判断したのかなと思われるんですが、そんなことはないのでしょうか。
Ａ：なるほどね。２日が投票日ですね、３日が火砕流ですよね。上木場地区は避難先で投票だったですもんね。
Ｑ：その他の地域はそれぞれの投票所でやりましたね。
Ａ：やったですよね。それもあったかもしれんですよね。
Ｑ：あの地域から３人お出になって、３人とも当選したということですね。
Ａ：ええ。そうです、そうです。
Ｑ：でも、消防団の人に聞いたときには、しかしそれぞれの地域の人は誰に入れるか決まってるから、避難勧告を解除しようとしまいとあまり関係ないんじゃないかという意見もあって、ちょっとよくわかんないんですけどね。
Ａ：選挙も判断のひとつになったかもしれないですね。
Ｑ：まあ、総合的判断ですけどね、いろんな要素があったでしょうね。ひとつだけじゃないですからね。

Ａ：それもあったかもしれませんね。
Ｑ：これは、あんまりいろいろ解釈してもしょうがないから。それでもうひとつですね、あのう、太田先生からいろんなことを市を通じて警告をなさったんですが、なんか太田先生の話だと筒野バス停ってありますよね、筒野のバス停より上は危険だよと言ったと。で、こういうことはないんでしょうか。たとえば、筒野のバス停より上は危険だよという表現を、市としては上が危険なら下は安全なんだろうと、そういうふうに楽観的に受けとって、そのバス停から上は避難勧告を解除しないけど、下は解除してもいいのかと、こういうふうに考えたってことはどうでしょう。
Ａ：ああ、それもありうるでしょうね。やっぱり、大学の先生あたりが、だいたい市長がずっと頼っているのはとくに太田先生ですから、先生の言うことを一番判断の規準にしていますから、おそらくそういうなことは充分可能性としてありますね。
Ｑ：なるほどね。それから、議会ではハザードマップの件はなんかいろいろ言ってましたですか。
Ａ：ええ。ハザードマップの件は、シュミレーションでずっと被害がどういうふうに広がっていくかってやったでしょう。それは出ました。
Ｑ：たとえば、火砕流は２６日に発生したわけですけど、ハザードマップを市が砂防・地すべりセンターってところに依託するのは６月１日なんですよ。つまり、２６日にけが人が出て、それで６月１日に依託して６月３日にできてるんです。ですから、もうちょっと早ければハザードマップが間に合ったかなって感じもするんですけどね。このへんは議会ではなんか議論はありましたですか。
Ａ：いや、ありましんでした。
Ｑ：ああ、そうですか。なんか、あるシンクタンクに頼んだらそのシンクタンクがうちではできないからと断わって、それで結果として遅れちゃったんだという説明を受けてますけどね。
Ａ：いや、それは出てないと思います。
Ｑ：そうですか。では、議会では、そういうハザードマップ的なやつですね、とくに火砕流の危険がどこまで及ぶかってことについて、もっとしっかりやれとか、そういう話はなかったんですか。
Ａ：それはですね、６月定例議会が６月１９日から集まってますよね。その後、一般質問の中で出たんですよね。
Ｑ：と、６月３日より前は出てないんですか。
Ａ：出てません。
Ｑ：その前は、火砕流はもう議員の中でもほとんど関心がないんですか。
Ａ：ええ、関心がなかったですね。やっぱり、なんていっても３日の死者が出てからなんですよ。まあ、ある程度関心があったのが２６日の人ぐらい怪我人がでた、あの火砕流ですね。
Ｑ：そのあと、山火事が２９日にありましたけど、そのときはどうですか。
Ａ：２９日に山火事があったんですか。
Ｑ：新聞では、火砕流で山林火災っていうのは翌日でてるんですよね。
Ａ：はあ。３０日の新聞に。
Ｑ：で、このころ、太田先生は火砕流が高熱になってきたから気を付けろという警告を発したと。先生はおっしゃるんですよ。それが市民のほうに通じてたかどうか。そういう警告を市民の方が知ってるような感じはありませんでしたか。
Ａ：どうですかね。あの頃は、火砕流ということに対する関心というのはあんまりなかったような気がしますね。
Ｑ：低いですよね。
Ａ：火砕流がくると車に多少の被害がでるとか、そういうことはあったけども、それ以上のことはないんじゃないですか。
Ｑ：でも、だんだん火砕流が家に近づいてきたということはありますよね。
Ａ：そうですね。でも、この写真は６月１日ぐらいの土石流がダーッと押し寄せてきたところでしょ。
Ｑ：上木場の上のほうでしょ。
Ａ：そう、上木場から上がったところ。そこに人がいるくらいですから。あまり危ないっていうのは、関心はそこまでは市民のあいだになかったと思います。
Ｑ：そうしますと、あの選挙ポスターを撤去していてまだみつからない方たちも、おそらく恐さをそんな認識してないでしょうね。

B：そうですね。あの一番危ないところからとりに行ってるんですよね。他のところは落ちてないのにねえ。だから、言う者に言わせると、この頃はマスコミもずいぶんまだ上のほうにいましたから、火砕流というのはどがんもんじゃろかということで興味半分で上のほうから行ってみようかということで行ったんじゃないか、という話もありますね。
Q：避難勧告の規制が非常に甘かったと。ずいぶんいろいろな住民もマスコミも入り込んで来ましたけど、そのあたりは市議会では議論されましたですか。
B：みっともないことやりましたよね、マスコミも。
A：ええ、そんなことについて議論はちょっとありますけど。ただ、規制が甘かったんじゃないかとか、そんなことはあまり聞いてないんです。だから、地震対策本部が解除をちょっとせばめたことに対する批判というのはほとんどないんですよ。
Q：さきほど、共産党の議員さんが質問しかけて、市長がきつく答えたとおっしゃいましたが。
A：避難勧告地域を５つを３つにしたんですか。なんていうんですかね、判断があまかったんじゃないのかと。
Q：いつ？
A：その発言はですね、まだ本会議が始まる前の全員協議会で。６月７日だったですかね。
Q：６月７日ですか。
A：６月７日の全員協議会で、共産党の議員が言いはじめたところが、市長が猛然と反論して、自分の判断は正しかったんだと。そういうことを言われるんだったら、自分としてはもうやっていけんというふうにですね、猛然と反論して。で、共産党の議員が、いやそういう非難をするために言ったんじゃないんだと、その避難勧告地域を狭めたということは、みんなに対する気持ちを緩める結果になったのではないかと、そのことが消防団をああいうふうに死傷させたと、結果的にそういうことにつながったのではないかということを言いたかったんだと、市長を何も責めるために言ったんじゃないんだと。
Q：で、実際、避難勧告地域を狭めた結果、北上木場と南上木場に入る住民が増えたってことはないですか。１日より前にも住民が勧告地域にいろいろ入ってきたと思うんですが、１日に狭めてから３日までのあいだ、もっと多くの人が北上木場や南上木場に入ったってことはありますか。
A：それはあると思います。やっぱり自分の家をそのままにして来てますからね。ほとんどあのへんは農家ですから。
Q：そうすると、こういう不満は聞きませんか。避難勧告地域を狭めたときに、おれたちのところ２つだけはまだ避難勧告地域で、他は解除したけれど、おれたちのところまで解除してくれればよかったって声は聞きませんでしたか。それとも、北上木場と南上木場はまあしょうがないって感じですか。
A：わたしはあまり聞いてませんけれど。
Q：それから、ハザードマップでもう１つお聞きしたかったのは、警戒区域ができるのは、７日ですよね。で、いまおっしゃた全員協議会も７日ですか。
A：７日です。
Q：で、ハザードマップっていうのは、いつ市会議員の方にこういうのが出来たからって、見せられるんですか。
A：全員に色つきのを配ったのは、６月７日だったですかね。
Q：全員協議会の席上でですか。
A：ええ、席上で。
Q：そうしますと、それまではハザードマップがあるということを知らなかったのですか。
A：ええ、知りませんでした。
Q：多くの議員さんがそうでしょうかね。
A：ええ、そうと思います。
Q：６月７日の全員協議会の議題は、その警戒区域の設定というのが一番大きな議題だったんですか。
A：それは、３日に死者がでてね、とにかくこういう大惨事になっているのに議会として何もしないということになると問題だということでですね。急遽召集されたわけですよ。
Q：なるほど。
A：で、災害関係でちょっと市長が報告したのはですね、６月３日に当選証書の授与式があったんですよ。朝１０時から。２日が投票ですからね。普通なら２日ぐらいおいて当選証書の授与式があるんですけれども、翌日すぐ授与式があったんですよ。このときに市長が、現在までの災害のもようを説明したんですよ。

Q：６月３日ですか。
A：６月３日。
Q：あの日の朝だ。そうすると、大災害が起こる直前ってことですか。
A：ええ、直前です。
Q：当日ですね。
A：だからそのときも、おそらく市長はまだ大災害がまさか起こるとは夢にも思わなかった。
Q：夢にも思わなかったでしょうね。
A：その日の４時でしょう。午前１０時に市長がしゃべったんですから。
Q：どんなことをしゃべったんですか。
A：土石流が５月１５日発生して、ずっと取り組みやってきたその経過ですよね。災害の経過。２６日に火砕流という新たな問題が起こったんだと、そういうことの経過を説明して、今後とも一生懸命やりますからと、そういう一般的なことを言ったんだと思います。
Q：それで、６月７日の全員協議会のときに警戒区域を設定しましたって話をしたんですか。
A：ええ、しました。
Q：そうですか。ハザードマップはそれで出てきたんですね。
A：ええ。
Q：この地域は危険だと、だからそこを警戒区域に設定したと、そういう言い方ですか。
A：はい、そうだったと思います。
Q：ちょっとはみでてるんではないですか。ハザードマップの危険なところよりちょっと警戒区域のほうが大きかったと思うんですけど。
A：やっぱり、町々単位でやるからそうなっちゃうんですかね。
Q：たとえば、一部でもハザードマップの危険地域に入ってると、全体の町が警戒区域になっちゃうと。
A：たぶん、こういうことなんですね。たとえば、秩父ケ浦町の一部っていうのが非常にわかりずらいんですよね。だから、秩父ケ浦町となると、もう秩父ケ浦町は全部入ったような感触に住民のみなさんは受け取るんですよね。
Q：実際は一部なんですか。
A：ええ、一部なんですよ。
Q：警戒区域を設定する、その線引きが非常に住民生活に大きな影響を与えますでしょう。で、ほんのちょっとした道路を境にして、こっちはいいとこっちはだめだと。非常にこう割り切れないところも住民たちにあるんじゃないかと。
A：そうですね。その点はもう。
Q：いまは、警戒区域の道路を隔ててすぐ隣の人は住んでるんですか。やっぱり、自主避難してます?
A：ほとんどもういないようです。ポツポツ帰ってるってふうに聞いてますけども。しかしそうですね、２、３日前まではほとんど周辺の人はいなかった。
Q：じゃあ、自分達たちでほとんど避難してるわけですね。
B：おまわりさんが言うんだそうですよ。たとえば、洗濯物とか取りに来ますでしょ。そうすると、どこ行くんですか、早く行ってくださいよというような声をかけられたんですって。そんなことは何人からも聞きました。だから、お店ももう閉まってます。
Q：やっぱり、警戒区域の両端はほとんど人が住んでないと。
A：そうですね。そういった感じがします。
Q：で、もう一つですね。さっきの全員協議会のときに、火砕流のハザードマップを配られたっておっしゃいましたけど、ハザードマップは土石流もあるんですよね。
A：そうです。
Q：で、土石流のハザードマップはいつ配られました? それはもう、昔に配られました?
A：土石流?
Q：その危険区域、ちょっとこれよろしいですか。
A：はい、これですね。
Q：これですよね。これが土石流で、これが火砕流、これが火山泥流。実は、この土石流は県で作ってるんですよ。市じゃないんですよ。ですから、県の了解を得ないと出せなかったのかもわかりません。そこで、ぼくがわからないのは、これは県の調査で作ってるんですが、ところが、火砕流は市で作ってるんですよ。ですから、何で火砕流を県で

やらないのか、市で直接その砂防・地すべりセンターに頼んだのか。ぼくは今日市の人に聞いてみたんだけど、県もやってると思いますけどねって、やってるんじゃないですかっていう言い方をしてましたけどね。
A：わたしが一番言うのは、結局、国、市と県は非常に密接にやってるようなふうでですね、やっぱりそういうところがぬけてるんですよ。
Q：ぬけてます。
A：はい。市は市、県は県というなところが随所にでてくるんですよ。
Q：そうですか。あの眉山の最初の避難計画も、県はあんまり知らないっていうんじゃないけれども、あんまり関心がないっていう感じなんですよね。県と市が、どうもあんまりコミュニケーションが密接じゃないって感じがしたんですよね。で、その眉山の避難計画も、一時発表してマスコミにぬかれて、それでやめましたよね。あのへんはどういうことなんですか。
A：二月に設定をして、三月に避難計画、避難訓練を一回したんですよね。ちょうど選挙中だったんですけれども。で、その後も何もしなかったんですよね。
Q：そうでしょう。計画を出しただけですよね。
A：ええ。計画を出しただけで、避難訓練も一度しただけで、後は何もしてないんですけれども。あの後ひきつづいて土石流と火砕流が間近にやってきましたけど、そういう山の崩れるなんとかっていうのは、まだそこまでの状況も出てないし、いちおうああいう避難地域を設定して一度避難訓練をやっておけば、だいたいいいんじゃなかろうかっていうことじゃなかったんでしょうかね。
Q：ところで防災無線ですけれど、市では入れることになりましたよね。
A：ええ、なりました。
Q：あれで、わたし、こうしたほうがいいんじゃないかなと一つ思いますのは、千本木にこないだ行って住民の方にいろいろ話を聞いてきたんですけどね。あそこは土石流の危険地域ですよね。で、土石流はおそらく、あんなに火山の噴出物がたくさんありますと、数年は土石流の危険っていうのは続くと思うんですよ。で、千本木の方に聞きましたら、情報が一番困ると。危険な時期に自治防災組織が出来たそうなんですけどね。市から自治防災組織に電話で連絡をするんだそうです。だけど、災害のときは電話はふくそうしがちでしょ。それから、かりに電話が通じたとしても、住民に情報を伝えるときに雨のなかを広報車でまわらなきゃいけないと。だから、なかなか情報が伝わらないんじゃないだろうかというんですね。そこで、ああいう土石流の危険地域には、防災無線の戸別受信機というのが　ありましてね、あれを集中的にあのへんのそれこそキーになる人ですね、自治防災組織の会長さんとか、副会長さんとか、そういう人のところにいれておけば、いまのような情報の問題はかなり解決しますんでね。出来れば、そういう土石流危険地域に戸別受信機をい　れるというような仕組みをつくっといたほうがいいと思うんですよ。で、市のほうに聞いた限りでは、そのへんはまだお考えになってないというような話なんですよね。
A：はあ、なるほど。同報無線っていうのは、一方的に行政側がしゃべって、それを聞くだけのやつでしょう。
Q：そうです。ですから、同報無線はたとえば町の隅とか公園ですね、そういうところに、柱を立てるんですよ。そして、そのまわりにスピーカーがついて、無線のアンテナがあるわけです。ですけど、夜中ですと聞こえないんですよ。みんな戸を閉めちゃいますから。しかし、火砕流なんかですと、このあたりですといいと思うんですよ、こういう野外の拡声方式で。ところが、もうひとつラジオみたいにですね、あるいはインターホンみたいに各々の家庭におくのがあるんです。これもやっぱり同報無線なんですけど、屋外にあるんじゃなくて、各々の自宅におくんです。で、１台６万円ぐらいなんですよ。ですから、千本木のお宅に全部置くわけにはいきませんけど、しかし、地域の中心になるような家においておけば、市から、大雨洪水警報がでて雨が何ミリ以上降ってるから土石流の危険があるから警戒しなさいと、一つ放送すれば、全部のところいくわけです。そうすれば、そこからすぐまわり近所の人に伝えられるということで、水害の常習地域にはけっこう置いてあるんですよ。
A：ほほう。やっぱり、それは無線ですか。
Q：無線です。ラジオの受信機みたいなものですよ。ですから、各々の家庭に小さいアンテナをつける。で、これは１台６万円か７万円くらいなんですよね。
A：それはやっぱり、市役所だったら市役所に放送施設をおいといて、そして端末機を各々の家庭に。

Q：そうです、これは端末なんです。家庭にある端末と考えたらいいですね。
A：これも、補助の対象になってるんでしょうか。
Q：なってます。それから、ＮＴＴさんのオフトークとかね。あれだって非常にいいんじゃないでしょうか。
A：いや実は、わたしは議会で何回もいったんですよ。同報無線は、台風とか大雨とかそういうときには、窓をきっちり閉めてますから、そうすると聞こえんと。だからオフトーク通信だったらそういう心配もいらないから、しかも電話のふくそう時であっても充分に使えるから、それを入れんいかって。ところが、島原全市的にみますと相当な数になりますしね。しかも、それぞれの加入者が一台ずつ端末機を備えて、しかも毎月使用料がある。それがちょっとですね。ところが、年間の補修費は同報無線よりもずいぶん安く出来るんですね。しかも、ノウハウはＮＴＴの技術者がいつもおりますから、さっと対応ができるしですね。ただ、オフトークはまだ補助金もらえないでしょう。
Q：それが大きいんじゃないですかね、市としてはねえ。補助金をもらえれば。
A：でも、同報無線は起債の４割を交付税で払ってくんだそうですね。そうすると、これも同報無線ですから、当然これも含まれるわけですね。
Q：はい。たしかに市も戸別受信機もいれるっていってましたけど、それは避難所とか病院とかそういうところなんですね。それは当然必要なんです、避難民にいろんな情報を与えるのに。だけどそれに加えて、中尾川の土石流の危険が押し寄せるような地域は集中的にいれると。だいたい年次計画でやる市町村が多いですから、最初は重要なところにいれて、だんだん一般市民のところへいれるとかね。そんなこともお考えになるといいと思いますね。それから、こないだ太田先生がおっしゃってたんですが、避難民の人を雲仙温泉は受け入れないんですか。
A：何ですか？
Q：雲仙温泉の温泉街へのお客さんがあまりいませんね。そこに避難民を入れたらどうだと、避難民を泊まらせたらどうだと、太田さんは前からいってるんだそうです。ところが、雲仙温泉がなかなかうんといわない。で、小浜温泉には入ってるけど、雲仙温泉に入ってないのはどうしてだろうと話をしてましたけど。
A：そうですねえ。
Q：そうすれば、避難所にすんでる人たちも温泉でいいと思うんだけど。
A：島原の避難者の方は、島原市内で開業しているホテルにはいってるんですが。
Q：費用はどうなってるんですか。
A：費用は県持ちです。
B：とくに雲仙のほうが拒否したとか、そんな話は聞きませんよ。
Q：そうですか。島原のほうがいやがってるんですか。
B：たぶんね。というのは、島原の場合は国道２５１を通っていくか、５７号線を通っていくか、まあ一番近いのは５７号線ですよね。ところが、それもいけないと。ぐるーっといかなけゃならんと。そういう時間的問題とかで。
Q：時間がかかりますしね。なるべくなら、安全でかつ自宅に近いほうがいいですもんね。
A：たぶん、そういうことで雲仙は利用しないということかもしれないですね。
Q：市内のホテルには何世帯くらい避難の方がいらっしゃいますか。
A：ホテルには何世帯でしょうかねえ。
Q：そんなに数は入れないですよね。
B：おふろをサービスしたとか、そういうのはあるんですよね。
A：３泊くらいで交替でいれてるんですよ。ずっとじゃないんですよ。
Q：そうでしょうね。不公平になっちゃいますもんねえ。そうすると、避難所暮しでしばらくするとホテルが回って来ると。
A：そういうことです。
Q：船もそうですか。
A：ユートピアですか、船もそうです。
Q：船は人気があまり出なかったとテレビで聞きましたけど、いまはどうですか。
A：いまは満室になったとかで。県知事と市長とがやりとりしましてね。最初、県知事がユートピアを連れてきて視察にきたんでしょう、たしか。そのときは非常に少なかったもんだから、県知事はどうして少ないんだといったら、市長はＰＲ不足でしょうといってちょっとやりとりがあった。
B：知事のほうは、たいへんなお金をかけたのに、こんだけかという不満があったんでしょう。市長さんとしては、いや言うことはいったからそんなにいわれても、ということ

でちょっとあったということは聞きましたけど。
Q：今度、警戒区域が１５日までになりましたよね。その件については、市から議員さんに説明がありましたか、警戒区域の延長について。
A：正式に２６日に決めてますね。一般質問に答える形で答弁はしましたけれども、議員を集めてどうしたというのはありません。
Q：警戒区域の延長はしょうがないと、みなさんそういう感じですか。こんな状況では。
A：そうですね。もうやむを得ないだろうという反面、島原の経済状況を考えたときに、もうそろそろなんとかしてもらいたいという気持ちもあります。
Q：東京新聞である学者が、もう噴火は終わったと、危ない危ないといったのは予知連じゃなくて無知連だとかね、きびしいことを書いてるんですが。わたしは、まだ危険は去らないというほうが正しい、正しいっていうか防災の立場からすれば良くて、むしろ警戒区域を延長するのはやむをえないことだと思うんですけど、こういう新聞を市民がみていったいどう思うかですよね。
A：そうですね。こういうふうな見方もあるんかなあということであって。
Q：やっぱり、予知連の先生方とか、太田先生のほうを信用しますよね。
A：はい、そうだと思います。というのは、テレビで溶岩ドームがずーっとせり上がってきて最大規模まで出てきてるでしょ、毎日ね。あれが一回落ちてしまった後は、この意見もある程度信用すると思いますけど、あれが落ちる以前では、あれがいつ落ちるかがみんなの関心ですから。６月８日から、だいたい一週間ごとに溶岩ドームが落ちてきてるんですよね。だから、８日から１５、１６日くらいには、もう一回大きい火砕流がでて来るだろうと思ってたんですよ。それ以降、もう２０日くらい落ちてきてないんですよね。
Q：そろそろあれで終わりで、もう落ちないんじゃないかという考えはないですか、住民のあいだで。
A：まあ、一部にそういうことという人もいるけど、圧倒的少数でしょう。
Q：特別立法なんかは、議会では陳情かなんかするつもりですか。
A：議会で２７日に決議しました。
Q：特別立法というのは、避難している人の生活という意味が一番つよいんですか。
A：そうですね。
Q：これは党派でなく、全員で？
A：はい。それと、雲仙岳眉山災害対策特別委員会というのを、今度新しく議会で設置しましたから、それを中心に国まで陳情にいこうと。
Q：前は眉山だけでしたよね。
A：そうです。
Q：最後に一言だけ、流言蜚語、うわさの話をききたいんですが、市民のあいだに一時期、眉山が崩壊するとか、泥棒のうわさもあったそうですね。あれは事実ではないでしょ。事実泥棒が入ってるんですか、警戒区域に？
A：いやあ、わかりません。
Q：でも、ずいぶんうわさが広まってますよね。
A：というのはですね、絶対アリの入る隙間もないといってますけど、住民はどういうふうに行けば入れるか知ってるんですよ。
Q：やっぱり多少は入ってるんですね。
A：だから、そういうときに見に行ったら、クーラーがなくなってたとか言うんですよ。警察は網の目張って絶対入れないと言ってますけど、住民は行ったという者がいるんですよ。
B：実際、２、３日前にも車で行ってきたって人いるんですよ、堂々と。だから、泥棒に関しては単なるデマとはいえないと思います。眉山が裂けてたとか、噴煙を出してたとかいうのは、実際自衛隊が調査に行って、そういうことはありえないということですから、ないと。
Q：あれは、眉山に火山灰が積もって、風でも吹くとそれが撒って、あれを火事だとまちがえたんですか。
A：ええ、ものすごいですよ。ヘリコプターが巻き上げるやつ。
Q：やっぱり警戒区域の場合は、上のほうは危ないかなって思いますけど、５７号線より下のほうの人はいいんじゃないかなって気があるんじゃないでしょうか。
A：うーん。８日すぎのある時点までは危ないと思ってましたでしょうけど、このへんの人たちは家にもう帰りたいという気持ちがあるかもしれないですね。

Q：ここにこういう文章があるんです。「現時点でも昼間なら国道２５１号線の通行は解除しても大丈夫」って。つまり、昼間ここを通せと。そういう意見はありますか？
A：あります。
Q：やっぱりありますか。でも、一般質問のときに市長さんが１５日間延長って言ったときには、猛烈に異議をとなえる人はいなかったんですよね。やっぱり防災のほうが大事ですものね。ところで、この次のときには厳しい状況ですか、警戒区域延長っていうのは。
A：この次ですね。みんな思っているのは、ドームがいつかは崩れるだろうと。あれだけ巨大になったんで。
Q：不気味ですよね。なんで崩れないんだろう、あんなでっかいのが。
A：わたしたちが一番市長と意見が食い違うのが、わたしたちも最悪の事態がないというのが一番いいんですけども、最悪の事態まで考えての避難計画を立てなさいと言うんですよ。ところが市長は、学者や専門家が眉山はいまのところは大丈夫だからばたばたする必要はないと言うんですけども。しかし、一般市民は避難地域じゃなくても島原市外に行ってるんですよね。そういうことが１つ。それと教育の問題で、８月１日から夏休みが終わるんです。ところが、８月１日に厳戒体制がとけるかというと、臨時休校がとける状態かというと、なかなかむずかしい。そういうときにそなえて、島原市外に仮設の校舎を作ってそこに生徒たちをスクールバスで通わせるか、あるいは戦時中の疎開じゃないけど、そういうことをやってはどうかと言うんだけど、全然考えてないんですよ。
Q：２万６千人計画の初期に、ＮＨＫの柳川さんとその件について話しましたよ。あの計画は市外避難です。つまり、２万６千人も島原市内におけないわけですよ。だから、市外にバスかなんかで持っていくということだったですよね。ところが、やっぱり近隣の町に迷惑をかけるということか、市外脱出は難しいということかわからないけど、人間を縮小して市内でまかなうということになったですね。伊東沖の噴火でも似たようなことがありまして、あれもいつまで続くかわからないっていうときに、県知事は伊東市の外に避難をさせなさいと言った。そしたら、市長さんがやっぱり伊東市外はダメだと言った。市長さんとしては、自分のところでやりたいって気持ちがあるんでしょうかね。
B：市外に出すというそれだけの危険性が十分あればだけども、県はできると思うんですよ、県なら。広域的な対応を考えるなら県が動かなけりゃダメでしょうね。
Q：おそらく島原市長さんも、県知事が積極的にバックアップしてくれて、県知事がいろんなところに声をかけてくれればできないこともないだろうと思う。だけど、市だけでは難しいでしょうねえ。
B：県知事は市長から要請がないとやれない。両含みというか。
Q：眉山に関していうと、眉山が崩壊するのは眉山の下に地震が来るからですよね。普賢岳は溶岩が出れば終わると。それから、眉山に地震活動が移行するまでに２ヶ月とかなんかは時間があるだろうと。これは１７９２年のシナリオですよね。なおかつ、このへんに観測機器をいっぱいつけておけば、前兆現象があるだろうから、いざというときには十分避難させられるというふうに考えてるんです。だから、むしろいま必要なのはそういう予知のできる観測機器をいっぱいつけといて、いざとなったら人命だけは助かるシステムですよね。そういうのを作っておく必要があるんですよね。鹿児島なんかでは、実際に避難しませんけど、しっかりした避難計画を作ってましてね、桜島町っていうんですけど。もし桜島がかなり厳しくなってきて逃げなけやいけないときは、鹿児島市のどこに逃げるか計画作ってるんですよ。ですから、この地域の人はどこどこに逃げるとか、そういう計画を作ってるんですよ。そういう計画を作ってあれば、いざという時にできますよね。いまはそういうソフトな計画のほうが大事かもわかんない。問題は避難計画ですよね。２月に来たときも話したんですけど、いまの避難計画というのは悪口をいうようだけど、眉山にコンパスで丸を書いて、この範囲の人は大変だと。だけども、もうちょっと現実的な被害予想と避難計画を作らなけりゃいけないんで、そのへんの現実的な問題ですよね。それこそ、ハザードマップみたいなのをいまから作っておくとかね。それも２月のときに言ったんですよね。そしたらそのときは、これはたたき台で、だんだんこれから太田先生のご意見を聞いて直してよくしていきますと言っていたんです。
A：市長もそういってました。ところが、その通りなんですよね。
Q：いまのうちに、ハザードマップ的なことをやったらいいと思うんです。いざとなったらできないから。
A：そのハザードマップを作って、そして避難計画を立ててくれと言うんですけども。市

長は、火砕流が起きて犠牲者が出て、8日にまた火砕流が起きたということで、もうその対策に頭がいってしまって、いまは頭がそこまで及ばないんだろうと思いますけどもね。
Q：流言の大部分が眉山関係でしょう。ということは、市民がだいぶ眉山のことを気にしている。だから、眉山対策を実際やって知らせることは、市民の精神の安定の上からも大事なんですよね。

５．深江町・町会議員Ｈさん（１９９１年９月２１日）

Ｑ：６月３日の災害は、すれすれぐらいの感じだったんですか？
Ａ：そうですね。一番奥まで来てたもんですから。
Ｑ：その日の話をちょっと聞かせていただけますか？午後３時頃から４時頃の災害の起こる頃の話ですね。
Ａ：そうですね、あの時４人で行っとったんですわね、４人行って。
Ｑ：北上木場よりもずっと上ですよね。
Ａ：ええ、山の一番上。写真に出てきますとこ。
Ｑ：じゃあ、ドームの真下くらいですか？
Ａ：はい。
Ｑ：その６月３日は写真を撮りにいらしたんですか。それとも、道を間違っちゃって入っちゃったんですか？
Ａ：やっぱり写真でしたね、最初は。火砕流って珍しいじゃないですか。初めて２００年ぶりに。これが写真ですね。
Ｑ：これはいつ頃の写真ですか？
Ａ：これが一番初め。まだ全然、火砕流がない。で、これがいまのドーム。ここから落ちて来るわけですね。それでわたしたちは、これが道路ですが、ここの下に入ってたんです。これがドームで、これが道路ですもんね。これを入って行って。で、火砕流がわたしたちを飛びこえて行ったので、みんな死なずにすんだ。
Ｑ：はあ、飛びこえて行ったんですか。そのときは４人ですか？
Ａ：４人でした。
Ｑ：でも、もう３時位からかなりひどくなって来たっていう話を聞きましたけど。
Ａ：ひどかったですよ。だいだいわたしたちは、この上木場のほうにおったですよ。一番はじめに火砕流が来たところ、ダムのところまで来ましたもんね。
Ｑ：それは、火傷した６月２６日のですね？
Ａ：いや。そのところに行って、それからまた、火傷したところまで入って行ったわけですよ。そしたら、また煙が流れたいうて、もう灰がいっぱいきて物凄いでしたね。そいで、今度は下に来て、この山がカイノ岳ですけども、この上に登って見ようじゃなかかと言うとったわけです。これ登ろうじゃなかかって言って、そして、こっちからこう回って、で、ここは道路がずっとあっとですもんね。そいで、これをずっと登って道の上まで行って、ここに土石流のセンサーがありますよね。あっこを見て、下りよったですわ。そいで、ここに道路がある。ここへ入ってみじゃっかって言って、これが道路です、これを入って行って、この下に入ったです。そしたら結局、これは全然見えないわけ、ドームは。雨が降りよるし、雲に隠れてるし、そいで、行ったらもう灰がこんなに積もって、こんな木が倒れとるわけですよね。
Ｑ：ここらへん来たのは、何時頃ですか？もう災害が起こった後ですか？
Ａ：災害が起こる前でした。起きる前ですから、時間的には。
Ｑ：３時頃かなあ？
Ａ：覚えてませんけど。結局、３回来たですもんね、３回飛んできたですよね。で、木がいっぱい倒れておるもんだから。だいたいここは、２８日に県の人でここ歩いとる人がおらしたですもんね。
Ｑ：そうです、それは聞きました。視察に来た人です。
Ａ：たしか、歩いとらしたですもんね。それでわたしたちも、ああここかいねと言うことで入っとったら、ここは谷が幾つもあるもんね、もういまは埋まってしまってますけど。そいで、一発目が来てダーンと。「ほーら、行ったぞ」っと、目の前をパーっと。
Ｑ：じゃあ、頭の上を越えたんですか？
Ａ：ああ、３回とも頭の上をこう。
Ｑ：すごいな。
Ａ：写真がありますよ、そこの現場の写真が。ここが傾斜で、それから早いもんだから飛んで行くわけですね。
Ｑ：ははあ。で、この下にいたわけですか？
Ａ：はあ、この下に。
Ｑ：くぼ地に。
Ａ：はあ、くぼ地にですね。それが物凄い。いま言ったように、全然ドームが見えないわ

けですから。こう霧に隠れて。
Q：じゃあ、ワーって来るときに音がするんですか?
A：ああ、しますよ。
Q：バリバリって感じですか?
A：何って言うんですか、地獄、まあ地獄でしょうな。こう、音がブーンって、バーンっていってですね。何っていうんですか、ドカーンいう表現するかな、ダーッって、もうとにかくその木を薙ぎ倒していく音、もうとにかく目の前で走って行くわけですよ。音が走るっていうか。
Q：ふーん。熱くなんかないですか?　ワーっと飛び越えるとき。
A：熱いというか。結局、こう見て逃げよるでしょ。で、こんな石のが中ではじきよって。
Q：上のほうで弾けるんですか?
A：はあ。そして、逃げよる横に、石が、こんなのが飛んで来るですね。握ってポケットに入れようかと思ったけど握りきらん。
Q：熱いんですか?
A：熱いですよ、そりゃあ。
Q：ポケットに入れようとしたんですか?
A：はあ。これを見てわかるように、真っすぐこう横に逃げとるから、助かって良かったけど。まあ場所的にも良かったんだろうし。もう一回ここへ行ってみたいな、行ってみたいなっていま思うけど。
Q：じゃあ、4人ともケガもしないで?
A：ケガもしないです。それで、走り下って。もう自動車も全然ダメでした。もうギアを入れたまま全然叩き割れちょっとですよ。もう走って来たですよ。ほいで、ここまで来たら、ここがボンボン燃えよるじゃなかですか。ほいで、もうそっちには行けないと言うんですが、わたしはここから山に、この裏に帰ろうと思うとったですけど、4人で行けるだけ行ってみようと走るもんですから。
Q：車で走ったんですか?
A：はい。車で行っとっとですから、わたしのセドリックで行っとったです。これで走って行って、ここに来たら、もうここが、こんなに木が燃えて火砕流が来てるわけですね。ボンボン燃えてるですね、目の前が。ほいで、これは危ないって、自動車捨てろっていって。そして、ここを這いあがって逃げて来たです。自動車はまだここに置いちょっとですよ、こうやって。
B：これが、そのとき着ていたサシコですよ。
Q：ははあ。
A：後で、これは洗わずにおけば良かったと。記念に。原爆といっしょで。
Q：ああ、洗っちゃったですか。
A：はあ、洗って三日くらい。
Q：普通の服なら火傷ですね。
A：そりゃもう、やられよるですよね。
B：そりゃもう、あっちこっちですね。
Q：頭はなんですか、帽子ですか?
A：頭はヘルメットですね。
Q：ここからここまで距離はどれくらいあるんですか、その燃えたところまで?
A：1キロくらいでしょうかね。
Q：1キロくらい。それじゃあ、ここはもう火砕流が通って燃えてるわけですね?
A：ああ、ここは火砕流が通って燃えて。それで、わたしはここに自動車をおけって言って置いて。それで、今度はもう逃げて下りて来たらですね、ちょうどこの下に、テレビによう出よった、赤松谷の一番底に工事をしよったわけです。それで、みんなおらんもんだから、機械をこう上げたまんま、トラックはドアを開けてエンジンかけたまま、ユンボはこう空に上げて、誰もおらんとですもん。結局、そこまで火砕流が燃えて来とるわけですね。で、後で聞いたら、結局、逃げとるわけですよ。
Q：逃げちゃったんですね。
A：ということは、わたしたちは火砕流を追っかけて来ておる。で、結局、先生方もテレビで見られたと思いますけども、消防自動車の前を「逃げろ、逃げろ！」と走って来よるのテレビでやっとったでしょう。あのときですからね。わたしたちは後から追っかけて来よるわけですわ。そして、とにかく急いで帰ろうって。とにかく機械を上げて、このままにすっと機械を燃やすんじゃないかといって、上げて。

Ｑ：運転して上げたんですか？
Ａ：はい。それでみんなが来てですね、早く逃げろっちゅうわけですわ。なして言うと、下はもう大変なことになって燃えよっとぞって言うもんですから。いちおう、こっちは機械だけ上げろっていうて、上げて。そして今度は下ったわけですよね。
Ｑ：その「逃げろ」って言った人は誰ですか、消防団ですか？
Ａ：いえ、現場の人です。もう機械が燃えてなかか、トラックが燃えてなかかっちゅうたら、「もうあんた、問題じゃない」っちゅうて、早く逃げんかっちゅうことですから。そいで今度は下に下って、大野木場小学校、９月１５日に燃えたあそこに来て、その上から上木場を見たらもう火の海でしたね、地獄みたいに燃えとるですね。それで、それを見よったら、今度は深江の消防団長が「もう一人も人間はおらん。早く避難せんか！」っちゅうて、「みんな避難して一人もおらんとやけん、何しちょっとか！」と怒られるもんじゃけん、わたしはその声でまたびっくりしてですね、そいで役場まで逃げ帰ったとです。
Ｑ：もうその頃、大野木場はみんな逃げちゃったんですか？
Ａ：ああ、その頃はみんな逃げて一人もおらんわけです。そのときに上木場で、人が亡くなったちゅう話を聞いたんです。その前に、わたし上木場におったとですからね。上木場にずっといつも５時６時くらいまで。平原橋の一番奥のとこですけど、そこに毎日、５時６時までおって写真撮ったり。最初は恐いというのは全然なかったです。３日にも行って、おったら、死んだ山下さんとか伊賀君とか、ずっといつも座って見とったですわ。その人たちとずっと一緒におったら死んどるです。そいでまた上へ行って、結局、方向が良かったもんだから助かっちょったですね。
Ｑ：その山下さんって、亡くなったのは住民の方ですか？
Ａ：消防団の人ですね。
Ｑ：すると、Ｈさんが３日に火砕流にあったのは、どのへんになるんですか。
Ａ：あの例の作業をしててですね、ケガされた方よりも下ですけど。一等最初に土石流が起きたとこですよね、５月１５日の午前何時かに起きたところがそこです。その平原橋ってところ。マスコミの方が燃えてるところは、この反対側です。
Ｑ：ああ、反対側ですね。水無川を隔てて反対側ですね。
Ａ：そうです。、側と谷側です。もう一個の山側っていう感じがマスコミの方がおられた。これが白谷川ですね。これが水無川ですね。これが家なんですが、これが今度燃えたんですわ。ここが実家ですから、これもみんな燃えてしまった。
Ｑ：燃えたっていうのは、９月１５日の火砕流で？
Ａ：はい。２～３日前の１５日に全部燃えちゃった。わたしの実家ですけども。
Ｑ：いま、ここに入っているんですか。
Ａ：昨日入りました。全部歩いてですね。
Ｑ：消防団の人がですか？
Ａ：いえ、わたしが。議会で、全部歩いて入って来ました。それで、自分の家も全部燃えてしまっとるですよ。全くすごいですね。中学校も小学校も大直撃して。
Ｑ：８月の中旬ですか、北東斜面から火砕流がどんどん延びて来るのは。
Ａ：何日頃でしたっけね？
Ｑ：もうちょっと前ですか？
Ａ：前だったかもしれませんね。
Ｑ：まさかあれが大野木場に流れるなんてね。北東斜面の火砕流がこっちに来ちゃったわけでしょう、今度。
Ａ：わたしは、もう一番初めからこっちに来るもんだと思ってましたけど。
Ｑ：ははあ、地形から見てですか？
Ａ：はい。千本木には絶対行かないんだと。千本木よりも大野木場が危ないんだと、もう、最初から思ってました。これが来たときから、家の実家を中心にして来るという。家の実家は、これが８日に来たときに燃えとったんです、実家の４０メートルくらい先まで燃えとるわけです。それで、毎日山に行って、ありとあらゆる方向から山を見て。そして、もう本当に深江の三バカと言われるくらいに走り回って、写真もまだ整理してませんけど、いっぱい方向を見て回っちょったですね。それで現場に入って見て、わたしは必ずこっから来るんだと。火砕流っていうのは走って来るのは土石流もまったく一緒ですけども、力ですから。それで、火砕流が行くのを見てると、もう少しの段差があっても、こう低い方に低い方に行く、先端が走って行くんですよ。それで結局、１０メートルも２０メートルも飛び越えてじゃなく、こう、うねりながら来る。

Ｑ：その段差を考えると？
Ａ：はい。これがタルキ台地ですね。わたしはここに何回も行って写真を撮ってるです。こっちも崩落しよるときに撮って来よっとですよ。で、まあ流れ方ですけども、これがずーっと来てここに溜まれば、これを越えるかもしれないけれども、この流れの方向っていうのは、こう行くんじゃなくして、この方向に流れるとですよね。流れる方向はこっちだと。そう思うもんだから、向こうに溜まって摺り鉢みたいにこう溜まって行くと。
Ｑ：摺り鉢の底を回るようにですか？
Ａ：そうです。それで、わたしはこうこっちに来るんだって言いよったら、役場の人が来て、「あんたがそんなことばっかり言いよるから」っと言うけん、「言うてん言わんでん来っと」と。絶対来るんだから。その日なんですよ。わたしがもうじき来るぞということで、部落の木場の人たちがその日にここに来たんです、１０人ぐらい。ここで被災を受けられた人たちが。１５日の昼に。そして、ここで話しながら「どがんですか？」って言われて、「もう来ってすばい」と。「ここ２～３日が一番危ないですよ」って言うて、それはわたしが見ちょるのはテレビの火山性微動とか現場を見て、それでそこに連れて行ったとですよ。もう危ないですよって。そして、４時５０分ですね、来たから。あそこの山から出るとですね。「あなたがた、よう見ときなさいよ」と。そいで、ここまで出て来たんですよ。で、出て来たもんだから、もうわたしが逃げましょう言うて、そっからここまで逃げて来たんですよ。逃げて来て、もう５時１０分くらいでした。
Ｑ：ここから煙が出るのも見えるんですか？
Ａ：はい。ここに山がある。そこにポンとあたって煙が上がる。それで上がりよるあいだに、またつきが上がるわけです。ポッポって上がって来て、山をグルッとまいて来るわけですね。
Ｑ：そのポッポっていうスピードは相当早いんですか？
Ａ：早いですよ、これはもう。みなさんは新幹線にたとえていわれますけど、まあ勘ですからわかりませんけど、もうサアーっといって、振り向いたときにはもうこれにぶち当たっちょったですわ。ですから、新幹線より早いかもわかりませんけどね。
Ｑ：話を３日に戻しますが、火砕流の一番近くにいたんじゃないですかね、Ｈさんは。
Ａ：わたしたちより近くに行ったのは他にいないでしょうな。生きてるもんではですね。まあたしかに、ここでおうた人たちなんかは頭の毛が燃えて逃げて来た人おりますよ。
Ｑ：ああ、もう自動車でワーっと下りて来るわけですよね。で、ここで会った人は？
Ａ：ここで会った人は何人もおられますよ、生きてきとる人が。自動車の中にもぐって助かったとか、頭はもう燃えた人たちとか。
Ｑ：実際に見てるわけじゃあないんですか、そのときに。Ｈさんはごらんにならないで、こっちへ行っちゃったわけですね？
Ａ：そうです。わたしたちはその人たちを見ておりません。わたしたちはここで別れて、こっちから登ったわけですから。
Ｑ：じゃあそのとき、それまでに一緒にいた人たちがケガしたり死んだりしてるわけですか？
Ａ：そうですね、わたしたちを撮ったテレビ朝日の人なんか３人亡くなるし、もう知ったもんばっかりでしたから。もう「親父、戻っとかない」って言葉をかけて別れた人たちばかりで。わたしたちが結局、運が良かったわけですね。そこにおれば、わたしたちも。
Ｑ：すると、たまたまくぼ地にいたから火砕流が？
Ａ：そうです。
Ｑ：ちょっと高台にいれば？
Ａ：そりゃあもう。
Ｑ：ザーっと音がして、逃げ込むってわけには行かないんですか？
Ａ：そんな。そんな余裕はないですね、全然見えないんですから。ドームも見えなければ、霧がちょうどあって、見上げてもどこっていう感じもわからない。もう逃げるときは後からモコモコモコモコって、追っかけて来るんですよ、こう。
Ｑ：追っかけて来るわけですか？
Ａ：こんなして追っかけて来るってわたしが表現すると、みんな笑いますよ。とにかく「火砕流っていうのはこんなして来るばい」って言うと笑うけども、いつもそこから見とるわけですから。
Ｑ：はああ。それで、その音もさっき言ったような変な音がするわけですか、ヒリュヒリュ、ゴーって。
Ａ：ゴーっていうのは、ドームのきしむ音ですね。結局、ドームのきしむ音でしょう、地

獄と一緒ですわ。
Q：火砕流自体がモコモコ追っかけて来るときは、音はしないんですか？
A：それはですね、そのときはモコモコと。サーっていうようなのは、火砕流が行って灰が降る、家あたりは灰よりも小石が降りよったです。そういうときは、サッサッサッサッサッサっていって、ここを通って行きますよ。これは、こっちは下流で行くわけですから、本流は向こうへ行ってるわけですから。
Q：さっきの9月15日の、方向がだいたいこういうふうに来ると当てたっておっしゃってましたけど、そういうのは、ジーっと観察してるとだいたいどこに来るかっていうのはわかるんですかね？
A：わかるっていうのか、見当がだんだんと。だいたいですねえ、山を全部知っとれば、わたしは絶対にこれから来るぞと。どうしてそがん言うとかねって、みんな役場の人たちも。その絶対こっち来るぞ、こっち来るぞってわたしは見て印をつけて、こういう方向にしか来ないと。これはもう地形を見れば。
Q：そうすると、来るぞ来るぞっておっしゃったんで、こちらの人たちは家財道具やなんかは取り出したんですか？
B：ええ、7日の夜にですね、地元へ「とにかくもう近かうちに来るけん、明日早よから荷物ば出しなさい」って、8日の朝早くもう5時くらいから荷物ばたいがい出させてたんですよ。
Q：じゃあ、家財道具がずいぶん助かった人がいるわけですね。
A：おりますね。わたしは議員でしょう。そして、こう予測もしちゃうとパニックが起きる問題が起きますから。しかしわたしは、来なくて幸いじゃないかと、しかし行くぞと。火山をなめちゃいかんぞと言うて、ここでも10人ぐらい、「あなた方は火山をなめちゃいかんぞ、あと10日で終わるとか、正月には帰られるとじゃろうかという考え方は持っちょるばってん、これは、わたしも明日終わるやわからんですけど、これが一年二年で終わる品物かどうか。深江ができたときの状態に戻るかもしれんぞ」と。それぐらいきびしかぞと。わたしは学者でもないし勉強もしてないけども、先生方のデータを毎日見てるし、テレビのニュース番組は全部そこにとっとるわけですから。それを見ながら、ああこれは終わらんなと。溶岩が出るのがもうじき終わっとじゃなかろかといっても、だんだんひどくなって行く。そうすると、もう倍ぐらい近く出て来よる。そうすれば、終わらんかもわからんですもんね。倍出て終わる、3倍出て終わる、それも決まっちょらんし。だんだん見ちょるごとに大きくなって来よっとでしょ。ずいぶんと前からこんなにか持ち上げて、どっかに来ることはわかっておるわけです。しかしこっちへかかったら、こっちに来るというのは、谷を見れば、わたしはこれが一番こわいというたとです。これが崖から降ったときに全滅するぞと。
Q：なるほど。そうすると火砕流の予想なんていうのは、地形を本当に熟知してないと難しいですね。
A：やっぱりね。
Q：でも、マスコミも火山の先生方も、こう行くなんて誰も言ってなかったような気がするんですよね。言ってる人いましたでしょうかね？垂木台地を越えて行くかもわからないとは言ってましたけど。
A：みんな先生方はね、千本木へ来るんだと言うことで。わたしは千本木の人と一緒に行って見ながら、千本木にゃあ来んですばいって、そがんことなるもんですかって。わたしが深江があぶない。そこは、一つは深江が危ないってなるんじゃないかなと言うのは、やっぱり自分のうちにあるもんだから、そういうのもありますけども、うちに来ると予測されたのは、わたしら、もう火山が爆発したときから深江が危ないと。そいで、この垂木台地を越えるとか何とか、ああ越えんと、絶対深江がやられるからって。わたし、そがん気がしてならんかった。で、役場に行って、一番初めから来るから来るからきっと恐ろしかって。流れがどがんこつちゅうと、谷ば見ればわかるとですよね。その流れる力で見ると、こう曲がって行くっちゅうことはわかるですよね。わたしは火砕流は最初から力だと思うとるもんで、爆発はどこに行くかわかりませんけども。この谷を見とれば、これがどこさ行くってわかるですもんね。
（スピーカーの音。「深江町災害対策本部から・・・・」）
Q：ああ、これ良く入りますね、この個別受信機。
A：これいいですね。
（「北東側、溶岩ドームは依然として成長を続けているもようです。充分に注意し警戒してください・・・・・・」）

Ｑ：これは定時ですか？
Ａ：定時じゃあないですけどもね。これは、ファックスがちょっと。火砕流の振動が来るわけですよ。この頃ほとんどなかですよ、放送は。２５１号を通すの通さんのと言うくらいしかですよ。これは、やかましいもんですから。もう一つは、大野木場に入域をさせるさせないでも、入って行くわけですよね。
Ｑ：いまの「警戒区域に入っている人は退去してください」っていうのは、毎回毎回やりますか？
Ａ：はい。
Ｑ：そんなにやりますか。じゃあ、かなり入ってる人がいるってことですね。
Ａ：おりますよ、もう。牛や馬がいてるわけですから。１５日の日にもですね、それまで長く来てないもんだから慣れてしもうて、待ちきらないで入ってるんですけど。これ、昼間にやっちょったら。
Ｑ：そしたらケガ人が出てたかもわかんない？
Ａ：そう、何十人の被害。１５日の４時すぎも、先端の熱風というのは、これが一番初め。これが結局、こっちへ回ってきよるわけですね。もうこれで大野木場は燃えるんです。これが４時４５分くらいですよね。
Ｑ：そうすると、だいたい大きい火砕流は夕方か夜ですね。
Ａ：夕方。４時くらい。
Ｑ：６月３日も８日も。
Ａ：昼に来るということはないんですよ。
Ｑ：どうしてでしょうかね？　何かあるんでしょうかね？　単なる偶然かなあ。
Ａ：ということはですね、単なる偶然でなくて、わたしは、火砕流というのは夕方っていうのは、冷えるから。
Ｑ：冷えるから？
Ａ：冷える。それと雲。この火砕流っつうのは、わたし、こう思うっちょっとですけども、これが１０００度くらい、１２００～１３００度あるでしょう。ということは、茶わんを焼く窯のやり方で、還元っていう焼き方があるんですね。あれと一緒で、温度が１０００度以上あるやつに入れて、きゅうに冷えると、ひびがきれいに入る。窯から早く冷やしたら、このきれいなのが出来る焼き方。それとまったく一緒で、ひびが入って冷えて、それで夜に冷たい風が来たり、水蒸気がかかって雲が来たら、それが大きな崩落をするとですね。冷えだけで崩落することはないんですよ、大きいのは。必ず雨雲がそこに寄って、急に冷えて割れるわけです。わたしは土方ですから言うんですけど、ノミをこうフイゴで温めて、刀でも一緒ですけど、こう冷えると、びしゃっていって爆ぜる、急に冷えると爆ぜる。そういうふうにして、このドームっていうのは弾くんじゃないかなって。ですから、雨が降ったら絶対入るなと、わたしは言いますよ、みんなに。天気が良かったら、そがんことは。
Ｑ：で、風がなかったら、もっとドーっと行っちゃったわけですね。
Ａ：いや、みんな風がこっちに来ちょったけんって言うけど、風じゃないんだって。爆発して来る力で来るんだから。風は多少は左右されるけれども、これが一回で行くっちゅうことはなかですもんね、回２回３回と後から必ず力をつけて、続けて崩落して来るですよ。それと、今度は走りよるあいだに、その大きいのがバーっと破裂する。そしたら、この斜面を走るときに爆弾みたいに爆発するわけですから、走っとったら全体に広がるわけです。ちょうど、あのランナーが足を蹴るためのスタートのあれを踏むのと一緒で、力で来っとです。
Ｑ：そういう力でスピードが出て来る。
Ａ：出て来ると、わたしは見とるですよ。そうでないと。平面も走るんですから。爆発して行きよる。
Ｑ：ははあ、ただゴロゴロ転がってるんじゃないですね。
Ａ：ないですね。これが１５日の日の写真。一番先端では、大野木場は燃えちょっとですから。このときに人間が入とっとですけん。
Ｑ：入ってたんですか？
Ａ：はい。それで、逃げて来よっとですから。で、ものすご熱かったですって。そのときもう自分の家は火がついちょっとですよ。
Ｑ：ああ、じゃあ夢中で逃げたわけですか？
Ａ：夢中でもう全然見えんとですから、この火砕流が来たら。灰が来たら。家のここは５時に停電だったですけど、ここにおれんとですから、もうロウソクをつけなければ。真

っ暗なんですから、一寸先は闇ですよ。
Ｑ：でもケガをした人はいなかったんでしょ？
Ａ：おりません、みんな逃げた。
Ｑ：必死で逃げたんでしょうかね。でも、３日も命拾いしたし、大変な経験ですね。
Ａ：やっぱり、恐いですよ。３日の日に一緒にいた人なんか、逃げた後でタバコを震えて付けられんです。わたし、恥ずかしい話ですが、しょんべんをシャーって出てるのを全然知らないですよ。
Ｑ：ほお、それほど恐いんだ。
Ａ：そうです。それはもう恥ずかしい話ですけど、恐いのも恐いわけですけど、あの蝉あたりがパッと逃げるのあるでしょ。あれと人間も一緒。あれは動物的勘らしいですから、なるたけ体を軽くしようと。どうもそうらしいですよ。人間も動物ですから。ありゃあ恐かったですね。もう腰が抜けてるんです、半分腰が抜けてるんです。
Ｑ：それはセドリックに乗る前ですね。経験した直後にタバコの火をつけとして、こうなっちゃうわけですね？
Ａ：いいえ。もうセドリックで逃げて、そのセドリックを捨てて、ようやっとここの下まで逃げおりて。
Ｑ：はじめて我に帰るわけですか？
Ａ：我に帰って。相手のＳさんって２３ですけど、この人もタバコを付けきらんとです、震えて。
Ｑ：で、結局そのセドリックはだめになっちゃったんですか？
Ａ：ええ、置きっぱなしです。なんか、見た人がいてまだあるって言う。どうもなっちょらんかったって。まあ、カメラマンの方たちが死なれるの、わかりますよ。その人間の慣れと、知らなすぎと。カメラマンが、もうちょっといいとこ撮りたい、もうちょっといいとこ撮りたいっていうのと、火砕流って言葉を知らないでしょう。田舎のわたしたちでも知るもんですか。そいで、見ちょっと、目の前まで来て、これはちょっとこまんかったかなって、眺めるくらいの知識しかないんですから。
Ｑ：そうでしたね。
Ｂ：この頃は慣れちゃってね。小さいのが来るとがっかりするし。
Ｑ：恐いですね。
Ａ：このあいだも、自分の家が焼けるのを目の前に来とるのに、「こんなんは小さかったよ」って言うくらいで、自分がやられるか家が燃えるか。
Ｑ：うーん。やっぱりセドリックを取りにいけないっていうのは、北上木場に入るのがまだ恐いんでしょ？
Ａ：そうですね。恐いより道路がもう。
Ｑ：ああ、道路がだめなんだ。
Ａ：もう封鎖されてしもうたですから。
Ｑ：そうか、そうか。じゃあ物理的に無理なんですね。
Ａ：無理です。そのなかには、もっといい写真も入っとっとですけどね。カメラも放りっぱなし。
Ｑ：まあ、誰も持ってく人はいないでしょうけど。
Ａ：ええ。わたしは土方をやったもんで、性分だからもう火砕流とずーっと一緒ですけども。そうすると、火砕流がどんなに走るかっていうのがわかってきてね。これなんかまだ生きとるわけですから、わたしたちは、これは生きとるこれは死んどると。こっちの地元では、生きた火砕流、死んだ火砕流っていってですね。これなんか、まだ後から来よるです、まだ後から押して来よる。
Ｑ：そうすると、この横に張りだしてる部分はまだ生きてるんですか？
Ａ：これは生きてる。上のはもう死んでるです。この溝のが生きてるんです。この写真は、ちょうど板底を出て来たところです。これでもう大野木場の家が燃えかかっとるですもんね。あとで聞いてみると、やっぱり燃えとる。このとき、逃げて来るパトカーが来て、さあ逃げろという途中です。これがパトカーですね。それからユンボの運転手を、さあ逃げろと言っても、ユンボの運転手が聞かんもんだから、警察の人たちが飛び降りてきて、パトカーに放りこんで逃げとるんです。もう聞こえない、機械を一生懸命してるでしょ。それで、パトカーの人が結局、見張りながら仕事をする。まあ土石流をあげるわけですね。これなんか、すごい力で降って来よる。
Ｑ：で、これが当分長引きそうだとなると。この大野木場の人たちはいま仮設ですか？
Ａ：はい、仮設です。

Q：しばらくは仮設で我慢しなくちゃいけないってことですよね。
A：もう戻れるだろうかってことですよね。もう３６軒ですかね。
Q：集団移転なんていうのは、まだ全然話し合いになってないでしょ？
A：はい。まだみんなが帰れるって思ってるですから。
Q：そうでしょうね。
A：そう思って。火砕流が止まれば帰れるんだということで、集団移転も何も。でも、安中のほうはもうそういう話が。
Q：今日あたりは危なかったですか？
A：いや、今日は絶対大丈夫ですよ。
Q：灰はまだすごいでしょ。
A：ああ、すごいですね。
Q：溶岩ドームのでっかいのが落ちると、何日くらいで元に戻るんですか？
A：まあ、今度のは早いですよ。今度のは安定性がない。
Q：すごく元気ですよね、今度のは。
A：はあぁ、元気ですよ。最初のあれは完全に固まってるんですけど。固まってる、固まってますけど、やっぱり熱は持ってるから、落ちたらすぐに冷えてしもうとっとじゃなか。
Q：なかは相当熱いでしょうね。
A：なかは５００度くらいあるって話聞いとりますんで。
Q：いまは、警戒区域の人たちは地震保険には入れないんですか？
A：入れません。
Q：それは、はっきり言われちゃった？
A：もう絶対入れない。自主避難でも、今度は頼んでも入れてくれんですね。
Q：まあ、保険は契約ですからね、向こうでいやだって言えば。
A：まあ、やっぱり商売ですからね。
Q：この戸別受信機はいつから入ってるんですか？もうずっと前から入ってるんですか？
A：これはですね、防災無線を入れたときに、家は聞こえにくいからといって入れさせたんで。これは、この火山では入ってないんですよ、もとからの防災無線の設備ですから。
Q：それじゃあ、集落が密集してないところはこういうのが入ってるんですか。
A：はい。うちは反響するもんですから、それでつけてもらったんですが。あの、今日テレビで、島原が家庭に一つ無線を入れると。あれはいいんじゃないかなって思って。
Q：いま市役所に行って、その話を聞いて来たんですけど、入れるって言ってました。いま１０００くらいは入れてあるんですけど、そのほかの全家庭に入れると。市長さんが車の中で屋外の拡声の放送を聞いたら、聞こえないということがわかって、それで急きょ入れるって言ってました。５億くらいかかるんじゃないかなあ。一つ４万円くらいだって言ってましたね。
A：そんなにするんですか。
Q：そういう写真は、どれくらいご自分で撮られたんですか？
A：そうですね。やっぱりもう１００本くらい撮ってるですかね。整理する暇もなければ、ただ撮って来て、こぎゃん来たばいねって言って。結局、わたしのは現場写真的な撮り方ですから。
Q：写真屋さんは大忙しだろうな。
A：それと、ビデオ屋さんです。最近ビデオカメラが流行ってますからね。写真屋は超満員で。マスコミの方も来られるし、いまは素人写真が多いもんですからね。
Q：島原ではハザードマップっていうのを作ってますよね。砂防地滑りセンターからね。深江町のほうはどうなんですか？
A：深江町は、その島原のそれに。島原が一番先に受けられたもんですから、それに乗っかって。
Q：ああ、乗っかってやってるんですか。
A：ですから、こっちは先にあれしてるんじゃなくして、島原市と深江と一緒になって乗っかってるよなうもんじゃないかとね。こっちで書いてくれとお願いするわけにもいかん。だから一緒に。それで、この写真だけど、これなんかもう、わたし昨日情けなかったですが、こういう庭とかこの仕事なんかはわたしが全部作ったんですよね。この牛舎も全部わたしが作ったもんですから。この体育館なんかもう廃墟ですね。
Q：この中の鉄骨もグジャグジャになってるな。
A：これがうちの実家ばい。

Q：うーん。大きい火砕流っていうのは、前に小さいっていうか中規模のが出て、それからドカーンって来るんですかね？
A：必ずですね。わたしたちは言うとる、前触れがあるって。一発にドーンと来るということはまずない。
Q：いままでないですね。
A：３回。とにかく前触れが来て、それが間隔が近くなって来たら、ああ来るぞっていうくらいの感じですよね。そして、やっぱり前触れはあるんですよ。今度のは早いんじゃないですか。新しいし、場所が場所ですから。
Q：場所が安定性がないということですか？
A：安定性がないからですね、今度は。
B：ヘルメットの横にくっついてるような感じでしょ。
A：まあ、やっぱり場所的に悪い所です。しかし、歴史がそうなとっとじゃけん、しよんなかって言うて。後ろあたりは結局強いから、向こうに行かないわけですよね。議員さんとは、地獄跡に出てくれたもんじゃけん、困ったもんだって言うてるんです。
Q：どうも長いあいだありがとうございました。

II 部

住民アンケート調査

雲仙岳噴火における住民の対応についての
アンケート調査結果解説

平成３年６月３日、雲仙普賢岳で発生した火砕流は、島原市北上木場地区を直撃し、死者４２名という大惨事になった。また６月７日の「警戒区域」の設定により、１００００人を越える島原市・深江町の住民が不便な避難生活を余儀なくされ、その状態がかつて例がないほど長期間続いている。

この災害では、災害警報と避難にかかわるさまざまな問題が顕在化している。そこで、普賢岳に溶岩ドームが出現した５月２０日から、６月３日の大災害を経て、長期にわたる避難生活にいたるまでの一連の過程における地域住民の心理と行動、とりわけ各種の災害情報に対する対応と避難生活の諸問題をくわしく調査することは、災害研究という学問的意味でも、防災対策の改善という社会的意味でも非常に有意義だと考え、避難住民を対象とするアンケート調査を実施することにした。

主な調査項目は、災害以前の火砕流に対する知識、６月３日の災害時の心理と行動、避難した時期と避難先、避難生活における不便や不満、マスコミに対する評価、情報行動と情報ニーズ、臨時火山情報と火山活動情報の区別、警戒区域への評価、今後行政に望むことなどである。

この調査は、文部省科学研究費・重点領域研究『災害時の避難・予警報システムの向上に関する研究』の「火山噴火班」のケース・スタディとして実施したものであり、実際の調査は、東京大学新聞研究所、文教大学情報学部、駒沢大学文学部のメンバーが担当した。

なお、調査の概要は、次のとおりである。

（１）調査対象地域；長崎県島原市・深江町

（２）調査対象者；上記市町に居住する２０～６９歳の成人男女で、警戒区域の居住者。
調査時点で、避難所・仮設住宅および親戚・知人宅に住んでいる住民
１３００人（島原市８００人：深江町５００人）。

（３）標本抽出法；系統抽出法

（４）調査方法；避難所・仮設住宅の住民は留置法（６００人）、
親戚・知人宅の住人は郵送法（７００人）。

（５）調査期間；平成３年８月５日から１０日までの６日間。ただし、郵送分は８月３１日で締め切った。

（６）回収数および回収率；回収数　９４２票（島原市：６５４、深江町：２８８）
回収率　７２．５％

東京大学新聞研究所　廣井脩・木村拓郎・中村功・松田美佐
文教大学情報学部　吉井博明
北海道大学理学部　岡田弘
駒沢大学文学部　山本康正

調査結果

Ｉ．調査回答者の特徴

１．年齢・性別・職業

○女性がやや多く、２０才台がやや少ない。
○職業では、農林業が４人に１人と多いのが目立つ。

２．居住地域・居住年数・住居形態

○島原市のサンプルが深江町のサンプルの２倍以上ある。
○居住年数は、２０年以上が６割を超え、５年未満は８％と少ない。また、８割以上が、持ち家に住んでいる。

３．家族構成

○同居家族の構成としては、２世代同居（核家族）が４割と最も多く、次に、親子孫の３世代家族が３４％と多い。
○家族の中に、小学生がいるのは３割、７０才以上の人がいる家庭も３割。また、３才以下の子供、心身障害者を抱えている家庭はそれぞれ１６％、７％となっている。

４．近所付き合い

○ふだんの近所付き合いは、かなり密で、「留守を頼んだり、親しく話をする」人が５割と多い。「ときどき立ち話をする程度」が３割となっている。

５．今回の災害による被害

○災害によってより何らかの被害を受けた家庭が６５％と多く、その中でも、作物の収穫ができなかった家が３４％と最も多い。また、田畑が土石流や火砕流で覆われた家も２０％に達している。家が全半壊したのは６％、死傷者を出した家もわずかながらあった。

II．6月3日の火砕流災害以前

1．火砕流に関する認識

5月末からは土石流の危険に加えて、火砕流の頻発による危険が高まってきた。土石流災害と火砕流災害の両方をにらんだ対応が要請されていた。このように状況が変化したにも拘らず、住民の主たる関心は、土石流にあり、火砕流よりも土石流の方が危険と思っていた人（７０％）の方がはるかに多い。

また、この時点で、火砕流という言葉すらよく知らなかった人は５４％もいた。これに対して、火砕流を見て、非常に危険だと思っていた人は、わずか９％に過ぎず、火山学者の警告（マスコミを通じたコメント）が地域住民に的確に伝わっていなかったのは問題である。

多くの人は、毎日、火砕流を見ていて、漠然と自分の住んでいるところまでくるとは思わなかったり、火砕流を単なる土煙と勘違いしていたからである。また、５月２７日に起きた水無川上流部での火砕流による作業員の負傷の持つ意味の重大性を理解できなかった。

逆に、危険と思っていた人は、その理由として、火砕流が日を追って大きくなってきたことや、５月２９日以前にかなりの被害があったことをあげている。注意深く報道に接していた人は、かなりの危険を感じていたのである。

また、６月３日の大火砕流発生直前に中小の火砕流が頻発したが、この時、「大きな火砕流が起き、被害が出るかも知れない」と思った人は４人に１人に過ぎない。大半の人は、被害までイメージできなかったのであり、この点も火山学者等の専門家と一般の人の認識に大きなギャップがあった。

2．火山活動情報と臨時火山情報

火砕流によってけが人が出た５月２６日、雲仙測候所は、火山活動情報第１号を発表している。この火山活動情報は、火山活動により人的被害が出た場合、あるいは人的被害が予想される場合に発表されるもので、いわば「警報」にあたるが、多くの住民はその重要性を感じとることができなかった。火山情報にはもう一つ、臨時火山情報があり、これは火山活動に異常が認められるときに出されるもので、「注意報」にあたるが、むしろ多くの住民は、臨時ニュースという言葉などの印象から、こちらのほうが緊急性が高いと思っていた。

つまり、臨時火山情報と火山活動情報のどちらが噴火の警告として緊急性が高いかたずねたところ、臨時火山情報と答えた人が５３％、一方、火山活動情報という正解は、１７％と非常に少なかったのである。

III．6月3日の大火砕流発生時の対応

1．当時の居場所

6月3日は月曜日であったため、大火砕流発生時に、自宅にいた人は37％と少なく、勤め先（31％）、田畑（8％）、車（9％）などに分散していた。

2．発生直後の受け止め方と対応行動

大火砕流発生を最初に知ったのは、「直接見て」が6割と最も多く、テレビ・ラジオが2割となっている。発生を知った直後、7割以上の人が、「大きな被害が出ているに違いない」と思い、テレビ・ラジオの放送に注意し（57％）、山の様子を注意し（45％）市の広報車、町の同報無線の情報に注意する（36％）など、状況を確認しながら、避難の準備をしたり、戸締りをし（40％）、火の始末やガスの元栓を閉める（31％）と同時に、家族を安全な場所に避難させる（34％）などした。

3．避難とその決め手

その後、島原市と深江町の一部に避難勧告が出されたが、77％が家族全員避難し、避難しなかった人は、16％であった。避難の一番の決め手になったのは、市町からの避難勧告（広報車、同報無線で聞いて＝30％、消防団、職員、警察官から言われて＝29％）であった。実際に火砕流を見て危険と思って避難した人は、24％であった。深江町では、同報無線が整備されていることもあり、これを聞いて避難した人が48％もあり、同報無線の効果が大きいことを物語っている。

4．当日の電話行動

当日には電話もかなり使われていた。7割の人が電話をかけ、その中、2割の人は通じなかった。また、電話を受けた人も6割と多かった。電話の相手は、兄弟、親戚、親・子供など血縁関係の人が圧倒的に多く、友人・知人、仕事関係の人が次に多い。話した内容は、自分や家族の安否（56％）、火砕流の状況（45％）、避難先（36％）、避難の相談（18％）、相手の安否（16％）が多い。

Ⅳ．警戒区域設定と避難生活

１．最初の警戒区域設定についての意見

島原市と深江町では、６月６日から６月２０日にかけて、約１２０００人が住む地域を警戒区域に指定し、立ち入りを禁止したが、この措置については、９０％もの人が「住民の安全を考えれば、やむを得ない」と支持している。「住民の生活への影響を考えると、指定すべきではなかった」という意見の人はわずか５％と少ない。

２．避難先とその変更状況

避難生活に入ったのは、６月３日前後がほとんどであり、調査時点（８月８－１２日）までにほとんど２ヶ月を経過していた。この間人々はどこに避難したのであろうか、また、避難先をどう変えていったのであろうか。

まず最初に避難したところは、親戚の家が４６％、公民館・体育館が４２％、知人の家・借家・その他が１２％で、６日以内という短期避難（３７％）と、４週間以上の長期避難（３３％）が多い。

この内、避難先を変えた人は、８１％で、公民館・体育館に移った人が２９％、借家・アパートに移った人が１４％、親戚の家に移った人が１４％などとなっている。２番目の避難先での滞在日数は、４週間以上が４割と多く、６日以内と短い人は１６％と少ない。

さらに避難先を変えた人は、全体の半数（１度避難先を変えた人の約６割）で、役所が借り上げた旅館や船が最も多く（３１％）、公民館・体育館（２４％）、仮設住宅（１８％）、借家・アパート（１３％）、親戚・知人の家（１１％）などとなっている。

さらに４番目の避難先に移った人は、全体の２４％で、仮設住宅に移った人が多い。あとは、役所が借り上げた旅館などと体育館・公民館を往復する人である。

５番目の避難先に移動した人は、全体の９％と少ないが、仮設住宅に移った人と、役所が借り上げた旅館等に移動する人がほとんどである。

Ｖ．避難生活の影響

１．避難先での不便・不満

避難先での不便や不満についてみると、避難先によって大きな違いがあることが判る。公民館や体育館など、市町の用意した避難場所（経験者６７％）では、不便・不満なしは、わずか３％で、「なんとなく落ち着かない（６５％）」「プライバシー（５９％）」「風呂（４４％）」「人間関係（３８％）」「騒音（３５％）」「洗濯（３４％）」「食事（３４％）」など、多くの問題が指摘されており、平均で５．５項目も指摘されている。また、島原市と深江町の違いもみられ、交通の便や食事・風呂・洗濯などは深江に多く、マスコミの取材が島原で多く指摘されている。

これに対して、県や市町が借り上げた旅館・ホテルでの不便・不満になると、はるかに少なく、経験者（３８％）の評価では、平均で２．６項目と、体育館・公民館の半分以下に減っている。しかし、「洗濯（３６％）」と「情報の入手（２８％）」の２項目は、体育館・避難所より不満が高く、改善の余地がある。

一方、借り上げた船に避難した経験を持つ人は４％と少ないが、不便・不満項目として、平均で２．８項目が指摘され、その中で電話が不便というのが１番多かった。

２．避難生活の心身への影響

避難生活が心身に及ぼす影響については、先に島原市が行った調査と同様に、不眠（５２％）、イライラ（４１％）、肩こり（３９％）、体のだるさ（３９％）、便秘（２８％）、頭痛（２７％）などを訴える人が多い。

３．仕事、世帯収入への影響

災害前に仕事を持っていた人に、現在も仕事を続けているかどうかを尋ねたところ、「災害前と同じように働いている」人は３６％に過ぎず、失業中（１８％）、休職中（２０％）、「休職中ではないがほとんどできない」人（１５％）となっている。特に、農林業に従事していた人では、災害前と同じように働いている人は７％に過ぎない。自営業者の場合も、影響は大きく、災害前と同じように働いている人は４人に１人である。これに対して、勤め人の場合は、２／３が災害前と同じように働いている。

次に、警戒区域の立ち入り規制や避難生活による世帯収入への影響を尋ねたところ、「非常に減った（５割以上）」世帯が４２％と最も多く、特に、農林業では８４％、漁業では６９％と非常に多い。「減った（３～４割）」世帯は、２０％、「少し減った（１～２割）」世帯は、１２％であるが、販売・サービス業従事者の人やパートの主婦に多い。「変わらなかった」世帯は、１９％で、経営管理職、事務職、専門技術職などの給与所得者に多い。「かえって増えた」世帯は、１．５％と少ない。予想されたように、職業によって、所得への影響が大きく異なっている。

４．避難生活の限界

次に、避難生活の限界について尋ねた。ほぼ２ヶ月に及ぶ避難生活によって、心身の疲労、経済的影響の深刻化が言われており、避難生活は限界だ、とも言われているが、当の避難住民はどう考えているのか。「もう限界だと思って」いる人の４０％に対して、「状況によっては、まだ続けられると思って」いる人も３８％と、ほぼ同数となっている。この結果は、避難生活の困難さを考えると限界と思われるが、後に述べるように、火砕流の危険性もはっきり認識しており、避難住民の苦悩とジレンマを表している。

Ⅵ．現在の危険度認識と警戒区域継続への考え方

１．火山活動の危険性の認識

調査時点での普賢岳の活動（危険度）についての認識は、「非常に危険であり、被害を伴うような大火砕流がいつ起きても不思議はない」というものが６割と過半数を占め、「危険といえば危険だが、被害を伴うような大火砕流の心配は少ないと思う」は３５％、「大火砕流の危険はないと思う」は２％と少ない。危険性はかなり高いという認識でほぼ一致しているといえよう。

２．大火砕流の前兆認識

一方、大火砕流の前兆について、「大火砕流の発生直前には、中小の火砕流が頻繁に起きるなど、前兆がある」という意見に賛成の人が、過半数おり、それを間違いと思っている人はわずか４％に過ぎない。特に農林業の人にこのような見方をする人が７割と多い。ほとんど毎日、火砕流を見ている住民からすると、なんとなく、大火砕流が起きる前兆があるように思われるようである。これには、もちろん、住民の希望的観測も含まれていよう。

３．警戒区域延長への意見

警戒区域の延長についての意見を求めたところ、「部分的に解除すべき」という意見が最も多く（５６％）、次に、「このまま継続もやむを得ない」とする意見が多く（４０％）「全面解除」は３％と非常に少ない。これは、多くの住民が火砕流への危険認識をもっているからであろう。

さらに、部分解除を主張する人に、その内容を尋ねたところ、すでに行われている国道２５１号の通行制限の緩和が最も多く、７９％、次に、危険が少ない地区の警戒区域解除（７４％）と警戒区域への立ち入りの時間を限定した解除（６１％）を主張する意見が多く、一部警戒区域の避難勧告地区への移行（３１％）や国道５７号線の交通規制の緩和（１５％）の主張は少ない。これは、避難住民の間に、ある程度の危険度のクラス分けがなされていることを示唆している。

Ⅶ．流言

１．流言の内容

６月３日の大災害の後、島原市内にはさまざまな流言蜚語が流れた。

とくに、「眉山が崩壊する」「また大火砕流が起こる」「警戒区域に空き巣が入っている」という３つの流言は、かなり広範囲に広がったようで、アンケート調査によれば、眉山崩壊のうわさに接した人は６２％、大火砕流再来のうわさは５５％、空き巣出没のうわさにいたっては８３％の圧倒的多数にのぼっていた。

２．流言の情報源

いままでの災害流言の多くと同様に、これらの流言蜚語は、日頃からのコミュニケーション・ネットワークを通じて広がっていた。うわさを聞いたその情報源をたずねたところ、近所の人がもっとも多く（４８％）、以下、親戚・知人（２６％）、職場の人や同業者（２５％）と続いていた。

３．信用度と不安度

また、こうした流言を聞いたときの信用度と不安度も、過去のケースとほとんど同じだった。つまり、多くの人はこうしたうわさに半信半疑であるが（５５％）、一方、不安度はけっして低くなく、とても不安になった人は２３％、不安になった人は２６％で、ほぼ半数が不安だったと答えている。要するに、多くの人は、こうしたうわさを聞いて全面的には信用しないが、万一のことを考えると不安を拭いきれなかったのである。

Ⅶ．６月１２日の情報混乱

１．火山活動情報などの情報源

６月１２日午後、普賢岳の急激な山頂膨張について、雲仙測候所が出した火山活動情報が、報道陣や住民に混乱を引き起こした出来事があったが、当日、こうした情報をほとんどの住民が耳にしており、その情報源としてはテレビ・ラジオが圧倒的に多かった（７１％）。この出来事が起こったのは平日の午後で、視聴率がそれほど高くないことを考えると、テレビ・ラジオがいかに緊張して放送したかがわかる。２番目の情報源は島原市が広報車（２８％）、深江町が同報無線（２４％）と、いずれも公的なメディアだった。

２．住民の対応行動

この緊急情報を聞いてどんな対応行動をしたかをたずねたところ、何もしなかった人は４％ときわめて少なく、多くの住民が何らかの対応をしていた。このことは、当日の住民の緊張を示すものと考えられるが、対応行動の具体的内容をみると、テレビ・ラジオの情報に注意した（８１％）、市・町からの情報に注意した（４１％）といった情報行動がもっとも多く、次いで、家族に注意するようにいった（４９％）、できるだけ外出しないようにした（２３％）など、いざというときにそなえた警戒行動が多くなっていた。

IX．マスコミへの評価と期待

1．マスコミへの評価

アンケート調査から、マスコミへの評価と期待をみると、まず、今回の災害においてマスコミの取材がどうだったかについては、感じが悪かったという回答（非常に感じが悪かった＋やや感じが悪かった）が１８％と５人に１人あり、報道面に対する評価では、実際の状況よりそうとう大げさに報道されているという人が５％、少し大げさに報道されているという人が２６％で、いわゆる誇大報道を批判する声が３割ほどあった。

これらの数字をみると、マスコミに対する住民の評価はそんなに低いとはいえないが、別の質問で、今回の噴火におけるいろいろな機関や組織の活動を評価してもらったところ、地元消防団やボランテイア、あるいは火山学者・測候所などは非常に高く評価されていたが、マスコミは国に次いで最後から２番目にランクされていた。過剰取材や誇大報道への批判はそんなに高くなかったとはいうものの、いろいろな機関や組織の活動に比較すると、相対的評価は低いといわねばならない。

2．住民の情報ニーズとマスコミへの期待

住民の情報ニーズについては、災害の予測はテレビ（とくにＮＨＫテレビ）、行政の対応は新聞（とくに地方紙）という役割分担が認められる。すなわち、「火山活動の見通し」を知るために住民が接触する情報源は、ＮＨＫテレビがもっとも多く（８４％）、次が新聞（地方紙）。「土石流の危険」も同じ順位であり、第一位がＮＨＫテレビ（７５％）、第二位が新聞（地方紙）。一方、「警戒区域の設定や解除」の情報ニーズを満たすのは、ＮＨＫテレビ（５８％）と、新聞（地方紙）（５７％）とが拮抗しており、「仮設住宅や融資等の情報」は順位が逆転して、第一位が新聞（地方紙）（５２％）で、以下、役所などからのお知らせ、ＮＨＫテレビとなっていた。

また、今後マスコミにもっと報道してほしい情報は何かとたずねたところ、災害の見通しや被害の状況、および災害補償や復旧対策が比較的多くなっており、第一位が火山活動の見通し（７３％）で、以下、補償についての国・県などの考え方（６７％）、災害復旧についての国・県などの考え方（６４％）、被害地域（警戒区域）の現状（６０％）などとなっていた。

Ⅹ．各組織・団体の対応評価と行政への要望

１．団体・組織の活動評価

今回の災害に関わった各組織・団体の対応についての評価を尋ねたところ、最も高い評価を得たのは、地元消防団である。住民の生命・財産を守るために、体をはってがんばった消防団に対して、高い評価が与えられたのは当然であろう。次に高い評価を得たのは、やや意外な感じもするが、ボランティアであった。やっていることを知らない人も、多少いるが、「非常によくやった」という評価をする人が４２％もいる。これとほぼ同程度の高い評価を受けたのが、火山学者・測候所である。マスコミを通じて、適切な警告を出し、精一杯の努力をしていることが評価されたものと考えられる。島原市と深江町もかなり高い評価を受けているが、、１１％の人は、もう一歩、または期待はずれと評価している。次に、自衛隊、警察、自治会・町内会が高く評価されているが、２割前後の人は普通という評価であった。長崎県に対する評価は、「（非常に＋まあ）よくやった」の４７％に対して、もう一歩と期待はずれが、併せて１７％あり、第7位であった。マスコミは、普通という評価が最も多く、第８位の評価であった。これに対して、国（政府）への評価は、非常に厳しく、期待はずれが５７％、もう一歩が９％と多いのに対して、よくやったという評価はわずか３％に過ぎない。国は、期待をもたせた割に何もしてくれないと住民は考えているのである。

２．行政に対する要望

行政に対する要望としては、警戒区域設定による被害補償が最も多く（７１％）、次に、砂防対策の充実（５６％）、噴火予知体制の充実（５５％）、市・町・県・国の連携強化（５２％）の３つがあげられている。危険地域住民のための公的住宅の建設（４９％）、情報連絡体制の充実（４５％）、正確な災害予測図の作成（４４％）、災害復旧融資条件の改善（４１％）の４つは、４割以上の人が要望している。火山噴火災害に関する広報の充実（３９％）、避難所や避難道路の整備（３７％）、応急仮設住宅の増設（３４％）、市・町の緊急事態対応体制の強化（３１％）、消防力や救急医療体制の充実（２７％）となっている。

ＸＩ．愛着、転居希望

警戒区域が解除され、自分の家に戻れることになった場合、同じ場所に住むつもりかどうかを尋ねたところ、「今の場所でずっと暮らしたい」という人は６５％と少ない。逆に、「もっと安全な場所に転居したい」は、１４％で、他の火山周辺地域より高くなっている。「どちらとも言えない」も１６％と高い。特に、島原では転居希望、躊躇ともに高くなっている。また、この傾向は若い人ほど高く、自由業や勤め人に強い。これに対して、農林業従事者は、危険の認識は強いものの、土地に縛られていることから、今の場所にこだわっている。転居希望者の移転先としては、市・町内の安全な地区が６割と最も多く、島原半島外をあげた人は２割（全体の３％）と少ない。

このような地元志向の背景には、土地への愛着があるが、２０－３０才台の人は、４０才台以上の人に較べて、愛着が弱くなっている。

コメント

1．警報的情報の伝達について

（1）専門家と地域住民との直接的コニュニケーションの必要性

専門家の危険認識と住民の危険認識とは大きなギャップがあるのが普通である。一般的に、災害による被害が出る前は、住民は楽観的（希望的）見通しを持つ傾向があり、専門家の警告に耳を貸さないことが少なくない。今回も6月3日の被害発生までは、火砕流が頻発し、規模が大きくなってきたにもかかわらず、専門家が出した警告を真剣に受け止めていなかった。マスコミの報道も、5月26日以後は火砕流の危険をしきりに強調する方向に変わっていった。それを注意深くみれば、危険性を正しく理解できたはずであるが、実際には、火砕流の危険を実感できず、むしろ火砕流を知らない人が非常に多かったのである。このことは、正しい理解のためには、専門家や行政が、マスコミを通じて、あるいは説明会などの直接的コミュニケーションによって、危険をより具体的に、かつくりかえしくりかえし強調することが必要だったことを示唆している。

（2）臨時火山情報と火山活動情報

測候所が出す臨時火山情報と火山活動情報は、これだけ頻繁に出され、説明されているにも拘らず、緊急性の程度について逆に認識されている。名称変更も含め、一般住民に判るような修正を検討すべき時期にしているのではないだろうか。

2．災害への長期的対策の必要性

（1）有効な避難者対策の必要性

火山災害には、長期的な避難生活を余儀なくされることが少なくない。今回の災害はその典型であり、長期避難にともなうさまざまな困難が浮き彫りにされている。とくに、集団の避難所生活は、プライバシーの侵害や騒音などの問題があり、避難にともなう心身障害をはじめとしたいわゆる災害症候群が発生しやすい。今回も、そのため旅館や船を借り切った避難者対策を行ない、一定の効果をおさめたが、火山噴火の危険をかかえいったん災害が起こったら長期化するおそれのある地域では、地域防災計画などのなかに、ソフトウエアを中心とした避難者対策をあらかじめ作成しておく必要がある。

（2）安全と生活のジレンマを緩和する対策

住民は、現在、災害の危険を充分理解しているが、一方で、経済的問題や生活上の困難を抱え、安全をとるか、日常生活の回復をとるか、のジレンマに悩んでいる。いつ終息するか判らない中で、このような状態を続けることは、心理的にも大きな問題であろう。

このようなジレンマを緩和する方向としては、

ａ．安全確保のための方策（情報伝達手段の整備等）をとりつつ、警戒区域の部分的解除を行い、日常生活の回復を図る。

ｂ．長期にわたり、警戒区域解除の見通しがないことを前提とし、半永久的移転のための低額賃貸住宅の整備と、代替農地の斡旋等を行う。

の２つが考えられる。地域による違いもあり、この両方の対策の併用が望まれる。とくに、多くの住民が望んでいる警戒区域の部分的解除にあたっては、情報伝達手段の整備や避難計画の充実など防災対策が前提にならねばならない。

いずれにせよ、長くても、１週間程度を想定した避難所生活を期限なしで３ヶ月以上も続けることにはしだいに無理が現われており、住民の要望を聞きながら、長期戦に備えた対策が必要になってきている。

３．流言や情報混乱への対策

今回の災害では、住民のあいだに各種の流言が広がったり、測候所の流した火山活動情報が混乱を引き起こしたりした。大災害の後にはよくあることだが、こうした情報混乱は市民の不安を高め、その心理的荷重をますます大きくする。島原市では、眉山崩壊の流言に対し、パンフレットを各戸に配るなどこれを打ち消したが、流言の発生をできるだけ早くキャッチしこれを打ち消すシステムをあらかじめつくっておくことが重要である。

また、６月１２日には、測候所の情報がきっかけで混乱が発生したが、これは「島原半島全域警戒」という、恐怖をあおる情報が流れたためである。後に関係者が語ったところでは、これは、「噴火すれば風向きによってどこに噴石が降るかわからないから、半島厳戒」という意味だったというが、多くの人は島原半島がすべて被害を受けると受け取ってしまった。緊急時には、誤解の余地がない明快な情報を流すのが大原則であり、今後は、情報内容の十分な検討が望まれる。

４．災害報道のあり方

今回の噴火の初期には、住民のマスコミ批判はかなり厳しかった。これは、取材の方法が適当さを欠いた面があったからである。その後、こうした方法が改められ、また１４０億円にものぼる義捐金の募集にマスコミが大きな役割を果たしたりしたため、最近では状況はかなり変わってきた。また、火砕流によって、報道関係者から多くの犠牲が出たりして、マスコミ報道のあり方についても問題が提起された。

災害報道は、一面では災害地の状況を全国各地に報道するという側面があるが、一方、被災者に対し、防災上、あるいは災後の生活上必要な各種の情報を提供するという側面も大きい。とくに、これほど災害が長期化している状況では、火砕流の動向をおいかけるばかりでなく、被災者がいまどんな困難に直面し、何を求めているのか、防災対策としてももっとも要請されるのは何かなど、地味だが丹念な報道が要求される。大きな犠牲を教訓として、マスコミの災害報道とは何か、災害報道はどうあるべきかをもういちど考えることが望ましい。

雲仙岳噴火における住民の対応についてのアンケート調査

東京大学新聞研究所「災害と情報」研究班

最初に、6月3日の火砕流大災害の前のことをおたずねします。

水無川流域では、5月15日から土石流が発生し、また5月20日には溶岩ドームが現われて、24日からは火砕流が起こるという事態になりました。また、5月26日には火砕流によってけが人が出て、29日には山火事も起こっています。まず、この頃のことをお聞きします。

問1．あなたは、6月3日の大災害の前まで、土石流と火砕流のうちどちらが危険だと思っていましたか。次の中から1つだけ選び、○印をつけてください。

	島　原	深　江	全　体
土石流のほうが危険が大きいと思っていた	73．5	60．4	69．5
火砕流のほうが危険が大きいと思っていた	13．6	18．4	15．1
どちらも同じくらい危険だと思っていた	11．9	20．1	14．4
DK．NA	0．9	1．0	0．9
計	654	288	942

問2．あなたは、6月3日の大災害の前日までの普賢岳の火砕流をみて、どのように感じていましたか。また、どのくらいのことを知っていましたか。次の中から1つだけ選び、○印をつけてください。

	島　原	深　江	全　体
火砕流ということばをよく知らなかった	54．0	53．5	53．8
火砕流という言葉は知っていたが、危険だとはまったく思わなかった	8．3	9．4	8．6
言葉は知っていたが、あまり危険だとは思わなかった	17．1	13．2	15．9
多少は危険だと思っていた	12．5	12．2	12．4
とても危険だと思っていた	7．6	10．8	8．6
その他	0．3	1．0	0．5
計	654	288	942

その他

○この頃までは火砕流の報道はあまりなかった（島原市・男・30代）
○火災による災害が発生するのではと思った（島原市・男・20代）
○火砕流がくると思っていなかった（島原市・女・30代）
○自宅まではとどかないと思っていた（島原市・男・50代）
○火砕流という言葉さえ知らなかった（島原市・男・30代）
○火砕流は見ていたが気にしていなかった（島原市・男・50代）
○土石流よりも火砕流が危険と思っていた（深江町・男・50代）
○まったく知らなかった（深江町・女・30代）

問３．（問２で、２あるいは３と答えた人だけお答えください）あなたが危険だとは思わなかった理由を次のなかからいくつでも選び、○印をつけてください。

	島　原	深　江	全　体
実際に目撃したが、単なる土煙だと思っていたから	26.5	26.2	26.4
実際に目撃したが、自分の住んでいるところまで来るとは思わなかったから	66.3	60.0	64.5
市役所、町役場や警察、消防があまり危険と言っていなかったから	19.9	15.4	18.6
新聞やテレビがあまり危険と言っていなかったから	25.9	27.7	26.4
火山学者や測候所があまり危険と言っていなかったから	18.1	16.9	17.7
マスコミや住民などで危険地域に入る人が多かったから	28.3	12.3	23.8
６月３日までは、あまり大きな被害が起こらなかったから	62.7	52.3	59.7
なんとなく	4.2		3.0
DK．NA		1.5	0.4
計	166	65	231

問４．（問２で、４あるいは５と答えた人だけお答えください）あなたが危険だと思った理由を次のなかからいくつでも選び、○印をつけてください。

	島　原	深　江	全　体
火砕流が日を追って大きくなってきたから	59.1	65.2	61.1
市役所、町役場や警察、消防が危険と言っていたから	7.6	10.6	8.6
新聞やテレビで危険と言っていたから	25.0	24.2	24.7
火山学者や測候所が危険と言っていたから	26.5	19.7	24.2
５月２６日や２９日に、かなり被害があったから	46.2	53.0	48.5
その他	4.5	7.6	5.6
DK．NA	3.0	1.5	2.5
計	132	66	198

その他

○上木場の谷が埋まってしまったから（島原市・男・４０代）
○自宅からかなりの黒煙が見え、かなりの降灰があったから（島原市・男・３０代）
○家の窓からまっすぐに見えていた（島原市・男・２０代）
○下ってくるスピードの早さに驚いた（島原市・男・４０代）
○自宅から見えていたから（島原市・女・４０代）
○６月３日当日火砕流の現場近くにいた（島原市・男・３０代）
○自宅から見えた火砕流の煙がとてもこわかった（島原市・女・４０代）
○わたしが実際に体験した（深江町・男・３０代）
○２００年前の噴火について新聞で知りました（深江町・女・３０代）
○火砕流が日に日に大きくなり、上木場まで達するのは時間の問題だと思った（深江町・男・３０代）
○火山自体は小さいが爆発的な噴火があるのではないかと思っていたから（深江町・女・３０代）

問５．６月３日の大火砕流が起きる１時間ほど前から、中小の火砕流が続けざまに起こり、危険を感じた人もいたようですが、あなたは、この時、危険を感じましたか。次の中から１つだけ選び、○印をつけてください。

	島　原	深　江	全　体
大きな火砕流が起き、被害が出るかもしれないと思った	23．1	25．7	23．9
大きな火砕流が起きるかもしれないと思ったが、被害が出るとは思わなかった	21．3	29．9	23．9
大きな火砕流が起きるとは思わなかった	33．3	33．0	33．2
中小の火砕流が続けざまに起きていることを知らなかった	19．4	8．0	15．9
その他	1．5	1．0	1．4
DK．NA	1．4	2．4	1．7
計	654	288	942

その他

○諫早にいた（島原市・女・５０代）
○大噴火が起こるかもしれないと思った（島原市・男・６０代）
○引っ越しの手伝いで家にいなかった（島原市・女・４０代）
○遠方に行っていて火砕流が起きたことを知らなかった（島原市・女・４０代）
○土石流の危険を放送するだけで火砕流のことは知らされていなかった（島原市・女・４０代）
○事前に１０人くらいの人が焼けると思った（島原市・男・５０代）
○会社で仕事をしていたのでわからない（島原市・女・３０代）
○６月３日の午前中にいつも止まるところよりも少しずつ流れが長くなっているのをみていたから、今日は不気味な予感が．．．．と思っていた（島原市・女・３０代）
○寝ていたので気づきませんでした（島原市・女・２０代）
○記憶にない（島原市・女・６０代）
○全く危険を感じなかった（島原市・男・５０代）
○火砕流という言葉をよく知らなかったため、危険だとは思わなかった（深江町・女・４０代）
○仕事で地方にいたため知らなかった（深江町・男・３０代）
○そのとき深江町にいなかったので見ていない（深江町・男・３０代）
○島原市内に仕事のため、全然わからなかった（深江町・女・４０代）

問６．大火砕流が起こったのは、３日午後4時頃のことですが、あなたはこの火砕流が起こったときどこにいましたか。次の中から１つだけ選び、○印をつけてください。

	島　原	深　江	全　体
自宅	35．3	39．6	36．6
勤め先	33．5	24．7	30．8
避難所	4．4	3．8	4．2
畑、田で働いていた	3．7	17．4	7．9
車に乗っていた	9．0	8．3	8．8
買物等でお店にいた	2．1	0．3	1．6
島原市、深江町の外に出張中	2．8	2．4	2．7
その他	8．0	2．4	6．3
DK．NA	1．2	1．0	1．2
計	654	288	942

その他
○市内（島原市・女・６０歳以上）
○バイクに乗っていた（島原市・男・３０代）
○市内北部にある実家に避難していた（島原市・女・３０代）
○名古屋（島原市・男・５０代）
○入院中（島原市・女・６０歳以上）
○病院（深江町）（島原市・男・４０代）
○市会議員の当選祝いに行ってました（島原市・男・６０歳以上）
○島原観光ホテル（島原市・男・４０代）
○主人の両親を病院に連れていっていて、その後、また別の病院にいっていたのでニュースも見ませんでした（島原市・女・３０代）
○子供のスイミングクラブ（島原市・女・３０代）
○仕事の配達中で、中木場にいた（島原市・男・４０代）
○深江町の妹の家に避難していた（島原市・女・６０代）
○島原市役所（島原市・男・６０代）
○娘宅に避難（島原市・男・６０代）
○選挙のため、近所にいっていた（島原市・女・３０代）
○市内の病院みまいの帰宅途中（島原市・女・３０代）
○仁田に避難（島原市・女・３０代）
○友人の家（島原市・男・３０代）
○友人宅（島原市・男・５０代）
○仕事の件で、梅園団地にいた（島原市・女・４０代）
○近所（島原市・女・４０代）
○親戚宅（島原市・女・３０代）
○近所の手伝い（島原市・女・３０代）
○タクシーで木の元にいた（島原市・男・４０代）
○保育園（島原市・女・２０代）
○友人のいえ（島原市・男・５０代）
○病院（島原市・女・３０代）
○家の外にいた（島原市・女・５０代）
○出張修理（島原市・男・５０代）
○病院、入院（島原市・女・３０代）
○友人宅（島原市・男・５０代）
○有家の実家（島原市・女・２０代）
○市議当選祝い（島原市・男・４０代）
○有明町（島原市・男・３０代）
○現場から２キロくらいはなれたところ（島原市・男・３０代）
○祝いの場所（島原市・女・４０代）
○深江町大野木場（上木場地区と同じ近いところ）（島原市・男・３０代）
○他の家（島原市・男・４０代）
○選挙事務所（町内）（島原市・女・３０代）
○病院（島原市・女・３０代）
○友人宅（島原市・女・３０代）
○親戚宅（島原市・男・６０代）
○市内の工事現場（島原市・男・４０代）
○深江町の赤松谷近くにいました（島原市・男・３０代）
○病院にいた（外来）（島原市・女・３０代）
○水無川５７号線の上の橋にいました（島原市・男・６０歳以上）
○（帰宅中）その前の火砕流で上木場の自宅に向かっていた（島原市・男・４０代）
○多良見町（島原市・男・３０代）
○学校（島原市・男・２０代）
○知人の引越しの手伝い（島原市・女・４０代）
○消防の詰署（島原市・男・３０代）
○県立温泉病院内（島原市・女・６０代）
○自営（店）（深江町・女・５０代）
○ハウスの中で働いていた（深江町・女・３０代）

○札の元（水無川）からかえる途中。２０分後（深江町・女・４０代 ）
○父の入院先の病院（深江町・男・４０代）
○自宅の近くにいた（深江町・男・３０代）
○水無川で災害工事中だった（深江町・男・４０代）
○布津町の知人宅（深江町・女・２０代）
○有家町（深江町・男・３０代）
○大野木場小学校の前（深江町・女・４０代）
○牛舎で働いていた（深江町・女・３０代）

問７．この大火砕流の発生を、あなたは最初にどこから知りましたか。次の中から１つだけ選び、○印をつけてください。

	島　原	深　江	全　体
直接、火砕流を見て	５４．７	６９．１	５９．１
テレビやラジオの放送から	２１．７	１０．４	１８．３
市・町や警察、消防の広報車から	７．２	６．９	７．１
市役所、町役場の職員や警察官、消防団からじかに聞いた	２．０	２．１	２．０
報道関係者から直接聞いた	０．２		０．１
家族の知らせで	５．７	６．３	５．８
親戚や知人の知らせで	４．６	２．８	４．０
その他	３．１	１．０	２．４
ＤＫ．ＮＡ	０．９	１．４	１．１
計	６５４	２８８	９４２

その他
○車で避難所に帰る途中、黒い雨が降って救急車のサイレンが異常に鳴り響いていたから（島原市・男・３０代）
○警戒サイレンがなったから（島原市・女・４０代）
○署の方に当日勤務していて、直接第一報を監視中の署員の無線で知り、大変なことが起こった事を察知した。家族がどうしているかと気がかりながらも自分の仕事を忠実に遂行しなければならないと思った（島原市・男・３０代）
○空が真っ黒くなってきたので（島原市・女・５０代）
○空の状態が普通ではないと思い、自宅に電話して聞いた（島原市・女・３０代）
○職場の上司より（島原市・男・３０代）
○病院の看護婦さんから（島原市・女・３０代）
○空が真っ暗になって火山灰がひどく降ったため（島原市・女・３０代）
○勤め先の上司（島原市・女・４０代）
○直接火砕流を浴びた人を見た（島原市・女・４０代）
○会社の人から（島原市・女・３０代）
○会社からの連絡（島原市・男・３０代）
○車のフロントガラスに泥水がたくさん降ってきて自動車が走れなかった（島原市・男・６０代）
○周りが夜中のように真っ暗になって、異臭がしたからラジオを付けた（島原市・女・４０代）
○勤務先でみんな避難していたから（島原市・男・４０代）
○相互重機の作業員が車で下ってきて、ここにいたなら危ない、次はここまでくるぞ、上では人がばたばた真っ黒になって倒れている、ここから逃げろといってきた（島原市・女・４０代）
○空が真っ黒になったとき（島原市・女・３０代）
○市内上空が暗くなりました（島原市・男・４０代）
○帰宅中（島原市・男・４０代）
○黒い煙を見て知った（島原市・女・６０代）
○空に真っ黒な噴煙が立ちこめ、何か焦げたような強い臭いがしてきた（島原市・女・４０代）
○社員の出先からの電話（島原市・男・３０代）

○空を見る（島原市・男・３０代）
○勤め先にて、あたりが暗くなり消防車などが通るようになったから（島原市・女・３０代）
○多量の降灰で知った（島原市・女・５０代）
○家の上空が暗くなり、激しい降灰があったので（島原市・女・５０代）
○火山灰が自宅に２センチくらい降り積もって真っ暗になった（島原市・女・５０代）
○ドーンという音で（島原市・男・３０代）
○ 配達の途中で門内町でみた（島原市・男・４０代）
○被害者が勤務先に多数一度に搬送された（島原市・女・４０代）
○スイミングクラブへの連絡で（島原市・女・３０代）
○防災無線（深江町・女・３０代）
○職場で暗くなった空を見て（深江町・女・４０代）
○仕事中で知らなかった（深江町・女・２０代）
○救急車や緊急車が早いスピードで走っていったため（深江町・女・２０代）
○職場から空を見ていたら、真っ暗でただ事ではないと思った（深江町・女・３０代）
○仕事中だったので上司から聞いた（深江町・女・４０代）
○大きな被害がでてしまったと思った（深江町・女・４０代）

問８．あなたは、この大火砕流の発生を知った直後、どう思いましたか。次の中から１つだけ選び、○印をつけてください。

	島　原	深　江	全　体
これは大変だ、大きな被害が出ているに違いない	７１．４	７４．３	７２．３
多少の被害が出ているかもしれない	１４．８	１５．３	１５．０
すごい煙だが、被害はたいしたことはないだろう	１０．１	９．７	１０．０
その他	１．５	０．３	１．２
DK，NA	２．１	０．３	１．６
計	６５４	２８８	９４２

その他
○被害はわからないが、黒い灰が雨のように降ってきたので、大変なことになった（島原市・男・３０代）
○子供たちや家畜の事（島原市・女・３０代）
○家族の安否（島原市・女・３０代）
○これは大変だ。自分も死ぬかもしれない。急いで車で逃げよう（島原市・男・２０代）
○全員逃げたかなと思った（島原市・男・５０代）
○被害がでているとは知らなかった（島原市・男・５０代）
○車で逃げるのがやっとだった（島原市・女・４０代）
○すぐに避難勧告がでるだろう（島原市・女・４０代）
○無事に帰れるだろうか（島原市・男・３０代）
○直接被害にあった人が救急車で運ばれて行くところを見た。そして自分も車のパニックに生きた心地がしなかった。これは大変なことだと、家族のことが頭に浮かんだ（島原市・女・４０代）

問9．あなたは、この大火砕流が発生した直後、どのようなことをしましたか。次のなかからいくつでも選び、○印をつけてください。

	島　原	深　江	全　体
テレビやラジオの放送に注意した	59．2	50．7	56．6
市の広報車、町の同報無線からの情報に注意した	31．8	45．8	36．1
山のようすを注意して見た	41．0	54．5	45．1
家族や近所の人とどうすればよいか、話し合った	19．3	19．1	19．2
火の始末やガスの元栓を閉めたりした	28．6	35．8	30．8
避難の準備をしたり、戸締りをした	40．1	38．9	39．7
市役所、町役場、警察、消防の人に問い合わせをした	2．1	1．0	1．8
自宅の被害を調べた	4．9	1．0	3．7
自宅に帰った	21．3	20．8	21．1
外に出ている家族を迎えに行った	10．9	13．9	11．8
家族を安全な場所に避難させた	36．9	27．8	34．1
自分が安全な場所に避難した	14．2	14．9	14．4
近所の困っている人の手助けをした	4．7	6．3	5．2
その他	5．4	3．1	4．7
DK．NA	1．5		1．1
計	654	288	942

問10．大火砕流が起こった後、島原市と深江町の一部に避難勧告が出されました。お宅では、この日のうちにどこかに避難しましたか。次の中から1つだけ選び、○印をつけてください。

	島　原	深　江	全　体
家族全員が避難した	75．7	78．8	76．6
家族の一部が避難した	5．7	6．9	6．1
だれも避難しなかった	16．4	14．2	15．7
DK．NA	2．3		1．6
計	654	288	942

問１１．（問１０で、１あるいは２と答えた人だけお答えください）お宅で避難しようと決めたとき、その一番の決め手になったのは次のどの理由ですか。次の中から１つだけ選び、○印をつけてください。

	島　原	深　江	全　体
市の広報車、町の同報無線から避難勧告が出たことを聞いたから	２２．０	４８．２	３０．３
市・町の職員、警察官、消防団などから避難するよう言われたから	２９．９	２６．７	２８．９
家族や近所の人と相談して決めた	５．６	１．６	４．４
テレビやラジオの放送を聞いて危険と思ったから	５．６	０．８	４．１
多くの人が避難しているのを見たから	３．９	０．８	３．０
実際に火砕流を見て危険と思ったから	２７．３	１７．８	２４．３
その他	３．２	１．６	２．７
DK．NA	２．４	２．４	２．４
計	５３２	２４７	７７９

問１２．あなたは、大火砕流が起こった後、その日のうちに、どこかに電話をかけましたか。次の中から１つだけ選び、○印をつけてください。

	島　原	深　江	全　体
電話をかけて、すべて相手に通じた	１２．１	１８．８	１４．１
電話をかけたが、一部しか通じなかった	３９．０	３４．７	３７．７
電話をかけたが、一つも通じなかった	２２．０	１４．２	１９．６
電話をかけなかった	２４．５	２７．８	２５．５
DK．NA	２．４	４．５	３．１
計	６５４	２８８	９４２

問１３．では、６月３日の大火砕流が起こってからその日のうちに、どこかから電話がかかってきましたか。次の中から１つだけ選び、○印をつけてください。

	島　原	深　江	全　体
電話がかかってきた	６３．６	５８．３	６２．０
かかってこなかった	３０．０	３６．１	３１．８
DK．NA	６．４	５．６	６．２
計	６５４	２８８	９４２

問１４．（その時電話をかけたか、受けたかした人だけお答えください）その電話の相手はだれでしたか。次の中からいくつでも選び、○印をつけてください。

A．電話をかけた人

	島　原	深　江	全　体
親	21.3	18.8	20.5
子ども	26.9	20.8	25.1
祖父母	3.1	3.5	3.2
孫	0.2	0.3	0.2
夫や妻	9.8	7.3	9.0
兄弟姉妹	44.3	45.1	44.6
その他の親族	23.4	24.7	23.8
友人・知人	24.0	18.4	22.3
近所の人	4.0	3.1	3.7
仕事関係の人	9.6	13.2	10.7
市役所・町役場・警察・消防	1.5	1.7	1.6
テレビ局・新聞社	0.6	0	0.4
その他	0.6	0.7	0.6
DK．NA	20.8	24.3	21.9
計	654	288	942

B．電話を受けた人

	島　原	深　江
親	21.7	16.3
子ども	33.7	24.5
祖父母	1.2	4.1
孫		
夫や妻	6.0	2.0
兄弟姉妹	56.6	69.4
その他の親族	28.9	34.7
友人・知人	28.9	20.4
近所の人	1.2	
仕事関係の人	13.3	2.0
市役所・町役場・警察・消防	1.2	
テレビ局・新聞社		
その他		
計	83	49

問１５．（その時電話をかけたか、受けたかした人だけお答えください）その電話の相手の中には、ふだんあまり電話のやりとりのない方もいましたか。

Ａ．電話をかけた人

	島　原	深　江
ふだん電話のやりとりのない人もいた	６．６	１０．１
ふだん電話のやりとりのない人はいなかった	４４．５	３９．１
ＤＫ．ＮＡ	４８．９	５０．７
計	１３７	６９

Ｂ．電話を受けた人

	島　原	深　江
ふだん電話のやりとりのない人もいた	２７．７	１８．４
ふだん電話のやりとりのない人はいなかった	６５．１	６９．４
ＤＫ．ＮＡ	７．２	１２．２
計	８３	４９

問１６．（その時電話をかけたか、受けたかした人だけお答えください）その電話では、おもにどんなことを話しましたか。次の中からいくつでも選び、○印をつけてください。

Ａ．電話をかけた人

	島　原	深　江
自分や家族の安否を知らせた	３８．７	３４．８
相手の安否をたずねた	１１．７	１０．１
自分の家や自動車の被害状況を知らせた	４．４	１．４
相手の家や自動車の被害状況をたずねた	２．２	
火砕流の状況について知らせた	２０．４	２７．５
避難の相談をした	１２．４	１４．５
自分や家族の避難先を知らせた	３６．５	３７．７
先方の避難先を知らせてきた	４．４	４．３
１１０番や１１９番への緊急通報		１．４
見舞い	２．９	
その他	１．５	
計	１３７	６９

その他
○タクシーの依頼（島原市・女・３０代）
○妻に、家族が家の内外にいないかを確認した（島原市・男・３０代）
○かからなかった（島原市・男・２０代）
○かけたが通じなかった（島原市・女・３０代）
○心配しないようにと告げた（島原市・女・５０代）

○子供の迎え（深江町・男・４０代）

Ｂ．電話を受けた人

	島　原	深　江
自分や家族の安否を知らせた	69.9	69.4
相手の安否をたずねた	9.6	16.3
自分の家や自動車の被害状況を知らせた	14.5	16.3
相手の家や自動車の被害状況をたずねた	2.4	6.1
火砕流の状況について知らせた	56.6	65.3
避難の相談をした	22.9	10.2
自分や家族の避難先を知らせた	28.9	30.6
先方の避難先を知らせてきた	4.8	2.0
１１０番や１１９番への緊急通報		
見舞い	12.0	10.2
その他	3.6	
計	83	49

<u>その他</u>
○病院から迎えに来てくれとの電話（島原市・女・３０代）
○身内、子供達からすぐ避難するように（島原市・女・６０代）
○友人の死亡（行方不明）の知らせ（島原市・男・２０代）
○避難して来るように言われた（島原市・女・５０代）
○子どもから迎えに来てくれとの電話（島原市・女・３０代）

さて、次に、６月３日以後のことをおたずねします。

問１７．あなたとあなたのご家族が自宅を離れて避難生活（親戚等に避難した場合も含みます）に入ったのは、いつからですか。次のなかから１つだけ選び、○印をつけてください。

	島　原	深　江	全　体
６月３日の大火砕流の前からいままで、ずっと避難生活をしている	26.9	13.2	22.7
６月３日に避難したときからいままで、ずっと避難生活をしている	41.6	56.3	46.1
６月４日～７日の最初の警戒区域設定の前までのあいだに避難して、それからずっと避難生活をしている	12.2	6.6	10.5
６月７日の警戒区域設定のときからずっと避難生活をしている	8.4	4.9	7.3
６月８日の大火砕流発生後になされた警戒区域の追加のときからずっと避難生活をしている	6.4	7.3	6.7
６月９日～１１日に避難生活に入った	1.1	10.4	3.9
６月１２日以降に避難生活に入った	0.5		0.3
その他	0.9	0.7	0.8
DK. NA	2.0	0.7	1.6
計	654	288	942

<u>その他</u>
○6月14日から今日まで避難生活（島原市・女・30代）
○6月7日に転居（市内）（島原市・女・20代）
○6月1日より土石流の時から避難のくり返し（島原市・男・40代）
○6月3日以前（島原市・男・40代）
○6月3日前に時々避難していた（島原市・男・30代）
○父母は6月3日の火砕流の前から今まで（島原市・男・40代）
○5月15日の土石流が発生した日から避難生活（島原市・女・20代）
○5月15日の土石流の時から（島原市・女・50代）
○6月8日の大火砕流発生前（島原市・男・30代）
○6月8日19時より避難警戒区域になり避難生活をした（島原市・男・60代）
○6月3日以前から入院していた（島原市・女・60歳以上）
○6月7日に避難したが、自主避難なので1カ月ぐらいして家にかえった（深江町・女・50代）
○5月15日の初めての土石流から雨の度に避難、解除をくりかえし、6月3日から今までずっと避難生活（深江町・男・40代）

6月12日の未明から、島原市には噴石が降りました。また、12日の午後には、「島原半島全域に厳重な警戒を要する」という測候所の発表があり、その後、情報が一時混乱しました。次に、このことについてお聞きします。

問18．あなたご自身は、このとき、どこから情報を聞きましたか。次のなかからいくつでも選び、○印をつけてください。

	島　原	深　江	全　体
市、町や消防、警察の広報車から	28.1	19.4	25.5
町の同報無線から	3.7	24.3	10.0
市、町の職員や消防団員、警察官から直接	12.8	12.5	12.7
家族から	10.6	7.3	9.6
近所の人から	10.7	11.5	10.9
親戚や知人から	15.0	11.5	13.9
テレビやラジオの情報から	72.9	67.0	71.1
その他	4.1	2.8	3.7
そんな情報は聞かなかった	2.4	2.8	2.5
DK.NA	1.8	3.5	2.3
計	654	288	942

<u>その他</u>
○自分で知っていた（島原市・男・60代）
○避難所にて（島原市・女・30代）
○報道関係の無線を受信（島原市・女・30代）
○会社で（島原市・男・20代）
○職場で（島原市・女・30代）
○職場（島原市・女・30代）
○職場の上司から（島原市・女・30代）
○転居先にて噴石の被害にあう（島原市・女・20代）
○災対本部からのファクシミリ（島原市・男・40代）
○新聞（島原市・男・40代）
○新聞（島原市・女・40代）
○自分で（島原市・男・50代）

問２１．ところで、あなたは、いま避難しているところに来るまでに、どのくらい避難先を変えましたか。たとえば、親戚の家→第一小学校→仮設住宅というように、お移りになった順に、場所とだいたいの滞在日数を下の回答覧から番号を選んで記入してください。

Ａ．１番目

○避難先

	島　原	深　江	全　体
親戚の家	５０．９	３５．４	４６．０
知人の家	３．３	３．５	３．４
公民館、市・町や学校の体育館	３６．８	５４．６	４２．４
新たに借りた家やアパート	５．２	２．８	４．５
役所が借り上げた船			
役所が借り上げた旅館	０．３	０．４	０．４
仮設住宅	０．３	０．４	０．４
その他	３．１	２．８	３．０
計	６１１	２８２	８９３

○滞在日数

	島　原	深　江	全　体
６日以内	３６．５	３８．３	３７．１
７～１３日未満	１４．６	１４．２	１４．４
１４～２０日未満	８．２	１７．７	１１．２
２１～２７日未満	４．６	３．９	４．２
２８日以上	３６．２	２５．９	３２．９
計	６１１	２８２	８９３

Ｂ．２番目

○避難先

	島　原	深　江	全　体
親戚の家	１８．４	１４．４	１６．１
知人の家	６．７	２．１	５．１
公民館、市・町や学校の体育館	３２．１	４２．８	３５．７
新たに借りた家やアパート	２０．１	１１．１	１７．１
役所が借り上げた船	２．３	０．４	１．７
役所が借り上げた旅館	９．６	２４．３	１４．６
仮設住宅	６．３	１．６	４．７
その他	４．４	４．１	４．２
計	４７７	２４３	７２０

○滞在日数

	島　原	深　江	全　体
6日以内	16．8	15．6	16．4
7～13日未満	17．2	23．5	19．3
14～20日未満	10．9	13．6	11．8
21～27日未満	8．2	9．5	8．6
28日以上	47．0	37．9	43．9
計	477	243	720

C．3番目

○避難先

	島　原	深　江	全　体
親戚の家	9．7	7．0	8．7
知人の家	1．4	2．5	1．8
公民館、市・町や学校の体育館	22．8	27．4	24．4
新たに借りた家やアパート	15．6	8．9	13．2
役所が借り上げた船	5．5	0．6	3．8
役所が借り上げた旅館	20．4	38．9	26．9
仮設住宅	20．1	13．4	17．7
その他	4．5	1．3	3．4
計	289	157	446

滞在日数

	島　原	深　江	全　体
6日以内	15．2	12．1	14．1
7～13日未満	22．8	25．5	23．8
14～20日未満	12．8	10．8	12．1
21～27日未満	8．3	12．1	9．6
28日以上	40．8	39．5	40．4
計	289	159	446

D．4番目

○避難先

	島　原	深　江	全　体
親戚の家	8．2	3．0	6．6
知人の家	1．4		0．9
公民館、市・町や学校の体育館	24．0	25．4	24．4
新たに借りた家やアパート	15．1	4．5	11．7
役所が借り上げた船	2．7		1．9
役所が借り上げた旅館	16．4	46．3	25．8
仮設住宅	29．5	19．4	26．3
その他	2．7	1．5	2．3
計	146	67	213

○滞在日数

	島　原	深　江	全　体
6日以内	7．5	4．5	6．6
7～13日未満	23．3	29．9	25．4
14～20日未満	13．0	6．0	10．8
21～27日未満	11．0	11．9	11．3
28日以上	45．2	47．8	46．0
計	146	65	213

E．5番目

○避難先

	島　原	深　江	全　体
親戚の家	3．2		2．4
知人の家		4．5	1．2
公民館、市・町や学校の体育館	8．1	27．3	13．1
新たに借りた家やアパート	4．8	9．1	6．0
役所が借り上げた船	1．6		1．2
役所が借り上げた旅館	30．6	27．3	29．8
仮設住宅	51．6	31．8	46．4
その他			
計	62	22	84

○滞在日数

	島　原	深　江	全　体
６日以内	１１．３	９．１	１０．７
７～１３日未満	３３．９	３１．８	３３．３
１４～２０日未満	１１．３	４．５	９．５
２１～２７日未満	１．６	２２．７	７．１
２８日以上	４１．９	３１．８	３９．３
計	６２	２２	８４

その他
○雇用促進住宅（島原市・男・６０代）
○市内のビジネスホテル（島原市・女・３０代）
○県が借り上げた住宅（島原市・男・４０代）
○自分の持ち家（島原市・男・５０代）
○市の斡旋による公営住宅（５月末決定ＮＴＴ社宅）（島原市・女・４０代）
○貸家（島原市・男・６０歳以上）
○島原市の斡旋で、県営住宅（諫早市）（島原市・女・５０代）
○役所がお世話してくれたアパート（島原市・女・３０代）
○役所が借りた雇用促進住宅（島原市・女・４０代）
○市外県住宅（島原市・男・４０代）
○会社の寮（島原市・女・６０歳以上）
○勤務先。貸アパート（島原市・男・２０代）
○市斡旋の市営アパート（島原市・女・３０代）
○役所が借り上げた県営アパート（島原市・女・４０代）
○役所が借り上げたアパート（島原市・男・４０代）
○会社（島原市・男・３０代）
○役所が斡旋した公団住宅（島原市・女・５０代）
○大学生の子供のアパート（島原市・女・５０代）
○大学病院（看護）（島原市・女・３０代）
○県公舎（島原市・男・４０代）
○８月末頃予定。郵政局仮設住宅（家賃有）（島原市・女・４０代）
○役所が短期間借り上げた団地（島原市・男・３０代）
○ユートピア（島原市・男・５０代）
○娘が借りているアパート（島原市・女・５０代）
○店舗の２Ｆ（島原市・女・３０代）
○ａ：実家（親元）。ｂ：妻の実家（親元）（島原市・男・３０代）
○勤め先の倉庫（島原市・女・３０代）
○市が借りたアパート（島原市・男・４０代）
○長男の勤務先の社宅（別居）（島原市・女・６０代）
○勤務先（島原市・男・５０代）
○娘の所に避難しています（名古屋）（島原市・女・６０代）
○役所を介して県の住宅（島原市・男・４０代）
○県外市営住宅（島原市・男・６０歳以上）
○自分の家（島原市・男・６０歳以上）
○市長の斡旋で公営住宅（島原市・女・３０代）
○私の実家（島原市・女・３０代）
○市役所が許可した県営住宅（島原市・女・４０代）
○自宅。たまたま家を２軒持って貸していたので、あわてて転居してもらった（島原市・女・４０代）
○持ち家（島原市・男・４０代）
○会社の社宅（島原市・女・３０代）
○会社の社宅（島原市・女・４０代）
○主人が小浜のホテルに勤めていたので、６月３日、中３の子供を２３時３０分頃、深江の避難場所より連れ、

そのままホテルに。主人は福岡に出張だったが、自宅に帰れないので、交通止めが解除されるのを待って、夜中に小浜のホテルにつく（深江町・女・４０代）
○事業所（深江町・女・３０代）
○子供の仕事先の社宅（深江町・女・５０代）
○勤務地の事務所（深江町・男・３０代）
○実家（深江町・女・３０代）
○他県にある親戚の家（深江町・女・２０代）
○実家（深江町・女・３０代）
○消防団。他町の施設（深江町・男・３０代）

問２２．あなたが、いままで避難しているあいだ、生活上の不便や不満を感じていますか。もし感じているとすれば、それはどんな不便や不満ですか。（１）市や町の用意した避難場所、（２）旅館・ホテル、（３）船の３つの中であなたが経験した（している）場所のすべてについてご記入ください。

（１）市や町の用意した避難所で不便や不満を感じていること（いくつでも）。

	島　原	深　江	全　体
トイレ	１７．２	７．０	１３．８
食事	２８．０	４５．１	３３．８
風呂	３８．３	５５．９	４４．２
洗濯	２９．２	４３．７	３４．１
寝具等	２３．９	３１．９	２６．６
冷房・換気	２１．１	２０．２	２０．８
照明	７．７	６．６	７．３
電話	６．９	８．９	７．６
情報の入手	１５．８	１６．４	１６．０
交通の便	１２．４	４１．８	２２．３
衛生	１７．７	１６．４	１７．３
騒音	３５．９	３４．３	３５．３
一人分の広さ	３１．３	２３．９	２８．８
人間関係	３５．９	４１．３	３７．３
プライバシー	５９．３	５７．７	５８．８
子供の学校	３２．１	３０．５	３１．５
マスコミの取材	２５．８	８．５	２０．０
することがないこと	２０．８	２８．２	２３．３
なんとなく落ち着かないこと	６４．８	６４．８	６４．８
その他	１．０	０．９	１．０
不便や不満はない	３．６	０．５	２．５
計	４１８	２１３	６３１

（２）旅館等で不便や不満を感じていること（いくつでも）。

	島　原	深　江	全　体
トイレ	2.1	1.6	1.9
食事	25.8	11.0	20.6
風呂	9.0	8.7	8.9
洗濯	42.1	24.4	35.8
寝具等	3.0	6.3	4.2
冷房・換気	15.9	18.1	16.7
照明	2.6	0.8	1.9
電話	13.3	11.0	12.5
情報の入手	29.6	24.4	27.8
交通の便	13.3	40.9	23.1
衛生	3.9	4.7	4.2
騒音	3.0	10.2	5.6
一人分の広さ	3.0	4.7	3.6
人間関係	3.9	17.3	8.6
プライバシー	3.0	15.0	7.2
子供の学校	21.0	26.0	22.8
マスコミの取材	3.0	1.6	2.5
することがないこと	16.3	29.1	20.8
なんとなく落ち着かないこと	29.2	38.6	32.5
その他	2.1	1.6	1.9
不便や不満はない	12.9	4.7	10.0
計	233	127	360

（３）船で不便や不満を感じていること（いくつでも）。

	島　原	深　江	全　体
トイレ	２．７		２．４
食事	１８．９		１７．１
風呂	５．４		４．９
洗濯	８．１	２５．０	９．８
寝具等	１３．５		１２．２
冷房・換気	８．１		７．３
照明	５．４		４．９
電話	４３．２		３９．０
情報の入手	１８．９		１７．１
交通の便	２９．７	５０．０	３１．７
衛生	２．７		２．４
騒音	１６．２	２５．０	１７．１
一人分の広さ	１８．９		１７．１
人間関係		２５．０	２．４
プライバシー		２５．０	２．４
子供の学校	１８．９	５０．０	２２．０
マスコミの取材	５．４		４．９
することがないこと	２４．３	２５．０	２４．４
なんとなく落ち着かないこと	２９．７	７５．０	３４．１
その他	５．４		４．９
不便や不満はない	１６．２		１４．６
計	３７	４	４１

その他
○通勤時間（島原市・男・４０代）
○全員に住宅を（島原市・男・５０代）
○更衣室（島原市・男・５０代）
○身の廻り品の置き場所などのないこと。早めに就業につきましたので出入りが不便。仕事着が汚れているので（島原市・女・５０代）
○食事時間（島原市・女・３０代）
○良（島原市・男・６０代）
○旅館で働いていた人達の接し方（深江町・女・３０代）
○船には泊まらなかった（島原市・女・２０代）
○睡眠不足（深江町・女・２０代）

問２３．あなたご自身は、避難生活をするようになってから、体調が悪化したことがありますか。次にあげた中で、あてはまる症状をいくつでも選び、○印をつけてください。

	島　原	深　江	全　体
不眠	５１．８	５２．１	５１．９
肩こり	４０．８	３５．１	３９．１
身体のだるさ	４０．２	３４．７	３８．５
頭痛	２７．５	２７．１	２７．４
便秘	２７．８	２８．５	２８．０
イライラ	４１．３	３８．９	４０．６
胸苦しさ	７．３	５．９	６．９
持病の悪化	６．４	７．６	６．８
その他	６．１	１．７	４．８
ＤＫ．ＮＡ	１４．８	１７．０	１５．５
計	６５４	２８８	９４２

その他
○血圧があがった（島原市・男・６０代）
○胃部痛（島原市・女・３０代）
○妊娠中のため、おなかがよく張っていた（島原市・女・３０代）
○胃痛（島原市・男・４０代）
○目まい（島原市・女・４０代）
○下痢（島原市・女・３０代）
○精神的にいろいろと（島原市・女・６０代）
○体重減少（島原市・男・３０代）
○体重が５Ｋｇ位減少しました（島原市・女・６０代）
○気疲れ（島原市・女・２０代）
○体重減（島原市・女性・３０代）
○胃痛（島原市・男・４０代）
○視力が弱くなった（島原市・女・４０代）
○体重の増加（島原市・男・４０代）
○血圧（島原市・女・５０代）
○健康（島原市・男・６０歳以上）
○高血圧になった（島原市・女・６０歳以上）
○痔（島原市・女・３０代）
○血圧があがる（島原市・女・５０代）
○下痢（島原市・男・５０代）
○腰痛（島原市・男・６０代）
○目のかゆみ。のどが痛い（島原市・女・４０代）
○腰痛（島原市・女・４０代）
○腹痛（島原市・男・４０代）
○術後の体調の不調（島原市・女・５０代）
○セキ（島原市・女・４０代）
○カゼ（島原市・男・６０代）
○胃炎（島原市・女・３０代）
○腹痛（島原市・男・５０代）
○血圧（島原市・男・５０代）
○風邪（島原市・女・５０代）
○高血圧（島原市・男・４０代）
○血圧（島原市・女・４０代）
○高血圧（島原市・男・５０代）
○入院する（島原市・女・６０代）

○下痢（島原市・女・４０代）
○かぜ（島原市・男性・５０代）
○血圧（島原市・男性・６０代）
○咳が出て仕様がなかった（島原市・男・６０代）
○腹痛（島原市・男・２０代）
○咳が出る（島原市・女・４０代）
○カゼ。喉の痛み（島原市・女・３０代）
○風邪（島原市・女・４０代）
○咳（島原市・女・４０代）
○やせた（島原市・女・６０代）
○ストレスから入院する（１ケ月間）。狭心症（島原市・男・４０代）
○食欲不振（島原市・女・３０代）
○のどが痛い。咳が出る（島原市・女・２０代）
○体がかゆい（島原市・男・３０代）
○自営業で仕事場が警戒区域なので、しばらく仕事が出来ずにいた。今は工場でアルバイトをしている（島原市・女・３０代）
○軽い下痢（島原市・女・４０代）
○血圧が上がる（深江町・男・４０代）
○血圧が上がった（深江町・女・２０代）
○体重が５Ｋｇ減った（深江町・女・２０代）
○胃痛（深江町・女・４０代）
○腰痛。肩こり。倦怠感（深江町・男・３０代）
○腰痛（深江町・女・２０代）
○通勤（主人）に１日３時間もかかり、やせた（深江町・女・４０代）
○胃（深江町・女・２０代）

問２４．お宅では、警戒区域の立ち入り規制や避難生活によって世帯収入への影響がありましたか。次の中から１つだけ選び、○印をつけてください。

	島　原	深　江	全　体
世帯収入が非常に減った（５割以上）	４０．１	４６．２	４１．９
世帯収入が減った（３～４割）	１９．４	２０．１	１９．６
世帯収入が少し減った（１～２割）	１３．１	８．３	１１．７
世帯収入は変わらなかった	２０．０	１５．３	１８．６
世帯収入はかえって増えた	１．７	１．０	１．５
その他	１．１	３．５	１．８
ＤＫ．ＮＡ	４．６	５．６	４．９
計	６５４	２８８	９４２

その他
○収入は減った。１０割（島原市・女・３０代）
○収入１００％減（島原市・男・５０代）
○収入はゼロ（島原市・男・５０代）
○収入はゼロ（島原市・男・５０代）
○収入はゼロ（島原市・男性・６０代）
○１０割減った（島原市・男・５０代）
○障害者（島原市・男・４０代）
○収入なし（島原市・男・４０代）
○乳牛を売ったため，収入は０になった（島原市・女・４０代）
○０収入なので、時にはアルバイト（島原市・男・５０代）
○収入がまったくない（島原市・女・５０代）

○世帯収入“0”（島原市・男・５０代）
○世帯収入はない（島原市・女・４０代）
○無収入（島原市・男・２０代）
○自営業はまったくできない（島原市・男・４０代）
○無収入（島原市・男・４０代）
○収入は“0”（島原市・男・５０代）
○収入“0”。農家のため（島原市・女・６０代）
○全然ない（島原市　男　５０代）
○無収入（島原市・男・６０代）
○食料品店を営んでおりますが、平成3年6月3日より休業しております（島原市・女・６０代）
○収入が全然なし（島原市・女・４０代）
○収入8割（島原市・男・２０代）
○年金生活ですので、影響はありません（島原市・女・６０代）
○収入は変わらなかったけど、避難して支出が多かった（島原市・男・３０代）
○世帯収入は“0”（深江町・女・０代）
○ガソリン代が増えた（深江町・女・５０代）
○収入全くない（深江町・女・３０代）
○収入“0”（深江町・男・６０代）
○職を失った（深江町・女・３０代）
○１２０％以上減った（従業員の給料分も含めて）（深江町・女・４０代）
○家賃等の支出が増えた（深江町・女・５０代）
○１０割減（深江町・男・３０代）
○収入が全くなく、乳牛の育成費用だけがかかる（深江町・男・４０代）
○療養中のため、収入はなし（深江町・男・４０代）
○収入“0”（深江町・女・６０代）
○全損で収入“0”です（深江町・女・４０代）
○西瓜を栽培していましたが収穫直前に避難し、1個も出荷出来ず、途方に暮れています．資材、肥料代の支払いで２００万円位かかります（深江町・女・４０代）
○収入なし（深江町・女・５０代）
○全くない（深江町・女・４０代）
○世帯収入が全くない（深江町・男・５０代）

問２５．避難生活は長い人で２カ月を越えていますが、あなたご自身はもう限界だと思いますか。それとも状況によってはまだ続けられると思いますか。

	島　原	深　江	全　体
もう限界だと思う	３８．５	４２．７	３９．８
状況によっては、まだ続けられると思う	３９．０	３５．８	３８．０
どちらとも言えない	１９．９	１９．１	１９．６
DK．NA	２．６	２．４	２．５
計	６５４	２８８	９４２

その他
○１．仮設住宅に入っている人とそうでない人との差がありすぎる。２．同じ警戒区域なのに、県と市はたてわける。３．仮設住宅に住んでいる人以外は手出しの金が多い（島原市・男・３０代）

問２６．ところで、現在の普賢岳の活動についてあなたはどう感じていますか。次の中からあなたが感じていることに最も近いものを１つだけ選び、○印をつけてください。

	島　原	深　江	全　体
非常に危険であり、被害をともなうような大火砕流がいつ起きても不思議はない	６２．４	５６．３	６０．５
危険といえば危険だが、被害が出るような大火砕流の心配は少ないと思う	３３．６	３６．５	３４．５
大火砕流の発生する危険はないと思う	１．７	３．８	２．３
その他	０．９	１．４	１．１
ＤＫ．ＮＡ	１．４	２．１	１．６
計	654	288	942

その他
○わからない（島原市・女・４０代）
○土砕流が非常に危険と思う（島原市・男・６０代）
○火砕流が土石流に変わるのが、危険だと思う（島原市・男・４０代）
○自然だからわからない（島原市・女・６０代）
○私には普賢岳の活動についてはよくわかりませんが、何しろ不安でこの後どうなる事か（島原市・女・４０代）
○土石流があぶない（島原市・男・５０代）
○土石流が危険です（島原市・女・５０代）
○絶対に大火砕流は起きる（島原市・女・２０代）
○火山学者ではないからわからない（島原市・男・５０代）
○全くわからない（島原市・男・６０代）
○わかりません（深江町・女・４０代）
○自然だからわからない（深江町・女・３０代）
○私たちの住宅は区域のはずれに位置していますから（深江町・女・４０代）
○雨による土石流（深江町・男・６０代）
○山の見えないところにいるので、何とも言えない（深江町・女・５０代）
○今日明日の心配はないと思いますが、毎日毎日、山の地形が変わっています（深江町・男・３０代）
○爆発的な噴火がなければ大火砕流は起きないと思うが、依然崩落は続くと思う。マグマのせり出しが遅い分だけ長期化すると思う（深江町・女・３０代）

問２７．大火砕流の発生直前には、中小の火砕流が頻雑に起きるなど、前兆があるという人がいますが、あなたはこの意見をどう思いますか。

	島　原	深　江	全　体
まったくその通りだと思う	２４．９	３１．６	２７．０
どちらかといえばその通りだと思う	３６．９	３６．５	３６．７
どちらかといえば間違いだと思う	２．９	２．８	２．９
まったく違った意見だと思う	１．２	１．７	１．４
どちらともいえないと思う	３１．３	２５．０	２９．４
ＤＫ．ＮＡ	２．８	２．４	２．７
計	654	288	942

問２８．現在の警戒区域は、８月１１日で一応切れますが、あなたご自身は、今後現在のような状態が続くとしたら、継続すべきだと思いますか、それとも解除すべきだと思いますか。

	島　原	深　江	全　体
溶岩ドームの状況が変わらないのなら、このまま継続するのもやむを得ないと思う	４１．３	３６．１	３９．７
避難生活の心理的、経済的影響を考えるともう限界であり、全面的に解除すべきだと思う	２．３	４．５	３．０
避難生活の苦労と火砕流の危険の両方を考え、部分的に解除すべきだと思う	５５．４	５８．０	５６．２
DK．NA	１．１	１．４	１．２
計	６５４	２８８	９４２

問２９．（問２８で３と答えた人だけお答えください）具体的には、どのように解除すべきだと思いますか。次の中であなたが賛成するものをいくつでも選び、○印をつけてください。

	島　原	深　江	全　体
国道２５１号の通行制限の解除	７５．７	８５．０	７８．６
国道５７号の交通規制の解除	１６．３	１２．６	１５．１
火砕流の危険が比較的少ない地区の警戒区域解除	７２．７	７６．０	７３．７
一部警戒区域の避難勧告地区への移行	２５．１	４４．３	３１．２
警戒区域への立ち入りの時間を限定した解除	６５．５	５２．１	６１．２
その他	０．８		０．６
DK．NA	０．３		０．２
計	３６２	１６７	５２９

その他
○冷蔵庫の中身を外へ出しに行きたい（島原市・女・５０代）
○最後に警戒区域に入った秩父ケ浦町は解除してほしい（島原市・男・５０代）
○時間制にして、一時でも家に帰れるようにする（島原市・男・３０代）
○完全におさまるまで、安心して住宅には帰れません（島原市・女・６０代）
○警戒区域への立ち入りの時間的許可（島原市・女・５０代）
○貴重品の持ち出し（天候条件や火砕流の状況次第で時間を切って立ち入らせる等）（島原市・女・５０代）

ところで、今回の災害では、火砕流や眉山などについて、いろいろなうわさが広がりましたが、次にこのことについてお聞きします。

問３０．あなたは、次のような話を人づてに聞いたことがありますか。あなたがお聞きになった話をいくつでも選び、○印をつけてください。

	島　原	深　江	全　体
眉山が崩れる	６７．７	４９．７	６２．２
また大火砕流が起こる	５６．３	５３．１	５５．３
避難住民の留守宅に空き巣が入っている	８３．８	７９．５	８２．５
警戒区域は５、６年も立入禁止が続く	１３．３	８．３	１１．８
島原市（深江町）の災害対策本部が市・町外に逃げ出した	３．４	４．５	３．７
この災害は天草四郎のたたりだ	２．６	３．８	３．０
近いうちに津波がくる	９．９	１３．９	１１．１
その他	２．３	２．１	２．２
上のような話は一つも聞かなかった	４．０	５．２	４．４
DK．NA	２．１	３．１	２．４
計	６５４	２８８	９４２

問３１．（問３０で、９以外に○をつけた人だけお答えください）あなたが聞いた話のうちで、とくに気になったものについてお聞きします。いちばん気になった話は、何の話ですか。

	島　原	深　江	全　体
眉山が崩れる	３１．７	１１．４	２５．６
また大火砕流が起こる	１７．９	２５．０	２０．０
避難住民の留守宅に空き巣が入っている	２８．２	３０．３	２８．９
警戒区域は５、６年も立入禁止が続く	５．２	５．７	５．３
島原市（深江町）の災害対策本部が市・町外に逃げ出した	０．５	０．８	０．６
この災害は天草四郎のたたりだ		０．８	０．２
近いうちに津波がくる	０．８	１．５	１．０
その他	１．３	１．５	１．４
DK．NA	１４．４	２３．１	１７．０
計	６１６	２６４	８８０

（２）その話をあなたはだれから、あるいはどこからお聞きになりましたか。次の中からいくつでも選んで、○印をつけてください。

	島　原	深　江	全　体
家族	11.2	8.0	10.2
近所の人	47.7	49.0	48.1
職場の人や同業者	26.8	19.8	24.6
親戚や知人	28.6	20.1	26.0
報道関係者から直接聞いた	2.8	3.1	2.9
テレビや新聞で知った	14.2	16.3	14.9
役所・警察・消防から聞いた	3.1	2.8	3.0
その他	4.0	1.7	3.3
DK.NA	11.0	17.4	13.0
計	654	288	942

その他
○　毎日見ているから（島原市・女・４０代）
○　知人との相談なり、自分の考えなりで（島原市・男・３０代）
○　消防団の人（島原市・女・４０代）
○　職場に出入りする不特定の人々（島原市・女・５０代）
○　専門家（地質学）（島原市・女・５０代）
○　市体育館の避難（島原市・男・４０代）
○　実感として、なんとなく（島原市・女・５０代）
○　口々に誰となく（島原市・男・６０代）
○　中小の火砕流が頻発するので、一番気になります（島原市・男・６０代）
○　祖父から、小さい時よく話して聞かされて知っていた（島原市・男・４０代）
○　避難場所（島原市・女・４０代）
○　避難所の人（島原市・男・２０代）
○　避難住民から聞く（島原市・男・５０代）
○　職場の窓からよく見える（島原市・女・３０代）
○　町の噂話（島原市・女・５０代）
○　避難場所（島原市・女・４０代）
○　相手ははっきり覚えていない（島原市・女・３０代）
○　避難場所（島原市・男・５０代）
○　避難場所（島原市・男・６０代）
○　もしかしたらと思った（島原市・女・４０代）
○　２００年前のことと聞いたから（島原市・男・３０代）
○　避難所（島原市・女・４０代）
○　市の体育館の中で、近所の人（島原市・男・６０代）
○　無線交信を受信（島原市・女・３０代）
○　２５１線通行禁止のため、用事の時雲仙方面に行き、見ています（島原市・女・５０代）
○　体育館（島原市・女・５０代）
○　避難場所（島原市・男・４０代）
○　日常眉山を見ながら、生活しているのでそう思う（島原市・男・６０歳以上）
○　いろんな話やデータ等から、起こる可能性が多いと思っています（島原市・女・５０代）
○　避難場所で、もっぱらの噂（島原市・男・４０代）
○　避難所の中で（島原市・女・４０代）
○　自分が山を観察しているから（島原市・女・４０代）
○　風評（島原市・男・４０代）
○　自分自身もそう思っていた（深江町・女・４０代）
○　避難場所で（深江町・女・６０代）
○　自分で感じる（深江町・女・４０代）

○ 避難場所（深江町・女・３０代）
○ いろんな人（深江町・女・４０代）

（３）その話を聞いて、あなたはそれを信じましたか。

	島　原	深　江	全　体
本当の話だと思った	２８．４	２９．９	２８．９
半信半疑だった	５７．６	４８．６	５４．９
まったく信じなかった	４．６	５．２	４．８
DK．NA	９．３	１６．３	１１．５
計	６５４	２８８	９４２

（４）では、その話を聞いてあなたはどのくらい不安を感じましたか。

	島　原	深　江	全　体
とても不安になった	２４．２	２１．２	２３．２
不安になった	２８．１	２２．６	２６．４
少し不安になった	３０．３	３０．６	３０．４
不安を感じなかった	６．９	７．６	７．１
DK．NA	１０．６	１８．１	１２．８
計	６５４	２８８	９４２

問３２．ところで、６月３日の大災害からいままでのあいだ、あなたはさまざまな情報に関心をもたれたと思います。A～Dのそれぞれの項目について、情報の入手のためにふだん注意を払っている情報源を選んでください。いくつでも選び、○印をつけてください。

A．火山活動の見通し

	島　原	深　江	全　体
NHKテレビ	８５．５	７９．９	８３．８
民放テレビ	５２．９	５１．０	５２．３
ラジオ	２１．９	１１．８	１８．８
新聞（地方紙）	６８．７	６６．７	６８．０
新聞（全国紙）	２９．５	２０．８	２６．９
役所などからのお知らせ	２４．９	２７．４	２５．７
町内会	９．５	８．０	９．０
家族や近所の人の話	１７．７	１３．９	１６．６
その他	１．７	１．７	１．７
DK．NA	７．３	１１．８	８．７
計	６５４	２８８	９４２

B．土石流の危険性

	島　原	深　江	全　体
NHKテレビ	76.0	73.3	75.2
民放テレビ	50.9	51.0	51.0
ラジオ	21.3	10.4	17.9
新聞（地方紙）	62.1	59.7	61.4
新聞（全国紙）	26.6	18.1	24.0
役所などからのお知らせ	27.4	31.3	28.6
町内会	9.6	6.9	8.8
家族や近所の人の話	16.8	14.6	16.1
その他	2.1	1.4	1.9
DK．NA	10.2	13.9	11.4
計	654	288	942

C．警戒区域の設定や解除

	島　原	深　江	全　体
NHKテレビ	60.9	51.0	57.9
民放テレビ	41.3	34.7	39.3
ラジオ	18.7	7.6	15.3
新聞（地方紙）	59.2	53.5	57.4
新聞（全国紙）	21.1	13.2	18.7
役所などからのお知らせ	41.6	49.7	44.1
町内会	14.5	13.9	14.3
家族や近所の人の話	15.6	12.5	14.6
その他	1.5	1.7	1.6
DK．NA	12.1	16.7	13.5
計	654	288	942

D．仮設住宅や融資等の情報

	島　原	深　江	全　体
NHKテレビ	33.0	21.5	29.5
民放テレビ	23.5	17.0	21.5
ラジオ	10.6	4.9	8.8
新聞（地方紙）	53.8	46.2	51.5
新聞（全国紙）	18.2	10.1	15.7
役所などからのお知らせ	44.5	45.8	44.9
町内会	20.6	17.7	19.7
家族や近所の人の話	23.5	19.4	22.3
その他	2.6	1.4	2.2
DK．NA	15.7	21.2	17.4
計	654	288	942

問３３．今回の災害では、全国各地からたくさんのマスコミが島原市や深江町にきましたが、そのときの取材についておたずねします。あなたやあなたのご家族はマスコミから取材を受けましたか。

	島　原	深　江	全　体
自分自身が直接取材を受けた	４４．８	３４．０	４１．５
家族が直接取材を受けた	２６．０	２５．０	２５．７
他の人が取材を受けている現場に居合わせた	２４．３	２６．７	２５．１
自分の回りでは取材はされなかった	２１．１	１９．８	２０．７
ＤＫ．ＮＡ	４．９	１０．４	６．６
計	６５４	２８８	９４２

問３４．（問３３で１～３と答えた人だけお答えください）そのときのマスコミ関係者の取材や態度や様子をどう思いましたか。次の中から１つだけ選び、〇印をつけてください。

	島　原	深　江	全　体
非常に感じが悪かった	８．４	７．９	８．３
やや感じが悪かった	１０．５	６．９	９．４
どちらともいえない	４４．９	４４．８	４４．８
やや好感がもてた	２６．１	２９．１	２７．０
非常に好感がもてた	７．４	８．９	７．８
ＤＫ．ＮＡ	２．７	２．５	２．６
計	４８６	２０３	６８９

問３５．ところで、６月３日の大災害からいままでのあいだ、あなたは、さまざまな情報をお知りになりたかったと思いますが、あなたが知りたいと思った情報はどのくらい十分に知ることができましたか。次の中から１つだけ選び、〇印をつけてください。

	島　原	深　江	全　体
非常によく知ることができた	７．５	８．３	７．７
かなりよく知ることができた	５２．６	５５．２	５３．４
あまりよく知ることができなかった	３３．８	３１．３	３３．０
ほとんど知ることができなかった	３．２	２．８	３．１
ＤＫ．ＮＡ	２．９	２．４	２．８
計	６５４	２８８	９４２

問３６．次に、マスコミの報道についてお聞きします。あなたは災害の状況がマスコミでどのように報道されていると感じていますか。次の中から１つだけ選び、○印をつけてください。

	島　原	深　江	全　体
実際の状況よりそうとう大げさに報道されている	４．９	５．６	５．１
実際の状況より少し大げさに報道されている	２６．５	２４．３	２５．８
実際の状況をほぼ正確に報道している	５８．６	６１．１	５９．３
その他	３．７	３．８	３．７
ＤＫ．ＮＡ	６．４	５．２	６．１
計	６５４	２８８	９４２

その他

○大げさ。大げさでないにしろ正確でない（島原市・男・５０代）
○範囲が狭い（島原市・男・４０代）
○マスコミは自分たちの都合の良いところだけ報道している。すべてをもっと正確に報道し、都合悪い部分をカットするな（島原市・男・２０代）
○現在被害が目立たないところも多少知りたい。立ち入りができないので自宅の様子が全くわからない（島原市・女・４０代）
○大げさで嘘の報道でまったく信用できない（島原市・女・２０代）
○各社の報道が異なっている（島原市・男・４０代）
○正確に報道されていない（島原市・男・３０代）
○嘘の報道がかなり多い（島原市・男・３０代）
○テレビと実際の火砕流とは全然ちがうみたい。実際のほうがすごい（島原市・女・２０代）
○報道に時々間違いがある。自衛隊と警察の情報をくらべた場合（島原市・男・３０代）
○長崎県に住みながら熊本の放送しか受信できないＮＨＫに不満である（島原市・女・５０代）
○初期の頃、島原市長に対して失礼な質問をしている報道陣がいた。現場の大変さをわかってほしい。他の報道状況はほぼ適切だと思う（島原市・男・３０代）
○報道では不足している面が多いように思います（島原市・男・４０代）
○警戒区域の家を毎日写してほしい（自分の家を見たいから）（島原市・女・４０代）
○大げさとは思わないが、はば広い報道に不足している（島原市・男・３０代）
○火山学者がいろいろとたくさん出ていましたが、実際の状況を知らずに勝手に言いすぎる（島原市・男・３０代）
○実際の状態を正確に報道していない（島原市・男・３０代）
○ＮＨＫの報道しか信じられない（島原市・女・６０代）
○報道に一部誤りのあるときがある（島原市・女・３０代）
○災害の状況はまだ報道されていない部分が多い。警戒区域内の住宅の様子はひどい状態であることが報道されていない。家こそ建って残っているが家のなかの様子はひどい（島原市・女・４０代）
○ＴＶ局によっていろいろ（島原市・女・２０代）
○最初は大げさぎみでしたが、最近ではほぼ正確ではないでしょうか（島原市・女・２０代）
○災害が発生してから放送される時間が長すぎる。6月3日の発生から放送されるまで1時間もかかっている（島原市・女・４０代）
○テレビ、新聞以外見る余裕がない（島原市・男・４０代）
○災害のひどい所（または被害を直接受けた人など）ばかりきわだたせて報道された（島原市・男・５０代）
○誤報もかなりあった（深江町・男・４０代）
○真相までせまって報道してほしい（深江町・男・３０代）
○報道も最初はトップニュースでしたが、今では消えかかっているみたいです（深江町・女・３０代）
○報道が少ない（深江町・女・６０代）
○実際の状況より報道が少なかった（深江町・男・４０代）
○状況とはちょっとちがいますが、避難住民に取材をしたさいに本当に訴えたいことをカットしている（都合のいいように．．．）（深江町・女・３０代）
○住民の願っていることは報道されていない（深江町・女・３０代）
○島原の情報ばかり報道されていた（深江町・男・５０代）

問37．あなた自身がマスコミにもっと報道してほしいと思うのはどういう事ですか。次のなかからいくつでも選んで、○印をつけてください。

	島　原	深　江	全　体
火山活動の見通し	74．2	71．5	73．4
土石流の危険性	50．3	42．0	47．8
眉山の危険性	38．8	21．9	33．7
被害地域（警戒区域）の現状	64．2	51．0	60．2
避難者の様子	14．8	20．8	16．7
被害者の経済的被害	29．4	40．3	32．7
まち全体の経済的被害	22．6	27．8	24．2
警戒区域の設定や解除	37．3	40．3	38．2
仮設住宅や融資など	23．2	28．1	24．7
補償についての国・県などの考え方	67．1	65．3	66．6
災害復旧についての国・県などの考え方	64．4	61．8	63．6
義捐金や義捐物資の到来状況	21．7	26．0	23．0
復旧や再建に向けての市民の動き	29．2	25．0	27．9
その他	1．2	1．0	1．2
計	654	288	942

その他

○体調が悪いので、あまり興味がわかない（島原市・女・60以上）
○警戒区域の設定で多大な被害がでているので、その事をもっと報道して欲しい（島原市・女・40代）
○義援金や物資の分配状況（どこへいけば分配してもらえるのかということも含めて）（島原市・女・30代）
○義援金や物資の支給、期日、場所、内容、方法（島原市・女・40代）
○国の考え方。地元と国のギャップを国民に広く報道を（島原市・男・30代）
○実際の正確な山の様子。地図を含めて溶岩ドームの分布など（島原市・女・30代）
○テレビ等の噴火に対してのニュースが少ない。前もって危険とか注意とかどのくらい大きい火砕流や土石流なのかわからない（島原市・女・30代）
○警戒区域の実際の現状（島原市・男・60代）
○誤った報道でなく、事実を正確に（島原市・男・30代）
○最近ニュース等に取り上げられない。時間的に状況を教えて欲しい（深江町・女・50代）
○市・町の物資配布日程など（深江町・女・40代）
○島原市と深江町は行政が違う（深江町・男・30代）

問38．火山噴火については、臨時火山情報と火山活動情報の2種類がありますが、あなたは噴火の警告として、どちらの情報が緊急性が高いと思いますか。次の中から1つだけ選び、○印をつけてください。

	島　原	深　江	全　体
臨時火山情報	54．1	50．3	53．0
火山活動情報	16．1	20．1	17．3
どちらも同じくらい	25．5	27．4	26．1
DK．NA	4．3	2．1	3．6
計	654	288	942

問３９．ところで、今回の災害にさいしては、いろいろな組織や団体が活動しましたが、あなたは、それぞれの組織や団体の活動をどう評価しますか。Ａ～Ｊのそれぞれについて、１～６の６段階の評価でご記入ください。

Ａ．市役所・町役場

	島　原	深　江	全　体
非常によくやった	５２．８	３２．３	４６．５
まあよくやった	２２．２	２５．０	２３．０
ふつう	９．５	１３．５	１０．７
もう一歩	３．２	７．６	４．６
期待はずれ	４．０	９．４	５．６
やっていることをあまり知らない	０．６	１．０	０．７
ＤＫ．ＮＡ	７．８	１１．１	８．８
計	６５４	２８８	９４２

Ｂ．長崎県

	島　原	深　江	全　体
非常によくやった	２５．２	１４．６	２２．０
まあよくやった	２５．８	２４．３	２５．４
ふつう	１９．６	２１．２	２０．１
もう一歩	８．９	１３．９	１０．４
期待はずれ	６．７	７．６	７．０
やっていることをあまり知らない	２．３	３．１	２．５
ＤＫ．ＮＡ	１１．５	１５．３	１２．６
計	６５４	２８８	９４２

Ｃ．国（政府）

	島　原	深　江	全　体
非常によくやった	１．２	２．１	１．５
まあよくやった	２．３	０．３	１．７
ふつう	５．０	６．３	５．４
もう一歩	７．３	１２．２	８．８
期待はずれ	５８．７	５１．４	５６．５
やっていることをあまり知らない	１２．１	１３．２	１２．４
ＤＫ．ＮＡ	１３．３	１４．６	１３．７
計	６５４	２８８	９４２

D．地元消防団

	島　原	深　江	全　体
非常によくやった	71.1	55.2	66.2
まあよくやった	9.6	16.0	11.6
ふつう	5.7	6.9	6.1
もう一歩	0.8	0.7	0.7
期待はずれ	0.5	2.1	1.0
やっていることをあまり知らない	1.4	2.1	1.6
DK．NA	11.0	17.0	12.8
計	654	288	942

E．警察

	島　原	深　江	全　体
非常によくやった	30.3	22.9	28.0
まあよくやった	20.5	25.0	21.9
ふつう	24.2	23.6	24.0
もう一歩	5.2	2.1	4.2
期待はずれ	3.4	6.6	4.4
やっていることをあまり知らない	3.1	2.1	2.8
DK．NA	13.5	17.7	14.8
計	654	288	942

F．自衛隊

	島　原	深　江	全　体
非常によくやった	41.6	35.4	39.7
まあよくやった	20.3	21.2	20.6
ふつう	14.7	16.7	15.3
もう一歩	4.0	4.5	4.1
期待はずれ	6.9	7.3	7.0
やっていることをあまり知らない	1.5	1.0	1.4
DK．NA	11.0	13.9	11.9
計	654	288	942

G．マスコミ

	島　原	深　江	全　体
非常によくやった	14.7	12.5	14.0
まあよくやった	19.1	21.9	20.0
ふつう	35.3	28.8	33.3
もう一歩	6.9	4.9	6.3
期待はずれ	6.1	6.9	6.4
やっていることをあまり知らない	2.1	2.1	2.1
DK．NA	15.7	22.9	17.9
計	654	288	942

H．火山学者．測候所

	島　原	深　江	全　体
非常によくやった	47.7	44.8	46.8
まあよくやった	22.0	21.5	21.9
ふつう	10.7	8.3	10.0
もう一歩	4.3	4.5	4.4
期待はずれ	2.9	3.8	3.2
やっていることをあまり知らない	1.1	0.7	1.0
DK．NA	11.3	16.3	12.8
計	654	288	942

I．自治会・町内会

	島　原	深　江	全　体
非常によくやった	32.4	24.3	29.9
まあよくやった	16.2	20.8	17.6
ふつう	20.9	22.9	21.5
もう一歩	5.5	4.9	5.3
期待はずれ	5.5	4.5	5.2
やっていることをあまり知らない	6.6	5.2	6.2
DK．NA	12.8	17.4	14.2
計	654	288	942

J．ボランテイア

	島　原	深　江	全　体
非常によくやった	44．8	36．5	42．3
まあよくやった	23．1	18．4	21．7
ふつう	10．7	14．9	12．0
もう一歩	0．8	2．4	1．3
期待はずれ	0．5		0．3
やっていることをあまり知らない	7．6	9．4	8．2
DK．NA	12．5	18．4	14．3
計	654	288	942

問40．あなたは、今回の経験をふまえて、国や長崎県・島原市・深江町に対して、どのような事を望みますか。
次の中からいくつでも選び、○印をつけてください。

	島　原	深　江	全　体
噴火予知体制の充実	59．6	43．1	54．6
消防力や救急医療体制の充実	27．7	24．0	26．5
避難所や避難道路の整備	33．2	45．8	37．0
砂防対策の充実	59．2	50．0	56．4
情報連絡体制の充実	47．2	38．2	44．5
正確な災害予測図の作成	46．2	38．2	43．7
火山噴火災害に関する広報の充実	41．6	34．4	39．4
警戒区域設定による被害の補償	72．2	69．8	71．4
危険地域住民のための公的住宅の建設	51．1	42．7	48．5
応急仮設住宅の増設	32．9	35．1	33．5
市・町の緊急時の対応体制の強化	29．5	33．7	30．8
市・町・県・国の連携の強化	53．1	51．0	52．4
観光客の誘致対策	9．0	6．6	8．3
その他	1．1		0．7
計	654	288	942

その他

○国から災害対策担当者を常駐させ、警戒区域設定、災害復旧対策等についても四者が一体となってすべきである（島原市・男・40代）
○わからない（島原市・女・60代以上）
○行政が警戒区域設定による被害の補償を行う、と法の元に明記すべきである。このような大災害に対しては国のレベルですぐ対応すべきである。そして、国の先生がたはもっと現地の状況をよくみて頂き、的確な救済対策が必要である（島原市・女・40代）
○仮設校舎の充実とスクールバスの配備を（島原市・女・30代）
○国からの見舞金制度（島原市・女・30代）
○危険区域に住んでおりましたが、この頃情報が余り簡単すぎて、もっとくわしく知らせて欲しい。町内会長でも1週間間に1回でも連絡して欲しいです。自宅がどうなっているのか遠方に居るものはとても不安です（島原市・女・60代）
○総理大臣以下各大臣は、もっと被災地に時間をかけて視察して欲しかった。また被災住民を前にして、言った事を国会に提出して実行して欲しい（島原市・男・40代）
○国や県による被災者への補償（家，土地を無くしたもの）（島原市・男・20代）

○眉山崩壊の心配があるので、観測を強化して、徴候があったときの避難対策を出して欲しい（島原市・女・50代）
○避難区域以外の市全体の住民の事も考えて欲しい。他の地区の人も火山弾で被害にあっているのだから（深江町・女・20代）

問41．今後、警戒区域が解除され、自分の家に戻れることになった場合、あなたは同じ場所に住み続けるつもりですか、それともできれば、他のもっと安全な場所に移りたいと思いますか。次の中から一つだけ選び、○印をつけてください。

	島原	深江	全体
いまの場所でずっと暮らしたい	60.6	74.7	64.9
もっと安全な場所に転居したい	16.1	9.0	13.9
どちらとも言えない	18.2	11.5	16.1
その他	1.8	2.1	1.9
DK．NA	3.4	2.8	3.2
計	654	288	942

その他
○自分の家で暮らしたいのですが火砕流により水がでません。住みたくても住めるでしょうか（島原市・女・20代）
○3月までは住み着く予定。4月から新築する予定の家に引っ越します（島原市・女・30代）
○同じ場所には戻らない（島原市・女・30代）
○もっと安全な場所に転居したいが、子供の学校の事などなかなか他へ移る勇気がない（島原市・女・30代）
○元どうりの仕事が出来るかによる（島原市・男・50代）
○火砕流、土石流の流れてこない限りは、今の所で転出する気持ちはない（島原市・女・50代）
○焼けてなくなった（島原市・男・20代）
○そのままいたいが、家が火砕流で燃えたので帰るところがない（島原市・女・40代）
○家がない（島原市・男・30代）
○今の場所が安全になれば暮らしたい（島原市・女40代）
○土石流がきても雨が降っても大丈夫だったら、今の場所でも（島原市・女・20代）
○持ち家だからしかたない（島原市・女・40代）
○転居したいが、いろんな問題があり実際は出来ない（島原市・女・40代）
○家に戻れる条件が絶対安全になれば家に帰りたい（島原市・女・30代）
○自分だけでは住めないが自治会皆一緒であれば暮らせるかもしれない（島原市・女・30代）
○持ち家だからかえらないと仕方ない。本当はもう住みたくない（深江町・女・30代）
○2、3年して、山や町が落ち着いてから家に戻りたい（深江町・女・30代）
○ローンが残っている家だから、住まなければ仕方ない（深江町・女・30代）

問42．（問41で2と答えた人だけお答えください）それでは、どこに住みたいですか。

	島　原	深　江	全　体
島原市や深江町内の安全な地区	60.0	61.5	60.3
島原市や深江町外の島原半島	20.0	15.4	19.1
島原半島以外の場所	19.0	19.2	19.1
DK．NA	1.0	3.8	1.5
計	105	26	131

問４３．あなたは、いま住んでいる場所に対して、どんな気持ちを持っていますか。

	島　原	深　江	全　体
強い愛着を感じる	５４．０	６０．８	５６．１
少し愛着を感じる	１８．３	１５．６	１７．５
どちらかといえば嫌い	４．６	５．９	５．０
嫌い	１．７	０．３	１．３
どちらとも言えない	１５．１	１３．９	１４．８
何も感じない	１．５	０．３	１．２
DK．NA	４．７	３．１	４．２
計	６５４	２８８	９４２

問４４．あなたは、ふだん近所付き合いをどのようにしていますか。

	島　原	深　江	全　体
ほとんど付き合いはない	１．４	０．７	１．２
顔があえば挨拶する程度	１５．１	１２．２	１４．２
ときどき立ち話をする程度	３３．３	２７．１	３１．４
留守を頼んだり、親しく話をする	４６．８	５６．６	４９．８
DK．NA	３．４	３．５	３．４
計	６５４	２８８	９４２

問４５．今回の被害により、お宅ではどのような被害を受けましたか。次の中からいくつでも選んで、○印をつけてください。

	島原	深江	全体
死傷者を出した	０．３		０．２
家が全半焼した	７．８	１．０	５．７
家が土石流などで全半壊した	９．８		６．８
田畑が土石流や火砕流で覆われた	２４．５	８．３	１９．５
作物が収穫できなかった	３１．５	４０．３	３４．２
家畜に被害が出た	７．８	１２．５	９．２
その他	２４．２	２０．８	２３．１
被害なし・DK．NA	３４．９	３５．４	３５．０
計	６５４	２８８	９４２

その他
○被害なし（島原市・男・５０代）
○山林が土石流や火災流で覆われた（島原市・男・３０代）
○お墓が流れた（島原市・女・５０代）
○事務所が土石流で全壊した（島原市・男・４０代）
○収入がなくなった（島原市・男・４０代）

○家財道具など取り出せず、家があってないのと同じ（島原市・女・４０代）
○立ち入りできないので不明（島原市・女・６０代）
○とくに物的または人的な被害はない（島原市・女・４０代）
○雨の時期にしめきったままで、カビとか心配。もし床上でも床下でも水がはいっていたとしても、入れないのでわからない（島原市・女・２０代）
○土間に土石流が入った（島原市・女・３０代）
○土石流で多少の被害（島原市・女・２０代）
○田植が出来なかった（島原市・女・５０代）
○今のところ（８／１１現在）特になし（島原市・男・５０代）
○立入禁止でわからない（島原市・男・３０代）
○自営業が出来ない（島原市・女・２０代）
○自営業が仕事が出来ないので収入がない（島原市・女・３０代）
○被害はありません（島原市・女・３０代）
○家族が離別（島原市・男・５０代）
○水道が壊れている（島原市・男・５０代）
○近くまで土石流がきていて、今後このことに不安を抱く（島原市・女・５０代）
○警戒区域のため、家の中に入ることが出来なかった（島原市・女・３０代）
○さかなが取れなくなった（島原市・男・６０代）
○小庭と植木鉢に植えてあるものがだめになった（島原市・男・５０代）
○残っているようだとテレビで見ただけで、警戒地域ではいれないので全くわからない。市、県も教えてくれない（島原市・女・４０代）
○土石流が家のすぐ側を通って大量の土砂で埋まってますので、家は報道写真等で無事だとわかってますが、二度三度と土石流が起こるとすればとても危険な状態です（島原市・女・５０代）
○べつに被害なし（島原市・男・２０代）
○建設従業員だが立入禁止で、様子がわかりません（島原市・男・６０代）
○漁業が出来ない（島原市・男・５０代）
○禁海地区になり海へ行けなくなった（島原市・男・４０代）
○漁に出ることが出来ない（島原市・男・２０代）
○仕事が出来なくなった（島原市・女・３０代）
○わからない（島原市・男・６０代）
○営業（小売店）が出来ない（島原市・男・３０代）
○立入禁止による経済的被害（島原市・男・３０代）
○仕事が出来ない（島原市・男・５０代）
○現在土石流のぎりぎりで無事にあるが、見てみないことには何も言えない（島原市・女・３０代）
○家の中に泥水が入った様子（島原市・女・５０代）
○家そのものには被害はないが畳が全然使えないと思う（島原市・女・４０代）
○営業できない（島原市・男・５０代）
○自営業のため営業が出来ない。仕事がない（島原市・女・３０代）
○商売が出来なくなり、二人とも収入の道がなくなった（島原市・女・３０代）
○自営業なので営業が出来なくなった（島原市・女・５０代）
○隣の家２軒は土石流が入っているのですが、ブロックで囲んでいるのでわが家は大丈夫でした（島原市・女・２０代）
○①愛犬を死亡させた。②噴石や灰等のため、愛車も手放す。③商売をしていますが２５１号を通れないため、従業員全員３、４倍労働に無理を重ねている（島原市・女・２０代）
○漁業に行かれない（島原市・女・４０代）
○果樹のハウスに土砂が堆積した（島原市・女・３０代）
○警戒区域になり商売が出来ない（島原市・女・４０代）
○造園業なので、盆栽、花、鉢など（島原市・女・５０代）
○家族がばらばらの生活（島原市・女・３０代）
○自営業ができない（島原市・女・３０代）
○水が来ないため、酪農ができなくなった。牛乳もとりにこない（島原市・女・３０代）
○今のところ直接な被害はないが家が傷んでいる（島原市・女・２０代）
○転居せざるを得なくなった。噴石により車の被害を受ける（島原市・女・２０代）
○仕事をなくした（島原市・男・５０代）
○床下浸水（島原市・男・５０代）
○今のところ被害なし（島原市・男・４０代）

○家はあるけど帰れない。それがつらい（島原市・女・４０代）
○土砂が屋敷内に流れ込む（島原市・男・６０代）
○被害はまだ受けてないが警戒区域である（島原市・女・３０代）
○水無川の横なので、台風時で大雨が降り土石流で家は全壊した（島原市・男・６０代）
○家の中の物が使えなくなった（島原市・男・４０代）
○警戒区域で立ち入り出来ず、はっきりわからない（島原市・女・４０代）
○家が土石流で、床上まで埋まってる（島原市・女・５０代）
○被害なし（島原市・女・２０代）
○ハウス施設を流された（島原市・男・４０代）
○被害なし（島原市・女・４０代）
○土石流により塀が倒れる。バイクなど埋まる。床下へ土石流が入っている。庭全体へ土石流が入っている（島原市・女・４０代）
○建設機械を流失した（島原市・男・５０代）
○収入０（島原市・男・６０代）
○商売が出来ない（島原市・男５０代）
○家に帰っていないのでわからない（島原市・男・２０代）
○被害なし（島原市・男・４０代）
○家に少し土石流が入っている（島原市・男・３０代）
○警戒区域のため不明（島原市・女・３０代）
○工場が火砕流で覆われた（島原市・女・４０代）
○立入禁止のため不明（島原市・男・５０代）
○畳等のカビ発生等の話を聞く（島原市・男・４０代）
○６／３に家を出て全く行っていない。人の話では家はそのままの状態。土砂が入りドブドブして庭には入れない様子を聞いている。一度行ってみたい気持ちです（島原市・女・４０代）
○家が火砕流で埋まった（島原市・男・３０代）
○家が全焼した（島原市・女・３０代）
○縫製業の仕事が出来なくなった（島原市・女・４０代）
○警戒区域内のため、詳しいことはわからず（島原市・女・４０代）
○６／３０の土石流でどの様になっているか、立ち入りが出来ないのでわからない（島原市・男・３０代）
○立ち入っていないので被害がわからない（島原市・女・４０代）
○いつ家が被害にあってなくなるのかという不安をいつも持っている（島原市・男・３０代）
○新設した墓地、山林果樹園の流出（島原市・女・６０代）
○現在、被害なし（島原市・女・４０代）
○立入禁止でわからない（島原市・男・３０代）
○現在のところ被害なし（島原市・男・５０代）
○被害はない（島原市・女・４０代）
○被害はなし（島原市・男・４０代）
○家の中中カビだらけ（島原市・女・２０代）
○仕事場が警戒区域内で、商売できなくなった（島原市・女・３０代）
○今のところ被害なし（島原市・男・４０代）
○ない（島原市・女・４０代）
○降灰（島原市・男・５０代）
○自宅での商業が出来なくなった（島原市・女・３０代）
○警戒区域ではあるが被害は出ていない模様（島原市・男・５０代）
○避難先によります。被害はわかりません。何の連絡もありません。脱出の折庭の植木等は降灰で覆われた（島原市・女・４０代）
○家や家財にカビとか傷みとかきていると思う（島原市・女・４０代）
○現状では特になし（島原市・男・３０代）
○立ち入りできないので、どうなっているのかわからない（島原市・男・３０代）
○被害の様子はわからないが、警戒区域内にあるため不自由な生活をしている（島原市・女・３０代）
○なし（島原市・女・４０代）
○警戒区域（島原市・男・５０代）
○工場が警戒区域に入っているので、事業が出来ない（島原市・女・５０代）
○立入禁止でわからない（島原市・女・５０代）
○８／１０現在のところ、被害は出ていません（島原市・男・６０代）
○水道が上木場からで壊されたと聞きました。アンテナが倒れ太陽熱が壊れた。植木や盆栽など。畳。冷蔵庫。

テラス（島原市・女・３０代）
○被害はなし（島原市・男・４０代）
○自営業（仮店舗で営業を開始したが営業が困難）（島原市・女・４０代）
○食堂をしていたため、収入がなくなりました（島原市・男・４０代）
○出入りできないので、ひとの話だけではわからない（島原市・男・６０代）
○住んでいない家賃を払うのは損だなといった思いほどです（島原市・男・３０代）
○家には出入りが出来ません。どんな被害なのか全くわかりません（島原市・女・４０代）
○灰に覆われて修復が困難（島原市・女・２０代）
○床上浸水。土石が屋敷に入った（島原市・男・５０代）
○被害状況が具体的にわからない（島原市・男・３０代）
○家に被害はないが、土石流が近くまで来ている（島原市・女・５０代）
○家財、植木（島原市・男・６０代）
○家の廻りが少し土石流で覆われた（島原市・男・４０代）
○畳など床上に土石が積もっている（島原市・女・３０代）
○安全だと思うが詳しい様子がわからない（島原市・女・３０代）
○自宅は現在のところ、火砕流、土石流等による被害はないが、土石流は自宅近くまで流れており今後秋の台風時期にはどうなるか不安である（島原市・女・３０代）
○家賃代がいる。電化製品購入（生活必需品）（島原市・女・４０代）
○家に灰がはいり、すぐには使用出来ない（島原市・男・４０代）
○鉢の植物、ラン類、荷物の持ち出しが出来なかった（島原市・女・６０代）
○被害なし（島原市・男・２０代）
○借家生活の不便。通勤が遠く危険。子供の通学が遠くなった（島原市・女・４０代）
○家には戻っていないので、わからない（島原市・女・４０代）
○今のところ、何の被害も受けていない（島原市・女・２０代）
○現在は被害なし（島原市・女・４０代）
○立入禁止で、被害がわからない（島原市・女・３０代）
○今のところ被害は受けていない（島原市・女・４０代）
○現在のところ被害なし（島原市・男・６０代）
○立ち入りできず、確認できない（島原市・男・４０代）
○灰、かび（島原市・男・４０代）
○まだ、被害まで行っていない（島原市・男・３０代）
○材料置物（倉庫）が全壊した（島原市・女・４０代）
○休業（島原市・男・５０代）
○家そのものには被害はないが、火山灰によるほこり（島原市・女・４０代）
○家財道具をそのままおいて来ている（島原市・男・５０代）
○警戒区域で、家の様子が不明（島原市・女・３０代）
○こどもの学校教材の再購入。幼稚園再入園のための諸経費等（島原市・女・３０代）
○建設重機、資材が焼失（島原市・男・５０代）
○収入減（島原市・男・５０代）
○火山灰による被害（島原市・男・５０代）
○避難することによって出費がかさむ（島原市・男・５０代）
○人的、物的被害はない。警戒区域のため家庭での仕事が出来なくなり、収入が減少した（島原市・女・５０代）
○家がどのようになっているのかわからない（島原市・男・２０代）
○家内のアルバイトが出来なくなった（島原市・男・６０歳以上）
○家（不在による管理不十分）（島原市・女・６０歳以上）
○新築にして１ヶ月住んで、警戒区域になった（島原市・男・３０代）
○避難生活で、自宅で生活できない。庭も草が茂り、家中もかびだらけ（島原市・女・３０代）
○商売を休業に追い込まれ、収入０となった（島原市・男・４０代）
○直接被害は受けなかった（島原市・男・６０歳以上）
○被害はない（島原市・女・４０代）
○雨どいは火山灰で詰まってしまい、家の中はかびだらけ（自分の家に行った人の話）（島原市・女・４０代）
○家の様子がわからない（島原市・男・３０代）
○警戒区域に設定され、家財道具を残したまま立ち入りが出来ない状況（島原市・女・３０代）
○おそらく庭の植木が全滅か？家にはいれないのでわからない（島原市・女・３０代）
○立ち入り出来ないので不詳（島原市・男・６０代以上）
○まだ被害にあっていないが、警戒区域に入っている（島原市・女・３０代）

○家に帰ってみないとわからない（島原市・女・３０代）
○子供の教育にマイナスになった（島原市・男・４０代）
○長期の立入禁止で、家の壁や畳にかびがはえているらしい。降灰で電気製品が壊れている（知人から聞いた話です）（島原市・女・３０代）
○毎日の火山灰に耐えかねて住める状態ではなく島原を出た（島原市・男・３０代）
○警戒区域で、職場通勤が遠くなった（島原市・男・６０代以上）
○住家兼店舗のため営業が出来ない（島原市・男・５０代）
○家に帰れない（島原市・男・４０代）
○降灰による被害（島原市・男・６０代以上）
○勤め先の店から解雇になった（島原市・男・４０代）
○立入禁止なので、家の状態がどんなになっているのかわかりません（島原市・女・４０代）
○なし（島原市・女・６０代以上）
○仕事に影響が出て収入がかなり減った（島原市・女・３０代）
○最小限必要な生活用品（衣類、書類ほか）が充分に持ち出せなかった（島原市・男・３０代）
○立入禁止のため、状況がわからない（島原市・男・４０代）
○被害にあっていない（島原市・男・３０代）
○主人の職場が警戒区域で休業となり、これまでのような給与が受けられなくなり、また再開の見通しもたっていない（島原市・女・５０代）
○全く営業が出来ず収入なし（島原市・女・５０代）
○被害なし（深江町・女・３０代）
○商売地区が減少した（深江町・女・２０代）
○被害皆無（深江町・男・５０代）
○小屋が作業場なので、使用不可（深江町・男・３０代）
○なにも被害は受けていない（深江町・女・３０代）
○作物の植え付け時期がきているが、その作業が出来ない（深江町・女・３０代）
○工事場所が警戒区域内で、工事中止になった（深江町・男・３０代）
○家にはいれないためかびがはえたり、庭木が枯れたりした（深江町・男・３０代）
○植木以外被害はない（深江町・女・５０代）
○家の中がかびで大変。庭の草が大変。冷蔵庫が使用できなくなった（深江町・女・５０代）
○警戒区域に入り、家に入れなくなった（深江町・女・４０代）
○子供と少しの間離れて暮らすようになった（深江町・女・３０代）
○降灰の被害を受けた（深江町・女・２０代）
○区以外の店で自営業をしていますが、売上が落ちた（深江町・女・５０代）
○仕事先の工場が全焼した（深江町・男・３０代）
○商売が出来なくなった（深江町・女・６０歳以上）
○家畜を避難させているので、いろんな面で困っている（深江町・女・３０代）
○家の畳、布団、壁などにかびが付いた（深江町・男・５０代）
○家の廻りのブロック塀が壊れた（深江町・女・４０代）
○家財道具がほとんど持ち出せず（深江町・女・５０代）
○避難場所を何か所も変わり、経済面または精神的に被害を被った（深江町・女・４０代）
○避難のため通勤が遠くなった（深江町・男・２０代）
○乳牛を預けているので収入なし（深江町・男・４０代）
○作業場で仕事が出来ない（深江町・女・３０代）
○家の中はかびだらけ。家の外は芝の中に草だらけ（深江町・男・４０代）
○勤めに行けなくなった（深江町・男・３０代）
○資材、肥料代など支払が出来ない（深江町・男・５０代）
○べつに家に被害はない（深江町・女・４０代）
○主人の汽車通勤が出来なくなった（深江町・女・３０代）
○自営のため休業となった（深江町・女・２０代）
○経済的な被害（深江町・男・５０代）
○空き家になっているので荒れている（深江町・女・５０代）
○直接の被害はないが、警戒区域のため家財道具は全ては家に置いたままになっている（深江町・女・３０代）
○灰が降った（深江町・女・５０代）
○建築業なので機械類を出していないので、仕事が出来ない（深江町・女・４０代）
○これから先ずっと警戒区域が長引けば、家に帰っても草ぼうぼうで家の中にはいれるか心配です（深江町・女・３０代）

○警戒区域のため工場を出て避難して、仕事をしている（深江町・男・４０代）
○避難のため、福祉施設への出費（深江町・男・３０代）
○自営の商売が出来ない（深江町・女・６０代）
○スイカが全然収穫できなかった（深江町・女・４０代）
○被害なし（深江町・女・３０代）
○普段の生活が出来ず職場に通うのに不便であり、肉体的、精神的な苦痛を非常に感じる（深江町・女・３０代）
○仕事に行けなくて収入がない（深江町・女・４０代）
○収入がなかった（深江町・女・３０代）
○灰が降ってきた（深江町・女・３０代）
○家は健在だが住めない（深江町・女・５０代）
○避難所の生活をしなければならない。家に帰れない（深江町・男・３０代）
○仕事が出来なくなった（深江町・女・３０代）
○警戒区域内に自営工場があるため、営業が出来ない（深江町・男・４０代）
○仕事が出来ない（深江町・男・５０代）
○自営業（古物商）が出来ないようになった（深江町・男・６０代）
○はじめから（５／１５より）避難続きのため、家の物を何も出していない（深江町・女・５０代）
○家に損害はないが廻りに土石流（深江町・男・３０代）
○なし（深江町・男・４０代）
○いちごの苗が駄目になった（深江町・男・６０代）
○商売が全然出来ない（深江町・女・４０代）
○全滅です（深江町・女・４０代）
○商売が出来なかった（深江町・男・４０代）
○作物が収穫できないため、収入が入ってこない被害（深江町・女・３０代）

最後にあなたご自身のことについてお聞きします。

(1) 性別

	島 原	深 江	全 体
男性	66.8	52.7	46.3
女性	77.2	40.2	53.6
計	654	288	942

(2) 年齢

	島 原	深 江	全 体
20才台	14.8	28.8	10.2
30才台	38.9	54.1	27.0
40才台	39.1	27.1	27.1
50才台	20.2	16.3	19.0
60才台	16.0	20.9	17.5
計	595	258	853

(3) 職業

	島 原	深 江	全 体
農林業	21.8	31.0	24.6
漁業	1.5	1.2	1.4
自営業	10.6	13.6	11.5
経営管理職	1.0	0.4	0.8
専門技術職	11.4	8.5	10.6
事務職	10.8	7.4	9.7
販売・サービス従事者	8.9	5.8	8.0
自由業	2.4	1.9	2.2
パートの主婦	8.2	8.1	8.2
専業主婦	7.6	3.5	6.3
主婦(自営業手伝い)	4.5	6.6	5.2
学生	0.7		0.5
無職	6.4	8.5	7.0
その他	3.5	3.5	3.5
DK, NA	0.7		0.5
計	595	258	853

その他
○船員(島原市・男・30代)

○社会福祉施設従事者（島原市・女・４０代）
○船員（深江町・男・３０代）
○塾指導者（深江町・女・３０代）

（４）（前問で有職と答えた人だけお答えください）あなたは仕事を今も続けていますか。

	島　原	深　江	全　体
災害前と同じように働いている	３５．５	２３．３	３１．９
休職中	１６．６	２４．８	１９．０
休職中ではないがほとんど仕事ができない	１２．２	２０．０	１４．５
失業中	１７．６	１６．７	１７．３
その他	２．６	２．４	２．５
ＤＫ．ＮＡ	１５．６	１２．９	１４．８
計	５０１	２５８	７１１

その他
○バイト中（島原市・男・２０代）
○アルバイト（島原市・男・５０代）
○ときどき仕事をしている（島原市・男・５０代）
○半分くらい（島原市・男・４０代）
○転職（島原市・女・４０代）
○７月末より本社勤務（島原市・女・２０代）
○パート（島原市・女・４０代）
○働いているが減給（島原市・男・６０代以上）
○転職（島原市・女・３０代）
○べつの職場で働いている（島原市・女・２０代）

（５）島原市・深江町に住んでから何年くらいたちますか（居住年数）。

	島　原	深　江	全　体
５年未満	８．１	８．３	８．２
５年以上３年以下	７．８	６．６	７．４
１０年以上１９年以下	１６．７	２１．２	１８．０
２０年以上	６３．５	６１．８	６３．０
ＤＫ．ＮＡ	４．０	２．１	３．４
計	６５４	２８８	９４２

（６）災害前に一緒に住んでいたご家族は、次のどれにあたりますか（一つだけ○）。

	島　原	深　江	全　体
単身世帯	３．２	２．４	３．０
夫婦のみ	７．８	１０．４	８．６
親子２世代（子供が未婚）	４４．５	３７．５	４２．４
親子２世代（子供が既婚）	３．４	４．９	３．８
親・子・孫の３世代	３２．４	３６．８	３３．８
その他	３．２	３．１	３．２
ＤＫ．ＮＡ	５．５	４．９	５．３
計	６５４	２８８	９４２

その他
○親子、母（島原市・女・５０代）
○両親（島原市・男・５０代）
○祖父、祖母（島原市・男・２０代）
○親、兄夫婦、姪、甥（島原市・男・４０代）
○親子、兄弟（島原市・男・３０代）
○姉妹（島原市・女・５０代）
○親と子（島原市・女・５０代）
○母子（島原市・女・３０代）
○夫婦、親、義妹（島原市・女・６０代）
○４世代（深江町・女・５０代）

（７）災害前に一緒に住んでいたご家族には、次のような方はいますか（いくつでも）。

	島　原	深　江	全　体
３才以下の子供	１７．３	１３．９	１６．２
４才以上で小学校にあがる前の子供	１３．３	１４．２	１３．６
小学生	３０．６	３５．１	３２．０
中学生	２３．４	２６．０	２４．２
７０才以上の方	３０．７	３２．３	３１．２
心身障害者	７．８	６．３	７．３
ひとつもなし	１２．２	１０．８	１１．８
ＤＫ．ＮＡ	１５．４	１８．８	１６．５
計	６５４	２８８	９４２

（８）災害前に住んでいた家は持ち家ですか、それとも借家ですか。

	島　原	深　江	全　体
持ち家	８０．１	９０．３	８３．２
借家	１４．７	５．９	１２．０
その他	１．４	０．７	１．２
ＤＫ．ＮＡ	３．８	３．１	３．６
計	６５４	２８８	９４２

その他
○社宅（島原市・男・５０代）

最後に、今回の災害に関して、あなたのご意見・ご要望がありましたら、どんなことでもけっこうですのでご記入ください。

○①警戒区域についての予備知識が与えられず、その上、避難勧告地域になってからの警戒区域までに余裕の時間がなく、大切なものが十分持ち出せなかった。②上の地域が一部という形でだされていて、どっちに属しているのかよく解らなかった。③欲しい情報がテレビに頼らなければならない程、市の情報や広報が不徹底でお粗末だった。④６月８日の火砕流で家を飛び出し、市中に逃れてから警戒区域になっていることを知る始末でした。⑤主人が怒っていましたが、主人の会社は、６月３日の火砕流から休業になり、災害救助法とかの適用で一時離職者を６月２５日付けで出しましたが、雇用調整助成金の制度のことを知らされたのは７月２５日でした。お役人さんは後先関係ないんだな、平均賃金の６割の失業保険をもらう職員が可哀相だと言っていました。⑥自分たちは一生懸命やっておられるつもりでしょうが、ボランティアや消防団の人たちの一生懸命さと、市や県や国の方々とは何か違うものを感じましたが、これは私だけだけだったのでしょうか。⑦日本全国の皆様から寄せられた義援金や救援物資には感謝でいっぱいです。本当にありがとうございました、このご恩は終生忘れません（島原市・女・５０代・専業主婦）
○権力により立ち入りを禁止するなら、先ず生活費を出す事。全く収入がなく預金もなくなりかけた。市、県に対して。仮設住宅入居者と民間住宅避難民との扱いにあまりの差があり過ぎる。本来なら逆の扱いが本当ではないのか？仮設住宅居住者は生活費が全て支給されている。タダである（島原市・女・５０代・その他）
○国の補償を願っている（島原市・男・５０代・販売サービス業）
○火砕流で被害者が出たが、火砕流自体あまり知られていなく、こんな大被害を受けるとは予測されていなかったと思う。仕方がなかったではすまされないかもしれないけど、今回は誰が悪いのどうとかは言えないと思う。警戒区域が発令されるときは、事前の連絡を私は受けていなかったのであわてたが、連絡系統を確立してほしい。それと、自主避難している方、市内企業に対しての待遇を枠内を越えてでも考慮してやってほしいと思う。仮設住宅設置避難場所の件ですが、霊南、新港、埋立地に建設されたが、津波に対しては安全な場所ではなく、なぜあんな場所に建設されたか疑問に思う。今回の色々の自衛隊、警察の働きに敬服します。大臣さんが色々視察に来られたが、現地では良い事ばかり言って、東京ではあいまいな返答ばかりのようで、もし大臣さん自身の出身地の被害であったら、またちがった対応ではないかと思う（島原市・男・３０代・専門技術職）
○今回の災害に対し、行政として基本法６３条（第一項）に基づき、警戒区域の指定をし、住民の生命を第一義とした所である市長として賢明な処置だと思う。しかるに、政府として特別立法は考えてないとの事、なぜだろうと思う。法を生かした処置がなぜ組み入れてもらえないのか疑問に思う。われわれは法に基づき避難生活を余儀なくされている者として憤を覚える。是非、特別立法を願う（島原市・男・４０代・専門技術職）
○６月３日の大火砕流が起きてから、ともかく島原半島は危険であると感じておりました。住みなれた家を見ながら、もう最後の離別を、涙ながらの思いでした。今でも思います。苦労して築いた家です。一度でもいいから見に行きたい気持ちで毎日を送っています。私たちは諫早にやっと一時の住みかを見付けました。多少の生活用具を積んだ２トン車で８日の夜中に引っ越しました。家賃は４００００円です。台所と六畳に、親子４人が生活しております。山が無事にしずまるのを願って、最後に全国の皆様方に善意のお見舞いを沢山いただき、心より感謝いたします。明るい前途を信じて頑張ります（島原市・男・５０代・自営業）
○幸いなことに、私自身の実家も妻の実家も無事であり、体育館等に居住することなく今日を迎えております。

今回の災害に関して個人的意見としては、実際その立場になればどうなるか不明ですが、あまりにも被害者意識が強すぎるのではないかな？別に国が、あなたたちはそこに住みなさい、そこでこれこれの作物を作りなさいｅｔｃ．と言われた訳ではないのに、補償をせまるのは何か不自然ではないかと思います。私は印刷業をやっています。当然同業他社とは競争をしています。負けたら自分の責任です。６／３の被災地はほとんどが農家です。親方日の丸の体質をもってる人たちです。まあ、今回の災害があまりにも大きいためという事を考えても少し。うまく言えません。この返事が何かの役に立てれば幸いに存じます。ご苦労様です（島原市・男・３０代・経営管理職）

○政府は今まで何の対応もしていない。もう少し被害者の身になってもらいたい（特に総理大臣の力のなさに驚いています。）（島原市・女・３０代・パートの主婦）

○多くの政治家が島原で演説したことのほとんどが実行されていない。もっと政府などが積極的に行動してもらいたい。災害がおわってからと言うだけでなく、今でもやれることはあるはずである。県や市もできればもっと柔軟な対応をしてもらいたい。いちばんの要望は今回の災害が早くおさまる事、これだけである（島原市・男・４０代・自営業）

○思いがけない災害に、今もまだ時々自分たちの置かれている状況を夢ではないのかと思う事があります。この頃は小康状態がつづいておりますので降灰がひどいときには現実にひきもどされます。市長さんをはじめ知事さん役所の方々のご苦労は本当に頭の下がる思いです。警察、自衛隊、ボランティアの方々、それにもまして全国の皆みな様の暖かいご支援にどんなにか心丈夫で頑張らなければと思いました。ほんとうに感謝のほかありません。皆様が一生懸命に取り組んでおられるのですから、これ以上の被害など出ませんように祈るばかりです（島原市・女・６０代以上・パートの主婦）

○１．災害対策基本法によると警戒区域の設定権者が市町村長となっており、災害の責任が市町村長のみにおおいかぶさるため荷が重すぎると思われる。被害が大きくなれば市町村ではまったく処理できないことばかりである。国が動きをあまり見せない事もこの法律がネックになっているとも受け取れる。よって、設定権者を国有地で発生したものについては国、その他については県とするなどの改善も必要ではないかと思いました。２．火山学者の見解の相違について。新聞、テレビの報道で各学者の見解の相違があまりにも違いすぎて、被害者はどちらを信じたらよいか解りません。発表するときはできる限り統一したところで発表をお願いしたい（島原市・男・４０代・その他）

○一年半前、ようやくマイホームを魚見団地の内に建てて、私もようやくパートに出て、生活の方も軌道にのりかけた時の事です。主人の仕事はバスの運転手、給料もほとんどこの災害があって本給だけの生活です。最初は主人の家に身を寄せていましたが、９人家族なので１ヵ月たち、長くなればなるほど、おりづらくなり、一時は体育館へ行こうと考えましたが、子供たちのことや、主人が朝早く不規則なことを考えたらふんぎりがつかず、今は私の実家に祖父母と一緒の生活をしています。仮設住宅に入る見通しもつかず、生活も家のローンもかかえて、長引いたらこの先どうなるか心配です。子供たちも学校は習字道具や体操服など置いたままです。できたらそれだけでも取りに行かれないものかと思っています。私の家はまだ残っていますが、電気や水道も切ってあるとのこと、一日も早く家に帰る事を願っています（島原市・男・４０代・パートの主婦）

○早く家に帰りたいですね。一日でも早く（島原市・男・５０代）

○国道２５１号線を一般車両も通してほしい。警戒区域へ時間を決めて入れてほしい。家財道具を出す時間をつくってほしい（島原市・女・３０代・専業主婦）

○警戒区域の期間が長引き、一ヵ月を親類宅で過ごし、その後借家を借りて生活していますが、持ち家のローンと（７００００）借家の家賃（４５０００）で生活が苦しくなっている。高校３年の息子がいますが、大学受験が目前であり、人生が狂ってしまったような不安にかられています。落ち着いて生活ができないため、なかなか勉強が身に入らない毎日を過ごしています。警戒区域の受験生に特別な推薦制度をぜひお願いしたい心境です（島原市・女・４０代・専門技術職）

○私たち一家は、７日に時間ぎりぎりで着替えをもっての緊急の避難でした。幸い親戚の家で部屋を提供していただいたので、不安のなかで合同避難より幾分落ち着ける毎日ですが、強制規制の中での生活は避難民としては変わらない毎日でもう限界に達しております。この二ヵ月余りの生活の中でつくづく感じたことは、応急体制の不徹底さが目立ちます（上すべりのような気がします）。例えば役所の窓口で尋ね言を聞いても即返答が出来ない係員の配置等、いらだつ住民としては何か腹立たしい事も何回もありました。諸情報の伝達等についても、徹底したやり方とは思えない流し的なやりかたにしか思えない現状です。救援物資等の配布についても役所からのお知らせはなく、地方新聞で自ら知って役所に尋ねる有様では広報活動の在り方がいかがかと思われます。警戒区域の設定についても８月１１日は地方紙によれば規制延長と決定され、私たち住民は４度目の延長に力の抜けたようにがっかりしましたが、横田町長は２６日より状況を見ながら規制緩和の方針の旨の報道がありましたが、為政者でそんな考え方の違いがあるのなら、ご自身大切の考え方ではなくて比較的に危険度の少ない地区の緩和は真剣に検討していただくよう切実に願いたい。ちなみに大災害があってからは幾日か日をおいて山中の火砕流の発生の太陽の引力に関連があるのか？　いつの場合でも大潮の満潮の時それ以外はほとんど小康状態で終わる連日ですので、そんな関係もよくよく考慮していただければと切に願うものです（島原市・男・６０代以上・無職）

○自然災害に対する無力さを感じるとともに、火山国であることを改めて認識した。全国の方々の暖かいご支援に対し、心より感謝しております。そして今後に向けて連帯し努力していきたいと思います（島原市・男・４０代・事務職）
○日本国政府の対応に対し非常に残念に思います。行政としてはシビアでなければならないことも解りますが、私が知識不足でこのような事を書くのかもしれませんが、具体的に国がどうしたこうしたとは聞きません。県市が負担したものは国が負担するのかもしれませんが、国としてまず第一に住民に対し見舞いくらいするのは当然ではないでしょうか。それに比べ民意の暖かさをしみじみ感じます。日本は火山大国という事がよくわかりました。現在の地震予知には限りがあります。この次は保険に対するアンケートを是非組み込んで下さい（島原市・男・４０代・自営業）
○避難者の気持ちは実際に避難した人のみわかること、その立場にならないとわからないと思う（島原市・男・４０代・事務職）
○１．国の対応。２．マスコミの国への働きかけ。３．学者の意見の違い。４．地元国会議員の対応（島原市・男・４０代・専門技術職）
○一日も早く災害前の島原市にもどってほしい（島原市・男・４０代・事務職）
○主人はもともと島原の人ですから、このアンケートを書いても違ってくると思います。とにかく全国からの被害見舞いを本当にありがたい事だと思います（島原市・女・４０代・専業主婦）
○国は畑や家屋を流出した人、被害者への経済的補償を積極的にやるべし。何のために税金を払っているか判らぬ。一般市民の義援金にたよっているきらいがある。調査ご苦労さん。後に役に立つよう頑張って下さい（島原市・男・４０代・事務職）
○観光客を相手にしている仕事に従事している関係上、一日も早く終息してほしいと思っています。こんな時に、本社が他の都市にあり対応が早いところが羨ましく思い、地場産業の弱みをみせつけられました。家が警戒区域であるため、アパートを借りての生活がもう二ヵ月過ぎようとしています。仮設住宅あるいは体育館等で生活をしている人より経済的には一番負担がかかっている気がします。仕事場が島原にあるため多比良を借りていますが、往復のガソリン代もバカになりません。自主避難区域の解除がだされないためにそこにずっと居座って食事を三度三度市から提供してもらう人。キリがないくらいのさまざまな状況の中の生活での義援金の配布の問題。警戒区域で借家の人、持ち家の人。色々と問題があるようで世間の人も色々といっているみたいです。私たち民間にアパートを３万５千で借り、光熱費全て自分持ち、通勤のための油代、こういう生活の中での義援金はとてもありがたく思っていますし、助かります。日頃自衛隊の事が色々といわれますが、この方達の活動の支援がなければ遺体の収容作業或いは現地の状況の捜査等、不可能であることを痛感しました。火山の観測をされる人たちのご苦労に感謝しています。この方達への感謝の気持ち等を皆持っていれば、色々な不満は少しでも和らげられるのではないかと思います（島原市・女・４０代・事務職）
○ふだんは仲が良かった家族が避難先の事でもめるようになりうまくいかなくなりました。市で準備した避難場所には行かずに親戚を回っていたため、経済的にもだいぶ出費が多くなりました。家族に病人や車椅子の者がいたため、市に頼んだが入れるような所はなかった。せめて仮設住宅でも早めに入れてもらいたかったが、区域が比較的安全な所だったためだいぶ遅れそうだとの事だった（島原市・女・６０代以上・無職）
○本当にこんな事態になるとは夢にも考えていませんでした。自然の恐ろしさと人間の小ささを感じます。家も家族も何もかも亡くされた方を身近に知っていますが、慰める言葉もありません。噴火のはじめの頃から、色々な方からお見舞いの電話を頂きました。こんなに遠くの方からと驚く事もありました。感謝しています。それといよいよ引っ越しをしなければならなくなったとき、危険をかえりみずトラックを出して手伝ってくれた友人の方々。今にも火砕流が起きそうな時にとても有り難かったです。そして救援物資の数々。全国の方の善意に本当に感謝しています。テレビか何かで大声でお礼を言いたいくらいです。自分の立場が逆の場合、自分はそうするだろうかと思い考えました。「その時は私達も救けなくちゃね。」と家族で話し合いました。こんな生活がいつまで続くのか、見当がつかず不安です。早く元の生活に戻りたい、子供達も全国にちりじりばらばらになった友達と逢いたいと言っています。最後は祈るだけです（島原市・女・３０代・専業主婦）
○結果論かもしれないが、６／３以前に火砕流のこわさ恐ろしさをもっと報道されていたら、私の同級生も知人も犠牲にならなくてすんだかもしれないのにと思う。私も含めてそれまで火砕流に対する知識が少なかったと思う。２００年ぶりと言っても今の住民にとっては初めての体験。溶岩ドームが現われた時点から火砕流の危険性をもっと予知連とか火山学者とか専門家の声を知らせてあったらと思う。今考えても、当時土石流のことだけを警戒していたように思う。有家町に避難以来二ヵ月以上、こんなに長引くとは予想もしていなかったので、家具類も全然持ってきてなくて、とりあえず最低必要な着替えだけ。職場が幸いにして区域外だったので、私が布津から船で島原へ通勤している。子供達は有家へ仮転校させている。収入的には変わらないが冷蔵庫やクーラー、テレビ等必要以外の出費があった。全国の方々から暖かい励ましや義援金や物資等、物心両面からの救援に心から感謝いたします。「パニックになるから」ではなく「ならない」ためにも、真実と的確な指示を報道を期待しています。家の様子はわかりませんが、今の所無事（船や写真で）のようです。しかし又大火砕流が、あの大きいドームが一気に落ちれば今度はダメかもしれない（島原市・女・３０代・販売サービス従事者）

○今回の火砕流の被害者の大半は報道関係者がいて、その報道員が利用したタクシー運転者が巻き添えを受け被災し、大量の死者を出したと思われ、又、市、警察の警告を報道員が素直に聞き入れていれば危険を報道員に知らせに行った若き警察官２名の命を失することはなかったものと思われる。報道は真実を国民に知らせると言う義務は立派ではあるが、警告を無視して第三者を巻き込み犠牲者を増加させた事について報道各社の反省を求めたいと思います。その後も一部報道機関が市町が定めた災害対策基本法第６３条を無視し、警戒区域に立ち入り写真撮影し報道する事態が多くの報道員の尊い生命を奪った火砕流を反省していないものと思います（島原市・男・４０代・その他）

○自分が実際に避難生活をしているのが二ヵ月以上たった今でも信じられないことがある。また全国からの支援を本当にありがたいと思っている。今まで何があろうと対岸の火事を見る思いで全く寄付や物資等の支援をしたことはなかった。自分の身に災害がふりかかって初めてその有り難さを痛感した。あってはならないが今後は天災ｅｔｃ・で被害にあった人たちに対しなんらかの形で支えてあげなくてはと思うようになった。マスコミの取材は程度をわきまえ相手の立場に立って質問も慎重にしてもらいたいと思う。こういうめにあった者でないとわからない様々な葛藤があることを忘れないでほしい。県はともかくとして国の対応は全くあやふや。首相やお偉方が何人来ても同じ。実際にどうするかの具体策を示さないと救うことにならない（島原市・女・４０代・専門技術職）

○早く自分の家に帰りたい。また国道２５１号線の通行を解除して下さい（島原市・男・５０代・専門技術職）

○５０才、６０才代でも生活出来るだけの収入のある職場の斡旋を要望します。零細業者も復興出来るよう救済してほしい（島原市・男・５０代・自営業）

○小さな自営業者を見殺しにして非常に悲しい。家にも帰れず一月新築したばかりで、畳、大型冷蔵庫もだめになり、仕事も出来ず本当に困っています。国（政府）をうらみます（島原市・男・５０代・自営業）

○６月１７日までは自主警戒区域でしたが、他の県より警察が来ているため警戒区域を知らずに畑にいても警察が仕事をしてはいけないと言って仕事が出来ず、そのためせっかく出来ていた玉葱をくさらせてしまった。警戒区域を知らないため警察と言い争った事もあった。又、豚を１００頭かっていたが警戒区域に今日１２時入るので早く出てくださいと聞き、豚を時価の半値以下で売った（島原市・男・５０代・自営業）

○家に帰って、被害にあっていたら補償をしてもらいたい。国にお願い、市長さまはじめ市民を救けて下さい（島原市・男・４０代・自由業）

○国の対応が非常に悪い（島原市・男・２０代・販売サービス従事者）

○火山活動の終息には長い月日がかかると思う。人命救助が第一であるが終息が見えないためいつまでも避難していたら経済そのものが家庭においても地域においてもたいへんなことになってくると予想される。可能な限り部分解除にむかって検討すべきである。噴火についての予備知識は避難者はすでにわかっているし、人命救助だけを第一に考えるのは大事であるが、人命は助かっても経済がなりたたなくなったら同じ事である（島原市・男・４０代・自営業）

○国の対応のにぶさ、あまさに憤りさえ感じる。災害発生時には矢継ぎ早に各省庁の大臣クラスの方々が視察に見え「後のことは心配するな」といって帰られるが、東京に帰られると急にトーンダウンして、地元からの陳情団への対応にも意識がないように思われる。国は今回の普賢岳の噴火災害による被害と住民の苦悩を本当にわかってくれているのか、島原の復興を真剣に取り組んでくれるのか心配である。雲仙、普賢岳は春夏秋冬、島原住民にとっては朝な夕なに仰ぎ見、心をなごませ、やさしく包み込んでくれ、励まされてきた父なる山、母なる峯でありました。一時も早い鎮静化を祈るのみです（島原市・男・６０代以上・その他）

○①心からのお見舞い、激励に感謝しています。②職業とはいえ、各機関のご努力に感謝します。③６月３日の死傷者が出たことは残念です。火砕流が物凄い高温をもっていることがよく周知されていたならば少し違った結果（少ない）ではなかったろうかと思います（島原市・女・６０代以上・専業主婦）

○私は６月８日の大災害から避難いたしました。山は赤あかと燃え、空も赤く、何か起きたのだなと子供（高校生）と話していました。サイレンの音も聞こえませんし、近所もどなたもいなくて、隣に７３才になるおばあちゃんと二軒だけでした。町内の班長をしておりましたので、何か連絡があるだろうと待っておりましたが何もありませんでした。テレビのニュースで間もなくしてから放送しはじめたので、やはり避難しようかと言って、下のおばあちゃんと連れ立って、車で三人で親戚の家へ一応逃げました。秩父浦、親和町、外港のところまでは家の灯は一軒もなく真っ暗でした。島原城の前に親戚があり、そこへ一応あいさつに行き、避難所へ行こうと、持ち物を準備していると、１０時３０分すぎ頃、ＮＨＫのニュースで一小の避難所が一杯なので森丘公民館へ避難して下さいとニュースで流れました。一小へ行こうと思っていたのが、森丘公民館ということを確認してから車で森丘公民館へ着いたのは１１時でした。その後森丘公民館は自主避難ということで警戒区域ではないということで、何の連絡もなかった。連絡がないからと災害対策本部の方へ言うと、同じ町内にいないからですよと言われ、一小が一杯だから森丘公民館に避難しましたと言うと、誰が森丘公民館へ避難しなさいと言ったのですかと言われ、テレビのニュースですと言うと、報道の言う事を聞いてはいかん、災害対策本部に電話すればいいじゃないですかと言われた。個人一人一人対策本部へ電話していたらどうなるでしょうか。ＮＨＫも誰かが指示されない限りニュースとしては報道はしないでしょう。私達は一体誰を信じればいいのでしょう。町内からの連絡もなし、市の方からの言われること、報道も信じられないならば．．．．．近所の人

も声もかけず、自分のことばかりなんですね、こんな事態の時は（島原市・女・４０代・自由業）
○災害はいつ起きるかわからないが、警戒地域の部分的解除を早急に実行してほしい（島原市・女・２０代・自営業）
○国道２５１号を通してほしい。このまま避難生活が長く続くと来年学校に入学する予定の子供はどこの学校から入学手続きが来るのかと不安です（島原市・女・３０代・自営業）
○噴火が早くおさまることを願うのみ。市指定の避難場所に避難した住民と親類友人宅に避難した者との待遇が余りにも違い過ぎる。むしろ親類宅へ避難した住民を大切にすべきだ。避難場所に避難もしていないのに弁当をもらいに行く人もいると言う。厳重なチェックが必要。避難場所、限定住宅に入居している者のわがままが目立つと言う。親類等へ避難している人はそれなりに気苦労も多い。二ヵ月も経過すれば尚更のこと。市指定、あるいは仮設住宅入居者は厚遇されているように思う（家の焼失、流失者は仕方ない）。仮設住宅に申し込めば良かったと後悔している。豪華客船ユートピアの借り上げは（一億数千万）全くの無駄。それよりももっと有効な使い道があったはず。避難先から汽車、船、バスを乗りついで出勤している者への交通費の援助等。一億数千万は全くの死に金（島原市・女・６０代以上・事務職）
○ボランティアの人々の活動に対して本当にご苦労様、感謝しています。話によると自費で活動されているとのこと、大変だと思います。頭が下がる思いです。このような方々に県、市、町、市内の企業からの愛の手をさしのべてほしい（島原市・男・５０代・販売サービス従事者）
○国に対して特別立法の方向でつよく要望する。今、島原三中は二中の空き教室や敷地に仮設校舎を建てて勉強していますが、出来れば単独の島原三中の仮設校舎をお願いしたい。今、小学校の体育館は避難してこられた方に使われています。家を焼失したり流失された方の心情を察すれば言葉もない次第ですが、私どもの町内に限っては、まだ家の方は健在しております。今、市内の一軒家を借りて一家５人住んでおりますが、家計のためと思って夜の弁当は体育館の方で食べていましたが、中学、高校の子供たちはなかなか一緒に食べようとしません。持って帰って食べさせていましたら、それはだめだとか、あなたたちは家は借りていいねとか中傷とか妬みを言われます。私どもから言わせると、家を見付ける努力もせず、何から何まで世話になっていながら文句をいう私どもの町内の方、欲張るのもいい加減にしろ。家のローンも払って、借りてる家賃をも払って生活している者がよほど苦しい。メシの心配もいらん、金は使わんでいい、ここ（体育館）が一番いい。こんな言葉を子供たちの前でいえますか。運動の場を取り上げて．．．（島原市・女・４０代・専業主婦）
○火砕流の出来事だけをアンケートにとってありますが、普賢岳災害は火砕流と土石流の二つの災害に見舞われています。土石流の事もアンケート項目にひとつもありません。このアンケートは雲仙岳災害となっております。火砕流、土石流とも雲仙岳災害と思っている人には、しょうのない項目ですね。もう少し落ち着いてからアンケートをとることを希望します。住民は今から先の不安があり、国の対応ぶりは驚きです。余分かもしれませんけど私達も税金を払ってきているのに、国民の災害は援助出来ず、外国の災害には多額の援助が出来る政府のやりかたは納得できない（島原市・男・４０代・専門技術職）
○私達は土石流につき危ないとの事で、三中体育館に３回避難し、６月３日夕市体育館に１時間１０分くらいかかって行きました。警察などの交通整理（避難地区）を優先的にお願いしたい。火山活動が安全と思われる時は家に１時間でも帰れるように。今の様子をみていると６月３０日以降は何もないようです。学者の方は火砕流の事しか頭にないようですね。私達は火砕流は海まではこないと思っています。私達は土石流の方が一番気になります。私達農家はブドー、西瓜、メロン、南瓜、などの収穫を目の前にして避難してきました。又８月中旬より秋作の準備の時期でもあります。（水稲も植え付け出来ず１年間の食料もありません。）私達農家は１日も早く家に帰るようにしてもらいたい。２年間の収入がなくなりました。国県市の農家の補償は何もないようです。学者の方もよく考えてくださいますよう宜しくお願いいたします。私達農家は避難生活をして肥料代、ビニール代、油代の支払いをどうすればよいかわかりません。サラリーマンの方はいいですね。家に帰ってからが大変です。乱筆ながら宜しくお願いいたします（島原市・女・５０代・農林業）
○国の災害に対する姿勢がたいへん手緩い。具体的な救援策を早急にたててほしい。国単位の災害対策本部を現地に設置し対応に即決できる体制をとるべきだ。警戒日数をむやみに延長するだけでなく、安全確認ができる日には警戒を一時解除して被害の現状、家屋の現状等の確認をさせてほしい（島原市・男・４０代・経営管理職）
○例えば相手を侮蔑する場合、この百姓がなどと言っていることを耳にする。冗談にしても農民に対する姿勢が如実に示されてはいますが．．．眠れぬ真夏の夜、飛躍ついでにそんなことも考える。島原の農民が未曽有の危機に遭遇している、農民が畑に入れない、ハウスものスイカ、メロンは腐ってしまった。秋作の植え付けもできない。百姓が青白い顔ばして避難所ぐらしの農民は自嘲する。農業後継者がようやくできた矢先に被災した農家もある。向後の農業を担う人たちの溜息が聞こえている（島原市・男・６０代以上・農林業）
○警戒区域で立ち入り出来ないので、農業の収入は全くゼロ、ブドー、西瓜、その分、法を守っているので補償をしてもらいたい。又、家に行く事も出来ないので２時間くらいでも町内毎に時間を制限していけるようにしてもらいたい（島原市・男・６０代以上・農林業）。

○自分が生まれ育った郷がこんな災害を生むとは思っていなかった。又、こんなに長引くとも思ってませんでした。自然の力がどれ程か思い知らさせた。人間の力でこのような被害をもたらし、又、作ってはならないと思う。全国の皆様の暖かい支援に感謝します（島原市・男・４０代・漁業）

○全国の皆様のあたたかい支援ありがとうございます。一生懸命がんばります（島原市・男・４０代・無職）

○私達家族は法にしたがって避難しております。我々は農業をしておりますが、平成３年１月から、春野菜の種をまき、３月に定植し、それには多額の資財を買い入れして、６月上旬から収穫できるようになっておりました所、避難のため収穫が出来ず、そのうえ又延期となれば秋野菜の種蒔きも出来ず、１年間収穫ゼロになり、これからの先の生活が不安になってなりません。ぐちは言いたくないけれど。我々は法にしたがって避難しているので法によって我々の生活を補償していただきたい、以上（島原市・男・６０代以上・農林業）

○全国の皆様方の暖かいお見舞い（特に義援金）と自衛隊のご活躍に深く感謝いたします。国に対して特別立法の制定をつよく要望します。行政に対して一度家に帰してもらいたい（島原市・男・４０代・販売サービス従事者）

○①長崎ＮＨＫテレビが島原はうつらない。②家にかえられなかった７０日間。③農家だから春野菜の出荷が出来なかった。６００万円の減金はゼロ。補償がない（島原市・男・５０代・農林業）

○義援金の配布には私は不公平があるのではないかと思います。農家の場合と勤め人の家庭と比較した場合、農家の場合は畑の収穫をしなければならないものも捨てて避難し、警戒区域であるために一歩も入れない、収入は全くゼロである。勤め人家庭の場合は体育館に避難していても避難先でめしもたべさせて頂くし弁当まで持って勤めに出る。給料はあたりまえにもらうし、そのうえ義援金は農家も勤め人家庭も同じような配布になるのはおかしくはないか。市、県は一体何を考えているのかわからない（島原市・男・６０代以上・農林業）

○ぼく達は農業をしているものですが、警戒区域になったため、収穫をしようと思っていたブドウも出来ず西瓜、メロン、全て施設園芸です。このため残ったのは暖房器の油代、ビニール代、種代、肥料代、残った借金６００万円、本当に困り果てているしだいです。政府は個人的な補償すらしようとせず、火砕流は自分のところまではこないのに家にも帰られず仕事を求めつつも自分にあった仕事もなし、ただ山と市長がにくいだけです（島原市・男・３０代・農林業）

○一時間でも良いから我が家へ帰りたい（島原市・女・６０代以上・農林業）

○人生浮き沈みがあると思います。私達主人５１才、私４８才です。８９の父が昨年他界し母が８７才で健在です。自分たちは農業に魅力を感じて精一杯の一生を。でも息子にだけはサラリーマンでも良いと思い教育に子育てに夢中になりました。でも今まで受け継いだご先祖の田畑に心残りを感じ、宮崎大学の農学部を卒業し、少しでも農民の心、田畑の有り難さを理解した息子になってほしいと思っておりました。理想通り４Ｈに加入、県のバックアップでみごとな近代的ハウス栽培を始めて３年目、後継者、資金、園芸１０００円の資金を親子で借りています。収穫を目前にして立ち入り禁止とはひどいと思います。私達の場合はほぼ安全地帯だから言える事とは思いますが、今になって重油代、ビニール代と支払いはどうなるのだろう。先日、市役所の方から就職についてどんな仕事を望むかというアンケートがありましたが、生活をするだけだったら、補償も何も、どんな仕事でも良い、細々と暮らす事は出来るのですから。ただ、この借金は無能力の私達のサラリーでは、とうてい払う事の出来ない金額です。でも農夫のしわの数には農業ならばこそ、払える借金の量です。もちろん国金を借りられる人はそれなりの作物を作ってみごとに乗り切れる人です。みごとなハウスぶどうも、もうはるかに収穫遅れでどうなっている事やら。命が大切といわれても私達この借金を息子に残してしまうより、山を見ながら収穫していたら良かった。もし本当にシュミレーションのような広範囲な火砕流がきた場合は、私達夫婦の生命保険があります。万が一、命を落とす事があったとした場合はそれで借入金の返済にあてれば、ご先祖様からの財産は手放さなくてもよいし、命があれば良いというものでもありません。この災害が5年先だったら、もしくは5年前だったらこんな借入金はなかったことに悔やまれます。長男２６、長女２３、次女大学２年生、大学、大学、尚まだ３人目が在学中と出資多端な折りでしたので、本当に悲しくなります。テレビ、新聞で「今日の発表は」「今日の報道は」と毎日毎日不安のまま眠りにつきます。せめてもの個人の救いはないものでしょうか。全国から寄せられる暖かい援助に感謝して、一日も早く私達も人様に手助け出来るようになりたいと思っています。避難生活二ヵ月以上、色々な経験は残る人生にプラスのなるよう頑張ります。まず市役所の方、報道関係者、ボランティアの方々、本当によく頑張って下さいました。一人一人の仕事の大切さが痛切に感じられます。日本全国から寄せられる温かいお金が億単位になるくらいだから、一番お金持ちの政治家の考慮される事ですし、なんとか助けてくださるだろうと信じています。狭い日本です。どうぞ後継者を育てた農業を理解され育てて下さい。避難生活もやっと仮設に８／３に入居できてホッとしています。乱筆乱文になって申し訳ありません。力を貸してくださる人へは本当にすがりたい気持ちで一杯です。くれぐれも宜しくお願いいたします（島原市・女・５０代・農林業）。

○法に依る警戒区域設定で我々農業者は収穫目前の農産物の収穫も出来ず大変困っている状態ですので、法によって補償すべきと思います（島原市・男・５０代・農林業）

○家に帰りたい（島原市・女・５０代・自営手伝い主婦）

○私は自分が避難民になって、避難生活がこんなに苦しいものだとは知りませんでした。どんなに古ぼけた家でもいいから自分の家に帰りたいです。子供達もかわいそうです。外の学校を借りて、仮設で勉強なんて。避難

以外の人からの避難民への批判論が多いのにはびっくりしました。そのひとつは、家が流された人、焼けた人、命を落とした人はともかくとして、家もどうもない残っている人はあまりにも良すぎると言います。お見舞い金、義援金の配分方法の問題と思いますが。救援物資の配分方法で、避難者へは食べきれないくらいの物資を配給してある。島原住民はだれもが多かれ少なかれ、災害は受けている（灰は降る、商売は全然だめ）。少しでも良いからキャベツの一個でもよいのです、配分してもらえれば気持ちがいくらか違うのでしょうが。島原市民全体をもっと大きな目でみてほしい等々。いろんなこうした方々の意見とかは、全然、新聞とかテレビとかでは聞いた事がありません。私も仕事上、各家を訪問しますので、いろんな見方を耳にします。そこまで言われなくてもと思う反面、もし自分が逆の立場だったら、そんなに思うかもしれないなあと思いましたので、一言記させて戴きました（島原市・女・３０代・自由業）

○１．せめて２５１号線は無条件で通行させてほしい。２．時間を決めて各町内ごとに家の様子を見にいかせてもらいたい（島原市・男・４０代・専門技術職）

○市役所の対応について。避難所、仮設住宅の人達のみの優遇で、他の人に対して冷たい。弁当も何も市のお世話にならず、災害前と全く同じ、いや、それ以上の出費（家賃等、もとは持ち家）で生活している人達には救援物資もわずかで、それにひきかえ体育館等の人達は、勤めに出ている人の弁当まで勤務先に届けてもらっているとか、ありあまっている品物で、物を粗末にして捨ててしまっている人が多い。仮設住宅に入ってからまで弁当をもらったり、食事時のみ体育館にいる人など、市の職員も知っているはず！そんな無駄金は使わずにもっと他に有意義に使って欲しい。平等に扱ってほしい（島原市・女・４０代・パートの主婦）。

○春夏秋冬の四季の移り変りを教え、自然の恵みをいっぱいに与えてくれたあの雲仙普賢岳が一夜のうちに市や町を飲込み田畑はもちろん、家や家畜や財産と尊い人命までも奪いさり、「火砕流」というこれまでに耳にしたこともなかった災害が起こり、今もなお際限なく山は動きづづけており、厳重な警戒体制の連続する毎日です。日本は火山国でありますので、このアンケートで今後の防災対策に大いに役にたちますよう希望いたします（島原市・男・３０代・事務職）

○一時間でもいいから家に帰り掃除をしたい。畳などカビがはえ、庭には草がはえ、中に入ると悪臭がするというので、このままではたとえ家があっても使えなくなるのではないかと不安になる（島原市・女・２０代・自営業）

○これほど大きな自然災害はなかったのに、市県ではどうしようもないほどの災害なのに、国が積極的な行動をしないのが残念です（島原市・男・３０代・販売サービス従事者）

○国の役人は、「個人の財産は個人で守るのが筋、従って個人補償は考えていない」と言ったそうな。一応お説の通りとしておこう。しかし、どうだ、我々は個人の力で守りたいと願っているのに強制退去、立ち入り禁止で守ろうにも守れない状況だ。守れというなら強制措置は迷惑である。自分に都合のいい論理は納得できない。行政命令をだした以上、行政は個人の財産損失までふくめて補償すべきである。税金をそのように使って国民が文句を言うだろうか。国民あっての政府であることを肝に銘じ国民をもっと大切にせよ。得体のしれない名ばかり助成金、外国へのばらまき、防衛費の膨張など、少しづつ減らせば十分に島原市民一国民を救えるではないか。そして自助努力をいうなら、むやみに立ち入り禁止区域をもうけず、自助努力できる場を提供するのが筋であろう。次に、災害の方策は全く無策としかいいようがない。なるほど噴火活動そのものは未だ進行中とはいえ手をこまねいているばかりの態度は全く不満である。たとえ死に銭になろうと、とりあえず早く水無川の土石を除去し、土石流の起きた地域の上手に砂防堤を作るべきだ。このままでは今助かっている地域もみすみす土石流の餌食になるのは目に見えている。スーパー砂防堤などは噴火活動が落ち着いてからの長期展望の中で作ればよい。とにかくとりあえずでもいいから手を打つべきだ。第三に立ち入り禁止について、立ち入り禁止を強制したのは行政である。それなのに住民が退去したら行政は全くしらんぷりをしている。空き巣が横行しても手を打たず、先日の大土石流の惨事の第一発見者はいたたまれなくて法を侵して立ち入り禁止の地域に入った住民である。立ち入り禁止にした以上、行政はもっと責任をもて。第四にたしかに危険はゼロではないが今のところ２５１号線まで火砕流がくる可能性は少ない。もっと柔軟に対処して財産をもちだしができるようにすべきである。ただひとつありがたかったのは、政府ならぬ、本当の同胞である日本国民だった。救援金、救援物資等々本当によくしてくれた。この恩はいつか絶対におかえしするつもりである（島原市・男・５０代・その他）

○１．土石流浸水の家屋の被害も調べてもらいたい（雨毎に浸水していると思う）。２．条件付きでも、家を見に帰してもらいたい。３．避難住民留守宅の厳しい警戒をお願いしたい（物を取りに毎日のように行っている人もいる）（島原市・男・６０代以上・専門技術職）

○早く２５１号線を通していただきたい（島原市・女・５０代・自営業）。

○被災者救援対策の確立。特別立法制定（島原市・男・４０代・事務職）。

○１．今回の災害についての特別立法を絶対やってほしい。理由：私の家は農家ですが、大火砕流で家、田、畑をなくしたら生活に大打撃を受けます。私の家だけでなく安中地区は農家が多く、同じような打撃を受けます。一時というか、半年、一年はある程度の銀行への預金もあるでしょうが、それから先、家もなく、田、畑もなくなったら今から先どうやって生活していけばいいのかわからなくなります。現実に北上木場やその近くでは、家をなくしたり田、畑が使えない状態にあります。それ故、特別立法をいそいでやってほしいのです。２．ま

た、議員さんたちは前例がないからと言っていますが、昔のことにこだわず新しい、いい意味での前例となるように国会で今やってほしい。今回の国会でぜひ特別立法をつくってほしい。島原のことだけでなく、これからも日本で災害が起こる可能性が強い。そういう時のためにも今国会で特別立法をつくってほしいと思います（島原市・男・３０代・無職）。

○二次、三次災害がおきないように、又、避難する時、収穫まじかのもも、大根、南瓜、色々の野菜がだめになりました。田植えも植えるだけになってから出て来ました。この後の事を思うと目の前がまっくらです。もう少し国の方も考えてもらいたいと思います。又、住宅もあたらず、避難生活が大変です（島原市・女・５０代・自営業手伝い主婦）

○今の状態は市県が対応出来る範囲ではない。警戒区域は国がだしたのに、その後は何もない。総理がいらっしゃった時、お金の心配はいらないと言われたがなんの協力もない。他の土地には誰も行きたくないので、今の所に住めるようにしてほしい。農家は二ヵ月以上も収入がないので、国の特別立法をぜひお願いします。全国のみなさんからの手紙、お見舞い金、本当にありがたく思います（島原市・男・２０代・販売サービス従事者）

○個人営業者に対しての救済対策をたてて下さい。災害後安否の電話連絡がとれなくて困りました（６／８）（島原市・女・４０代・自営業手伝い主婦）

○一時間でもいいから家に行ってみたいです（家の様子がわからない）。国のもっと積極的な対応をお願いしたいです（島原市・女・２０代・パート主婦）

○法的に立ち入りを禁止し、まして農産物が収穫できず収入がありませんので国にて補償をしてもらいたいです。農家生産資金の借用にて困っています、利息のめんどうしてもらいたいです（島原市・女・６０代以上・農林業）

○今の状態では生活の見通しが立たない。春作物の収穫、出荷も災害のため収入がなく、秋冬の作物の植え付けも間に合わない。政府の個人的補償はないと言うのはわかっているが、補償出来ないのであれば自分の分は自分で守る前提のもとに警戒解除をしてらい、農作業を今すぐにでも始めたい（島原市・男・３０代・農林業）

○特別立法や生活補償等の救済策を示してほしい。国の強力な援助の必要性を強調する（島原市・男・４０代・事務職）

○①今回の災害について全国の皆さんからの義援金ならびに救援物資の数々、心温まる思いです。厚く御礼申し上げます。②災害援助について、県および国がもっと真剣に具体的な援助立法を示してほしい。③現在の時点では早期に２５１号線の時間帯通行を許可してほしい。島原と深江の早期復興のためにも。④水無川下流の土砂を多少なりとも早急に除去してほしい。今後、大雨、土石流があれば５７号線下の部落は再度流出するのは必至である。⑤避難が長期化し（約３ヵ月）になるので比較的安全な地区から建物の保全ならびに生活用品の搬出のため、部落単位で時間帯で進入させてほしい。現在でも夜間勝手に進入している人が多く、このままでは強制進入する人が続出することはまちがいない。⑥電気製品などが盗難にあっている事実があると、盗難された本人から聞く、対策をしてほしい（島原市・女・６０代以上・無職）

○乳牛を持って逃げる場所を酪農組合から連絡があったのが何の設備もない所、売るのであれば県市が立合の上値段をきめるとの話だったので売って逃げる事に決めた。でも現実は商売人だけだった。その時は日が迫っていた。値段のほうはもうどうでもよい、ここから早くぶじ牛を連れ出しさえすればよい、生きて出てほしい、こんな自分たちの姿を読み取っているのです。商売人は考えられないような値段を付けてきました。自分たちはＯＫするしかなかったのです。今も考えれば腹立たしく思います。普賢が悪いのだと自分に言い聞かせ納得する。イライラしても過ぎた日は帰りませんので。最後にひとつ、山が静かになった時帰り、又いままであった自分たちの財産が全部もどってきて幸せな生活ができる日を来ることをまっています（島原市・女・４０代・農林業）

○二ヵ月半も避難生活をして家財道具一切持ち出していないので、せめて一時間でも家に入り家の中の様子を見て、生活必需品を持ち出したいものです（島原市・女・６０代以上・専業主婦）

○土石流で堆積した土石を下流から排除するなど二次災害を防ぐための具体策が取れていないことが極めて残念（島原市・男・６０代以上・無職）

○この諫早で避難引っ越し４軒目です。県営住宅に入っていますが９月いっぱいという期限がせまっており、次に住む所をあちこちで探しているのですが、なかなか思うように見つからず、先日、島原の方の県営住宅の何箇所かの受け付けがあって、申し込みに出かけたのですが、所得制限があるとのことできっぱり断られました。子供たちは「いつ五小に帰れると、早く帰りたか」といつも言っていますし、私も、毎日島原へ通っています。せめて子供たちが五小へ通える土地に、そして何月までという期限のない所に落ち着いて暮らしたいと、それだけを願っています。主人が長崎に単身赴任していましたので、すべて私が記入いたしました（島原市・女・３０代・事務職）

○色々な事情により仮設避難所などに行かず、親戚の家、アパートなど借りて住んでいる人への配慮がかけているのに不満を感じ、又、私どもの家は６月３０日の土石流で突然流され、家財道具などほとんど持ち出せず、次の解除を待つ前に流され、市、県の福祉の方へ冷蔵庫などを貸してほしいとお願いしても何回もことわられ、仮設と民間の家を借りている人を差別されている事にいきどおりを感じております。アパートなど民間の家を借りている人は食費も自費、ほとんど行政の方のお世話を受けていないのが現状で、一生懸命自分の生活をし

ようとがんばっているのを忘れてほしくないと思います（義援金などの援助は仮設避難所の方と同じように受けています）（島原市・女・３０代・自営業）

○湾岸戦争の時の政府自民党の対応のまずさでもわかるとおり、日本国の危機管理の不備。災害時や非常時の責任体制が明確でない。だれが指揮命令権があり最終的な責任なだれがとるのか、ハッキリさせるべきである。法律はあるが現実的な対応とかけはなれている。日本人の特性とでもいったらよいのか、戦前の考え方と全く変化がないように思う。一億二千万の人間が右を向けといったら全て右を向く性質があるように思う。非常に危険である。又、マスコミに現在おどらされているように思う。最初はトップニュースで流していたが最近はニュースにもならないような扱いをしているように思う。お金になるのは報道するがならないのはない。火山国日本というような大きな視野で日本全体の問題としてとらえてほしい。明日は我が身であるという感覚がほしい。特に政府が何を考えどうしようと思っているのか知りたい。日本国をひっぱっていくリーダーがいない将来が不安である（島原市・男・３０代・事務職）

○１．同じ被災者なのに、県と市は平等にあつかっていない。２．仮設住宅に入居した人を優遇しすぎている。３．小学生の通学の安全を保っていない（警戒区域指定以外の人をもふくむ）。４．ただ危険と言うだけで警戒区域に指定した住民の生活の保障がない。５．国の対応はなっていない。同国の中の住民がこまっている時に。６．報道関係の日夜の働きのおかげで適切な判断ができてありがたい（島原市・男・３０代・専門技術職）

○今回の災害は全く予想外の事で自分の家を失うようなことになろうとは思いもよりませんでした。溶岩ドームが現れた頃からマスコミの数が急激に増加、路上に中継車が並びヘリコプターが多い時で６～７機も飛ぶような状況で生活に支障をきたすようになりました。報道が大事な仕事であるということはよくわかりますが、住民の生活をおびやかすようではいけないのではないでしょうか。避難所の公民館の部屋の中へ、ぬれた雨合羽を着たまま上がったり、避難して空になった家の電話、電源等無断で使うなど目にあまるものがありました。報道が全てに優先するというような考えが見られました。地元消防団にあれほどの被害が出たのも報道陣のこういった非常識を監視するためだったと聞いています。又、あまりにも消防団にまかせきりにされた監視体制にも問題があったと思います。消防団員はそれぱ本業ではなく、自分の仕事をした上、夜もひるもない警戒で疲れ切っていました。なんの装備もない消防団が警戒区域に入ること自体がまちがいだったと思います。火砕流があれほど危険であることをもっと早く研究者の方々が正確に伝えてくれていたらと悔やまれます（島原市・男・６０代以上・農林業）

○私は島原の大下町より南有馬町の私の実家に６月３日より現在まで住んでいます。その中で小１の息子の仮入学その他学校のことが一番心配でした。テレビなどで五小の生徒は○○へＴＥＬして下さいとか色々とマスコミをとおしてもっと早く連絡ができなかったのだろうか、先生は手探りで生徒一人一人の住所をさがしている状態でした。でも今の仮入学の南有馬小学校では快く入学させていただきました（島原市・女・３０代・自営業手伝い主婦）

○６月３０日の大災害の時、家にいる子供たちに連絡するにも電話が通じなくて困りました。バスでの通勤時間は、普段は１０分くらいですが中央発着所から外港のターミナルまで１時間２０分かかりました。外港から先はバスは行かないので降りるように言われ自宅まで泥沼みたいな道を２０分かかって歩きました。早くおさまって静かな町並みに戻ってほしい（島原市・女・４０代・販売サービス従事者）

○体育館に避難している時、国会議員が多数お見舞いに来られて、報道の前ではいい顔をして「まかせて下さい」とか「お金の心配はさせません」と言って私達に期待を持たせておきながら全く救済の手をのばしてはもらえません。国民の皆様方からは多額の見舞い金を送ってもらっています。それにひきかえ国の方は一切の見舞い金らしいもの、態度がありません。この先の国のあり方に不安を感じています。市で避難生活をしている人と市外で避難生活をしている人では色々な面で違っている事があります。市外にいる者に対しても色々な詳しい情報を伝えてほしい。一日も早く島原へ帰れるよう、行政の対応を期待しています。鐘ヵ江市長さんには感謝しています。これからの活動に期待しています（島原市・女・３０代・パートの主婦）。

○①自衛隊の活動はよく目立った活躍であったのに対して警察官や消防署員の働きがほとんど見られなく、特に数多くの警官はなんのために来ているのか見物気分の者が多い状況であった。②６月３日の大災害では多くの消防団員が死亡したが、それも連絡が（緊急避難）不十分なためである。特に消防署は連絡体制が充実しているので消防団、警察官よりも早く消防署員だけ避難しているために死亡者が出なかった。また、火砕流でやけどした消防団員や警官を見付けて回り、安全は場所まで運送したのも消防団員や水無川上流で工事をしていた人であった（島原市・男・６０代以上・無職）。

○大変な避難生活をして、我が家がどんなにありがたいかという事をつくづく感じました。６／３より５０日間あまり親戚の家での生活でした。お互いに気を使って毎日を過ごす事の大変さを知りました。それから７／２５～８／１２まで有馬武道館での生活、８／１３ＰＭ４時からビジネスホテルでの生活が続きます。これからいつまでつづく事でしょう。我が家もどうなっている事でしょう。目の前にあって我が家に入れない。安全な日には見にいけないでしょうか。何とも落ち着けない日々を続けております。子供たちも早く家に帰りたいなと口癖のように言っています。帰ったら帰ったで家の事が大変でしょうし、持ち家は大変です。家に入れなくてもローンははらっていかねばならないし。その点借家だったら良かったと考えたりします。家賃は支払わなくとも仮設にただで入れるし、義援金も同じにいただいて、いっそ家をローンで建てずに、そのまま団地に入

っていればよかったなどとばかな事を思ったりしています（島原市・女・４０代・販売サービス従事者）
○市、県、国、またマスコミも避難所および仮設住宅にいる人に対してのみ被害が大きいと考えられがちだが、実際は被害は島原市、深江町および近郊に広がっており深刻だと思う。仕事も影響は多方面にわたっており、警戒区域内の住民、事業所がどうこうという段階ではないと思う。それをふまえて、全国から送られた義援金などは有意義に取り扱ってほしい。たとえばフェリーや高速艇の運賃をやすくするとか。それに避難住民も自分たちの力で復興のための努力をするということも、もっと態度で示さなければならないと思う。今回の災害は自然の力であり、誰をうらむこともできないはずであって（もちろん亡くなられた方は気の毒であり十分な補償は必要です）、全国の方々のあたたかいお気持ちをうらぎることなく頑張るべきだと思います。また、要望としては仮設住宅や県や国が斡旋した公的住宅以外に転居した人にたいしても、もう少し配慮していただきたいと思います（島原市・女・３０代・販売サービス従事者）
○確実な情報がほしい。市役所か公民館なりに写真とかの情報と場を作ってもらいたい。個人避難者の情報が少ないため（島原市・男・３０代・専門技術職）
○外国にお金を出す余裕があるなら、島原にお金をだしてほしい（島原市・女・２０代・販売サービス従事者）
○体育館等の避難所にいる人と民間の家を借りている人の格差がある。応急仮設住宅の建設が遅い（私達家族が仮設住宅に入るのは９月末くらいか、入れないかもしれない）（島原市・男・３０代・専門技術職）
○まず、消防の人がたくさん死なれたのは地域の監視ばかりではなく、何日か前にマスコミの人達が空き家になった上木場地区で電気を勝手き引き込んだり、家に上がり込んだりしているのがわかり、それの番もしなければならなかったのではと思えます。残念です。着の身着のままの状態で避難して環境がかわりいろいろなストレスが家族全体におよび、ささいなことでけんかしがち。肉体的にもちょっとした病気にかかり気がめいる。精神的に不安定な状態で（自分ではそうは思わないが）世界的なニュースなどにも全然反応できない。とにかく自分の毎日が精一杯。小学校と中学校の子供たちも他の学校は仮入学していても、心がおちつかないせいか勉強が手につかず、テレビとけんかの毎日。がんばらなければと思いながらも、ついイライラしてしまう。早く五小と三中へ行きたいと言う。一日も早く家に帰りゆっくりしたい。こんどの災害で全国のみなさまのご厚情と地域のみなさんのご好意に深く感謝しております。すべての人にお礼をいうすべがございませんので、ここのお礼の気持ちを書かせてください。ありがとうございました（島原市・女・４０代・専業主婦）
○強制的な警戒区域指定に対する市、県、国の対応。家に帰れない。仕事も休職、補償はどうなるのか（島原市・男・５０代・専門技術職）
○親戚等に避難している人には情報が入りにくく、救援物資配分等にしても情報が入らない。学校もいつでも帰れるように仮設校舎を作るにしても、みなを受け入れられるようにしてほしい（島原市・女・３０代・自営業手伝い主婦）
○全国より寄せられた物資が避難民にくばられるのが遅い。個人でアパート等を借り避難している住民に対する市対策本部の対応、県の対応が非常に悪い。体育館等にいる人との差がある（島原市・男・３０代・経営管理職）
○１．長期間避難となる場合、生命だけでなく、生活の基盤として、又、心のよりどころとしての家、愛着のある家、生活を尊重してほしいと考える。実際に避難をして初めてそのことに気付きました。生命が大切だから避難は仕方がないと人々は言うが、たしかに生命は大事であるが、その人間の生きている生活基盤がなければ人は生きていけないのではないだろうか？そのために状況に応じて短期間家に帰れるような措置も必要であろうと思う。むろん生命の保証は自治体や他の人にではなく自分の責任においてである。２．動物、ペットの避難場所の必要性があると思う。早く避難が必要とわかった時点で場所を確保し、そこで預かりめんどうを見て世話することが出来れば、避難する人々も安心して避難ができると思う（ペットの場合）。又飼育の動物の場所は避難する人々の生活の糧として早急に場所を用意する必要がある。私は動物も又生きるものとして生きる権利があると思う。人間だけが生きていく権利があるというものではないと考えている（島原市・女・４０代・その他）
○亡主人が３年目になります。現在６８才ですが子供が３人おりますがいつまでも世話になれませんが山がなおるまでは自宅には帰れません。家が降灰ていどの被害が出ていますが、立ち入り禁止で情報も入りませんので、不安です。果たして住めるのか。老い先短いため、家を売るにしても足元をみられて売るのもどうかと思いますが、年金生活では都会に行きたくても、土地が高くて求める事も出来ませんし、子供達と同居もできませんし、不安でいっぱいです。保険の方からでも家の灰落とし等の費用が出るのでしょうか。災害費用が出してほしいですね。山が鎮静化すれば災害復旧に期待します。自衛隊の方が心強かったですね。私等弱い者に救いの手がほしいです。書き並べましたがご判読くださいませ（島原市・女・６０代以上・無職）
○自力でがんばっている人にも救援の手をさしのべてほしいです。法律はいらない、お見舞いでいいのです。おくれてすみません、がんばっています（島原市・女・３０代・自営業手伝い主婦）
○災害の処理が警戒区域のため何一つ復旧できない歯がゆさがある。人命が第一ではあるが部分復旧が何らか方法（厳重警戒の中）で出来ないのか？（島原市・男・５０代・事務職）
○国の対応に期待しているので早急に救援をお願いしたい（島原市・男・５０代・事務職）
○現在私は島原市より長崎市の方へ移動し直接の災害被害はまったくありません。しかし職場の同僚の中には今

でも島原市の工場で働いているものもおり生活上の不便さ（避難生活）を聞いております。一日も早く災害復旧および被害の補償をしてあげてほしい（島原市・男・２０代・専門技術職）

○今後、避難生活がつづくようなら、寒さに向かうので衣類、寝具、暖房器具等、老人を抱え、心配です（島原市・女・６０代以上・専業主婦）

○この度は雲仙普賢岳の噴火に際しては温かい志の災害のお見舞いを頂戴致し島原一市民として真心より御礼申し上げます。世界中日本国民の恩恵を一生涯忘れられない痛い思い出であります。普賢岳の噴火で被災した島原市民深江町民を天皇皇后両陛下が平成３年７月１０日お見舞いくださいました。関係筋のお話によりますと今回の御来島は両陛下のご意見で危険の中にわざわざおいで頂いて本当に有り難い事と一様感激を新たに致しております。両陛下も固い床の上に正座してのお見舞いで住民を恐縮させておられる由。本当に感激で申し訳がございません。雲仙岳噴火平成３．６．３夜、恐れていた大噴火があり、大火になったり下火になったりと燃え続け、この時北上木場地区、白谷地区、札の元、水無川付近一夜のうちに想いもよらぬ夢のような世界に変わり、今までの田畑樹木住家と焼け野が原に化し、言葉の申し様もありませんでした。火山研究所の方、外国の研究者、ＮＨＫ、新聞記者、報道陣、島原市消防団、カメラマン、警察官、タクシー運転手、地方の住民の方々、まだ他に思わぬ天才に見舞われ４１名の犠牲者になられ実に胸の痛む存在です。平成３．６．３０夜、大雨で今夜は土石流が市内鎌田町を数拾戸流され近所友人とははなればなれの生活が始まり、何と申してよいか異常な人生と変わり我が身に反省の色が芽生える。私には今日の島原市民はあまりにも幸福で、人の痛さ悲しさを直感していない、早く申せば箱入り市民で、自分中心に生きてきた我欲が現在の私達の姿となったのではないかと思いしらされる由。国の有り難さ日本国中の国民の真心を本日の苦しい中、皆様の恩恵を胸の心に戴き、一日も早く恩恵にこたえる事の出来る人間となり、普賢様が人作りをして下さるのだと早く反省しております。与える者は与えられると自然の神の法則があるからです。私達も豊かな心を養い美しい交流が出来るように努力致します。自然は常に人間に対し二つの顔を持ち愛情に満ちた悲母神の顔、そして苛酷な荒らぶる神の顔。雲仙岳もこの二面性を見せ付けられる由。島原大変以来ほぼ２００年振りの火山活動で初めは驚き好奇心に迎えられ、それは再噴火、土石流頻発と進むにつれ周辺の表情は恐怖に変わって行った。平成３年６月の大惨事を前に言葉なく立ちすくんだ普賢岳を信仰の対象としてきた島原の人々は昔の穏やかな雲仙岳に早く戻ってほしいと祈り続けております。島原半島も雲仙岳を頂上に戴き雲仙国立公園の観光地温泉地と世界の人たちもあのやさしい四季に変わる山の衣替、観光地のひとつとして親しまれて来た由。又島原の生活のたてとして雲仙岳には感謝する事ばかりです。一日も早く噴火がおさまり昔のように住みよい明るい島原に返り国民の皆様が安心して観光の出来るように真心よりお祈りいたします（島原市・女・６０代以上・自営業）

○常日頃から火山の恩恵を受けて生活をしていた私達なのに、自然に対して感謝の心がなくなっていたと思います。大自然に対して（自然破壊をしたりその他人間の物質欲）もっと感謝をしながら観光都市として復興して行きたいと思います（島原市・女・４０代・自営業）

○家財道具一切、すぐ帰られると思い家の中においてきました。ほんの少し着替えだけをもって出ただけです。あれから２ヵ月。もうすぐ秋になり、冬になります。冬服は一枚もありません。１０ヵ月の子供をかかえ、毎日不安でなりません。今から服を買うといっても義援金だけでは足りません。義援物資も一度いただいただけです。今は１ヵ月だけということでホテルにいさせてもらっていますが、親戚の家を借りて入っている私たちは洗剤ひとつから買わなければなりません。仮設住宅に入っていらっしゃる方々にはクーラー、テレビ、冷蔵庫、洗濯機等いろいろな電気製品を与えられていますが、私たちはそれさえもありません。必要とならば買わないといけないのです。今から寒い冬がきますが、暖房器具が買えるかどうかもわかりません。そのような事をいろいろ考えこれから先の事を考えるとノイローゼ気味になります。こんな私たちのために早急に国の対応を待っております。どうかよろしくお願い申し上げます（島原市・女・３０代・専業主婦）

○家があるのもないのも同じ状態。国の補償が絶対必要。家族みながノイローゼになっています（島原市・女・４０代・専業主婦）

○この避難生活のため、私、そして兄弟も諫早、島原間を毎日通勤通学で往復しています。受験生の弟と中学の妹、二人とも始業時間に遅れないようにと、毎朝一番の電車で通っています。家に帰り着くのは夜の７時過ぎで、弟の場合、特に睡眠時間もとれない様子で、このまま噴火活動が続けば、みんながダウンしてしまいそうです。もう少し島原に近い所に仮設住宅でも県営住宅でもあれば、本当に助かるのにと思います。相手が自然だけに何も出来ない事がくやしいです（島原市・女・男・事務職）

○最初に自分達の生活を救う情報として、マスコミ（ニュース）の重要さを痛感し、「正確な報道が一刻も早く知りたい」というのが、緊張感を持って生活していた時期でした。それが日がたつにつれ、山の変化も少なくなりつつ、ニュース等その情報も少なくなりました。その時点から次第に恐怖感と不安、緊張の中で生活していた日から、すこしづつ薄らいできたような気がします。それによって、自分達のこれからの生活を一刻も早く建直すにはどうしたらいいのかという焦りが出てくるのですが、先が見えないだけにやりきれない気持ちです。私達は会社員であるため、生活の保証はあるわけですが、地域の皆さんは農家が大半を占めており、その方たち（また親類）の声を聞けば、今回の災害はこれから先２～３年いえそれ以上の被害を受けておられる中の避難生活は精神的にもかなり大変なものです。国から心強い言葉は受けても、それ以上の事はなかなか得る事はない中、国中の皆様の善意の大きさに、ただただ感謝するばかりです。不安やつらさはなかなか本人で

ないとわからないような気がする中、今後の島原深江町の再建を祈りつつ、頑張るしかないと思っています（アンケートは主人本人ですが、このページは私、妻がペンをとらせてもらいました）（島原市・男・３０代・販売サービス従事者）

○主人は公安関係職員なので、なにか大きな災害があると出勤して行くので災害があると健康面で疲労がないかと不安です。国は今度の噴火災害を現在の法での弾力的解決を進めているようですが、災害に対する法は一過性を想定した法律であり、継続中の災害には合法していないようです。島原深江の警戒区域内の住民、事業所、農家、漁業者は法によって退去され経済的に困窮しています。個人への補償は難しいですが、国が何らかの政策をだしてもらえば、住民も納得すると思います（島原市・女・３０代・パートの主婦）

○危険区域ではあるが、家の中に土石が積もっていて、早急に取り除く作業をしたいと思うが、立ち入り禁止で帰る事をがまんしているが、この状態がさらに続くようであれば危険をおかしてでも帰るべきたと思う。家が立っている状態ではどこからも補償はないから。家のローンもすんでいない現在はいつでも帰ったら住めるようにしておきたいと思うので、一時的にも時間をきってでも帰らせるように、噴火予知体制を充実してほしい（島原市・女・３０代・専門技術職）

○国はもう少し災害にあっている皆様の事を考えていただきたいです。今の政府は何を考えているのか全くわかりません。外国に金を出すくらいなら日本の住民の生活を考えてもらいたいです（島原市・男・５０代・その他）

○心身共に疲れはて、一時間でも一分でも家に帰りたい（島原市・男・５０代・専門技術職）

○老人、障害者、幼児等の避難所ではどうしても集団生活ができないような人達への配慮がなされてないと思われる。焼失したり流失した家の人のみが何においても優先で、このような弱者を持った家庭には相談に行っても何もしてもらえなかった。老人において　痴呆の出現が見られている。避難が長期になれば病状も益々悪化するのではないかと大変不安です。子供も情緒不安定でストレスがたまっているようだ。仮設住宅と民間の家やアパートを借りている人は不公平である。仮設住宅には何でもそろっていて、すぐにでも生活できるようになっているが、民間の家を借りた人は、敷金借家代を払ったうえに、電化製品、台所用品、寝具等ほとんど自分でそろえなければならなかった。せめて家に取りに行けるくらいの何らかの処置をしていただければ良かったのだが。ある程度そろってから、ありますからどうぞと言われても遅すぎる。法の施行の元ででてきた損害に何も補償がないというのは納得がいかない。最初から何の補償もなかったのなら、こんなに長いと法には従わない。自衛隊はいろんな最新式の機器を持ち込んだが、はたしてどのくらい活用したのか？国民の財産を守のも自衛隊の仕事ではないか。あれだけの土石流がおきているのもわからないなんて。市民の通報でわかるくらいだったら、自分達の町や財産は自分達で守りたい。自衛隊もただ見ているだけではなく、これ以上の被害がでないように水無川の土石を除去や、被害をまぬがれている所にはふたたび土石流がこないようにするとかしてほしい。直接的な被害者だけでなく間接的な被害者にも、もっと目を向けてほしい。物価の安定。すべての物価が値上がりしている。主婦としては収入が減って支出が多くて大変です。私達のように町内がバラバラになっている所にはなかなか情報が届きません。新聞もありませんし、テレビ等もなかなか住民に密着したことは報道されません。あとになって知人から聞いて知るくらいです。なんとかしてほしいです。多くのボランティアの方や支援して下さった方に大変感謝しております（島原市・女・３０代・専門技術職）。

○今回の大災害に対する国の無知なやり方に怒りを感じています。憲法における「国民は文化的で最低限度の生活」をうたっているのに何もしようとしない。他国が戦争するのには惜しまず大金を出す今日の政治のあり方に絶望する。私の意見としては、今の自民党のやり方がよくわかった。今度の衆参議院を落選に追込み、ちっぽけな市町村の力の結束をかならずや見せてやろうと思う。地元住民の力を見せ付けてやる。立ち入り禁止区域など設定してあっても３００人、４００人もの住民が一度に入って補償をしない国に法の在り方を考えさせる必要がある。乱筆にて、地元島原を愛する者より（島原市・男・３０代・農林業）

○こういう状態になり大変まいります。一日も早くおさまってほしい（島原市・女・２０代・無職）

○はやく家に帰りたい（島原市・女・３０代・専門技術職）

○政府より首相はじめ各関係省庁の来島では避難民の前では立派の言葉を残し、特に首相は金の事は心配するなと大きい事をいいながら、特別立法の事など毛頭考えていないようで残念です。とにかく雲仙普賢岳などでの特別立法の設定をお願いするものです。特にいまだにもったいないと思います事は、陛下の来島見舞いにお言葉をかけられ、陛下のお人柄はもちろんの事、私ども住民に激をくだされ、各避難の方々は勇気付けていただいた事は忘れる事は出来ないと思っています。首相に一層の救済をお願い致すものです。又一日も早く噴火が静まる事を祈るものです（島原市・女・３０代・農林業）

○農作物の収入がこのため生活収入が心配である（島原市・女・５０代・パートの主婦）

○今回の災害（島原市・男・３０代・自営業）

○今回の災害では直接被害もさることながら、立ち入り禁止、通行禁止による経済的被害も大きく、今後とも継続中で見通しが全くたたない。こんな状況では「へびの生殺し」であり、行政当局は少しでもはやく被害をすくなくする努力をすべきである。警戒区域指定もたんに町内会単位でなく、きめ細かい配慮が必要である。国からの「生きる望み」を与えてほしい。すこしでも早い援助をお願いしたい（島原市・女・３０代・販売サービス従事者）

○私は４０才になる主婦です。夫、中二の長男、小六の次男との四人家族です。６月３日大火砕流で実家に避難しました。着の身着のまま避難しました。ほとんどの人が家財道具を運び出される様子をテレビで見て、自分達も家財道具を取りに行きたいと思って、でももし火砕流が落ちてくればと思うと不安で、とうとう荷物を出す事ができませんでした。そのうち６月３０日の土石流で家が流されてしまいました。家を購入し３年目でした。これからという時でした。神も仏もないと思いました。短い期間でしたけどひとつひとつすべてに愛着がありました。もう二度とあの家での生活ができないと思うと悲しくなります。今回被害にあわれた方すべて同じ気持ちだと思います。また犠牲者が出られた家族の方はその以上の気持ちでおられるでしょう。今いろいろな団体の方々が国を相手に陳情にいかれました。政治家の方々はこんなに心のきずをもって途方にくれた私達が東京まで行って陳情をしないとおわかりになられないのですか。選挙演説では「すべて私にまかせてください、国民の力になります」といわれたのはなんだったのですか（島原市・女・４０代・専門技術職）

○人命優先は理解できるが、こんなに長く立ち入り禁止をされては困る（島原市・女・５０代・専業主婦）

○全国からの真心の義援金は本当にうれしかった。いつまでも忘れないと思う。政府がもっと具体的援助の仕方を発表してくれたら、被災者も安心して生活出来るのにと思う（島原市・女・４０代・その他）

○警戒区域内の立ち入り禁止によって収入がみななくなったのでいくらかの補償を国はやるべきである。人命は守ってもらえましたが、財産ほ保護はできず家や土地が流されるのを見守るだけである。国の対応に対して不満である（島原市・男・４０代・農林業）

○もっと国が個人的負担をしてほしい（島原市・女・５０代・無職）

○自然災害という大きな災害では個人の力は無力に等しく、国の力で防災対策、復旧事業によっていただきたいと思います（島原市・男・４０代・農林業）

○昨年主人が亡くなりまして、どうして生きていこうかと心をいためていましたところこんな災害にあいました。長男が病院に１０年入院しています。自分も体がよわいので働く事も出来ません。毎月入院費と小遣い費を送りつづけています。家なりとあるからと思っていましたのにこんな事になってしまって今からどうしたらいいものかと一人なやんでいます。どうぞよろしくお願いします（島原市・女・６０代以上・無職）

○国、政府など新しく災害基本法を作って救済対策を早期に実現してもらいたい（島原市・男・３０代・専門技術職）

○今後国に生活の補償をお願いします（島原市・女・５０代・パートの主婦）

○今回の災害において、法律に基づく警戒区域の設定がなされ、そのため警戒区域にある農業、商業、工業等の職業活動ができなくなり、経済的損失が大きくなっております。そのため、住民は今後の生活維持や将来の展望に不安を感じております。このような大きな自然災害に対しては、市や県の対応力では限界があり、国の経済的援助がどうしても必要に思われます。しかし国の対応をみると前例がないということで被災者に対する個人補償はできないということに固執しています。この点にたいする政府の対応につよく不満を感じております。今後またこのような災害が発生した場合、被災者が不安なく将来の生活設計ができるように、新しく個人補償も含めて新たな特別立法をこの際、政府や政党にお願いしたい。マスコミの対応についてですが、６月８日の大火砕流発生以後はかなりのテレビや新聞の記者が遠方は避難し、そのあとの大土石流の発生のテレビニュースや新聞の記事が遅く、また報道量が少なかったように思います。今後このまま大きな火砕流や土石流の発生がなかった場合、テレビや新聞等の報道量が少なくなり、一般国民のこの災害に関する意識も弱まり、これからの復興に向けた政府や行政の対応にも影響がでると思われますので、今後とも積極的に報道してほしいと思います（島原市・男・５０代・販売サービス従事者）

○私は農業の一主婦です。今はなにひとつ収入はありません。今後の生活が思われます、心配です（島原市・女・５０代・農林業）

○特別立法を望んでいます（島原市・男・５０代・農林業）

○全国のみなさんにお礼をいいたいです。見舞い金やあたたかいお手紙をどうもありがとうございました（島原市・女・２０代・自営業手伝い主婦）

○私は土石流の時からの避難で幸いに仲の良い友達が家にいらっしゃいというので、そちらに行き、のちに自分で家をみつけ生活をはじめました。私も初めは私は体育館生活もせず幸運なのだと思って避難生活もしんぼうしてきました。しかし何もだしていないので冷蔵庫、テレビ、洗濯機、敷金、家賃と生活におわれ、やすいアパートだとあつくて扇風機を買うのもしんぼうして生活したのです。そうして生活をる私たちには市、県の補助は何もありませんでした。避難所に来た人だけが避難民であって、ジュース一本横流しは出来ませんといわれた。プレハブにはクーラー、洗濯機、たんす、扇風機、みそ、醤油、何なら何まで、せめて扇風機だけでも貸してもらえませんかとたのんでもプレハブにやらないといけないのであたた達にはかせませんというこたえでした。警戒地区に指定して行ったら法律で罰っせられますよといいながら、体育館にこない人には何もしてやらない、これが市県の対応です。新聞、ラジオ、テレビ等も私達のような被害者の事へ報道もしてもらえません。このような被害者が三分の二はいるのではと思います。少しはかげでないている人達の事も報道してほしいです。警戒地区に働いて解雇された人（自宅が警戒区域でないため）何の補助もしてもらえずないている人もいっぱいいます。市県は体育館に来た人はプレハブまであたえた上弁当まで配り、働いた者が損をするという気持ちをうえつけている今頃です（島原市・女・４０代・事務職）

○避難所以外に生活しているので、正確な情報が入手出来ず困ったものの、たくさんの善意の元で物はなくしても生活出来ているので特に要望等はありませんが、一日も早くこの状態から脱して、子供たちとともに心配や不安のない生活を取り戻したいと願っています（島原市・男・４０代・専門技術職）

○島原からはなれた所におります。町のようすがぜんぜんわかりません。こまかい情報がしりたい。私達今、市からかりてもらえなかったので自分達で家をかりました。家賃をはらってすんでいます。市からかりてくれるのがまてなくて自分達でかりたのですけど家賃の補償はありません。かりてもらった人はただだそうです。家のローンと家賃でたいへんです。島原市から１時間３０分はなれた所に住んでいます。今すぐでも市の方に家があれば子供の学校がありますので帰りたいです。卒業式は五小で卒業させてあげたいです。皆様方のあたたかいお言葉、救援ありがとうございました、心からお礼もうしあげます（島原市・女・４０代・パートの主婦）

○避難住民の件。私は親子三人暮らしですが、市で指定された避難場所は８３才の老人又は腰が不自由であったので諫早のアパートを借りて現在に至っているわけですが、連絡又は救援物資等色々な事で不公平であった事を痛感しています。この点も考える必要がある事を要望します（島原市・男・５０代・農林業）。

○全国各地からの義援金（義援品）にはたいへん感謝しています。また市県の敏速な援助もたいへん有り難いと思っています。しかし、国が災害に対しての補償を明言してくれない事が腹立たしい。外国の湾岸戦争には９０億ドルもの援助をしておきながら、国内の災害に対しては今だに具体的な措置をとられないのが残念でならない。期待はずれです！こういった声をもっとマスコミが取り上げてほしいと思います（島原市・男・３０代・自営業）

○国は私達避難民の気持ちになって状況をよく見てもらって早急に特別立法を作ってもらって救済に努力してもらいたい。それが私達の願いです。なにとぞよろしくお願いいたします（島原市・男・４０代・農林業）

○全国民の方々の厚いご支援に深く感謝申し上げます。市町の緊急時の対応体制は十分とは思えないので県国がもっと島原市と深江町をバックアップしてほしい。６／３の大火砕流が１０数分前に予知されていたのにもかかわらず、現場の上木場地区の消防団まで報告されていないという事をテレビで知り、驚き憤慨しております。専門家と市との情報連絡体制はもっと強化されるべきだと思います。市町県国が一体となって、一日も早く災害復旧再建を行なってほしいと思います（島原市・女・３０代・自営業）

○私の家は門内町という所にありますが、そこには今警戒区域なので一歩も入れません。家族は両親と妹、姉、祖母、私の６人ですが、姉は福岡の学校に行っているので今は５人で暮らしています。家を借りていますが、交通の便が非常に不便なので学校に通うのが大変です。ここの家は井戸水なのですが水質検査をしてもらった結果、普通雑菌が１００以下ではならないのですが、びっくりした事に３０００もあったのです。だから飲料水としてはもちろん使えないのですが、歯を磨く時でも一度水を沸騰させてそれをさました水を使っています。食器を洗うときも最後に熱湯消毒をしています（島原市・女・２０代・学生）

○一応、仮設住宅を申し込んではいるのですが、私達の町内（島原の方の地区）は入れるのがまだまだ先になると聞きました。だから知人などにあいている家を聞いたり、不動産に行って一時の間でも入れる家又はアパートなどをさがしています。体育館に避難している人たちだけが避難民じゃありません。こんな書き方をしてはいけないとおもいますが、もう少し平等にしてほしと思います。救援物資が届いた時。みんなで手つづきをしてもらいにいける時もありますが、ほとんどは体育館にいる人たちばかりがもらっているようです。これじゃあんまり差が出てくると思います。国でも外国の難民などにはいろいろ募金などをやっていますが、今日本の島原がこんな状態の時だというのに自分の国さえあまりかまってくれないような気がします。これは私の思い違いかもしれませんがそんな気がします。もう少し、避難住民（体育館又は仮設以外の所で生活をしている住民）の事も考えてほしいと思います（無記入）

○今回の雲仙岳の噴火で避難せざる事は仕方のない事ではあると思います。が、長いあいだ家も畑も仕事場も、今まで生きがいとして来たすべてが、見ることもその場に行く事も禁止されテレビさえ詳しい情報をしる事もできません。これがいつまでつづくのやら今私達は生きじごくと同じ苦しみです。家があっても入る事はできず、あれだけ自衛隊も出動しているのに、待機のままの状態のような毎日が続き、ヘリコプターだっているのに取りのぞいたり出来ないのでしょうか。このまま土石、火砕流でだめになるのを待っていなければいけないのでしょうか。私達は水がなくなり、まして県や国の対応でよぎなくされ、牛を売ってしまわなければならなくなり、ただ同然で手放し今後の生活に不安が続くだけです。牛舎に置いてきたきかいさえ取る事も許させません。すこしでも収入にできたらと思いますが。県や国から借りている金も返さなければならないでしょうから、どんなに働いても食べて生活していくだけでせいいっぱいだと思います。本当に今後どうやって生活していったらいいのでしょう（島原市・女・３０代・農林業）

○土石流で田畑がやられてしまったのに何の補償もない。ハウスを建てたばかりなので借金がいっぱいで、その借金を返すめどが全くない。小学校、中学校、高校の子供が３人、９０才以上の年寄が２人、７０才の母が一人、８人もの大世帯で子供と年寄が６人、どうして生活していいのか全く生活のめどがつかない。なんとかその補償をおねがいします（島原市・女・４０代・農林業）

○正確な情報を早くわかりやすく出してほしい。そうでないと思付で話すことが、人から人へと伝わって、それが大きなデマとなっていく。義援金の配分について、もう少し考えてほしかった。義援金をあまり早く分配しすぎたように思います。お金がからむとトラブルがおこりがちです。もう少し慎重にしてほしいものです。大

島が何年か前に噴火して住民がすべて避難するニュースを見た時は、別に何も思わなかったのですが、今回その立場になってその時の人々の気持ち等がわかったような気がします。やはり、その時その場で同じような体験をしなければ人の痛みなどはわからないものではないでしょうか。今回の普賢岳災害で多くのことを学びました。これからも大変でしょうが、研究がんばってください（島原市・女・４０代・専門技術職）

○親戚の家やアパート等へ避難している者には市役所等からの連絡が何もなされていない。８月１０日現在まではがきの一本もない。大変不平等である（島原市・男・５０代・その他）

○日本は火山列島で噴火災害はいつどこで起きてもおかしくないものです。火山災害の悲惨さと防災復興の必要性を全国に知らせてほしいと思います（島原市・女・５０代・販売サービス従事者）

○１．市長はじめ役所はよくやってくれた。２．全国の人々の善意に感謝する。３．国はもっと災害に対してシンケンに取り組んでもらいたい。４．国は国民の生命、財産を守る義務があると思う。その基本的なことに対して適切な対応をしていない（島原市・男・５０代・漁業）

○私の家はまだあると思いますが、家が災害にあった所とか、家があっても住めるような所か。まったくあわれです。今後、どのように生活を続ければよいか不安な毎日です（島原市・女・４０代・自営業手伝い主婦）。

○皆様毎日ご苦労様です。私は島原に生まれ島原を愛した一老人です。初めて体験する災害、避難生活二ヵ月余りになります。家の無事を信じ短時間でもいいのです、帰してもらえる事をお願いします（島原市・女・５０代・無職）

○警戒区域はわかるが、警告がでて一度も帰れないので、せめて一時間だけでも家にいけるようにしてほしい。町別とかでもよいので。そうすればかくれて警戒区域にいこうとする人が少なくなるのではないでしょうか。特に雨が降り、土石流が発生したときは一番心配で、次の日は家に行きたかった人が多かったようです（島原市・男・２０代・事務職）

○警戒区域を解除してもらいたい。２５１号線を通してもらいたい（島原市・女・６０代以上・無職）

○現在、諫早市内の借家に住んでおりますが、ちょうど２ヵ月になります。その間義援金や物資の給付をうけましたが、県や市からの通知はなく、近くに避難して来ている人からの情報で知り、受け取りに行きました。役所からの連絡をもう少しスムーズに出来ないものかと思っております。国の対応を早くしてほしいと思います。私ども年金生活者はどうにか食べていけますが、農家や工場経営者等の対策を早くしてほしいと思います。警戒区域も徐々に早く解除してほしと思います。二ヵ月も留守にしておりますので、一回か二回は見に行くか、家の中にも入ってみたいと思います（島原市・女・６０代以上・無職）

○避難生活の費用など、どれくらい県がだしているか市がだしているか、又、電気製品などの出どころなど知りたい。個人事業者の国の補償を望む（台風や地震などと違って草一本取ってはならない国が管理している山により被害をうけたので）。現在国民宿舎に避難しているが、この費用の半分でも、それ以下でも現金でいただければ自分で民間の住居などに住みたい。アンケートの項目にない事まだたくさんあるように思います。個人的にお答えいたします、何なりと（島原市・男・５０代・自営業）

○家が心配で早く帰りたいが、しょうがないのでがまんしている（島原市・男・５０代・その他）

○１．食事の事ですが、お店の選び方に不満です。同額の弁当とうかがっておりますが、余りにも差がありすぎて、市はもっとサービスの良い店をどんどん利用した方が良いと思います。米のまずさは腹が立ちます。２．ホテルも上記と一緒です。暗い部屋の（蚊）の発生の部屋はなるべく利用しないでほしいです。何でも、どんなものでも利用さえすれば良いと考えてはいけないですね。金額とにらみ合わせて良心的な所をおおいに利用して下さい（島原市・男・６０代以上・自営業）。

○警戒区域が解除されたらすぐ生活が出きるように電気、水道の復旧を早くやってほしい・現在でも、時間を決めて自宅を見にいけるようにぜひ対策を考えてほしい（そのままでているので外出着などがなくて大変困っている）（島原市・女・５０代・事務職）

○ドームができた時に火砕流についてくわしく、ガス、高温等の恐ろしさを報道してもらいたかった。国の方針が災害は自力復興がたてまえと言っているが、上木場の人達、火砕流、土石流で災害にあった所はとても無理なので国の力を願いたい。外国ばかりいい顔ばかりしてないで、一番大事な国民を大切にしていただきたい（島原市・男・４０代・販売サービス従事者）

○救援物資の配分について。聞くところによると体育館、公民館等にいる人と知人、親戚等又旅館等にいる人とで非常に不公平な物配布がなされたいることを聞いている。総員名簿が完備してあるわけであるからどうして一品づつでも公平に配布されないのか非常に心外である。市からの情報が、ホテルにいるからといってなにも配給がぜんぜんないこと（島原市・女・６０代以上・自営業手伝い主婦）

○早くスーパー砂防をつくってもらいたい（島原市・男・５０代・自営業）

○マスコミ取材おことわり。死ににくるようなものだ（島原市・男・５０代・事務職）

○早くいままでの生活が出来るようのぞみます（島原市・女・５０代・自営業）

○災害の突発性というものを強く感じた。短期間の避難は５月にあったが６月３日以来、家も見れず気掛かりです。友達や親類の者も亡くなり悲しい出来事でした。しかし現在の事、子供や親の事を考えると、のんびりとはしておられません。今を生きるために、幸い子供たちはとても元気でホッとしています。国が先頭に立って災害対策に本腰を入れてくれる事を願うとともに、山が一日も早く鎮静することを祈ります。仮設住宅にも今

回、入居して新しい生活が始まりました。普賢が目の前に見え、火砕流もよく見えます。まだまだ大きいドームが目に映り心配です（島原市・女・３０代・専門技術職）

○一日も早く警戒が解除され自分の家に帰り、被害のていどを知りたいと思います。畑の流出はわかっているので、どの程度かしらないが自分の力で出来るものなら一日も早く復旧して、生産にはげみたいと思っています（島原市・男・６０代以上・農林業）

○①今回の災害に対して、私が一番心配した事は子供たちの勉強の事です。自分達は避難生活をしていても少しの辛抱をしていればそれですむ事ですが、子供たちの勉強の遅れはどうする事も出来ません。特に来年受験の子供を持つものにはそれが一番に心配です。やっと８月１日から授業を再開しましたが、その前に休んだ数十日はとりかえしがつきません。仮設住宅を作るのも急がれますが、教育も国の重要な政策の柱です。こうなる前にもう少し真剣に子供たちの事を、国も考えてほしかったと思います。②日本国民は憲法で必要最低限の生活を保証されています。体育館や公民館かどの避難生活が必要最低限の生活と言えるでしょうか。まして収入も全然ない人達もいます。国会での海部首相の答弁を聞いていますと災害復旧にはそれ相当の金は出すが、個人の生活補償は出来ないと言う。じゃあ収入が全然ない人達はどうやって生活して行けばいいのか、当然こういう時は国が救けてやるのが当然ではないか（島原市・男・４０代・その他）

○農作物が全部ゼロですのでなんとかこれから先きが不安ですので、その辺をよろしくお願いします（島原市・男・６０代以上・農林業）

○家に道具を取りにいきたい（島原市・男・６０代以上・無職）

○一回でも自分の目で家の状態を見てみたい事。２ヵ月余りの警戒区域のため、避難所生活です。ちょうど農作物の収穫時期などに一年に一回だけの収入がゼロになり、８人家族がいかにして生活が出来るのか心配の種です。国が法でしばって収入が全然出来ないのだから、その分国の責任によって休業の補償をしてもらいたい。田畑も流失、埋まった田畑が６反分からありますが、今後また大雨で全部の田畑を流されるかわかりませんが、復旧にあたっても当分の年月は収入はすべてゼロですので長期で無利子の復旧資金の融資を願います（島原市・男・６０代以上・農林業）

○特別立法で国に災害についての経済的な各種の補償をぜひしていただきたい（島原市・男・３０代・事務職）

○県、市は避難所や仮設住宅の人々には手厚くいたれりつくせりの対策をしているようであるが、自分で家をさがして避難したものに対しては非常につめたく、ある市議など自分で家をさがした者は勝手に出ているし、経済的にもゆとりのある者だから、何もしてやる必要はないと公言した。その話も耳にしました。全くけしからん発言だと思います。県、市ともに同じ避難生活を送る者である以上、同等に対応していただきたいものと思います。この点が今回の災害にたいして最も感じた事です（島原市・男・６０代以上・無職）

○被災者に対しての個人補償を国がぜひやるべきだ（島原市・男・６０代以上・漁業）

○強く感じたのは、義援金やら物資をいただいた時、とても助かり心から感謝しました。自分も災害にあい困っている人のためにおかねをだすという事の大事さを強く思いました。今まであちこちの災害当でよくテレビ、新聞などで義援金を呼び掛けられても、よそ事のように思った自分がとてもはずかしく思いました。全国の皆様に本当に感謝したいと思います。災害自体は個人があれこれ考えても仕方なく、ただじっとおさまるのを待つしかないと思います。その間、団体、町内いろいろな組織を作り励ましあい、助け合って今後の事にどのような動きをしたらよいか考える位ではないでしょうか。専門家のかた達もそれぞれおっしゃっていますが、いい研究材料に（代償はおおきかったですが）なったのではと思います。国会議員には腹がたちました。かっこうだけは避難所を見舞っただけで。国会議員の仕事って何なのでしょう（島原市・女・５０代・専業主婦）

○長女宛てにアンケート用紙が送付されましたが、るすでしたので別人が記入しました。たいへんな調査だと思いますが、頑張って下さい。結果を楽しみにしています。できれば被災地区を中心にした同心円的な地域割りをされて、遠隔地になるとどんな意識を持っておられる方が多くいるのかも知りたいと思います（島原市・男・５０代・事務職）

○国が特別立法をやってほしい（島原市・男・２０代・経営管理職）

○国にもっと力を入れてもらいたい。湾岸戦争の出資金の時のように（島原市・女・２０代・パートの主婦）

○自然災害なので仕方がない事なのに、特に島原市の方はとくに市長は良くやって下さいます。行政が立入禁止を強制していると不満が多いのですが、それは何も市のためではなく人命尊重の立場からである事をもっと自覚すべきです。今回の事で大勢の人との共同生活は地獄だったと言う人もいれば、貴重な体験とも思えます。義援金の多さにもびっくりしました。日本はやはり金があるのだと痛感して、また温かい心の方が多い事もしりました。今度の災害があったら小額でもかならず募金します。長引く災害だと思います。今後の事を思えば、ためいきがでます。これはみなの共通の事と思います。ボランティアの方、慰問の歌手の方、落語家の方、他の市、県職員の方、天皇、総理大臣、いろいろの方のお目にかかれました。皆様一生懸命で島原市民の方がなにかさめた心の様で申し訳なく思える事が多い様でした。ずっと避難していますので目のあたりに危険を感じずに暮らせた事を有り難くおもいます。仮設住宅も不満を言えば、自分の家の思いをすれば満足出来ませんが、住心地も悪くありません。要望は国に特別立法をいう事のみですが、みな結構就職したり、以前と変化ない生活をしている避難民も多いと思います。やはり自立は自分で（島原市・女・２０代・事務職）

○心身ともに疲れました。体験された事のない方は理解出来ないと思います。しかし「人」の心が良くわかりま

すね。私のまわりの方や全国の皆さんの温かい救援物資、お見舞い金、その他に本当に厚く御礼申し上げます。是非この皆様方の温かい心に感謝している事をお伝え下さい。また、日本国民で良かった、日本の国は幸せな国だとつくづく思います。そして日本の国、自分の国に「ほこり」を持って、日本国を大事にして外国（世界の国）と平和な関係を持って助け合っていくと良いと思います。又国会議員さんはもっと現状に入り込んでしっかりと口先だけでなく何事にも実行して、ありのままの現状を知って対応してほしい。稚拙な字、誤字で大変失礼ですが、正直にアンケートに取り組んでお答えしたつもりです。このようなきめこまかな調査をされ今後に役立てて下さい、ご苦労様です（島原市・女・５０代・自営業手伝い主婦）

○火砕流の危険がおおきいと思ったのは６月３日に一瞬にして犠牲者を一のみにした事。長崎の原爆を思い出し火砕流の恐ろしさが身に染みました（島原市・男・６０代以上・専門技術職）

○大変恐ろしいものを経験いたしました。今後このような事が起こらない事を願います。今回の事については県、各市、市長、町長、警察、消防、自衛隊の方には心より感謝いたしておりますが、国の方がもっと強く率いて下さればと何度か思いました。わたしたちの目に入らない所があるかと思いますが手ぬるいと思います（島原市・女・２０代・専門技術職）

○（災害対策本部に対して）避難住民には体育館、公営、民営などいろいろな所に避難している人がいるが、体育館などにいる人は、食費など全くかからず、出費もゼロの状態。しかし民営のアパートなどにいる人は光熱費、食費、家賃、すべて自分たちでやっていかなくてはならない。体育館などにいる人にも食費ぐらい自分で出してもらうようにしたらいかがですか。そうしないと「働く意欲」もいつまでたってもわいてこないのでは。それに公営に入っている人は、家賃は免除、民営の人はそこまで面倒みてくれない、あまりにも不公平だと思う。そして中学生の弁当の事も聞いたけど、体育館にいる人は弁当つき、その他の人は自分たちで作ってくるか、パンを買うか。どうしてそういう事があるのか。アパート暮らしなどをしている人は、それなりに出費が大きいのに、弁当の配給をするのなら全生徒にしてやったらどうだろうかと強く思う。（マスコミに対して）同じところから映しても何にもならず、島原半島外に出ている人もたくさんおり、地元の様子をよく知りたい。それに警戒区域に指定され、家には帰れないので、一目自分の我が家の様子を知りたいのがみんなの気持ちだと思う。だからヘリコプターなどを使って、くわしくゆっくり撮影してほしい。そして、その様子を特番などで放映してもらえばほんとうにうれしい（島原市・女・３０代・農林業）

○火山活動の詳しい情報と真実の情報がもっともっと知りたいです（島原市・女・３０代・専業主婦）

○６月３日大災害があった日から家に帰る事が出来ず避難生活も２ヵ月を越えて、今からの生活を考えると不安の毎日です。私達に苦しみの生活は避難している私達しかわからないようです。島原市内の中でも安中地区の住民しか理解する人はいないようです。だから国は何の補償もしてくれないのだと思います。私達安中地区の住民は本当に恐い目にあったんです。それは一生消えない出来事だと思います。それをもっとマスコミ、新聞等と通じて国にうったえてほしいのです。国のえらい方はご自分が私達のような体験をしていないのでわからないんです。何人もの方々がお見舞いにて来て下さいましたが、ほんの１～２時間その場所へ来たくらいで何かわかるでしょうか？と言いたいです。その時も皆さんは心配しなくていい、お金はなんとかするので安心しなさいと、子供だましのような事を言って帰られました。結局ウソだったではありませんか。私達は大人です。子供をだますような事は言ってほしくありません。この様な国の対策では私達島原深江町の住民は信じる事ができなくなるようです。まだまだ山の噴火は鎮まりそうにありません。これから私達住民はどうなるのでしょうか。国は私達をみすてるのでしょうか！！全国の皆様から送っていただいた義援金をいただいて、私達住民はとても助かっております。皆様のあたたかいお心とてもうれしく有り難いとつくづく思っているのです。皆様の善意だけが今は住民のすくいだと思っています（島原市・女・３０代・自営業手伝い主婦）

○雲仙に２２年借家に住みやっと島原に３年前に住むようになりやっと家を建てましたが避難させられ家の事が心配です。少しの時間でも入れてもられることをお願いしたいと思います（何一つ持って出ていないので不便を感じるようになりました）（島原市・女・４０代・自営業）

○雲仙岳災害により多くの方々から心配していただき、とても感謝しています。しかし国会議員の方々はどんなでしょう。それはもうとても大変ですね、頑張って下さいと口上手におっしゃいますが、「うわべ」だけ、心ではどう思っていらっしゃるかわかりません。今まで国会中継は見たこともありませんでしたが、こういうことがありまして、興味を示して見ましたが、がっかりしました。国会ってこんなものだったのか、そんなにまじめに選挙にのぞんでもたいしたことはない、口が上手であれば誰にでも出来そうなことをしているのだなと思い、がっかりしました。こまっている人の生活まで国ではめんどうみれませんと言った海部さんの人間性をうたがい、田舎に住んでいる私たちにはそういう人もいるんだなとびっくりしました。海部さんも自分の身内の人が島原に住んでいたら又話はちがうんでしょうけど。他人事。何だか一所懸命やっていると言っている海部さんには悪い事を言ったかなとは思いますが、海部さんの思いが私達に伝わってこないのですみませんね。私には６ヵ月の子供と２才の子供がいます。雲仙にはまけずがんばっています。ここに書いたことで気分がはれました。悪口って誰にでも言えることではありませんからね。乱筆乱文ですみません、みなさまもがんばってくださいね（島原市・女・２０代・無職）

○避難場所の設備が不十分・・子供が小さいとまわりから「うるさい」「目障り」等苦情が出る。子供は住み慣れない場所で病気になる（発熱等）。仮設の不足・・地域によっては早く申し込んでいてもあとの方に回され

てしまい、なかなか仮設に入れない。役所が勝手に決めている、何も考えていないくせに。役所の対応が不十分である・・救援物資の配布のしかたがめちゃくちゃ。避難場所と親戚の家にいる人との差がありすぎる。仮設には何でも配布するが、他の場所にいる人には配布しない。役所の身勝手すぎる。自分が避難している人の気になって対応すべきである。役所の人はふざけている（島原市・女・２０代・パートの主婦）

○今まで災害にあった事がなかったので、早く前のように落ち着いた生活がしたい。はやく島原へ帰ることを祈ります（島原市・女・４０代・自営業手伝い主婦）

○避難生活のために、いろんな面でお金が必要になりました。新築したばかりでローンがことが心配です。低利子にしてほしい（住宅金融公庫）。夫婦子供避難生活のため別居中です。早く一部解除してほしい（島原市・男・３０代・事務職）

○国から、いろいろな面で援助してもらいたいです。仮設住宅ではなく、長く住めるように県営、市営住宅のような住宅を建ててほしいです（島原市・女・２０代・パートの主婦）

○主人の勤務先関係団体による積極的な住宅の斡旋があってほしい（島原市・女・６０代以上・専業主婦）

○８／１１日現在、自宅は火砕流、土石流の直接被害は受けていないが、今後２、３回雨が降れば自宅もあぶないと思う。事実、家から１２０Mの近所まで土石流がせまっている。もしくは時間をおいてもう一度アンケート調査があったら、回答内容はかわっていると思える（島原市・女・６０代以上・農林業）

○以前NHKのアンケート結果をTVで見たが、あまりかみくだかれた結果が報告されていなかったような気がした。今回この様の調査を初めて受け取った訳だが、この結果をもしよろしかったらお手数ですけどお知らせ願いたい。又、この結果を検討のうえ、是非新聞、テレビ等マスコミを最大限利用して国民に広く伝えていただきたい。今後のご健闘をお祈りいたします（島原市・男・２０代・事務職）

○１．現場監視者へのすみやかな伝達。２．正確な情報を知りたい。３．普賢岳と眉山、地震との関連、今後の見通し等知りたい。それによって長期になるようであれば、現住所で生活基盤をと思っている（島原市・女・５０代・自由業）

○災害にあってしまって何もなくなってしまいましたが、もう少し火砕流、土石流のこわさが事前にわかっていれば、最小限の被害ですんだのではないかと思います。今回の場合最大の被害をだし、国は何の補償もないという事ですが。全国の皆様の善意だけにすがっている様です（島原市・女・５０代・自営業）

○特に今度の災害は長期化の様相を見せ、現在もいつ活動がおさまるかわからない状況であいますし、一過性の風水害の災害でなく他に例を見ない特異性の災害であります。特に申し上げたいのは、警戒区域の設定によりすべての物を放棄してきたのでありまして、家財道具、農作物、牛、豚、鶏などの生きものの生殺しであり、誠に無惨であります。大災害が出ております。法の基での警戒区域設定であり、法の基での補償、救済を考えていただきたい。今の政府の対応を見ていると、何もそのような事に対しては前向きの言葉が出てません。誠に残念でなりません。全住民が死活問題であり、大変な事態です。日本国民の皆様、マスコミの皆様、私達被災者に多大なご支援をお願いいたします。現在は皆様方の温かい善意によります義援金、見舞い金で生計を立てているのが現状です（島原市・女・４０代・農林業）

○私は養鶏業で４８０００羽を飼育していましたが、家、鶏舎は無事でしたが、警戒区域のため立ち入り禁止のため飼料、水をやれないためみんな死亡しました。私は法律が災害です。金額にすると死亡したぶんだけで６０００万です（島原市・男・６０代以上・農林業）

○火砕流で家は焼失し、畑は流失し生活先の見通しは全然出来ず、家屋の火災保険は３％しか払われず、自然災害とはいえ、ふみつけられた上、うたれる始末で、余りに政府のたいまんにほとほといきどおるばかりです。生活の道が開けるように補助される事をのぞみます（島原市・女・６０代以上・農林業）

○国道が通れなくなったため、やむをえず島原市外に転出しました。アパートをかりてから市の斡旋のアパートがありましたが、すでにかりたあとでした。それから今日まで、市から町内から何の情報もありません。テレビ、新聞でみるのみです。同じ避難していても市の体育館にいる人には、ここまで！と思う事がたくさんあります。生活している上で本当に大変なのは自分でアパートをかりた人達だと思います。すべてゼロからスタートしなくてはならないのです。お弁当を取りに来て下さいといわれても、２時間かけて島原に行く毎日では不可能です。自然災害だから、自分の力で立直らなければならないと考えています。しかしもう少し平等にとも思います。自分や友人、知人が少しずつ変わって行くのがわかります。人間の醜さ、ずるさが見えて、聞こえて、感じられて、悲しくなります。早く普賢岳がおさまり、一日も早く復旧作業により安中地区に同じ顔ぶれがもどってくるように祈りたいですね。これ以上人間の心をうしないませんように！（島原市・女・３０代・自営業）

○税金をしっかり収めた国民にもっと手を差し伸べてほしいと思った。外国にばかり持ち出さないでよと海部首相に言いたい。いろんな方からの温かい援助金や救援物資、とても有り難く、今度日本列島どこかでなにかあれば、私個人からでも援助金を送りたいと思っています（島原市・女・３０代・パートの主婦）

○一日でも早く国道２５１号線の開通（島原市・男・３０代・販売サービス従事者）

○政府側の対処がおそくて、金銭的な援助が少ないように思う。特別立法にしても何にしても、きちんとした対応がない。市役所側の対応は下っぱの事務的な対応で延々行き届かない事が多い。マスコミの方に協力していただいて、テレビ、新聞でも報道等で国を動かしてほしい。一市民が署名等しても効果はないと思う。地元の

大臣さん、全然役に立っていない。次の選挙、絶対こたえますよ。全国の皆さんへ。たくさんの義援金に大変感謝しています。ありがとうございました。毎日の生活に役立たせていただきます（島原市・男・３０代・販売サービス従事者）

○島原市議選挙中の時、夕方７時くらいだったと思いますけど、選挙カーのマイクで候補者の名前を連呼しているので、広報車が災害の事を放送して回っているのと勘違いして窓をあけて聞いていたら、選挙カーとわかり、まぎらわしいと思いました。選挙期間中、最後の方は自重してありましたけども．．．（島原市・女・３０代・専業主婦）

○①島原半島の道路が混雑している。広域農道を早く整備して完遂してほしい。②避難救援物資をもらいに行く時、身分証明をするため、わざわざ県や市は住民票を取らせて身分を証明させる。保健証か免許で証明できるはずである。市や県は避難民にわざわざ金を使わせている。なるべく簡単にすませてほしい（島原市・男・６０代以上・事務職）

○火砕流で（５／２６）で火傷した人が出た時から避難勧告をだしてもらえたら、６／３の死亡者はでなかったと思う。今後の災害においては早く手を打ってほしいと思います（島原市・女・３０代・事務職）

○わたしたちの場合は体育館生活を経験していないので、その人達の不満等はわかりませんが、市外に避難している私達が思うには国もいくら小さい島とはいえ、もっと真剣に考えてほしい。やはり長年住みなれた島原にはぜひ戻りたいという気持ちは変わりません。これから先、どうなるのか心配です（島原市・男・３０代・その他）

○今回の災害で、私どもは親戚の家へ避難して約２ヵ月半過ぎました。子供がまだ小さいので、とても避難所へはいけないと考えたからです。私の友人も高校進学を控えた子供さんがいるため民間のアパートをかりている者がおります。避難所以外で避難生活をしている人は全体の何パーセントくらいだったのでしょうか？そういう人達に対して市や県の対応はとても十分とは思えません。マスコミも取り上げては下さいませんでした。足元を見られ、物件の割りには高い家賃、敷金を支払わされ、気を使い、お金を使い．．．最初から避難所にいなかった者にはあとで体育館に行っても入りにくい雰囲気がありました（島原市・女・３０代・自営業）

○国が特別立法を作ってもらいたい。仮設住宅に一日も早くはいれるようにしてほしい（島原市・男・４０代・自由業）

○私達家族は避難する前まで梅園町という所に住んでいましたが、６月３日の大火砕流がおこるまで避難場所の指定がありませんでした。警戒区域に決まるまでの何日か前に指定になったようです。だから着の身着のまま避難したような形です。幼稚園も再園になったとはいえ、交通の便がなく、通わせることが出来ません。片道一時間かけて送りむかえはできませんから。２５１号線が通れるようになるか仮設住宅に当たって入居できれば通わせる事ができるのですが。それもまだいつになるのやら。一日に何回か時間を決めて雲仙岳情報をテレビで流してほしい。道路（２５１号）。仮設住宅への入居（今にでも）。警戒区域解除後の住宅の設備、補償！（島原市・女・３０代・自営業手伝い主婦）

○善意ある皆さんのおかげで多額に義援金をいただきましたけど、もらえなかった人たちから羨ましがられたり、皮肉をいわれたりと、だんだんいやになってきます。仮設住宅に入居した人は何もかも品物がそろっているでしょうけど、私達みたいに市外の公営住宅にはいった者には、最初とりあえずの品物だけであとの援助がありません。これから冬になりそれでも普賢岳の噴火がおさまらなかったら、冬の洋服から心配しなければなりません。市外に避難した住民も市や県の方は見捨てないでほしいです。よろしくお願いいたします（島原市・男・３０代・販売サービス従事者）

○行政の情報選択の多様性について。国道２５１号線開通にさいしては普賢岳の活動は小康状態にあり、警報機の設置や視認等で安全対策は確保されているとの事で許可になった。海域の警戒区域縮小の際は交通の必要性のみが強調された。雲仙の仁田循環道路、ロープウエイ再開については、小浜町長は火山活動は比較的低レベルに推移と事実上の安全宣言をしている。しかるに住民にたいしては、溶岩ドームが依然最大規模を保ち大火砕流、土石流の危険が高いと言う理由で警戒区域の再々延長を決定した。同一事象にたいする情報の解釈がこれほど違うのは信じがたい（島原市・男・６０代以上・無職）

○国は特別立法を制定するべきである。安心して生活できない（島原市・男・３０代・専門技術職）

○マスコミは特別立法の制定の必要性をもっとつよく報道すべし！私は県職員ですが、県の危機管理能力のなさに腹が立った。現に二ヵ月以上もたつのに、国は何もしようとしないのに腹が立つ。政府高官、政党首相の視察は何の役にも立っていないどころか、視察のためにどれだけの人間が不必要な仕事をしなければならなかったか知っているのだろうか。６月３日直後はとにかく命が助かっただけでも良かったとおもっていたが、何をどうすれば良かったのか公舎に帰れないのに、雇主の県からは何も言ってこない。マスコミでいっているところの情報は県職員の自分も受けられるのかどうか心配し結局何も動かずにと、どんどん損する感じ。いちばんほしかった情報は誰がどんな援助をどこに行けばうけられるのか、これが全く県職員であるのに伝わってこない不思議さに驚いた。大災害の時にも縦割りの縄張り意識コチコチの行政に本当に呆れる（島原市・男・４０代・事務職）

○避難所（体育館）や仮設住宅にはいっている人と、いろいろな事情や止むをえず外に借家住まいした人との差があまりにも大きいと思います。そして中小など工場や商店などを持った人達などもっと救ける方法があるは

ずと思います（島原市・男・４０代・専門技術職）
○島原の職員の手が足りない事はわかりますが救援物資などの情報を新聞やテレビを見ないと全然わかりません。市外に出て避難している人達にもっと情報をながしてほしいと思います。避難先の町などにお願いするとか、なにかの方法があるのでは？（島原市・女・４０代・パートの主婦）
○私自身がこれまでにはこれといった具体的な被害を受けていないので、今度の災害に対しても他山の石といった感を否めないといったところです。というよりもむしろ実家に帰って親孝行になったかな（孫の顔をづっとみせることができる）といった思いです。だからなんであったかＮＨＫでやっていた、住民の声を聞くといった内容の放送、あの時の被害の補償を国にもとめるということ、あれは現在ではちょっと無理な要求だな、また甘えた要求だなという思いでした。当の人達にとっては切実な思いであり要求だろうなわかるつもりではあるのですが、自分の事となっていないからこんな気持ちになるのだと思います。国に補償する（法的）根拠があるとすればどんなものがあるのかなということは考えます。情実に訴えたところでは土台無理な話だからとして、国の法律によって避難しているのだからということが、前のテレビでも出されましたが、法律そのものに見返り的補償が明記されていないからこれも無理。もう一つだされていたのが国立公園雲仙から発された火砕流であり土石流なのだからという管理責任を問う意見、これはおもしろいなとおもったのですが、いざ裁判となったとしてもこれもとうてい受け入れてもらえるような意見でもない。とすれば仕方のないこととしてあきらめるより外はないということになると思います。後はただ自助努力以外に方法はないという。しかしここでいくらかでも学習しなくてはならないのは、こういう場合に適用の対策となる法律にはどんなことが書かれているか、自分に有利な規定はないのかということを早く知りたいということ。そしてそれを具体的に助言、指導してくれるよう公的機関に要求したいということです。もう一つ要求したいのは、「特別立法」はたぶん無理だとは思うのですが、全国に適用対象となるような「災害特別基金」の設定、これは可能ではないかなと考えます。福祉への寄付などこれまで一度もしたことのないという人が今回はいち早く数千円をされたということを大阪の知人から聞きました。国（政府）がしない、できないというのは財政のことがあるのでしょう。しかしあの戦争では気前よく実に気前よくポンと出した。新たな法律をつくり新税を付加する。「災害特別基金」の設定のためのような価値ある新税付加に対しては反対はないのではないか。そしてまたそれよりも更に、今回自衛隊が大手を振って出てきた。戦争までも運んで来た。巡洋艦も海にはなかったか。今回来た分だけの軍費をこの「基金」に回してもらったら、財政のことなどすぐにカタがつくのではないのか、こんなふうに思っています（島原市・男・３０代・事務職）
○早く家に帰りたい。前のように仕事がしたい（島原市・女・３０代・農林業）
○一日でも早く前の生活にもどりたい。仮設でも公的住宅でも安心して他人に気がねなく生活したい。これから先の生活もめどがたたなく不安です。仕事も出来ず家にも帰れずお金の収入源もなく、これから先いつまで避難しなくてはいけないのか、毎日落ち着かない日々を過ごしております。子供達とも離れての生活、一日でも早く家族全員で生活したい。健康状態もすぐれない（島原市・女・４０代・販売サービス従事者）
○最大な問題でいちばんなやんでいるのは避難者の人々は勤務先（仕事先）その他で義援金で嫉妬や悪口をいわれる事（義援金分配で金持ちになった）。無料で食事が出来て感謝しておりますが、税金泥棒と仲間から言われる。つらい！１日も早くお山が終息して我が家に帰りたい！２ヵ月の避難生活で普通の生活のありがたさと人情がわかった！避難生活者の不安と苦痛が全般に理解されていない！（島原市・女・５０代・自営業）
○５月２６日より避難生活をしていますので早く自分の家の中を自分の目でよく見てみたいです。今後の生活をどのようにしたらよいかあまりわかりません。今は土木建設に行っていますが島原では土木建設もまったくないので今後はどのようにしたらいいかわかりません。生活もあまりよくはありませんのでこまっています。今まで水稲を作っていたので今後は米や野菜なども買わなければなりません（島原市・男・４０代・農林業）
○一日も早く子供達にもとどうりの校舎や運動場をください。家族全員がゆっくりプライバシーが守れる家がほしい。できればおばあちゃんに生まれて育ったふるさとに帰りたい、帰してやりたい（島原市・女・３０代・専門技術職）
○災害対策基本法により警戒区域が制定され立ち入り禁止になり財産等を火砕流により焼失しました。現行法では個人の補償はされないということですが、補償が出来なければなんらかの方法を特別立法、復興基金等をつくり、見舞い金等の形で補償をしていただきたいと思います。法がおかした罪は法で解決していただくべきです。正直者はバカをみる日本の法でよいものでしょうか（島原市・男・３０代・販売サービス従事者）
○今後、どの程度の被害が及ぶのか、その被害に対し国や県などの対策をどうするつもりなのか。
仕事はあるが、全く家、畑などがなくなり、経済的にも不安定で日常生活はすべて買うものばかり、出費がかさんでしまう（島原市・女・３０代・専門技術職）
○国の山から被害を受けるとは夢にも思っていなかった。家は全焼し山、畑は灰にうめつくされ、畑の作物も全焼してしまった。上木場地区はとても環境の良い地区でした。子供達もいいます。「上木場がよかったね、学校までは少し遠かったけど。山が火砕流なんておこさなくなったら、又家は建てて暮らせばいいよね。」と。早く山がおさまって子供達も外であそべて、大人たち、年寄達も安心して暮らせるような上木場に戻してほしいし、家もほしいです（島原市・男・３０代・販売サービス従事者）
○長期化する災害なのに政府の反応は一過性の災害のようにしているように思える。これだけの長期的災害は日

本史始まって以来と思われるので、思いきった対応策をお願いしたい（島原市・男・４０代・販売サービス従事者）
○私達は山、土地、家、全部なくしてしまいました。７９才になる義母と今後どうして生活していけばよいのか困っています。国、県、災害復興基金や、特別立法などをぜひお願いしたいです（島原市・女・５０代・販売サービス従事者）
○危険性の高い災害に対してなぜ消防団が最前線で活動しなければならなかったのか、これからの課題として考えてほしい。警戒区域をしかれた状態での避難生活に非常に精神的苦痛をともなっている。国の政策で安心して復興まで生活できるように、いろんな救済措置をとってほしい。全国からの見舞いやはげましに対して、ほんとうに日本に生まれてよかったと感謝している。心からお礼をもうしあげたい（島原市・男・３０代・農林業）
○大規模な火砕流や土石流への不安と、今すんでいる借家でただ今失業中で先の見通しが全然なくてほんとに不安な毎日です。小さな子供と年寄をかかえて、安心できる生活を一刻も早く出来ればと思います。市、県、国が一時も早く立ち上がって、私達をたすけてくれると信じています（島原市・女・３０代・農林業）
○今回の火砕流発生時に火山観測所より山の状態が非常にあぶないので避難してほしいという通報（電話連絡）があったそうですが、結局末端まで正確な通報がなされていなかったと言う報道がありました。情報は詳しく正確に行なってほしいものです。自分ではわかっていてもその内容は聞く人にとってとてもわかりにくいものです。今回はこの通達の不備によって何人もの尊い人命が失われていったことを今後とも絶対に忘れてならないと思います（島原市・男・４０代・農林業）
○今の所、仮設に入れてもらっています。けれども風呂がせまくて体を洗うこともできませんのでせめてシャワーがでるようにしてもらいたい（島原市・女・５０代・農林業）
○国（政府）に対して、住む家は火砕流で全焼してしまいました。私は警戒区域が解除されても帰る家はありません。早急に災害援助等、災害復興を要望します（島原市・男・４０代・事務職）
○６／３の火砕流の時はとてもこわかった。もう少し早く危険という情報を確実に流してほしかった（島原市・女・３０代・農林業）
○幸い家屋は残っている様子、何年か先に帰った場合、そのままの状態で住めるか、おそらく修理しなければ住めないのではないか。修理、改造する時資金はどうすれば良いか、住居復旧のための市、県、の援助を望みます（島原市・女・４０代・パートの主婦）
○早急に、政府は特別立法を設立し、弱者（被災者）を救済してほしい。現行法では個人救済ができないのだから、かならず特別立法をつくって、壊滅的な被害を受けた住民を救ってほしい。被災住民には何の罪もありません。たまたま溶岩が島原市安中地区も水無川上流部から出たというだけなのです。雲仙普賢岳は島原半島すべてでもっています。日本で持っています。水無川上流に溶岩ドームをつくらなければこんな被害は出なかったのです。日本政府には早急な対応をしてください。同じ日本国民がこんなにも苦しんでいます。どうして自分達だけが、島原市安中地区住民だけがこんなに苦しまなければならないのでしょうか。家を返してほしい、畑を返してほしい。しかしこの憤りをぶつける所はありません。政治の力しか、日本の行政力にしか我々のたよる所はないのです。我々に希望を、そして光をあたえてほしいのです（島原市・男・２０代・農林業）
○農業を出来る迄の生活費を要望します（島原市・男・５０代・農林業）
○特別立法を早く実施してほしい（島原市・女・３０代・自営業手伝い主婦）
○私は島原市白谷町の水無川周辺において鉄工業を営む者ですが、このたび雲仙普賢岳噴火により火砕流のため建物、器具一切焼失してしまいました。自然の力のおおきさにおどろくばかりです。しかしながら全国の皆様方の温かい真心に感謝しながら毎日をがんばっております。本当にありがとうございます（島原市・男・６０代以上・自営業）
○災害に強い町づくりを！（島原市・女・２０代・販売サービス従事者）
○生活資金の援助。建物、農地の補償をしてほしい（島原市・女・４０代・農林業）
○火山がとまらない以上どうとも申せません（島原市・女・６０代以上・農林業）
○山の活動を見て、一部の地域あるいは、一時間、無理な場合は何分かでも立ち入りできればと思う（いまは危ない状態とはわかっているが、山の様子で安全な時はないのかと思う）。２５１号線が誰でもスムーズに通れるようにできたらと思う。必要以外は通行しないのだからその点をわかってほしい！（島原市・女・３０代・専門技術職）
○この仮設住宅ができたことにより、精神的にも楽にはなりましたが、これから一年を通してみると、不安になることが今から少しづつ出てくるかと思います。自然の力を私達人間はどうすることもできませんが、皆様からのたくさんの支援を受けてここまでしていただけたことにうれしく思いますし、感謝しています（島原市・女・２０代・事務職）
○災害前に住んでいた家に一生かえれない事態になった時の国、県、市、行政機関の対処がどういう形態で対応するか不安が残ります。住宅ローン、金融公庫等住めない（一生）状態になった時の返済の事（島原市・男・４０代・専門技術職）
○一日も早く安全と思ったら家に帰ろうとおもっている（島原市・男・６０代以上・農林業）

○警戒区域の指定による二次災害が大きい。つまり法的災害であり、なんらかの救済がほしい（島原市・女・４０代・農林業）
○電気代、ガス、水道代、市、県、国から何割りかの補償がほしい（島原市・女・６０代以上・自由業）
○今の所、家または田畑は残っているが、これ以上警戒区域の立ち入りが解除されないと家族はもとより家又は田畑みんながだめになってしまう（島原市・男・３０代・専門技術職）
○早く家に帰れるようにして砂防ダムを着工してもらいたい（島原市・男・３０代・農林業）
○今から寒くなるから衣類をとりにいきたいです。家に住まないと畳がくされたり家にすまれなくなります。時には家にかえって掃除をしたいです（島原市・女・３０代・自営業手伝い主婦）
○今警戒区域に入っています。時間を決めて家まで通してもらえたら足りない品物を持ち出して使いたいです（島原市・女・５０代・専門技術職）
○５０数年間も雲仙普賢岳を見つめてきた一人です。６／３日の火砕流、６／８の大火砕流、２回で白谷部落を通過し札の元橋に到達し、それによって水無川の水の流れが変わっていたのです。ですから災害対策と自衛隊とに白谷で本流の水無川にかえてくださいというお願いをしました。ところが本部では命が大切ですという返事でした。それはバカだってわかる言葉です。ただし、３日と８日の様な火砕流は絶対にこないからといってお願いしましたけど、それもダメでした。そこで私は本流を通さなければ土石流の流れる方向はこうですよと、よく説明しましたが、まったく無意味でした。見るだけの流れ放題の対策あるいは自衛隊等は機械を見せるだけだったら、こない方がまし。どうすれば災害を最小限にくい止めるか、これが先決ではなかろうか。これくらいなら、イラク戦争にやった方がましだ（島原市・男・５０代・農林業）
○畑の土石流をとりのけていただきたいです（島原市・女・６０代以上・農林業）
○国、県がもっと力をいれてほしい（島原市・女・２０代・農林業）
○一日も早く安定した生活をのぞみます（島原市・女・２０代・事務職）
○国の特別立法をぜひしてもらいたい（島原市・女・３０代・農林業）
○今回の普賢岳の噴火、長崎の水害（この所長崎市内にいて体験）自然の力をおもいしり、人間の力（現在の科学の進んだ）のなさに愕然とするばかりです。今後島原深江、市町が噴火前の生活にもでれるように国、県に復旧、再建をお願いします（島原市・男・３０代・専門技術職）
○６月３日の多数の死傷者をだした時、マスコミの方におおくの死傷者をだしました。少々いきすぎた行動が多い（マスコミ）。長くつづく避難の中、仮設住宅の確保（ホテルをてんてんとしている人のために）。全国からの救援金はとてもありがたかった。国は積極的な救済対策をとってほしい（島原市・女・３０代・パートの主婦）
○住居の新築による支払いの残あり。又借家の家賃もとれなくなった。今後土石流があれば災害はふえるでありましょう。そうなれば残るのは借金ばかりで大変な事になります。山がおさまり次第、早急に防災工事を実施してもらいたい（島原市・男・５０代・自営業）
○今回の災害におきまして、全国のかたがたの温かいご援助は物資いただくごとに泣けてきます。被災を細かくしらべて何くれとなくお世話してくださる方々皆様に頭を深くさげずにはおられなくなります。被災といっても多種多様ございます。我々の場合はすくわれていると思います。家を焼かれまた流された方は何を言って慰めていいやらわからない。このまましずまってくれたら、幾多の人々が泣かずに立ち上がれると思います。避難に対しても至れりつくせりといったような心の思いやり、難民にとって思いにかなわぬ事も多々ありますが、反面貧乏人にはできっこないような待遇の心配り、時折市長様も顔をだされては頑張ろうなどしもじもの私どもにも手をとって勇気づけてくださるのを身にしみて老人でもくじけてならないと思います。普賢岳の災害に免じて多くの方々の善意を頂、老いの身にも生きていてこの世の多くの皆様のおかげに授かる事のできたのも、不幸中の幸いとも覚える事が出来ました。今後もあてのない山の怒り、いつおわるとも言えない、また思えない現状にありますけれども、精一杯生きて山にまけないつもりで頑張って生きます。山の怒りが消えて平和な元の生活に帰るまで見届けなければあの世とやらへは行けません。このさき多種多難な道があると思いますがとにかくつよく生きぬきます。今の先行した事態がどのような形であらわれるやもわかりませんが、研究室の皆々様心のゆるむ事なく世のあらゆる災害に苦しむ方々への同胞として頑張って下さい。いつまでとも続く山の怒りに噴火の火口に沢山のお酒をそそいでやったら山もおとなしく鎮まってくれるのではなかろうかと私一人の考えでしょうか（島原市・女・６０代以上・無職）
○一日でも早く防災工事にとりくんでほしい（島原市・男・５０代・専門技術職）
○家のローン利子についての返済。警戒期間及住居出来るまでの期間までの無利子（免除）。避難生活をしてみて（体育館）余裕のある人は外に家を借りて家財道具一切避難させています。県、市がめんどうみてくださるまで体育館にいろといいます。その後仮設住宅に入居する（無料）。個人借家をする人に対し仮設住宅を作る費用の２／３でも１／３でも経費を見てくださるならば２／３の人々はほとんどの人が仮設住宅を頼らず個人で借家をみつけるでしょう。別に家を借りる人よりも仮設住宅の人々を優先的に扱えばだれでも仮設住宅を頼るでしょう。同じお金を作ってくださるならば、自活しようとする人の方にも目を向けてほしいです。家のローンも返済し、その上借家をする事はとっても無理です（島原市・女・４０代・事務職）
○避難勧告、立ち入り禁止を設定されたので農作物についても収穫できるものも立ち入り出来ず、全く収入をえ

られなくなったので、生活の補償と農作物の補償をぜひしてもらいたい（島原市・男・４０代・自営業）

○まだ仮設住宅へ入居できない状態なので、なるべく早く入居できるようにしてほしい（島原市・女・２０代・専門技術職）

○市、県、国は早いところ災害対策してほしい。国は特別立法を実現してほしい（島原市・女・４０代・パートの主婦）

○警戒区域の指定で収穫出来なかった農産物の補償（島原市・女・２０代・農林業）

○避難生活をする事になるなんて考えてもみない事でした。思っていたより実際に生活をしてみると本当に大変です。体育館の中での仕切りのない生活はすべてが丸見えの状態で常にまわりの事を気にしなければなりませんし、夜もよく眠れません。精神的に落ち着かない毎日でした。現在は保養センターに泊まっていますのでゆっくり休んでいます。市のほうからいろいろ配慮していただき、ほんとうに感謝しています。それに全国の方々の励ましや義援金なども頂いて、今まで自分はよその災害に対してこれほど心配りをしていただろうかと深く反省しています（島原市・女・４０代・パートの主婦）

○いろいろありますが、今は早く家族水いらずの生活がしたい。仮設もいいけど借家への援助（家具、電気製品等）をしてくれれば（島原市・男・４０代・販売サービス従事者）

○①早く仮設住宅を建設してもらいたい。②仮設住宅にはいれるまではホテルに滞在されるようにしてもらいたい（今は交替で行っている）。③五小、三中専用のスクールバスを出してもらいたい（今は一般のバスを利用していますが乗り換えなくてはならないので）（島原市・女・３０代・パートの主婦）

○警戒区域にはいって、中学校の体育館にきて今日でちょうど２ヵ月になります。最初の２週間程は避難生活もそんなに苦になりませんでした。家にいて恐い思いしていたのでむしろホッとしました。でも２週間すぎた頃から、ぜいたくだと思いながらも不満が出てくるようになりました。今まで思ってもみなかった人間関係でも悩みました。思い切って島原を出、空気のきれいな町で子供も転校させて噴火の前のような静かな生活がしたいと思いながら、なかなか島原の町を出ていく勇気がなく、今も避難生活が続いています。これから先の事を考えるととても不安です。１日も早く山が静かになってくれますようにと自分たちの生活が戻りますようにと祈るばかりです。日本全国の方のあたたかい気持ち、こころより感謝しています（島原市・女・３０代・自営業手伝い主婦）

○国がもっと対策を考えてほしい（島原市・女・４０代・専門技術職）

○２ヵ月近くの避難生活でいろいろな事を見、感じ、生活して今思う事は、マスコミに対して何事か目立った時だけの報道、インタビューｅｔｃ・への不満。市に対して、危険区域解除の延ばし延ばしのやり方に不満。土石流で発生した土砂の除去を早めにして頂きたい。再度の土石流の被害大の恐れを取りのぞくため学生（子供たちの）の学習面の遅れと健康面が非常に気になるので力をいれて色々な方法を考えてほしい。２ヵ月灰を吸い続けている子供たちの健康診断のようなものをしていただけたらと思います。日本中の国民の温かい気持ちを思うと本当に有り難くうれしい気持ちでいっぱいになります。色々な方にお世話になり、人と人とのふれあいをつよく感じ、また家族の絆がいままでは違ってより一層深まったと思います（島原市・男・４０代・専門技術職）

○普賢岳の噴火で避難するという事は生まれて初めての経験で、市の方から避難せよと命令をだす時、適切な指導があれば今のように不自由な生活はしなくてすんだものと思います。避難は一時的（１週間から１０日位）と思い、着の身着のまま飛び出しました。私どもの浅知恵もあったのですが、猫またはバイクもそのままに置いてきて病院通いまたは買物など交通の便が悪くタクシーで行く状態です。こんなに長くなると生きものですから猫のことも心配です。山の静かな時に時間をきめて３０分くらいでも家に帰してもらえばと思っております（島原市・女・６０代以上・パートの主婦）

○避難生活は２ヵ月過ぎました。今日噴火が一日も早くおさまることを祈り、早く借家でも帰り落ち着きたい一心です（島原市・男・５０代・専門技術職）

○警戒区域設定による被害の補償を国は特別立法でするべきだ（島原市・男・３０代・専門技術職）

○普賢岳がいつまで今の状態で活動を続けていくのかわからないため、先の見通しがつかない（島原市・男・３０代・専門技術職）

○全国に皆様より温かい義援金及び救援物資をいただき心よりお礼を申し上げます。早く普賢岳の噴火がおさまりますよう祈っております。早く家庭生活にもどりたいです（島原市・女・４０代・パートの主婦）

○体育館にいますが、１週間おきにホテルとかに行けますが、町内会長さんが決めるのですが、１ヵ月も続けてホテルにいさせる事などがあるので決めるのは市役所の人が公平に決めてほしいと思う。だれでもホテルで個室がいいと思います（島原市・女・５０代・パートの主婦）。

○私達は町外に避難しているため、町の情報が入らない。ほとんど何日か後にそれも知人からの情報だけです。他にも町外に避難している人はいっぱいいらっしゃると思います。体育館とかホテルでなくて自分達で家を探して、家賃まで払って住んでいるのですから情報とかは流して下さっていいと思います（深江町・女・４０代・事務職）

○今回の災害で全国の見も知らない方々の善意を十二分に感じました。本当にありがたいと思います。自然災害とはいえまだまだ長引きそうです。そうなった時、町の（深江町）（島原市）の経済はどうなるのでしょう。

皆町をすてるような事はなかろうか、そんな事が心配です。国からの援助をせつにお願いします。今回、本人が大阪にいますので、かわりに私（母）が回答させていただきました。お役に立つかどうか、どうぞ頑張って下さい（深江町・女・４０代・自営業）

○義援物資などの配布が平等でないような気がする。義援金は家族、自営業にはこなかった。収入はゼロなのに。（深江町・女・２０代・自営業手伝い主婦）

○私は深江町に住む３０代の兼業主婦です。今は町民センターに避難しています。水無川から３Ｋｍぐらい離れた深江町側に家があります。土石流が発生してから電気が切られました（九州電力から）。そのため冷蔵庫がこわれて使えなくなりました。その後の情報などから電気を流してくれたらこんな事にはならなかったのにと、くやしくてなりません。食事の事ですが、女は何とかがまんしても主人や子供達がかわいそうでなりません。毎食くばられる弁当に子供達でさえいやな顔をします。せめて茶わんでご飯が食べられたら。新聞などで、あれだけ集まったお金をもう少し避難者に配ってもいいのでは．．．島原市と比べて待遇が違いすぎる。食事、救援物資など。少しの危険性はあっても家に帰って仕事をしたい（深江町・女・３０代・農林業）

○テレビの報道でよく島原市深江町と言われる我々町民は深江町の住民で島原市民じゃない。救援物資、義援金等も島原と深江町ではおどろく程の差があって多少はがゆい気もする。実際に災害を受けていなくても自宅での生活ができない現状では深江も島原も同じなのにと思うのは、私一人ではないと思うのですが．．．行政力の違いが避難生活の待遇の差としてはっきりと現われています。新任町長で非力なだけ国や県が行政の後押しをしていただきたいです（深江町・女・３０代・自営業手伝い主婦）

○人が人でなくなっています。もう人間のみにくさをみたくないくらいです。暗いことばかりで自分は人間らしさがなくならないように努めています（避難所、集団生活に対して。もらえるのがあたりまえ。もらえるものならもらっておこうｅｔｃ．）。どの方も苦しいと思います。でも老人と子供がいちばんの被害者だと思います。自分の力で生活できる人は、人に頼らずできることだけはやってのけなければいけないと思います。最小限の事は．．．受験生（高３）の妹にとって人生のいちばん大切な時だけに、はがゆさが増します。－を＋にしようと家族で毎日を過ごしています。何のお役にもたたないと思いますが調査にかかわられてうれしく思います。ありがとうございました（深江町・女・２０代・専門技術職）

○早くおさまって家に帰りたいです（深江町・女・２０代・自営業手伝い主婦）

○噴火活動が終息しても４～５年間は土石流の危険性があるといわれています。土石流危険区域にいる私達は噴火がおわっても２～３年後に土石流による被害を受けるかもしれません。砂防ダムが完成し防災設備が完備しないかぎり安心して住むことができません。短期間で防災が完備できなのは十分承知しておりますが、活動が終息したらすぐに土砂を取りのぞき少しでも短い期間で工事を完了していただきたいと思います。また調査により土石流危険地域を詳しく示していただき、それによって住民はどういうことをしなければいけないのか対策等も詳しく示していただきたいものです。長い避難生活に耐えた後、命をおとしては何にもなりません（深江町・女・４０代・無職）

○仕事柄、朝が早く車通勤をしてますが、国道２５１号線が通行止めのため雲仙を通り通勤するしかありません。そのためこれから冬になりますと、道路が凍結のため通勤ができなくなるおそれが出るのではと思い島原市内にアパートを借りました。そのため経済的にくるしくなるものと思います。私の職場にも何名かの人がいますが、やはりアパートを借りたりしている人がいます。経済的にあまり負担がかからないように出来ないものでしょうか（深江町・男・３０代・その他）

○災害時に多くの大臣さん達がこられ、金の事は心配するなと言っておられましたが、特別国会の答弁を聞いていますと前向きに検討する努力するの答弁ばかりで、具体的は答弁が聞く事が出来ません。私達のまわりには多くの農家の人がいますが、田畑にも行けず収入のない人がたくさんいます。この人達になんらかの補償をしてやってもらえないのでしょうか。今、島原、深江の人達は政府の対応にイライラしています。証券問題、ＰＫＯ政治改革はどうでもいい、今生きるか死ぬかの時に（不明）

○全国の人達にお見舞い品やお金をたくさんいただいて、ありがたく思っております。大変たすかっております（深江町・女・５０代・その他）

○東大の新研、このくらいのアンケートしかとれないの。大失望。①結果の分析、②結果の報告、③アンケートの主旨必ず知りたい（深江町・男・５０代・その他）

○いつまでこの生活が続くのかと思うと．．．早く普賢がおさまって家に帰りたいですね（深江町・女・２０代・専門技術職）

○６月３日の火砕流で多数の死者が出た事がいちばん残念な事です。火砕流によって熱風が起きる事を知らなかった。火砕流の恐ろしさと身にしみて感じた（深江町・女・４０代・パートの主婦）

○一日も早く仮設住宅の増設をお願いします（深江町・女・６０代以上・無職）

○①避難者に対する仮設住宅の早期解決。②災害者にたいする補償問題の早期解決。③災害復旧の早期解決。現在でも復旧できる所は多くあると思う。一日も早く復旧作業を行なうべきである。何のために数多くの自衛隊および装備を持って来たのか、市民に見せる為か？④交通道路の確保を一日も早くやってほしい。２５１号線はどのような状況においても早急に復旧し確保すべきである（深江町・女・４０代・専門技術職）

○５７号線と２５１号線が完全に立ち入り禁止になった為に布津漁港～島原外港間に船が走るようになったので、

住民の間では大変助かっています。今後も一部が解除になったとしても、この状態がおさまるまでは運航してほしい（深江町・女・２０代・事務職）
○島原に深江町から避難しているものです。同じ避難しているものでも島原の住民と深江の住民とでは大分待遇がちがうように思います。深江の住民でも島原へ避難してきているんだから島原の仮設住宅なり避難所なり入れてもらいたかった。島原にいないと仕事が出来ません。深江から通うにはあまりにも不便すぎます。通行止めにしているのだから、その位の事はしてくれてもよいではないですか。避難所にいる人だけが大変ではないはず。アパートに住んでいる者には避難所にいる人より救援物資がないように思う。食事代もいるしアパート代もいるし避難所にいる人より何かと金がかかります。避難所にいる人は食事代もただです（深江町・女・５０代・自営業）
○全国より寄せられた救援金は１００億以上になったと心温まる報道を耳にするたびに、なんと政府の対応の冷たさを感じます。地方自治体（県市町）の力ではどうにもならない、終わりの見えない今回の災害です。どうぞマスコミ（新聞、テレビ、ラジオ）の応援をお願いします（深江町・男・６０代以上・販売サービス従事者）
○２００年ぶりの普賢岳噴火により、今まで経験したことのない恐怖と悲しみを身に染みて感じ、又色々と知らなかった土石流とか火砕流の言葉を知りました。避難した当時はみんな、にぎりめしにたくあんにでも感謝して頂いていたものの、だんだん長くなると色々な不満の声があちこちから聞こえるようになりました。私は上に立つ者の気配りはいかばかりだろうかと思うと感謝こそあれ不平の不の字も出ない。そして噴火をおこした普賢岳もにくいと思うけど自分の欲ばかりを考えて不平不満を口にだす人間の心も好きでない。今後どうなるかわからないが、それまで頑張って生きていきたいと思います。最後になりましたが「横田幸信町長さんご健康に気をつけられて頑張って下さい」と言葉をさしあげたいと思います（深江町・女・３０代・事務職）
○アパート経営ですのでアパートが島原市警戒区域内にあるので家賃収入が全くないので経済的に困っております（深江町・男・６０代以上・自営業）
○早く仮設住宅に住みたい。もし家がなくなったら家を建ててもらいたい。生活費や食品がもっとほしい。早く家にも帰りたい（深江町・女・５０代・パートの主婦）
○国に対して一日も早く個人的して救援補償をして頂きたい、例えば、見舞い金なり長期貸し付け資金とか。皆さんはいまは経済面のくるしさもほとんどでしょう。自民党はあまりに冷たい党を思います。私は自民党ですがかえって野党の方が真剣にやってくれます（深江町・女・６０代以上・専業主婦）
○いままで全国で大きな災害が起こっていますがニュースなどで知るとき大変だなと思ってはいました。けれど今度自分達に直接降りかかって来た普賢岳の噴火で災害の実態を知り、全国各地からお見舞金、物資など続々と送られて来る事に対し、深く感謝にたえません。本当に関係者の方々や全国の皆様に御礼申し上げます（深江町・女・５０代・自営業手伝い主婦）
○国は湾岸戦争では多大のお金を何兆円もの金を払い、フィリピン火山にも多額の金を出しながら私達普賢岳災害者には何一つ救済しようとしません。全国の皆さんからは多額の義援金をお送りくださいまして感謝申し上げます（深江町・男・６０代以上・無職）
○政府が自主救済というなら警戒区域の中で仕事ができるような体制をとるべきではないか。皆様からの義援金のおかげで当分の生活費に困る事はありませんが、負債を返済しなければならないので、これ以上の被害を食い止められたらと思います。最後になりましたが、全国の方からの温かい義援金、救援物資等ありがとうございました。フィリピン等に比べあらためて日本の豊かさを感じたしだいでございます（深江町・女・５０代・農林業）
○警戒区域設定でもせめて家の管理位はさせてほしいと思います（一日の中で数時間）（深江町・女・４０代・無職）
○火砕流については研究不足。ころばぬ先のつえがなかった。災害前に火砕流の恐ろしさを知らせてほしかった（深江町・男・６０代以上・無職）
○早い時期に普賢岳の噴火が終わるように祈るだけです。住民の生活をおびやかす事は決して。安心と今は不安でいっぱいである、そのためにもただ祈るだけである（深江町・女・４０代・自営業手伝い主婦）
○避難生活も２ヵ月すぎると人それぞれ色々な事を見る事が出来ました。これもよい人生勉強だと思いました。人は山が悪いというけれど山にしてみりゃ人間が山の近くに住むからじゃないかと言っているんじゃないでしょうか。山も生きているのだから仕方ないと思います。人間にとって良い勉強、人とのふれあいをするよい機会だったと思います。少しでも良い方にとりたいと思います。そんなに自分にいいきかせつつ本当はちょっぴり自分の家へ帰りたい今頃です。全国の皆さんの親切ありがとうございました（深江町・女・５０代・事務職）
○火山学者その他の先生方が沢山いらっしゃいますけど、その土地の住民にも土石流の場合は話を聞かれてはよいのでは。このままでは災害を待っているだけ。先へすすめません。この二ヵ月間、国道２５１号線から下は安徳駅の近くが災害にあっているだけで、深江の方は災害はありません。早く解除をお願いします。住民の話ではこんど土石流があっても又安徳は流れると話しています（深江町・女・３０代・農林業）
○予期しない大災害で小さな店ながら商売もできない状態になり、今まで仕事のできる事のありがたさを痛感しています。避難生活を２ヵ月以上続けていると、団体生活をさせていただき人の世の大変さ、逆に「自由」という事のすばらしさを感じています。人をねたんだり、恨んだり、我儘さを子供に教えるには良い機会と思い

ます。それから全国の心ある人々の温かい義援金をいただき、人の情のすばらしさを本当にありがたいと思っています。又この大自然の災害は人を戒める為の天からのものと思っています。現在心身ともに疲れてはいますが、対策に当たっている人々のご苦労も大変な事と思い感謝しています。一日も早い鎮火を願っている毎日です。これから国の対応に期待をしています。特別立法をどうかよろしくお願いします（深江町・女・６０代以上・自営業）

○この災害によって家に帰れないかどうかを早く察知してもらい、もし将来帰れないとなれば安住できる土地、家の提供。それには現在の家、土地、農地の政府買い上げをしてもらわないと、この先家も持てない状態です。住宅金融公庫の災害保険の適用。公立高校生への交通費免除。義援金の分配の範囲。仮設住宅の入居の順序（早く申し込まれた人は早く入居させてほしい）。仮設住宅への救援物資の配布。仮設住宅への生活費の援助。自宅付近の写真（深江町・女・３０代・その他）

○進学を控えた子供（高二、中三）を持つ者にとって学校の事が悩みの種です。中三の子供は仮設校舎ができ一応安心していますが、高二は進学校のため、船の便では欠航や乗り遅れた時を思い、下宿させていますが、お金がかかり又生活面（子供）も心配です。農業をしている者は収入の道もとざされ、今後の見通しもたたず困っています。国や県ももっと目を向けてしっかりしてほしいと思います（深江町・男・４０代・農林業）

○私達は警戒区域設定で収穫を目の前においてスイカ、メロンを大損害でした。もうこれ以上警戒区域設定を解除してもらいたい、生活を守りたいです（深江町・女・５０代・農林業）

○災害情報はいつも島原ばかりで町は全く無視されている。報道の方ももっと市、町の立場を理解して頂きたい。１．島原市、深江町では島原の中の深江町である。２．住民の避難率が島原市ではわずかだが、深江町では６割もあったのに、報道では市と町の全避難者数だけ報道するも、島原市内は町内会別に報道し、深江町は一本化した報道ではおかしい（深江町・男・３０代・事務職）

○湾岸戦争などには沢山のお金を惜しみなく出すのに、困っている国民に対して国がもう少し親身になって考えてほしいと思います。仮設住宅を作っていただき、不便のないように配慮していただいていることに関しては感謝しています。又全国のみなさんが避難している人達に対して沢山の義援金を送っていただき本当に感謝しています。マスコミに対しては、カットがないように真実を伝えてほしいと思います。２５１号線に関して自衛隊の方々が沢山いらしていただいているのだから緊急の場合はすぐ連絡をとりあうようにしておおいに活躍していただいてもよろしいのでは（深江町・女・３０代・自営業手伝い主婦）

○予知できない災害だっただけに被害も大きく避難生活も長引き、噴火がおさまっても水無川の下流だけに土石流の心配は雨降るたびにつのるだけ。勧告が解除になっても今後の生活の見通しがつかず、苦しさを思うと老人、子供の教育費がどんなにして．．．思うように出来ず。施設に老人を依頼しても無料でなく老人を目の前にかかえているため今後心配である。仮設住宅に入居できた喜びは、入居出来ずにおられる方にくらべ何事にも変えられない。有り難い。今だに入居出来てない方の早急の入居の願い。いちばん危ない地域への配慮の仕方等問題点多かった（火砕流が発生しなくなっても土石流が流れる）。火攻め、水攻めの二重の危険性。立ち入り禁止であるゆえに水無川付近を見物された方は少ないと思うが、台風に土石流は親子のようについてくる。台風シーズンに対して、あの水無川の土砂の採取作業はいつはじまるのか。早急にしてほしい。以上、生活費、学費、施設費、台風シーズンについの土砂の作業よろしく頼みます）。最後になりましたが全国の皆々様のお見舞い金、物資などたくさんにありがとうございました（深江町・男・５０代・漁業）

○自然が相手なのでこれからの火山活動の見通しは大変難しいとは思いますが、警戒区域及び自主避難区域の線引きはもう少し地元の意見を考慮してほしいと思います。県と町との意見がちがっているという話も耳にします。警戒区域内の中小企業者への補償をもっと考えてもらいたい（深江町・男・４０代・自営業）

○避難した全部の人に国の補償をしてもらいたいと思います。心の打撃（精神的）は一生忘れるものではありません。交通遮断して何もできません。日本国が絶対弁償するように願いたいです。関係者に弁償金をくださるようにお願い申し上げます（深江町・男・５０代・自営業）

○雲仙普賢岳の噴火は２ヵ月すぎて今後いつまで続くか見当がつかない。単に地方の一時的現象ではなく火山列島日本として非常事態であり国全体の問題としてとりくんでほしい。人命第一で立ち入り禁止されたのは止むを得ないが、公権力の執行によって生じた被害は当然補償する義務があると思います。国の対応は冷たく国土庁の役人は前例がないからといって自主救済とかいっていたが、こんな時こそ緊急法制定なりをすべきだと思います。外国には多額の援助をしながら自国民を見殺しする国家は苛酷だと痛感しています（深江町・女・５０代・農　林業）

○１．少しでも早く２５１号線の一般通行を希望。２．昼間安全を確かめ家に一時帰る事を認める。３．盆も近付いたので墓掃除及び墓参りを希望（避難区域内の墓所）（深江町・男・６０代以上・無職）

○国道２５１号線の自由通行を１日も早くできるようおねがいするだけです（深江町・男・６０代以上・自営業）

○仮設住宅のため子供の勉強が十分できないため集会所など別居がほしい（深江町・男・３０代・自営業）

○もう少し首相は国民の事を考えてほしい。外国には多額の金を出しているが、災害地の事は何を考えているのか、自分も災害地の立場になったらどうするか。災害地の人達がどのような生活をしているのか等、現場を自分の足で歩いて詳しく話をしたりしてほしかった。今後十分な補償体制をしてほしい（深江町・女・５０代・その他）

○私の家族は仮設住宅に入らせておりますけど９名です。小浜の旅館にいる時、１ヵ月待ちで広いところに入られると役所の方が言われたそうですけど、孫の学校が気になって、お爺ちゃんがひとりできめて今の仮設住宅に来たそうです。私達は９１になるおばあちゃんがいますので、長崎の娘の所にお世話になっていたのですけれど仮設に入られるといわれるので来たのです。今はゴロネしてねられるのですけれど寒くなると寝られるかなと思います。もし広い所にうつしてもらえたらと思います（深江町・女・６０代以上・農林業）
○特別立法で災害の復旧や農業者の補償をしてほしい。借入金の利息を下げてほしい（無利子をお願いしたい）（深江町・男・４０代・農林業）
○政府の対応が悪い。生活補償（深江町・男・４０代・専門技術職）
○政府の対応体制がなってない（深江町・男・３０代・専門技術職）
○①国道２５１号を時間みてでも一般車も通してほしい。②自営業のため仮設を自分で作ったので、プレハブ代他融資の低利できれば無利子で貸してほしい。③学校の通学路がとおいのでせめて車で送迎をさせてほしい。④給食センターは開始しているのに小中学校はかえられないとはおかしいと思います。⑤義援金の時事業主のふりわけがおかしい。自宅と工場と一緒だと出ない。同じ敷地でも１メートル位しかはなれていない所には出ている（深江町・女・４０代・販売サービス従事者）
○１日も早く２５１号線を通して下さい（深江町・女・２０代・販売サービス従事者）
○住む家は仮設住宅でもがまんします。でも収入である。農作業の畑への出入りを許してほしい。農業は自分が畑にいかないと収入をえることが出来ない。今のままではとっても不安で農業ができなくなる。希望を持ち、悪い中の農業でも一生懸命やろうというやさきだった。若い人達の希望をつみとらないでほしい。農業にたいする希望が今とてもほしい。もっと国の力を借りたい。このままでは島原市と深江町の農業はつぶれてしまう。この場をかりて心よりお願いします。これからのわたしたちに今すこしでも力をかして下さい（深江町・女・３０代・農林業）
○国、長崎県はもっと住民の声をよく聞いて対応してほしい（深江町・男・４０代・自営業）
○６月３０日以前はテレビ、新聞等を通じ、毎夜火砕流を深夜まで見るのが日課でしたが、まさか自分達が避難するとは夢にも思いませんでした。避難するのなら、早めに家財道具類をだしておくのにとつくづく思います。部落の人は6月3日から８日までの間にほとんど荷物を出してしまわれたと思いますが、仕事の関係上、休む事が出来なかったのを残念に思います（深江町・女・３０代・自営業手伝い主婦）
○早く家に帰り、元の生活がしたいです（深江町・女・４０代・自営業）
○避難者住民の補償（深江町・男・６０代以上・自営業）
○毎日毎日山を見ているとこうなる前の山が思い出されます。早くもとの静かな山になって自分達の家に帰りたいです。亡くなられた人達はもう帰ってこないけど、残された家族は今からの生活がまっています。悲しいけど、苦しいけど頑張って生きなければなりません。みんなで力をあわせて頑張らねばならないのです。市外、県外の皆さんいろいろとありがとうございました。これからも何かとお世話になることと思いますがよろしくお願い致します（深江町・女・４０代・専業主婦）
○仮設住宅に入って半月をすぎ、目の前に見える山を見て毎日不安な気持ちで暮らしておりますが、今の事情を思うとあまり無理を言えませんが、何かと島原方面に用事があるたびに雲仙まわりで行くのが大変です。早く国道が通れるようにお願いしたいと思います（深江町・女・４０代・農林業）
○早く山がおさまり、家にかえれたことにこしたことありません（深江町・男・３０代・販売サービス従事者）
○今後の避難生活がどうなるのか。子供達の学校生活はどうなるのか。生活の補償はどうなるのか（深江町・女・３０代・農林業）
○私は専業農家の主婦ですが、今から先の生活がどうなるのか心配です。昨年の１２月からスイカの苗の準備にとりかかり３月に定植して収穫を楽しみに６月まで手入れしてきたのに、それが収穫寸前になって警戒区域になり全然収穫できなかったのが残念でなりません。薬たばこのように国から保証がない私たちにとっては資材費を払う事が出来ないありさまです。それに秋作もどうなるのか心配しています。義援金の事ですが専業農家とサラリーマンを同じように支給されるのは何だか変じゃないでしょうか。私達農家は警戒区域に入っているので畑にはいかれないので収入は全然はいりませんが、勤め人は避難所からでも勤められるので、月々の給料はもらわれるのですから少しは違ってもいいんじゃないですか（深江町・女・４０代・農林業）
○個人的な事ですが農業で全く収入はなく、避難所にいるか気分的に外出したりしていますが、仕事をするにしても仕事がなく、子供が小さいので仕事が出来ないし、友人のところに仕事をするところがあるけれど、島原まで通勤しなければならないし、２５１号線が一般の人でも通れれば車で行かれるのですけど、でも実際２５１号線を通って土石流のあとを見て、胸がつまりました。私の実家は北安徳町で今は家は建っているけど雨がふるたびに土石流が流れてきていると聞いて、もう住めるのはだめだと思ったら涙がでて、実家の親、兄弟たちは最後だからといって写真をとってきたよと言っていました。私も家を行って見たいと思いますが、親戚の家は流されてあとかたもないといって何も荷物は出していないといっていた。避難所にいたおじいさん、おばあさんに何と言ってなぐさめたらいいかわからないのです。私自身ふくざつの気持ちです（深江町・女・３０代・農林業）
○警戒区域設定のため農業の所得０％（深江町・女・４０代・農林業）

○避難して、２ヵ月がたちました。家族７人離ればなれに暮らしています。田畑の作物（主にすいか、水稲は作付け不能）は収穫直前にして、一個も金にかえることはできず、残ったものはビニール等、資材、肥料、農薬代、約２００万円あまりの借金、支払いの不能です。今の国の政治家は本当の農家出身は出ず、親譲りばかりで、汗の出る仕事をした人は皆無です。農業は今日たらないものは明日はできません。半年～１年かかります。もっと現実を見てしっていただきたいと思います。農業漁業が立直りなくして、地域の立ち上がりは成りません。来年からの生活が大変だと子供たちにも話している毎日です。政治家へ。私服を肥やす政治家が多いのではないでしょうか。国民のことより自分の財産増やしに一生懸命のようでなりません（深江町・女・４０代・農林業）

○普賢岳災害のため自営業ができず、一家族これからどうして生活していけるか先が心配です。私は魚屋ですので、２５１号線を朝１０時からでなく朝の６時からしてもらえれば魚も買い入れもできるし、今の状態ではどうする事も出来ません。今から先は国が生活を見てくれないならば早く解除して、商売が出来るようにして下さい、お願いいたします（深江町・男・４０代・自営業）

○政治家、評論家、またアンケートをとられるかた、今の普賢の状況、警戒区域の状況、避難している人の状況をよく見ていただき、被害というものが命、家屋、土地、作物等の物質の面だけではなく、いろんな意味で幅広く被害が出ている事を理解していただきたいですね！（深江町・女・３０代・専門技術職）

○このように長い間避難生活が続きますと、家族の団欒、話し合いが出来ません。私達は今親子別々の生活です。子供２人は高校生ですので島原の方へ下宿させております。収入は減り、支出は重なり、中学までは義務教育で国自治体も力が入りますけど、高校生の二人の子供の費用が二人分ではすみません。生命第一で、いろいろと皆様方には努力なされています、本当にお礼を申し上げます。でも小、中、高、だれも学生児童です。どうぞその事をよろしくお願い致します。そして一日も早く安心した場所が得られ家族がまた災害前のように一緒に暮らす事ができるように（深江町・女・４０代・自営業手伝い主婦）

○国は避難住民に対し、生活の補償を十分にとる事。法の規定により避難したのだから国は避難住民の生活を補償するのは当たり前の事である（深江町・男・４０代・販売サービス従事者）

○今回の災害のように長期間にわたって法による警戒区域設定をするような災害はないと思います。国は法で立ち入りを禁止するのならその期間内は住民の肉体的精神的金銭的苦痛及び被害にたいして補償をすべきではないでしょうか（深江町・男・３０代・販売サービス従事者）

○国は責任をもって個人的補償をしてもらいたい。災害に直接被害を受けた人の気持ちを考えてもらいたい（深江町・男・４０代・農林業）

○１日も早く山がおさまることを念願しております（深江町・女・４０代・農林業）

○国での法で安全確保のためとはいえ、自分の家に行くことができない。ましてや出荷寸前の野菜、手入れずみもだめ、収穫ができませんでした。生活の補償をされないのは心外です。現在は仮設住宅に住んでいますが、年寄りばあちゃんは親戚に、親、子、孫、３世代がすんでいますが、６畳２間ではちょっと長い生活になると考えさせられます。災害に伴うことですが、日本脳炎の発生が案じられます。豚の野放しなど、町や県国はもっと被災者のことを考えてほしいと思います（深江町・女・３０代・農林業）

○近年わが国においては類のない災害、私たち深江、島原の住民は極度の疲労と先行き生活の場を天災によって奪われ警戒区域といわれ法の定めにより生命はまもられたかのように思いますが、働く場所とまた２ヵ月以上の避難生活を余儀なくされ、春の収穫だけでなく秋の収穫も全く望みなく、現時点ではや丸１年の収入は皆無の状態、資材費の支払い、また借入金の支払いはもとより今後の生活に非常は不安を感じている。現在多くの方々の義援金には本当に頭の下がるあたたかみと感謝の念、これが励みとなって一家頑張ってはいるものの、いつまで続くか山の変化に働く場所がなく途方にくれるだけです。政府は生命は守というものの、わたしどもが安心して働き収入のできる間どんな法によって守ってくれるのか、大きな疑問をもっております。法治国家であるならば、法によって最低限の国民の生活は守られるものと信じますがいかがでしょうか。生命を失い家を焼かれ火砕流で家屋田畑を失った島原の方々、６割に及ぶ深江町住民の避難生活、直接被害こそ少ないものの町自体の経済は予想以上の深刻です。どうか国民の皆さんあたたかみのあるように政府も類のない災害は島原、深江の住民を救済して頂くよう望みます（深江町・男・６０代以上・農林業）

○酪農と野菜を少々しているですが今回でどちらも全面的休業です。とくに酪農（乳牛）が大変です。今は仮乳社を県の方に願っているのですが今だに前にすすんでいかない様子です。８月いっぱいにといわれていたのですが、今いちばんこまっています。収入はなし、牛をあずかってもらっている人達に迷惑をかけるとおもうと早く仮設住宅をと願っております。追伸。全国の皆さん達には心からおれいを申したいと思いました。心温かい気持ちで救援物資をいただきました（深江町・女・４０代・自営業）

○報道のさい、もっと真相を表面的ではなく、わかりやすく具体的にせまれば、もっと見る人も、スコミで本当の実態がわかり、もっと災害復旧の充実をはかる事ができるのではないだろうかと思っている一人です。こん今のことを通して、全国のあたたかい義援金にたいしてあつくあつくありがたく思い、今日をくらしています。国もいま一度力をかしていただきますよう祈りつつ（深江町・男・３０代・農林業）

○①長い避難生活により、我々は心身ともに疲労の極みに達しています。一日も早く仮設住宅に移れる事を望んでいます。ただ、部屋がせまいので荷物も入れられないので残念です。②全国から義援金、救援物資等をいた

だき心より感謝していますが、国の対応に非常に憤りを感じています。長期にわたる自然災害のため自分たちで何も出来ないので、一日も早い対応、救いの手を望みます（深江町・男・４０代・専門技術職）
○国の各大臣達の言葉の使い方があまりにも違う。地元に来たときはその時いいように各大臣達は言っているが、国にかえるともう人の顔でなく大臣の顔で、金は出せないという。自国の国民がこんなにたくさんの人がこまっているのに、なぜ救けようとしないのか、他の国にはいろいろ理由があるにしろびっくりするようなお金を出す。金あまり国として悪名を持っているのなら自国の国民の事ももっと思え！考えろ！国民からは税金ばかりとる事を考えてすぎてはいないか。助ける事のできない国県町であればなぜその人達に私はしたがわなければならないのか疑問である。地元の声など国は聞こえない。国民の一人として国には失望した。私達農家は国の底辺の人間なのに、どっちも毎月きちんとお金が入る人はいいが私達にとって土地がすべてであ　り、家に入る事が出来なければ今はいいが、あと半年あとは死ね！と言う事と同じで、今年の収入は皆無、１円も自分の手で収入が得られない、何という事か。毎日毎日暑い中、ビニールハウスに入って、もうあと２週間という時に見にいく事さえゆるされない法は従うものであれば、法の元で補償すべきだと私は言いたい（深江町・女・２０代・自営業手伝い主婦）
○国の行政に対し、失望した（深江町・男・６０代以上・農林業）
○警戒区域内の家庭に国からの保証金。特別立法の制定（深江町・女・６０代以上・販売サービス従事者）
○お仕事とはいえ、猛暑の中での警備は大変なものだと思います。警察、自衛隊、各関係の皆様方に心より、感謝申し上げます。暦の上では、秋とは言え暑さはまだまだ続きそうです。皆様もご自愛の上お仕事下さい。アンケートが今後の防災に役立つものとなりますよう、研究所の皆様のご活躍をお祈り申し上げます（深江町・女・３０代・事務職）
○被害にあわれた方々にもっと国の方から援助の手をさしのべてくださるよう、せつにお願い申し上げます。半年間だけ半分国が出すとの事ですが、まだいつ迄続くかわからんのに、とにかく困っている人の生活を見て助けてやって下さい。あちこちに点々としてましたので届くのがおくれて、昨日受け取りました。おそくなりごめんなさい。よろしくお願いいたします（深江町・女・５０代・専業主婦）
○全国からのたくさんの義援金を頂きありがたいとつくづく思います。自分達も災害にあって困っておられる人があったら少しでもやくにたつ事をしたいと思っています。また仮設住宅もせまいですがクーラーもいれてもらって設備もまあまあのすぐにでも生活できるようにしてもらっています。農家の人で避難区域の内で田畑があれほうだいで来年の収入はぜんぜんありません。島原半島の経済はどうなるのか心配です。特別立法をとりあげてほしいものです（深江町・女・４０代・事務職）
○雲仙岳噴火に伴い、全国各地より温かい義援金や救援物資また励ましの言葉を頂きました事有り難く御礼申し上げます（深江町・男・４０代・事務職）
○雲仙岳噴火がおさまったとしても、山頂の溶岩ドームがそのままの場合かなりの高温を保ったままではないか心配だ。それが地震で崩落したりしないか心配だ。このままの状態ではとても安心して住める土地ではないなと思う（深江町・女・３０代・事務職）
○市や町は体育館や小学校などに避難している人だけを避難民としていた。他人に迷惑かけたくないと思い、貯えなどを引き出して民家を借りてクーラーやふとんなどを買って生活している人と、ホテルや旅館などで一泊７０００円も県や市町村に出してもらってパチンコばかりしている人などを特別扱いしないで。避難民はどこにいてもいっしょに県や国は対処してほしい（深江町・女・４０代・販売サービス従事者）
○大惨事のあと、全く見通しのつかない中、ＮＨＫの解説委員の内容はとても興味深いものだった。真剣にきいた。もっとはっきりした態度で危険を知らせてくださっていたならあのような大惨事は、あるいはまぬがれていたのかもしれないと思う。地元の消防団にのみ頼っていた市や県に対し、とても腹立たしく、憤りを感じる。あとでどんな警備をしてももう遅い。身内に死者を出した方、家や土地をうばわれた方々が気の毒でならない。そのような方に対し、国はもっと真剣に対応してほしい（深江町・女・４０代・農林業）
○今回の災害で死亡された消防団の方々には国か県なり、もう少し見舞い金をだしてやってもらいたいと思う（深江町・男・３０代・自営業）
○アンケート結果を送って下さい。この結果を国または県、市、町へ送ってほしいです（深江町・女・２０代・自営業）
○１５日間の避難所（体育館）での生活でした。５才、３才と８ヵ月になろうとしている長女。子供３人づれでの避難所のくらしというものの大変さ。二度とこういう思いはしたくないと思ったものでした。現在は長崎市内に住んでおります。まだまだ不自由な生活は続いているものの、他のみなさんにくらべると．．．と思っております。ただ１つ思った事があります。８ヵ月の子供は離乳食の時期であり、まだミルクも飲みます。そういう小さい子供のいる家庭だけでも地区別避難所でなくお風呂や台所のある所に避難させるべきではないでしょうか（深江町・女・３０代・専業主婦）
○国は特別立法を認めるべきではないかと思います。今までに前例がないからと言う事で対処しないようですが、これから先もまたどこかでこういった火山活動がなきにしもあらずと考えます（深江町・女・３０代・専門技術職）
○６月頃はよくＴＶで報道されてましたが、最近は今はほとんど無い状態。今から国に対してアピールしていか

なければならないので、今後の事をもっとＴＶで報道してほしい。６月３日から私達は自主避難し６月４日未明、私達の地域は避難勧告がでて、近所のかたは夜中体育館へ避難したりしました。自分の家があるのに帰れない、このみじめさ．．．でも全国からお見舞いの手紙、お金、品物、さまざまな物が届き助けられてまいりました。本当に有り難く思っております。今後いつ帰れるかわかりませんが、最後まで頑張ります。しかし家をなくした人、土石流がきて土地の値がつけられない場所、今度どうしたらいいかわかりません。国が重い腰をあげてくれる事を心より期待します。最後に一言。土石流で家をなくした人は保険が支払われるけど、火砕流だと保険がでません。いくら自然災害といっても今までだれも見た事がない火砕流で家をなくしてしまった人はあまりにもかわいそうです。せめてそういう人達だけでも国で補償をしてくだされば と思います。皆様がこのように調査してくださる事で私どももまだ見捨てられていないんだなあと安心しています。どうか、島原、深江を助けてくださるよう世論にうったえて下さいませ。よろしくお願い致します。お見舞いありがとうございました（深江町・男・３０代・漁業）

○①一ヵ月前位より大火砕流の発生の危険性は少ないととくに感じた。もう少し早く２５１号線の開通を早くしてもらいたかった。また現在の通行時間帯の事ですがAM１０：００～PM１６：００になっておりますが、私たち自営業者にはあまりメリットがないと思う（例；AM８：００～PM１８：００，夏場で日が長い）。
②今回の私の友人も大火砕流のため死亡しましたが、地元消防団の一員でした。原因は消防団の話によりますとマスコミの人たちがあまりにも危険性の高い所に行くので制止するためのようです。マスコミの人たちの気持ちもわかりますがその所の反省もしてもらいたい（深江町・男・４０代・自営業）